瀬戸大橋建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告II

大浦遺跡

本文編

1984・3

本州四国連絡橋公団
香川県教育委員会

大浦遺跡　正　誤　表

頁	行	誤	正
挿図目次	遺　物	第129図	第119図
9	8	構報中	概報中
16～37	凡　例	流紋石	流紋岩
114	31	一つの成果を	一つの成果と
158	3	エッヂ	エッジ
〃	8～9	小剝痕	小剝離痕
172	2	細石核の重量が正規分布を示さず、復数のピークを有し、	この部分を省く
184～185	1	打面再成剝片	打面再生剝片
214	21	安定○○	安定した
219	4．他の略号など	P．ポヂテイブな面	P．ポジテイブな面
219	3．片材略号	片材略号	石材略号
226	縦長剝片石核 6．作業面数	1	2

瀬戸大橋建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告II

大　浦　遺　跡

本　文　編

1984・3

本州四国連絡橋公団
香川県教育委員会

大浦遺跡近景　（北から）

ナイフ形石器（サヌカイト製・ハリ質安山岩製・流紋岩製）

巻首図版

尖頭器・舟底形石器・スクレイパー・彫器・横長剝片石核（サヌカイト製）

縦長剝片石核（サヌカイト製・ハリ質安山岩製・流紋岩製）
細　石　核（ハリ質安山岩製）

序

瀬戸内海は海上交通の動脈として古くから利用されてきました。備讃瀬戸の島々には古代からの人々の活動の跡が残っていることが知られています。瀬戸大橋は岡山県倉敷市の児島半島と香川県坂出市を備讃瀬戸の島伝いに結ぶもので，工事も進んでいます。

瀬戸大橋建設に伴い，香川県教育委員会は本州四国連絡橋公団の委託を受け，備讃瀬戸の櫃石島・岩黒島・羽佐島・与島の４島で埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。調査の結果，旧石器時代から中世に至る多くの遺跡の存在が明らかになってきました。発掘調査の概要については昭和51年度の予備調査から報告してまいりましたが，遺跡の規模の大きさや遺物量の多さのため，発掘調査の成果の一部しか報告できない遺跡があり，昭和58年度から本報告を発行することになりました。

本書は，昭和55年度に発掘調査を実施した坂出市櫃石島に所在する大浦遺跡の調査成果をまとめたもので，先に発行した「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ　羽佐島遺跡　（Ⅰ）」に続くものであります。本報告書が今後の歴史研究の資料として多くの方々に御活用いただければ幸いと思います。

なお，発掘調査に対して協力いただいた地元の方々をはじめ，関係各位に心より厚くお礼を申し上げます。

昭和59年３月

香川県教育委員会
文化行政課長　遠　藤　　啓

例　言

1. 本書は，昭和55年度に瀬戸大橋建設に伴って実施した坂出市櫃石島大浦遺跡の発掘調査報告書（本文編・図版編の２分冊）である。

なお，出土遺物その他調査資料の本格的な整理業務は，昭和58年度に行った。

2. 発掘調査及び資料整理業務は，本州四国連絡橋公団より委託を受けて香川県教育委員会文化行政課が実施した。

昭和58年度の調査組織は，下記のとおりである。

総括	課長	遠藤　啓	調査担当	係長　秋山　忠
	課長補佐	林　茂		主任技師　渡部明夫
	副主幹	松本豊胤		〃　藤好史郎
庶務	係長	下河芳樹		技師　小西正行
	主査	加納　覚		〃　真鍋昌宏
				〃　西岡達哉
				嘱託　安藤　一
				〃　坂口淳子

なお，昭和51年度の予備調査以来，発掘調査及び資料整理には松本豊胤の指導のもとに次の職員が当った。

昭和51年度予備調査　松本　敏三・大砂古直生（以上転出）

昭和55年度発掘調査　斉藤　賢一・森本　義臣・町川　義晃（以上転出），東原　輝明

昭和58年度資料整理　藤好　史郎

3. 本書の執筆は，第２章１・３を秋山忠が分担したほかは，藤好史郎が担当した。編集は秋山忠，藤好史郎，真鍋昌宏が行い，整理補助作業員日下五十鈴・戸川昌代・阿野晃子が補助した。

4. 調査の実施や整理，報告に際して，下記の方々から多大なご協力，ご教示を受けた。記して深く謝意を表したい。

櫃石島瀬戸大橋対策協議会，同自治会，本四公団児島工事事務所，香川県瀬戸大橋対策事務所，麻生　優，小野　昭，大津忠彦，織笠明子，川畑　迪，小林達雄，近藤義郎，清水宗昭、舘野　孝，橘　昌信，西村尋文，二宮忠司，春成秀爾，古市光信，間壁忠彦，間壁葭子，松沢亜生，松藤和人，松本敏三，柳田俊雄，山口譲治

目　次

第１章　遺跡の立地と環境

第２章　調査の経過

第１節　予備調査から本調査へ …… 6
第２節　調査の方法と経過 …… 7
第３節　整理作業の経過 …… 10

第３章　層序と遺構

1. 土　　層 …… 12
2. 遺物出土状況と石器群 …… 12
3. 小　　結 …… 114

第４章　遺　　物

1. ナイフ形石器 …… 115
2. 舟底形石器 …… 127
3. 石　　錐 …… 127
4. 横長剥片 …… 128
5. 尖 頭 器 …… 129
6. スクレイパー …… 130
7. 彫　　器 …… 131
8. 截断面ある石器 …… 137
9. 二次調整ある剥片 …… 146
10. 横長剥片石核 …… 148
11. 縦長剥片 …… 155
12. 縦長剥片石核 …… 158
13. 細 石 刃 …… 172
14. 細 石 核 …… 184
15. 石核調整剥片 …… 187
16. 細石核ブランク及びハリ質安山岩原石 …… 191
17. 敲 き 石 …… 191
18. 石　　鏃 …… 198
19. 石　　匙 …… 198
20. 縄文土器 …… 198

第５章　お わ り に …… 211

挿　図　目　次

【遺跡の立地と環境】
第 1 図　備讃瀬戸の島々 …… 1
第 2 図　櫃石島遺跡分布図 …… 2
第 3 図　与島・羽佐島遺跡分布図 …… 3
第 4 図　海底地形図 …… 5
【調査の経過】
第 5 図　発掘調査風景 …… 7
第 6 図　大浦遺跡周辺地形・発掘区画図 …… 8
第 7 図　整理作業風景 …… 11
【層序と遺構】
第 8 図　土層柱状図 …… 12
第 9 図　d－11　土層及び遺物出土状態図 …… 15
第 10 図　d－15　土層及び遺物出土状態図(1) …… 16
第 11 図　d－15　遺物出土状態図(2) …… 17
第 12 図　d－16　土層及び遺物出土状態図 …… 18
第 13 図　e－9　土層及び遺物出土状態図 …… 19
第 14 図　e－12　土層及び遺物出土状態図 …… 20
第 15 図　e－13　土層及び遺物出土状態図 …… 21
第 16 図　e－14　土層及び遺物出土状態図 …… 22
第 17 図　e－15　土層及び遺物出土状態図 …… 23
第 18 図　e－16　土層及び遺物出土状態図 …… 24
第 19 図　f－12　土層及び遺物出土状態図 …… 25
第 20 図　f－13　土層及び遺物出土状態図 …… 26
第 21 図　f－14　土層及び遺物出土状態図 …… 27
第 22 図　f－15　土層及び遺物出土状態図 …… 28
第 23 図　f－16　土層及び遺物出土状態図 …… 29
第 24 図　g－10　土層及び遺物出土状態図 …… 30
第 25 図　g－12　土層及び遺物出土状態図 …… 31
第 26 図　g－13　土層及び遺物出土状態図 …… 32
第 27 図　g－14　土層及び遺物出土状態図 …… 33
第 28 図　g－15　土層及び遺物出土状態図(1) …… 34
第 29 図　g－15　遺物出土状態図(2) …… 35
第 30 図　g－16　土層及び遺物出土状態図(1) …… 36
第 31 図　g－16　遺物出土状態図(2) …… 37
第 32 図　d 列遺物実測図(1) …… 38
第 33 図　d 列遺物実測図(2) …… 39
第 34 図　d 列遺物実測図(3) …… 40
第 35 図　d 列遺物実測図(4) …… 41
第 36 図　d 列遺物実測図(5) …… 42
第 37 図　e 列遺物実測図(1) …… 43
第 38 図　e 列遺物実測図(2) …… 44
第 39 図　e 列遺物実測図(3) …… 45
第 40 図　e 列遺物実測図(4) …… 46
第 41 図　e 列遺物実測図(5) …… 47
第 42 図　e 列遺物実測図(6) …… 48
第 43 図　e 列遺物実測図(7) …… 49
第 44 図　e 列遺物実測図(8) …… 50
第 45 図　e 列遺物実測図(9) …… 51
第 46 図　e 列遺物実測図(10) …… 52
第 47 図　e 列遺物実測図(11) …… 53
第 48 図　e 列遺物実測図(12) …… 54
第 49 図　e 列遺物実測図(13) …… 55
第 50 図　e 列遺物実測図(14) …… 56
第 51 図　e 列遺物実測図(15) …… 57
第 52 図　e 列遺物実測図(16) …… 58
第 53 図　e 列遺物実測図(17) …… 59
第 54 図　e 列遺物実測図(18) …… 60
第 55 図　f 列遺物実測図(1) …… 61
第 56 図　f 列遺物実測図(2) …… 62
第 57 図　f 列遺物実測図(3) …… 63
第 58 図　f 列遺物実測図(4) …… 64
第 59 図　f 列遺物実測図(5) …… 65
第 60 図　f 列遺物実測図(6) …… 66
第 61 図　f 列遺物実測図(7) …… 67
第 62 図　f 列遺物実測図(8) …… 68
第 63 図　f 列遺物実測図(9) …… 69
第 64 図　f 列遺物実測図(10) …… 70
第 65 図　f 列遺物実測図(11) …… 71
第 66 図　f 列遺物実測図(12) …… 72
第 67 図　f 列遺物実測図(13) …… 73
第 68 図　f 列遺物実測図(14) …… 74
第 69 図　f 列遺物実測図(15) …… 75
第 70 図　f 列遺物実測図(16) …… 76
第 71 図　f 列遺物実測図(17) …… 77
第 72 図　f 列遺物実測図(18) …… 78
第 73 図　g 列遺物実測図(1) …… 79
第 74 図　g 列遺物実測図(2) …… 80
第 75 図　g 列遺物実測図(3) …… 81
第 76 図　g 列遺物実測図(4) …… 82
第 77 図　g 列遺物実測図(5) …… 83
第 78 図　g 列遺物実測図(6) …… 84
第 79 図　g 列遺物実測図(7) …… 85
第 80 図　g 列遺物実測図(8) …… 86
第 81 図　g 列遺物実測図(9) …… 87
第 82 図　g 列遺物実測図(10) …… 88
第 83 図　g 列遺物実測図(11) …… 89
第 84 図　g 列遺物実測図(12) …… 90
第 85 図　g 列遺物実測図(13) …… 91
第 86 図　g 列遺物実測図(14) …… 92
第 87 図　g 列遺物実測図(15) …… 93
第 88 図　g 列遺物実測図(16) …… 94
第 89 図　g 列遺物実測図(17) …… 95
第 90 図　g 列遺物実測図(18) …… 96
第 91 図　g 列遺物実測図(19) …… 97

第 92 図　g 列遺物実測図(20) …… 98
第 93 図　g 列遺物実測図(21) …… 99
第 94 図　g 列遺物実測図(22) …… 100
第 95 図　g 列遺物実測図(23) …… 101
第 96 図　g 列遺物実測図(24) …… 102
第 97 図　g 列遺物実測図(25) …… 103
第 98 図　h 列遺物実測図(1) …… 104
第 99 図　h 列遺物実測図(2) …… 105
第100図　h 列遺物実測図(3) …… 106
第101図　h 列遺物実測図(4) …… 107
第102図　h 列遺物実測図(5) …… 108
第103図　h 列遺物実測図(6) …… 109
第104図　中央区周辺発掘区遺物実測図(1) …… 110
第105図　中央区周辺発掘区遺物実測図(2) …… 111
第106図　中央区周辺発掘区遺物実測図(3) …… 112
第107図　中央区周辺発掘区遺物実測図(4) …… 113
【遺　物】
第108図　ナイフ形石器長幅分布図 …… 119
第109図　ナイフ形石器素材別長さ・幅構成比 … 120
第110図　ナイフ形石器Ａ型及び素材別長さ・幅構成比 …… 120
第111図　ナイフ形石器形態別長さ・幅構成比 … 121
第112図　ナイフ形石器石材別長さ・幅構成比 … 121
第113図　横長剝片素材ナイフ形石器剝離角構成比 …… 122
第114図　ナイフ形石器実測図(1) …… 123
第115図　ナイフ形石器実測図(2) …… 124
第116図　ナイフ形石器実測図(3) …… 125
第117図　ナイフ形石器実測図(4) …… 126
第118図　舟底形石器・石錐・横長剝片実測図 … 128
第129図　尖頭器実測図 …… 129
第120図　スクレイパー実測図(1) …… 132
第121図　スクレイパー実測図(2) …… 133
第122図　スクレイパー実測図(3) …… 134
第123図　スクレイパー実測図(4) …… 135
第124図　スクレイパー実測図(5) …… 136
第125図　彫器・截断面ある石器実測図(1) …… 139
第126図　截断面ある石器実測図(2) …… 140
第127図　截断面ある石器実測図(3) …… 141
第128図　截断面ある石器実測図(4) …… 142
第129図　截断面ある石器実測図(5) …… 143
第130図　截断面ある石器実測図(6) …… 144
第131図　截断面ある石器実測図(7) …… 145
第132図　截断面ある石器実測図(8) …… 146
第133図　二次調整ある剝片実測図(1) …… 147
第134図　二次調整ある剝片実測図(2) …… 148
第135図　横長剝片石核剝離痕幅構成比 …… 149
第136図　横長剝片石核剝離角構成比 …… 151
第137図　剝離角構成比 …… 152
第138図　横長剝片石核実側図(1) …… 154
第139図　横長剝片石核実測図(2) …… 155
第140図　縦長剝片長幅分布図（完形） …… 156
第141図　縦長剝片長さ・幅構成比 …… 157
第142図　縦長剝片実測図(1) …… 159
第143図　縦長剝片実測図(2) …… 160
第144図　縦長剝片実測図(3) …… 161
第145図　縦長剝片実測図(4) …… 162
第146図　縦長剝片実測図(5) …… 163
第147図　縦長剝片実測図(6) …… 164
第148図　縦長剝片実測図(7) …… 165
第149図　縦長剝片実測図(8) …… 166
第150図　縦長剝片実測図(9) …… 167
第151図　縦長剝片実測図(10) …… 168
第152図　縦長剝片石核作業面長幅分布図 …… 172
第153図　縦長剝片石核・細石核重量構成比 …… 172
第154図　縦長剝片石核実測図(1) …… 173
第155図　縦長剝片石核実測図(2) …… 174
第156図　縦長剝片石核実測図(3) …… 175
第157図　縦長剝片石核実測図(4) …… 176
第158図　縦長剝片石核実測図(5) …… 177
第159図　縦長剝片石核実測図(6) …… 178
第160図　縦長剝片石核実測図(7) …… 179
第161図　縦長剝片石核実測図(8) …… 180
第162図　縦長剝片石核実測図(9) …… 181
第163図　細石刃長幅分布図 …… 182
第164図　細石刃長さ・幅構成比 …… 182
第165図　細石刃実測図(1) …… 183
第166図　細石刃実測図(2) …… 184
第167図　細石核作業面長幅分布図 …… 187
第168図　細石核実測図(1) …… 188
第169図　細石核実測図(2) …… 189
第170図　細石核実測図(3) …… 190
第171図　敲き石長幅分布図 …… 191
第172図　打面再生剝片・作業面再生剝片実測図(1) …… 192
第173図　作業面再生剝片・石核調整剝片実測図(2) …… 193
第174図　石核調整剝片・ブランク・原石実測図(3) …… 194
第175図　敲き石重量分布及び構成比 …… 195
第176図　敲き石実測図(1) …… 196
第177図　敲き石実測図(2) …… 197
第178図　石鏃長幅分布図 …… 198
第179図　石鏃・石匙・押型文土器実測図 …… 199
第180図　器種別素材厚構成比 …… 201
第181図　石器計測基準図 …… 219

表　目　次

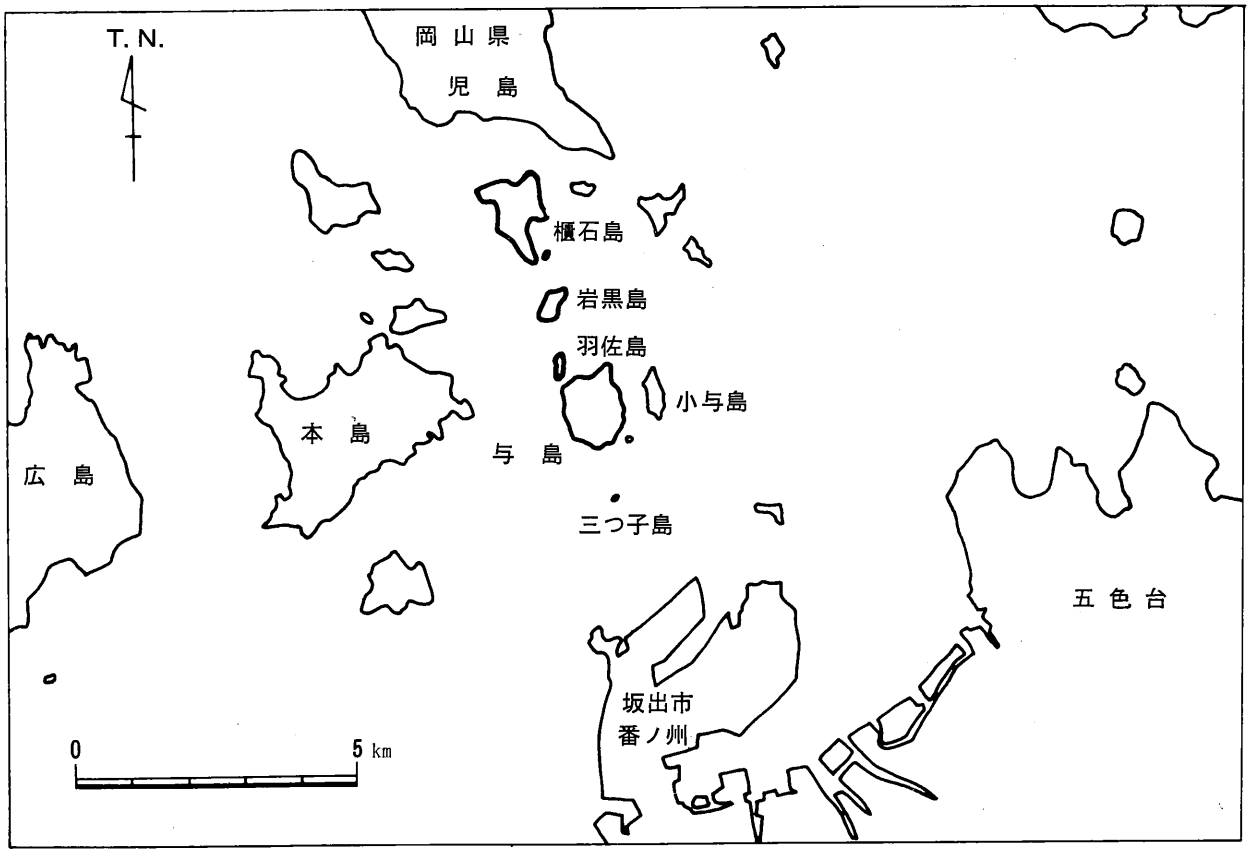
【調査の経過】
第 1 表　昭和58年度大浦遺跡の整理作業経過 … 11
【層序と遺構】
第 2 表　下層出土異石材数一覧 …… 13
第 3 表　下層出土器種別数一覧 …… 14
【観察表】
第 4 表　ナイフ形石器 …… 220
第 5 表　舟底形石器 …… 224
第 6 表　横長剝片石核 …… 225
第 7 表　縦長剝片石核 …… 226
第 8 表　細石核 …… 230
第 9 表　打面再生剝片 …… 232
第 10 表　作業面再生剝片 …… 232
第 11 表　石核調整剝片 …… 233
第 12 表　敲き石 …… 234
第 13 表　石鏃 …… 234
第 14 表　石錐 …… 235
第 15 表　横長剝片 …… 235
第 16 表　尖頭器 …… 235
第 17 表　スクレイパー …… 236
第 18 表　彫器 …… 237
第 19 表　截断面ある石器 …… 238
第 20 表　二次調整ある剝片 …… 240
第 21 表　縦長剝片 …… 241
第 22 表　細石刃 …… 246
第 23 表　ハリ質安山岩原石・ブランク …… 248
第 24 表　縄文土器 …… 249

第１章　遺跡の立地と環境

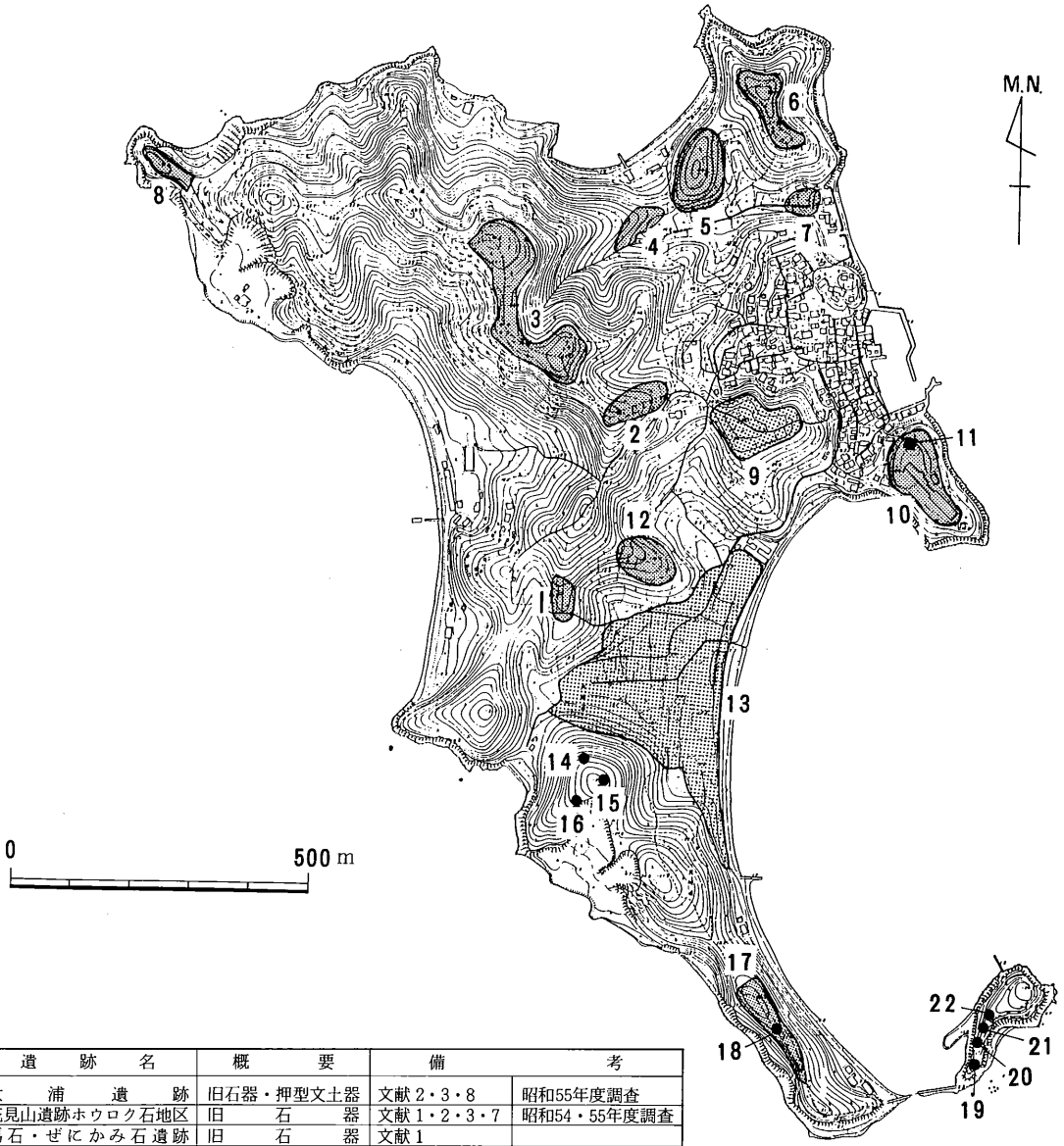
大浦遺跡は坂出市沖約８㎞の櫃石島に所在する。櫃石島は周囲約 5.4 ㎞の島で，香川県教育委員会が瀬戸大橋建設に伴う発掘調査を実施した備讃瀬戸の４島の中でも最も北に位置する。櫃石島の北方約 0.8 ㎞には備讃瀬戸の旧石器遺跡として学史的にも著名な鷲羽山がある。旧石器の石材として多用されるサヌカイトの産出地で，旧石器時代の遺跡でもある国分台・城山・金山と櫃石島は直線距離にして10㎞程しか離れていない。

櫃石島の大半は丘陵からなり，島の北西部から南東部にかけて30～80ｍの数箇所のピークを有する丘陵が連なる。最高所は島の北西部にあり，78ｍを計る。備讃瀬戸の島嶼部の所在する旧石器遺跡は島の丘陵部稜線上を中心として展開するという傾向がある。櫃石島も例外ではなく，現在11箇所ほど旧石器の散布が，試掘による予備調査や踏査で確認されており，いずれも丘陵の稜線上に立地する。大浦遺跡は島の中央部やや南よりの標高45ｍの頂部から南へ伸びる稜線上に立地し，標高は20～25ｍ程を計る。遺跡からの眺望は良好で，特に東方に向けて恵まれている。

備讃瀬戸の島嶼部は旧石器が散布することで知られているが，瀬戸大橋建設に伴う発掘調査でその実態が明らかになってきている。発掘調査を実施した遺跡の概要をまとめてみたい。遺物量



第１図　備讃瀬戸の島々

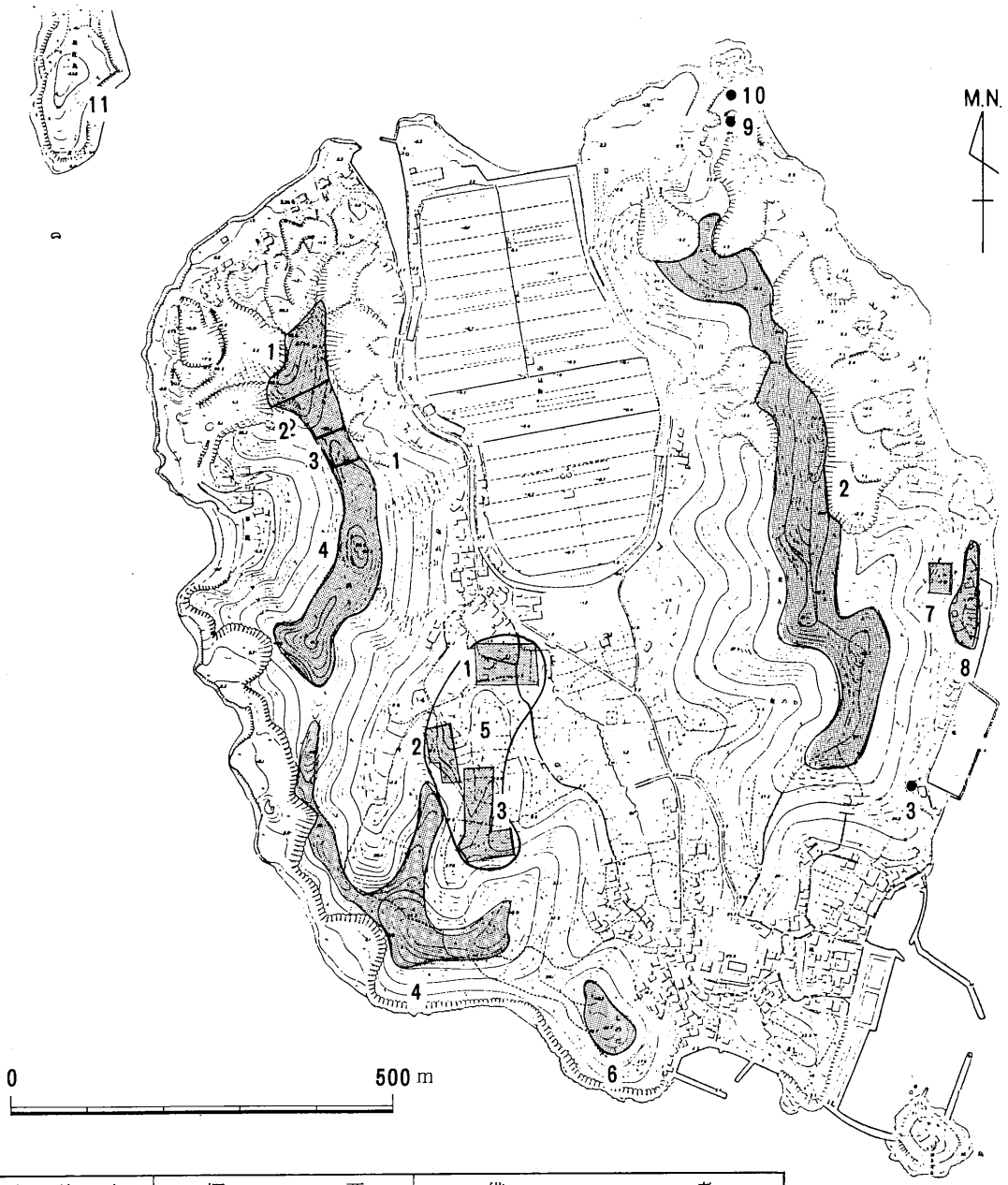


	遺跡名	概要	備考	
1	大浦遺跡	旧石器・押型文土器	文献2・3・8	昭和55年度調査
2	花見山遺跡ホウロク石地区	旧石器	文献1・2・3・7	昭和54・55年度調査
3	馬石・ぜにかみ石遺跡	旧石器	文献1	
4	ガンド遺跡	中近世墓地	文献2・7	昭和54年度調査
5	北浦遺跡	旧石器	文献2・7	昭和54年度調査
6	トビノス遺跡	旧石器	文献2	昭和51年度予備調査
7	ガンド浜遺跡	製塩土器		
8	かいとく鼻遺跡	旧石器・押型文土器	文献1	
9	王子神社東遺跡	旧石器	文献2	
10	宮崎鼻遺跡	旧石器	文献1	
11	宮崎古墳	(消滅)		
12	ヤケヤマ遺跡	旧石器	文献2	昭和51年度予備調査
13	大浦浜遺跡	製塩土器他	文献2・8	昭和55年度調査
14	たてわ1号墳	横穴式石室		
15	たてわ2号墳	(不明)		
16	たてわ3号墳	横穴式石室(半壊)		
17	長崎鼻遺跡	旧石器	文献9	昭和57年度調査
18	長崎古墳	横穴式石室	文献9	昭和57年度調査
19	歩渡島1号石棺	組合わせ式石棺		
20	〃 2 〃	〃		
21	〃 3 〃	〃		
22	〃 4 〃	〃		

文　献

1　間壁葭子　「香川県坂出市櫃石島採集の石器」『倉敷考古館研究集報　第4号』倉敷考古館　1968・1
2　「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告」(I)　香川県教育委員会　1977
3　「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告」(II)　香川県教育委員会　1978
4　「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告」(I)　香川県教育委員会　1979
5　「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報」(I)　香川県教育委員会　1978
6　「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報」(II)　香川県教育委員会　1979
7　「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報」(III)　香川県教育委員会　1980
8　「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報」(IV)　香川県教育委員会　1981
9　「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報」(VI)　香川県教育委員会　1983

第2図　櫃石島遺跡分布図



	遺跡名	概要	備考	
1−1	西方遺跡Ａ地区	旧石器	文献４・５	昭和53年度調査
1−2	B_1地区	旧石器	文献５	昭和52・53年度調査
1−3	B_2地区	旧石器	文献８	昭和54年度調査
1−4	C_1地区	旧石器	文献８	昭和54・56年度調査
2	東方遺跡	旧石器		
3	タテハ遺跡	奈良時代以降の土器片		
4	シノダ遺跡			昭和59年度調査予定
5−1	塩浜遺跡Ｃ地区	縄文後期	文献７・８	昭和55年度調査
5−2	Ｂ地区	旧石器〜中世	文献８	昭和55年度調査
5−3	Ａ地区	縄文後期	文献２・８	昭和54・55年度調査
6	シノダ遺跡	旧石器		
7	大洲遺跡	旧石器	文献８	昭和55年度調査
8	大洲浜遺跡	製塩土器		
9	長崎鼻遺跡	方形石組（性格不明）		
10	長崎鼻古墳	組合わせ式石棺２基（現在１基露出・１基崩壊）		
11	羽佐島遺跡	旧石器	文献６・７・８・９	昭和53・54年度調査

第３図　与島・羽佐島遺跡分布図

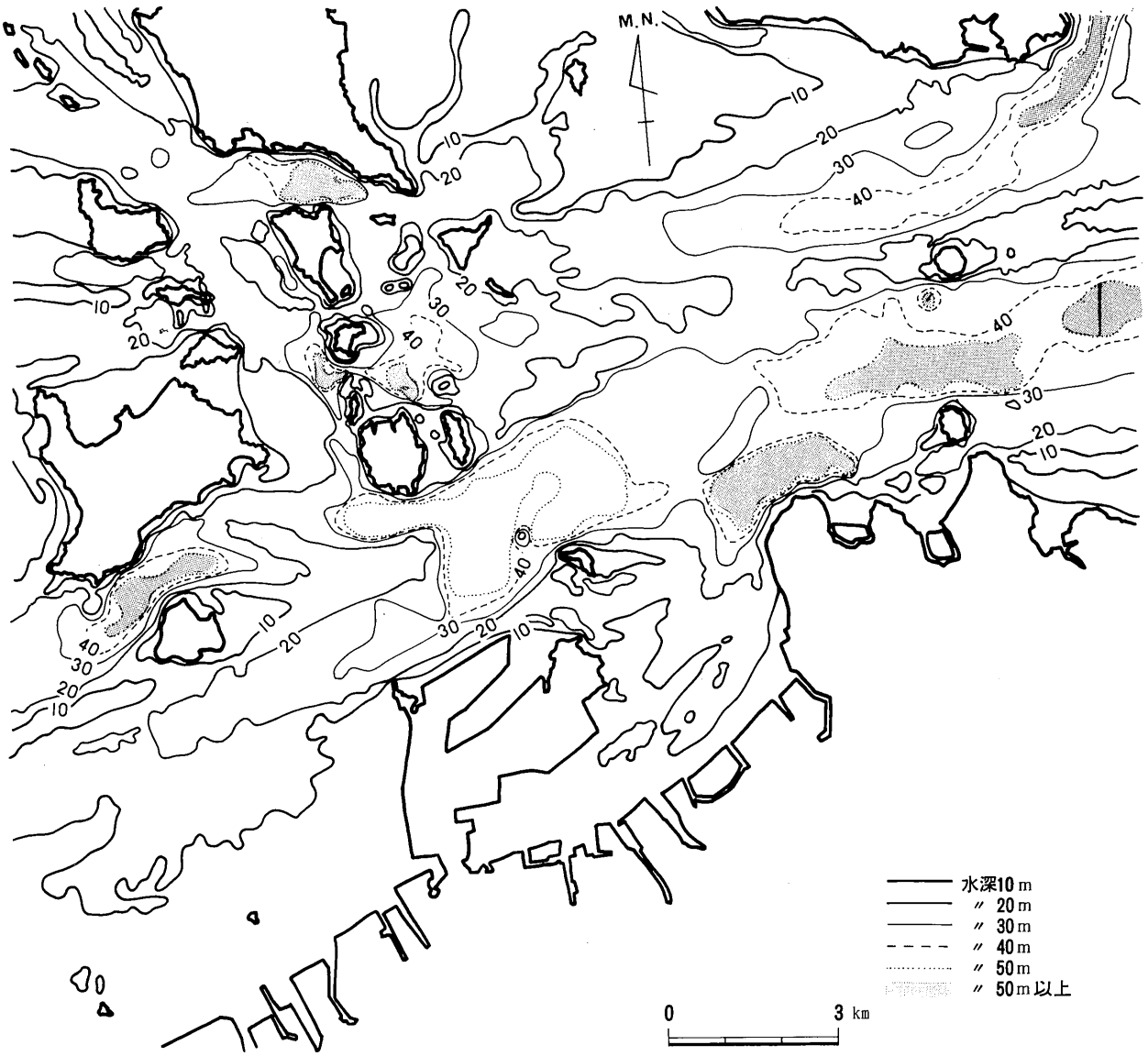
を遺跡の規模と仮定すると，備讃瀬戸のほぼ中央部に位置する羽佐島遺跡が最も多くフレイク・チップ類を合わせて20万点を越える石器が出土している。次いでその南に位置する与島西方遺跡Ａ地点が多く約17万点の石器が出土している。西方遺跡Ａ地点は発掘調査実施時点ですでに花崗岩の採石により西部が消失しており，羽佐島とほぼ同規模の遺跡だったと考えられる。両遺跡で共通する点は，国府期に属する石器群の多いことにある。新しい時期の遺物としては羽佐島遺跡では細石刃・同石核が出土し，西方遺跡では細石核の出土こそ認められないもののほぼ同時期まで存続したと考えられる。遺物量の比較的多い遺跡では出土する石器量は遺跡の継続期間と密接な関係があると考えられ，石器量の少ない櫃石島の大浦遺跡や花見山遺跡などでは国府期に属する石器群が含まれないか，非常に少なく，石器群の主体は国府期よりも後出する時期の所産であり，細石刃・同石核の比率も高い。与島には石器量の多い西方遺跡Ａ地点や量的には多くない西方遺跡Ｃ地点があるが，櫃石島に所在する旧石器時代の遺跡には羽佐島や西方遺跡Ａ地点に匹敵するような遺物量が莫大で大規模な遺跡は現在のところ認められない。また羽佐島と櫃石島の間に位置する岩黒島には初田遺跡や松原遺跡があるがいずれも石器量は極端に少ない。

羽佐島や西方遺跡Ａ地点は国府型ナイフ形石器・翼状剥片・同石核の出土量が他を圧して多く，他の島嶼部の遺跡の中では国府期の拠点的な遺跡であったことは間違いない。この傾向は国府期よりも後出する時期まで継続すると考えられるが，細石器文化期では様相が異なる。細石刃・細石核の出土量においては，他を圧倒するような出土量を誇る遺跡は認められず平均化してくる。花見山遺跡や大浦遺跡の細石刃・細石核の出土量は羽佐島遺跡と比較しても差はない。

備讃瀬戸は瀬戸内海が幅狭くなっている地域である。海面下にも南北に水深30ｍ以下の比較的浅い海底が連なる。潮流のため海底地形はかなり変化しているが，後氷期の海進現象の中でも最後まで本州と四国が陸橋状に連続していた地域であったと考えられる。瀬戸内海の海面下にも多くの旧石器遺跡の存在が推測される。現在の島嶼部の遺跡は，当時連なった丘陵上に位置していたこととなる。

近畿地方西部の旧石器遺跡における石器組成をみると，サヌカイトの産出地である二上山北麓の遺跡群では翼状剥片や石核の比率が高く，国府型ナイフ形石器の比率が低い。遺跡の規模も大きい。これに対して石材の産出地から離れた規模の小さい大阪府の郡家今城遺跡Ｃ地点では逆に国府型ナイフ形石器の比率が高くなっている。ナイフ形石器の比率の高さは郡家今城遺跡Ｃ地点が，よりナイフ形石器の消費地に近い遺跡であることを示していると考えられる。

羽佐島遺跡での国府型ナイフ形石器と翼状剥片や翼状剥片石核の比率を比較すると，二上山北麓の遺跡群と郡家今城遺跡の中間の比率となる。羽佐島遺跡は，郡家今城遺跡Ｃ地点ほどには直接的な石器の消費地ではなかったと考えられる。国府型ナイフ形石器は細身で左右対称形を呈し，先端部が尖ったものが多い。刃器として充分使用可能な翼状剥片をさらに加工して製作されることからすれば，尖頭器的なものである可能性が高い。こうした点からすれば，郡家今城遺跡Ｃ地点は狩猟の場に非常に近い遺跡とすることができよう。これに対して備讃瀬戸の島嶼部の遺跡は，地形的にも狩猟の場とは考えられずベースキャンプ的な遺跡である可能性が高い。香川県には国



第４図　海　底　地　形　図

分台や城山などの古くから著名なサヌカイトの産出地で同時に大規模な旧石器時代の遺跡があるが，まだ本格的な発掘調査は実施されていず，不明な部分も多い。今後は石材の産出地に立地する遺跡群との関係の中で島嶼部の遺跡の実体を側面からも明らかにしていく必要があろう。

瀬戸大橋建設に伴った瀬戸内海の海底のボーリング調査では，姶良火山灰が検出されている。島嶼部は平坦地が少なく降下火山灰は流出して残存せず，石器群は二次堆積層ではなく基盤となっている花崗岩の風化バイラン土層中に含まれる。そのため石器群を層位的に時期差を反映して検出することはできない。また遺跡の立地は丘陵上で平坦部は限られており，しかも周辺への視界等の条件を加えればより限定されたものとなる。そのため羽佐島や西方遺跡Ａ地点のような異常な石器密集を示す遺跡が長期間に渡って形成されたと考えられる。また個体識別が困難なサヌカイトが石材として多用される島嶼部の遺跡では単一時期の石器群の抽出に困難さがある。島嶼部の遺跡群の内容は，他のより限定された内容を有する遺跡との比較の中で明らかにしていく必要があると考えられる。

第２章　調査の経過

第１節　予備調査から本調査へ

瀬戸大橋（本州四国連絡橋児島・坂出ルート）の建設に伴う海峡部埋蔵文化財発掘調査事業は，昭和51年６月１日付けで本州四国連絡橋公団（以下，本四公団という）との間に締結した「海峡部埋蔵文化財予備調査委託契約（そのⅠ）」に基づく櫃石島の予備調査をもって始まった。それは，島内の架橋計画路線沿線地区における調査対象地を北東部の第Ⅰ調査区（鳶の巣遺跡・がんど遺跡周辺部，30,900 m²），中央山稜部の第Ⅱ調査区（花見山遺跡・大浦遺跡，10,900 m²）とその眼下に広がる大浦浜遺跡（56,400 m²）の第Ⅲ調査区に分けて，それぞれ対象地積の100分の１程度を試掘するものであった。このうち，第Ⅱ調査区の大浦遺跡は，花見山南部の小高い頂部から南へ短く延びて大浦浜の後背地に下る尾根丘陵に位置する。ここでの予備調査は第Ⅲ調査区と並行して昭和51年10月末～12月にかけて行われ，標高20～25ｍを測る緩い尾根筋で11箇所，東側斜面部で９箇所の坪掘りをした。斜面部では流れ込みの石器・剥片が数点出土したにすぎなかったが，尾根筋ではナイフ形石器・尖頭器・削器・細石刃など予想以上に多数の石器と石核・剥片類が出土し，旧石器遺跡の存在が裏付けられた。特に，尾根筋の南半部は旧状にちかい地形を保っており，比較的良好な遺物包含層が残存しているものと推測された。この調査結果は昭和52年３月刊行の「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告（Ⅰ）」において公表しているが，そこでは大浦遺跡の本格的な発掘調査対象地を尾根筋を中心とした約3,200m²の範囲であると提示した。

従来，櫃石島における旧石器遺跡については，昭和30年代半ば頃に坂出市の川畑迪氏や地元の東山包雄氏によってその一部が紹介され，さらに昭和43年間壁葭子氏の「櫃石島採集の石器」（倉敷考古館集報第４号）が報告されるに至って広く一般に知られるようになった。しかし，その後も大浦遺跡について格別の関心が払われるということはなかった。それだけに，この遺跡の内容を知る具体的な手がかりを得たことは，予備調査の大きな成果であるといえよう。

架橋地点となる櫃石島・岩黒島・羽佐島・与島における予備調査は52年度にまたがり，その結果本格的な発掘調査（本調査）を必要とする区域は４島合わせて約90,000 m²となった。本調査は，昭和52年11月１日付けで本四公団との間に締結した「海峡部埋蔵文化財発掘調査委託契約（その１）」によって与島西方遺跡から着手した。大浦遺跡の本調査は，55年度の委託契約（その４）に基づいて昭和55年６月11日～12月16日にかけて実施した。この時点では，予備調査時と同様に調査対象地はすべて未買収であったため，事前に借地事務をとる必要があった。５月12日櫃石島文化財保護協議会を開催して調査対象地の借地について協力を依頼し，同日引き続いて該当地権

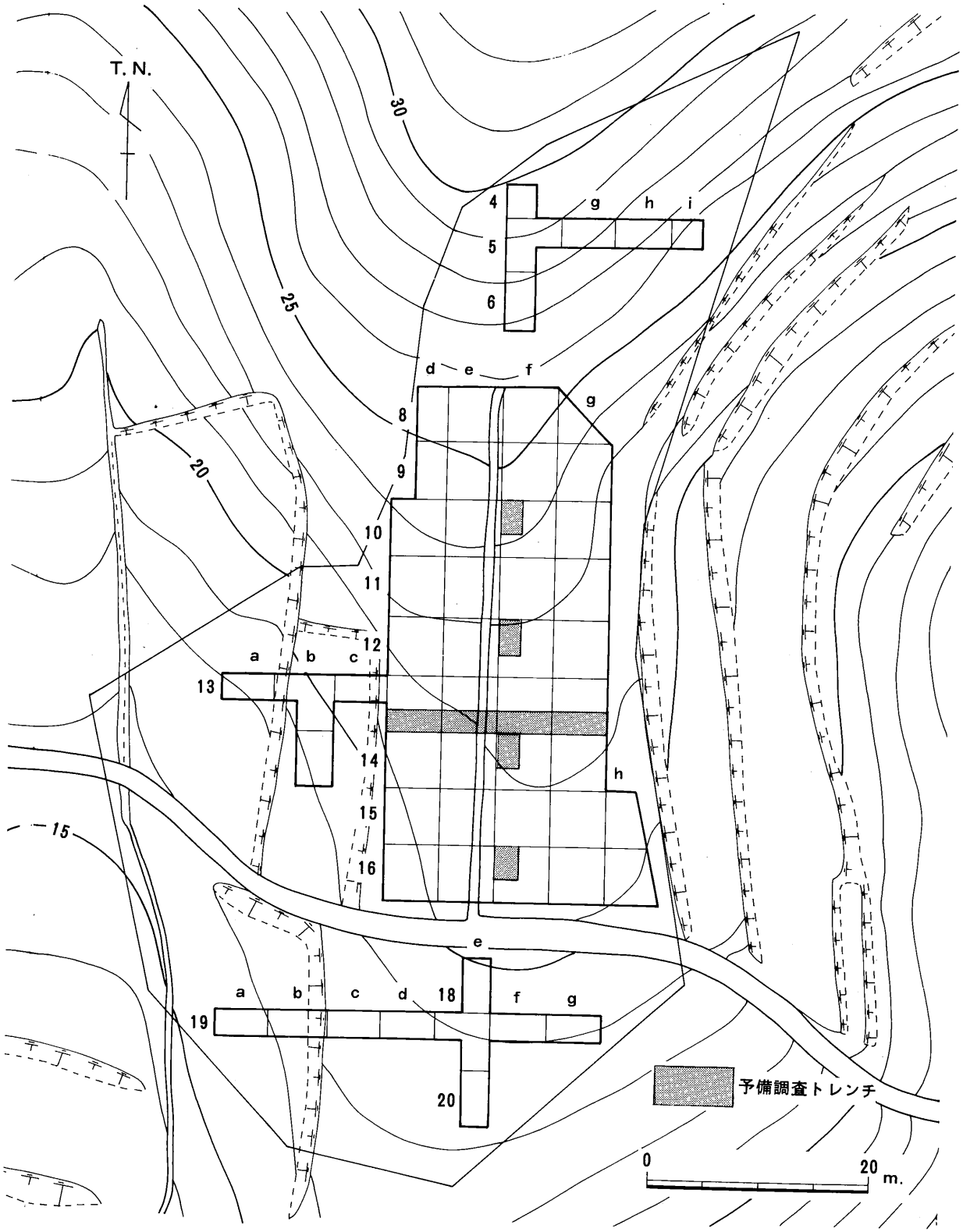
者会をもって借地による調査実施の了解を得た。以後，各地権者との減収補償契約を取り交して本格的な調査を進めることとなった。調査対象地3,280㎡のうち約2,300㎡を実掘し，10,000点を越える旧石器時代の遺物に加えて縄文時代の早期押型文土器や石鏃なども出土した。旧石器に関しては，ナイフ形石器・尖頭器・削器・截断面ある石器・細石刃・敲き石などの他各種石核・剥片類も多い。予備調査での予測が的中し，旧石器遺跡として豊富な内容を示すものである。時に，島内では花見山遺跡（54年度から継続，約6,000㎡，旧石器の濃密な包蔵地），大浦浜遺跡（約7,000㎡，縄文時代から古代・中世に至る濃密な遺物包蔵地）の発掘調査が並行していた。眼下の大浦浜遺跡では，奈良三彩の小壷をはじめミニチュア土器・舟形土製品・帯金具・粘土土坑などの目新しい遺物や遺構が次々に出土し，調査や遺跡の概要が新聞その他でたびたび報道され，現場を訪れる見学者も多かった。それとは対照的に，大浦遺跡では土層序の一面一面を丁寧に削り取り，遺物出土地点を正確に図示していく，まことに地味な発掘作業が続けられた。

第５図　発掘調査風景

第２節　調査の方法と経過

調査対象地区は櫃石島の中央部やや南よりの標高15～30ｍ前後の尾根筋を中心とする。現状は畑地である。調査区全域に５ｍ方画のグリッドを設定した。グリッドの南北方向の規準軸は真北方向と一致する。５ｍ単位のグリッド規準線の交点に杭を打ち発掘区を設置した。グリッド規準線は東西をａ～ｉ・南北を１～20とし，各グリッド名は北西の規準線の交点名で表現する。発掘区はｄ～ｈ列の８～16グリッドからなる中央部発掘区と周辺のトレンチ区よりなる。

発掘調査では，各遺物の出土位置は平板を用いた実測により，ドット分布として記録した。こ



第 6 図　大浦遺跡周辺地形・発掘区画図

れまでの島嶼部の旧石器遺跡の調査で，遺物が層位的に時期差を反映して検出された例がないことから，深さ10cmを原則として掘り下げ，遺物を検出し分布を記録した。土層図の作成はグリッドの規準線上に50cmの幅でセクションベルトを残して行い，グリッドの実掘はセクションベルトの幅だけ狭くなっている。

現地調査は，昭和55年６月11日着手し，同年12月16日に終了，約半年を要した。発掘調査終了後，基礎整理作業を実施し，昭和56年３月に大浦遺跡の概要を『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（Ⅳ）』の一部として報告した。今回の本報告書作成と発掘調査・概報作成とは担当が異なっている。そのため調査の経過については，構報中の調査日誌抄をもとに内容の変質がない範囲で一部修正を施して掲載する。

昭和55年

６月11日　発掘現場の現地踏査。発掘前写真撮影。伐開作業。区画設定・杭打ち。

６月17日　調査区尾根部（ｅ・ｆ列）の遺物検出作業開始。

６月19日　尾根筋両側に新区画設定・杭打ち。

６月23日　ｆ－10・ｆ－12・ｆ－14・ｆ－16の写真撮影。ｆ－10・ｆ－14の平板実測とレベル計測。気象条件良好で作業ペース向上。

６月24日　調査区拡張のため，地権者の借地契約書類の作成及び一部交渉。

６月26日　ｅ－９より縦長剝片石核，ｅ－12よりチャート・黒曜石・細石核出土。

６月30日　ｆ－12・13・14・15・16の遺物出土数かなり多し。ｆ－10で予備調査で確認された不明石組みを検出。ｅ－９にピットらしきもの検出。

７月３日　発掘は依然ｆ列中心。ハリ質の剝片が多数出土。予備調査による試掘跡は，地山に至るまで深掘りする。

７月８日　ｅ・ｆ列は掘り進むにつれ出土点数は増加傾向。ｆ－13より木葉形尖頭器・縦長剝片石核・円盤状土製品。文化庁稲田文部技官，旧石器文化発掘調査視察のため来島。

７月15日　ｅ－14から本調査最初のナイフ形石器出土。

７月16日　ｅ－15より押型文土器破片出土。

７月17日　梅雨明けのうだるような射熱のため地面が乾燥し，水分蒸発著しく，散水なしでは発掘困難。

７月23日　ｅ－16の花崗岩礫が集中する箇所より，先端だけ残存の尖頭器出土。

７月31日　ｆ－14・15を除くｆ列全域とｅ－12で軟質黄褐色土の面が確認されており，遺物出土最終面の状況を呈しているため深掘りのトレンチ設定。香川大学歴研の学生十数名現場見学。

８月１日　ｆ列の深掘り開始。土層の堆積状況を検討する。

８月７日　ｆ列８～13は深掘り終了，土層序の線引きを行う。

８月11日　土層序実測開始。

８月19日　ｆ－16よりナイフ形石器出土。

８月20日　７：50より降雨。しかし埋戻し作業強行。

８月25日　ｇ列発掘開始（ｇ－12・13）

８月27日　ｅ－９・10よりハリ質安山岩・細石核出土，ｇ－13・ｅ－11・ｅ－13より石鏃，ｅ－13からナイフ形石器出土。現在発掘調査区南側にトレンチ設定予定のため伐開を行う。

９月１日　伐開作業終了。ｅ－16では花崗岩排除後，下方より７個の縦長剝片検出。

９月４日　南側トレンチ設定・杭打ち。

９月５日　倉敷考古館の間壁葭子氏来島。ｆ列はｆ－16を残し全て終了のため精査はｅ列が中心。

９月16日　ｅ列ほぼ終了。道南側トレンチ第１層除去。

９月22日　ｄ列（ｄ－19）精査開始。遺物は皆無に近い状態。ｅ－９にみられた褐色の広がりを精査する。大半がハリ質安山岩で細石刃も含まれている。現状では不明の落ち込みとする。

９月24日　道南トレンチでは10cm程度で地山になる箇所有り。遺物出土ほとんどなし。

10月１日　ｇ列に精査の主力を注ぐ。ｇ－14・15では表土層にチャート・石鏃・縦長剝片など多数の遺物。

10月３日　ｅ－８・ｇ－９～11では遺物出土数極少。また，ｇ－12・13の最終面でも出土数は少なくなる。

10月8日　f－16終了。g－14・15では黒曜石・ナイフ形石器・縦長剝片石核・スクレイパーなど依然として遺物出土数多し。

10月16日　g－14・15よりサヌカイト砕片・押型文・無文土器片が比較的多く出土。

10月23日　調査区北側ミカン畑の調査区設定内及び周辺の立木伐採。

11月4日　「アサヒグラフ」取材ヘリコプターが上空旋回し写真撮影。

11月5日　朝日新聞茨木氏「アサヒグラフ」取材のため来訪。h列（h－15・16），発掘開始。d－16より石匙出土。

11月6日　北トレンチ，d列では遺物ほとんどなし。

11月12日　d－16精査中，小円礫が多数出土するが不明である。先に石匙・山形押型文土器も出土しているので注意が必要。

11月14日　西トレンチ発掘開始。

12月2日　西トレンチ（a・b－13）は表土から60cmで軟質，淡白黄土色の砂層を検出。当地区は瓦片など新しい遺物が主体をしめる。

12月9日　岡山大学近藤義郎氏来訪。d列完了。a－19・20の拡張区発掘順調。かなり下方まで新しい遺物を包含。

12月11日　精査全て終了。数グリッドの土層序実測を残すのみ。

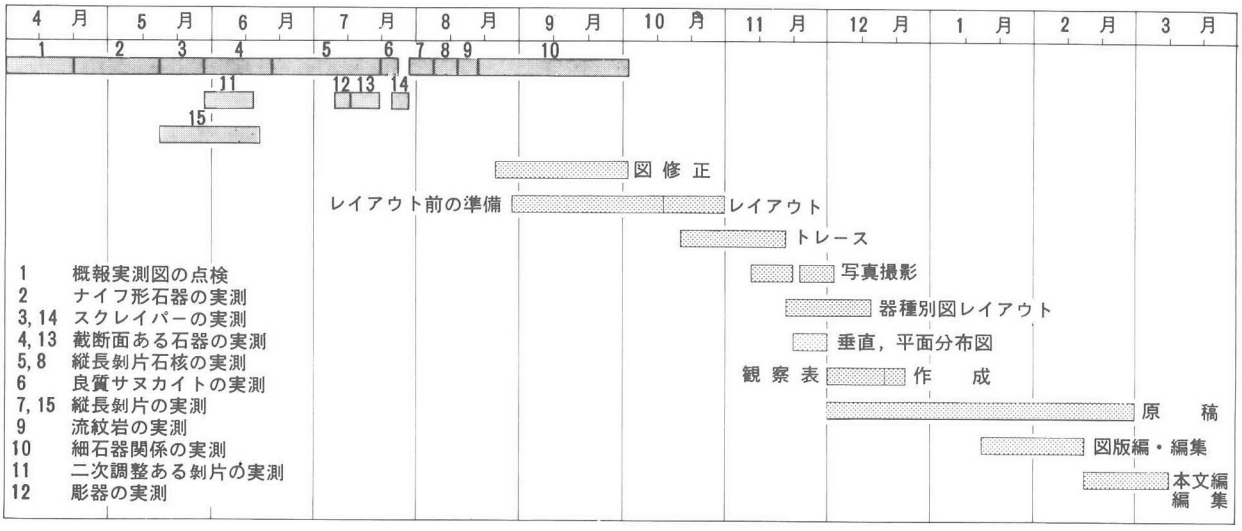
12月16日　調査完了。

第3節　整理作業の経過

大浦遺跡の調査概要は，すでに昭和56年3月刊行の「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（Ⅳ）塩浜遺跡・西方遺跡・花見山遺跡・大浦遺跡・大浦浜遺跡」（以下，概報という）において報告している。しかし，そこでは出土した旧石器の中から器種別代表例を取り上げ，縄文土器・石鏃・石匙などを含めても178点の遺物実測図を掲載したに留まる。もっとも，現場調査の進行を最重点にしていた当時，調査終了後の短期日のなかで，すべての出土遺物を充分に観察・検討して資料化するだけの時間的な余裕はなかった。従って，「概報」作成時の遺物整理作業は，遺跡の全体的な傾向が把握できる程度のものであったといわざるをえない。しかも，その後2年間は，調査報告書刊行に向けての整理業務計画に基づいて，出土遺物は一括保存されたままであった。

大浦遺跡の遺物整理を本格的に進めることになったのは，昭和58年4月以降のことである。58年度は，これまでの現場発掘調査を主体とした調査事業に本格的な調査資料の整理業務を取り入れた第1年目である。4月1日付けで本四公団との間に「香川県側埋蔵文化財発掘調査委託契約（その1）」を締結し，調査報告書については第1分冊「羽佐島遺跡（Ⅰ）」・第2分冊「大浦遺跡」を刊行することとなった。ところが，大浦遺跡の発掘調査及び「概報」作成を担当した斉藤賢一・森本義臣・町川義晃・東原輝明のうち前記3名がすでに文化行政課から転出し，東原も57年度より文化行政課文化財調査1係に配置替えとなっていた。このため，坂出連絡事務所（文化財調査2係）における調査報告書刊行に向けての整理作業には主任技師藤好史郎が当ることになった。幸いに，事務所の整理体制はここ2年ほどの間にかなり整い，整理補助作業員の遺物実測をはじめとする整理作業能力も高い水準を保つようになり，遺跡単位の班編成で効率的な取り組みができるようになっていた。大浦遺跡整理班には常時5名の補助作業員が属し，できるだけ多くの遺物を正確に資料化することに努めた。遺物の実測は都合1,025点を数える。その他，現場調査時の図面や「概報」掲載の遺物実測図の点検，遺物計測及び観察表の作成，遺物写真の撮影，

第１表　昭和58年度大浦遺跡の整理作業経過



各種図版のレイアウト・トレースの仕上げ，原稿の執筆・整理，本文・図版編の編集……など昭和58年４月～59年３月にかけての整理作業の経過は図示したとおりである。

今，ここに「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅱ）大浦遺跡」を刊行するはこびとなった。大浦遺跡は，備讃瀬戸島嶼部の旧石器遺跡に共通する性格を示しながら，いわゆる国府文化期に属する遺物が少なく，比較的新しい旧石器文化の内容を提示している。なかでも，旧石器文化最終末期の細石刃315点・同石核45点の出土は，他の遺物数からみてかなり高い比率を占めるものである。どうやら，花見山遺跡と重複する時期をもちながら，それ以降も遺跡が営まれていた可能性が高い。この調査報告が，そうした観点から今後の旧石器研究に役立つものであれば，まことに幸いである。大方の積極的なご叱正・ご教示をお願いしたい。

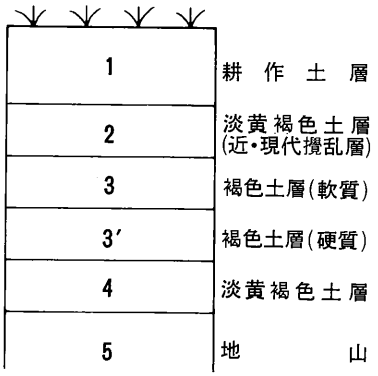
大浦遺跡の整理作業に携わった補助作業員
杉村澄子・森佳代子（以上退職）・日下五十鈴・大沢多鶴子・戸川昌代・和泉美香子・徳井秀子・喜多正子・三木紀子・阿野晃子

第７図　整理作業風景

第3章　層序と遺構

1. 土　　層

備讃瀬戸の島々は，基盤が花崗岩からなっている。島嶼部の旧石器遺跡は丘陵の稜線上を中心として展開するため，二次堆積層は殆ど形成されず，降下火山灰層は全く残存しない。石器群は花崗岩の風化バイラン土層中に包含される。石器群はその大半が地表から30cm前後の深さの間に集中的に分布する。風化バイライン土層は風化度によってしか分層されず，石器群の形成時期差を反映した層位的な検出はできない。石器が出土する深度の差は時期差とは結びつかない。大浦遺跡の遺物包含状況も例外ではない。



第8図　土層柱状図

大浦遺跡は丘陵部稜線にそった緩斜面部に立地し，現状は畑地である。そのため与島西方遺跡などとは異なり，表土層は耕作土層となっており，攪乱を受けている。また緩斜面を畑地化していたため，標高の高い北部ではかなり削平を受けており，包含層の残存状況は悪く，耕作土の直下には地山面が位置するグリッドも存在する。これに対して標高の低い南部は包含層の残存度は良いが，北部の削平で生じた花崗岩バイラン土が移動して二次的に堆積している。

2. 遺物出土状況と石器群

大浦遺跡の発掘調査では表土層以下から出土した全遺物をドットで図化し，レベルを確認して検出している。しかし実測して検出した遺物の全てが平面的に原位置を保っているとは考えられない。遺跡の現状が斜面部に形成された畑地であるため，標高の低い発掘区の南部では，削平の結果生じた遊離包含層が近・現代の二次堆積層として旧表土の上部に堆積していると考えられる。事実与島西方遺跡など畑地化されていない遺跡での同様な傾斜度の地区に形成された花崗岩風化バイライン土層の厚さと大浦遺跡の北部及び南部のバイライン土層の厚さとは異なる。発掘調査では平均10cm程の厚みで包含層の遺物を取り上げているが，畑地化に伴う二次的堆積層と原位置を保つ包含層の区別が明確には行われていない。

今回の報告における遺物出土状態図の作成にあたっては，発掘調査で作成した遺物出土実測図と土層図を用い，機械的に攪乱層と旧地形の分離を行った。攪乱層としたのは，第1層耕作土層と第2層の軟質のバイラン土層及び畑地化による二次堆積層と推定される部分である。畑地化に伴う二次的な堆積層の分離にあたっては，畑地化されていない西方遺跡で，大浦遺跡と同一傾斜度を示す地点の花崗岩風化バイラン土層の平均厚を基準とした。以後，攪乱層を上層とし，ほぼ旧状を反映していると考えられる下部を下層と呼ぶ。出土状態図作成の対象とした遺物は下層出土のものである。出土状態図は石材と器種毎のものがあり，各々平面分布図と垂直分布図を作成した。垂直分布への遺物の投影に当っては，発掘区が緩斜面であることから部分的なものもあ

り，投影した範囲と方向については平面分布図に矢印で示した。下層出土のフレイク・チップ類を含んだ全遺物の分布を黒色のドットで示し，赤色の記号で石材と器種を表示した。また石材別の分布図においては，使用されている石材の多くがサヌカイトであることから，サヌカイト以外のものについてのみ赤色の記号で表示した。また遺物出土状態図作成は，ｄ～ｈ列の８～16に相当する中央発掘区のグリッドに限定して行った。周辺のトレンチ調査区は遺物の分布が極めて稀薄であり，出土状態図は作成していない。

下層の，全遺物の平面分布では，12列よりも南に分布が偏る傾向が認められ，北部では散漫な分布を示している。北部は標高が高いことから畑地化による削平が進んでいることとも関連していると考えられるが，ｅ－９におけるドットの集中からすればもともと稀薄だった可能性も高い。ドットの分布状況からすれば，５箇所の石器集中箇所が認められる。ｅ－９・ｅ－12の南東部とｆ－12の南西部・ｆ－15の西部・ｆ－15の南東部とｇ－15の南西部・ｆ－16の東部とｇ－16の西部が遺物の密集度が高い。他にも遺物の密集度が高い部分もあるが，前述の５箇所ほどには偏在は認められない。

石材／グリット	黒曜石	チャート	ハリ質安山岩	硬質ハリ質	流紋岩	計
ｄ－９	0	0	0	0	0	0
10	0	0	1	0	0	1
11	0	0	12	1	1	14
12	0	0	1	0	0	1
13	0	0	2	0	0	2
14	1	1	8	0	3	13
15	1	0	5	0	3	9
16	0	0	6	0	0	6
ｅ－９	0	0	116	0	0	116
10	0	0	4	0	0	4
11	1	0	4	0	0	5
12	1	0	1	0	0	2
13	0	0	7	0	1	8
14	2	2	7	3	0	14
15	0	0	35	1	1	37
16	0	1	32	0	0	33
ｆ－９	0	0	0	0	0	0
10	0	0	6	0	0	6
11	1	1	1	0	0	3
12	1	1	0	0	0	2
13	3	1	1	1	0	6
14	0	1	6	1	0	8
15	3	3	96	4	0	106
16	1	1	101	5	0	108
ｇ－９	1	0	2	0	0	3
10	0	0	1	1	0	2
11	0	0	0	0	0	0
12	0	0	3	4	0	7
13	1	1	3	0	0	5
14	4	2	39	3	4	52
15	1	0	78	9	1	89
16	11	1	47	1	1	61
ｈ－15	0	0	17	2	0	19
16	2	0	2	1	0	5
計	35	16	644	37	15	747

第２表　下層出土異石材数一覧

５箇所の石器集中箇所のドット分布は中心部に明確な密集が認められ，平面的には原位置を保っていると考えられる。ただ12列以南のスクリーンをかぶせたようなドット分布からすれば，石器製作に伴って形成された５箇所の石器群を前後する時期の遺物群が重複していることも考えられる。ただ遺物が層位的に分離できないためこうした分布状況を呈したと推定される。

石材別に中央部発掘区の遺物出土状況をみてみる。ハリ質安山岩は出土点数も多く，比較的分布が明確である。ｄ－11・ｅ－９・ｆ－15西部・ｆ－16東部・ｇ－14南部・ｇ－15・ｇ－16に集中が認められる。硬質ハリ質安山岩はｆ－16東部・ｇ－12東部・ｇ－14南部・ｇ－15に点数的には少ないが集中するようである。黒曜石はｆ－13・ｇ－14北部・ｇ－16に集中するが，他にもまばらに出土している。流紋岩はｄ－14・ｄ－15・ｅ－13・ｇ－14南部に認められる。サヌカイトは最も多用されている石材であり，他の石材が集中する箇所においてもサヌカイトが最も多いことには変わりはない。

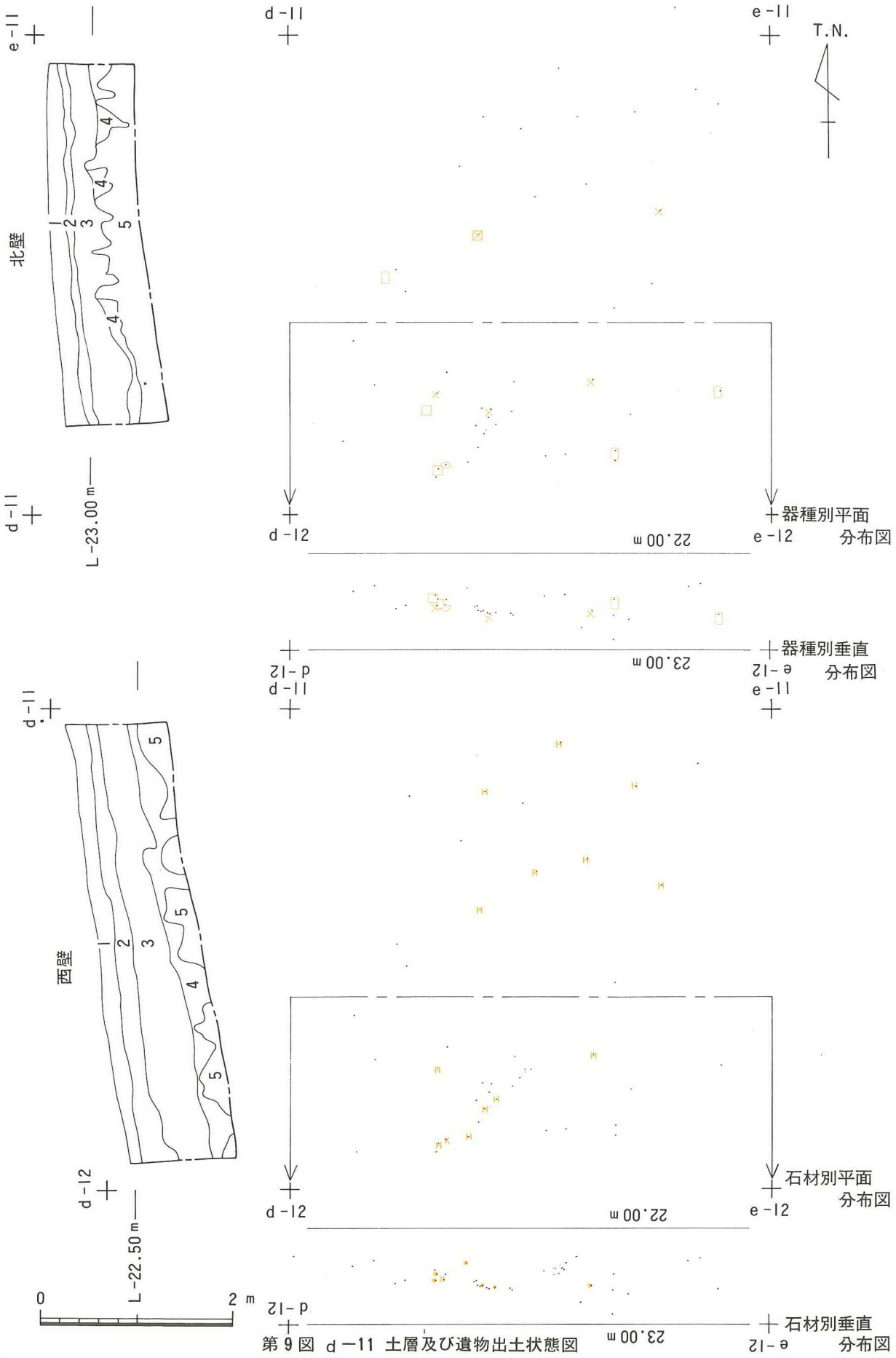
石材間の分布の関係をみると，ｅ－９の石器群ではハリ質安山岩とサヌカイトで構成され，ハリ質安山岩が約47％を占める。サヌカイトの比率が最も少ない箇所である。ｄ－11もハリ質安山岩が異石材の中では最も多い。ｅ－12とｆ－12に

おける石器群はほぼサヌカイトで構成される。ｆ－15西部の石器群はハリ質安山岩とサヌカイトを中心とする。ｆ－15東部とｇ－15西部の石器群には,ハリ質安山岩・サヌカイトを中心として黒曜石・硬質ハリ質安山岩がわずかに含まれる。ｆ－16とｇ－16の石器群ではｆ－16側にハリ質安山岩，ｇ－16側に黒曜石が分布する傾向が認められる。ｇ－14では南部を中心として流紋岩がハリ質安山岩・サヌカイトを共にやや集中する傾向がある。中央部発掘区はｅ・ｆ列の中央部に稜線があり，その東と西はやや比高的に下る。こうした点からすれば，ｅ－13・ｄ－14・ｄ－15の流紋岩と，ｆ－13・ｇ－14北部の黒曜石は同一のまとまりであったと考えられる。予備調査ではｆ－13・ｇ－13の南部に位置するトレンチから黒曜石の縦長剝片もしくは細石刃が出土しており，その可能性を補っているとすることができよう。

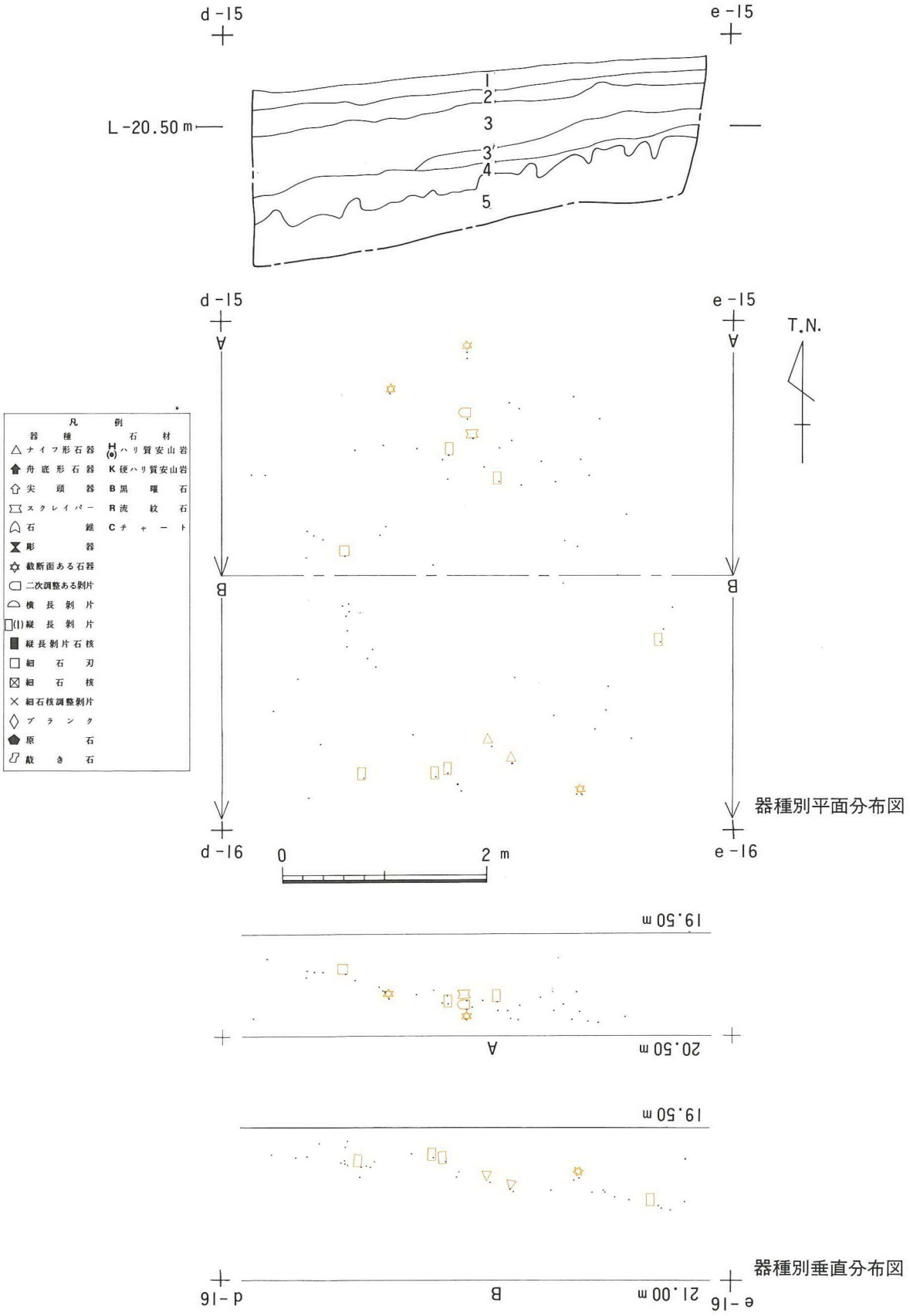
器種別に分布を見る。大浦遺跡の石器群は石器製作に起因すると考えられることから，石核を中心として分布をまとめる。明確に時期が新しいと考えられる細石核はｄ－11・ｅ－９・ｅ－15・ｅ－16・ｆ－15・ｆ－16・ｇ－９・ｇ－15・ｇ－16から検出されている。細石刃や細石核調整剝片の分布状況を考え合わせると，ｄ－11・ｅ－９・ｅ－16・ｆ－15西部・ｆ－16東部とｇ－16西部・ｇ－14の６箇所に分布の中心があると考えられる。また縦長剝片石核はｅ－13・ｅ－14・ｇ－13及びｆ・ｇ列の15・16を中心とする分布が認められる。横長剝片石核は他の石器に転用されるか他の石器の要素も充たすものであり，分布図には転用された器種としての分布を示している。それほど集中した分布は認められないが，翼状剝片石核の系譜上で考えられる石核や盤状剝片と類似した素材を用いた石核はｆ－15・ｇ－16とｅ－14で出土しており，石理面が石核の底面と平行する薄い板状の剝片を素材とした石核は，前者の分布の周辺から出土する傾向が認められる。

器種／グリッド	ナイフ形石器	舟底形石器	尖頭器	スクレイパー	石錐	彫器	截断面	二次調整	横剝長片	縦剝長片	縦長剝片石核	細石刃	細石核	調整剝片	ブランク	原石	敲き石	計	出土総点数 上層	下層	小計
ｄ－９	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16	0	16
10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	43	2	45
11	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	2	1	4	0	0	0	11	8	37	45
12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	4	39	17	56
13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	3	48	12	60
14	1	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	1	0	0	0	0	0	9	17	84	101
15	2	0	0	1	0	0	3	1	0	6	0	1	0	0	0	0	0	14	52	72	124
16	2	0	1	1	1	0	0	2	0	14	0	1	0	0	0	0	1	23	46	131	177
ｅ－９	0	0	0	1	0	0	2	0	0	2	0	9	2	7	0	0	0	23	24	246	270
10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	112	7	119
11	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	1	0	0	0	6	101	33	134
12	0	0	0	1	0	0	2	1	0	9	0	1	0	0	0	0	0	14	139	136	275
13	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	4	159	64	223
14	6	0	0	7	2	0	6	0	0	26	3	2	1	0	0	0	0	53	64	303	367
15	0	1	0	1	0	0	5	0	0	9	1	1	1	6	0	0	0	25	202	185	387
16	1	0	1	3	0	0	9	1	0	23	1	4	1	9	0	0	3	55	102	336	438
ｆ－９	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	24	23	47
10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	3	79	16	95
11	0	0	0	1	0	1	0	0	0	5	0	1	0	0	0	0	0	8	69	87	156
12	2	0	1	0	0	0	0	0	0	3	2	2	0	0	0	0	0	10	83	205	288
13	2	0	1	1	0	0	1	0	0	5	0	2	0	0	0	0	0	12	245	247	492
14	1	0	0	0	0	0	0	1	0	15	3	2	0	0	0	0	0	21	213	283	496
15	13	0	0	8	2	0	6	0	0	66	10	7	2	11	2	1	1	129	285	1,139	1,424
16	7	0	2	1	0	0	4	5	1	56	5	11	6	8	1	0	0	107	152	1,129	1,281
ｇ－９	1	0	0	0	0	0	1	0	0	4	0	0	1	0	0	0	0	7	8	32	40
10	0	0	0	0	0	0	1	0	0	8	1	0	0	0	0	0	0	10	8	61	69
11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	8	13	31	44
12	1	0	3	3	0	1	1	0	0	7	1	0	0	1	0	0	0	18	44	238	282
13	1	0	1	0	0	0	1	1	1	29	5	1	0	0	0	0	2	42	73	412	485
14	5	0	1	3	0	0	1	2	0	41	0	6	1	6	0	0	0	66	180	383	563
15	10	1	0	2	1	0	10	3	1	98	8	8	1	3	0	0	1	147	349	789	1,138
16	14	0	1	7	0	0	8	1	0	206	12	3	4	9	0	0	1	266	304	1,148	1,452
ｈ－15	7	0	0	1	0	0	5	1	0	20	3	1	0	1	1	0	0	40	174	200	374
16	4	0	0	4	0	0	7	1	0	17	0	0	0	0	0	0	0	33	91	165	256
計	81	3	12	47	6	2	73	20	4	698	57	66	21	68	5	1	9	1,172	3,478	7,917	11,395

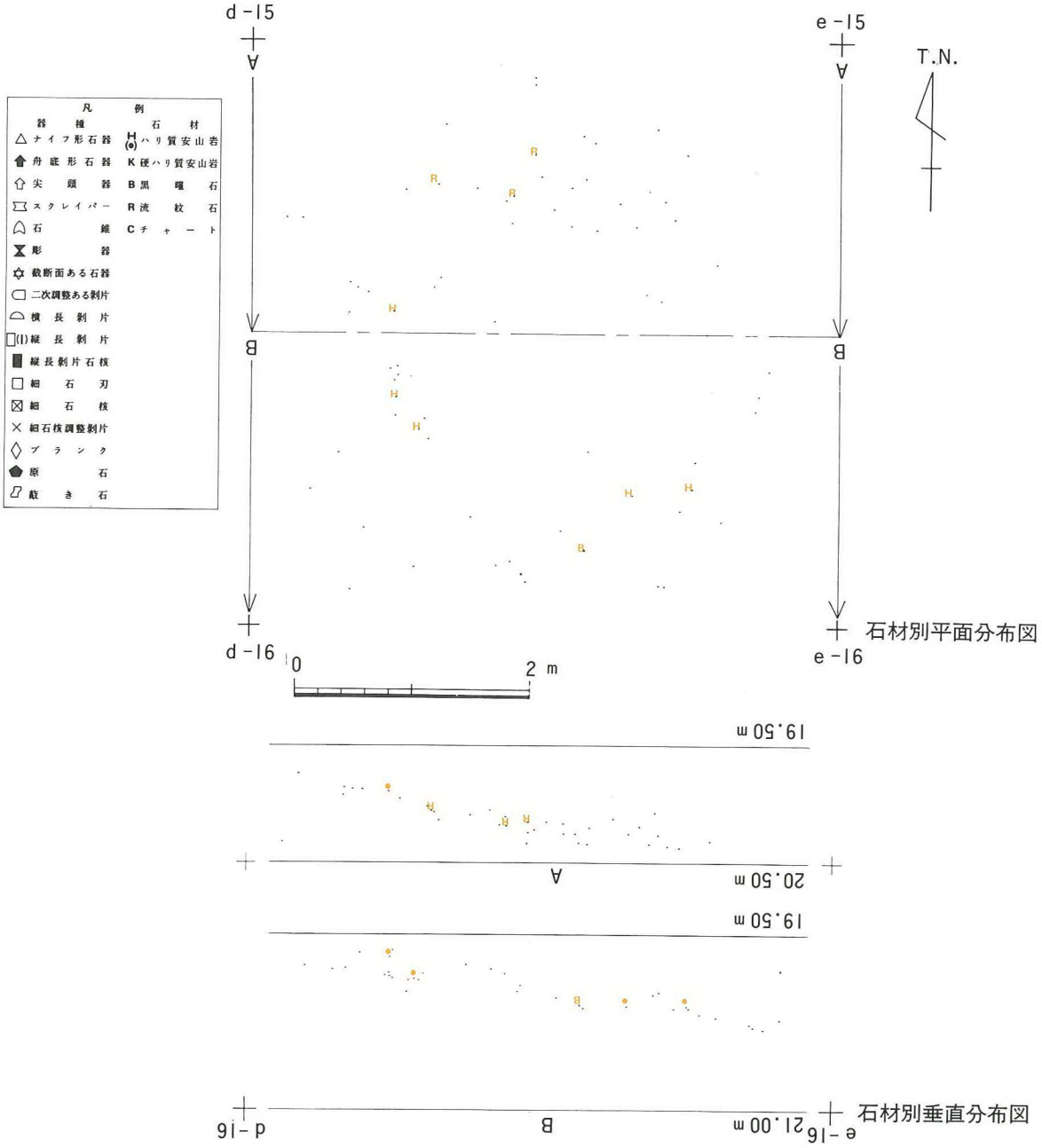
第３表　下層出土器種別数一覧



第９図　d－11 土層及び遺物出土状態図



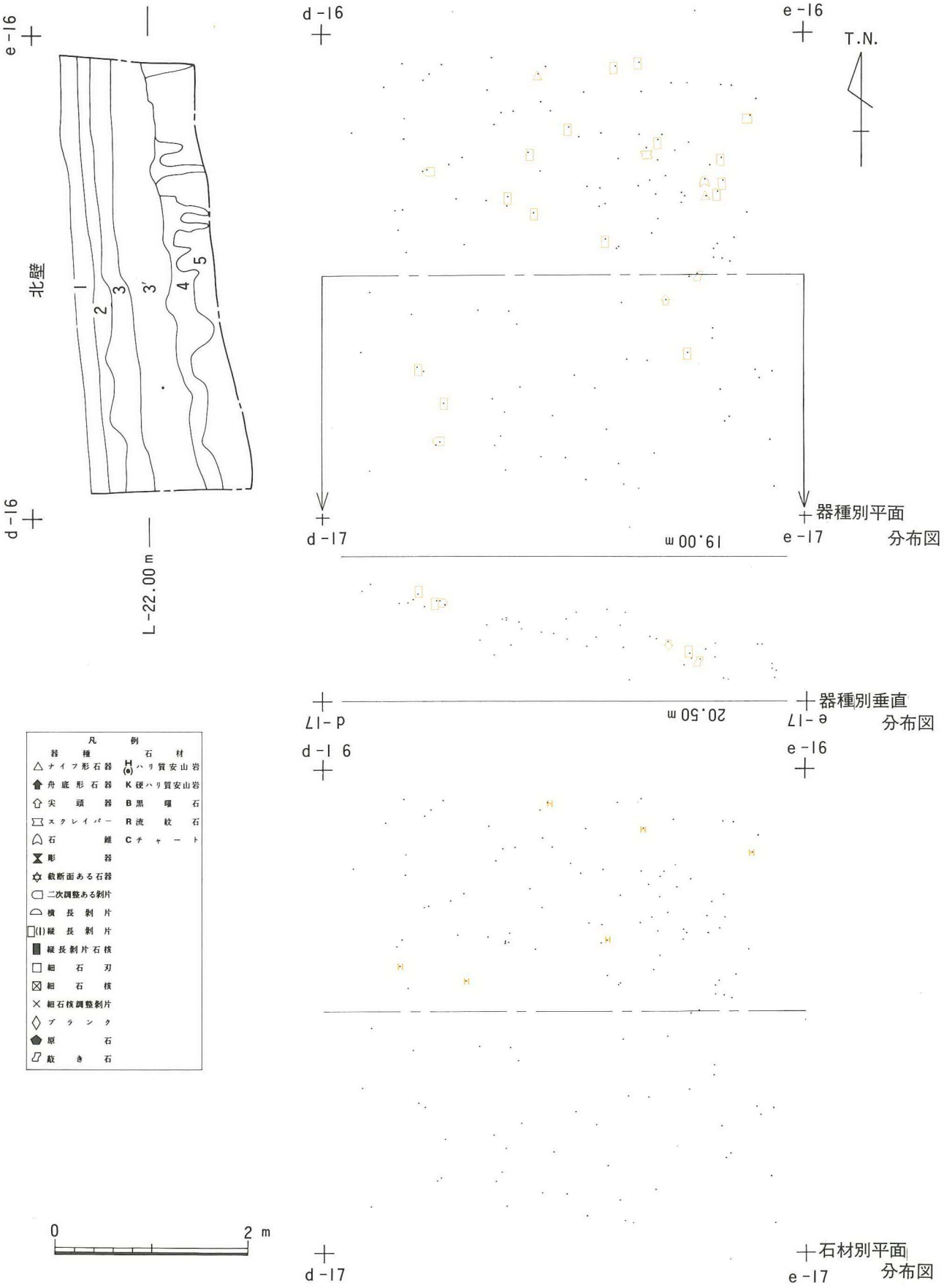
第10図 d－15 土層及び遺物出土状態図(1)



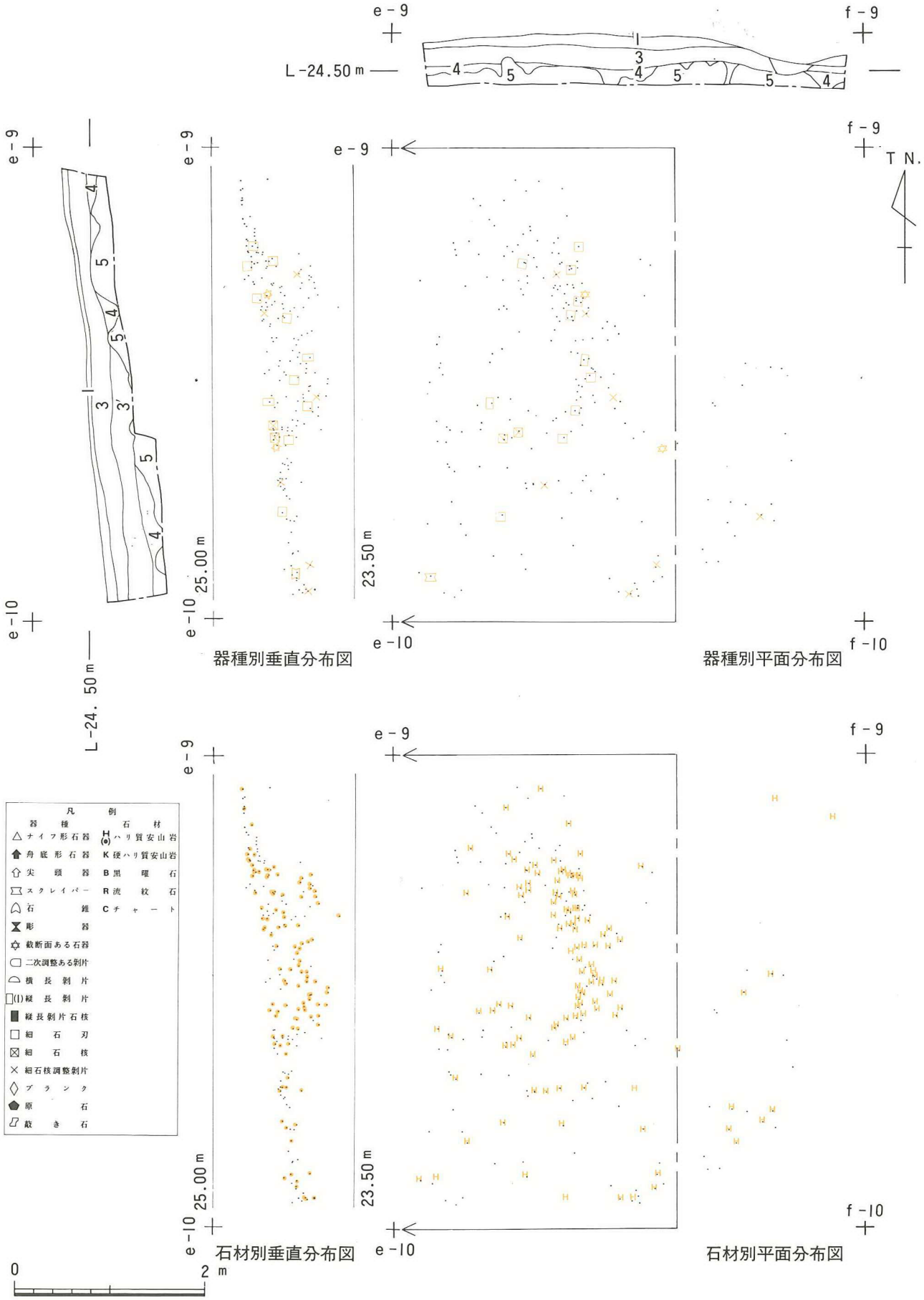
石材別平面分布図

石材別垂直分布図

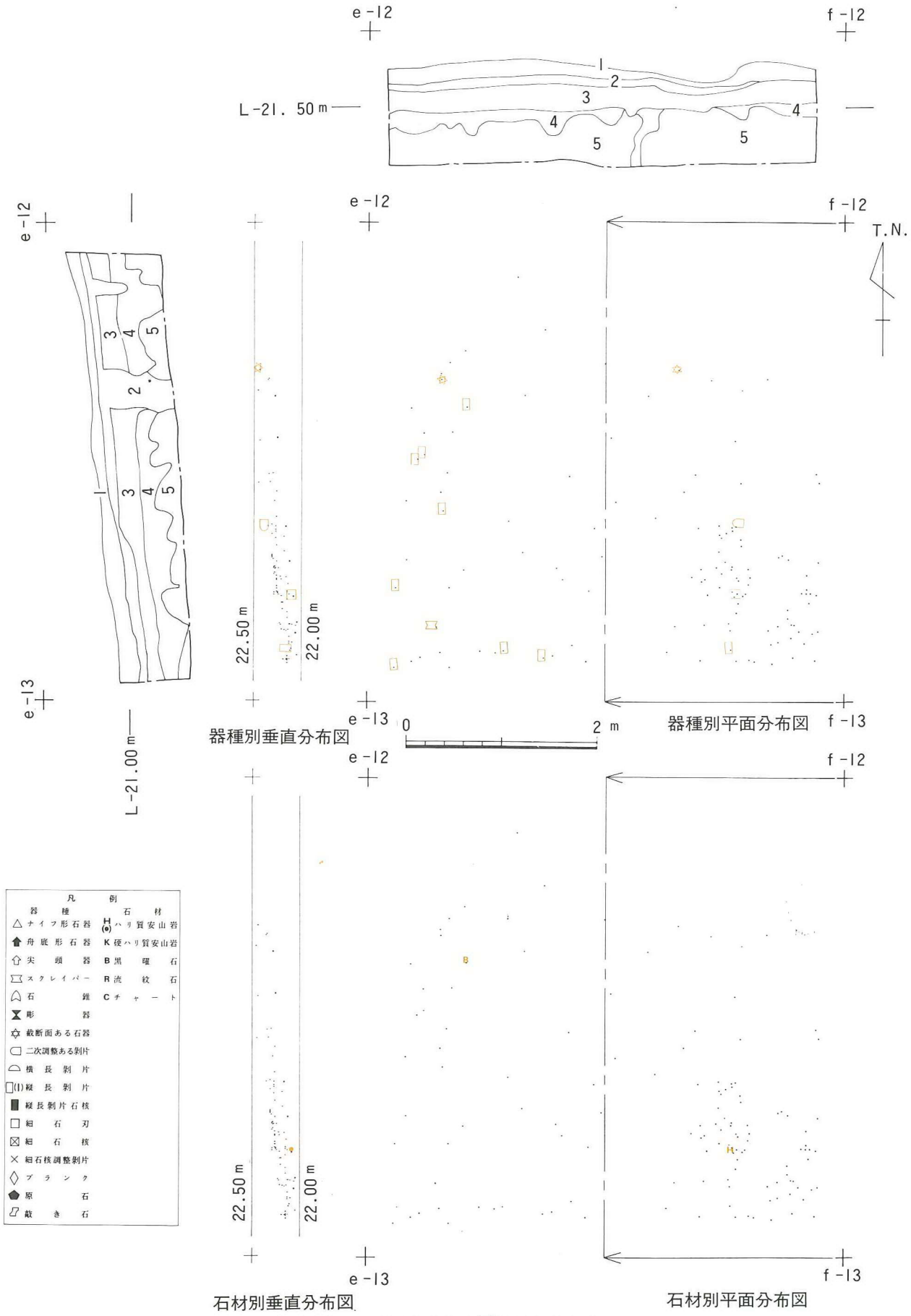
第11図　d－15 遺物出土状態図(2)



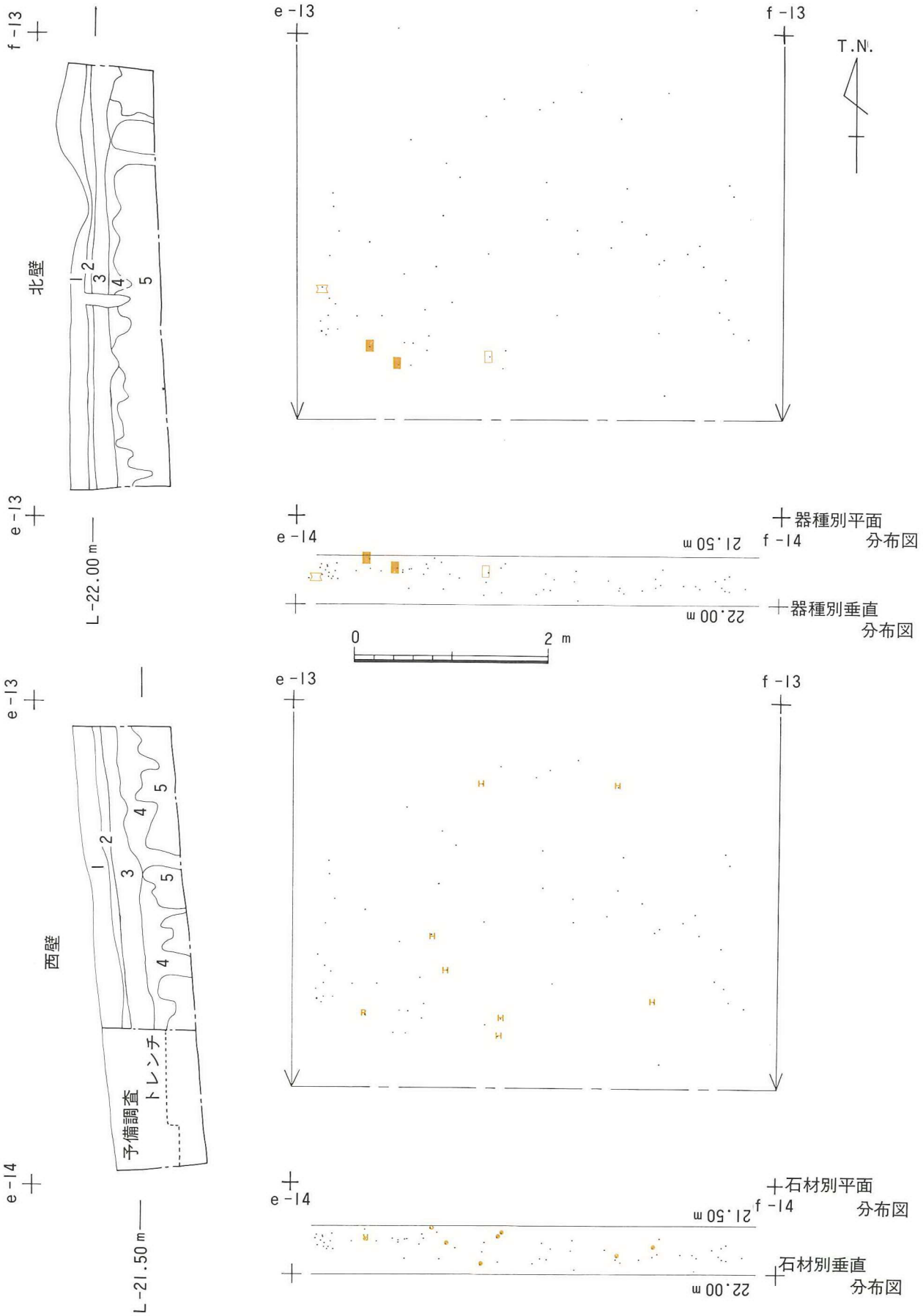
第12図 d－16 土層及び遺物出土状態図



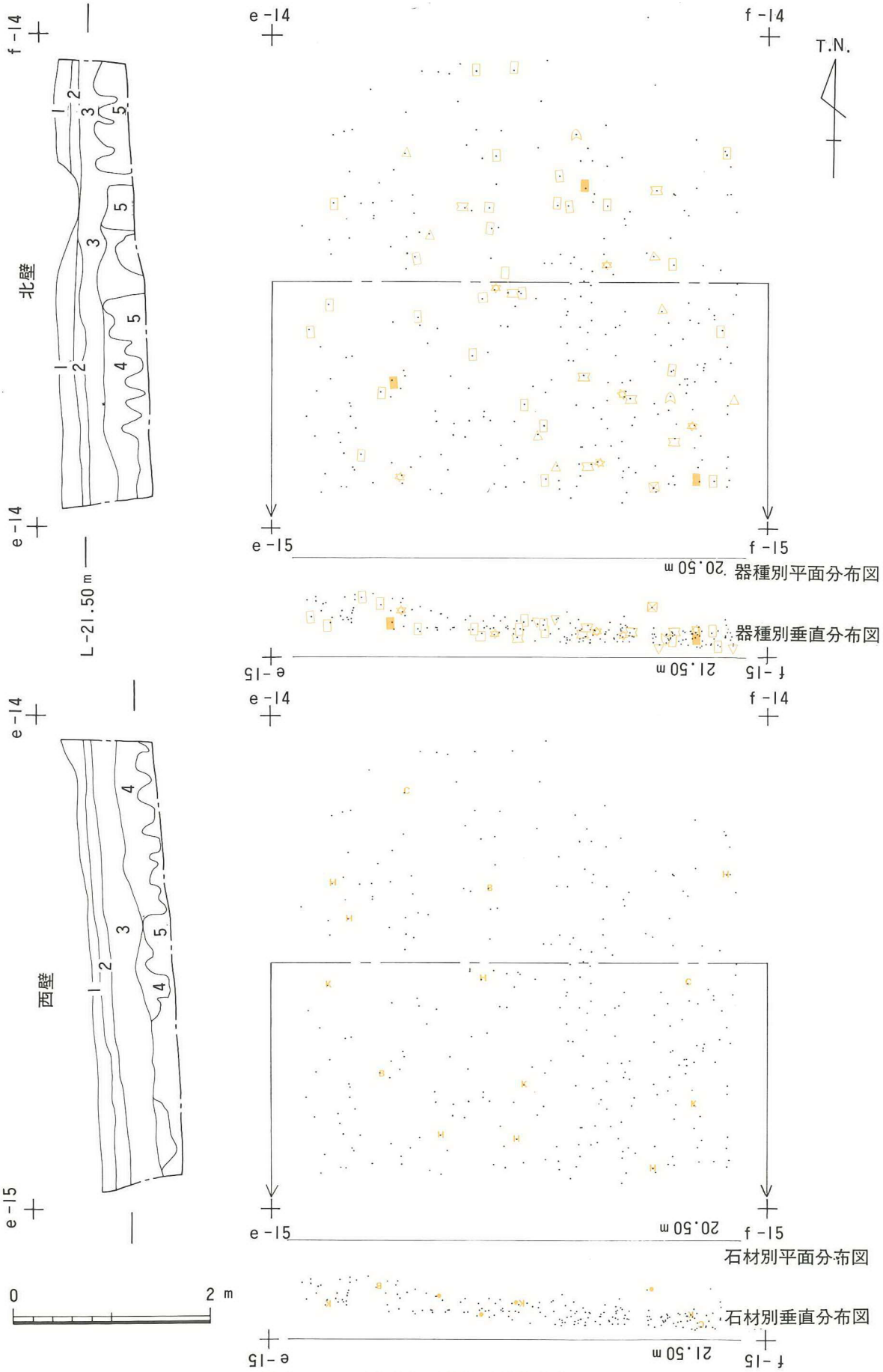
第13図　e－9　土層及び遺物出土状態図



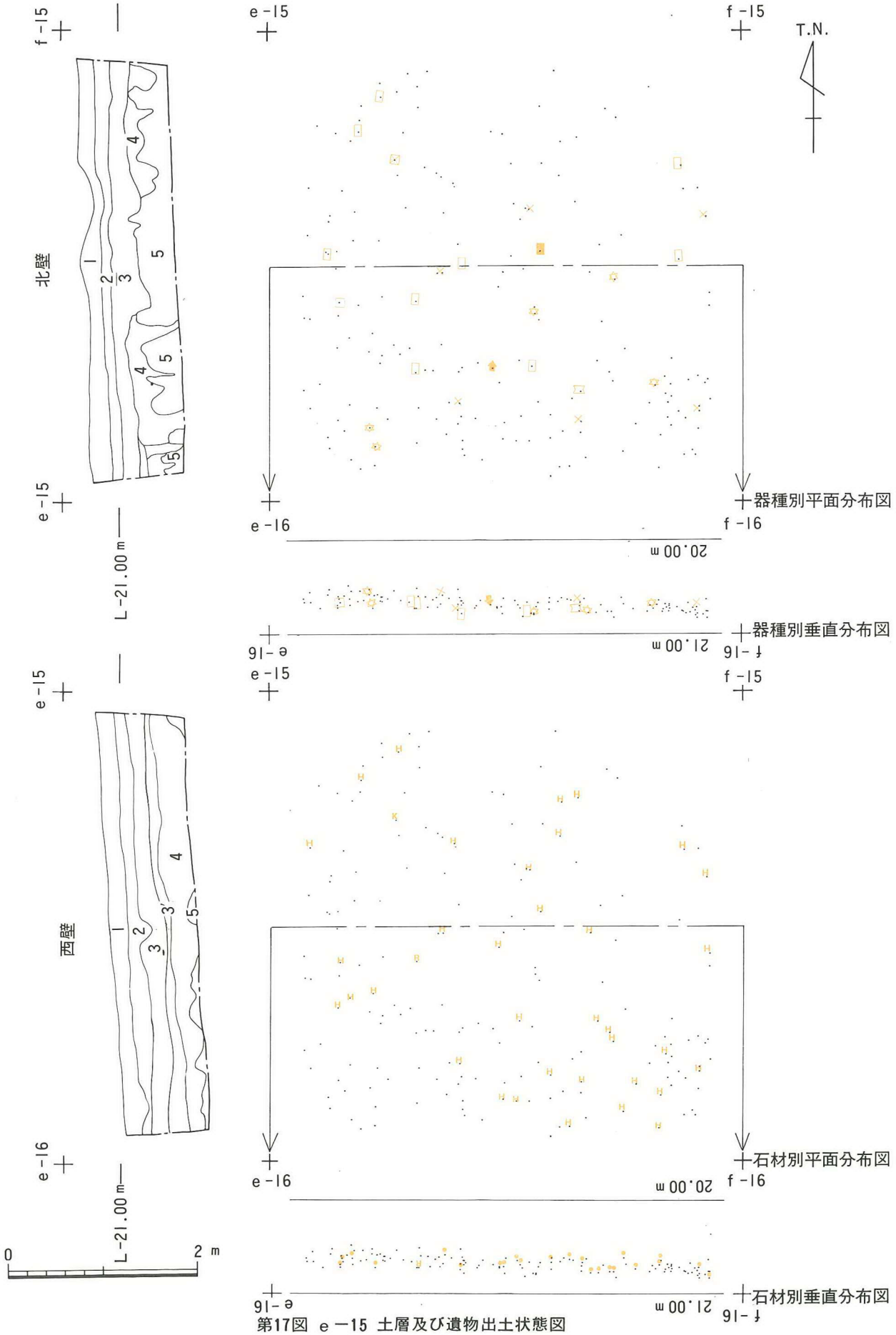
第14図 e－12 土層及び遺物出土状態図



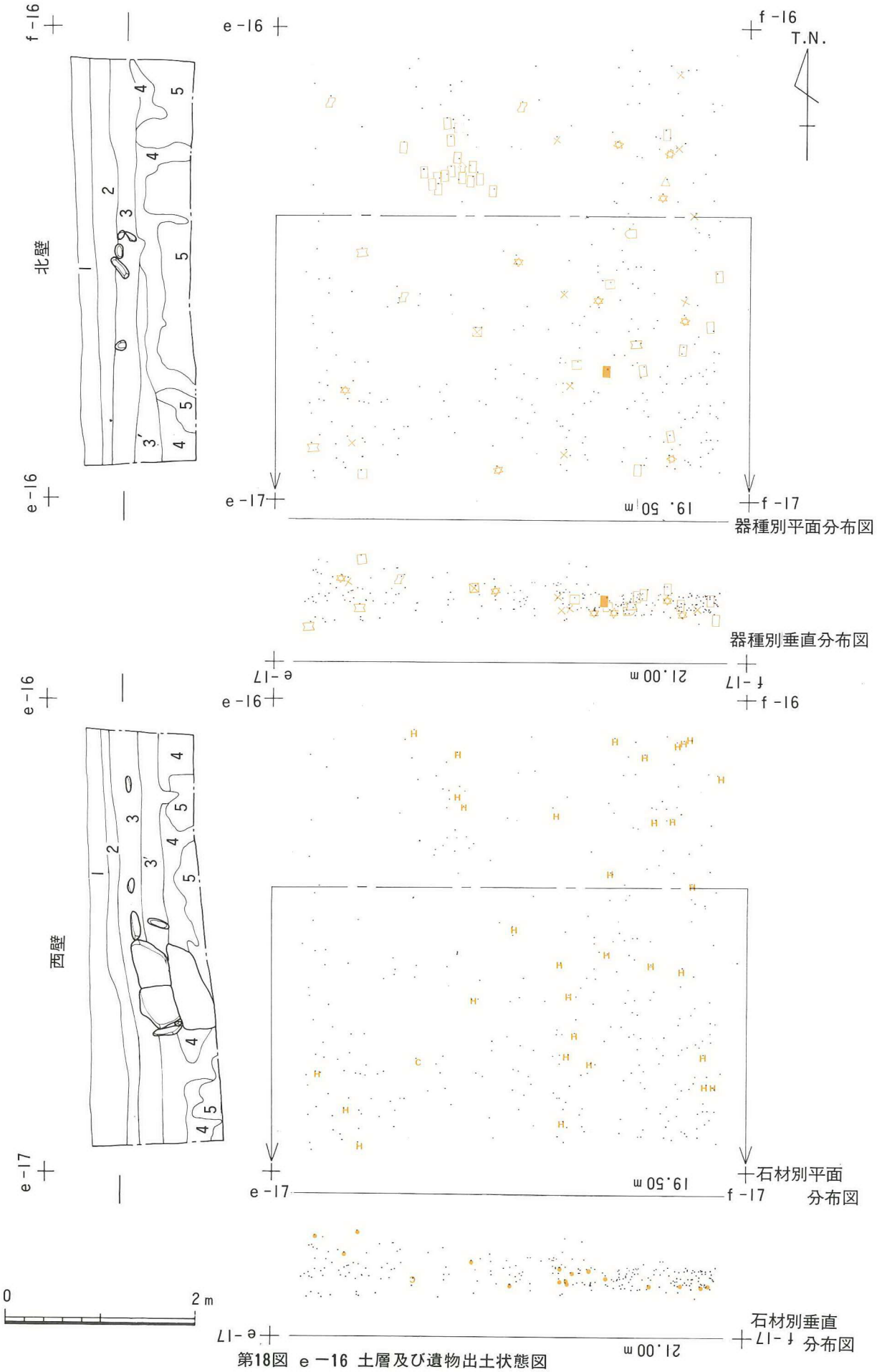
第15図　e －13 土層及び遺物出土状態図



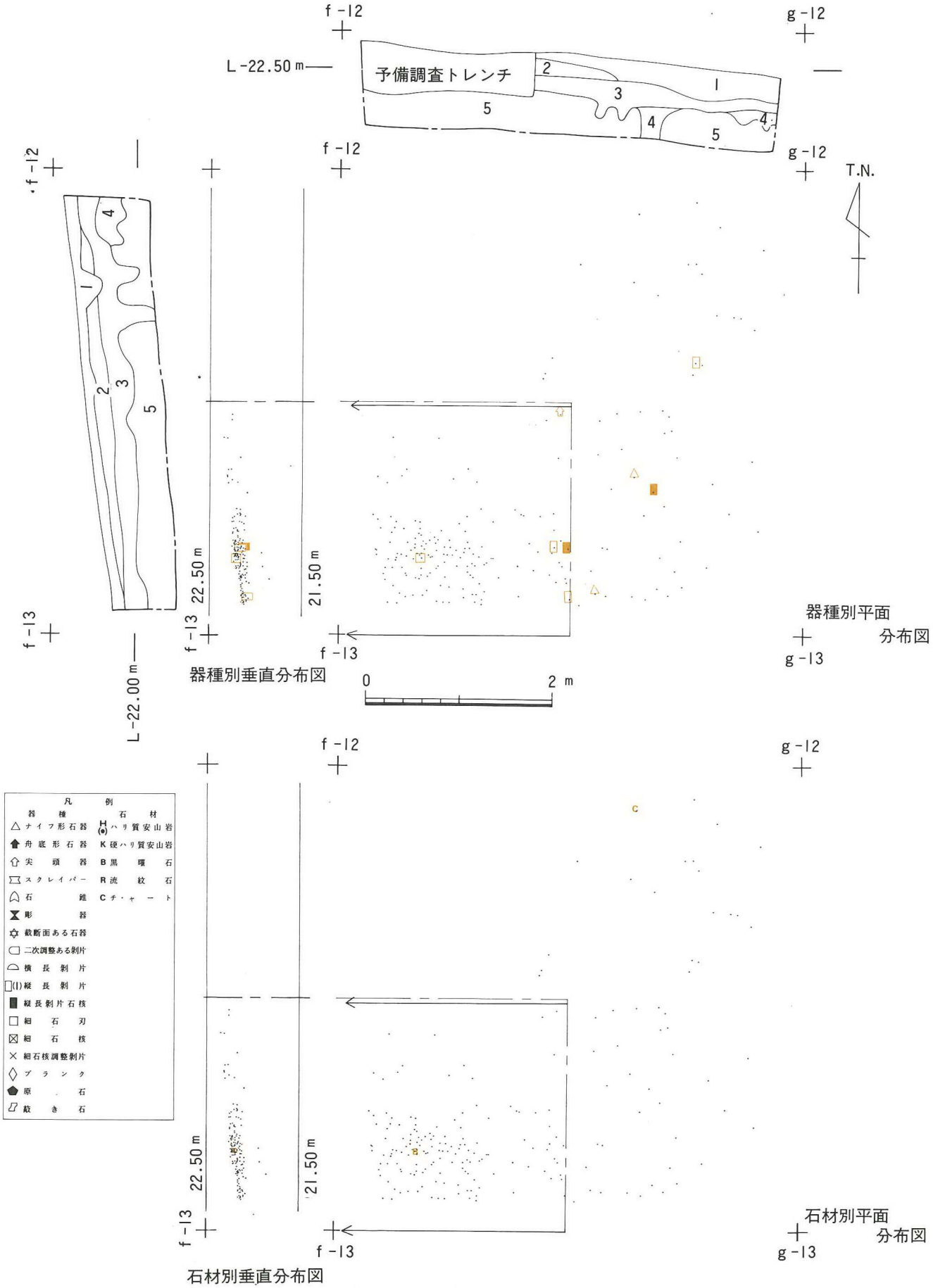
第16図 e ―14 土層及び遺物出土状態図



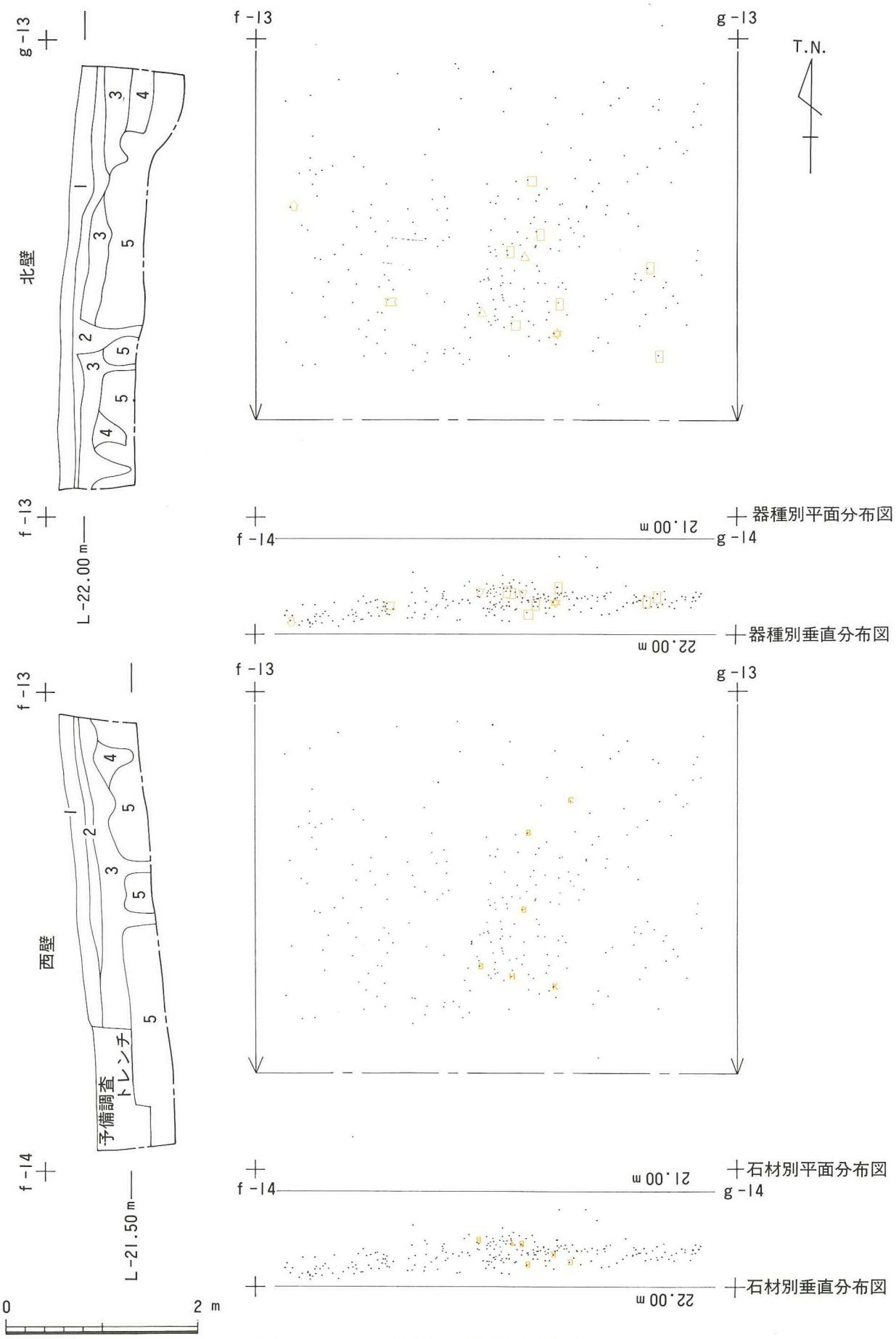
第17図　e －15　土層及び遺物出土状態図



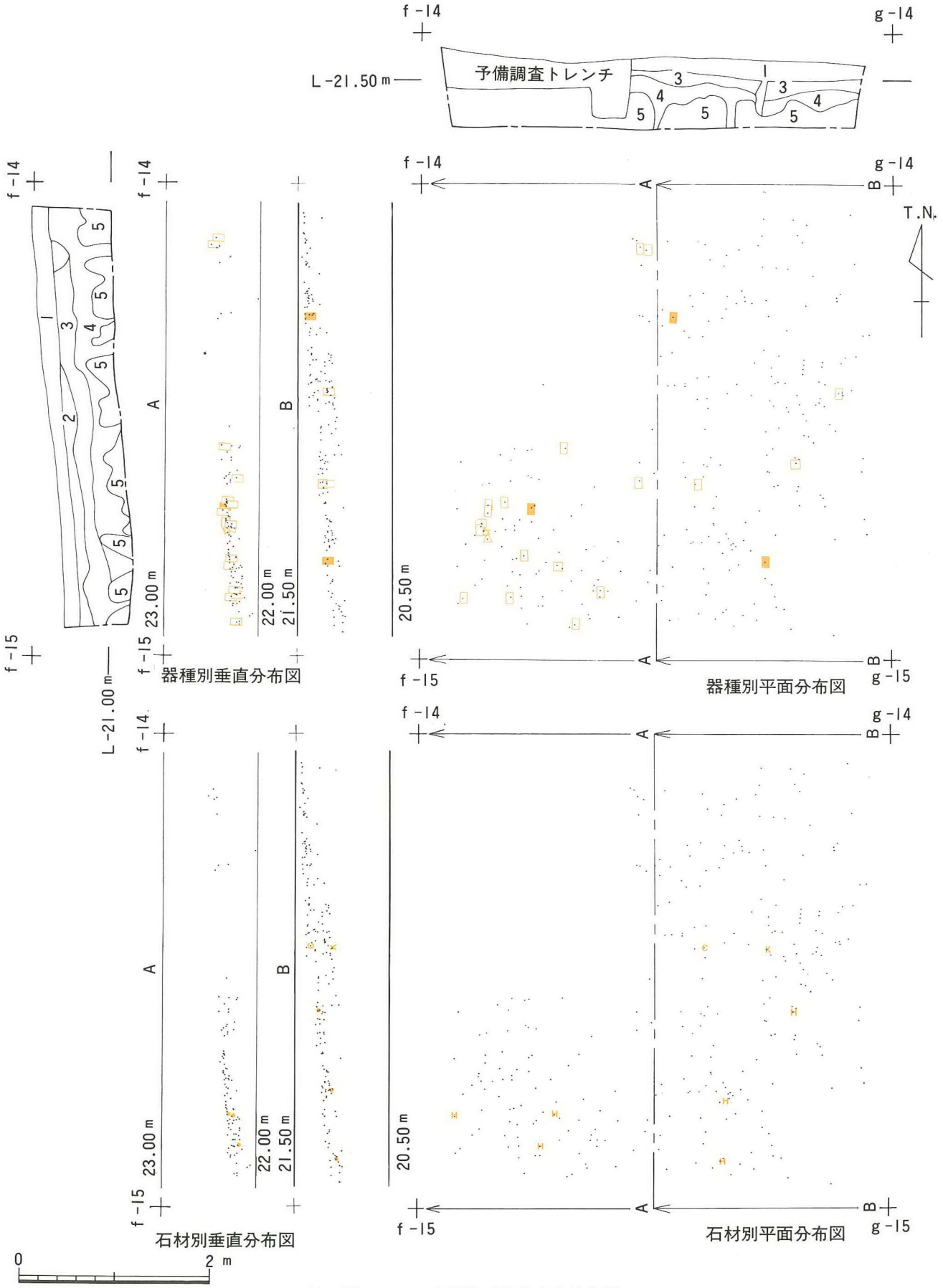
第18図 e－16 土層及び遺物出土状態図



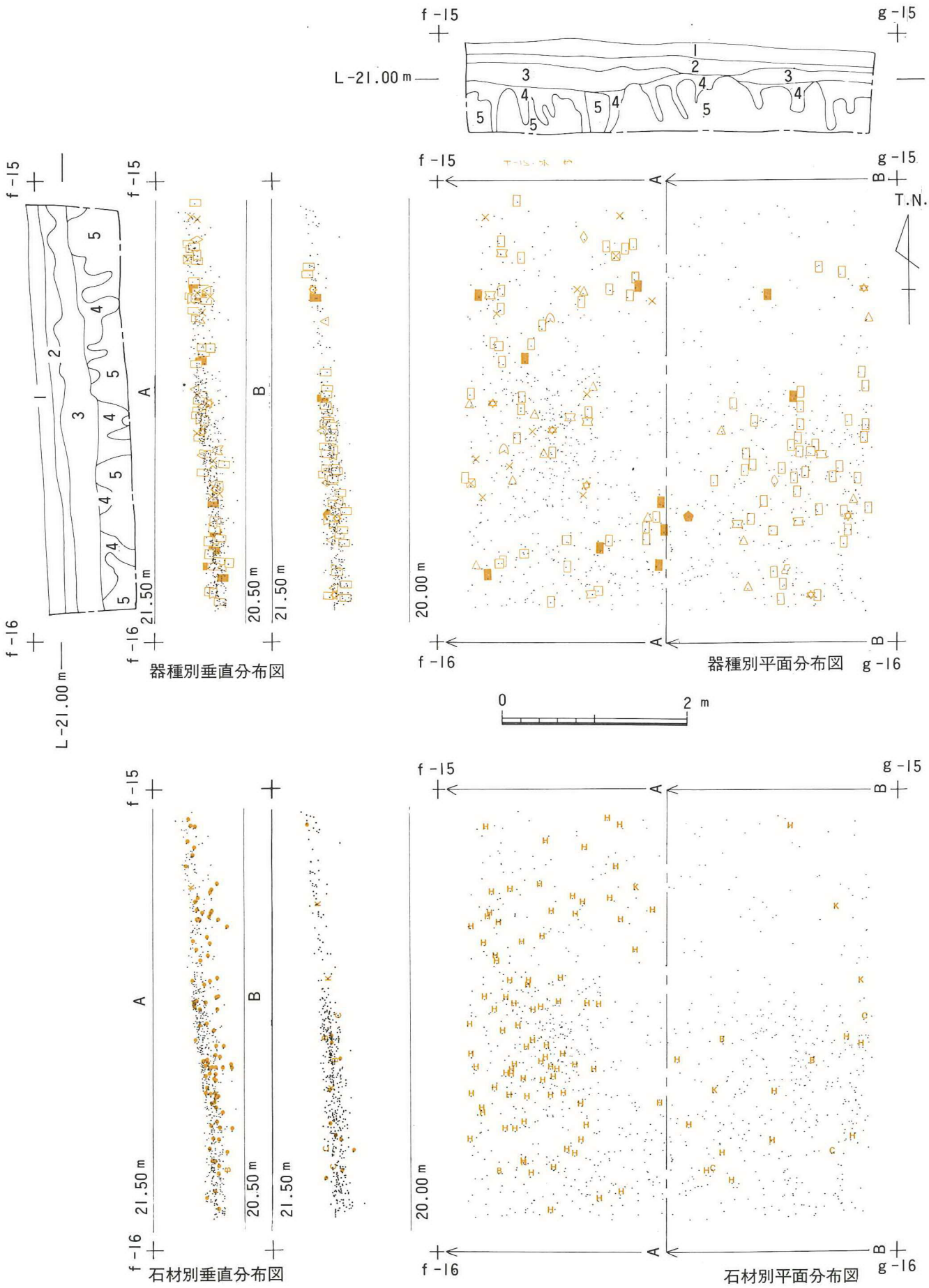
第19図　ｆ－12 土層及び遺物出土状態図



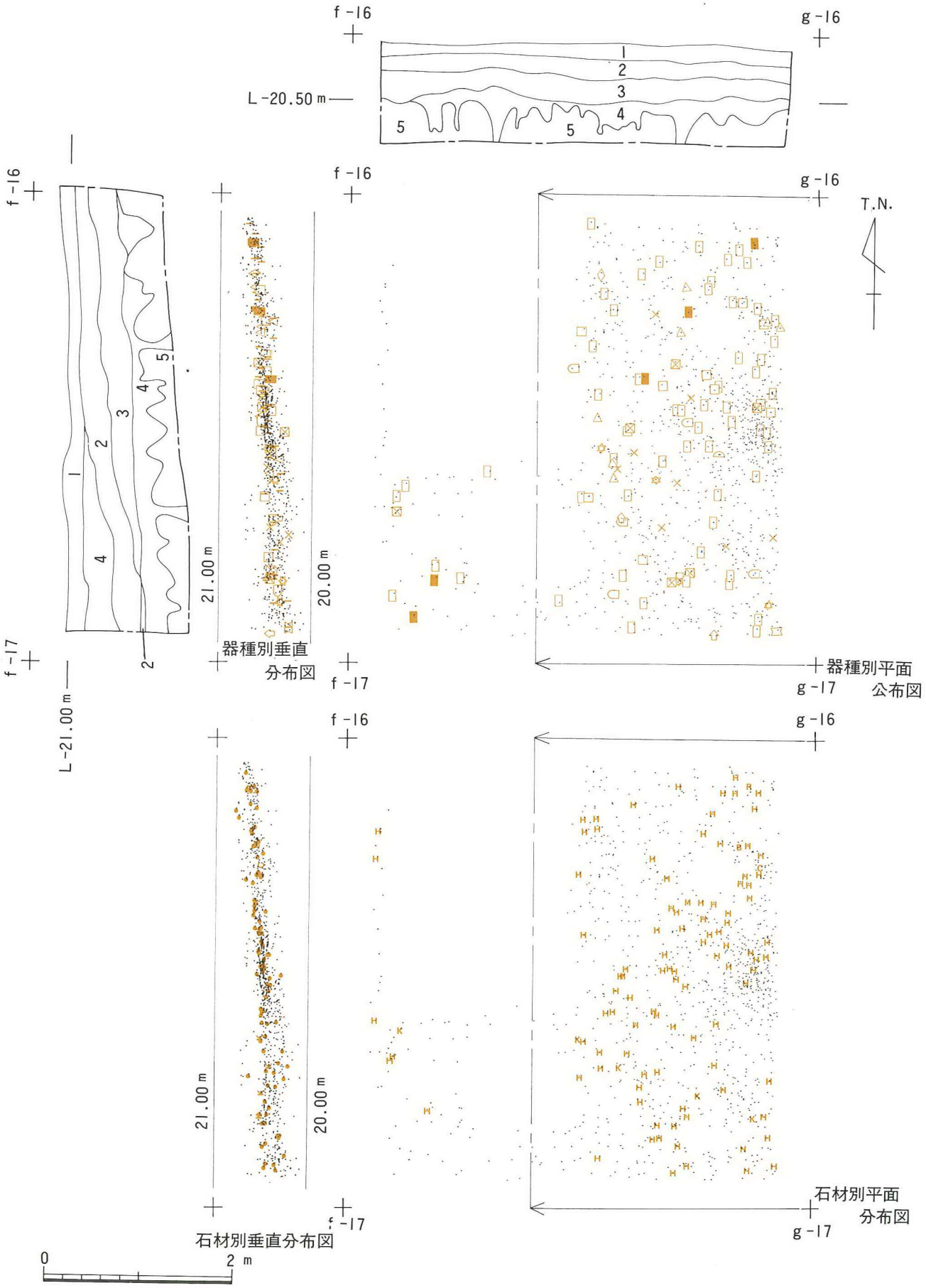
第20図　f－13 土層及び遺物出土状態図



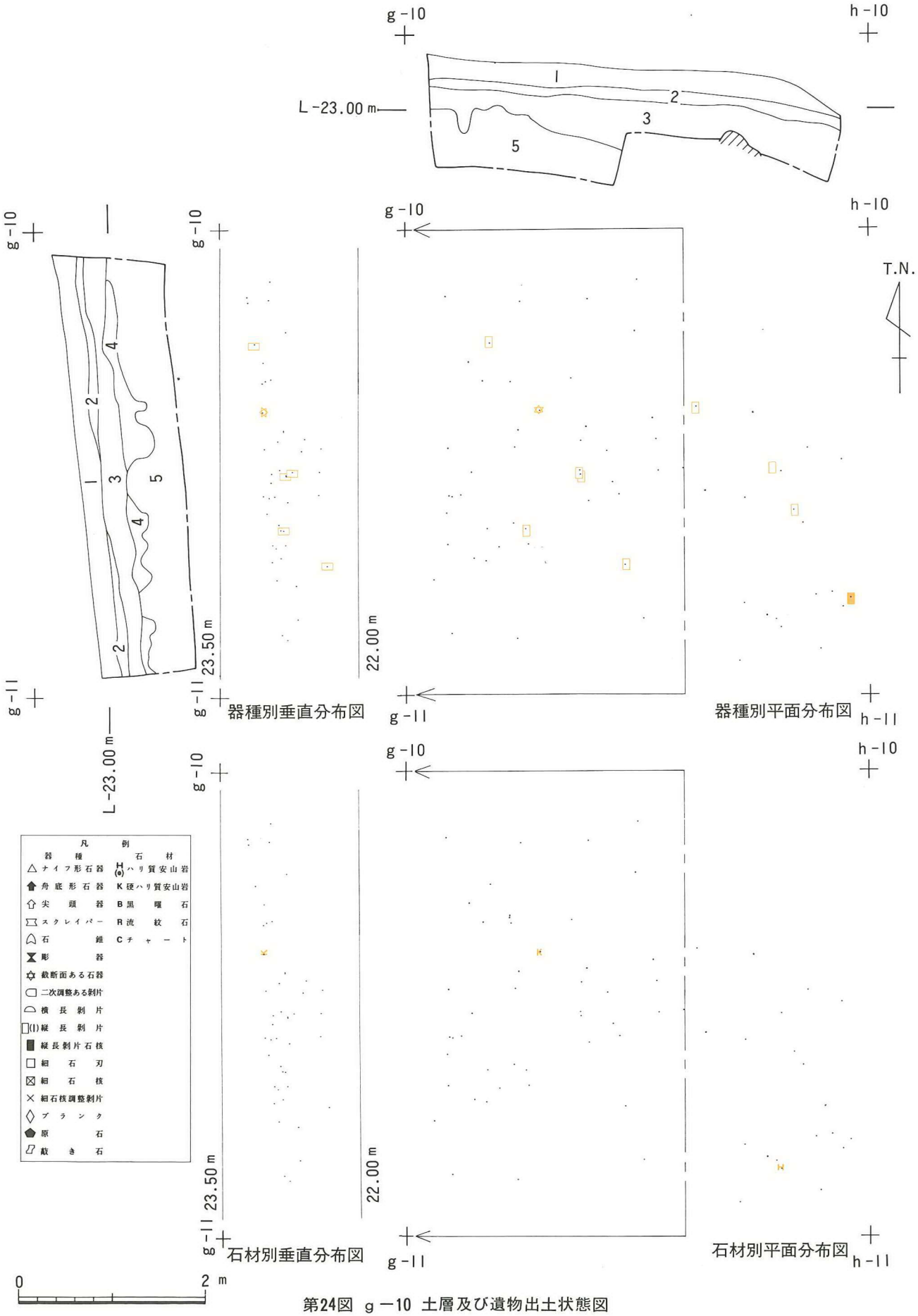
第21図　ｆ－14 土層及び遺物出土状態図



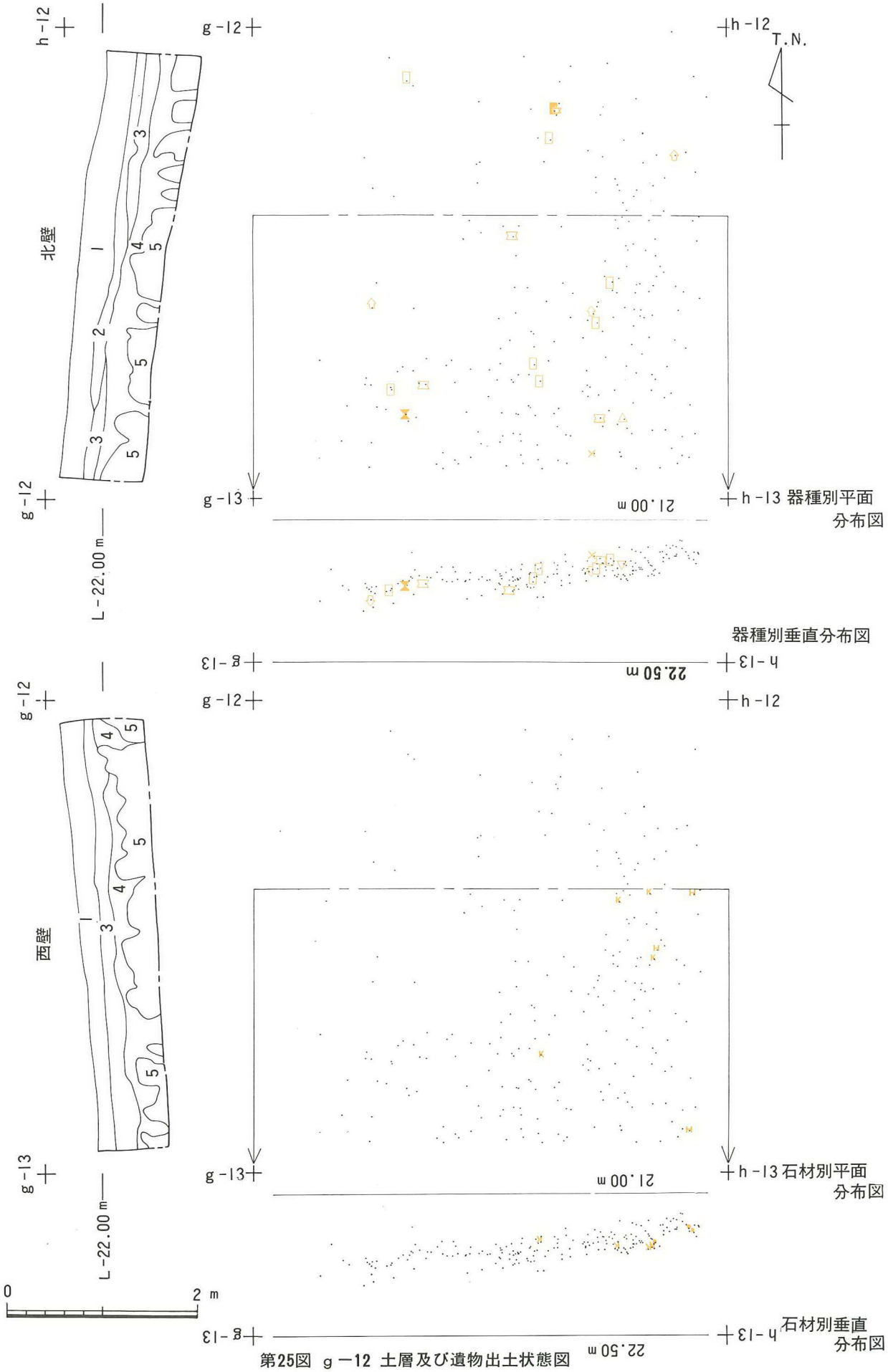
第22図　f －15 土層及び遺物出土状態図



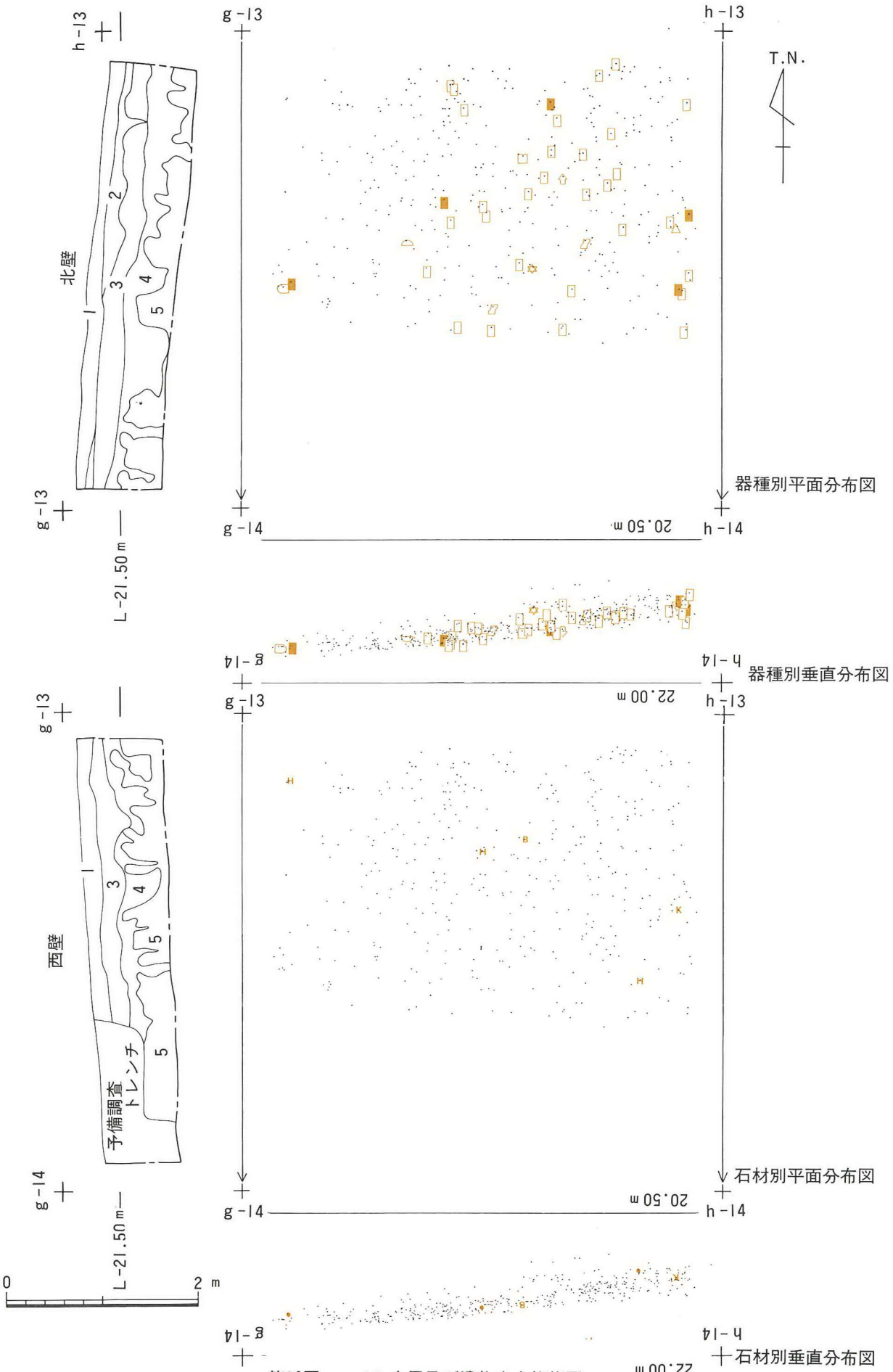
第23図　ｆ－16 土層及び遺物出土状態図



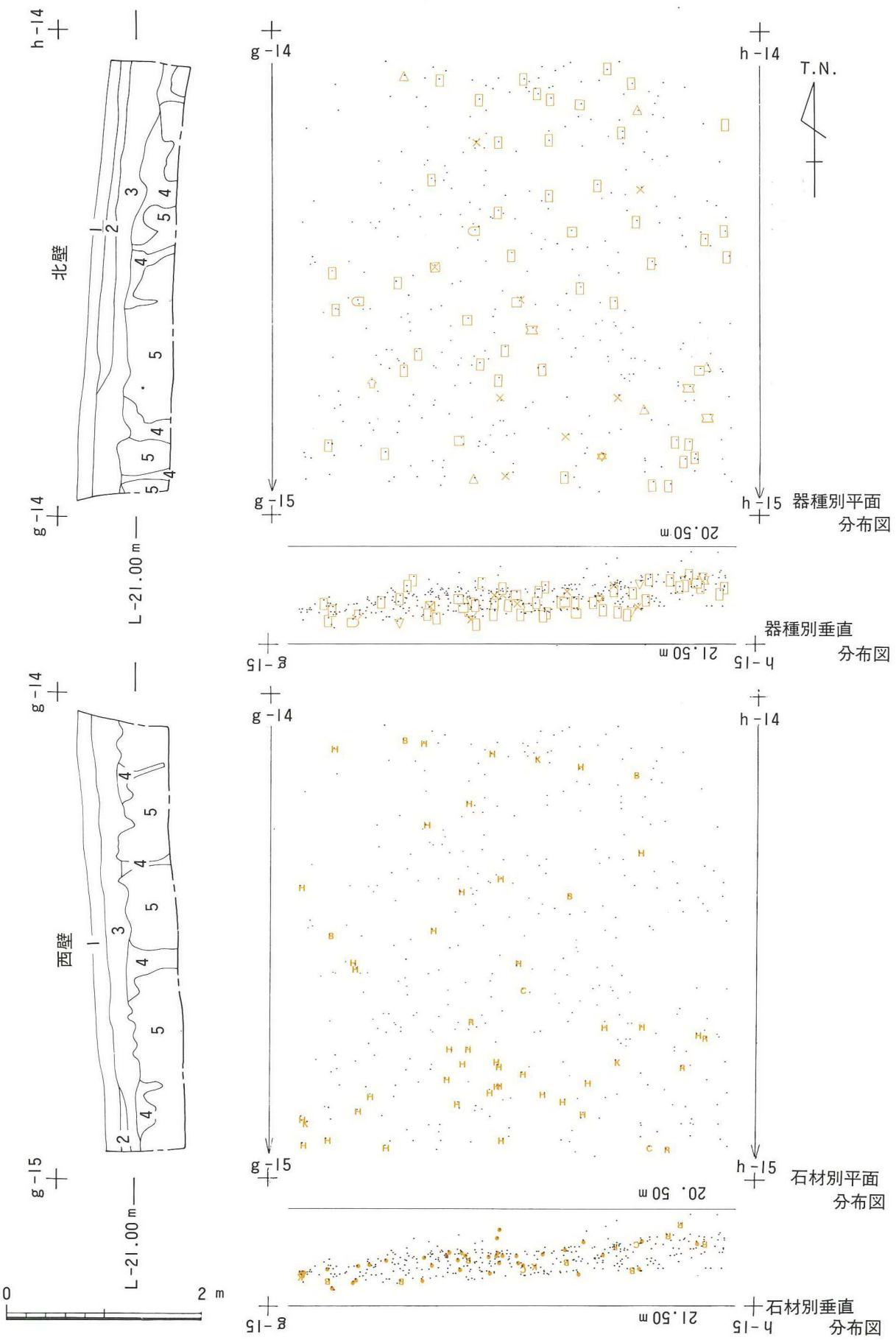
第24図 g－10 土層及び遺物出土状態図



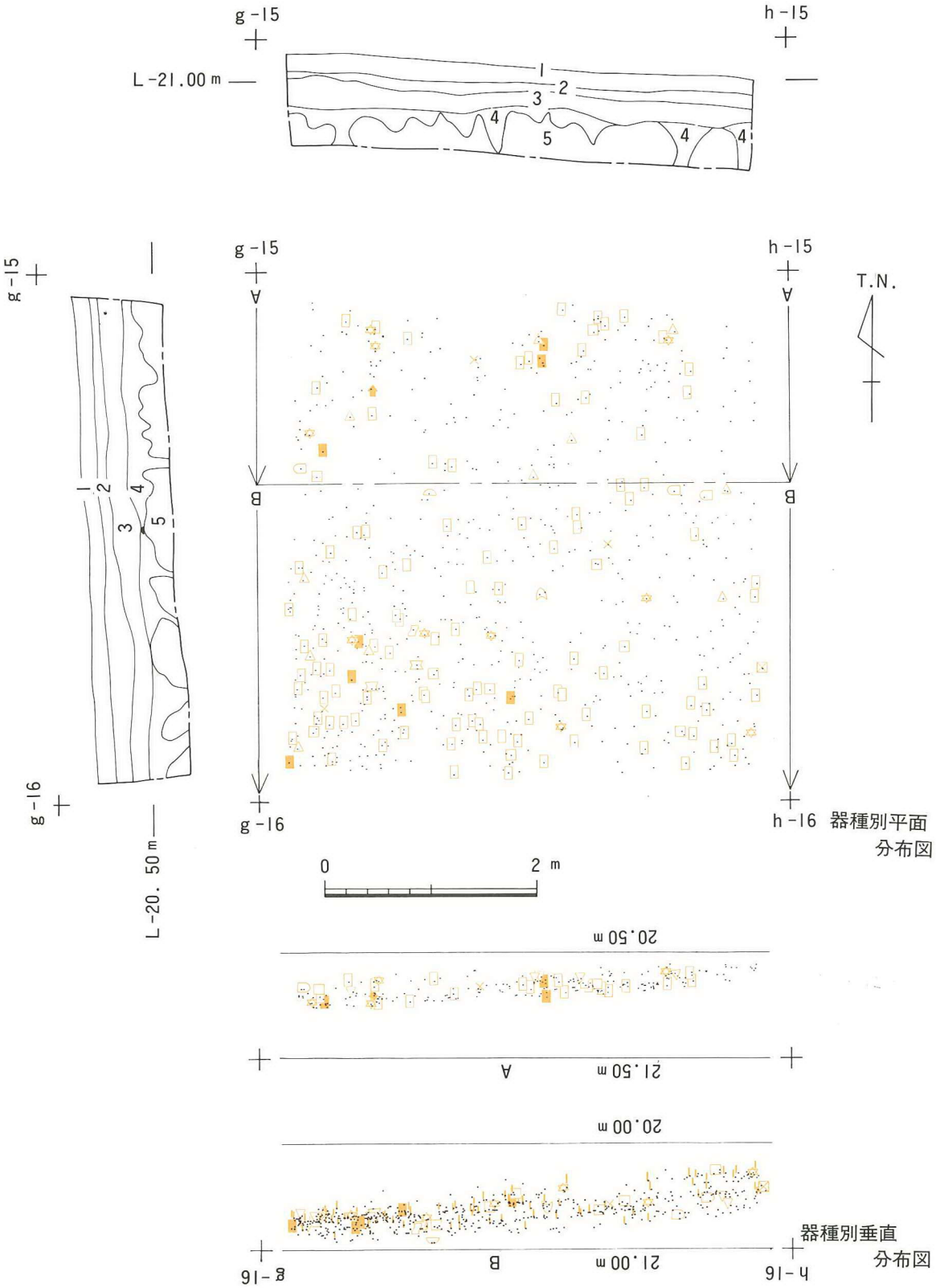
第25図　g－12 土層及び遺物出土状態図



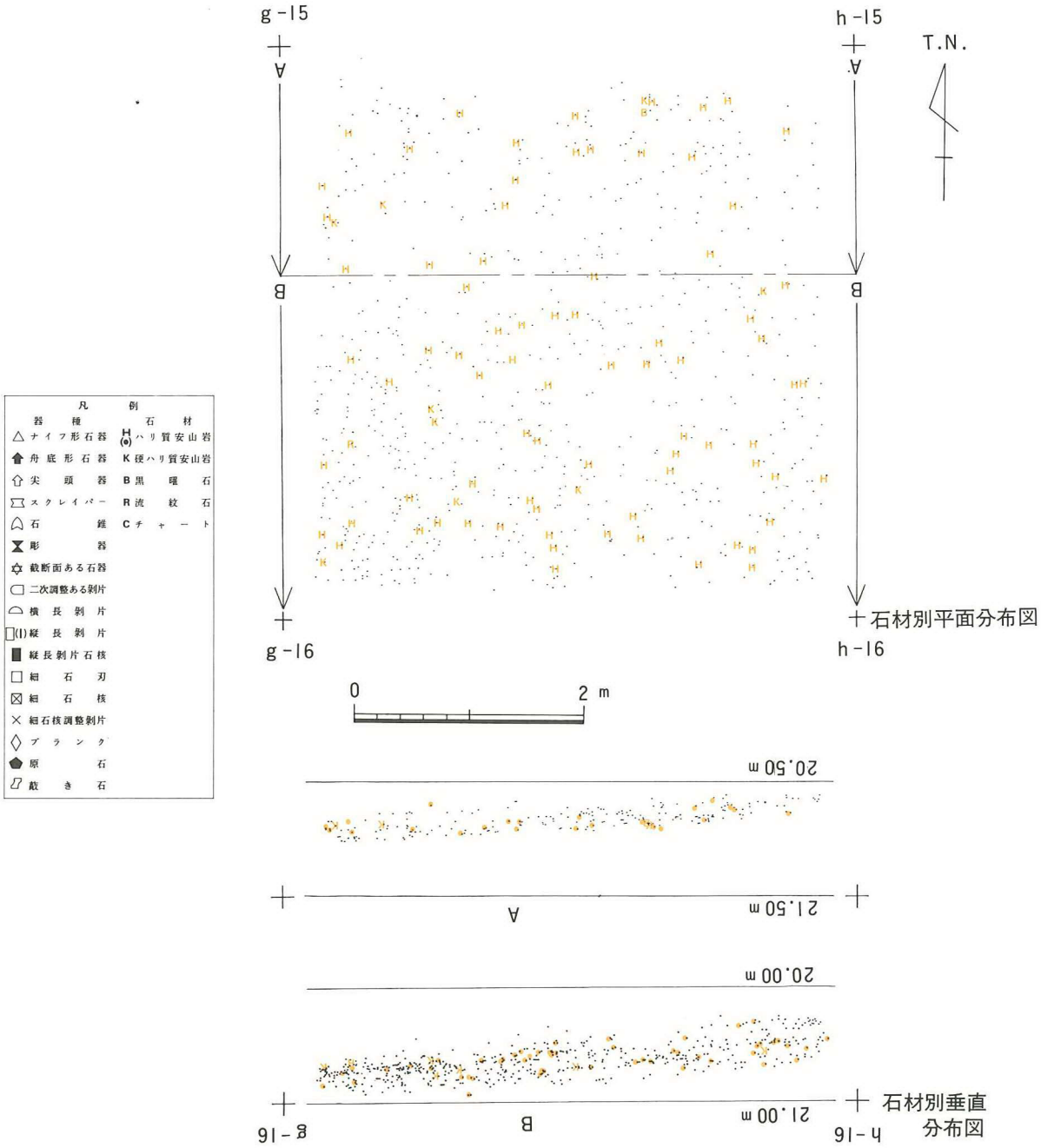
第26図 g－13 土層及び遺物出土状態図



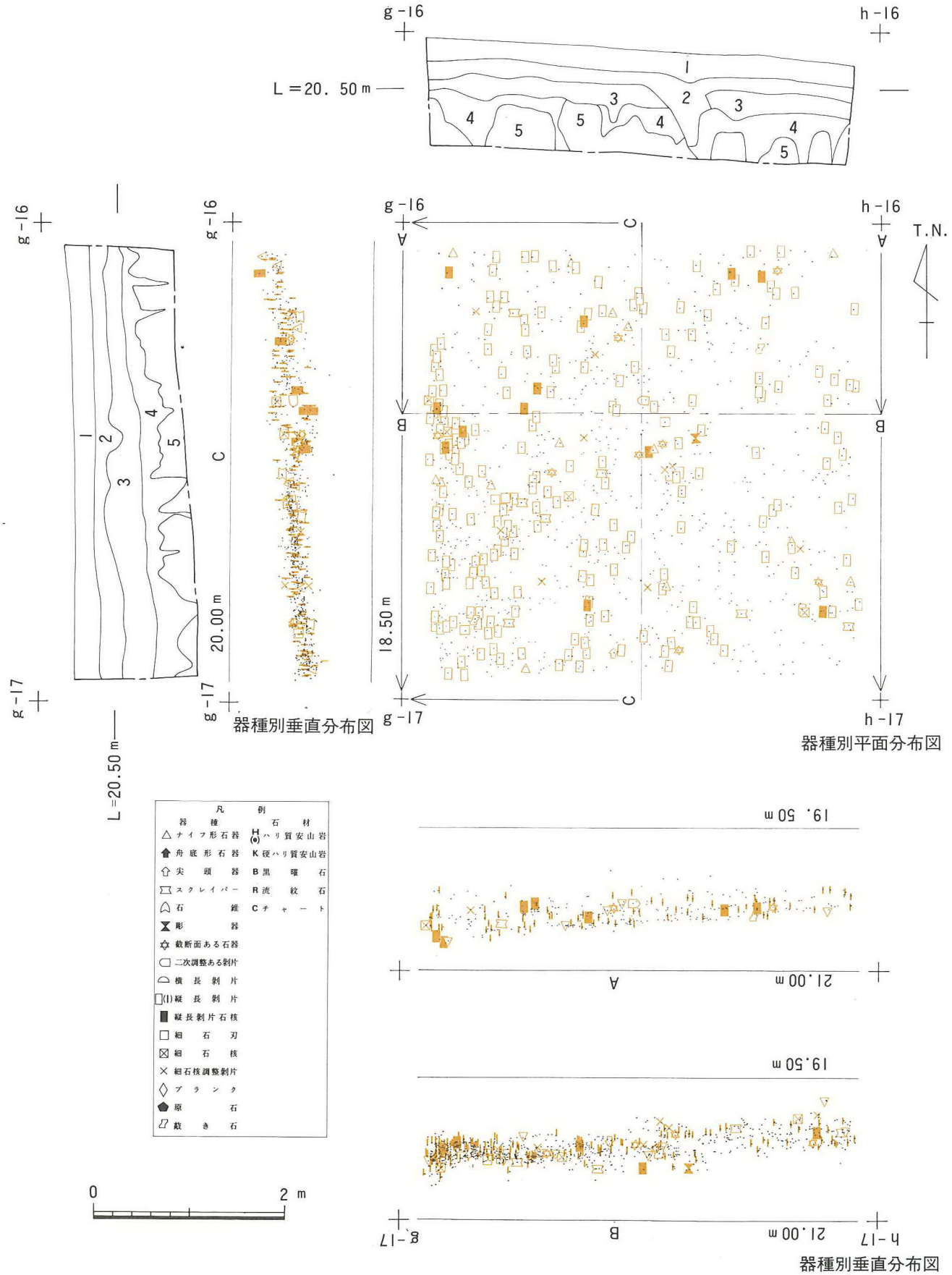
第27図　g－14 土層及び遺物出土状態図



第28図 g－15 土層及び遺物出土状態図(1)



第29図　g－15 遺物出土状態図(2)

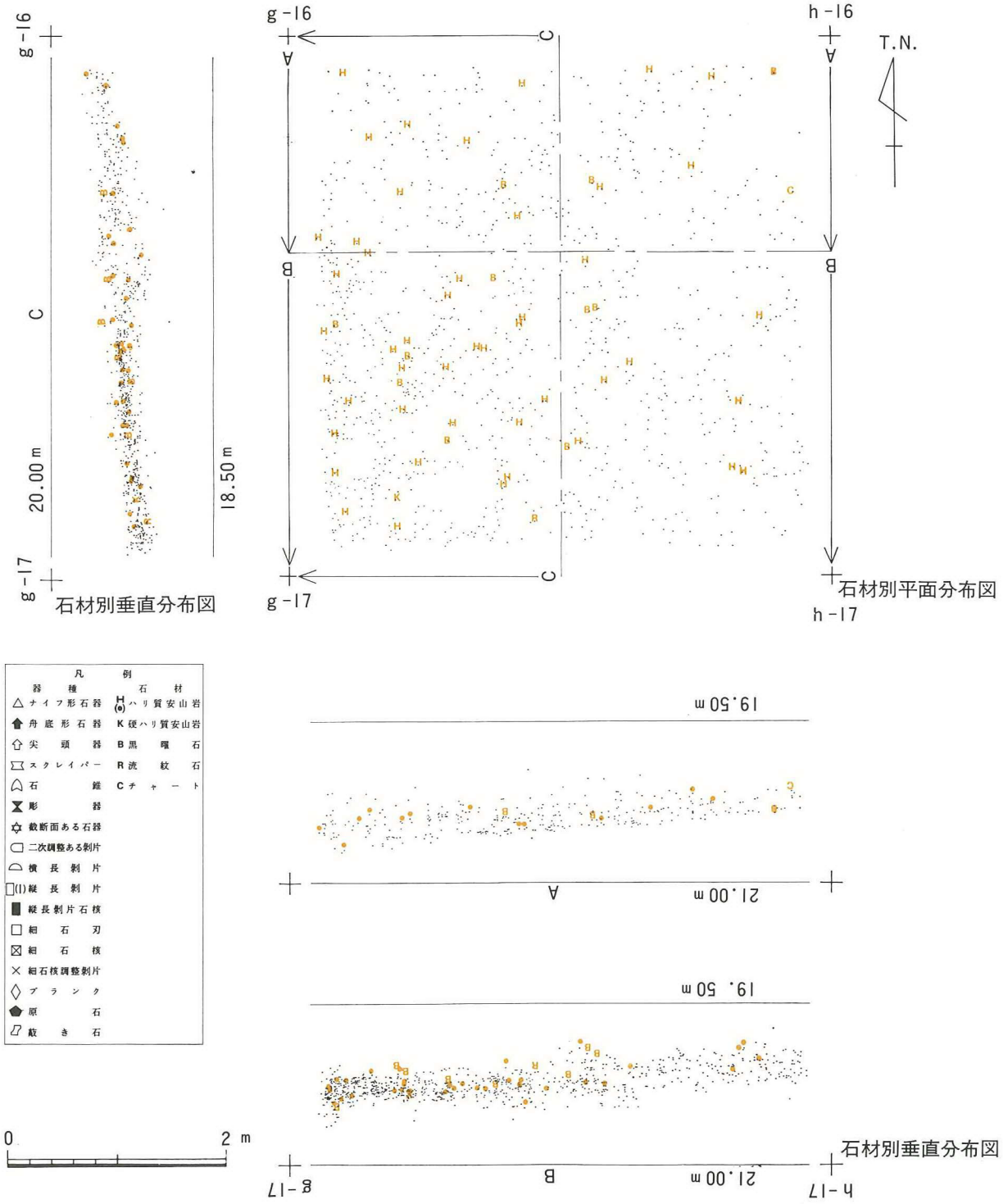


器種別垂直分布図

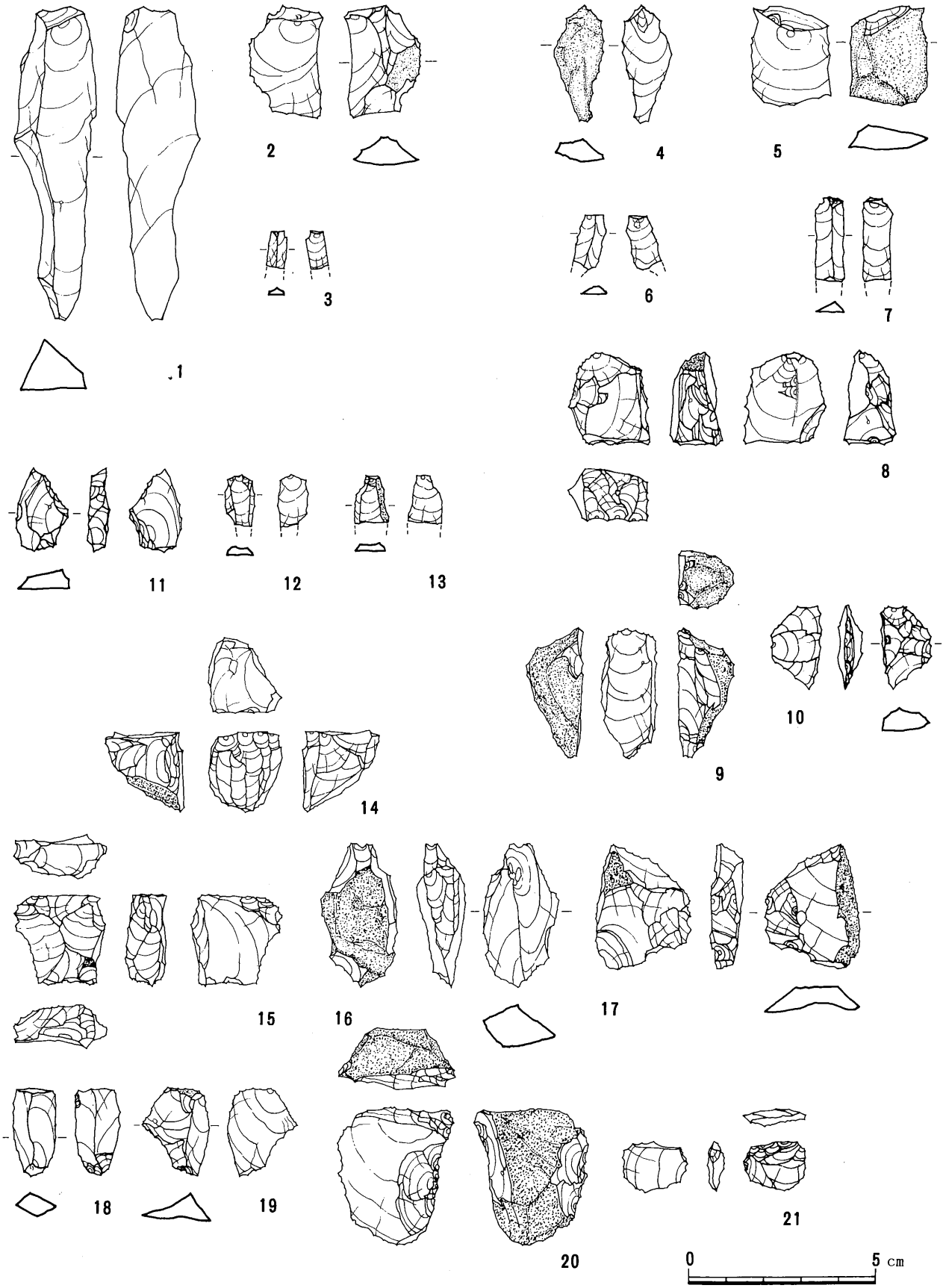
器種別平面分布図

器種別垂直分布図

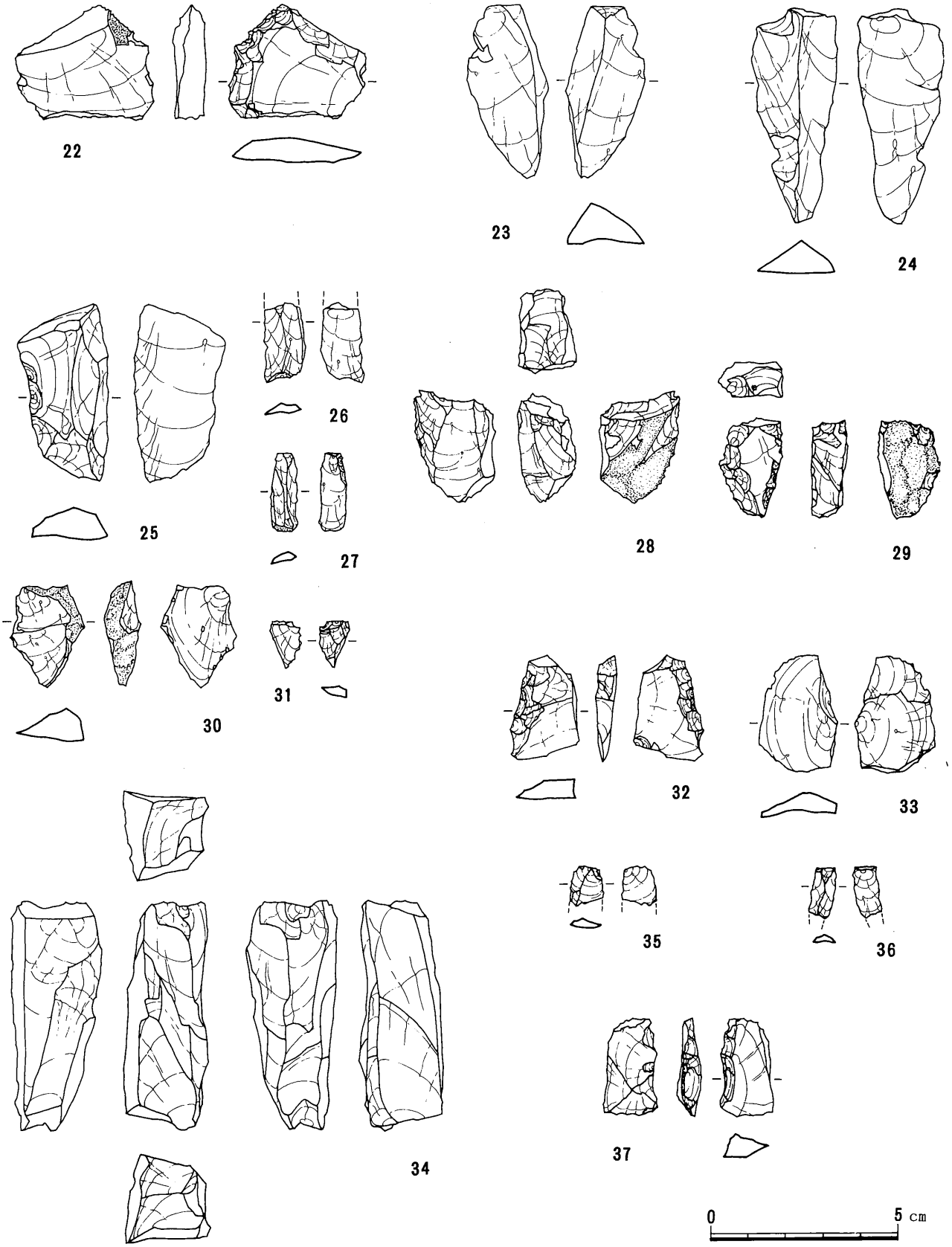
第30図 g－16 土層及び遺物出土状態図(1)



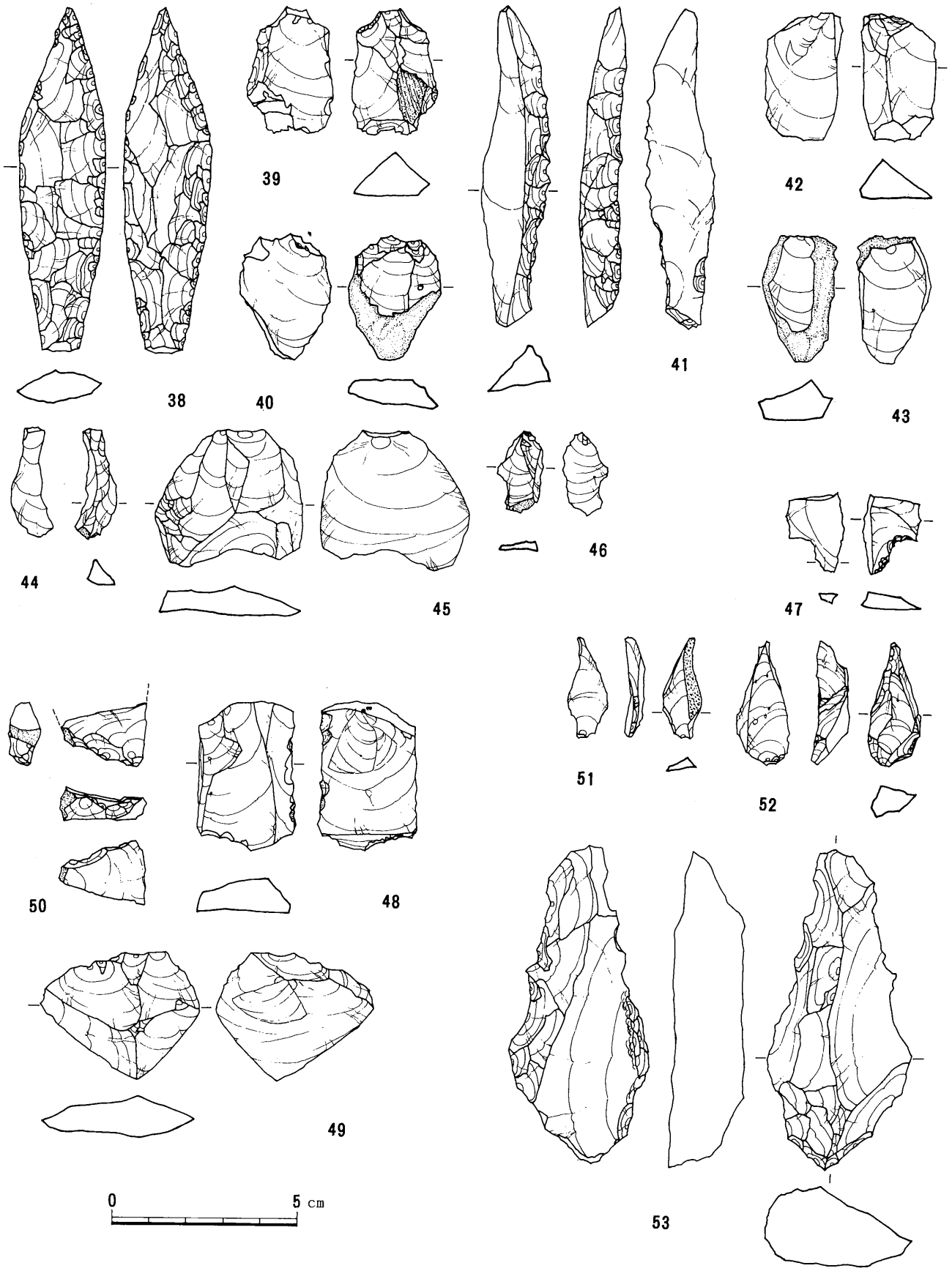
第31図　g－16 遺物出土状態図(2)



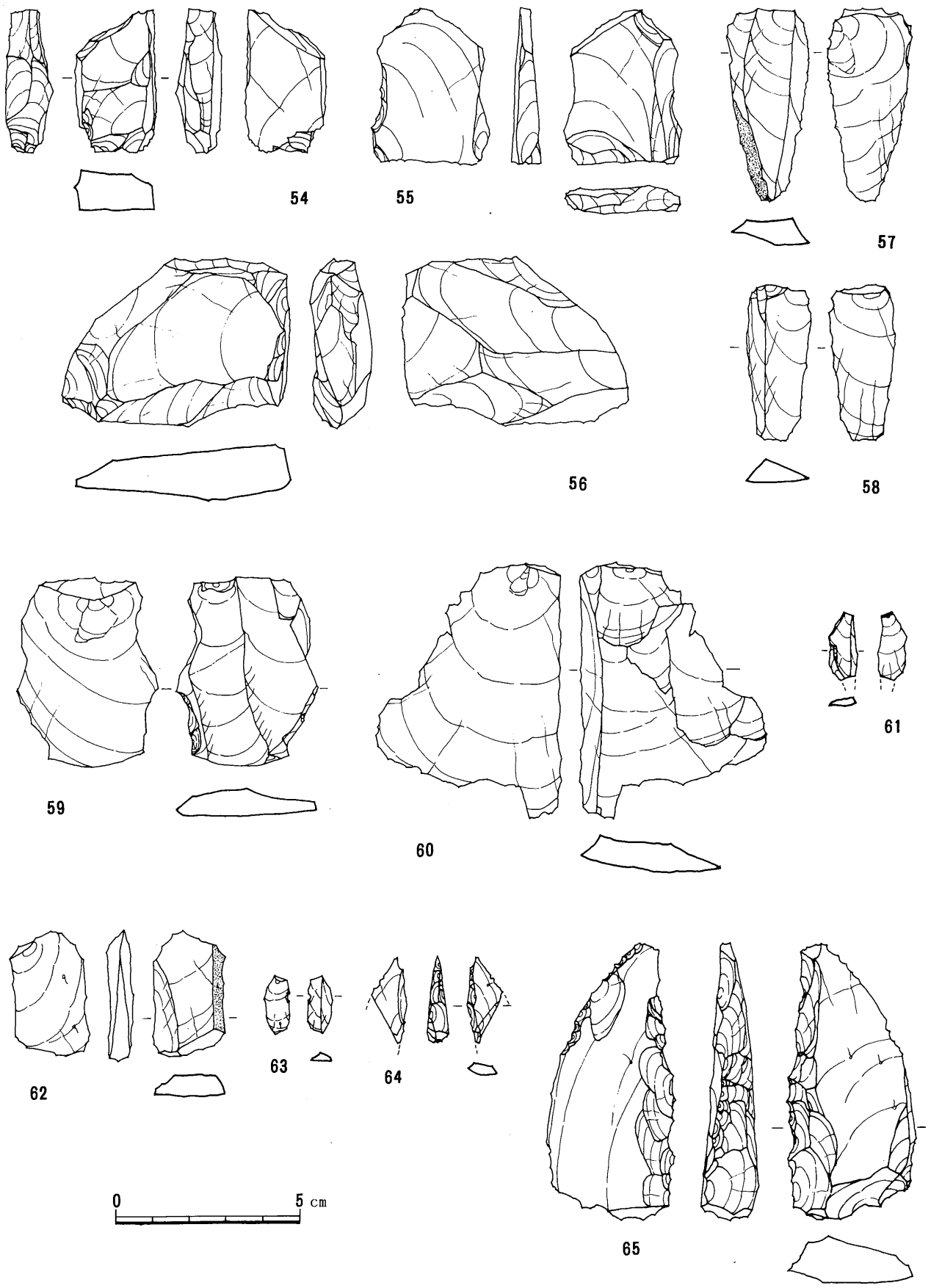
第32図　d 列 遺 物 実 測 図 (1)
1～3（d 9上層），4～10（d10上層），11～17（d11上層），18～21（d11下層）



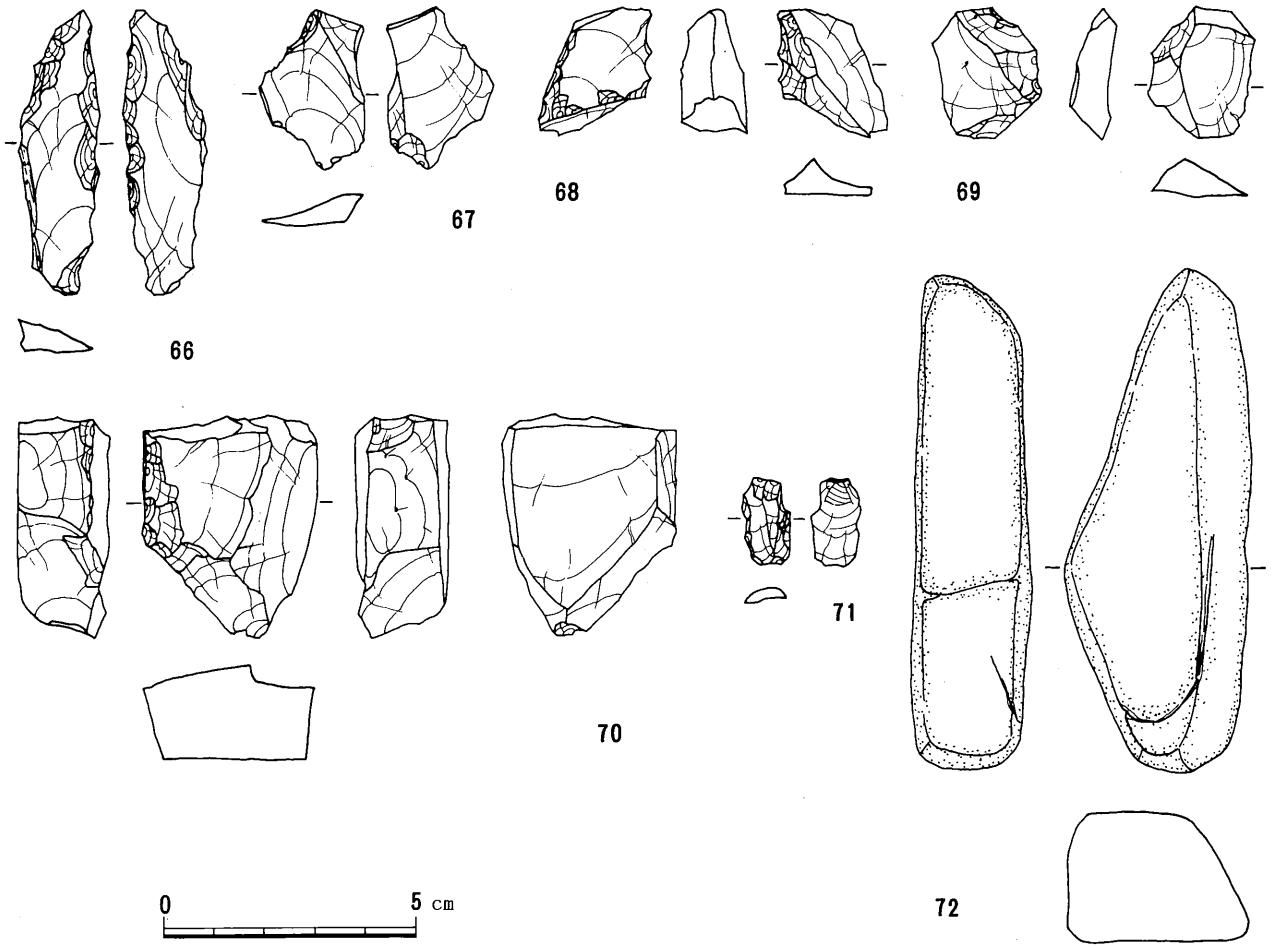
第33図　d 列 遺 物 実 測 図 (2)
22～31（d12上層），32～36（d13上層），37（d13下層）



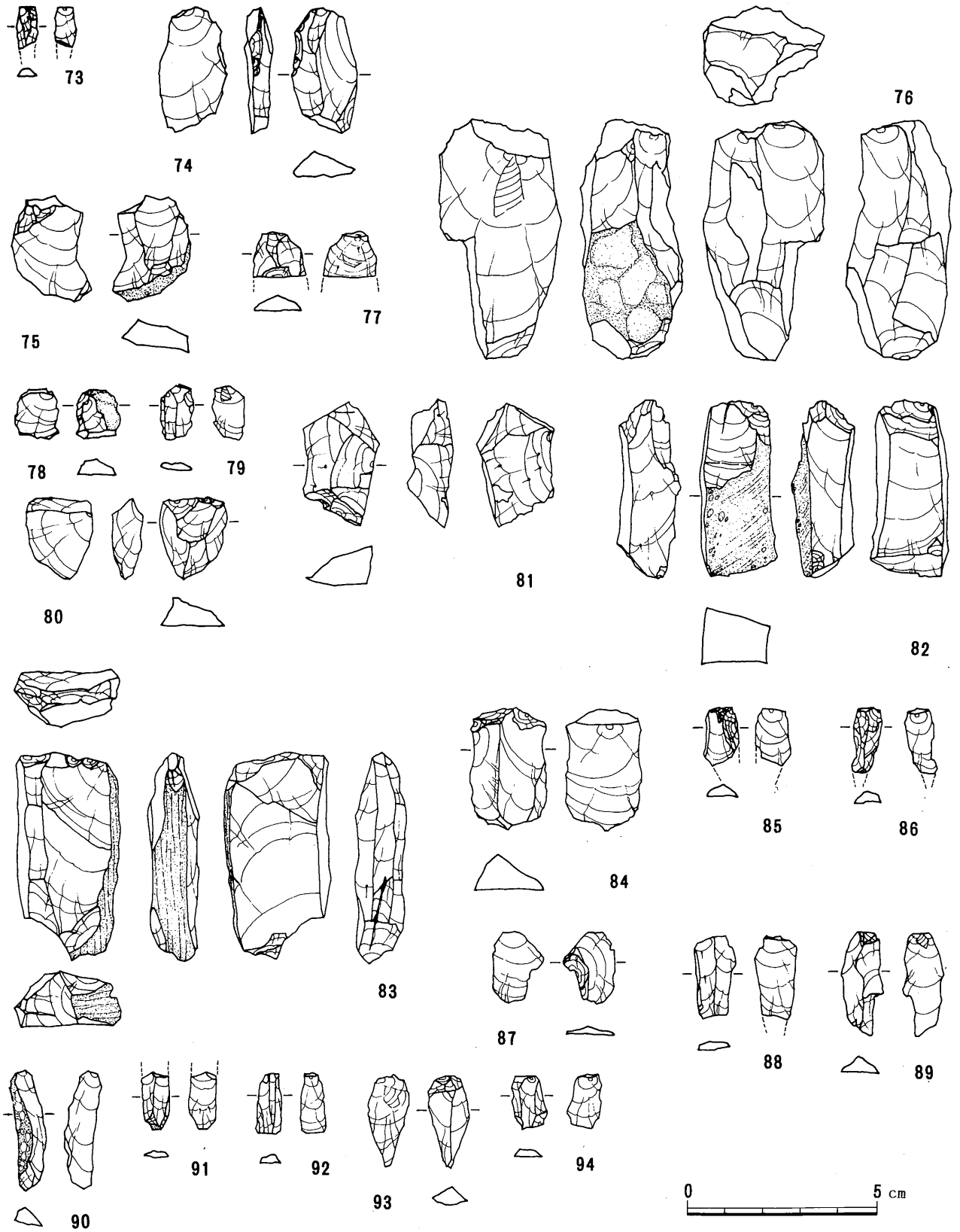
第34図　d 列 遺 物 実 測 図 (3)
38～40 (d14上層), 41～46 (d14下層), 47～49 (d15上層), 50～53 (d15下層)



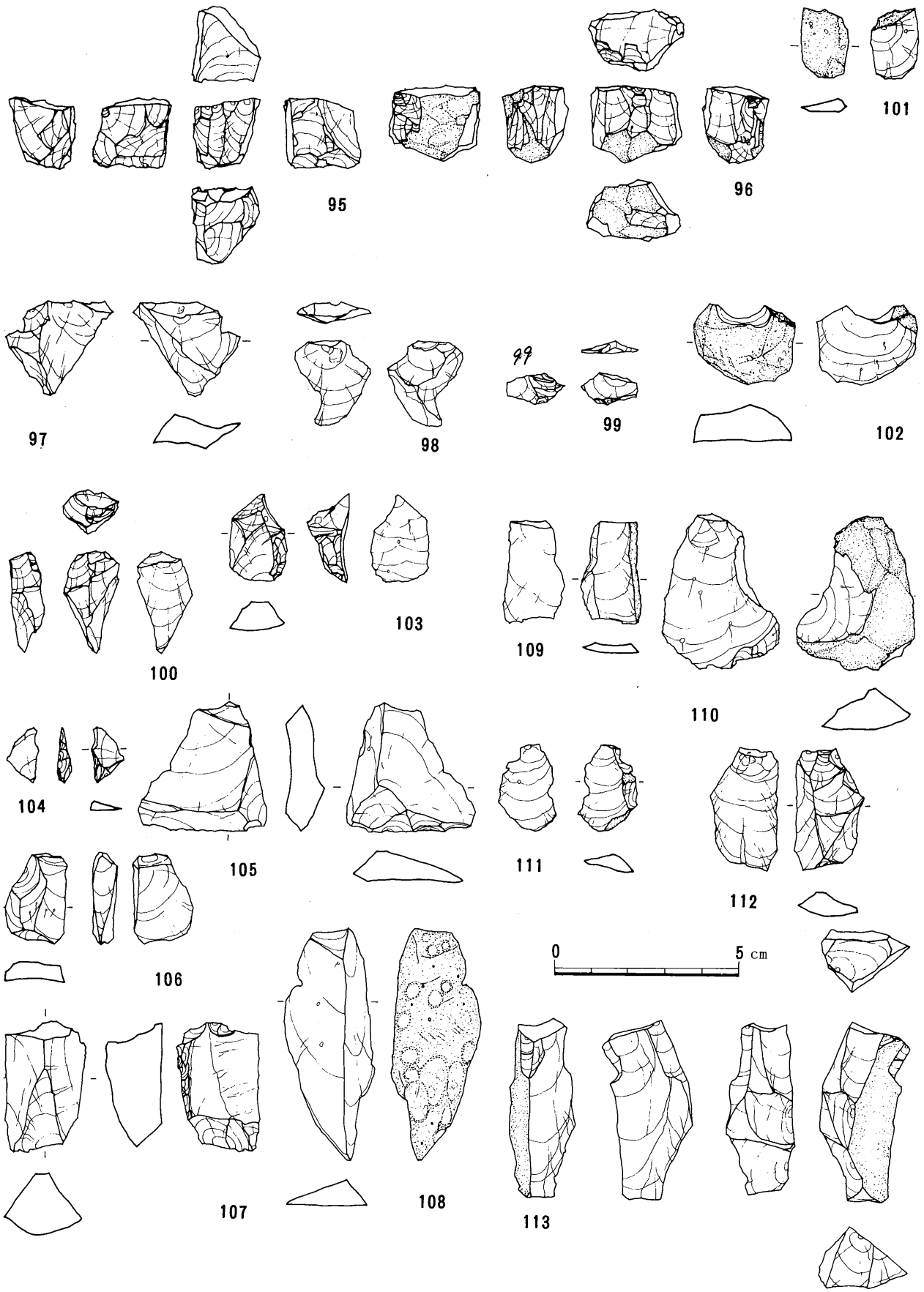
第35図　ｄ列遺物実測図(4)
54～61(ｄ15下層)，62・63(ｄ16上層)，64・65(ｄ16下層)



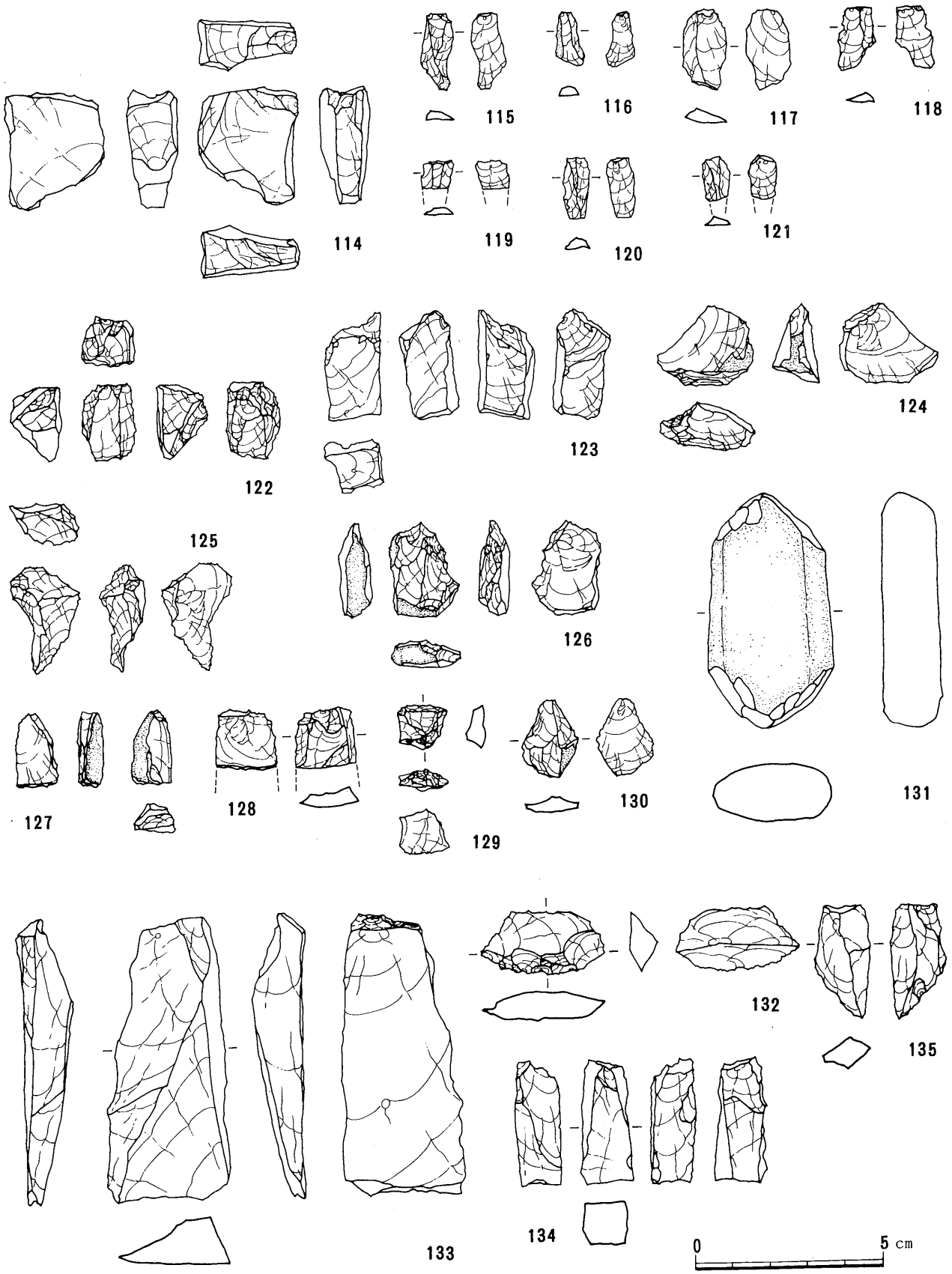
第36図　d 列 遺 物 実 測 図 (5)
66～72（d16下層）



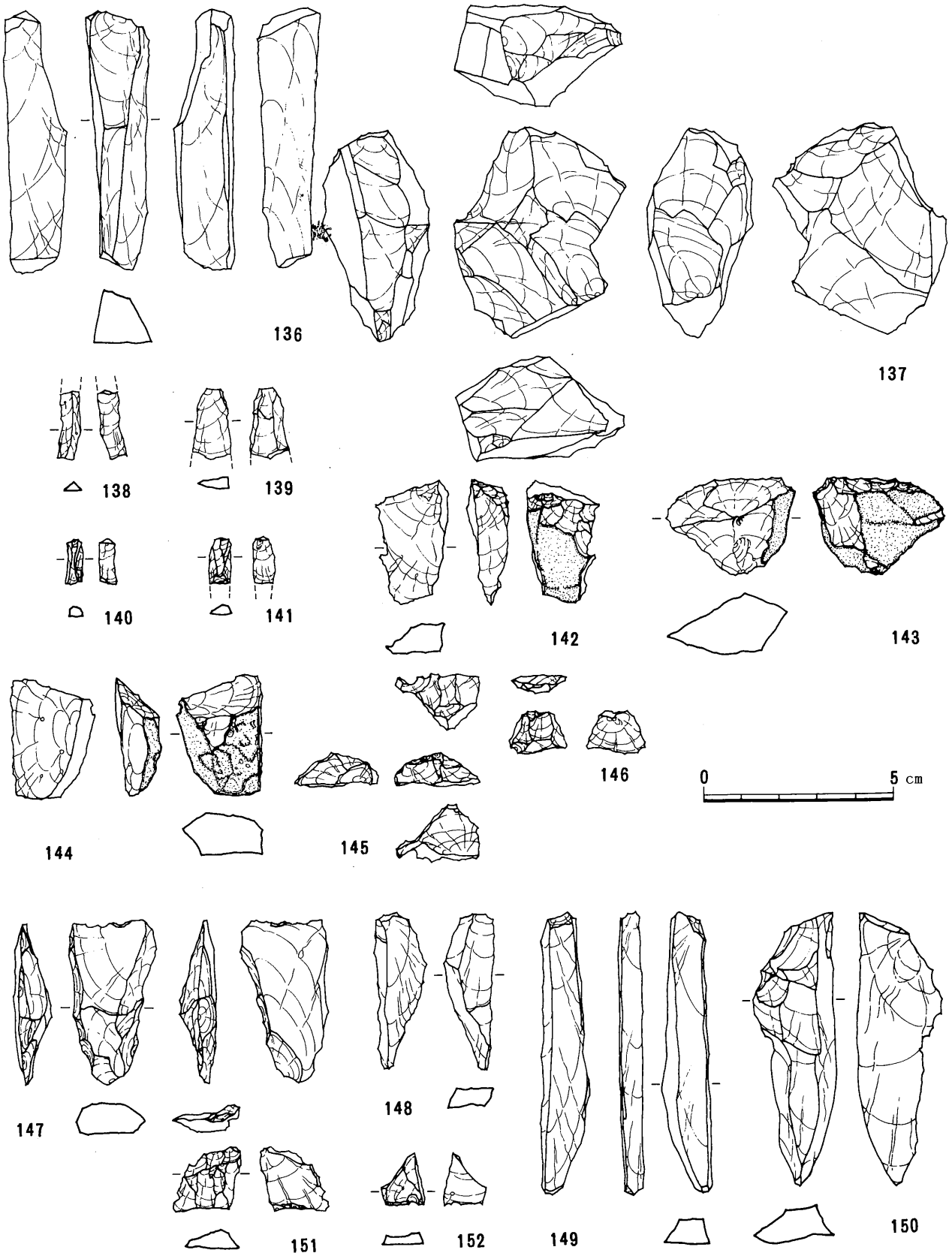
第37図　ｅ列遺物実測図(1)
73（ｅ８上層），74～80（ｅ９上層），81～94（ｅ９下層）



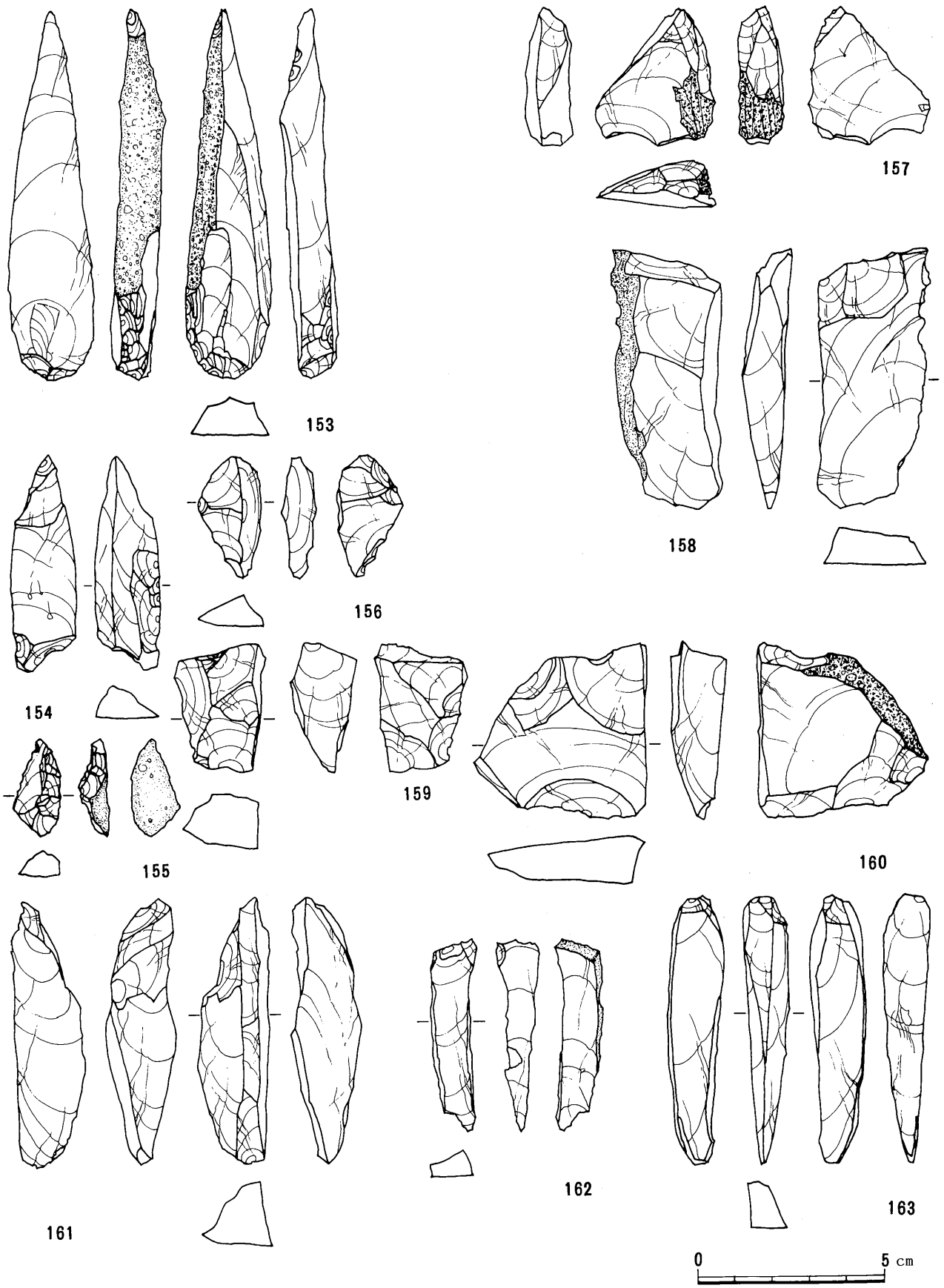
第38図　e 列 遺 物 実 測 図 (2)
95～103（e 9 下層），104～113（e10上層）



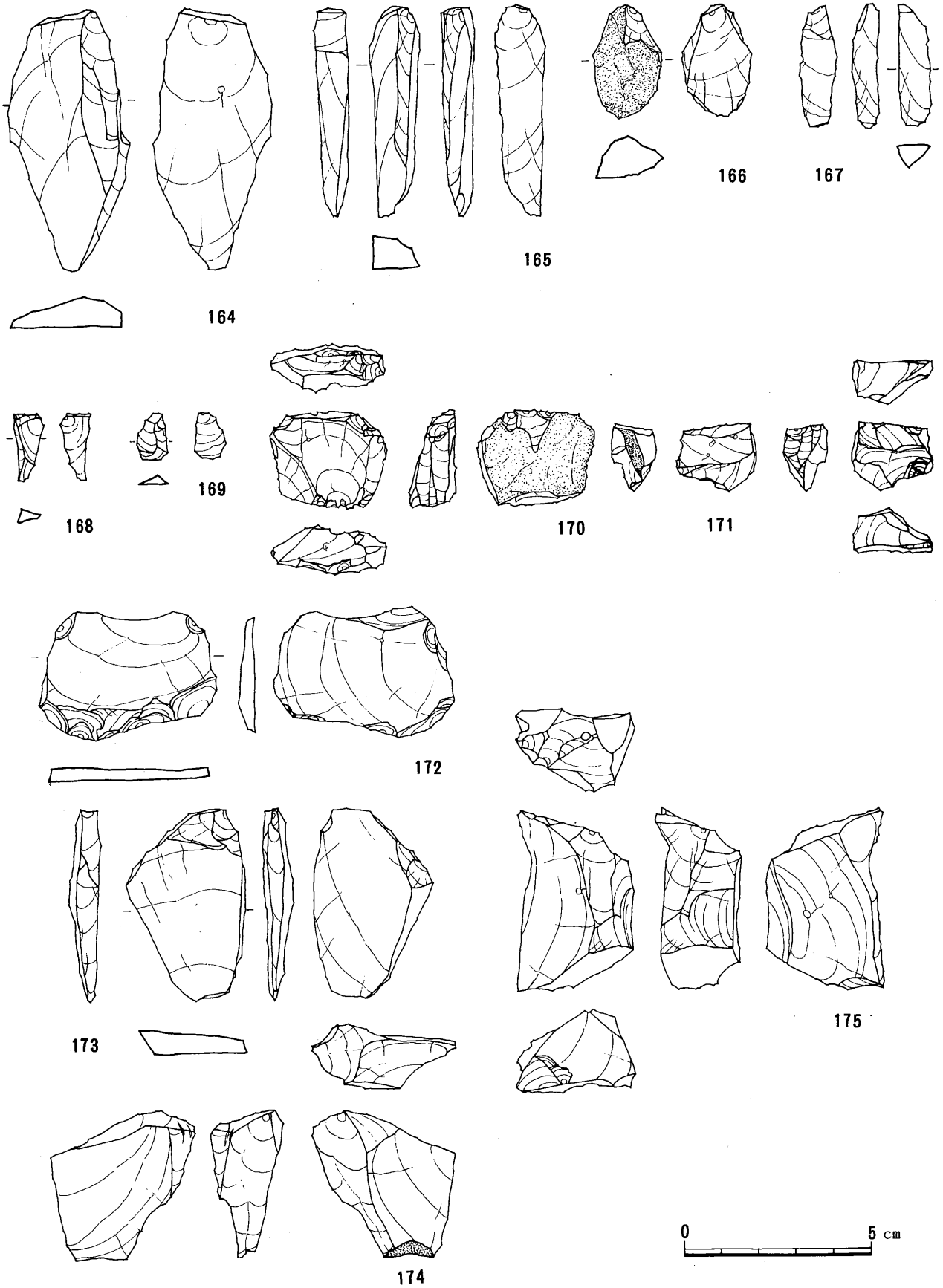
第39図　e 列 遺 物 実 測 図 (3)
114～131（e10上層），132～134（e11上層）



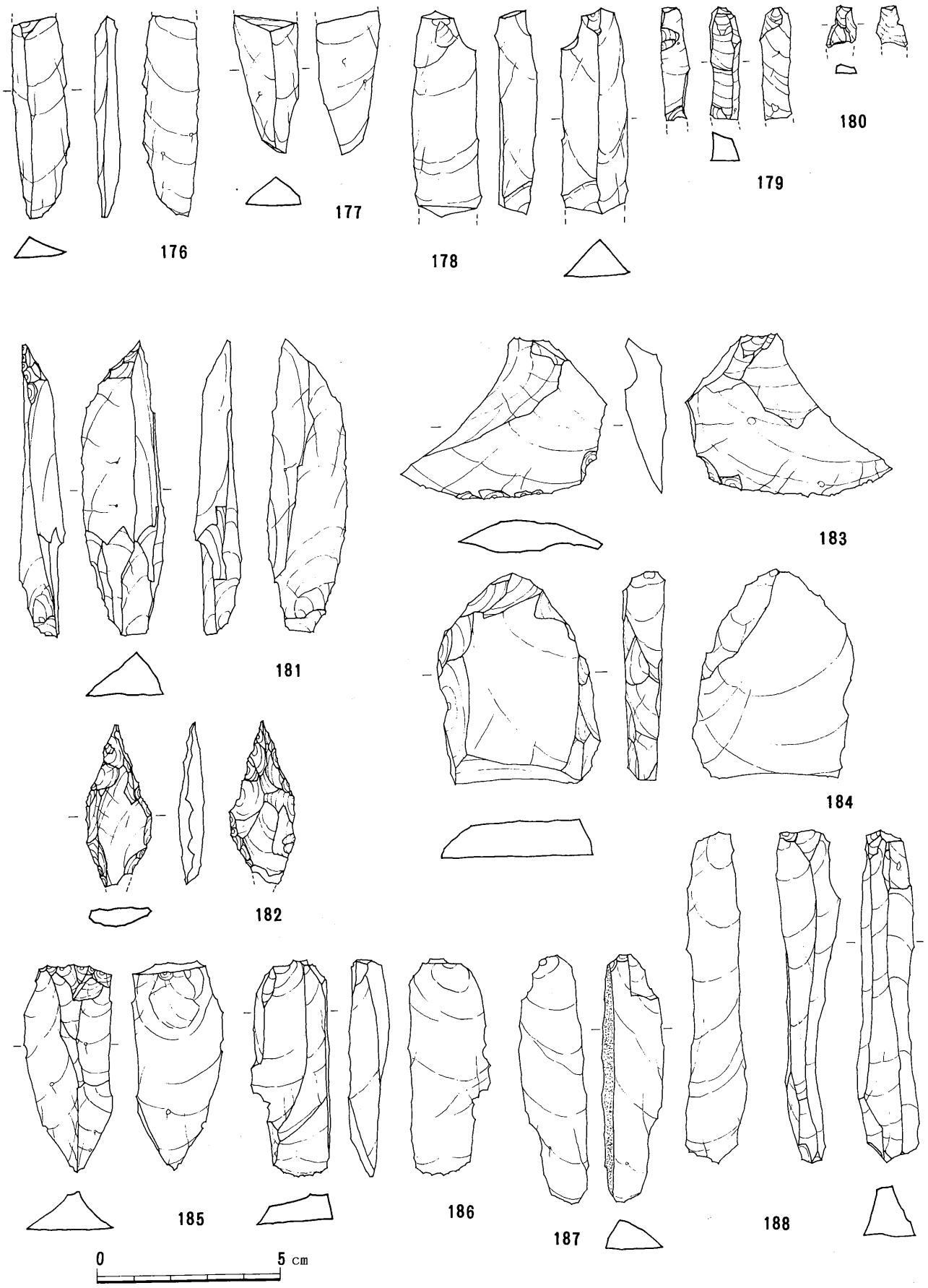
第40図　e 列 遺 物 実 測 図 (4)
136～146（e11上層），147～152（e11下層）



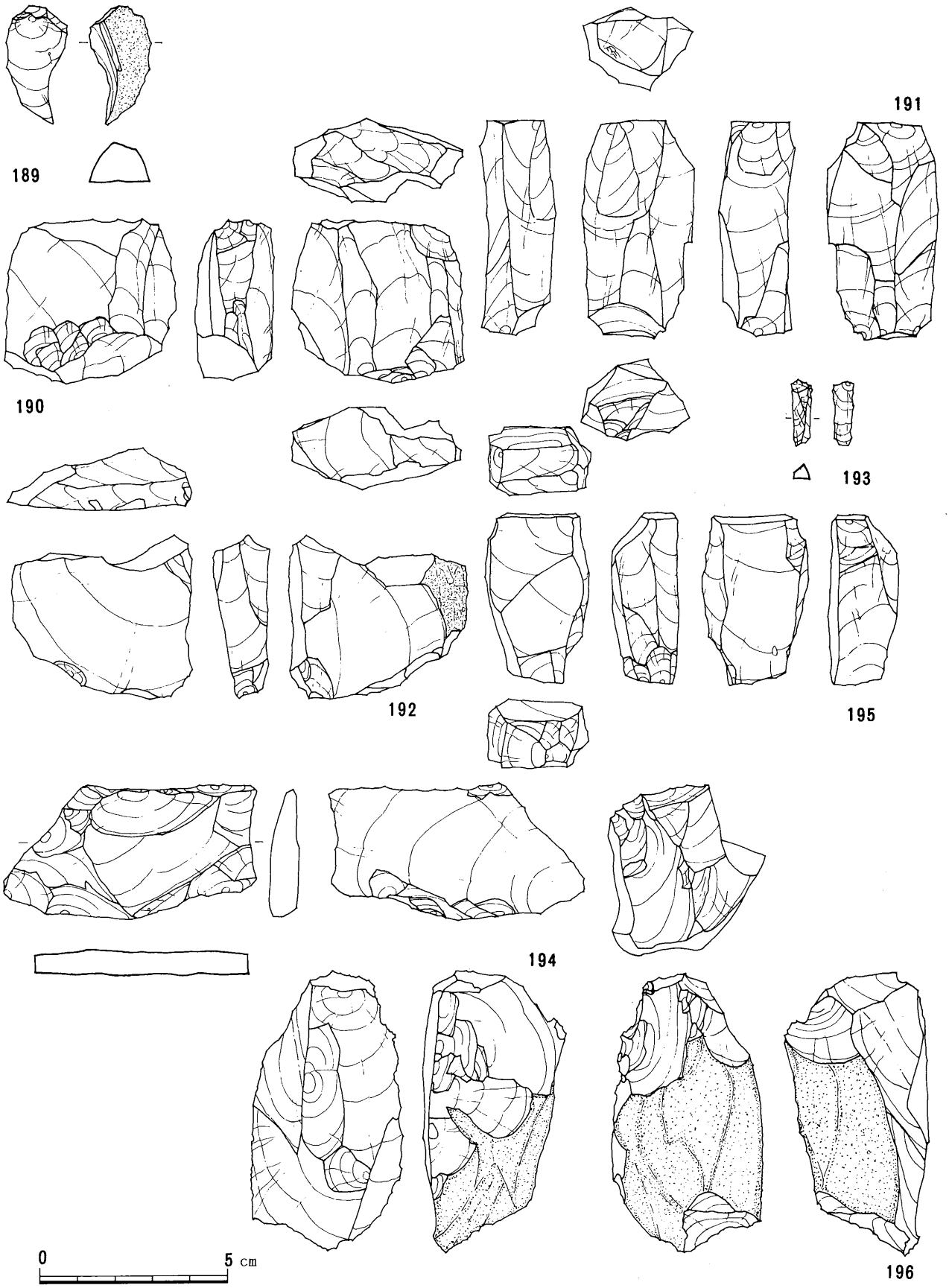
第41図　ｅ列遺物実測図(5)
153～163（ｅ12上層）



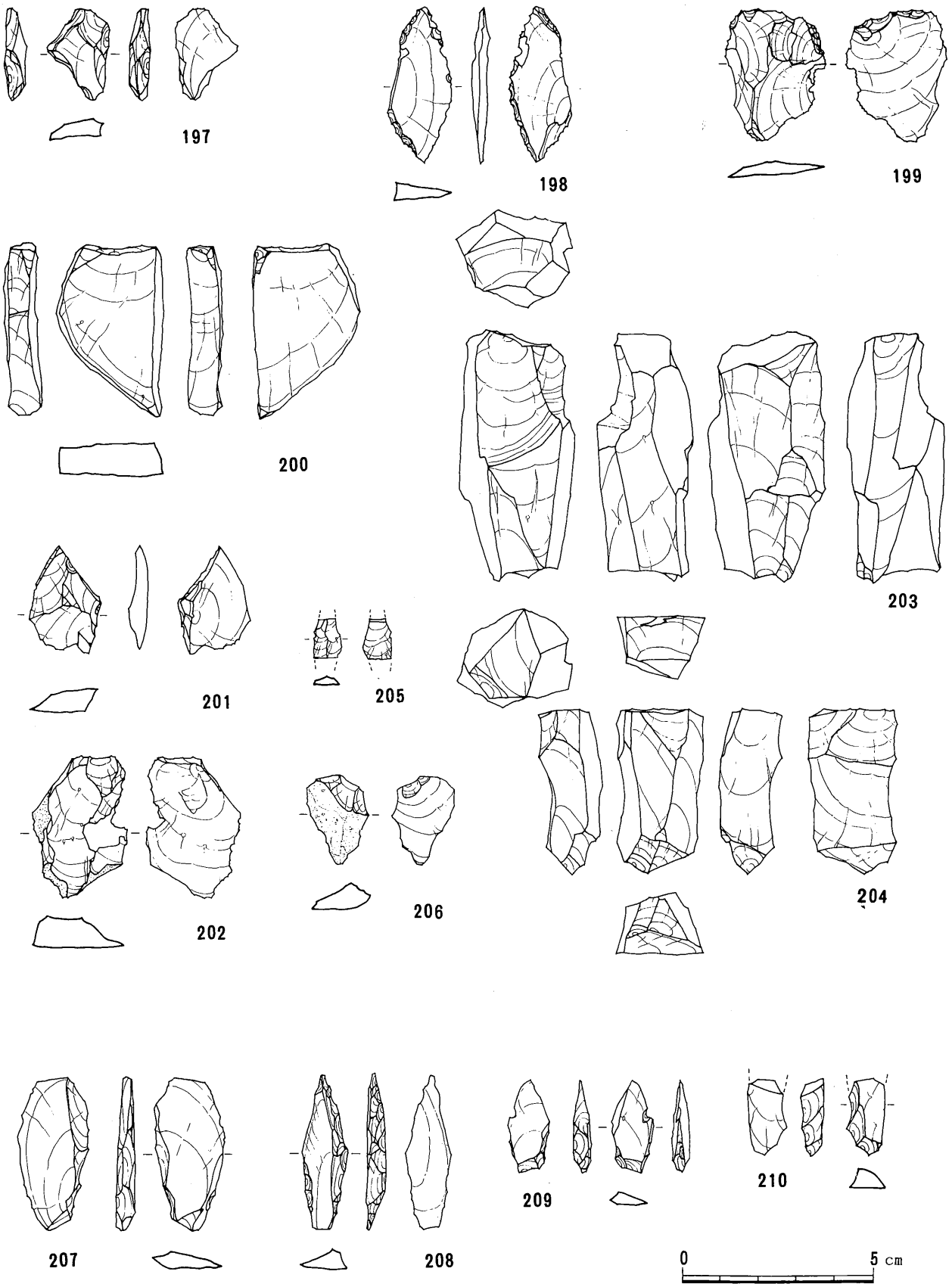
第42図　e 列 遺 物 実 測 図 (6)
164～171（e12上層），172～175（e12下層）



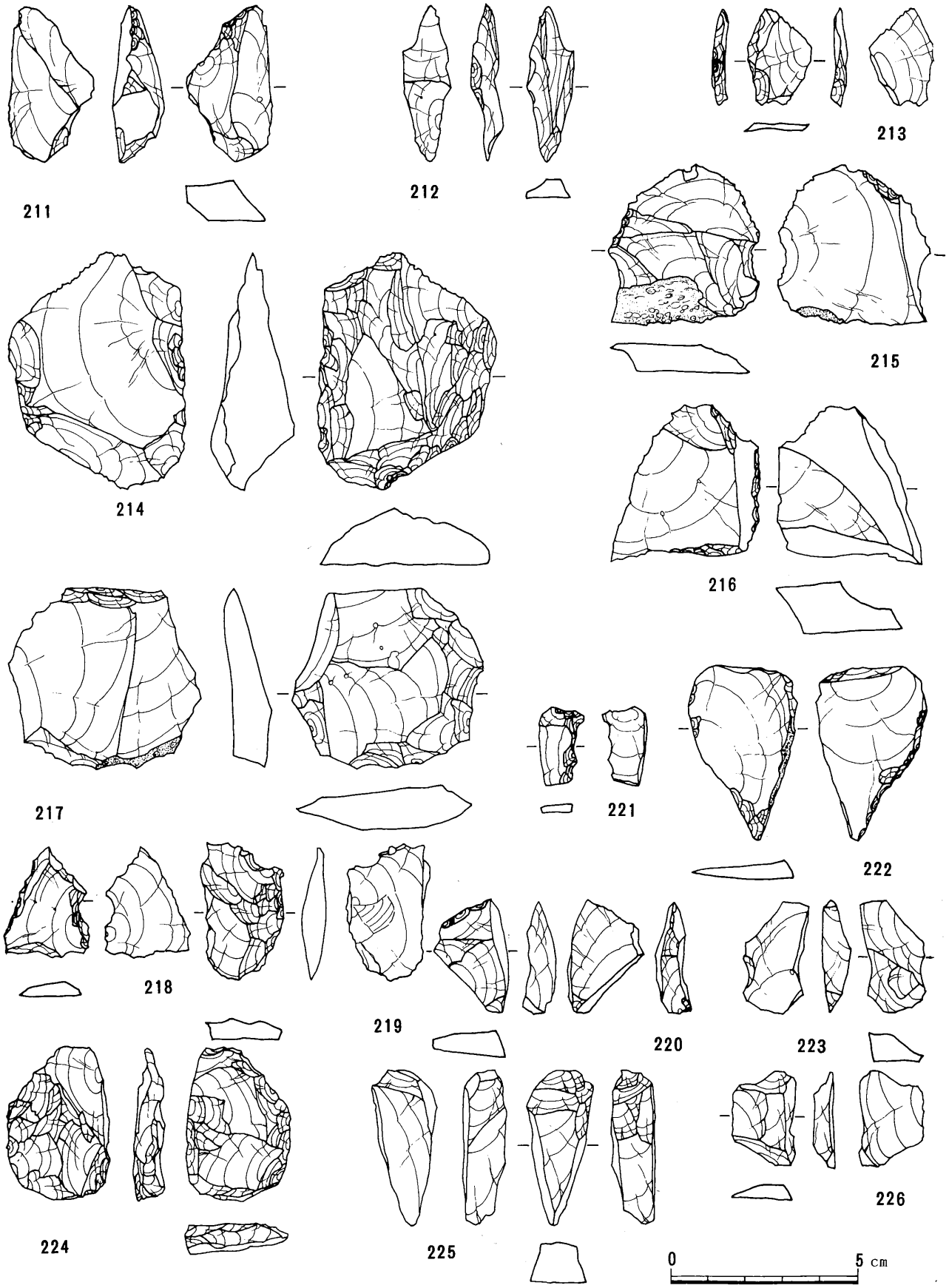
第43図　e 列 遺 物 実 測 図 (7)
176～180（e12下層），181～188（e13上層）



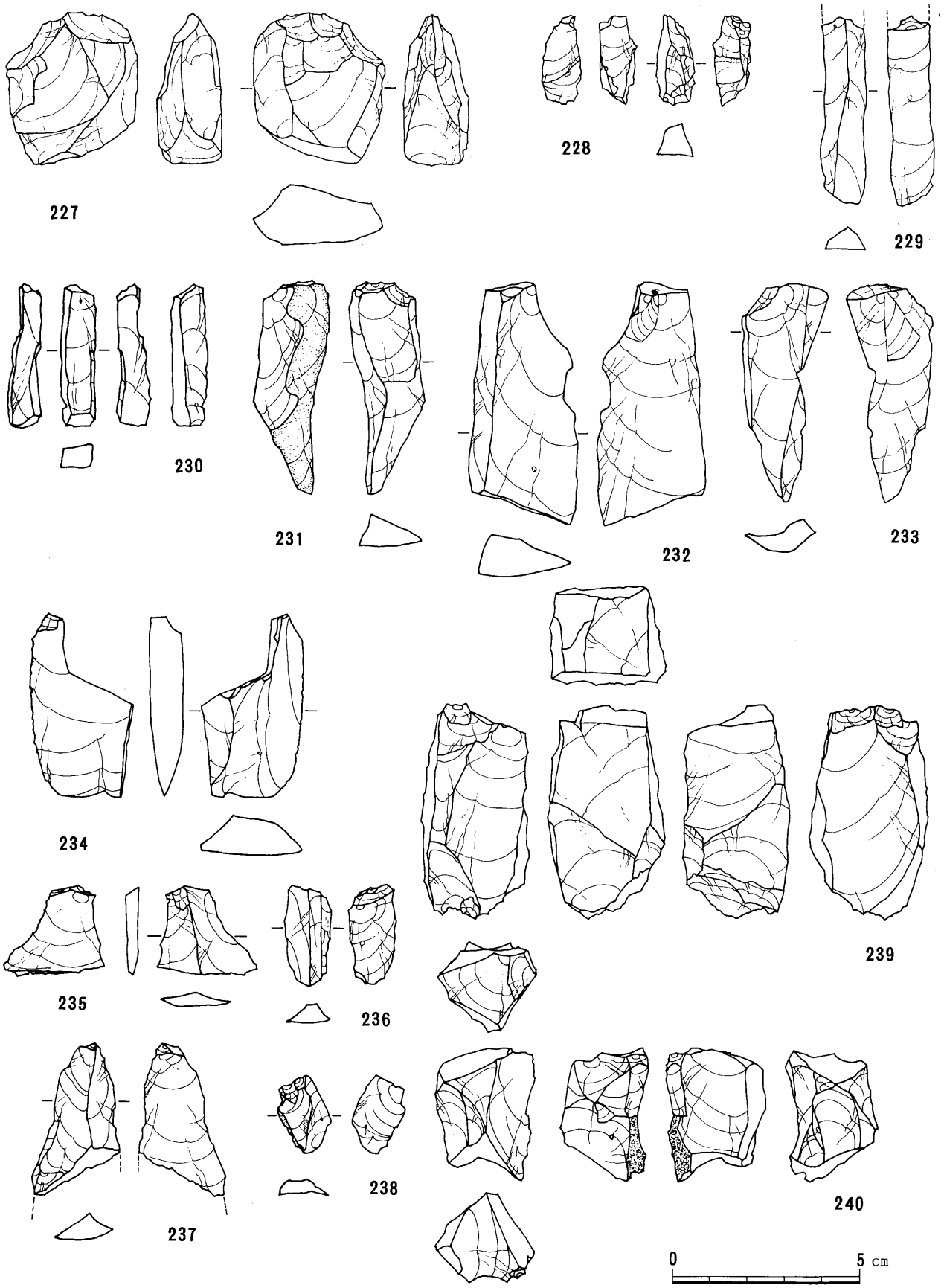
第44図　e 列 遺 物 実 測 図 (8)
189～196（e13上層），194～196（e13下層）



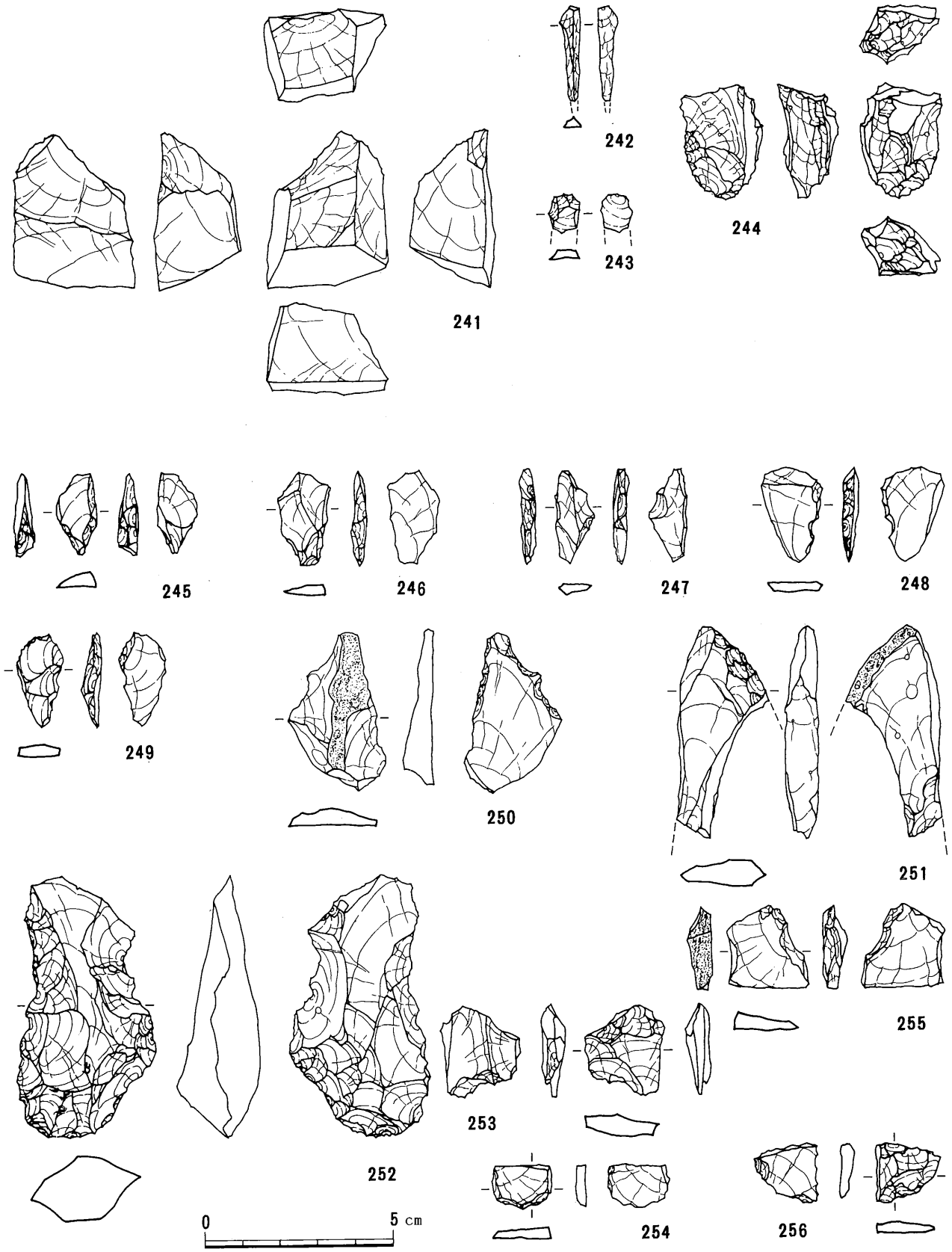
第45図　e 列 遺 物 実 測 図 (9)
197～206（e14上層），207～210（e14下層）



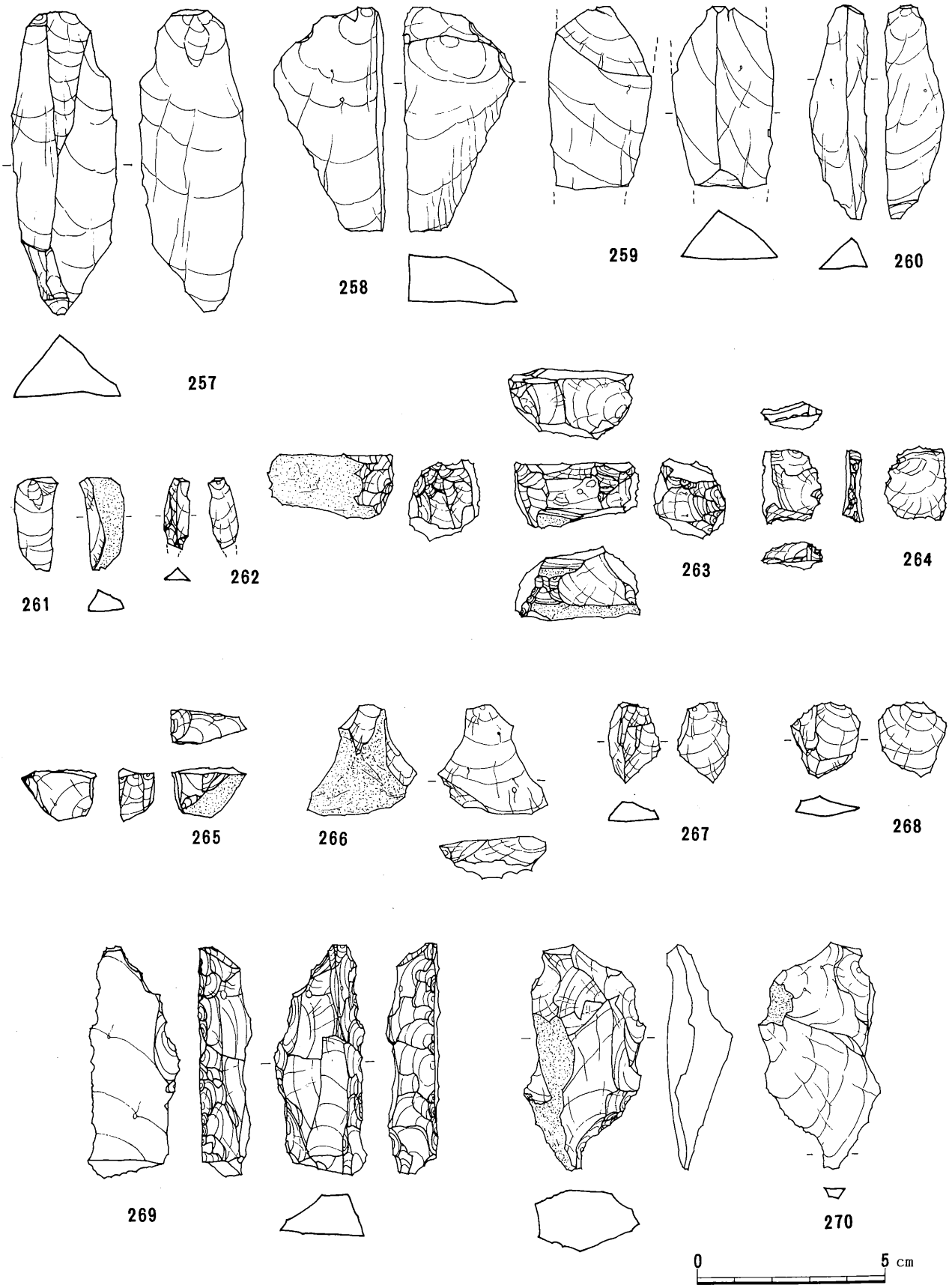
第46図　e 列 遺 物 実 測 図 (10)
211 ～ 226 (e14下層)



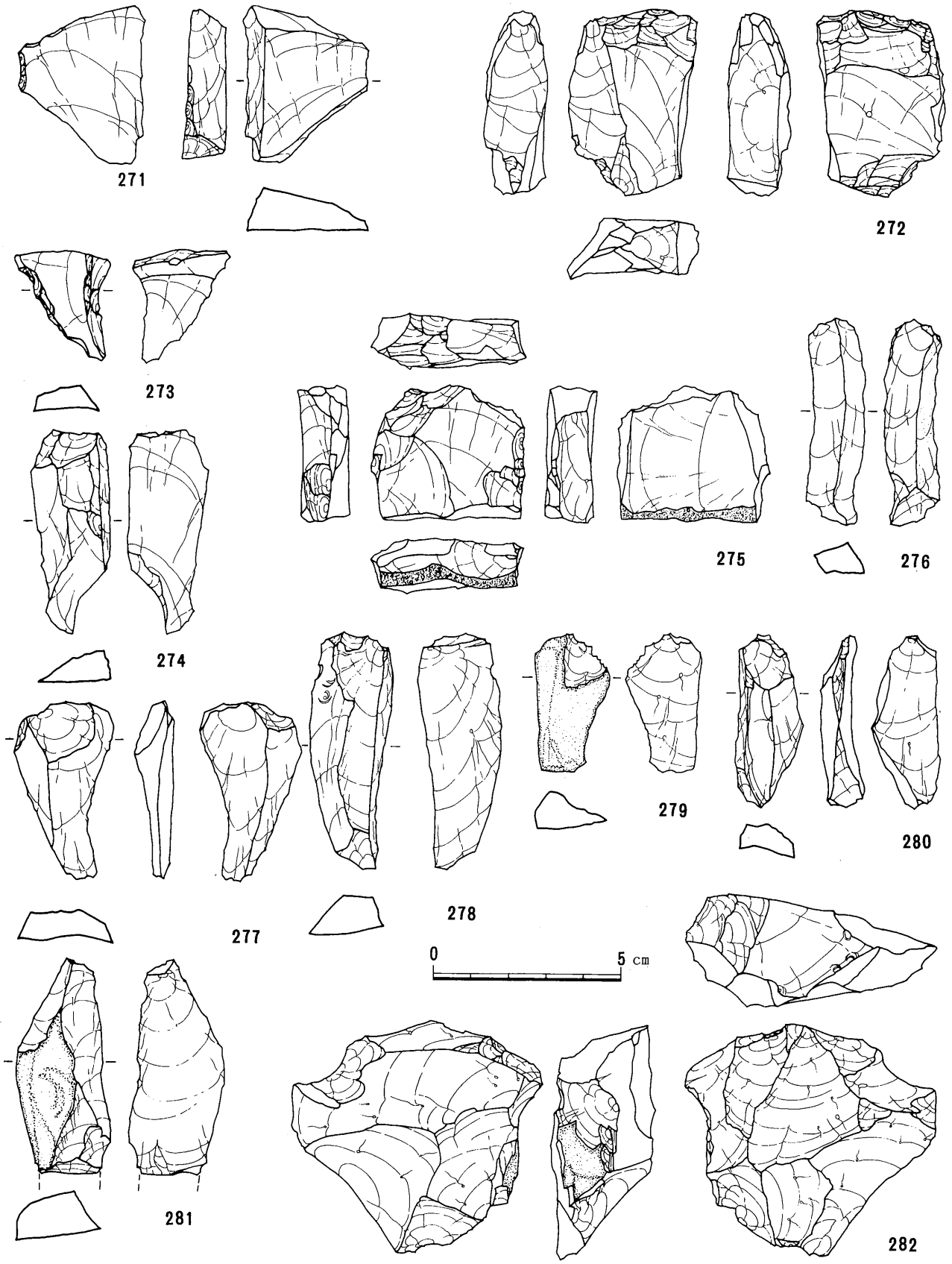
第47図　e 列 遺 物 実 測 図 (11)
227 ～ 240 (e14下層)



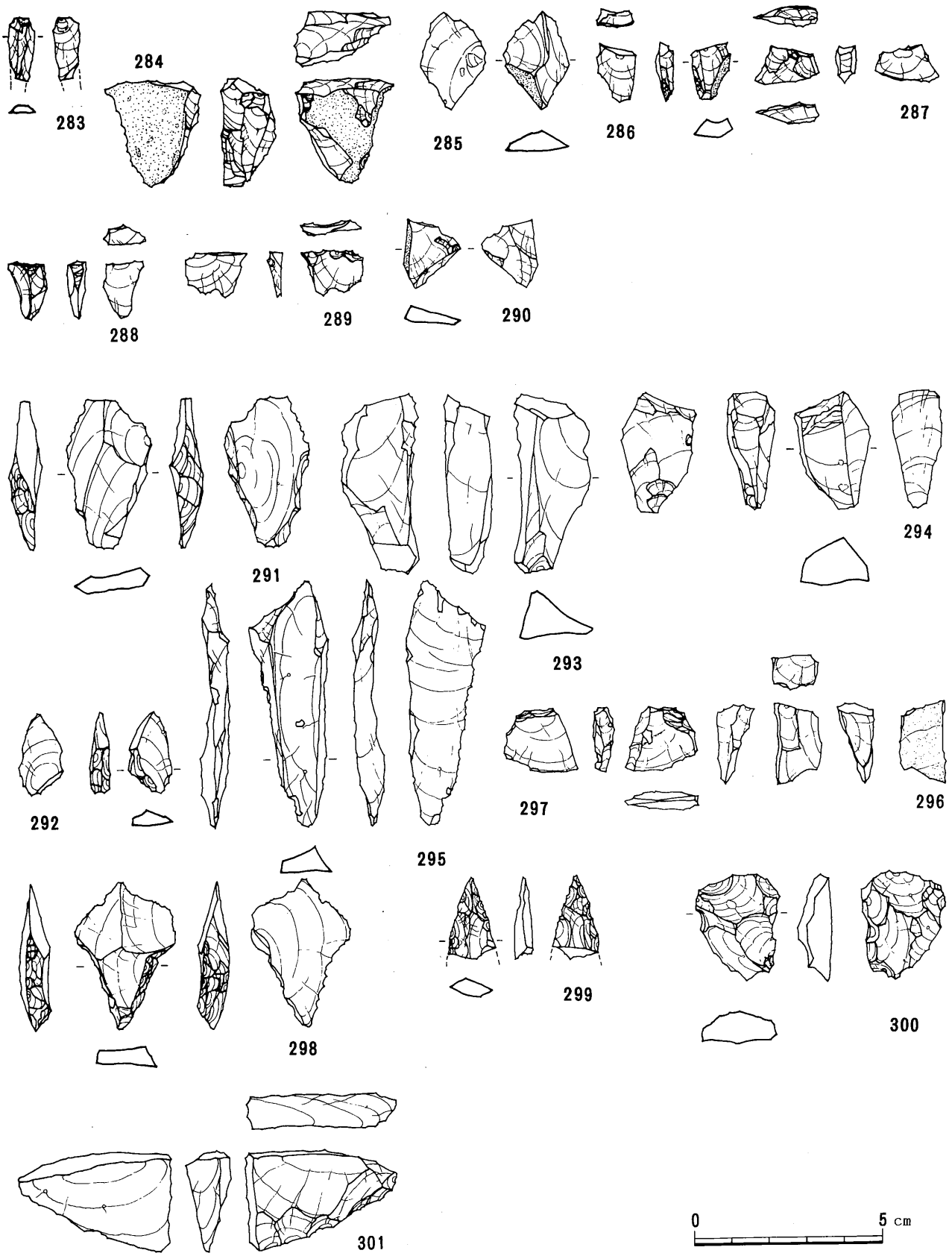
第48図　e 列 遺 物 実 測 図 (12)
241 ～ 244 (e14下層)，245 ～ 256 (e15上層)



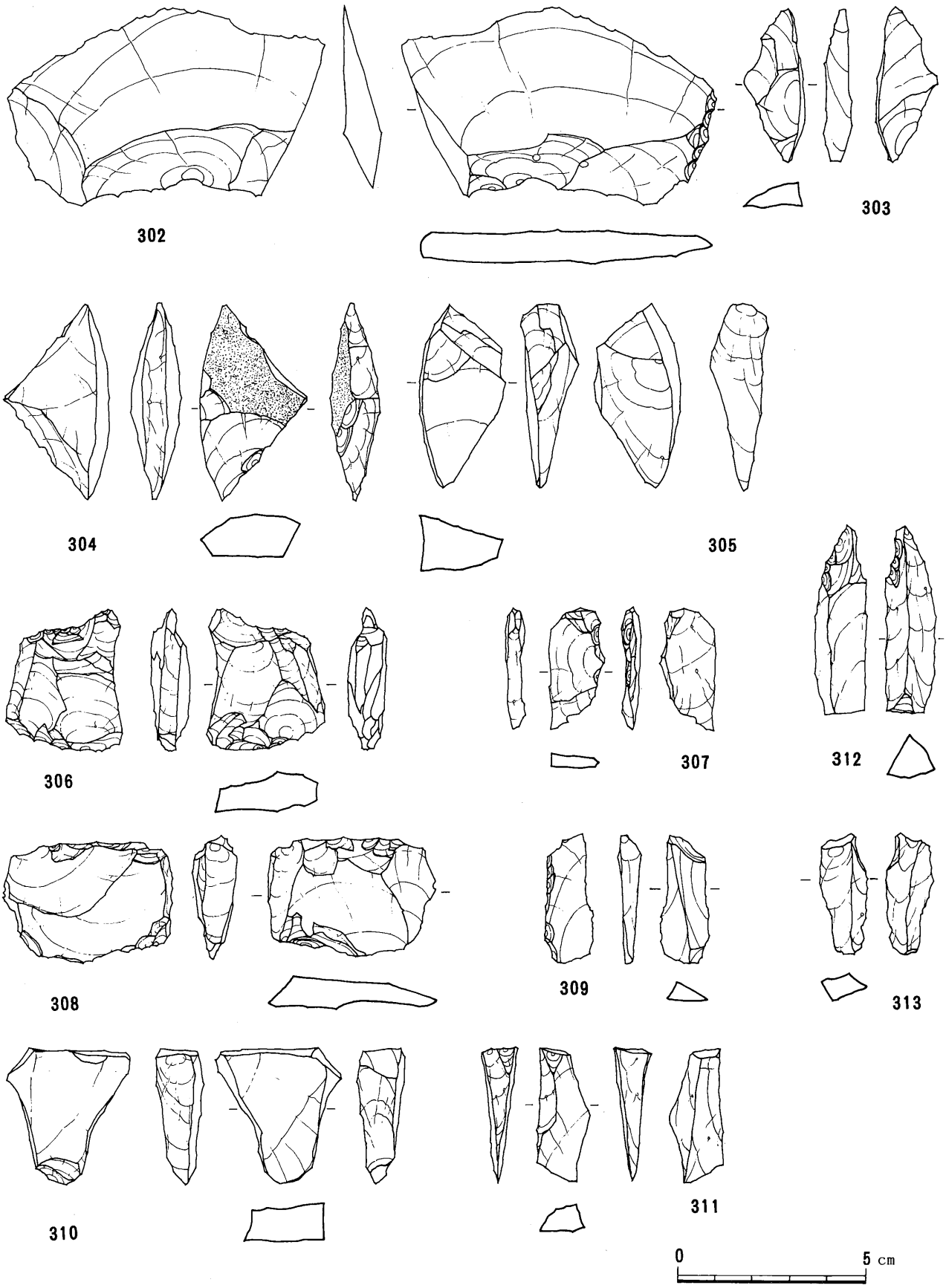
第49図　ｅ列遺物実測図(13)
257～268（ｅ15上層），269・270（ｅ15下層）



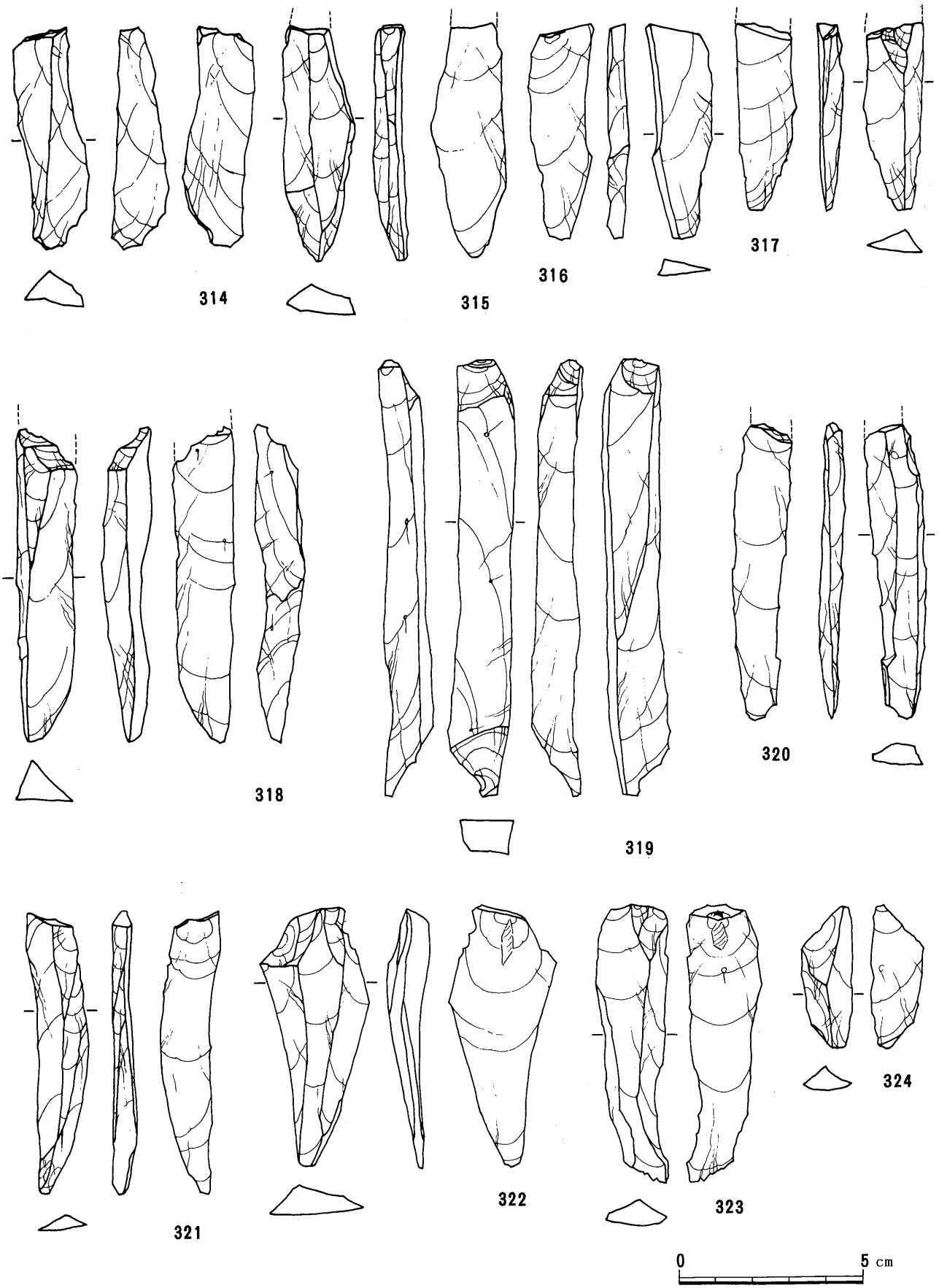
第50図　e 列 遺 物 実 測 図 (14)
271 ～ 282 (e15下層)



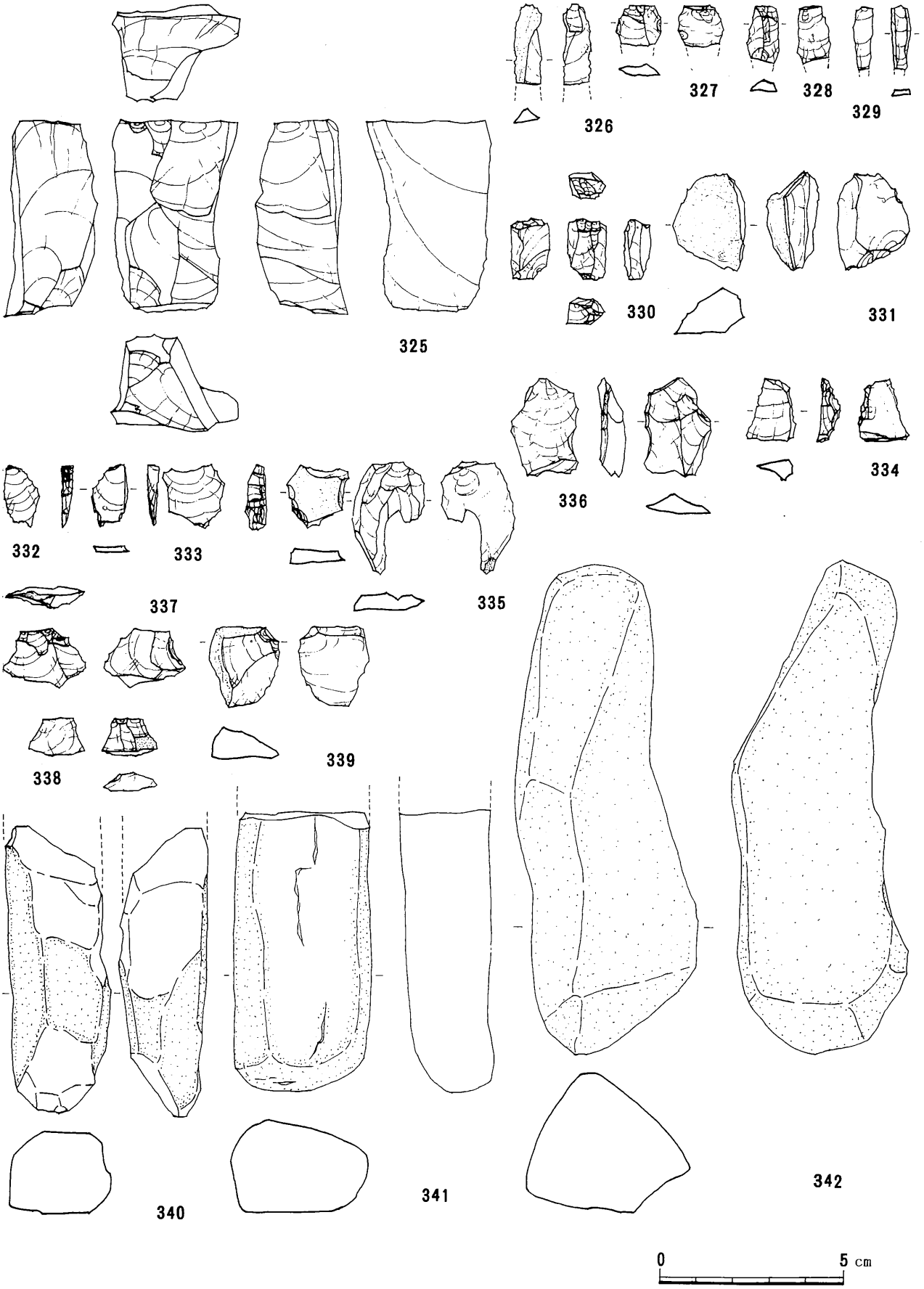
第51図　e 列 遺 物 実 測 図 (15)
283～290（e15下層），291～297（e16上層），298～301（e16下層）



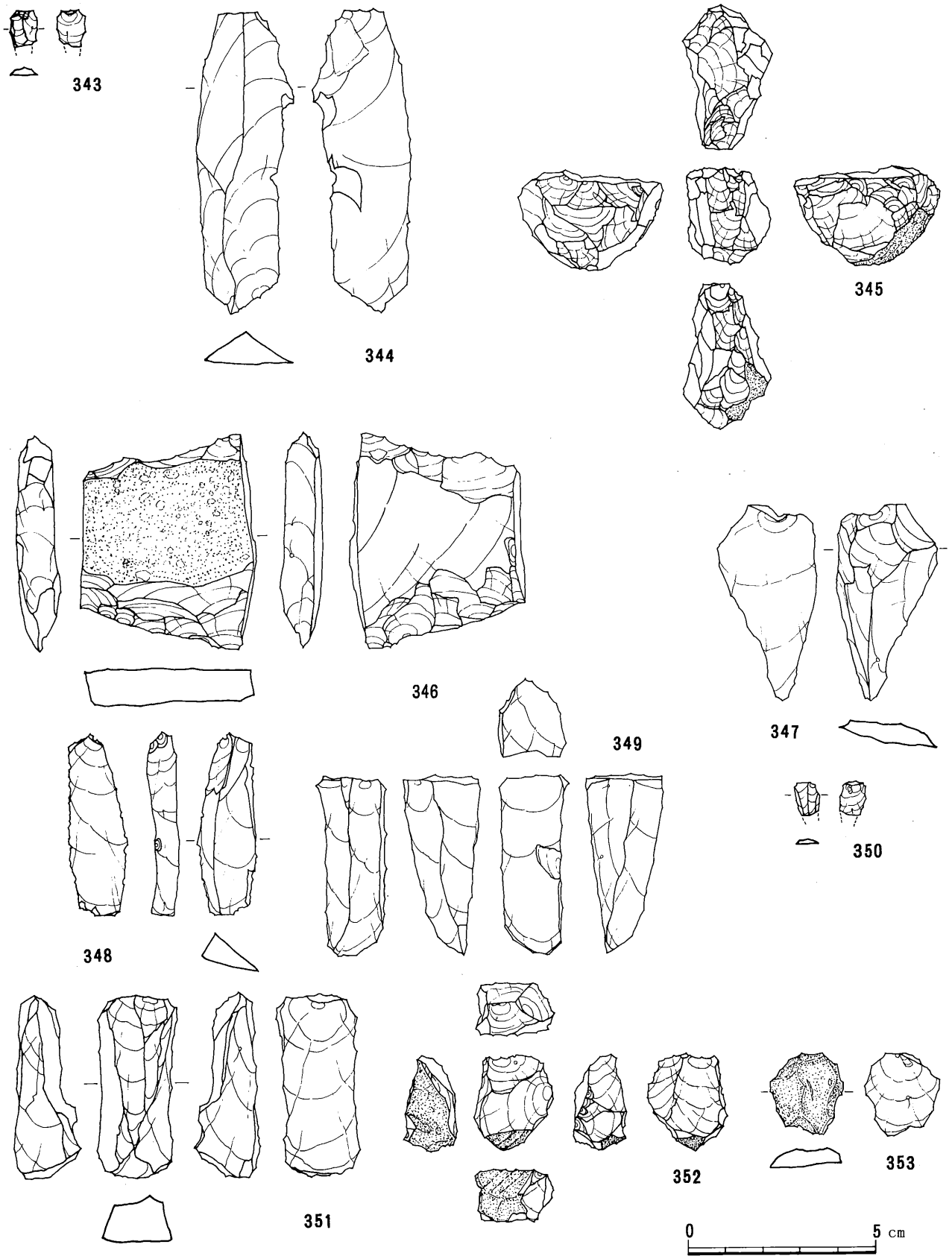
第52図　e 列 遺 物 実 測 図 (16)
302 ～ 313 (e16下層)



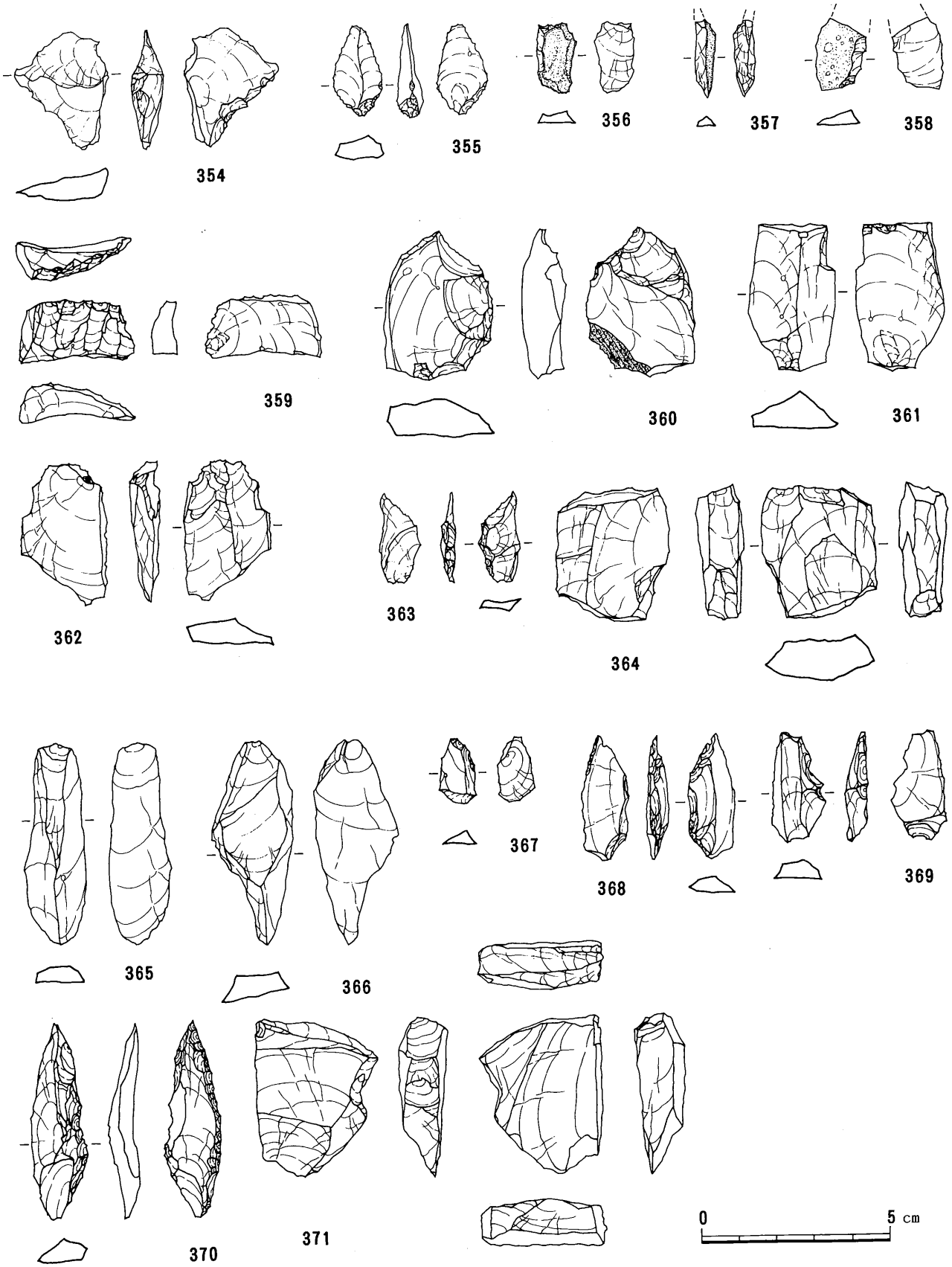
第53図　ｅ列遺物実測図(17)
314～324（ｅ16下層）



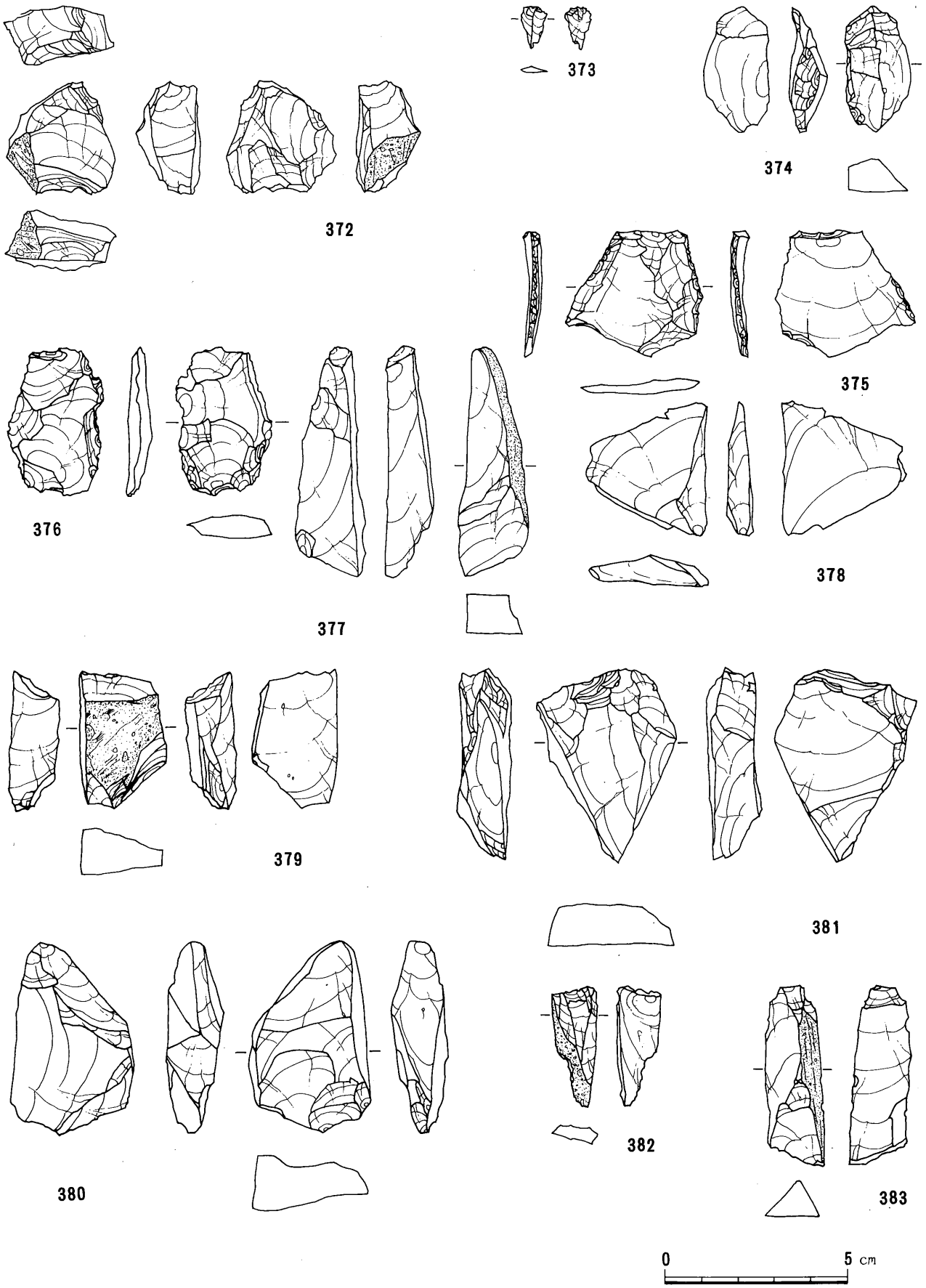
第54図　e 列 遺 物 実 測 図 (18)
325 ～ 342 (e16下層)



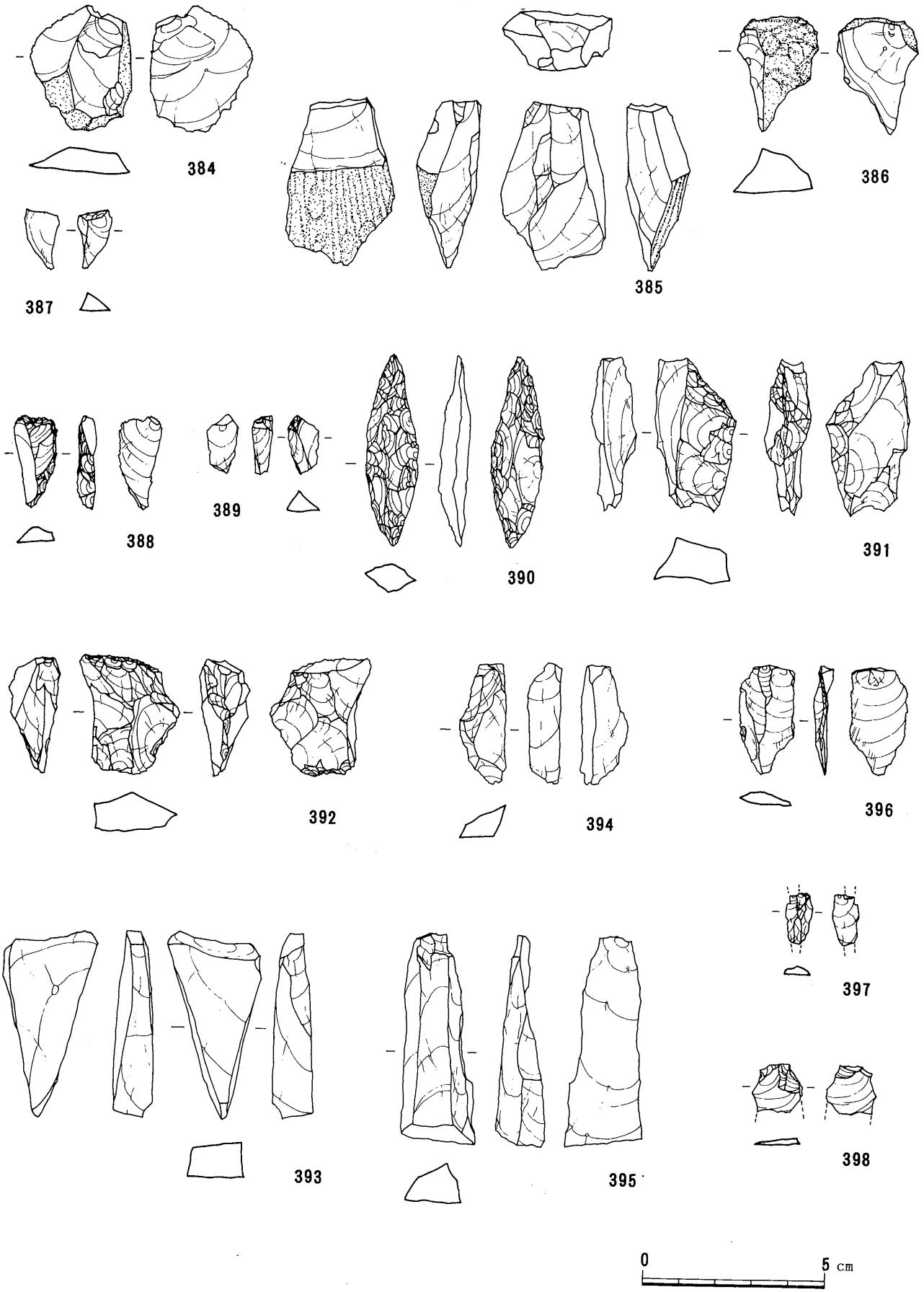
第55図　ｆ列遺物実測図(1)
343（ｆ９上層），344・345（ｆ９下層），346～350（ｆ10上層），351～353（ｆ10下層）



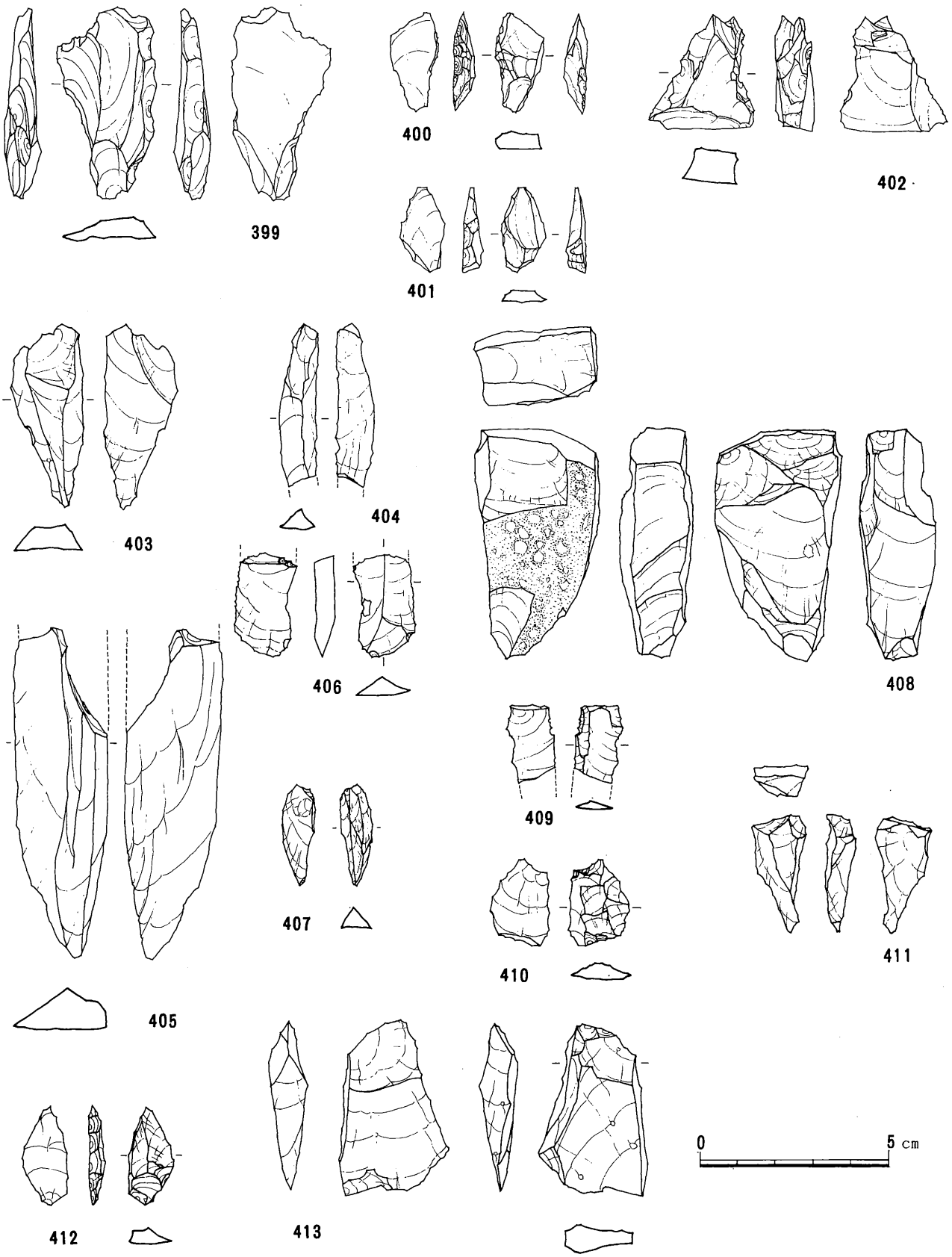
第56図　f 列 遺 物 実 測 図 (2)
354～359（f11上層），360～362（f11下層），363～367（f12上層），368～371（f12下層）



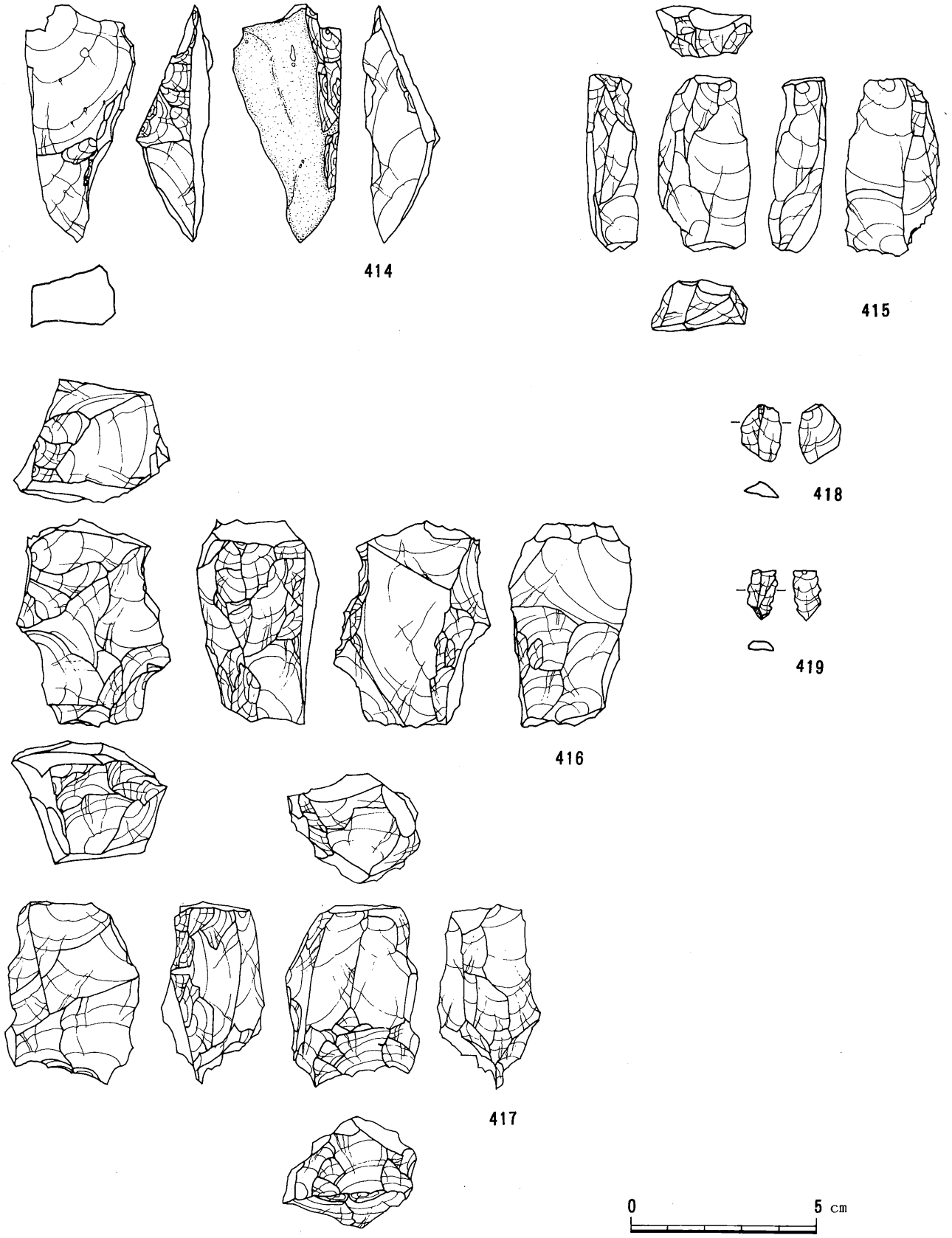
第57図　ｆ列遺物実測図(3)
372・373（ｆ12下層），374～383（ｆ13上層）



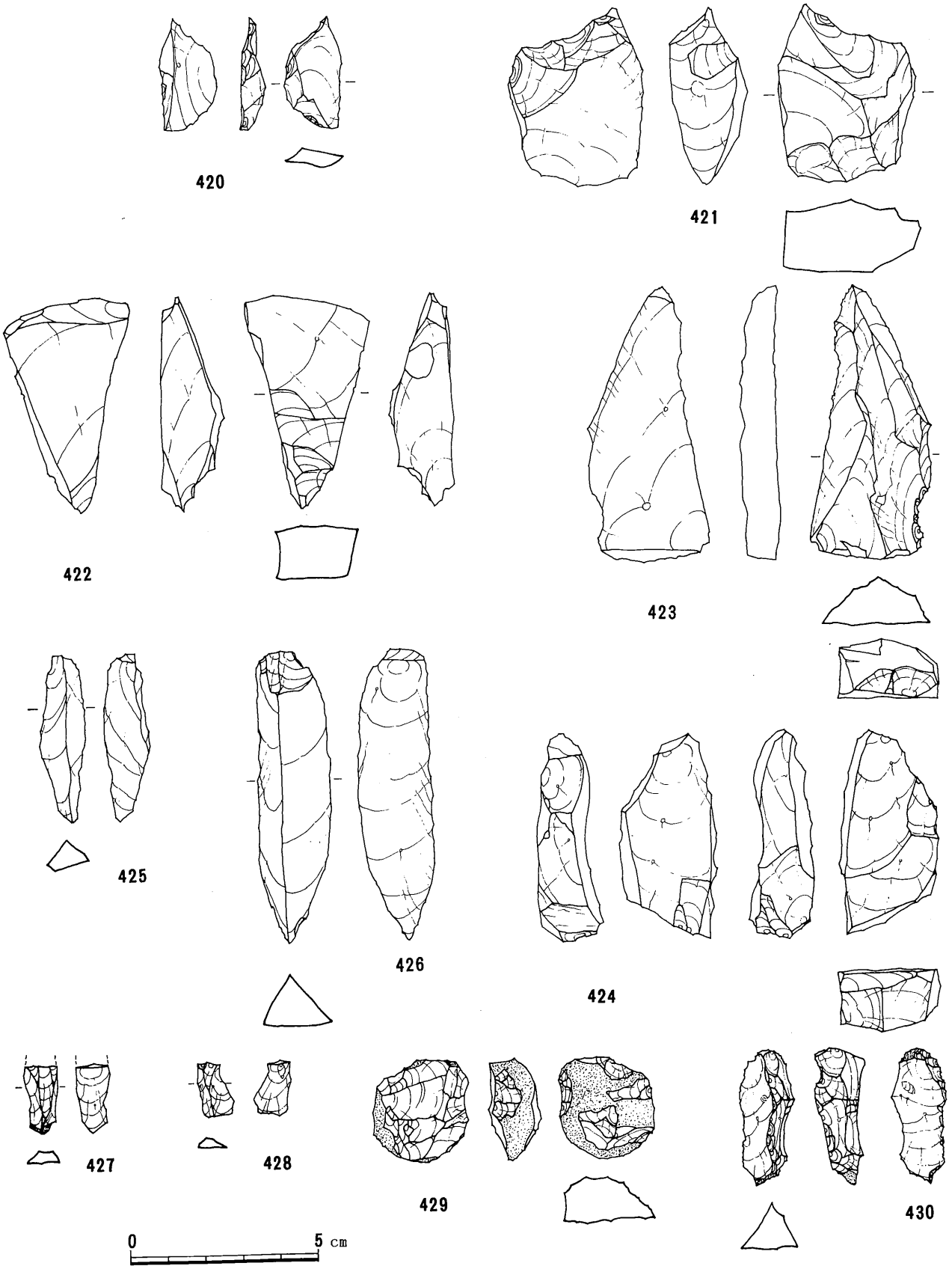
第58図　f 列 遺 物 実 測 図 (4)
384～387（f13上層），388～398（f13下層）



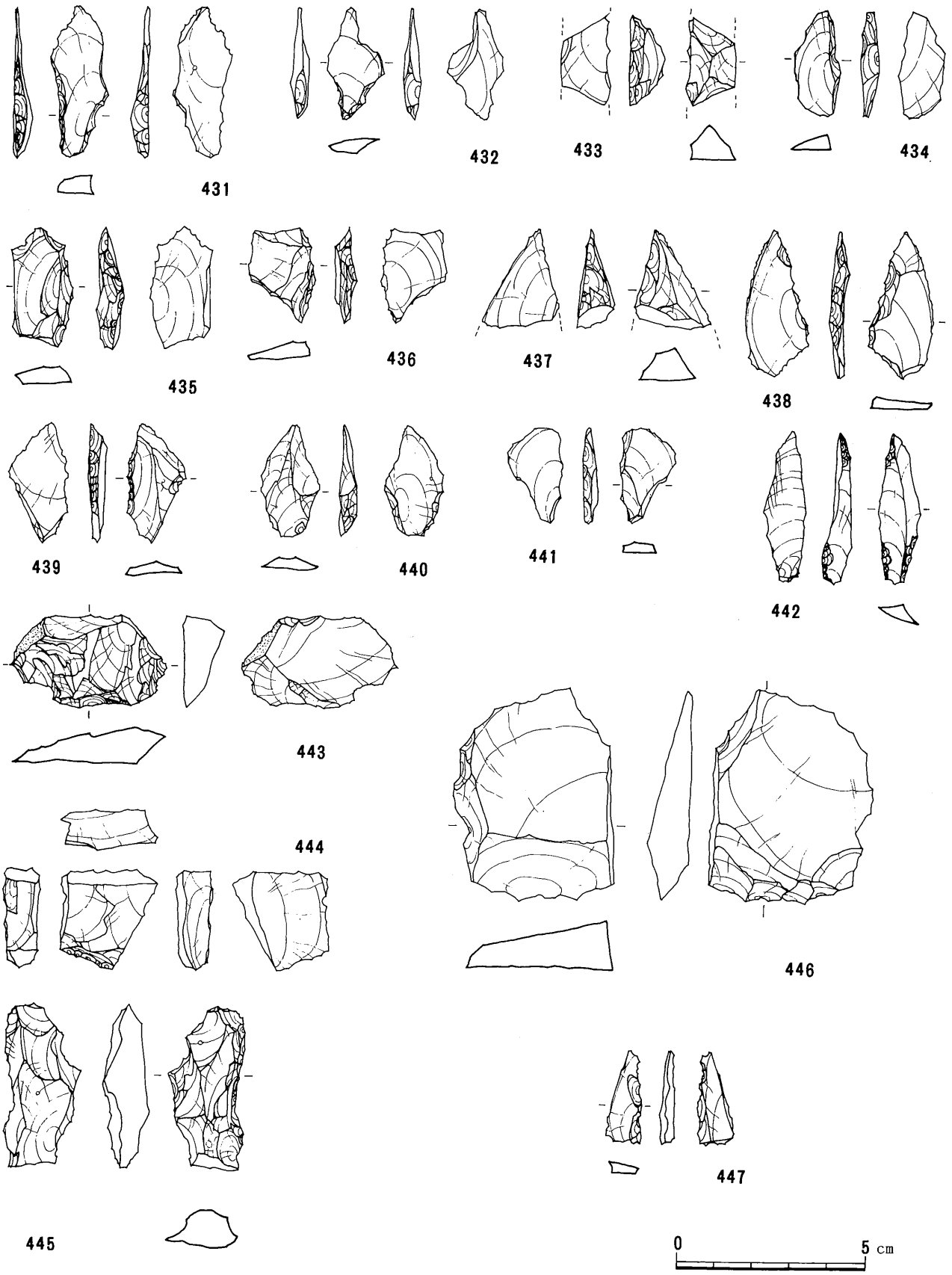
第59図　ｆ列遺物実測図(5)
399～411（ｆ14上層），412・413（ｆ14下層）



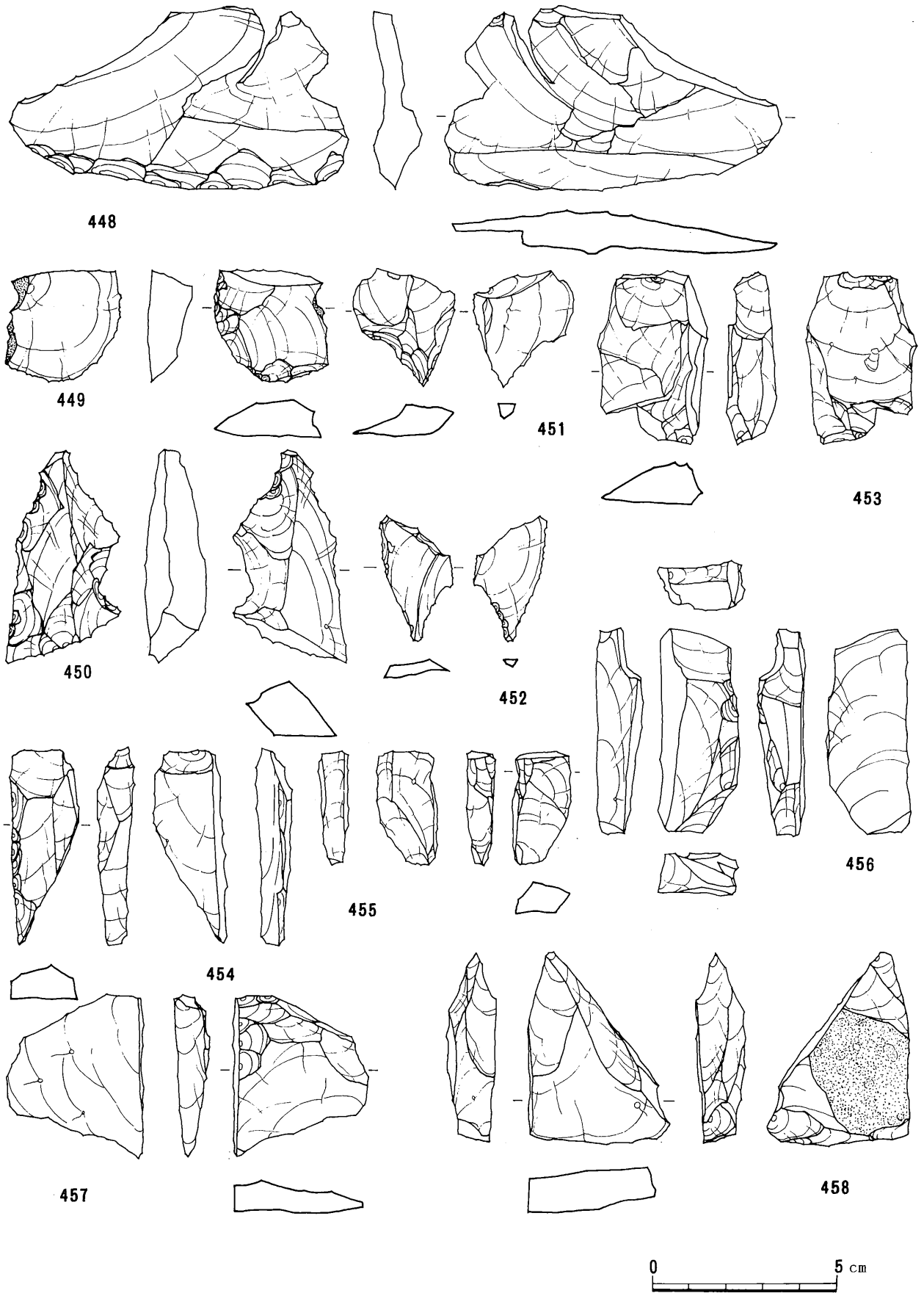
第60図　f 列 遺 物 実 測 図 (6)
414～419（f14下層）



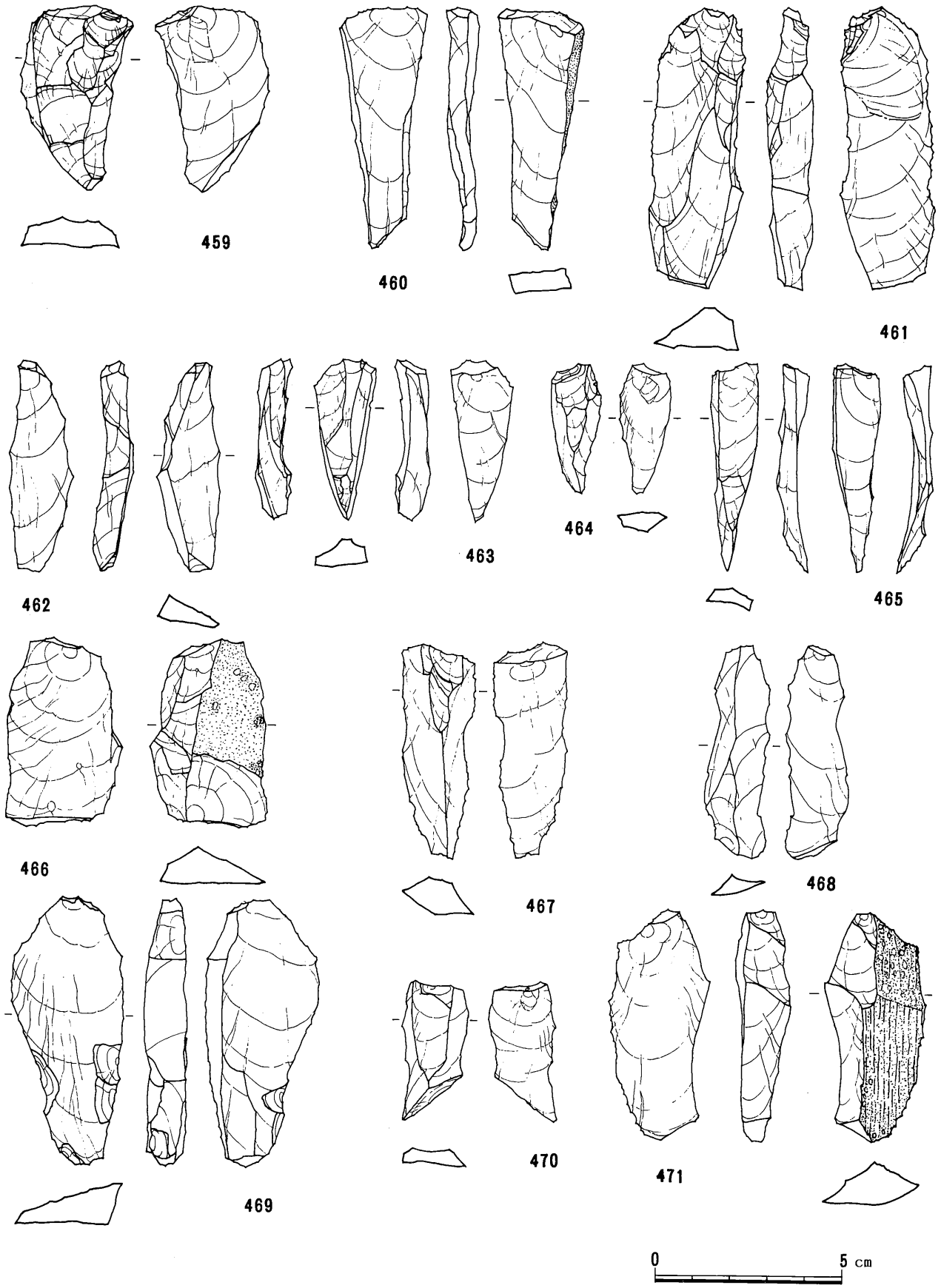
第61図　ｆ列遺物実測図(7)
420～430（ｆ15上層）



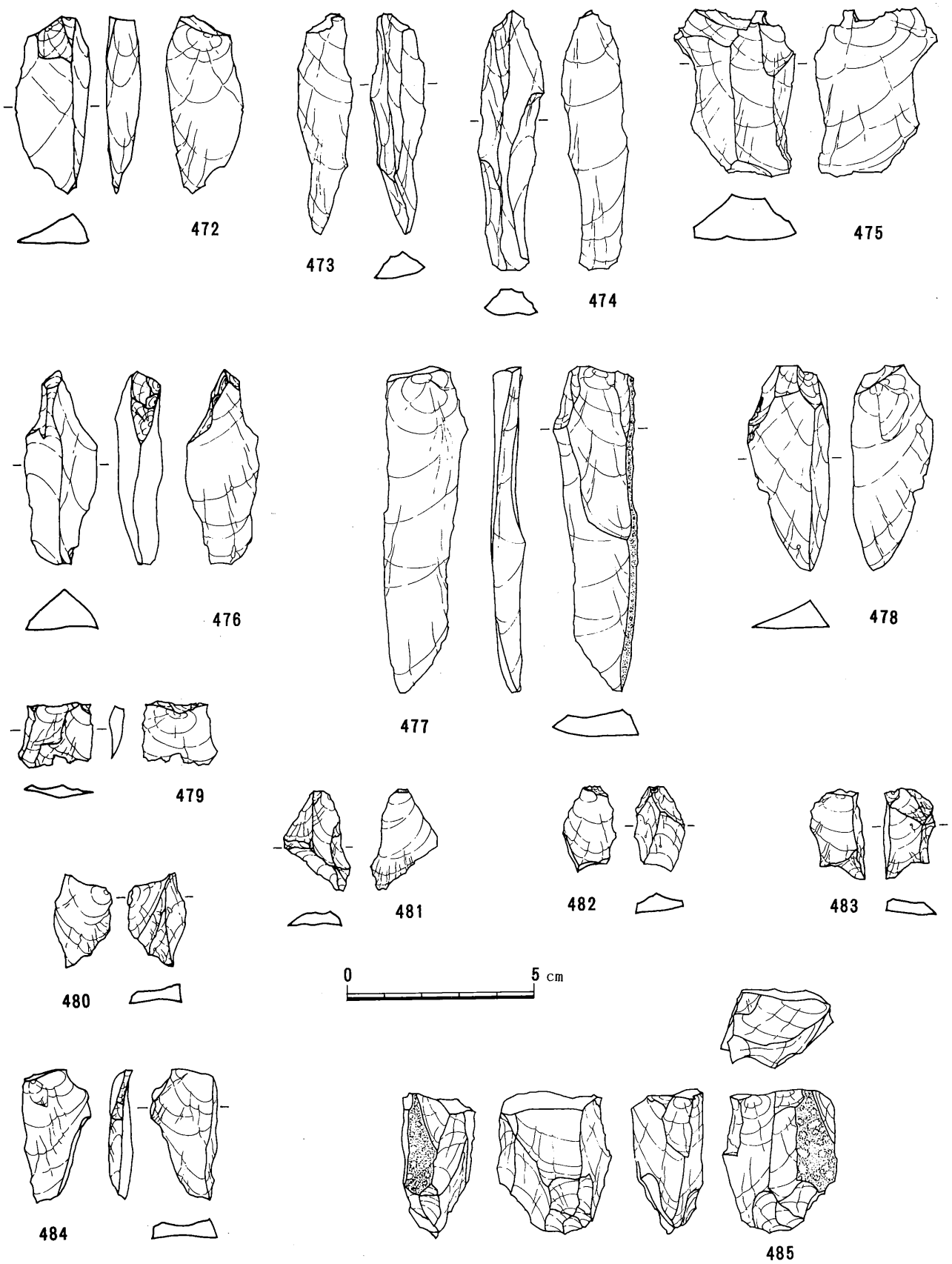
第62図　f 列 遺 物 実 測 図 (8)
431 ～ 447 (f15下層)



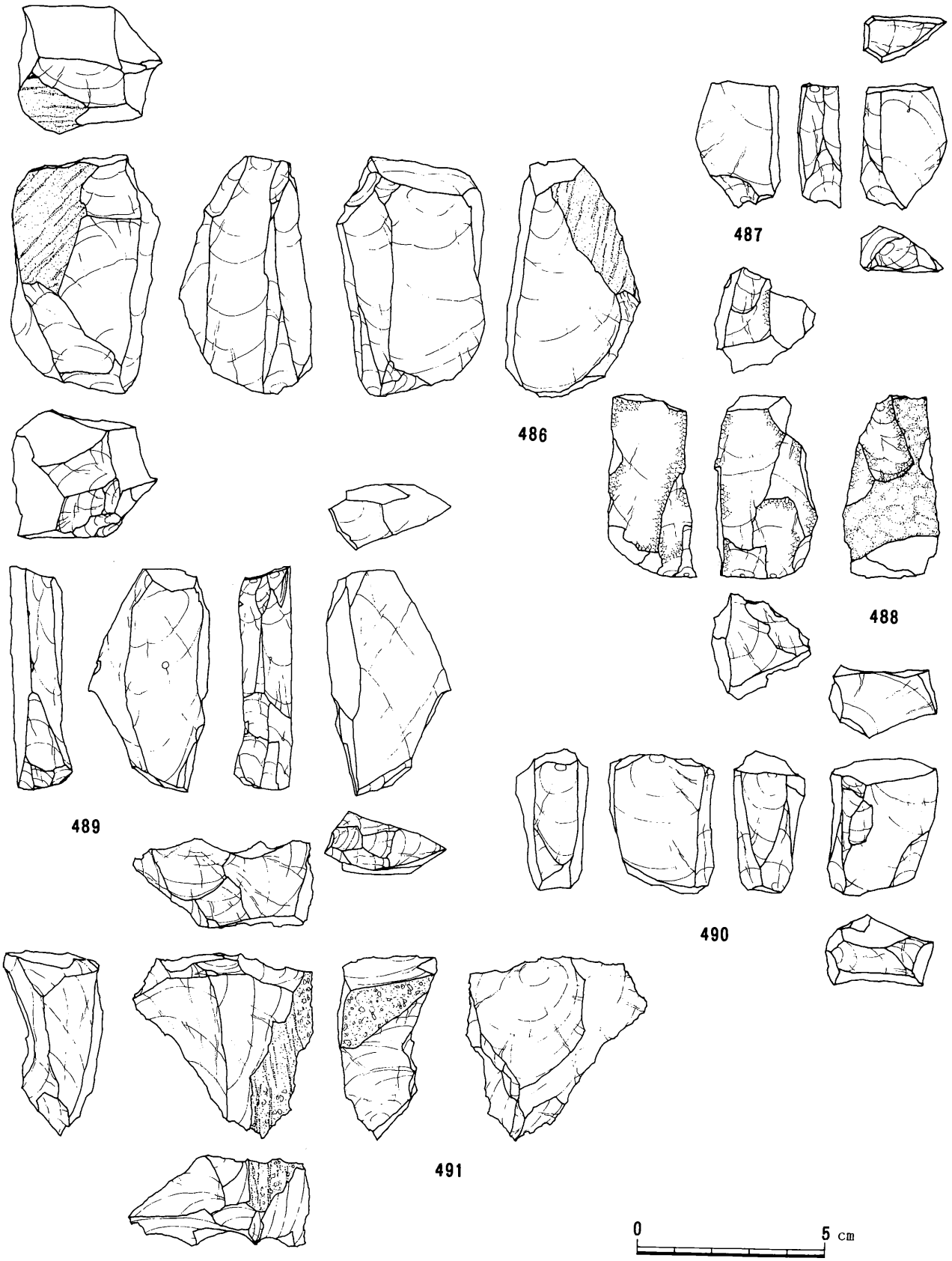
第63図　ｆ列遺物実測図（9）
448～458（ｆ15下層）



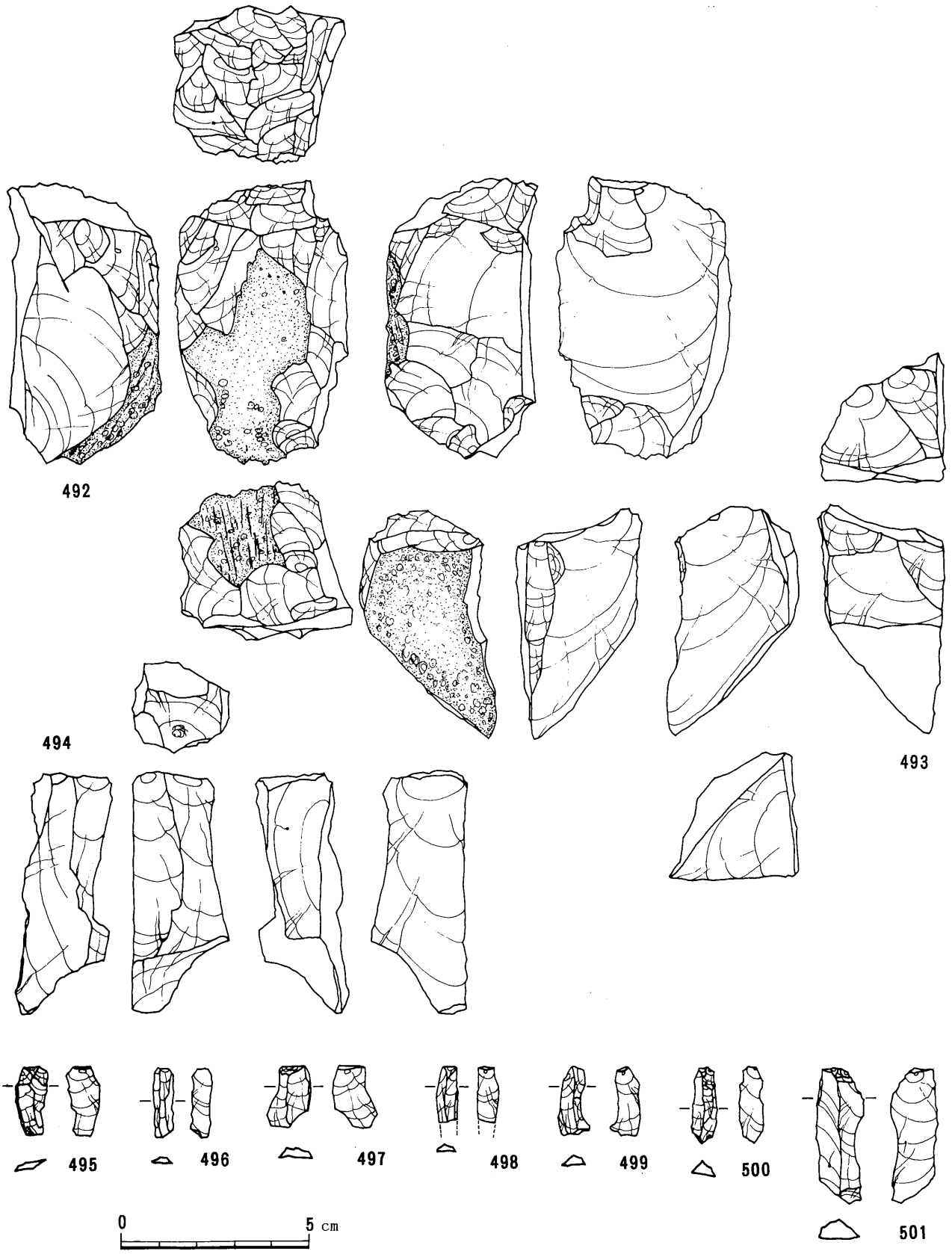
第64図　f 列 遺 物 実 測 図 (10)
459～471（f15下層）



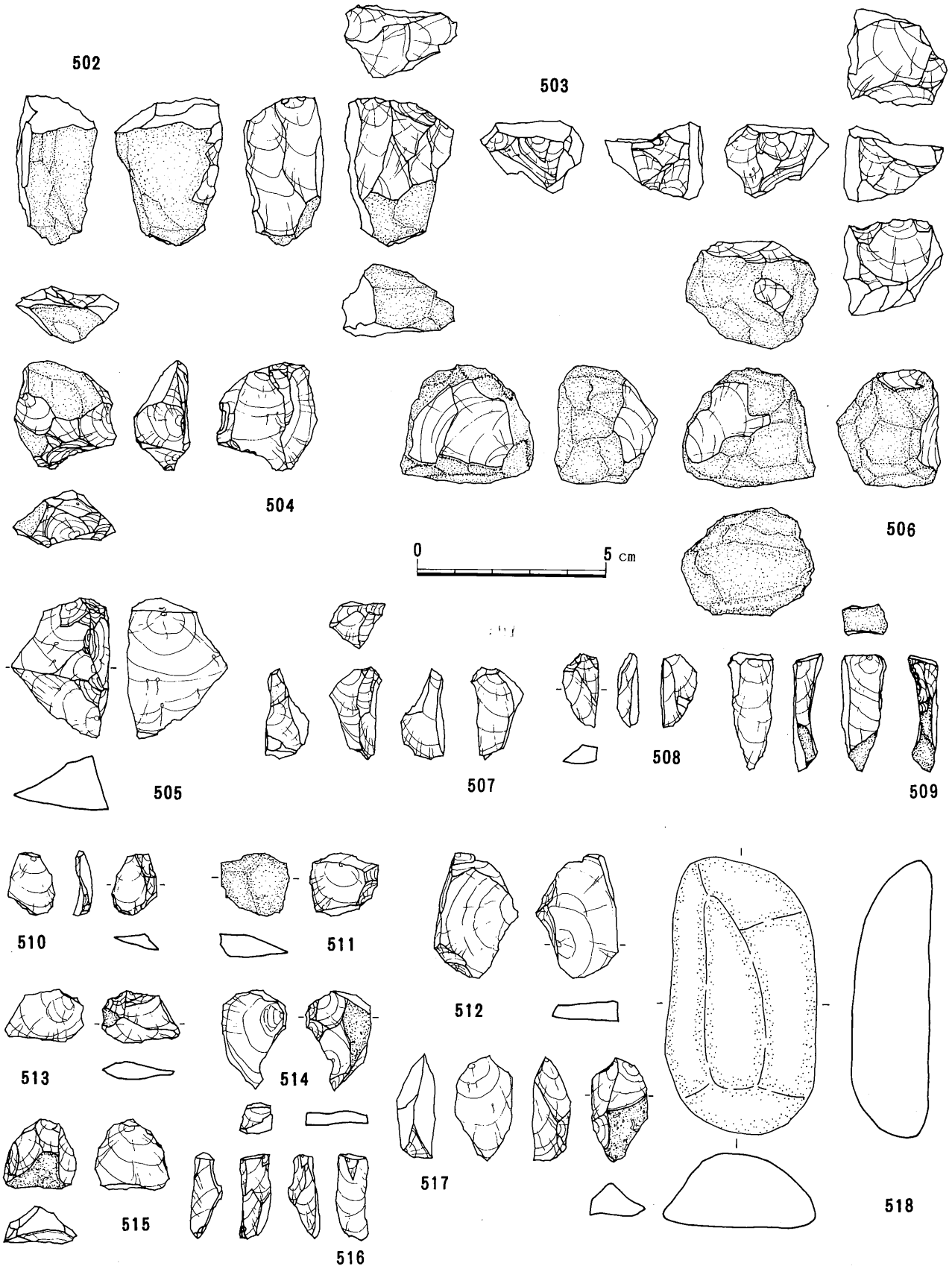
第65図　ｆ列遺物実測図(11)
472～485（ｆ15下層）



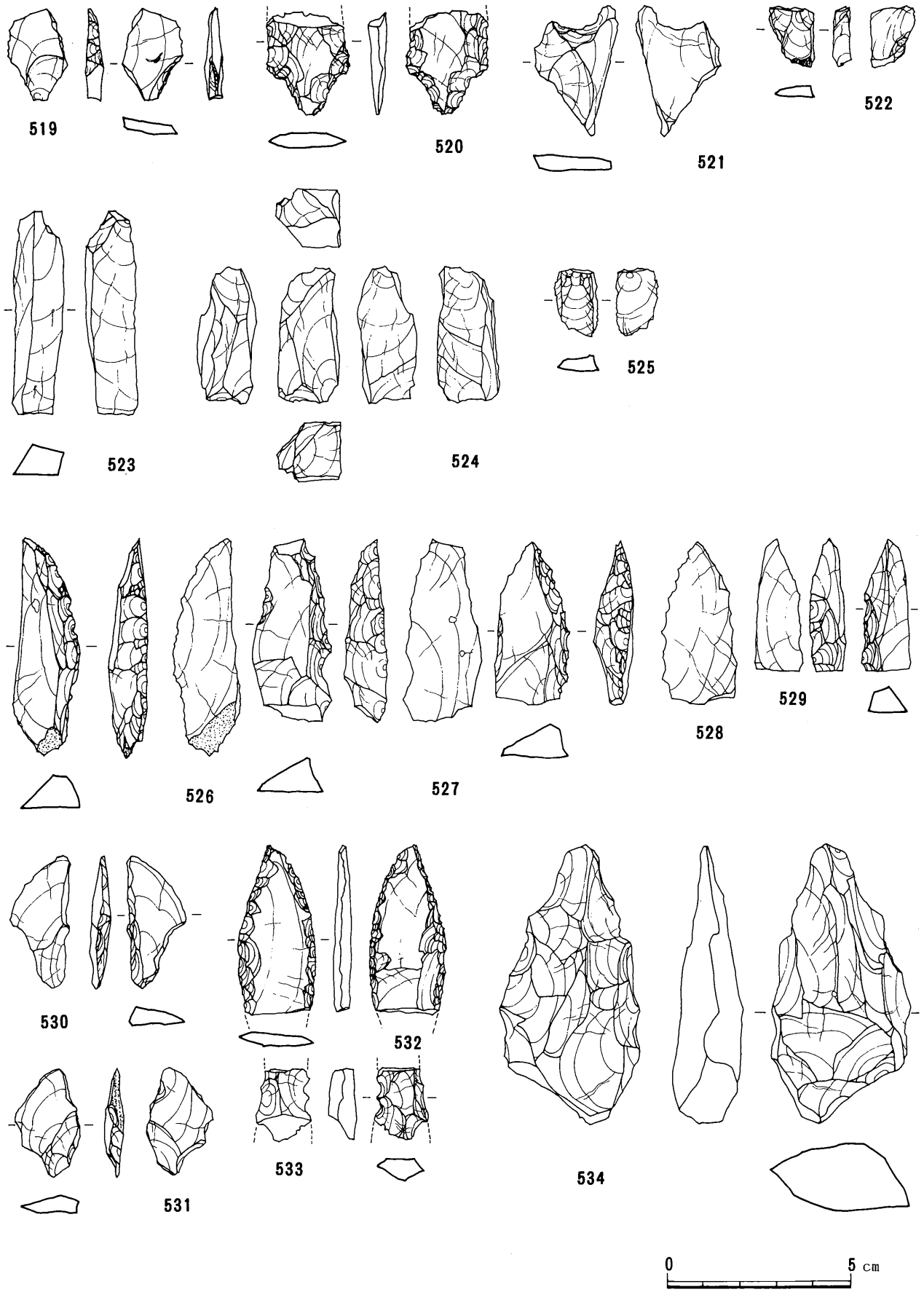
第66図　f 列 遺 物 実 測 図 (12)
486 ～ 491 (f15下層)



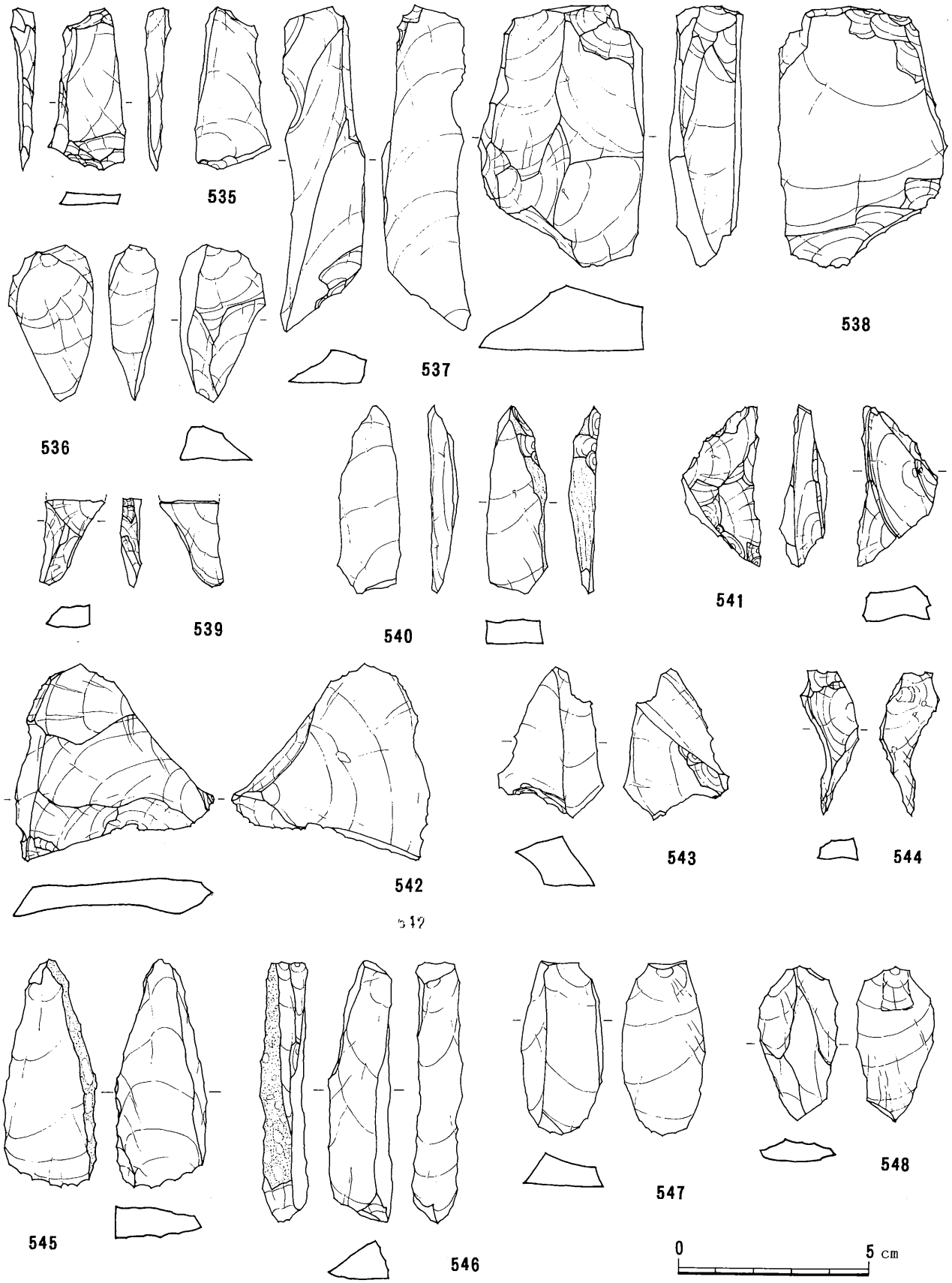
第67図　ｆ列遺物実測図(13)
492～501（ｆ15下層）



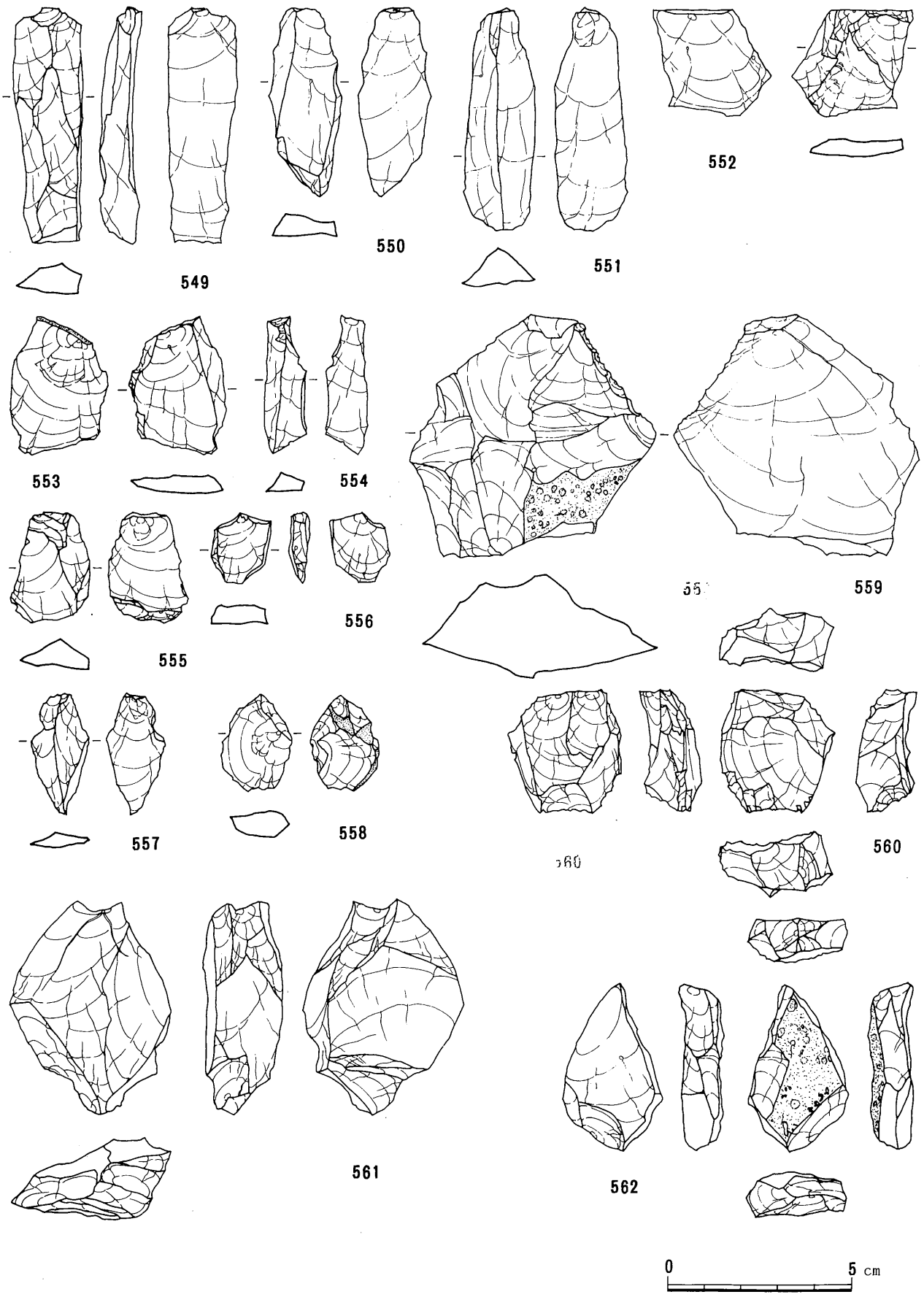
第68図　f 列 遺 物 実 測 図 (14)
502～518（f15下層）



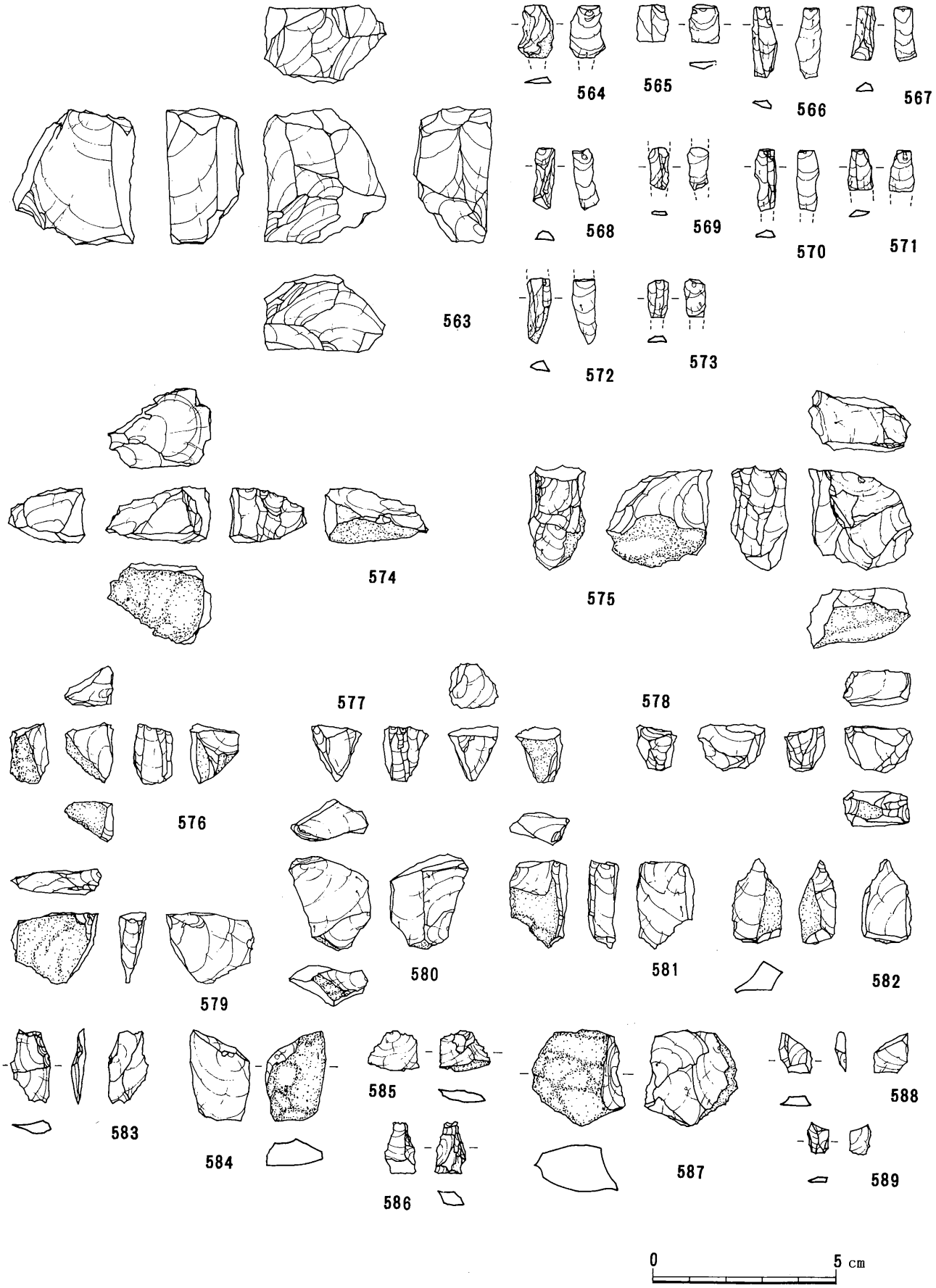
第69図　ｆ列遺物実測図(15)
519～525（ｆ16上層），526～534（ｆ16下層）



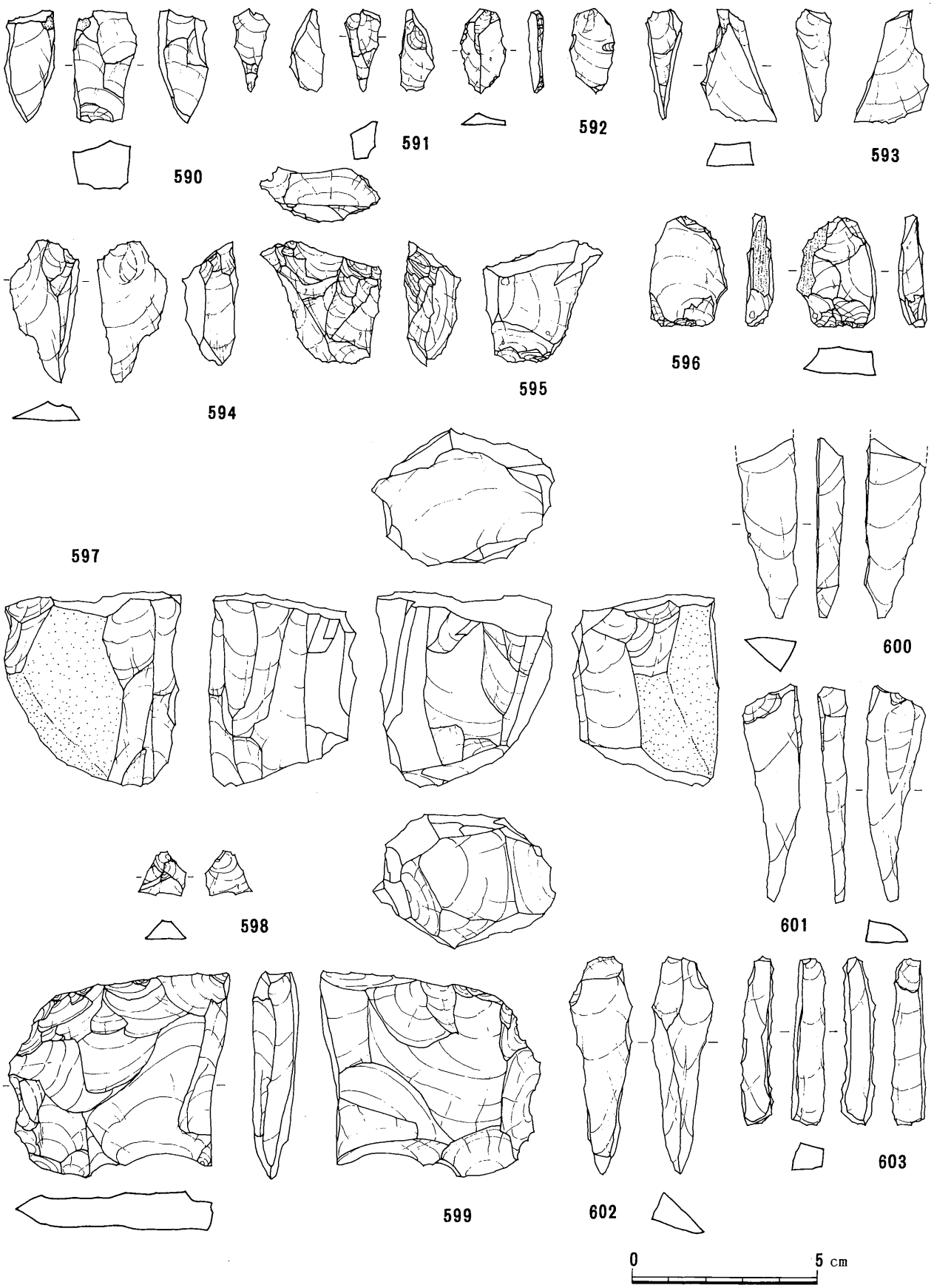
第70図　f 列 遺 物 実 測 図 (16)
535 ～ 548 (f16下層)



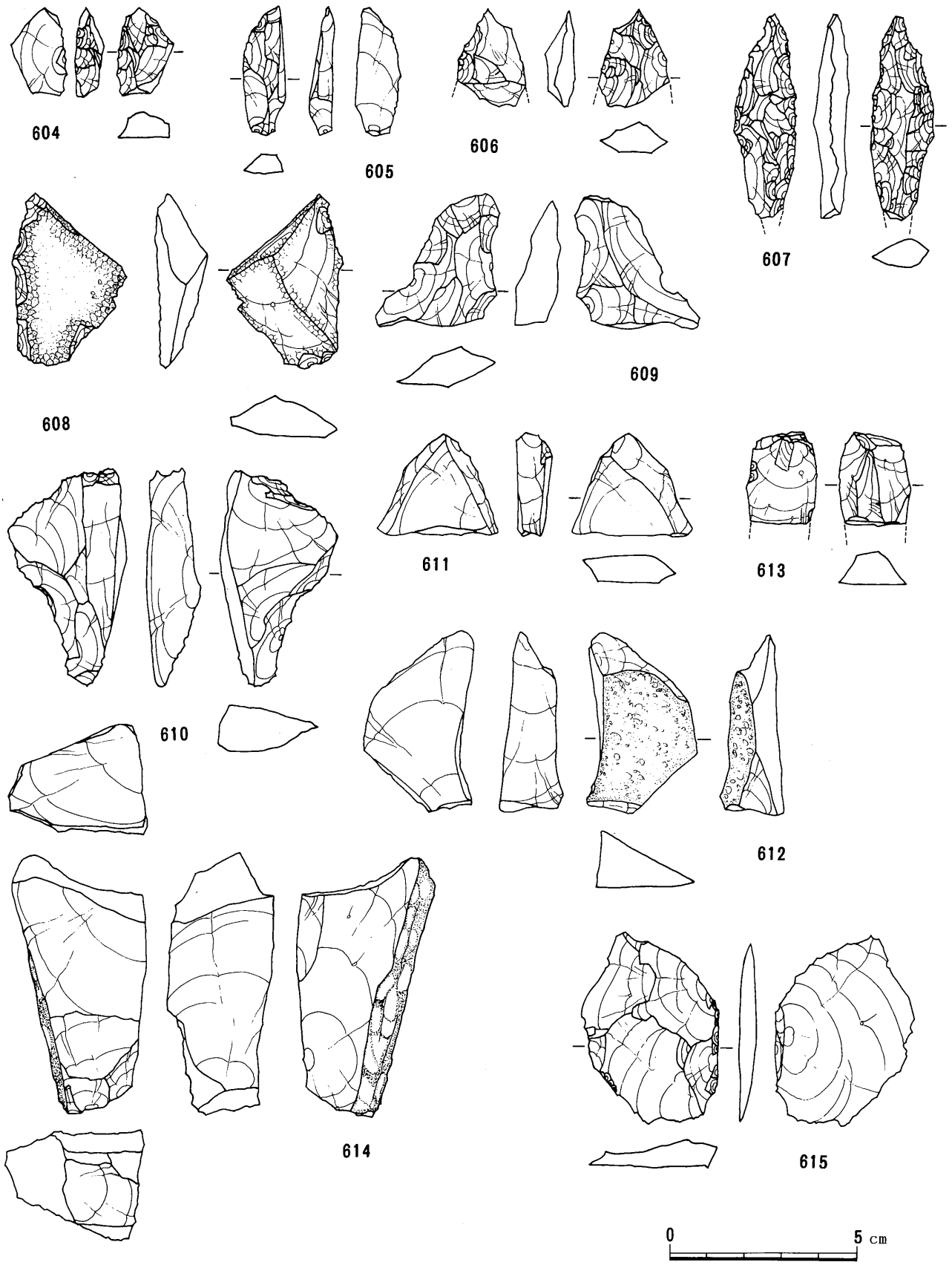
第71図　ｆ列遺物実測図(17)
549～562（ｆ16下層）



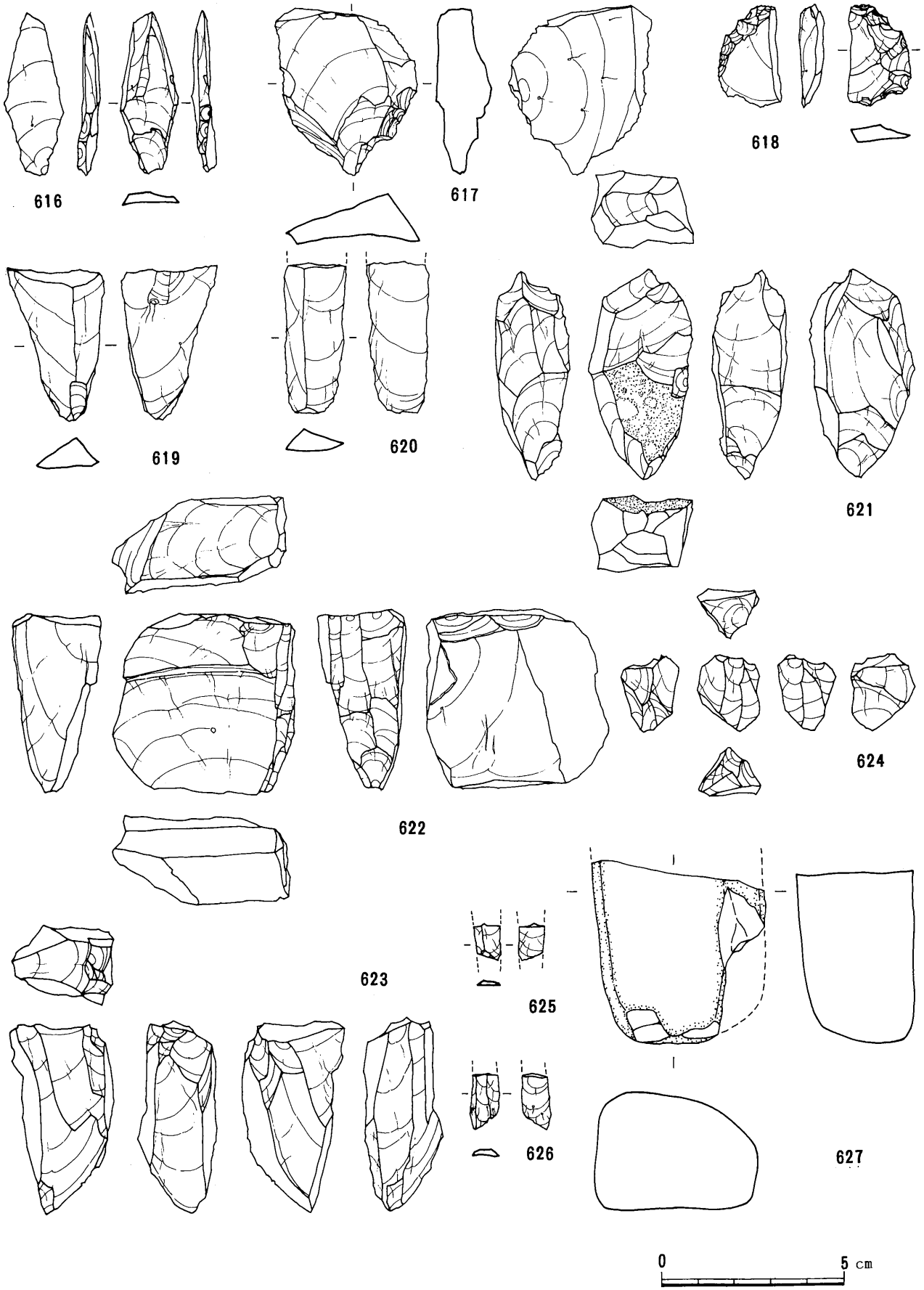
第72図　f 列 遺 物 実 測 図 (18)
563～589（f16下層）



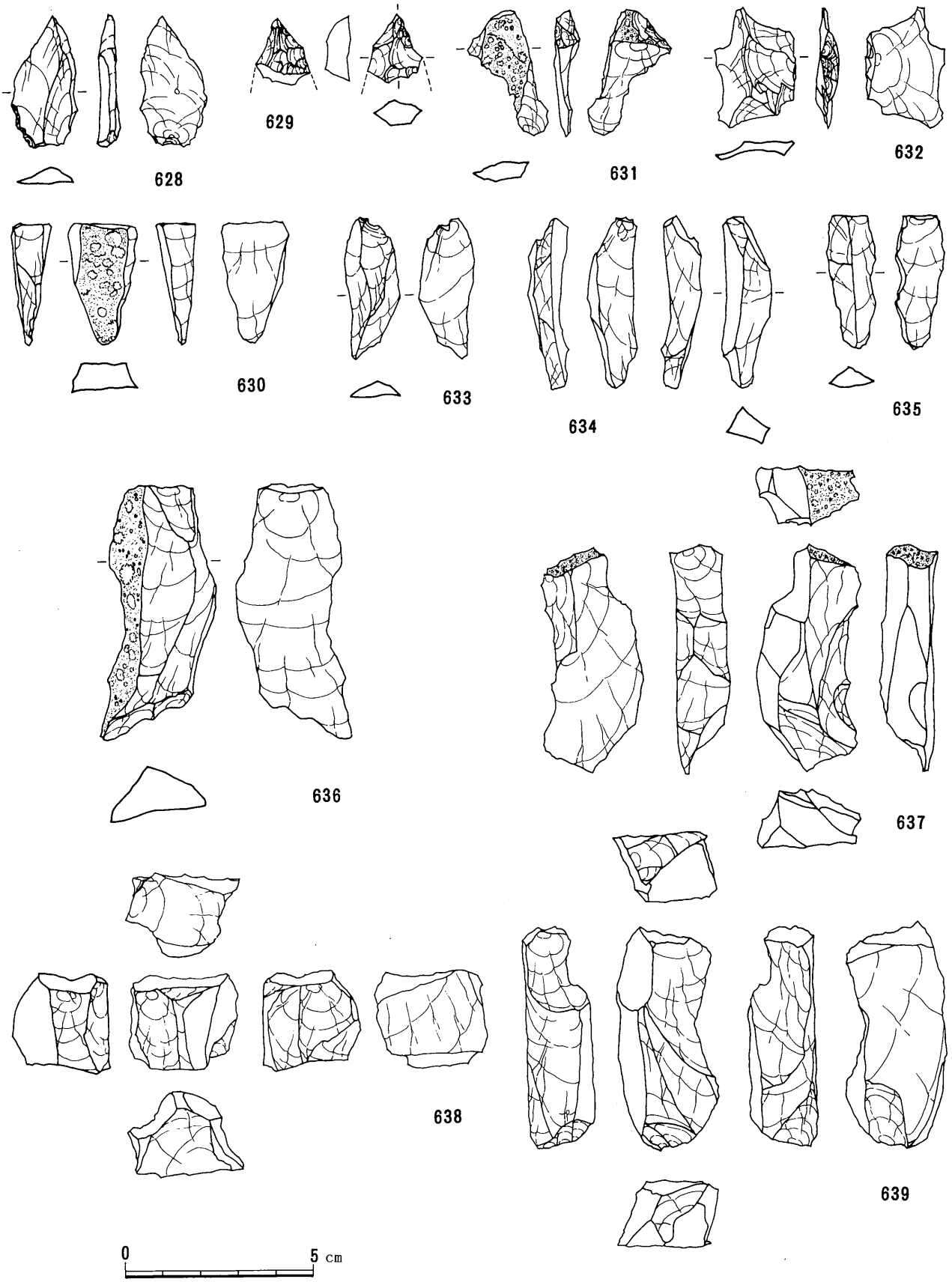
第73図　ｇ列遺物実測図(1)
590・591（ｇ９上層），592～595（ｇ９下層），596・597（g10下層），
598・599（g11上層），600～603（p11下層）



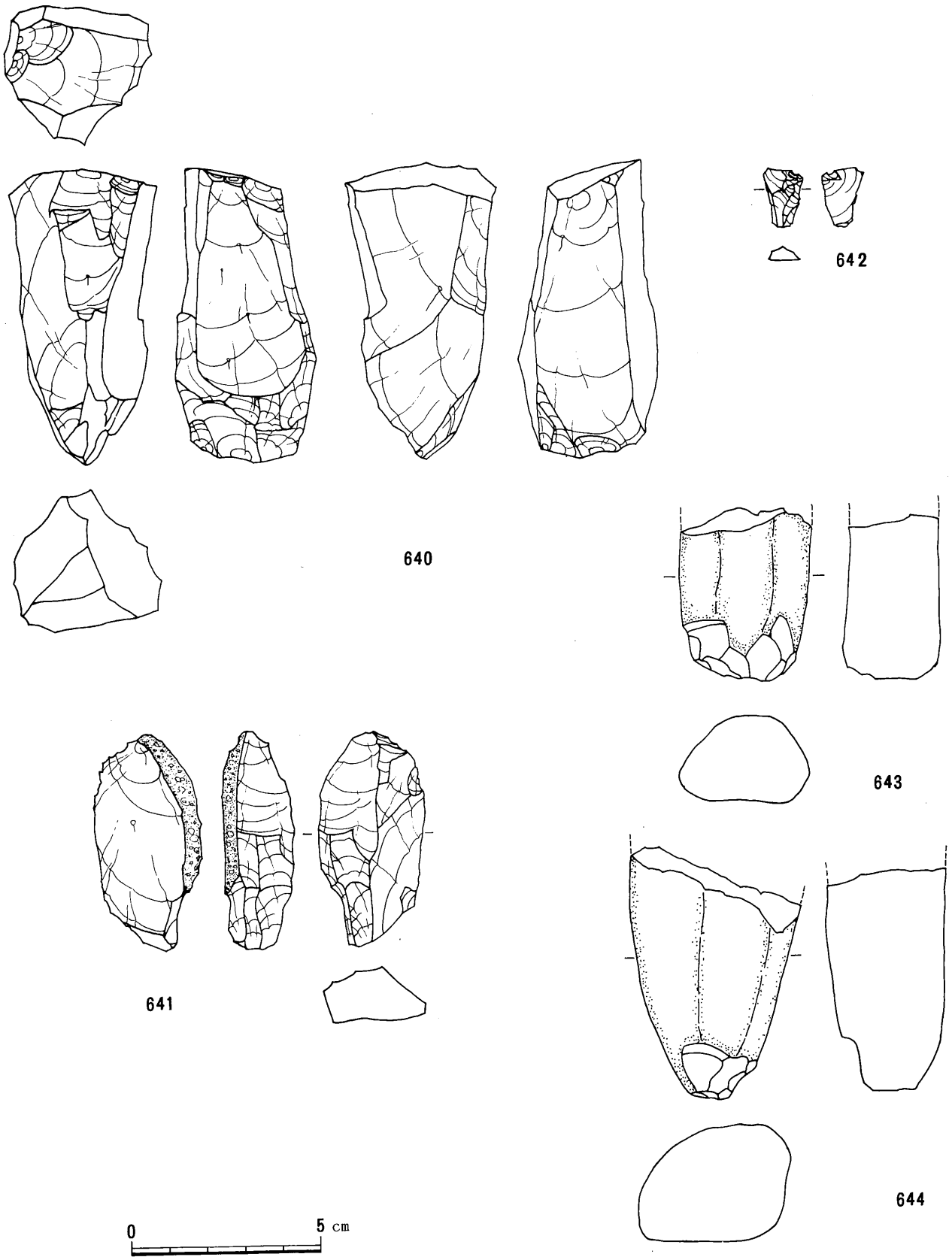
第74図　g 列 遺 物 実 測 図 (2)
604 (g12上層), 605 ～ 615 (g12下層)



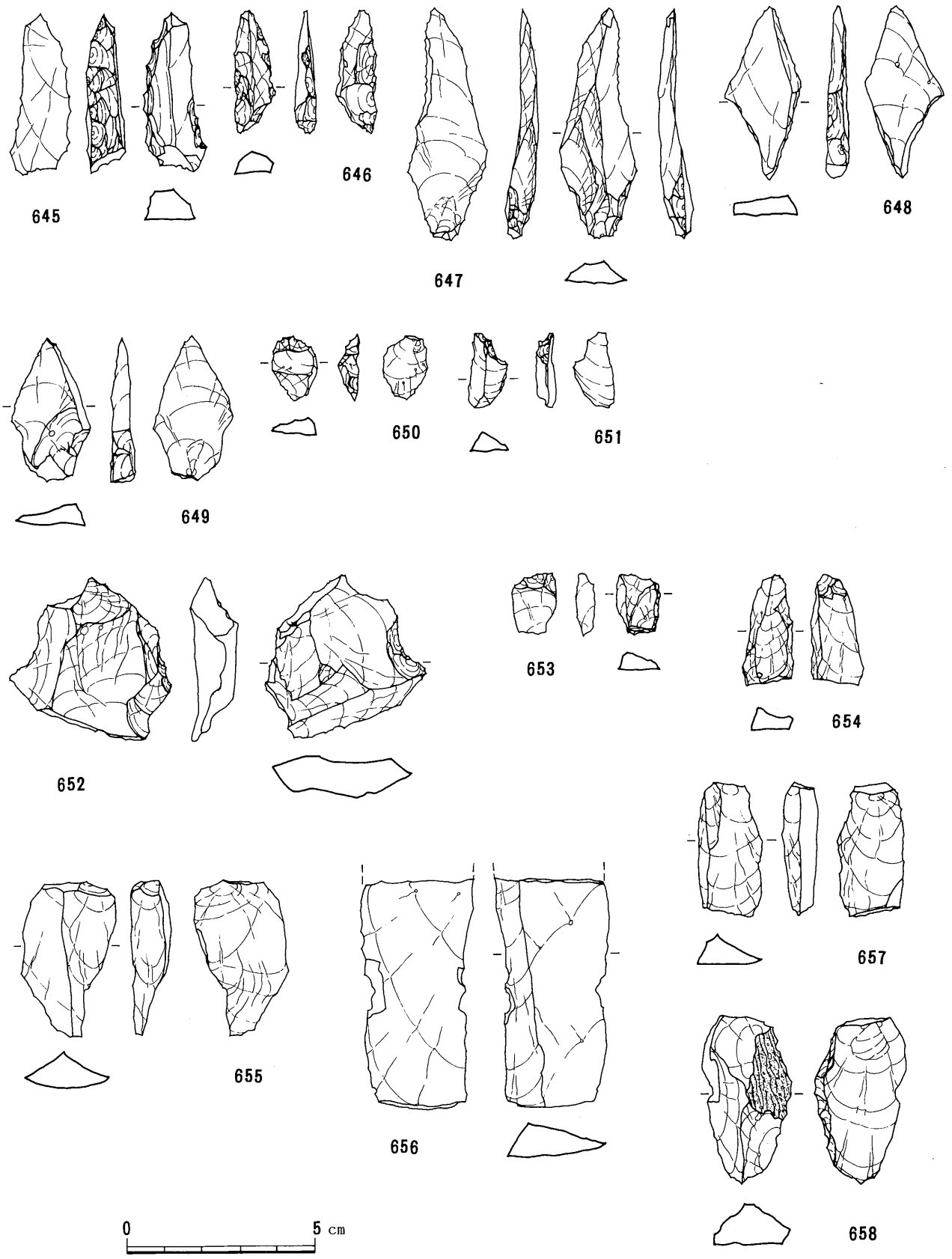
第75図　ｇ列遺物実測図(3)
616～627（g13上層）



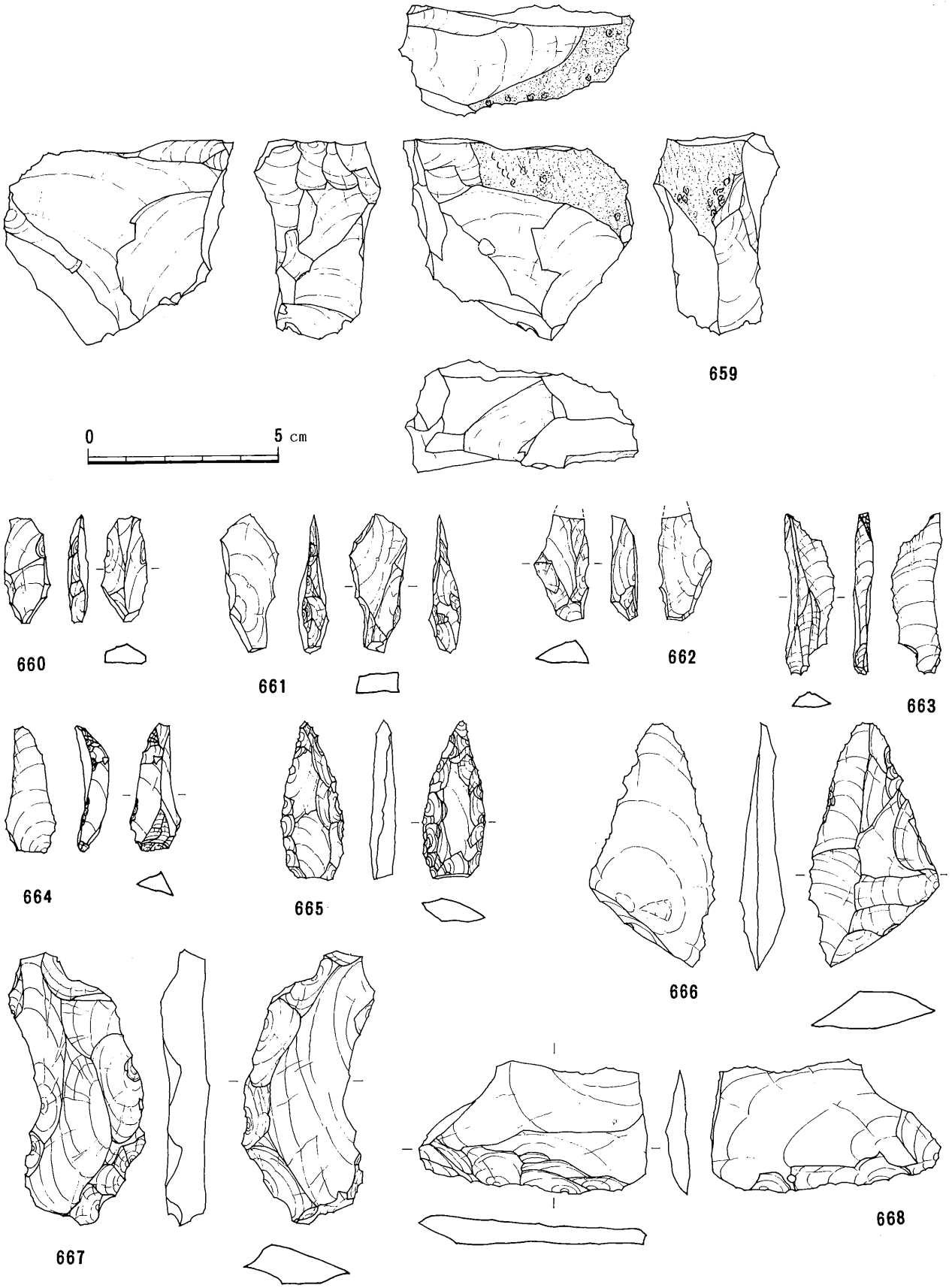
第76図　g 列 遺 物 実 測 図 (4)
628 ～ 639 (g13下層)



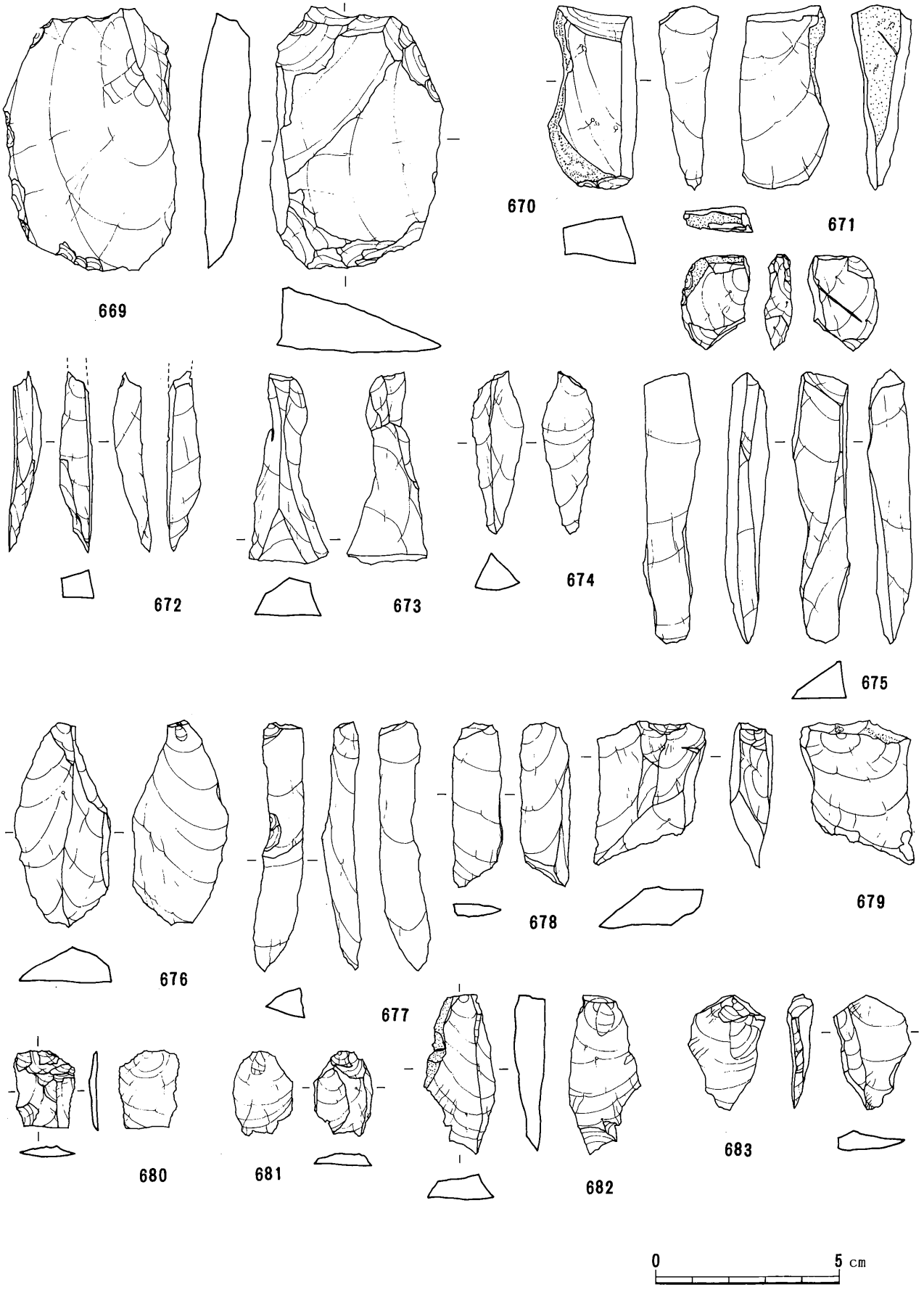
第77図　g 列 遺 物 実 測 図 (5)
640～644（g13下層）



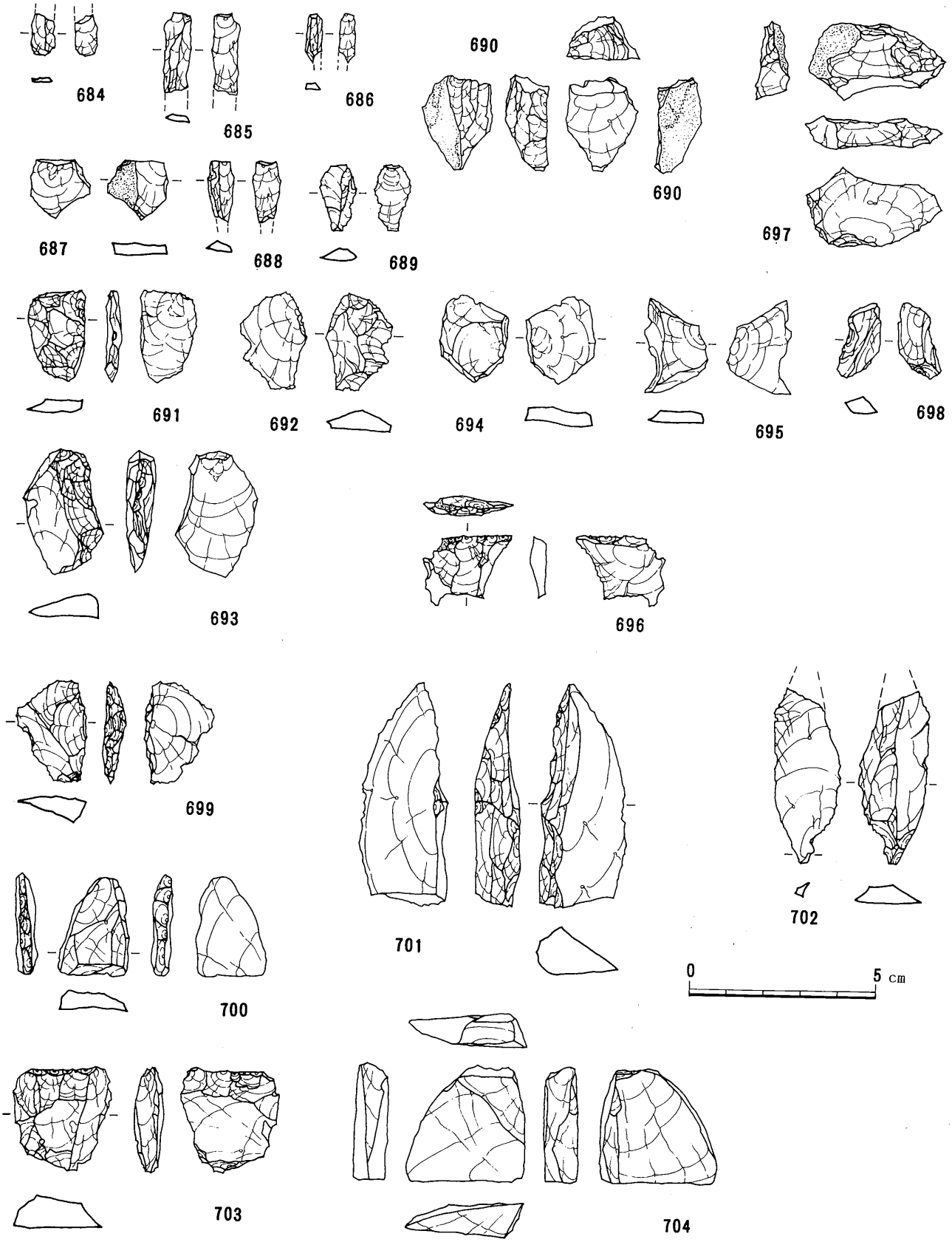
第78図　g 列 遺 物 実 測 図 (6)
645～658（g14上層）



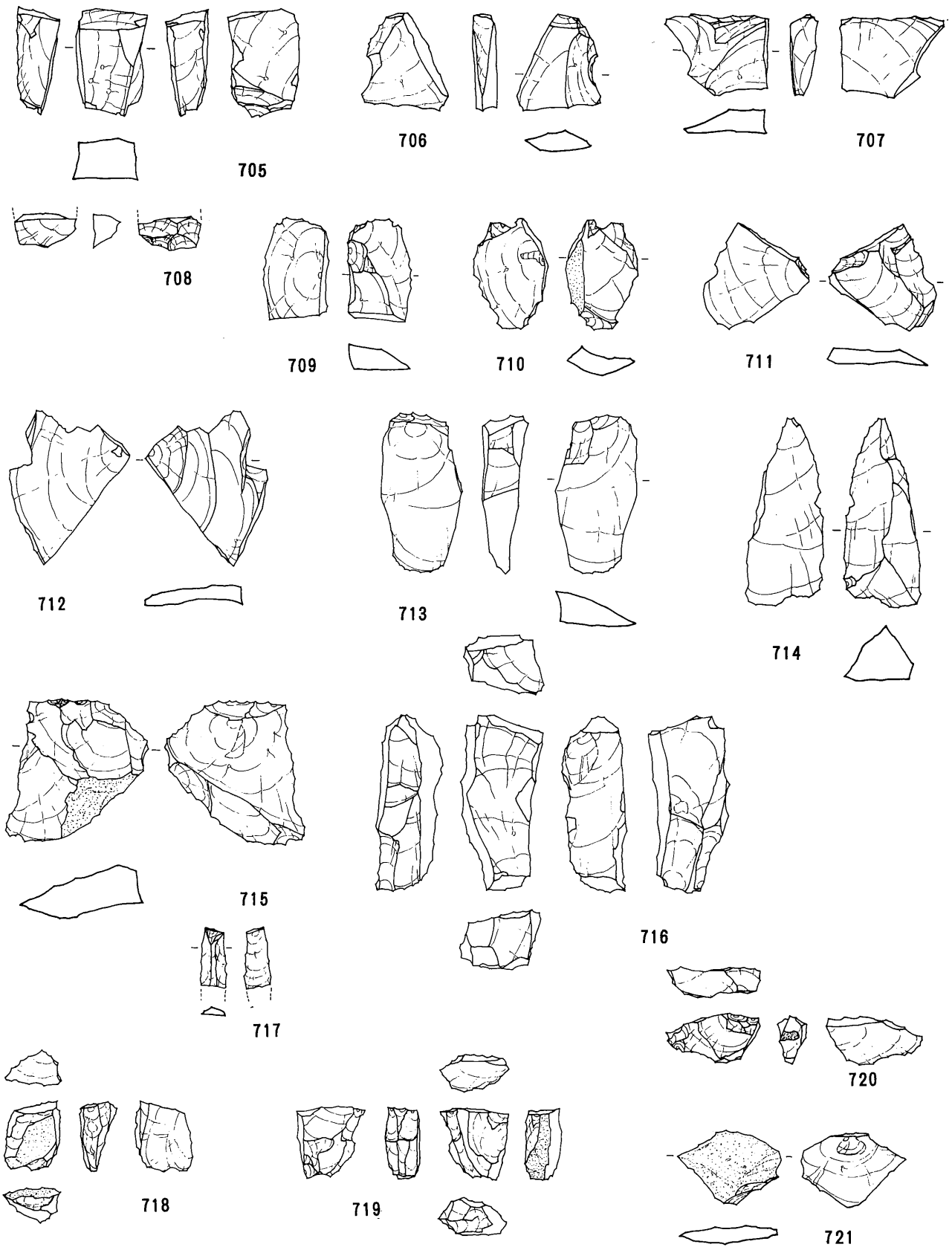
第79図　ｇ列遺物実測図(7)
659（g14上層），660～668（g14下層）



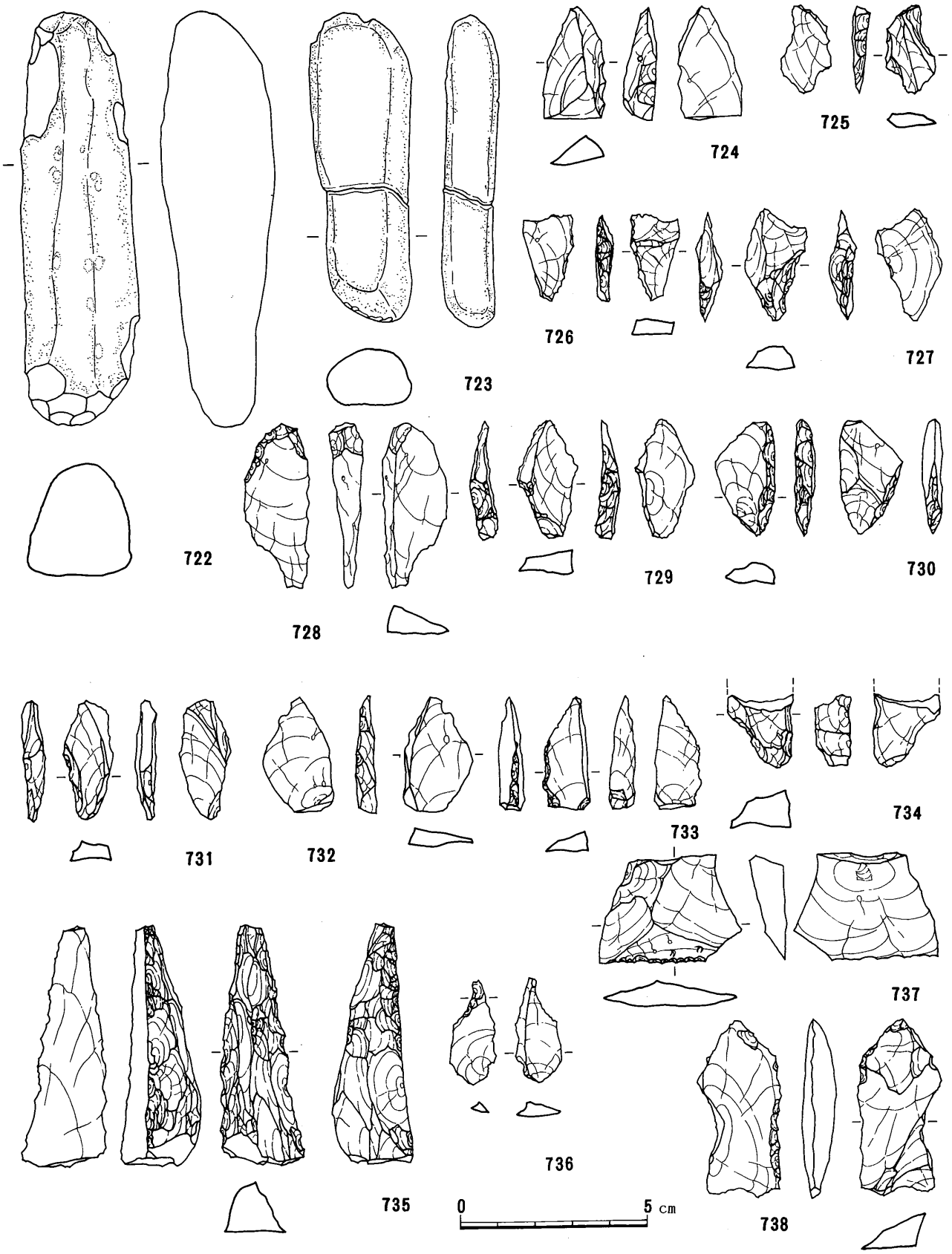
第80図　g 列 遺 物 実 測 図 (8)
669 ～ 683 (g14下層)



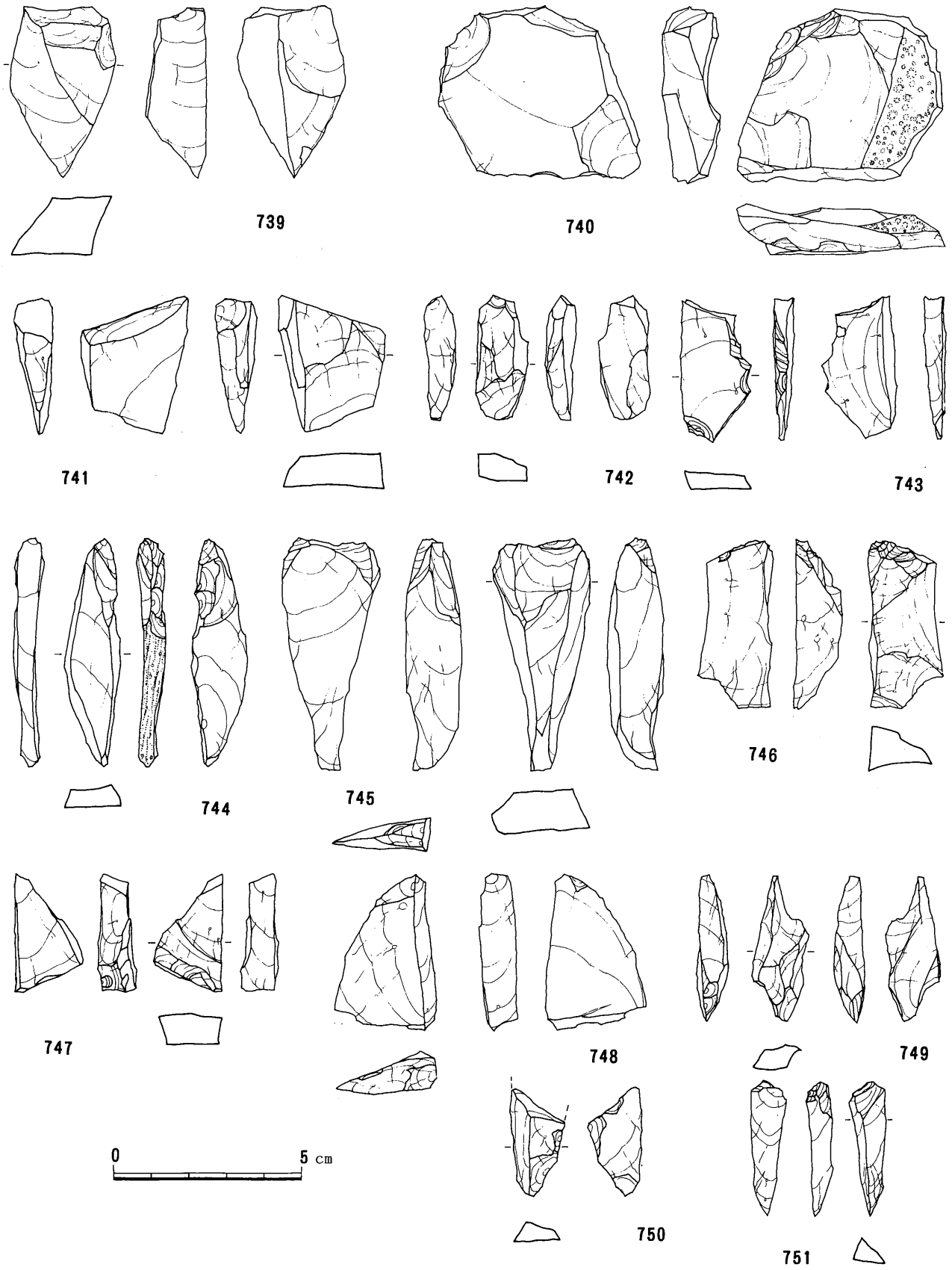
第81図　g 列 遺 物 実 測 図 (9)
684～698（g14下層），699～704（g15上層）



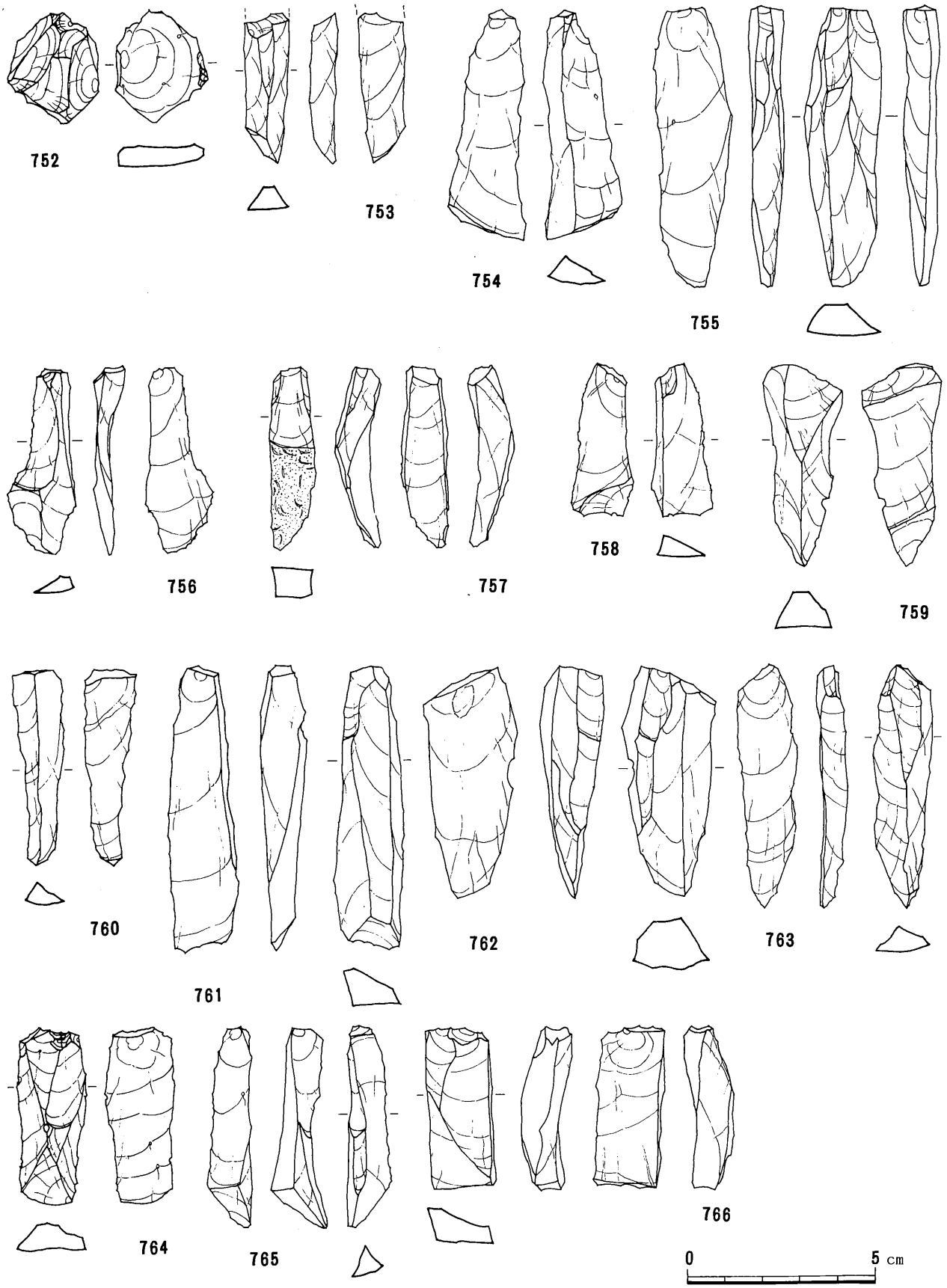
第82図　g 列 遺 物 実 測 図 (10)
705 ～ 721 (g15上層)



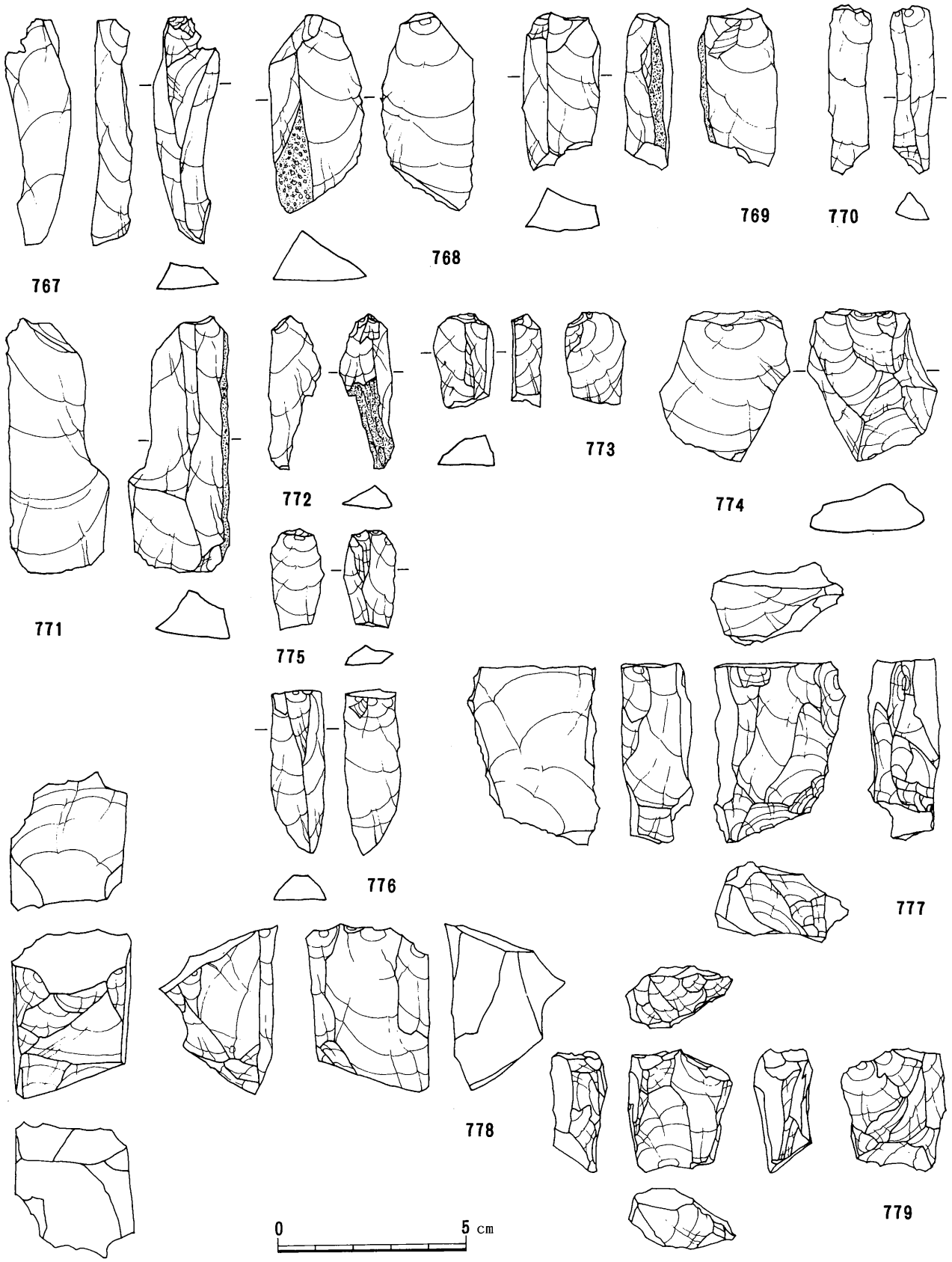
第83図　ｇ列遺物実測図(11)
722・723（g15上層），724～738（g15下層）



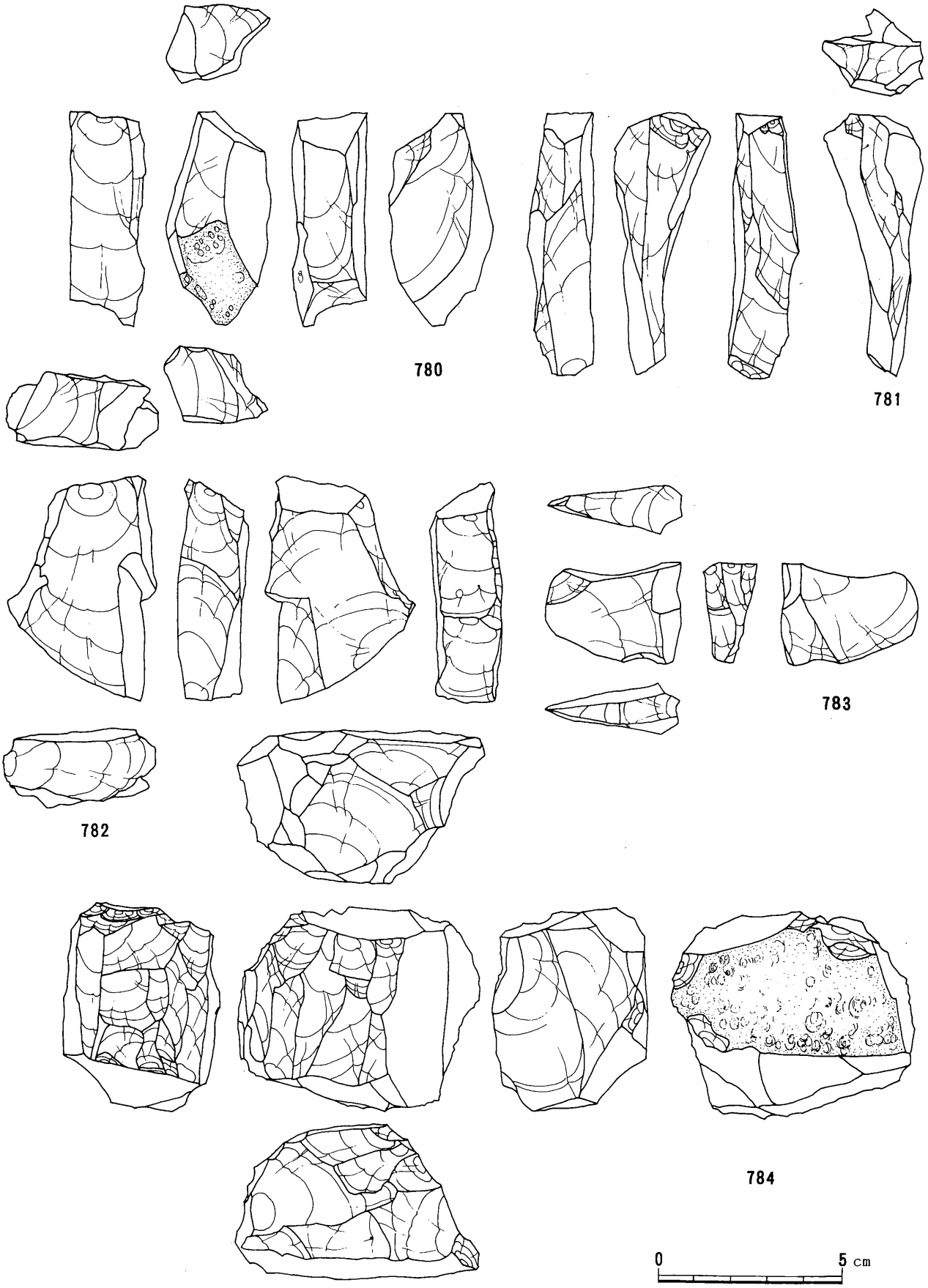
第84図　g 列 遺 物 実 測 図 (12)
739 ～ 751 (g15下層)



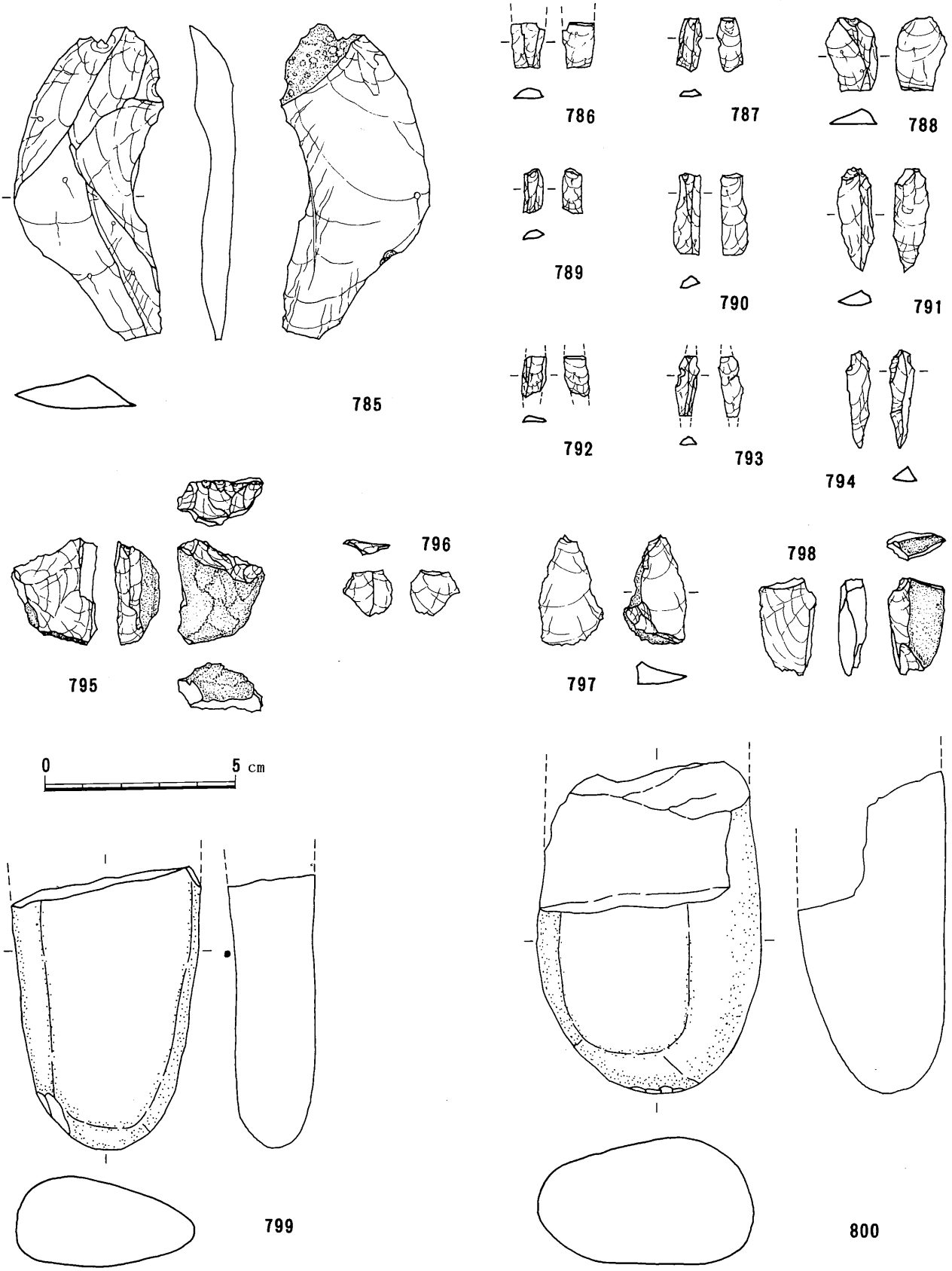
第85図　ｇ列遺物実測図(13)
752～766（g15下層）



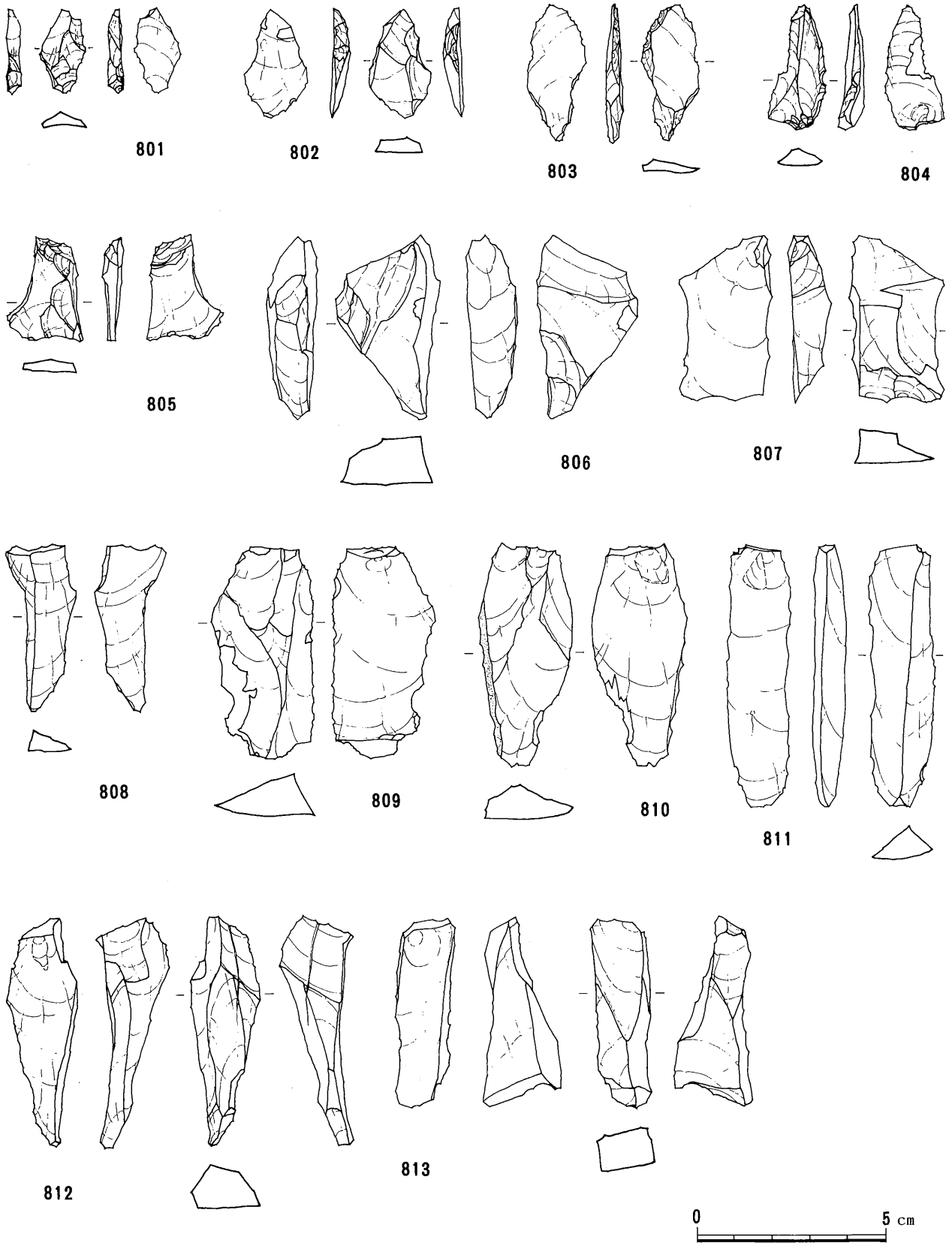
第86図　g 列 遺 物 実 測 図 (14)
767 ～ 779 (g15下層)



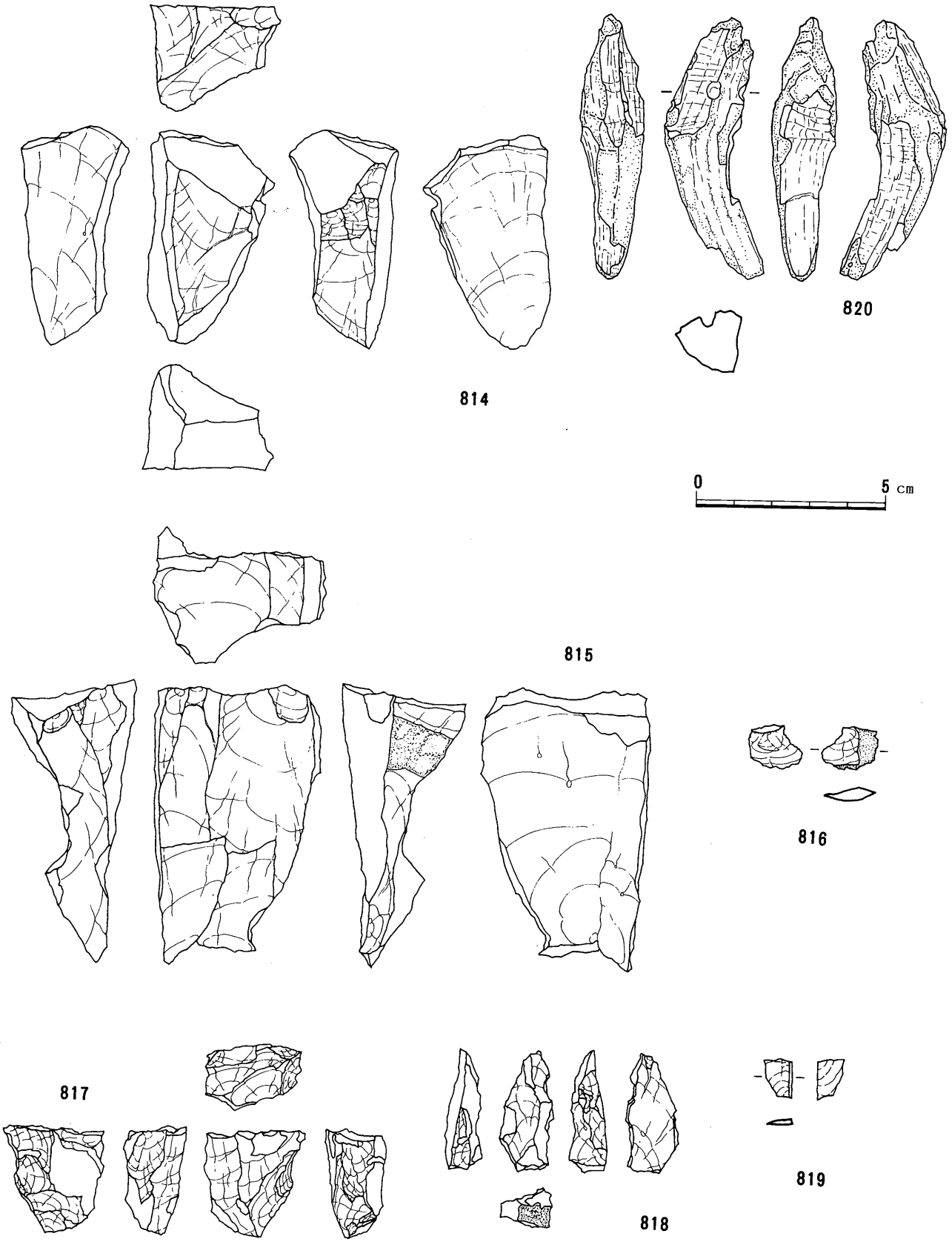
第87図　ｇ列遺物実測図(15)
780～784（g15下層）



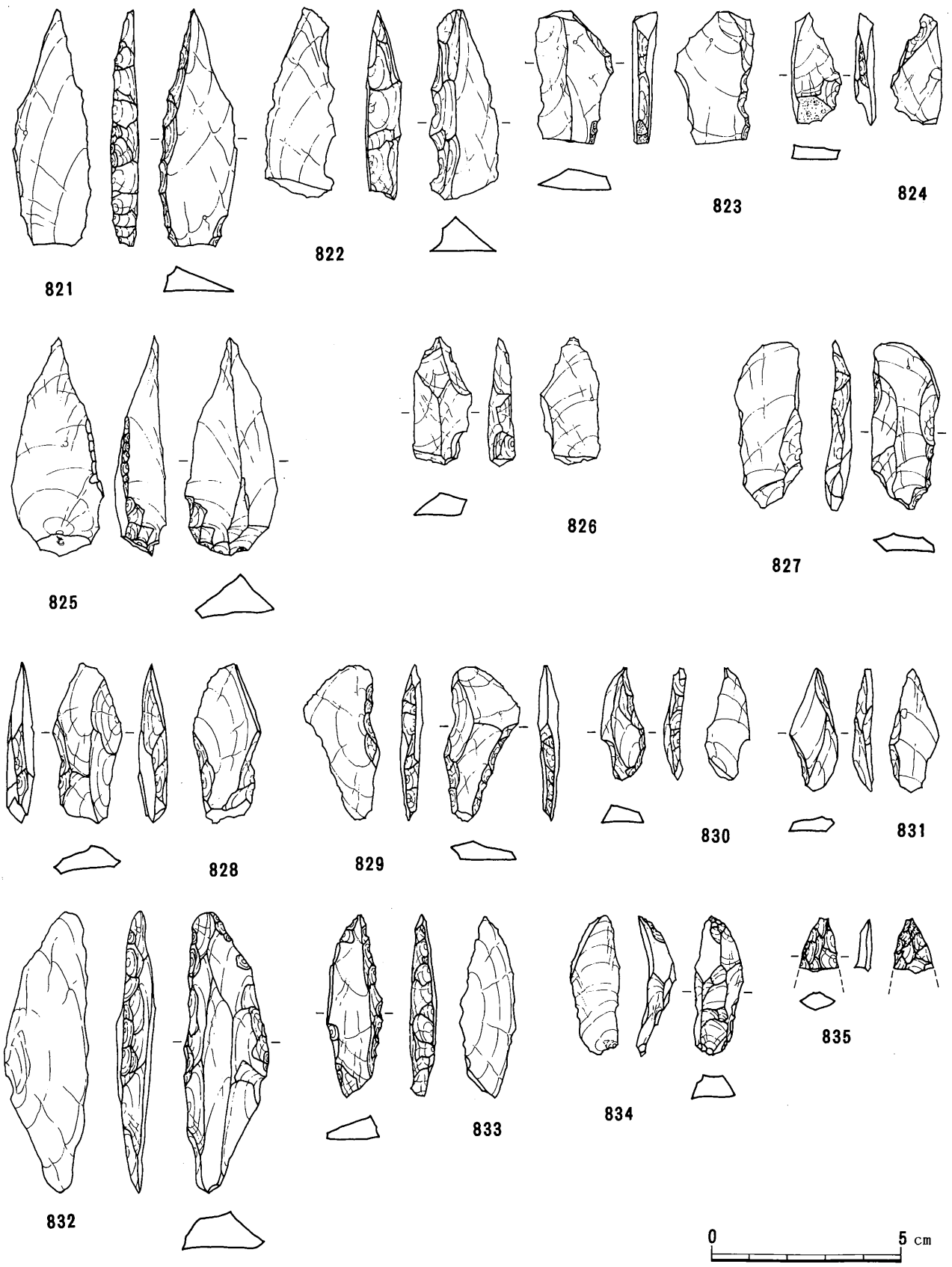
第88図　g 列 遺 物 実 測 図 (16)
785～800（g15下層）



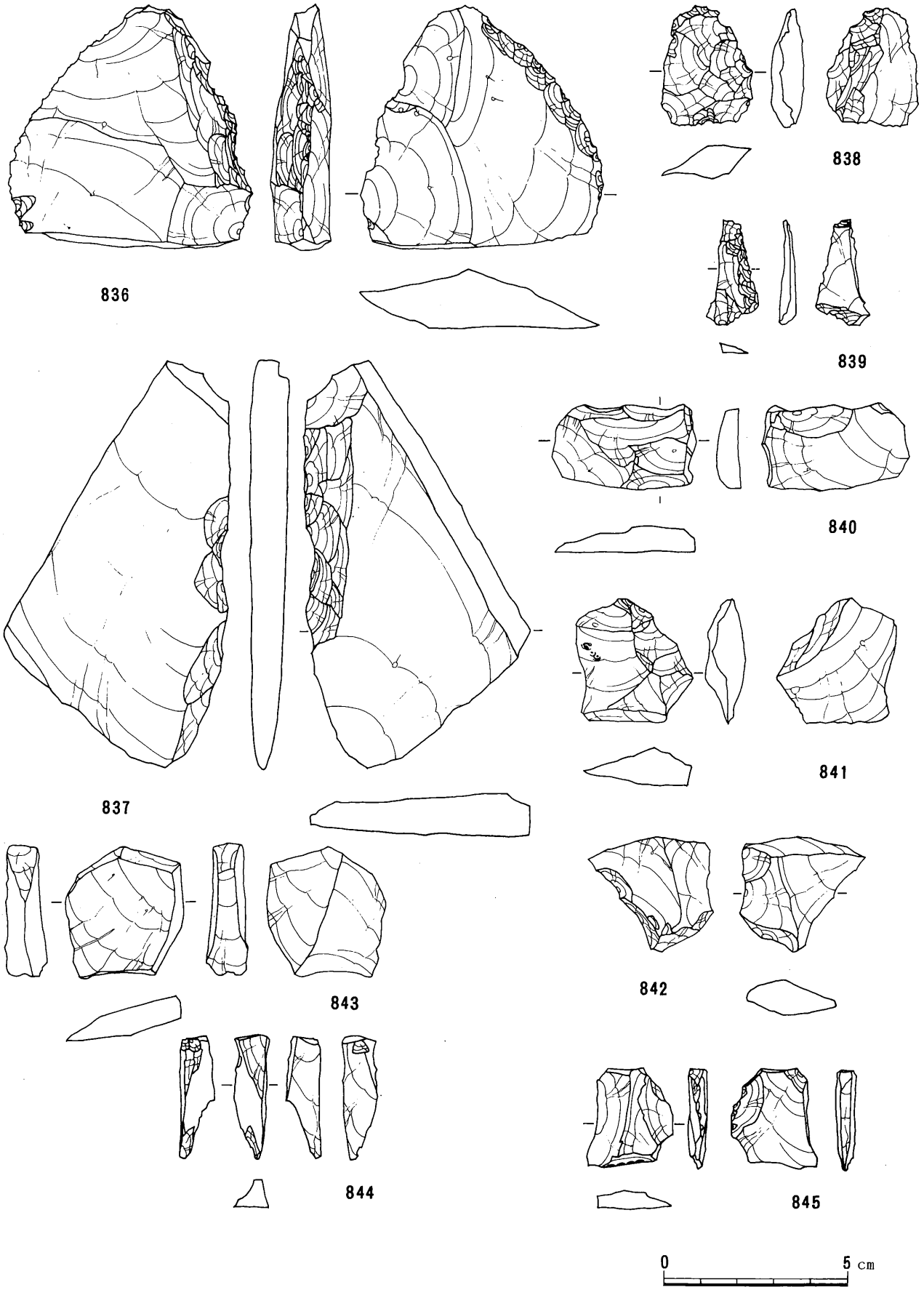
第89図　ｇ列遺物実測図(17)
801～813（ｇ16上層）



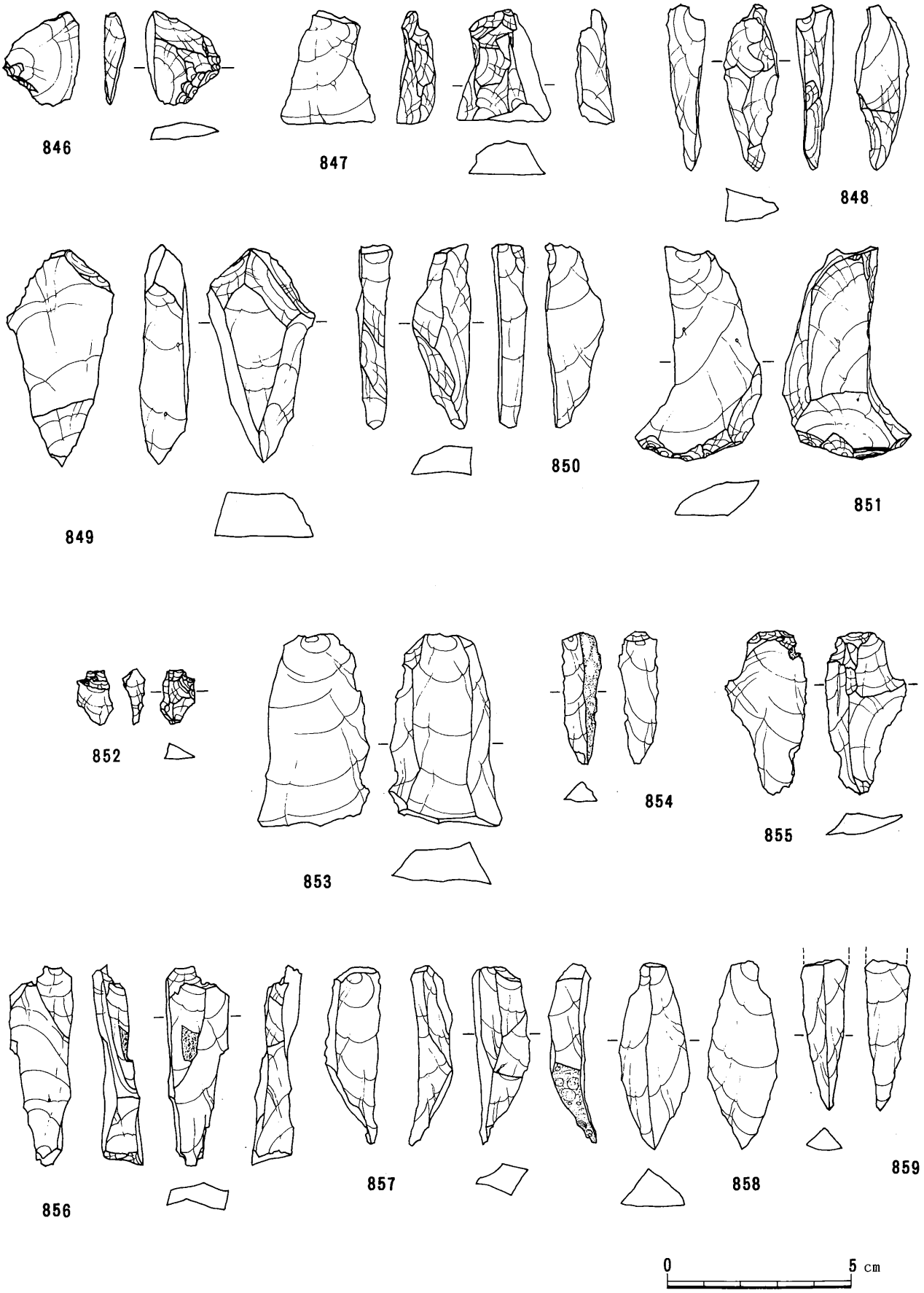
第90図　g 列 遺 物 実 測 図 (18)
814～820（g16上層）



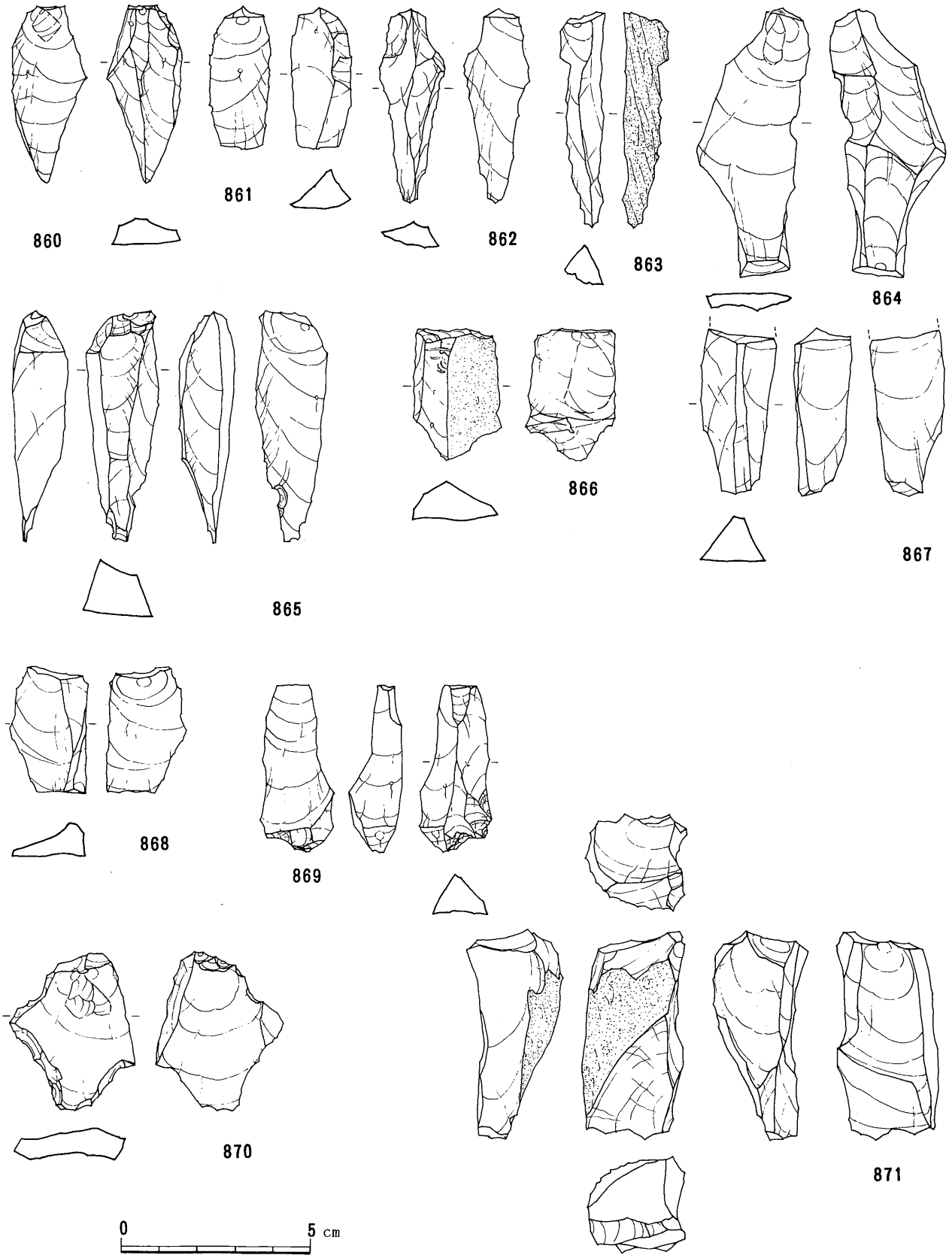
第91図　ｇ列遺物実測図(19)
821～835（g16下層）



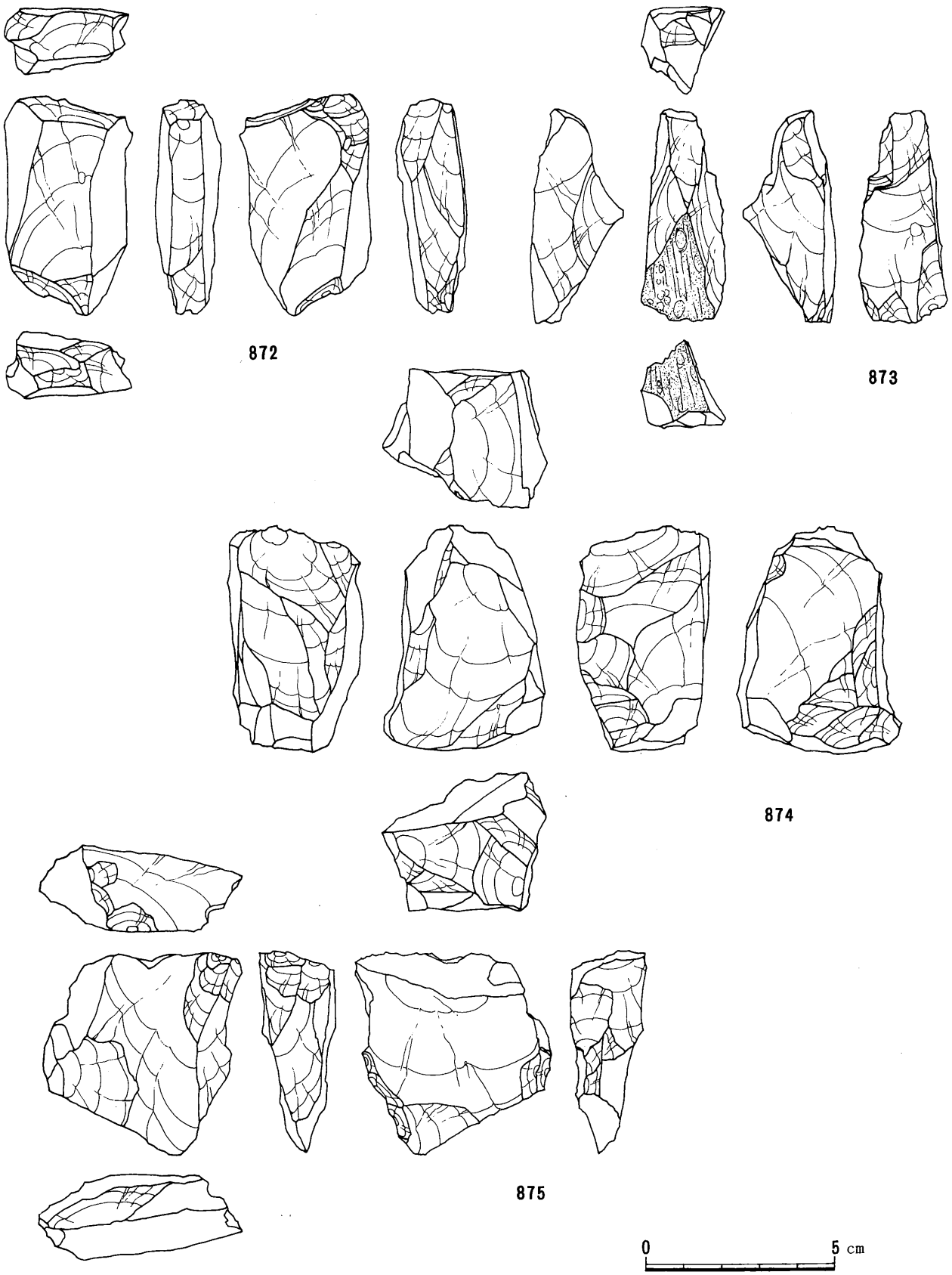
第92図　g 列 遺 物 実 測 図 (20)
836 ～ 845 (g16下層)



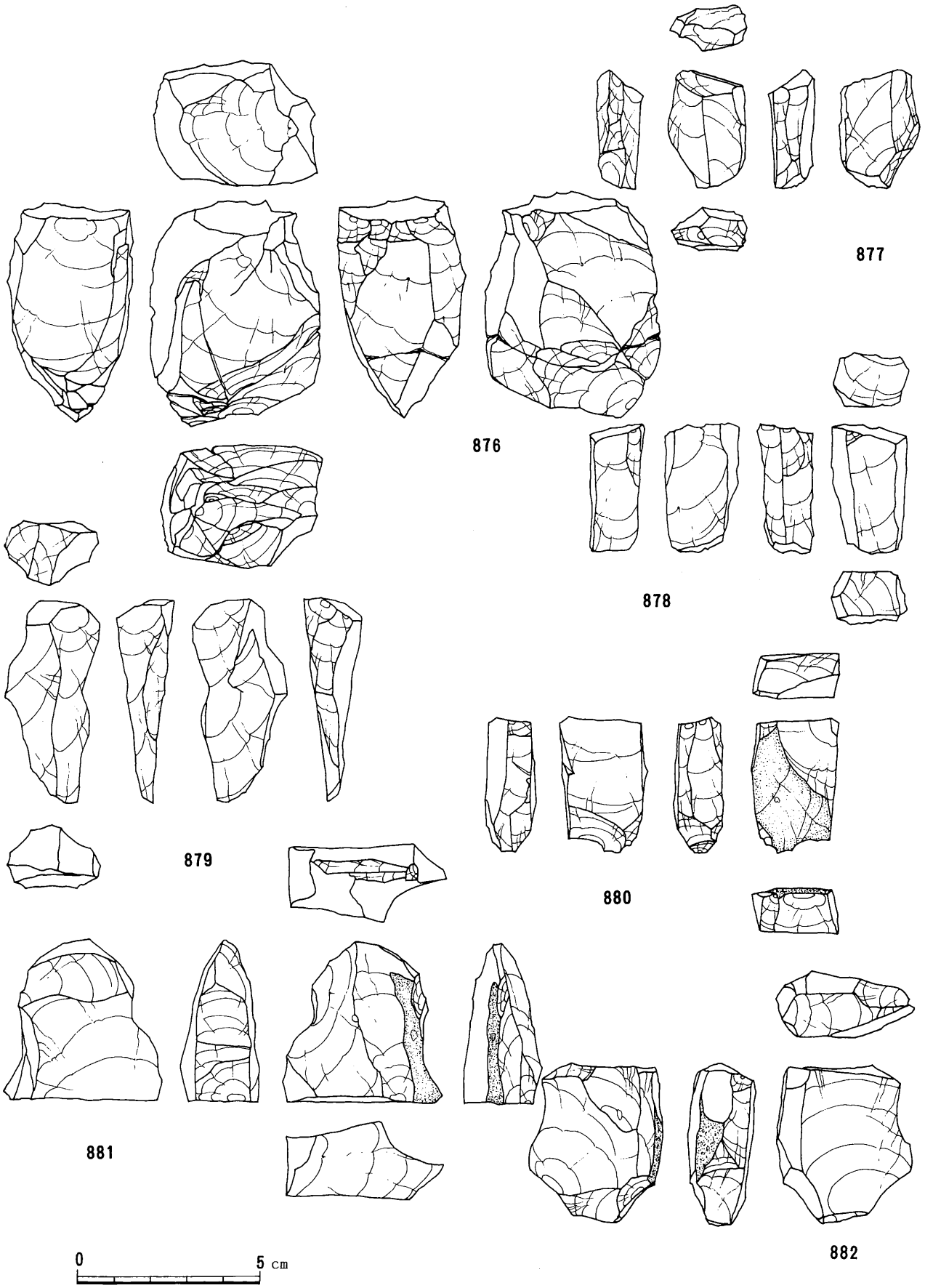
第93図　ｇ列遺物実測図(21)
846～859（ｇ16下層）



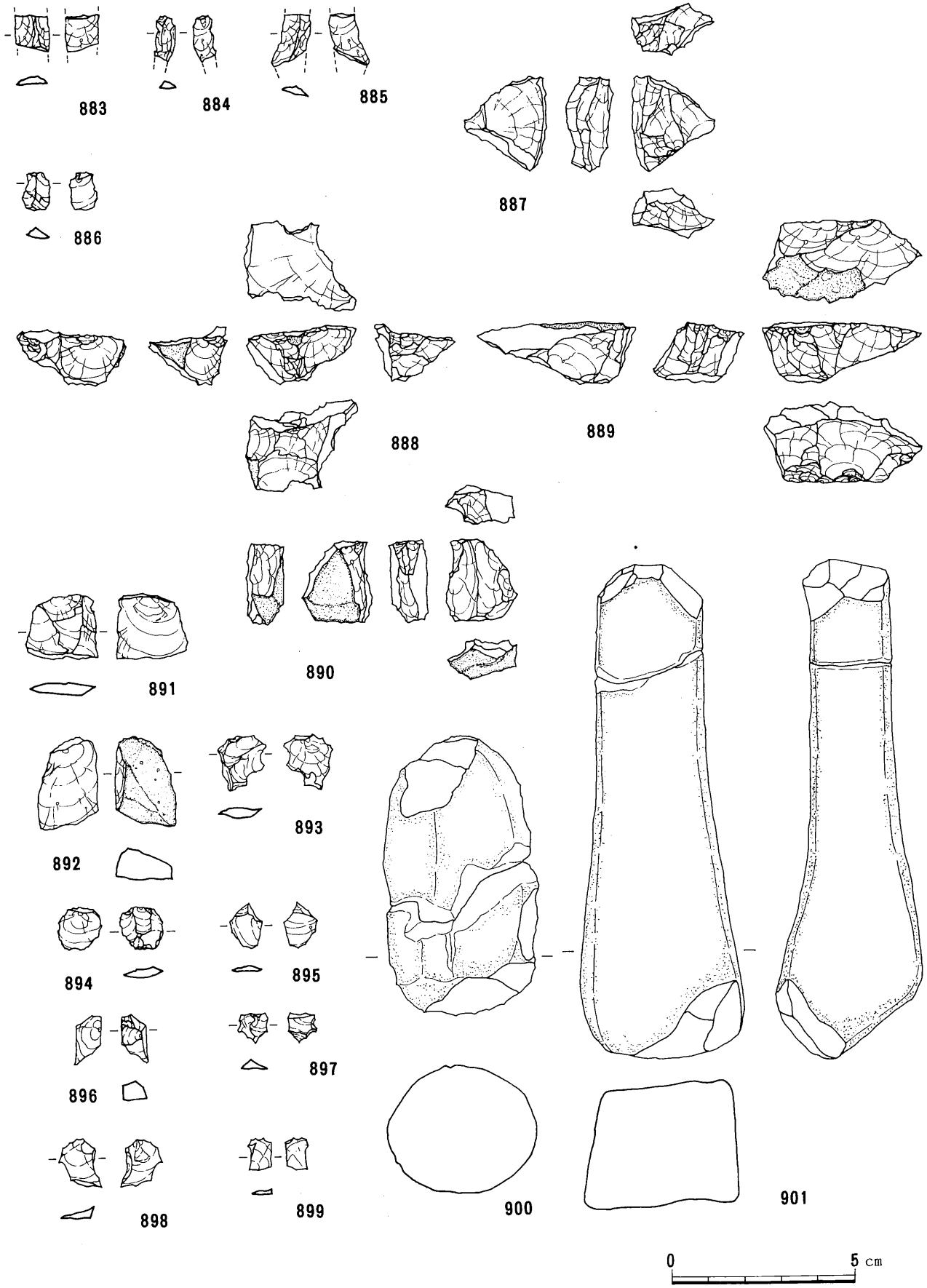
第94図　g 列 遺 物 実 測 図 (22)
860 ～ 871 (g16下層)



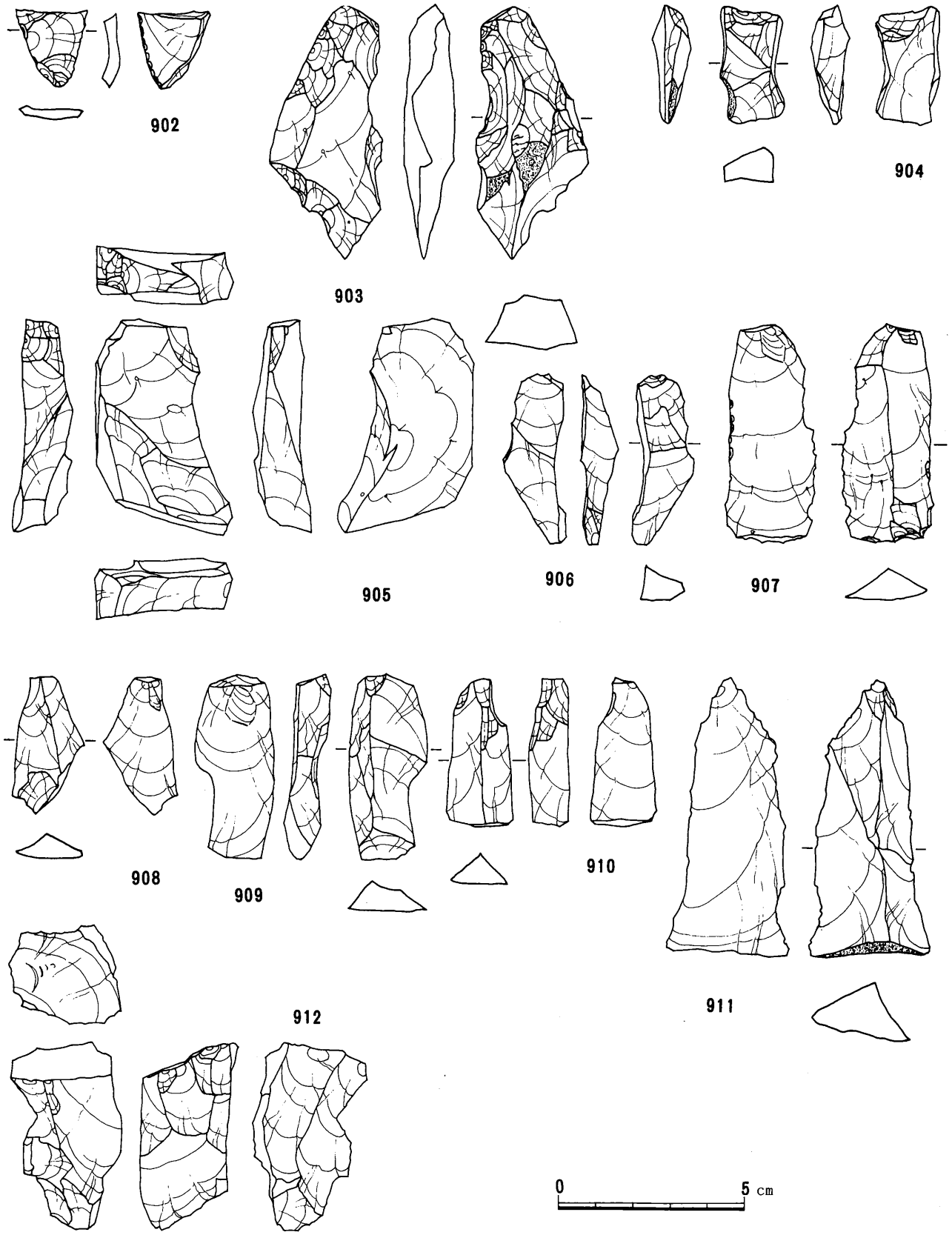
第95図　ｇ列遺物実測図(23)
872～875（g16下層）



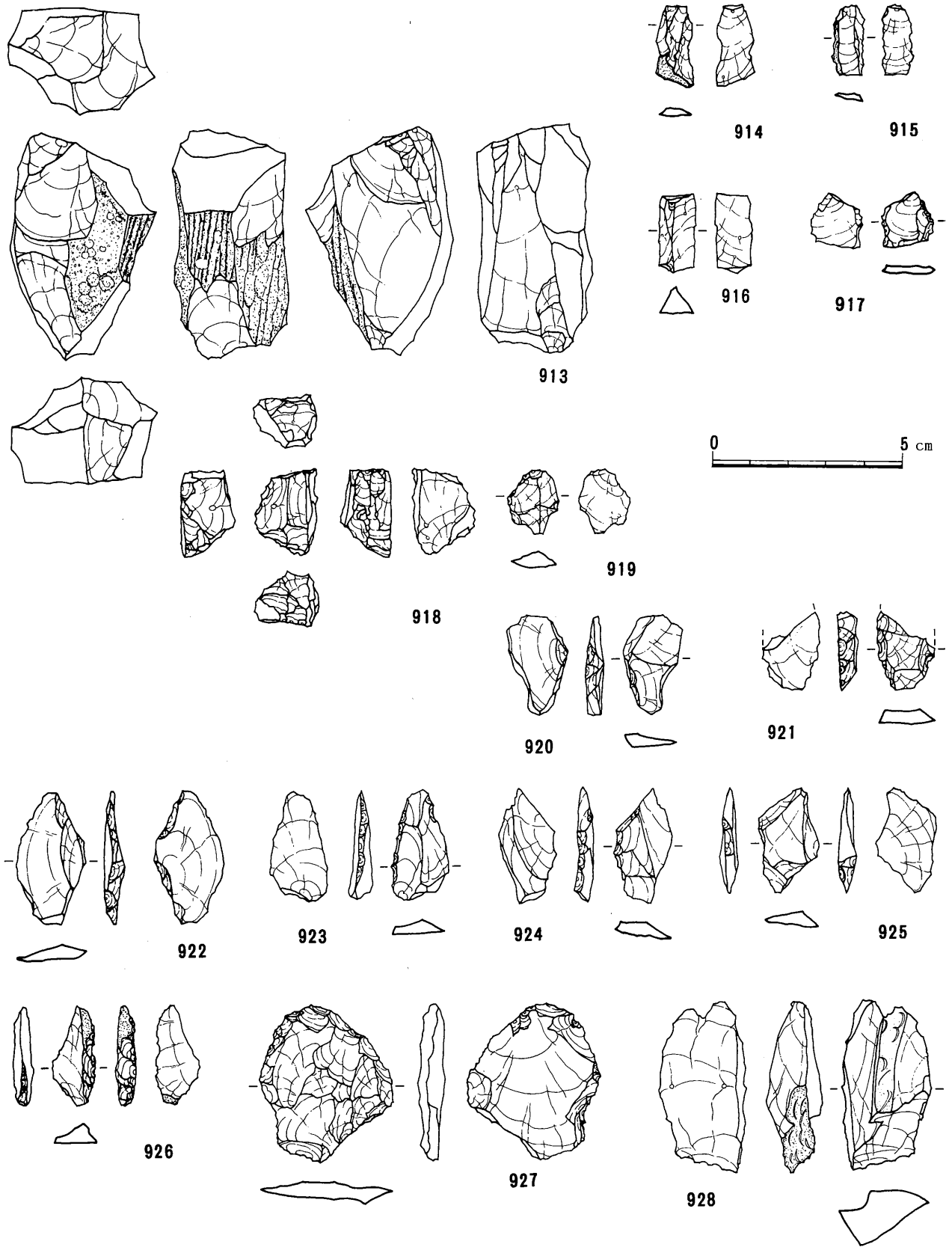
第96図　g 列 遺 物 実 測 図 (24)
876 ～ 882 (g16下層)



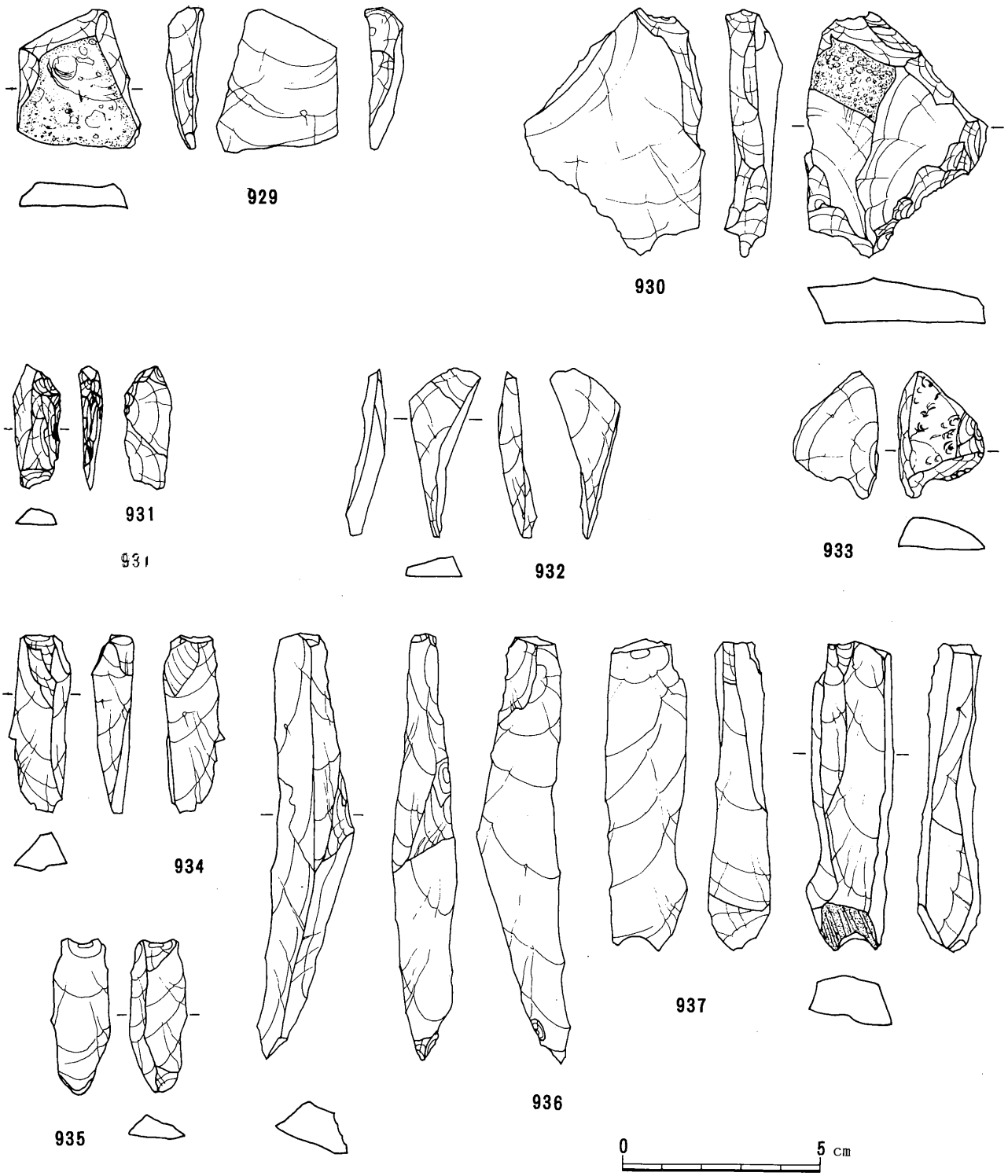
第97図　g 列 遺 物 実 測 図 (25)
883 ～ 901（g16下層）



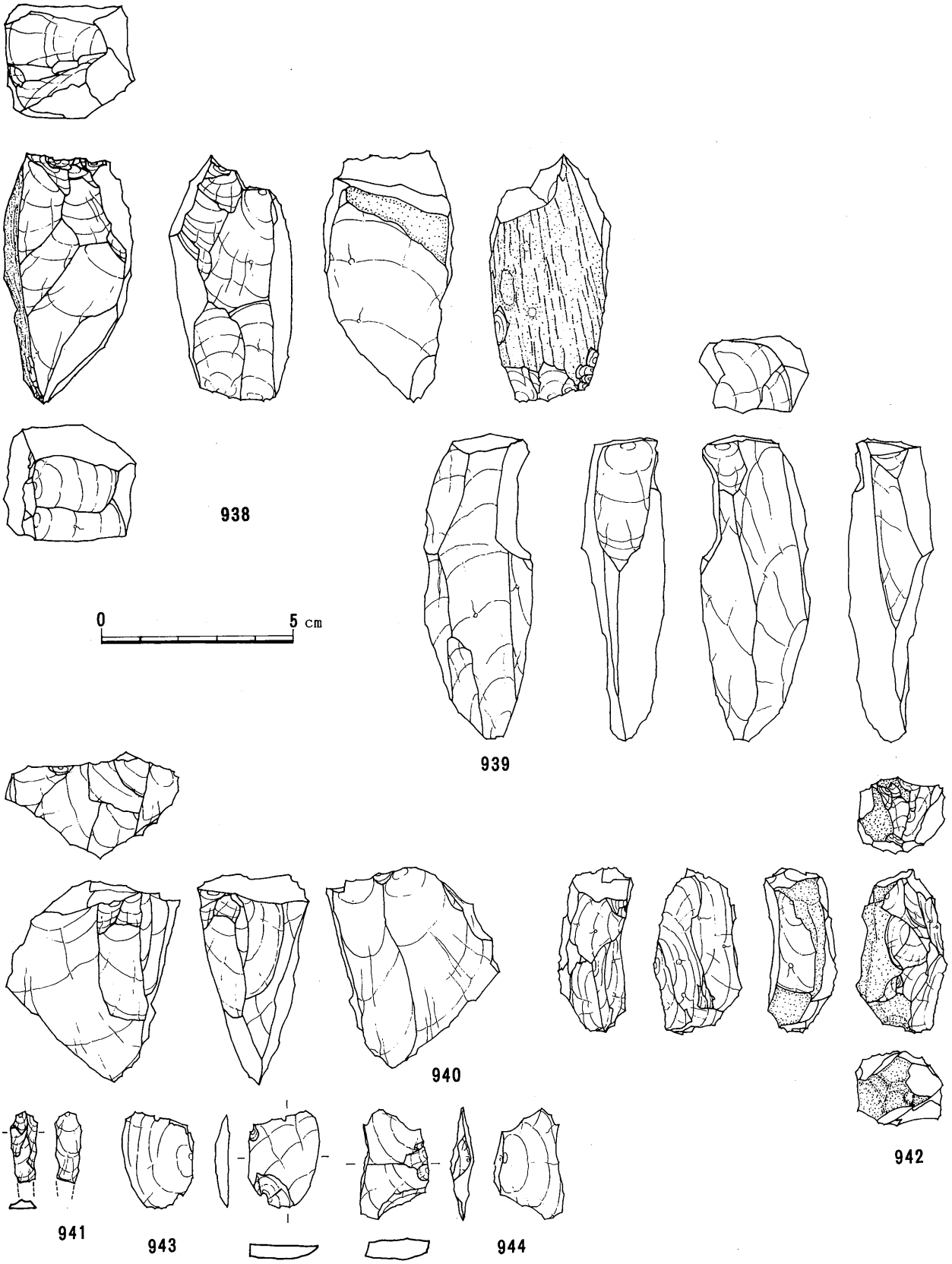
第98図　h 列 遺 物 実 測 図 (1)
902～912（h15上層）



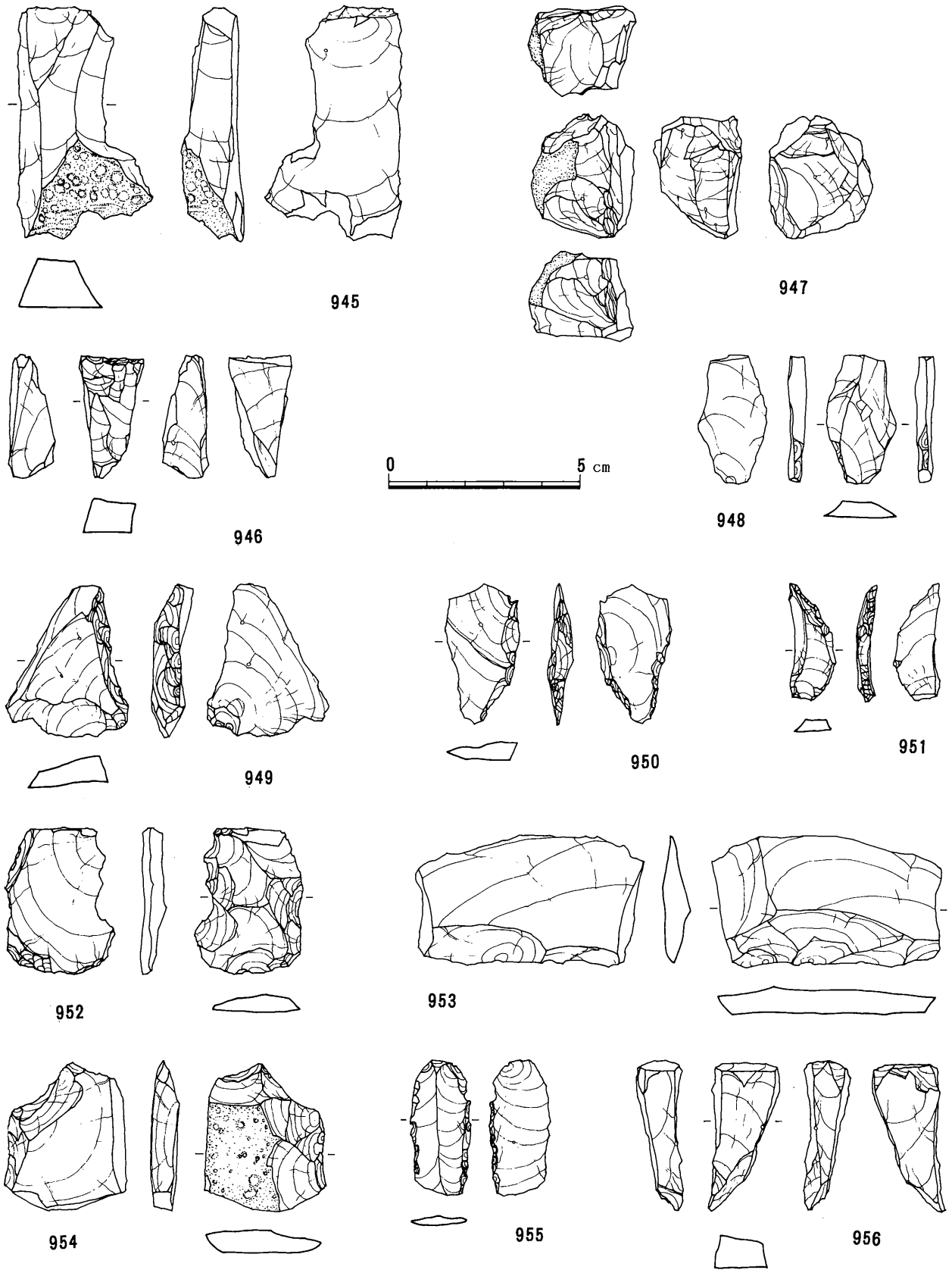
第99図　ｈ列遺物実測図(2)
913～919（h15上層），920～928（h15下層）



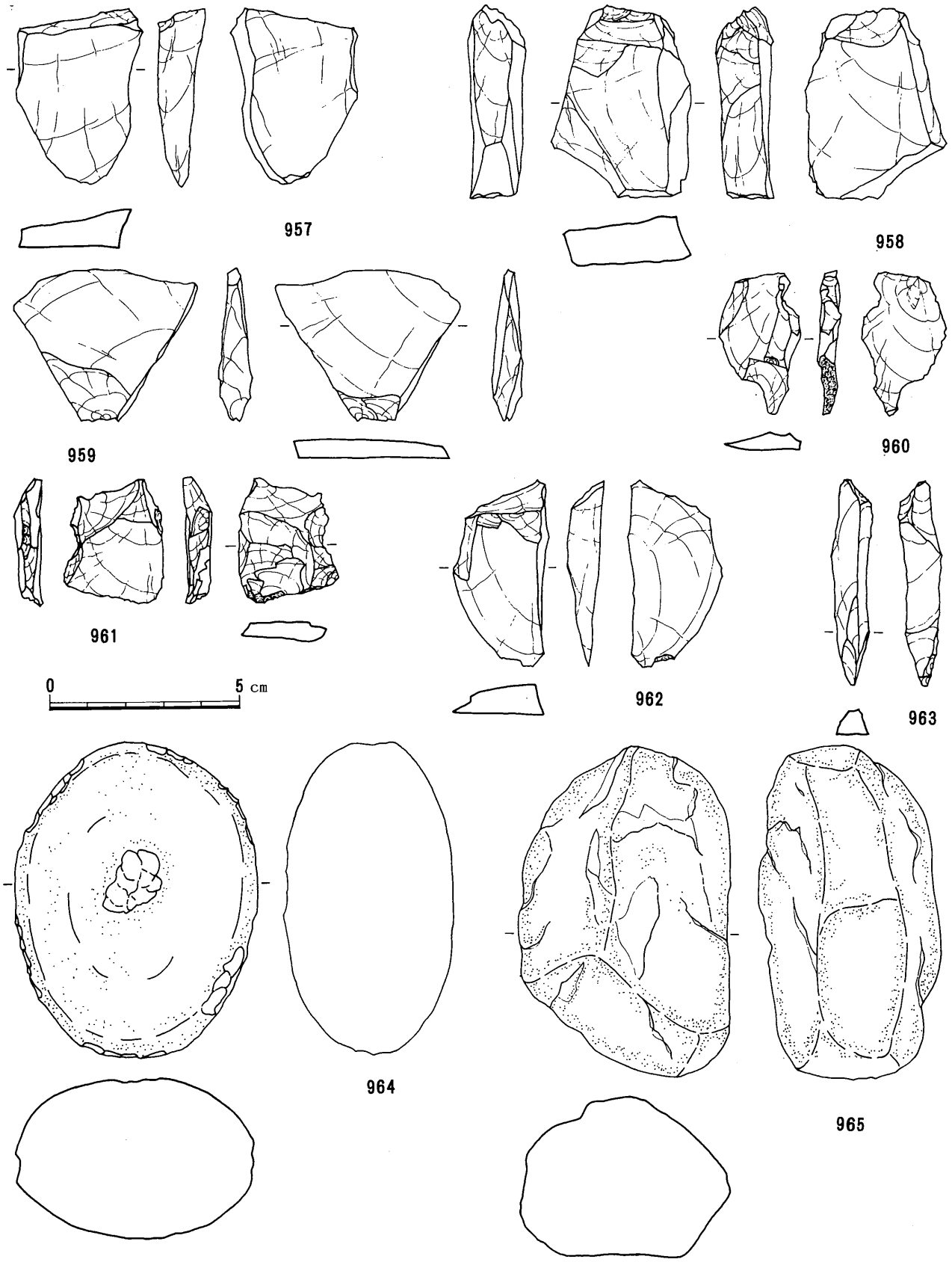
第100図　h 列 遺 物 実 測 図 (3)
929 ～ 937 (h15下層)



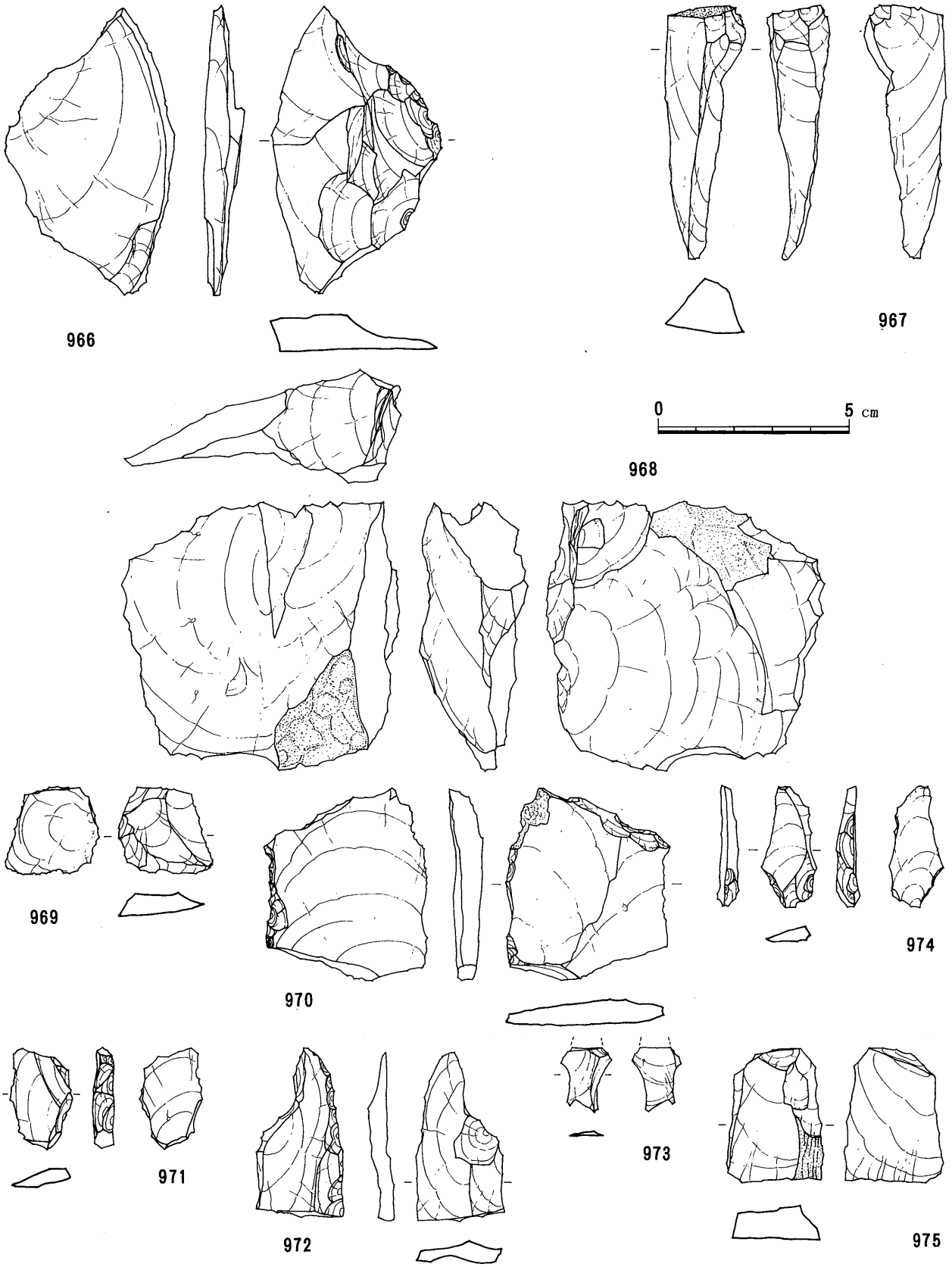
第101図　ｈ列遺物実測図(4)
938～944（ｈ15下層）



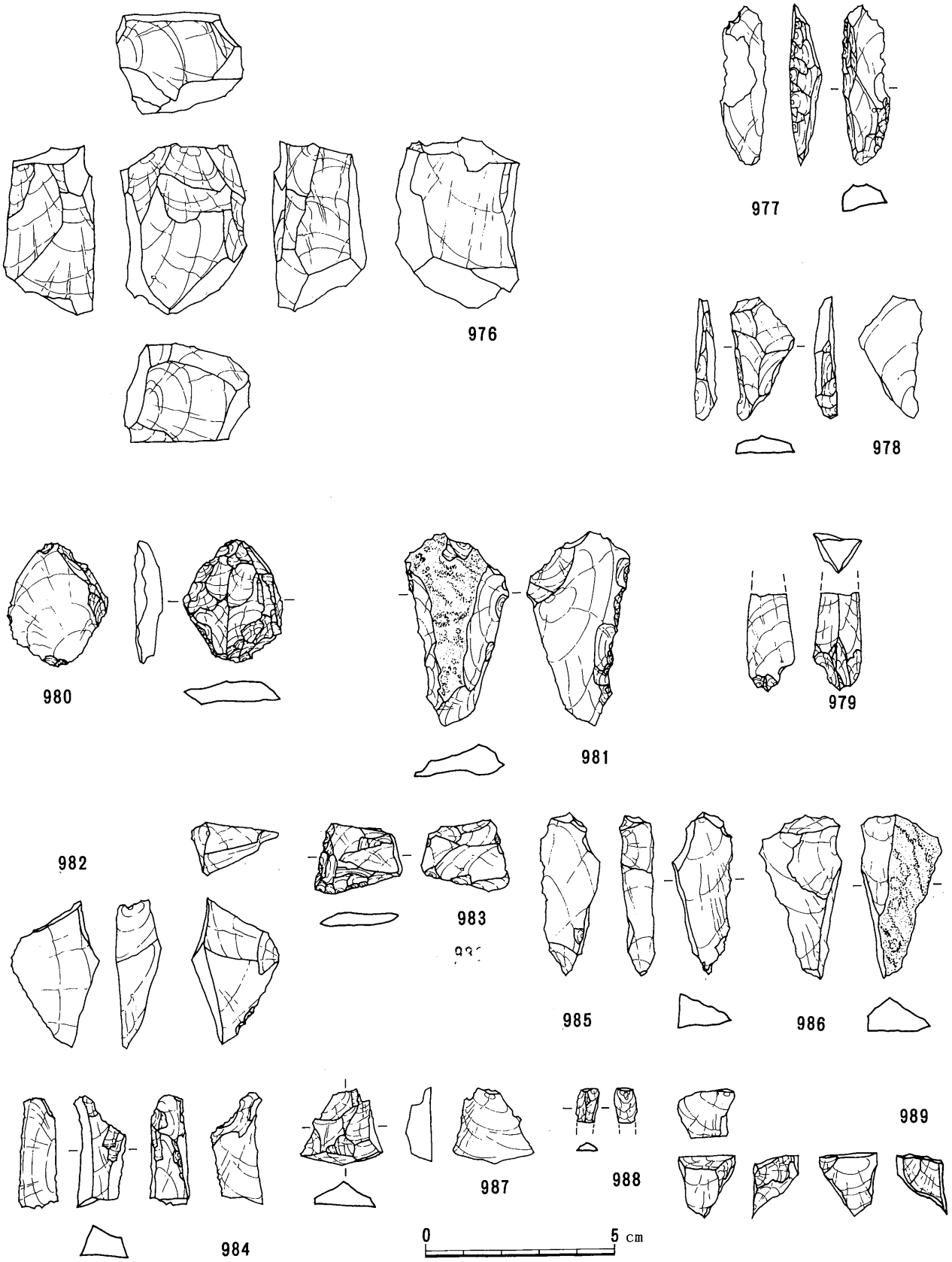
第102図　h 列 遺 物 実 測 図 (5)
945～947（h16上層），948～956（h16下層）



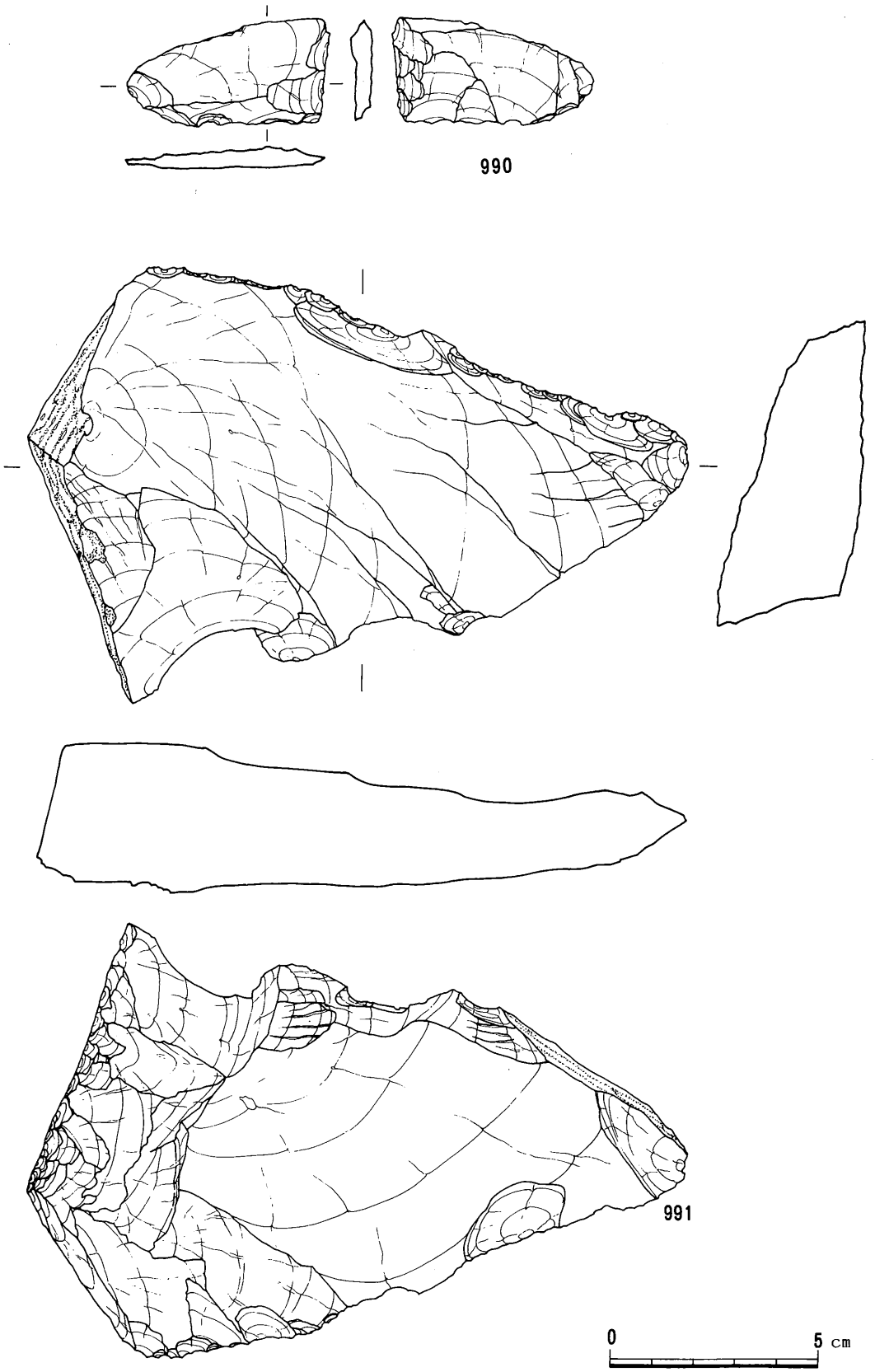
第103図　ｈ列遺物実測図(6)
957～965（ｈ16下層）



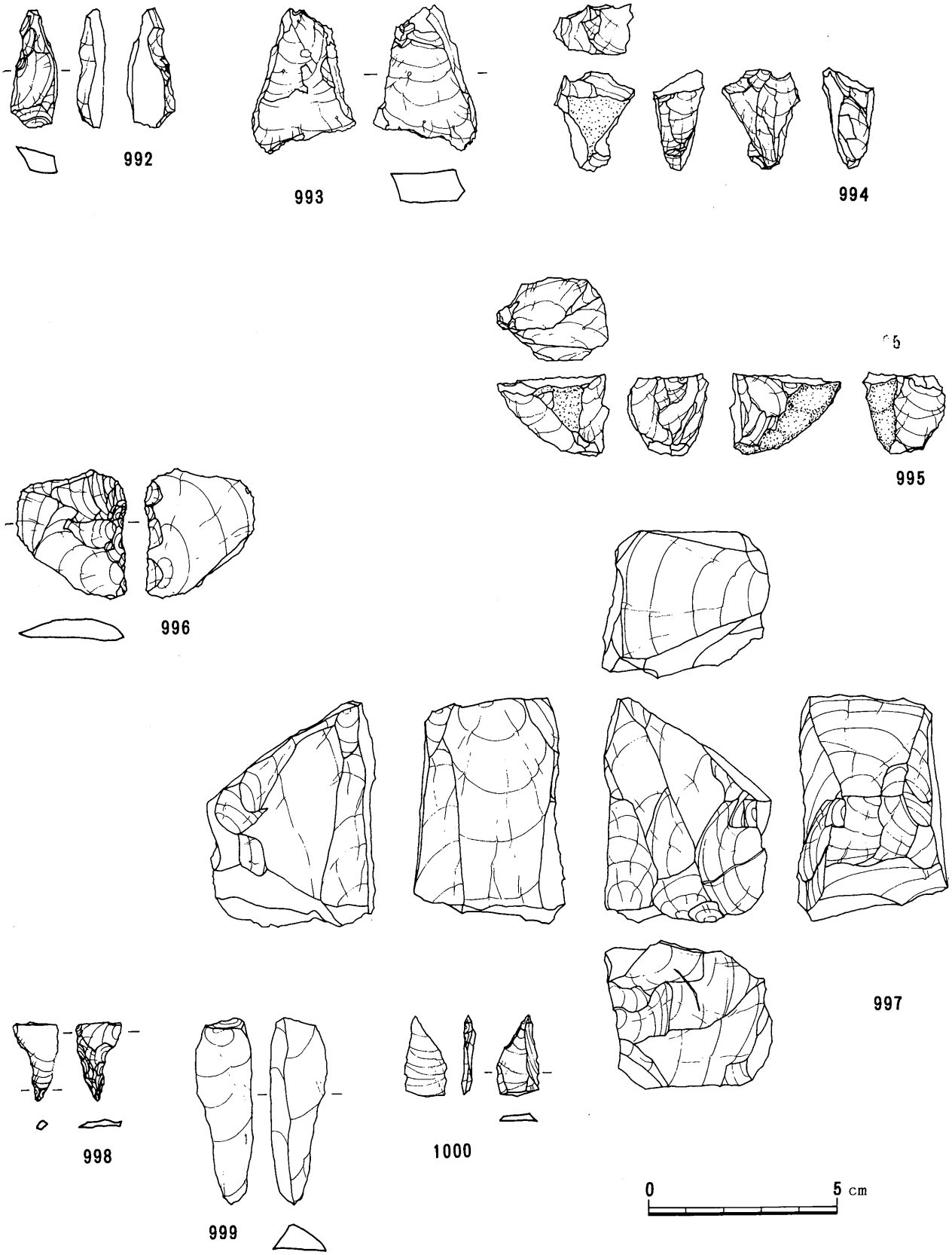
第104図　中央区周辺発掘区遺物実測図(1)
966（a19），967・968（c19），969・970（d19），971～973（e20），974・975（f19）



第105図　中央区周辺発掘区遺物実測図(2)
976（f19），977～989（g19）



第106図　中央区周辺発掘区遺物実測図(3)
990（ｆ４），991（ｂ13）



第107図　中央区周辺発掘区遺物実測図(4)
992～995（b13），996・997（b14），998～1000

3. 小　結

遺物の出土分布を理解する上で，巨視的な分布の把握と石器製作によって形成された石器群単位の細かな分布の検出という両者の視点が必要となろう。巨視的な分布の面では，大浦遺跡では中央部の発掘区に石器群が集中する傾向が認められ，その周辺のトレンチ調査区では非常に稀薄な分布を示す。石器群は中央部の発掘区でもｆ・ｇ列の15・16に特に集中する傾向が認められる。しかも集中した石器類の集中箇所は漫然とした分布ではなく，明確な分布の中心を有するものである。こうした点からすると大浦遺跡の下層の石器群は二次的に包含層が移動・堆積したものではなく平面的には原位置を保っているものと考えられる。また一部に分布のバラツキがあるが，これは特定の器種に認められるものではない。大浦遺跡の現状が畑地であり，撹乱を受けた上層と下層の分離は，発掘調査時点ではなく，土層図と遺物の出土レベルを主に用いて一率に行ったため，生じたものと考えられる。巨視的に見ると各石器群は大浦遺跡の中央部発掘区の特に南半に集中するとすることができる。こうした分布の一致は，地形や遺跡からの周辺の視界などの条件にさほどの差異を想定するのは困難であり，大浦遺跡の石器群は近接した時期の所産であるとすることができよう。

中央部発掘区における石器集中の特色をまとめる。細石刃・細石核はｅ－９・ｄ－11に独立して分布する傾向が認められる。ｆ－15の西部で縦長剥片石核と細石核の類似した分布はあるが，ｇ－15の西部では縦長剥片石核は集中するが細石核は含まれない。ｆ－13・ｇ－13・ｇ－14北部で黒曜石製のナイフの集中する傾向が認められるが，周辺での細石核の集中はなく，逆にｇ－13でサヌカイト製の縦長剥片石核の集中が認められる。またｆ－16東部とｇ－16西部を中心とする石器集中箇所でも黒曜石はｇ－16を中心として分布する。ｆ・ｇ列の15・16グリッドにおける石器の分布にはわずかながら差が認められる。

国府型ナイフ形石器の系譜で理解できる横長剥片素材のナイフ形石器はｆ・ｇ列の15・16グリッドに分布し，横長剥片石核で翼状剥片石核と部分的に共通した要素を有するものと分布が共通する。

こうした分布状況からすれば，ｆ・ｇ列の15・16グリッドの石器集中は少なくとも時期的に２分されると考えられる。しかし，限定された単一時期の所産の石器群を特定し，その組成を明確化するには，接合資料等による母岩を中心とした個々の石器製作に伴う石器群の面的広がりの把握の積み重ねが必要となろうが，個体識別の困難なサヌカイトが多用される遺跡の状況からすれば，それも困難である。降下火山灰層などにより，時期差のある石器群を層位的に分離できないことと合せて備讃瀬戸の島嶼部の遺跡の資料的な限界と言わざるを得ない。

大浦遺跡では，ｅ－９・ｄ－11グリッドにおける細石核を中心とした石器群と，ｅ－13・ｄ－14・ｄ－15グリッドにおける流紋岩を石材とする縦長剥片関係の石器群及びｆ－13・ｇ－13・ｇ－15グリッドを中心とする黒曜石の縦長剥片素材のナイフ形石器とサヌカイト製の縦長剥片・同石核からなるほぼ純粋な石器群が検出されたことを一つの成果を考えたい。またそうした単一時期の石器群の存在を考えると，ｆ・ｇ列の15・16グリッドの各石器の分布の中心の微妙なズレと分布の広がりの差には，時期差のある石器群が重複して存在するとせざるを得ないであろう。ただしその時期差はそれほど長期間の差ではないと考えられる。

第4章　遺　　物

大浦遺跡では約1万点の遺物が出土しており，その多くは旧石器時代に属する。調査面積と比較すれば遺物量は，備讃瀬戸の島嶼部の遺跡においてさほど多い方ではない。約25万点の遺物が出土した羽佐島遺跡[註1]や約14万点出土した与島西方遺跡A地点[註2]と比較すると，むしろ遺物量は少ない部類に属する遺跡である。羽佐島や与島西方遺跡A地点などの遺物量が多い遺跡は，遺跡の存続期間が長期に及ぶと考えられ，羽佐島遺跡では国府期の石器群から細石器・有舌尖頭器に代表される時期の遺物が出土しており，西方遺跡では細石核こそ検出されていないもののほぼ同時期に属する可能性が高いハリ質安山岩製の小形切り出し状ナイフ形石器が出土している。これに対して大浦遺跡では確実な翼状剥片石核や国府型ナイフ形石器は出土していず，交互剥離による横長剥片石核・小形切り出し状ナイフ形石器・細石器などが中心となり，瀬戸内の旧石器文化でも新しい時期の比較的限定された期間の遺跡と考えられる。

出土した石器の多くはサヌカイトを石材とするが，ハリ質安山岩・黒曜石・流紋岩・水晶・チャートなどの石材も使用されている。国府型ナイフ形石器・翼状剥片に代表される瀬戸内技法による石器群やその系譜上で理解される石器群は，ほとんどがサヌカイトを石材とする。そのため国府期を中心とする遺跡の石器群ではサヌカイトへの石材依存度が非常に高い。大浦遺跡の時期的新しさは多種類の石材が使用されていることからも窺われる。

大浦遺跡から出土した遺物としてはナイフ形石器126点，舟底形石器2点，尖頭器17点，スクレイパー76点，石錐5点，彫器4点，截断面ある石器113点，二次調整ある剥片32点，横長剥片石核18点，縦長剥片904点，縦長剥片石核84点，細石刃315点，細石核45点，石核調整剥片69点，細石核ブランク6点，ハリ質安山岩原礫1点，敲き石54点，石鏃38点，石匙2点などの石器と縄文時代早期の土器がある。またそれ以降の遺物も若干出土している。器種別にその様相について報告する。

1.　ナイフ形石器

ナイフ形石器は，折損しているものを含めて126点出土している。瀬戸内のナイフ形石器は横長剥片を素材とするものが中心となるが，大浦遺跡では縦長剥片を素材としたものも多く出土している。また使用された石材もサヌカイトの他，黒曜石・ハリ質安山岩・流紋岩が含まれる。出土したナイフ形石器は素材の剥離法の差は認められるが，その形状は類似するものが多い。ナイフ形石器の分類では，素材となった剥片の剥離法とブランティングによる加工の位置などを基準として分類した。

A型　細身のものが中心で，一方の側縁に刃部，他の側縁の大半にブランティングが施されるもの。

B型　縦長剥片を素材とし，基部にブランティングが施され，両側縁に刃部を有するもの。

C型　外形が三角形の切り出し状を呈するもの。

D型　外形が狭い二等辺三角形状を呈し，底辺に相当する縁辺が刃部となるもの。

E型　横長剥片を素材とし，刃部が隣接する2縁辺からなるもの。

第114図1～16　いわゆる国府型ナイフ形石器の形態と共通する要素を有し，その系譜上で理解されるナイフ形石器である。国府型ナイフ形石器は，翼状剥片を素材とするナイフ形石器と定義される。ナイフ形石器自体から素材となった剥片を想定したり，瀬戸内技法によるものかどうかを判定するには困難さがあり，厳密な意味で国府型と認定することはできない。大浦遺跡では典型的な翼状剥片や翼状剥片石核が出土していないことから，国府期のものは含まれない可能性が高い。ブランティングの部位による分類では，全てA型に属する。石材は10がハリ質安山岩を用いるが，他は全てサヌカイトである。完形のナイフ形石器の長さは，4～7.5 cmまでの分布を示す。

1～4・7・9・11は背面にネガティブな面が残存する。11を除き典型的な翼状剥片とは異なり，背面が複数の面で構成されるものや，腹面と打点の位置が大きくずれるものである。11は背・腹面の打点の位置は近接するものの，底面が残存せず，ブランティングも基部にわずかに施されただけのものである。

5・6・8・10は背面にネガティブな面が残存しない断面三角形状を呈するものである。

国府型ナイフ形石器は瀬戸内技法の剥片剥取の工程上，底面は作業面側に打点を有するポジティブな面からなるものが多い。また国府型ナイフ形石器は背面に腹面の打撃方向とほぼ一致した1面のネガティブな面を残すものが多い。こうした点からすれば，典型的な国府型ナイフ形石器と認定できるものはない。ただ，11は翼状剥片を素材とする可能性も否定できない。

第114図17～28・第115図1～2　翼状剥片とは異なる横長剥片を素材とし，刃部に調整を有しないナイフ形石器である。ブランティングの部位による分類ではA型に属する。いずれも，サヌカイトを石材とする小形のものが多い。背面の剥離面が安定せず，また刃部も階段状剥離のものが存在するなどの特徴がある。素材となった剥片の剥離法も，瀬戸内技法ほど安定していないと推定される。第114図17と第115図2は比較的大形のものである。17は断面三角形を呈し，非常に薄手のものであり，翼状剥片を素材としているとは考えられない。2は素材となった横長剥片の打点と隣接する縁辺を刃部とし，国府型とは考えられない。

第115図3　交互並列剥離石核を転用したもので，石核作業面に若干の調整を加えてナイフ形石器化したものである。サヌカイトを素材とする。

第115図4～10　縦長剥片を素材とし，一側縁全体に調整を施したナイフ形石器である。A型に属する。7はハリ質安山岩を石材とし，8・9は黒曜石，10は流紋岩を石材として用いる。流紋岩質のものが最大で8.7 cmを計るが，他は小形のものである。

第115図11～19・第116図1～22　縦長剥片を素材とし基部に調整を施したナイフ形石器で，B型に属する。第116図11・12はハリ質安山岩，第116図13～22は黒曜石を石材とし，他はサヌカイ

トを用いる。長さは1～9cm代までの分布を示し，大形のものから小形のものまでかなりの差異が認められる。基部だけではなく，先端部の一側面にも調整を施したものが多い。

第116図23～36・第117図1～23　小形切り出し状ナイフ形石器である。外形が概三角形を呈し，その短辺に刃部を有するものである。ブランティング部位による分類ではC型に属する。第117図23はハリ質安山岩を石材とし，他はサヌカイトを用いる。横長の不定形な剥片を素材とするものが多く，縦長剥片を素材とするものは6点である。

第117図24～28　小形切り出し状ナイフ形石器で，外形が幅の狭い二等辺三角形状を呈し，刃部が底辺に相当する部位にあるものである。台形様石器とも考えられる。剥片を折断して成形する手法は認められず，横長剥片の側縁を刃部として利用している。サヌカイトを用いる。D型に属する。

第117図29～39　小形切り出し状ナイフ形石器で，刃部が2縁辺からなるものである。不定形な横長剥片を素材とし，全てサヌカイトを石材として用いる。ブランティング部位による分類ではE型となる。

第117図40～43　不定形な剥片にわずかに調整を施してナイフ形石器としたものと，ナイフ形石器の基部だけが残存したものである。

【石材別の構成】

出土したナイフ形石器を石材別に分けると，サヌカイト106点，黒曜石13点，ハリ質安山岩6点，流紋岩1点となり，サヌカイト以外の石材が16％を占める。備讃瀬戸の遺跡群においては，サヌカイトの産出地である国分台・城山・金山などが比較的近くに存在するため，使用される石材のほとんどがサヌカイトである。特に国府型ナイフ形石器では全てサヌカイトを使用していると言っても過言ではないほどである。備讃瀬戸の遺跡の中で確実に翼状剥片や翼状剥片石核を石器の構成に含む与島西方遺跡A地点や羽佐島遺跡では，ナイフ形石器の石材にサヌカイトが含まれる比率が高い。これに対して，大浦遺跡では黒曜石・ハリ質安山岩を中心としたサヌカイト以外の石材の比率が高い点は注目される。また各石材にも微妙な石質の差が認められる。サヌカイトでは風化が著しく進行して白色を呈するものと，それほど風化せず灰色を呈するものがあり，前者では石理が明確であるという特色を有する。黒曜石ではシマ状の石理が認められるものと漆黒色を呈するものがある。ハリ質安山岩のほとんどは丸味のある自然面を呈するが，一部粗い風化面からなる自然面を有し硬質なものも含まれる。しかし，石質の差と石器の形態差とは対応していないようである。

ナイフ形石器の形態別に石材の使用をまとめる。A型ではサヌカイト32点，黒曜石3点，ハリ質安山岩1点，流紋岩1点となる。B型ではサヌカイト19点，黒曜石10点，ハリ質安山岩2点となる。C型ではサヌカイト34点，ハリ質安山岩1点となる。D型とE型では全てサヌカイト質のものであり，それぞれ5点・13点となる。傾向としては，A・B型に異石材が使用される頻度が高い。

【素材となった剝片について】

石器の素材となった剝片の剝取法によってまとめる。横長剝片を素材とするもの76点，縦長剝片を素材とするもの45点，不明が5点であり，全体の60％を横長剝片を素材とするものが占める。横長剝片と縦長剝片とは1.7：1の比で，ナイフ形石器の素材として使用されている。石材別にみるとサヌカイトでは横長剝片69％・縦長剝片26％・不明5％，ハリ質安山岩では横長剝片50％，縦長剝片50％，黒曜石・流紋岩では全て縦長剝片となる。サヌカイトでは横長剝片が，またサヌカイト以外の石材では縦長剝片の比率が高くなる。

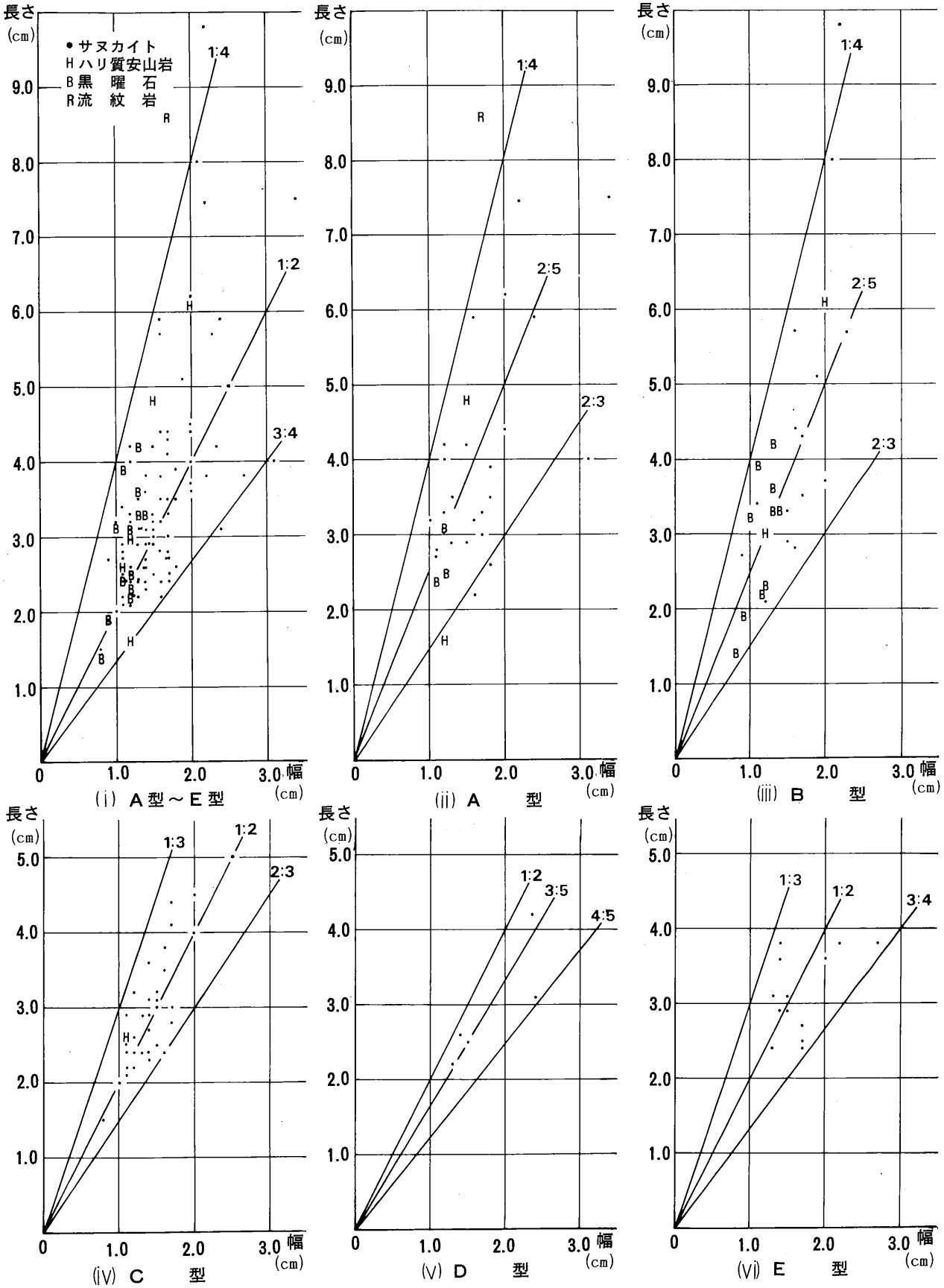
ナイフ形石器の形態別にまとめると，A型では横長剝片を素材とするものが76％・縦長剝片を素材とするものが21％・不明3％となり，C型では横長剝片77％・縦長剝片17％・不明6％，D型では横長剝片80％・不明20％となる。小形切り出し状ナイフ形石器であるということでC・D型を合計すると横長剝片素材が78％，縦長剝片を素材とするものが15％，不明が8％ということとなり，A型の構成比と共通する。

【大きさについて】

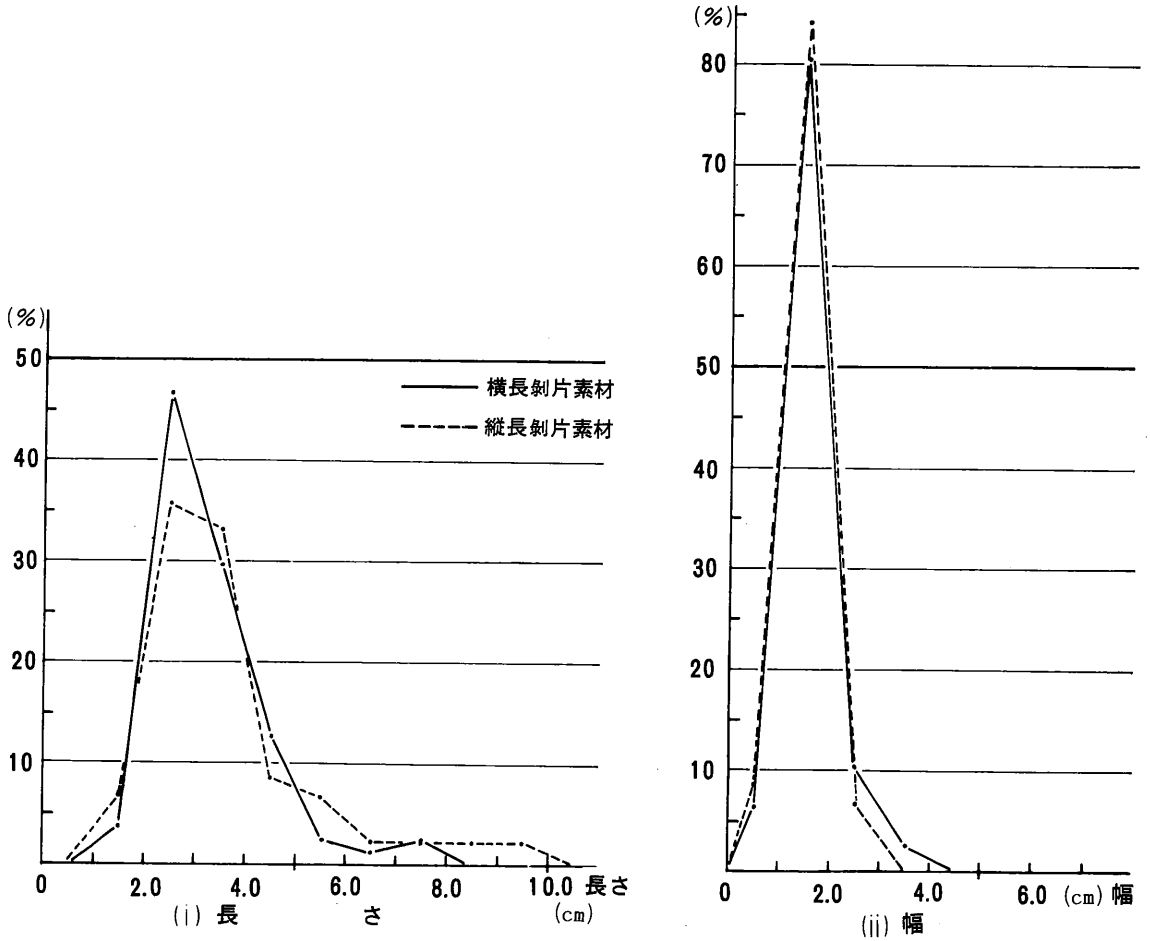
第108～112図はナイフ形石器の長さと幅の分布をグラフ化したものである。大浦遺跡出土のナイフ形石器は小形のものの比率が高く，大形のものほど数量的には減少する傾向を示す。素材となった剝片の剝取法でみると，横長剝片を用いたナイフ形石器は長幅比が1：2を中心として1：4～4：5の比率の間に分布する。長さは7.5cm以下，幅は3cm以下にほぼ含まれる。幅で3cmを越えるものが2点含まれるが，1点は折損した剝片を再利用したものであり，他の1点は素材となった剝片の打点が残存する。いずれも刃部に使用痕と考えられる小剝離痕を有し，大浦遺跡出土のナイフ形石器の中でも例外的なものである。縦長剝片を素材とするものは長幅比が3：7を中心として分布し，1：5～3：4の中に含まれる。最も長いもので9.9cm，最も幅広いもので3.5cmを計る。縦長剝片を素材とするものの方が長く，横長剝片を素材とするものは幅が広い傾向を示すが，大半は重複した分布を示し，それほどの差異はない。

各形態ごとに長・幅の分布をみると，A・B型及びC～E型は類似した分布パターンを持つ。A・B型ともに長幅比が2：5を中心とした分布を示す。5cm以上の長さのナイフ形石器でも2cm前後の幅を持つものが中心となり，大形のものほど幅のわりには長いものが多くなる。またA・B型ともに長さが5cmを越える大形のものを含む点で共通し，A型では長さ8.7cm，B型では9.9cmのものが最大である。C～E型は小形切り出し状ナイフ形石器という点では共通しており，長・幅の分布は概類似している。長さの面ではいずれも5.0cm以下，幅も3.0cm以下に納まるが，長幅比の面ではC型が1：2を中心として1：3～2：3の分布を示すのに対して，D・E型ではやや幅広な分布を示す。

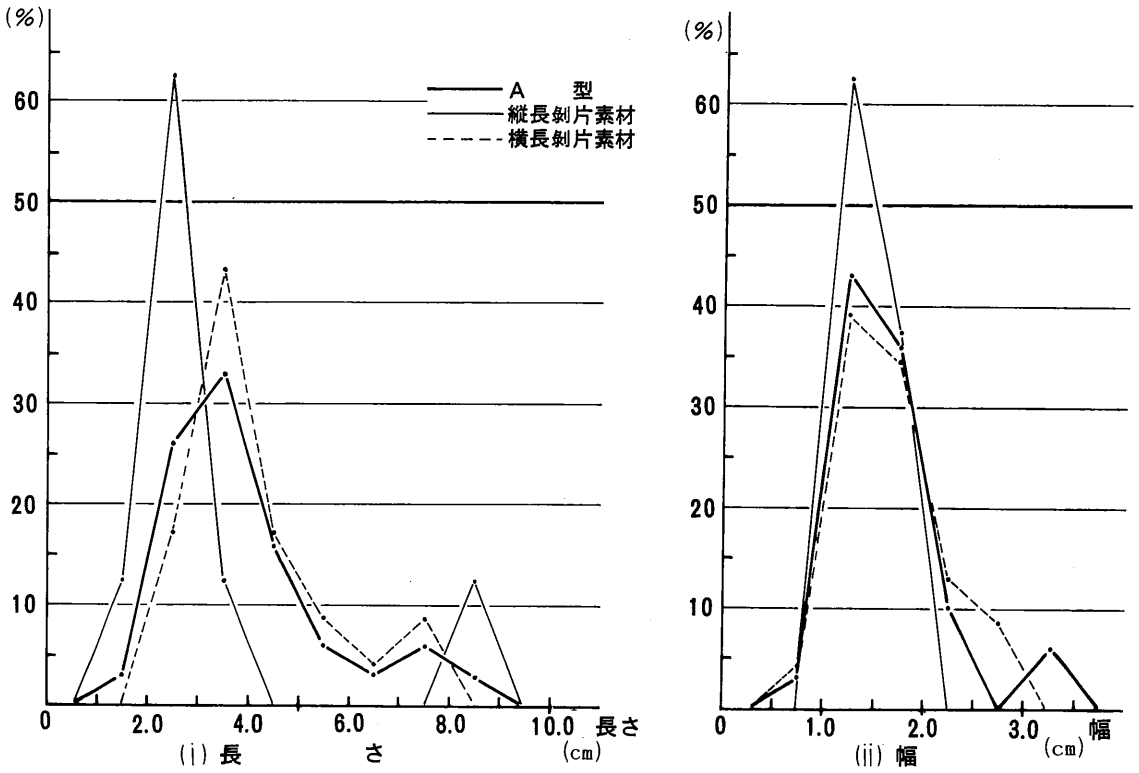
石材別にみると黒曜石やハリ質安山岩を石材としたものは，小形のものが中心となる。これに対して，サヌカイト質では大形から小形のものまで存在する。また流紋岩質のものは1点だけであるが大形のものである。黒曜石やハリ質安山岩質の石器が小形であるのは，原礫



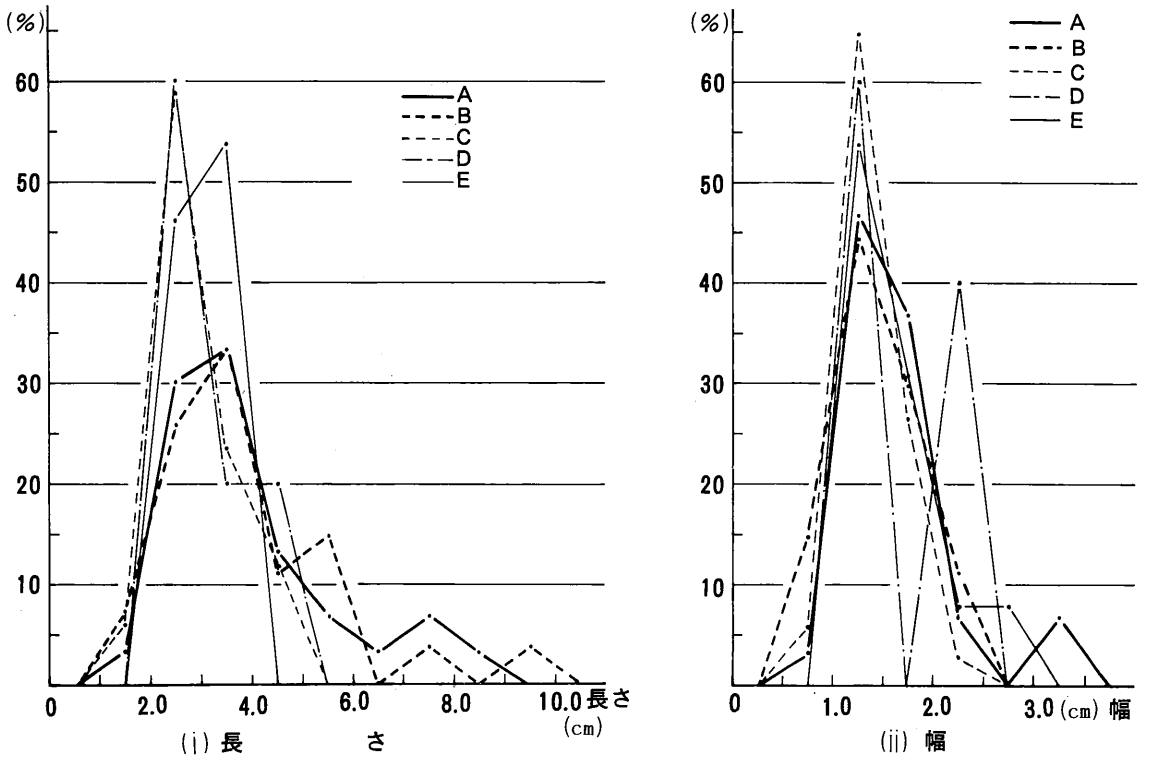
第108図　ナイフ形石器長幅分布図



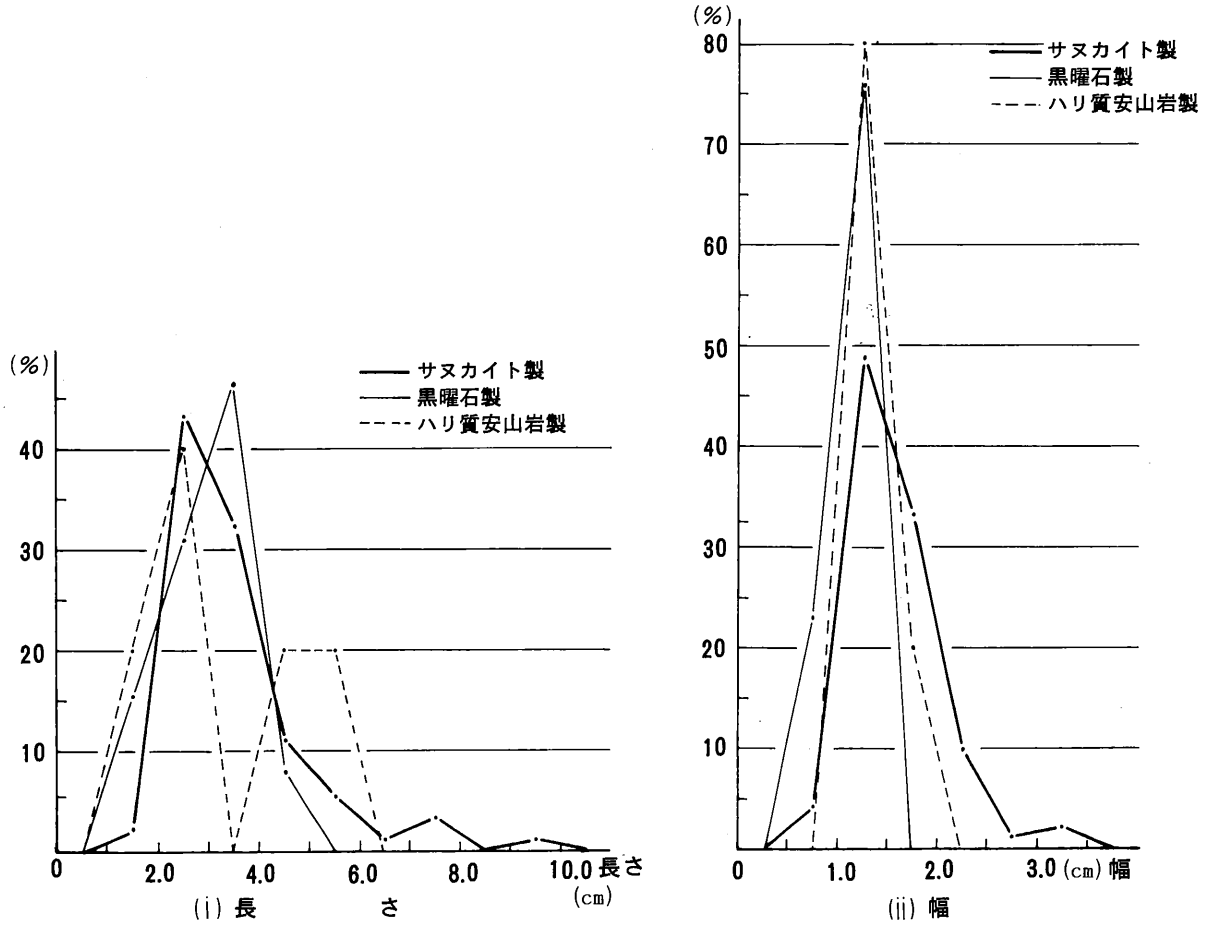
第109図　ナイフ形石器素材別長さ・幅構成比



第110図　ナイフ形石器A型及び素材別長さ・幅構成比



第111図　ナイフ形石器形態別長さ・幅構成比



第112図　ナイフ形石器石材別長さ・幅構成比

の大きさにもよると考えられる。羽佐島遺跡で出土したハリ質安山岩の原礫は，海峡部では最大であるが，長さ約6cmを計る。使用された原礫もせいぜい拳大程度のものと考えられる。黒曜石も同様であろう。[註3]

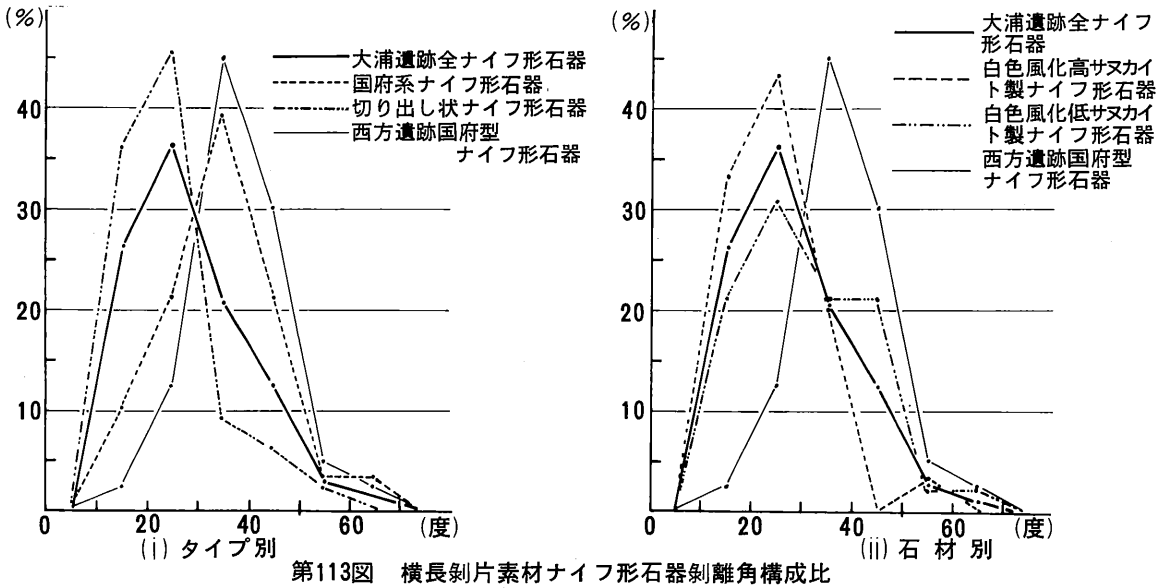
【剥離法との関係について】

黒曜石と流紋岩を石材とするナイフ形石器に対応する石核は認められない。黒曜石は石核自体が出土していない。また流紋岩質のナイフ形石器（第115図10）は大形で，主要剥離面の残存状況からすれば，素材となった剥片は，幅3cm前後の明確な縦長剥片と考えられる。流紋岩質の縦長剥片石核は2種類あるが，明確な縦長剥片を剥取した石核では剥離痕が小さすぎ，他の石核では出土したナイフ形石器に認められるような安定した剥片剥離は行われていない。対応する石核は出土していないものの，流紋岩の出土はd－14グリッドを中心としている点は注目される。

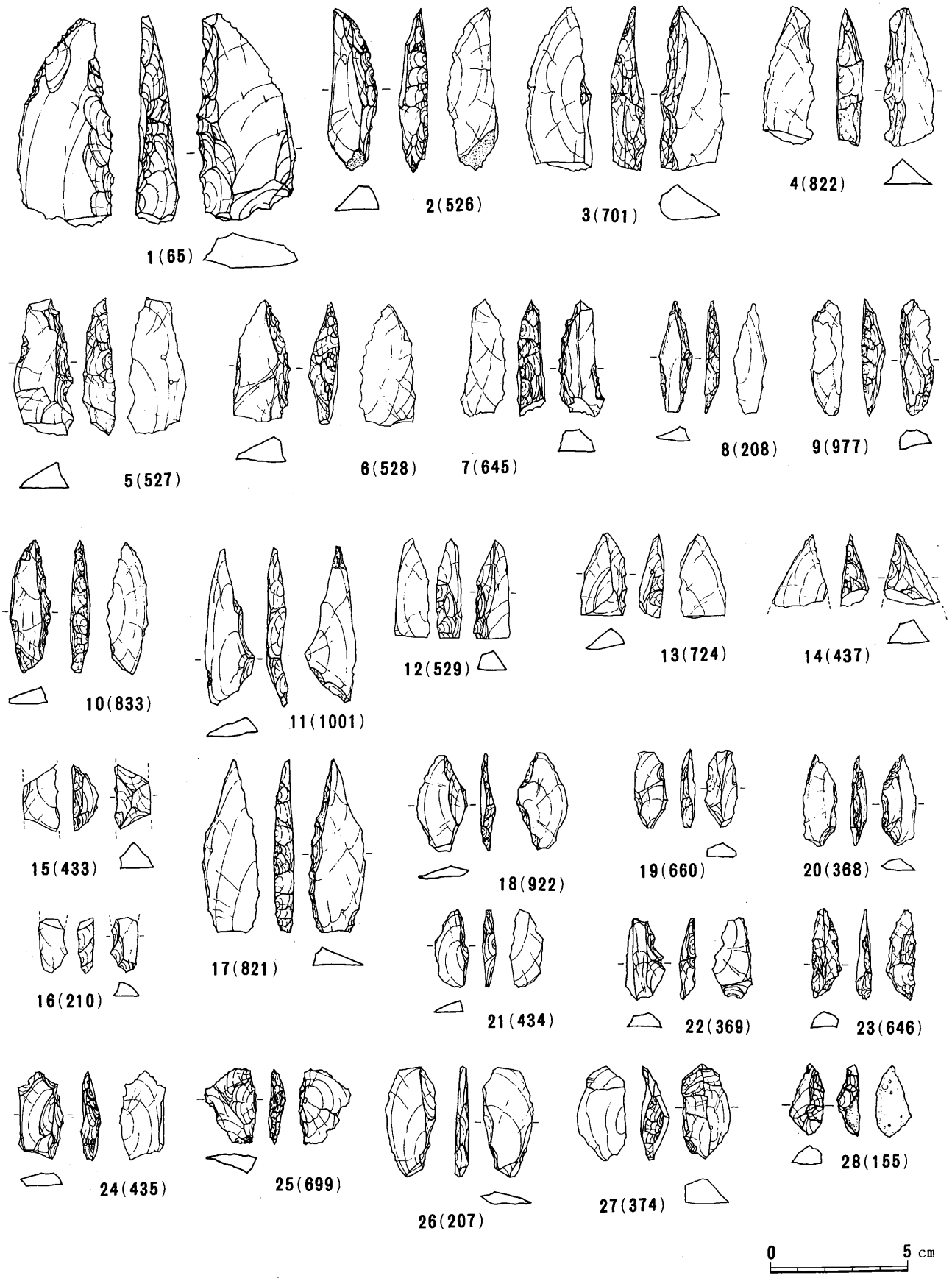
横長剥片を素材とするナイフ形石器の大半は非常に不定形な剥片を素材とするものが多い。C～E型のナイフ形石器では素材となった剥片の打点とナイフ形石器刃部の位置関係は一定していない。国府型ナイフ形石器のように，素材となった剥片の末端部が刃部となるものはC～E型では20点しかなく，打点と隣接する縁辺を刃部とするものは24点含まれる。ほぼ同数の比率となり，剥片剥取法の不安定さが窺われる。また刃部が階段状剥離をしているものや折損した剥片も用いられており，素材にそれほどの規格性は認められない。

また素材となった剥片の主要剥離面と底面のなす角度は，国府型ナイフ形石器では35°を中心とするのに対して，特にC～E型では20°～30°のものが多い点も注目される。この剥離角の浅さは，出土した白色風化サヌカイト質の石核に認められ，対応するものである。

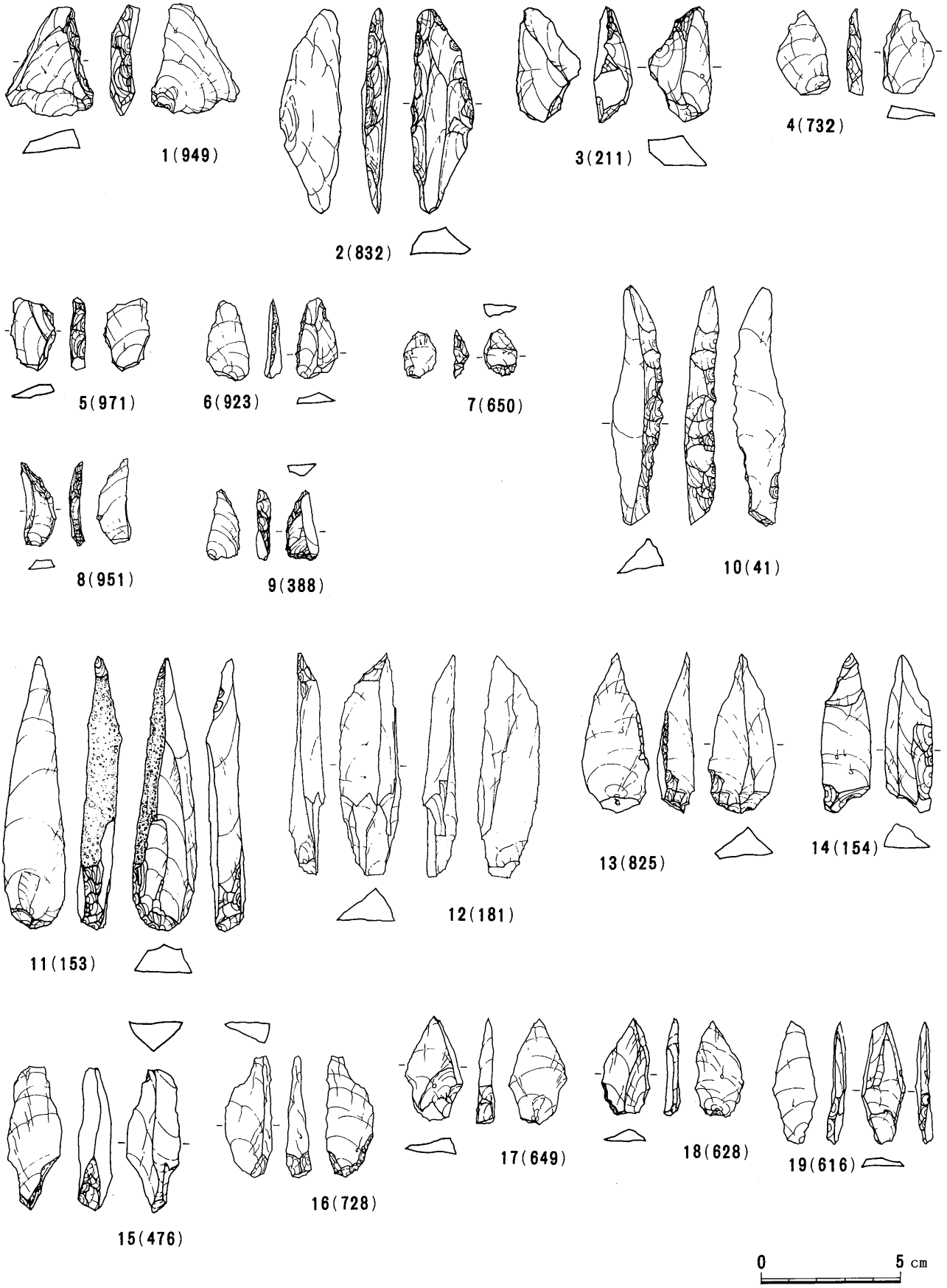
大浦遺跡出土の横長剥片を素材とするナイフ形石器は不安定な剥片を素材とするものが多く出土した交互並列剥離石核と対応すると考えられる。



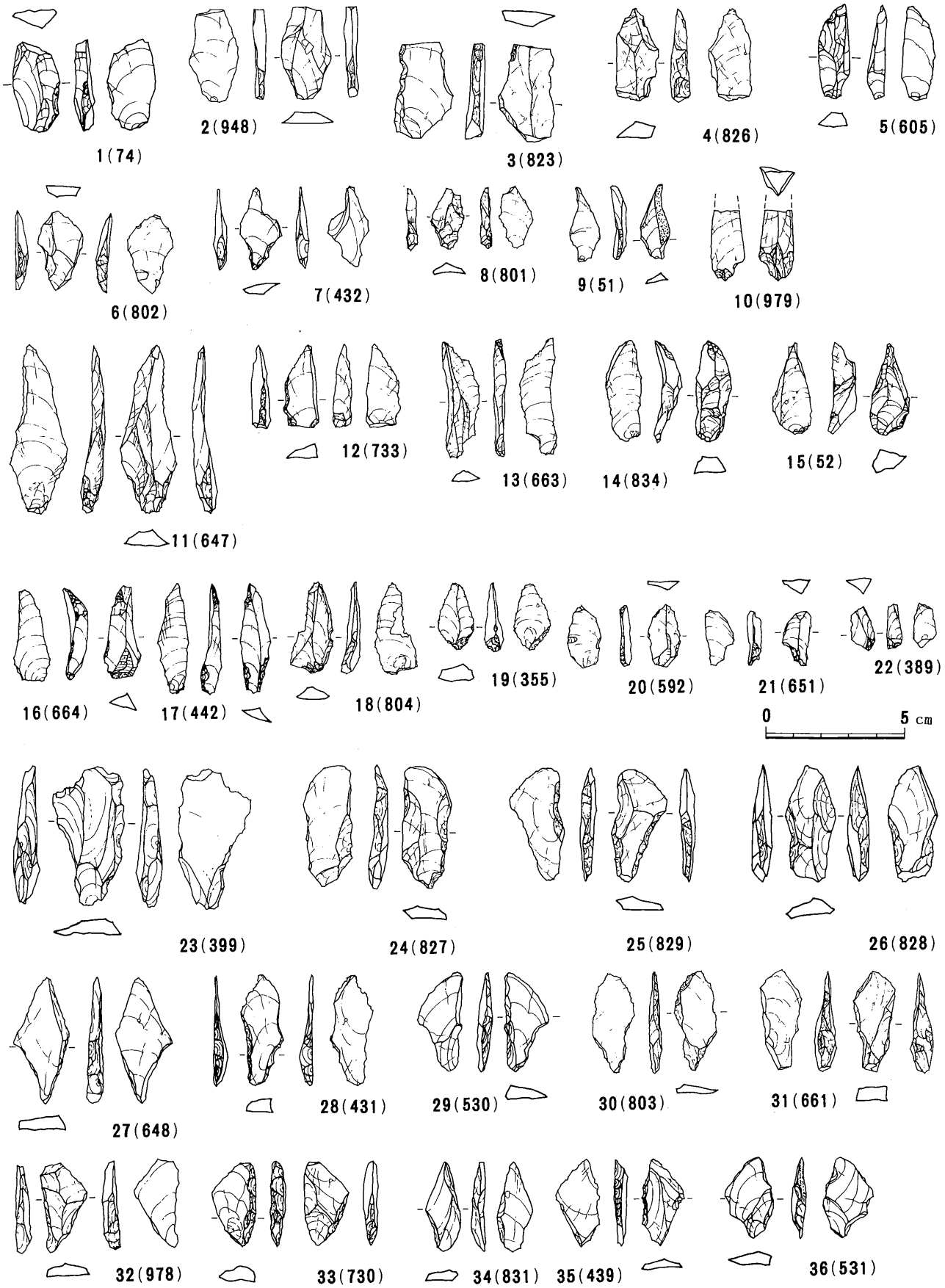
第113図　横長剥片素材ナイフ形石器剥離角構成比



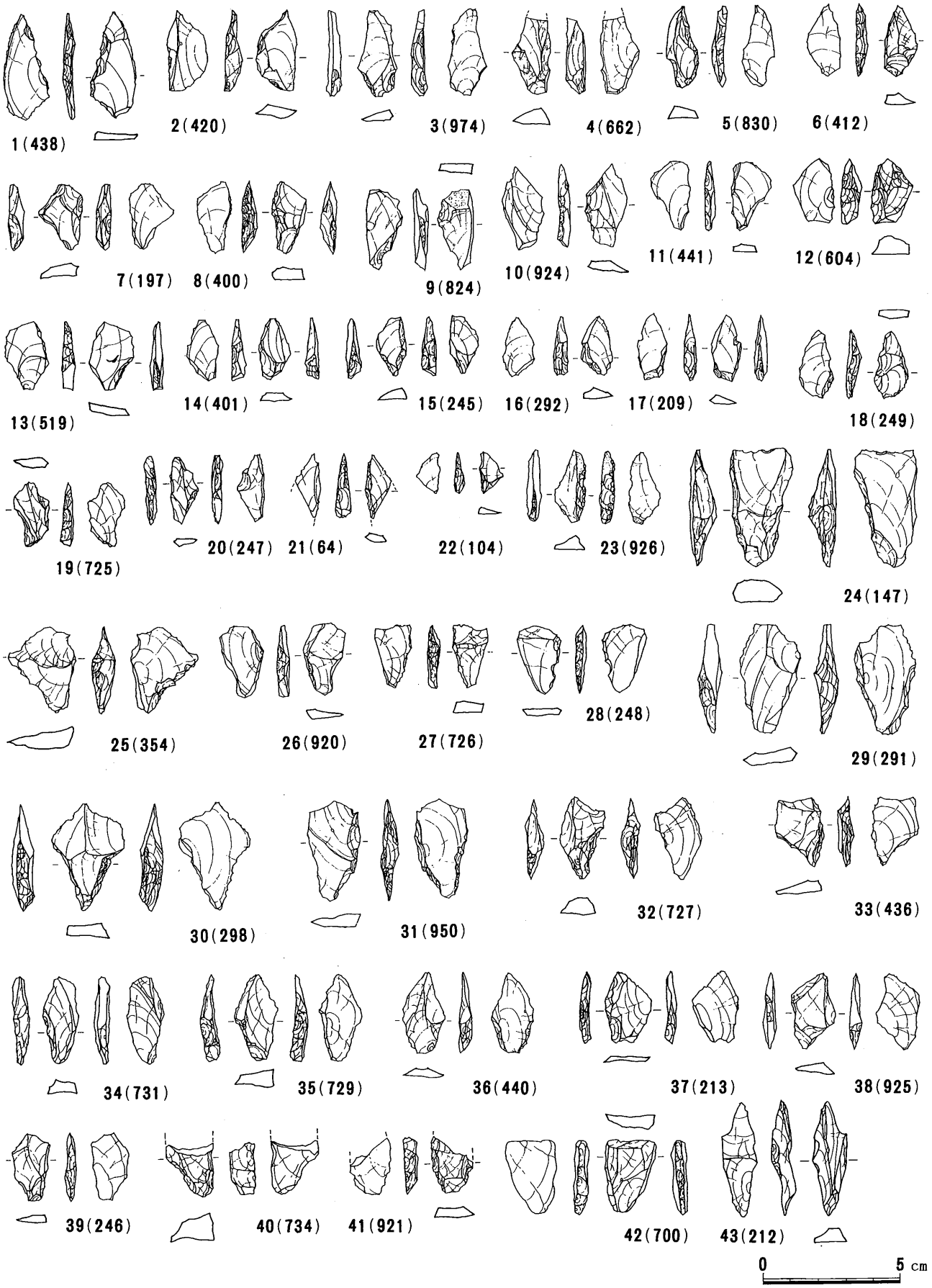
第114図　ナイフ形石器実測図(1)



第115図　ナイフ形石器実測図(2)



第116図　ナイフ形石器実測図(3)



第117図　ナイフ形石器実測図(4)

2. 舟底形石器

2点出土しており，いずれもサヌカイトを素材とする。

第118図1　断面三角形を呈する典型的なもので，横長剥片を素材とする。加工は大半が甲板面からの打撃によるが，わずかに稜上からの打撃による剥離面も認められる。両端は折損している。基部から先端部へ向けて細くなる。先端部は尖っていたと考えられる。

第118図2　白色風化サヌカイトを石材とし，断面は台形状を呈する。縦長剥片を素材とすると考えられるが折損しており，素材の打面は残存しない。底面と一方の側面には基部の折損面を打面とする樋状剥離痕が認められる。先端部はそれほど尖らず，甲板面からの打撃により樋状剥離のような細部調整が施されている。

備讃瀬戸の島嶼部出土の舟底形石器は大半が横長剥片を素材とし，断面形は三角形のものと台形状のものの2種類ある。断面形が異なっていても舟底形石器の甲板面の幅にそれほど差異はない。甲板面の幅は舟底形石器のかなり重要な要素の一つと考えられる。素材となった剥片が薄い場合には，結果的に素材の背面が残存し，断面が台形状を呈するものであろう。これに対して，2では意図的に断面形がより台形状を呈するように底部を加工しているが，これは2が通例の舟底形石器とは異なる特徴を有していることに起因する。2の基部よりの側面には折損面を打面とした樋状剥離があり，彫刀面が形成されている。底部の二次加工は彫刀面の幅を限定するために施されたものである。また先端部にも甲板面を打面とする細かな樋状剥離が認められる。羽佐島遺跡出土の国府型ナイフ形石器で，ブランティング面を打面として石器の先端部に彫刀面を作り出した彫器があり，[註4] 2の先端部も彫刀面と考えられる。いずれにしても2は舟底形石器を転用した彫器とすることができよう。

3. 石　錐

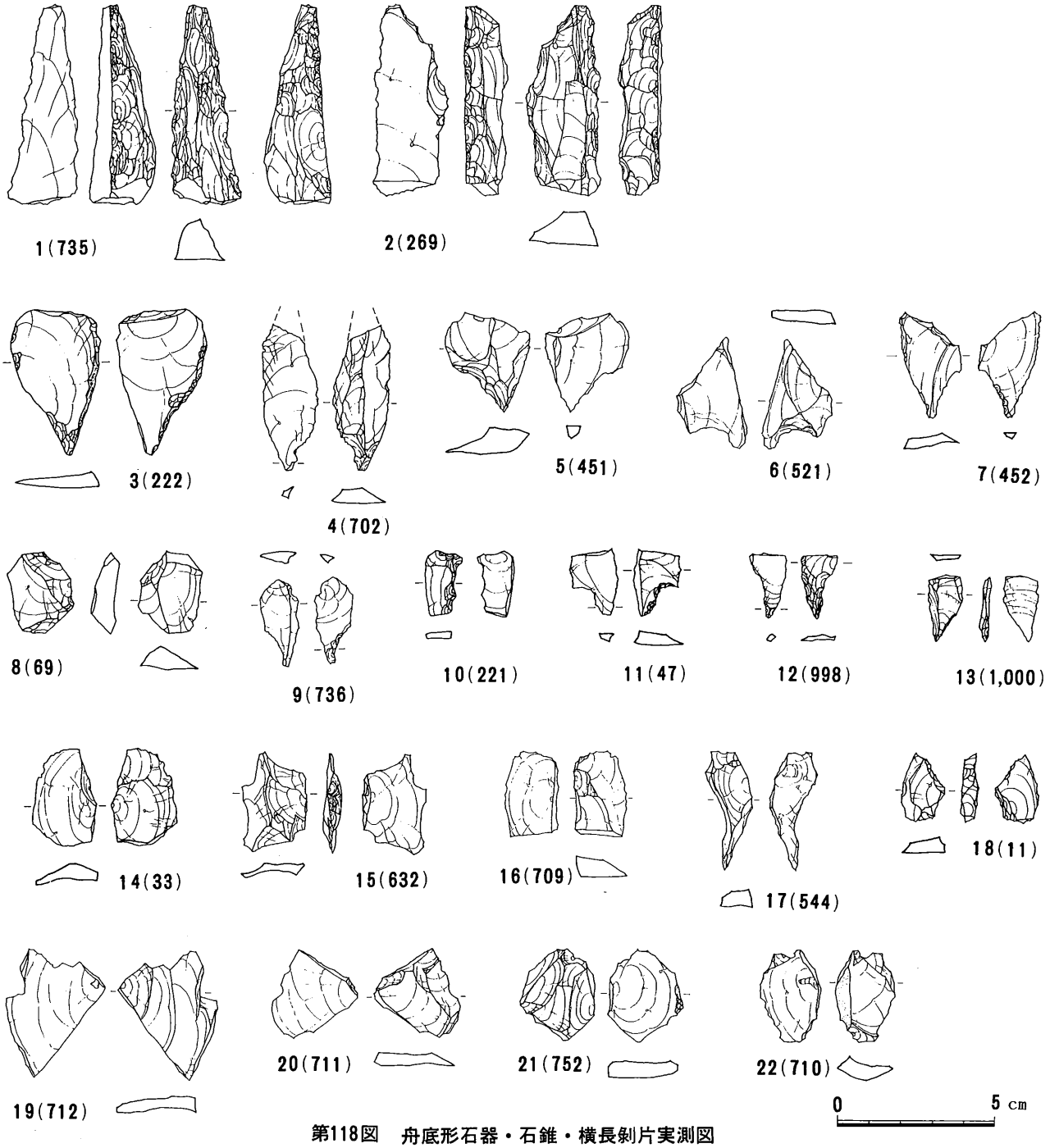
第118図3～13　11点出土しており，13が黒曜石で他はサヌカイトを石材とする。サヌカイト製のもので3・6・9・11は風化が進んだ白色風化サヌカイトを用いる。素材は不定形な剥片が多いが，4・9は縦長剥片，13は細石刃を用いている。刃部の形成は12を除いて片面加工による。いずれもかなり雑な作りのものである。縦長剥片を素材とするものも刃部の位置に規則性は認められないようであり，4・13は素材の基部側に，9は先端部に刃部を作り出している。

切り出し状ナイフ形石器の中に基部がかなり尖るものがあり，石錐としての可能性も否定できない。

4. 横長剝片

形状から横長剝片と考えられるものの出土数はかなり多い。しかし，大浦遺跡の横長剝片石核は交互並列剝離技法によるものが主流を占めるため，目的剝片もそれほど一定した形状を呈しない。そのため，偶然横長の形状を呈した剝片と目的剝片との識別は困難である。9点図化した。

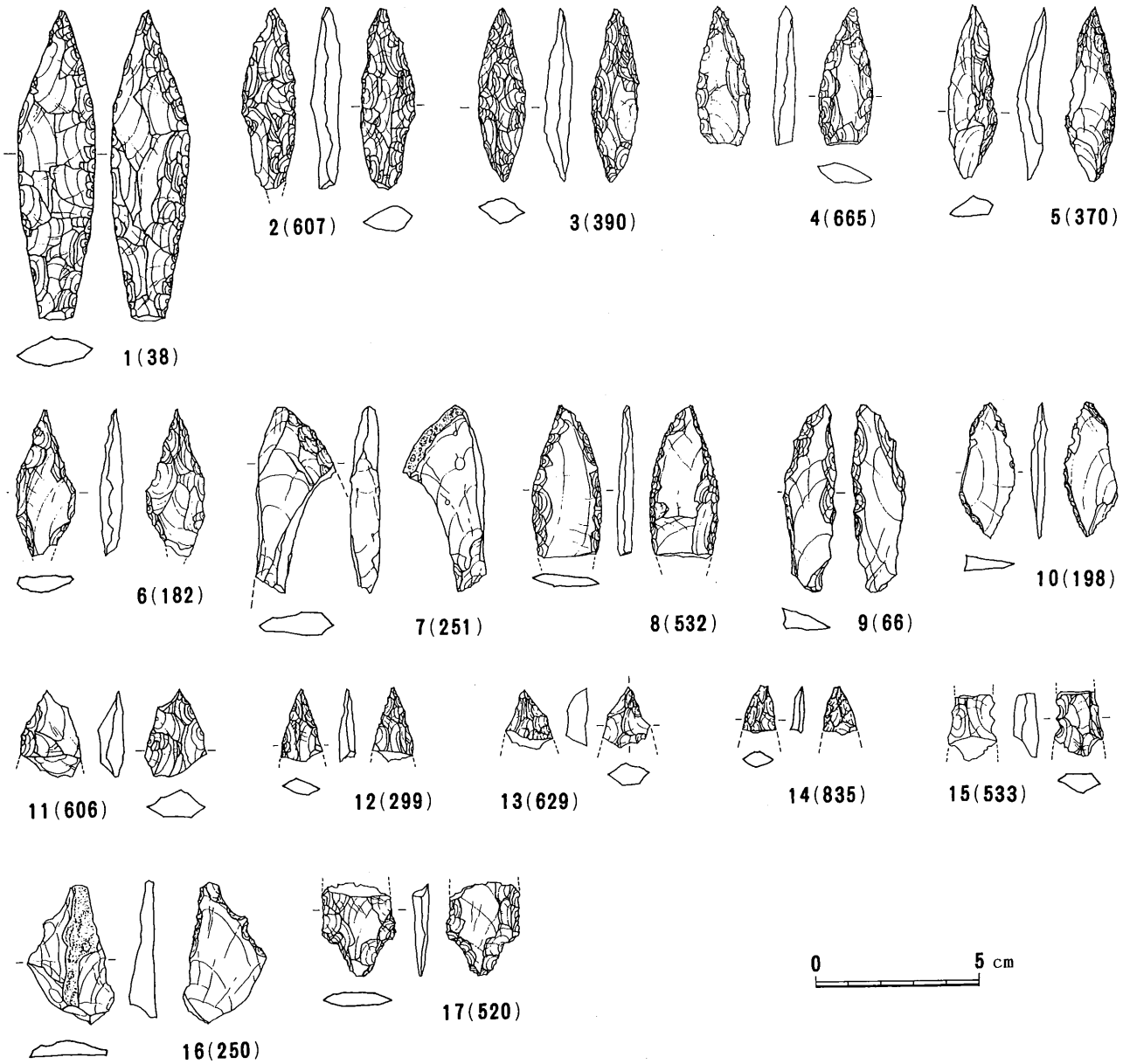
第118図14〜22　14・19〜22はハリ質安山岩を石材とする。14は細石核の打面調整剝片の可能性がある。19・20・22は自然面を打面とすることから原礫の分割の際に生じた剝片かもしれない。15〜18はサヌカイトを石材とし，それほど安定した形状のものではない。



第118図　舟底形石器・石錐・横長剝片実測図

5. 尖頭器

第119図　17点出土しており，全てサヌカイトを用いる。石質からすれば，9・16が白色風化サヌカイト，他はそれほど風化が進行していないサヌカイト質である。1～6・9・10は完形もしくは，それに近いもので，いずれも木葉形を呈する。1が最も大きく器長9.4 cmを計り，調整も細かい。他の完形の尖頭器は器長が5 cm前後の小形で調整も粗いものが多い。素材面が残る尖頭器では，横長剥片を用いている。11～14は先端部，15は中央部の破片と考えられる。15の調整は粗い。7・16はその外形から尖頭器の未成品が折損したものと思われるが，調整も少なく他の器種もしくは素材の可能性も否定できない。7は截断面ある石器，16はスクレイパーとも考えられる。



第119図　尖　頭　器　実　測　図

6. スクレイパー

大浦遺跡出土のスクレイパーは，総数76点である。エンドスクレイパー中にはかなり器形が定形化しているものも含まれるが，大半は一定した形状を呈しない。サイドスクレイパーにおいては縁辺部に鋸歯状の刃部を形成しているだけで，定形化したものはない。エンドスクレイパーとサイドスクレイパーの差は刃部の角度の差だけとなるが，一線を画するほど明確なものではない。そこで両者をスクレイパーということで一括して扱い，それぞれの可能性が大きいものという程度の意味で二分した。

第120・121図　エンドスクレイパーである。32点出土した。いずれも鈍角の刃部を有する。第121図19・20が水晶を石材とする他はサヌカイト製である。1～5は横長剥片石核を転用したものである。1・2は短辺に刃部が位置し，両側縁に石核の作業面を持つ。かなり安定した形状のものである。3は石核の打面調整としてはやや直線的で細かく，打面部を刃部としたものであろう。4は三方に，5は短辺に刃部を形成している。6以下のエンドスクレイパーは素材が一定したものではなく，適当な剥片に鈍角の刃部を作り出している。水晶を石材とした2点は，敲打によるつぶれが認められる。自然面状に表現した部分がそれにあたる。

サヌカイトは白色風化サヌカイトと風化のそれほど進行していないものと2種類の石質が認められる。

第122～124図　サイドスクレイパーである。エンドスクレイパーと比較すると鋭角の刃部を有するが，それほど差がないものも含まれる。いずれも刃部は，2つの剥離面が鋭角で交わる縁辺部に形成されている。使用された石材は，第122図5・6が砂岩とシマ状黒曜石，第124図15・16がハリ質安山岩，他はサヌカイトである。石器の素材はさまざまであり，縦長剥片・横長剥片・細石刃・不定形な剥片や石核を転用したものが認められる。

第122図1～5は縦長剥片を素材とする。刃部の位置は2が末端部の他は側縁部を利用している。6は細石刃の両側縁部に加工を施す。7～10は横長剥片を素材とする。11～15・第123図1～5は横長剥片石核を転用したものである。11・12は素材となった剥片の末端部で作業面と対向する縁辺部に刃部を形成したもので，11は打面部も調整が細かく，刃部と考えられる。他の石核を転用したサイドスクレイパーは作業面に再度調整を加え，両面加工風の刃部を有する。第123図10は交互並列剥離技法による横長剥片石核を転用した可能性も考えられるもので，先端部が細かくなり，尖頭器状を呈する。11は原石から剥取された大形で，縦長剥片石核の素材等を分割する以前の剥片の側縁に刃部を設けたものである。第124図4は熱変して表面に亀裂が認められる。

大浦遺跡で出土した横長剥片石核18点のうち14点がスクレイパーに転用されている。素材が横長剥片石核のあるものも含めると15点が石核転用のものとなる。このうちエンドスクレイパーは5点，サイドスクレイパーに転用されたものは9点となる。大浦遺跡に限らず，備讃瀬戸の遺跡群から出土する翼状剥片石核を含めた横長剥片石核はスクレイパーに転用されるものが多い。その理由として，横長剥片石核の素材を含めた形状が考えられる。翼状剥片石核は盤状剥

片を素材とし，その末端部は剝片剝離の結果，鋭い縁辺からなることが多い。これは片面並列剝離技法においても同じである。サイドスクレイパーに転用された石核中の3点（第122図11・12・第123図2）はこの素材の末端の縁辺部を刃部としている。また白色風化サヌカイト質の交互並列剝離技法による石核は板状の薄い剝片を素材としたものが多く，交互剝離のためか石理は底面と平行する。この石理の影響で作業面側は両面加工状の鋭い縁辺となり，さらに細部調整を加えサイドスクレイパーの刃部を形成したものが5点ある（第122図15・第123図1・3～5）。

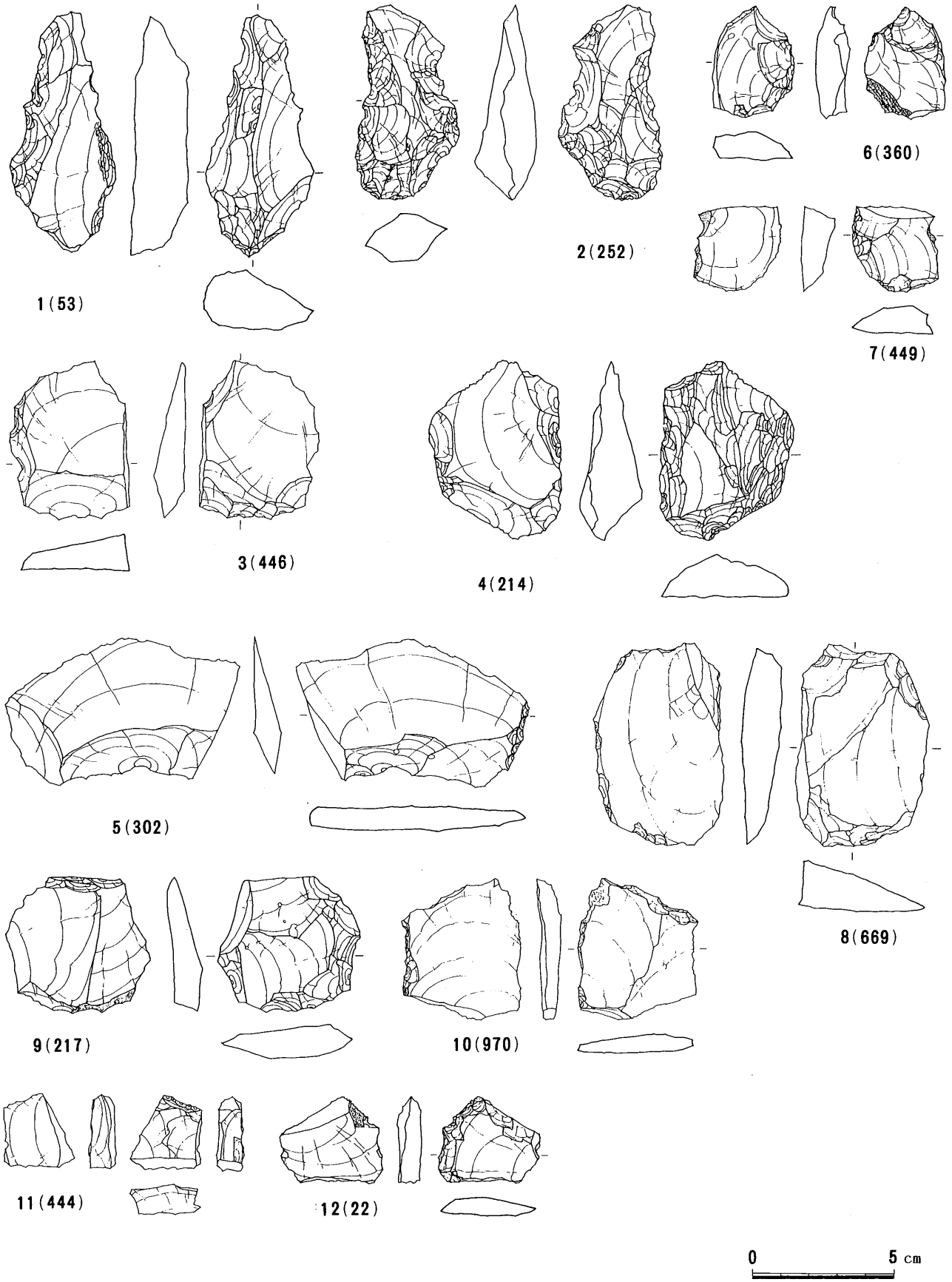
またエンドスクレイパーに転用された横長剝片石核は，側面部と作業面側が利用される。横長剝片石核における作業面の転移は，素材となった剝片の末端部，作業面と対向する部位に行われることが多い。そのため，作業進行に伴い石核の形状は細かくなってくる。その側面部を刃部としたのが第120図1・2・5のエンドスクレイパーである。また作業面と打面部が区別された石核では打面部に作業面側から再度調整を加えエンドスクレイパーの刃部としているものもある（第120図3・4）。第121図11も打面部に打点が残存する小剝離痕があり，刃部とも考えられる。また石核を転用したものではないが，これと類似した技法で刃部を作り出したエンドスクレイパーとして第121図12～16がある。

7. 彫　　器

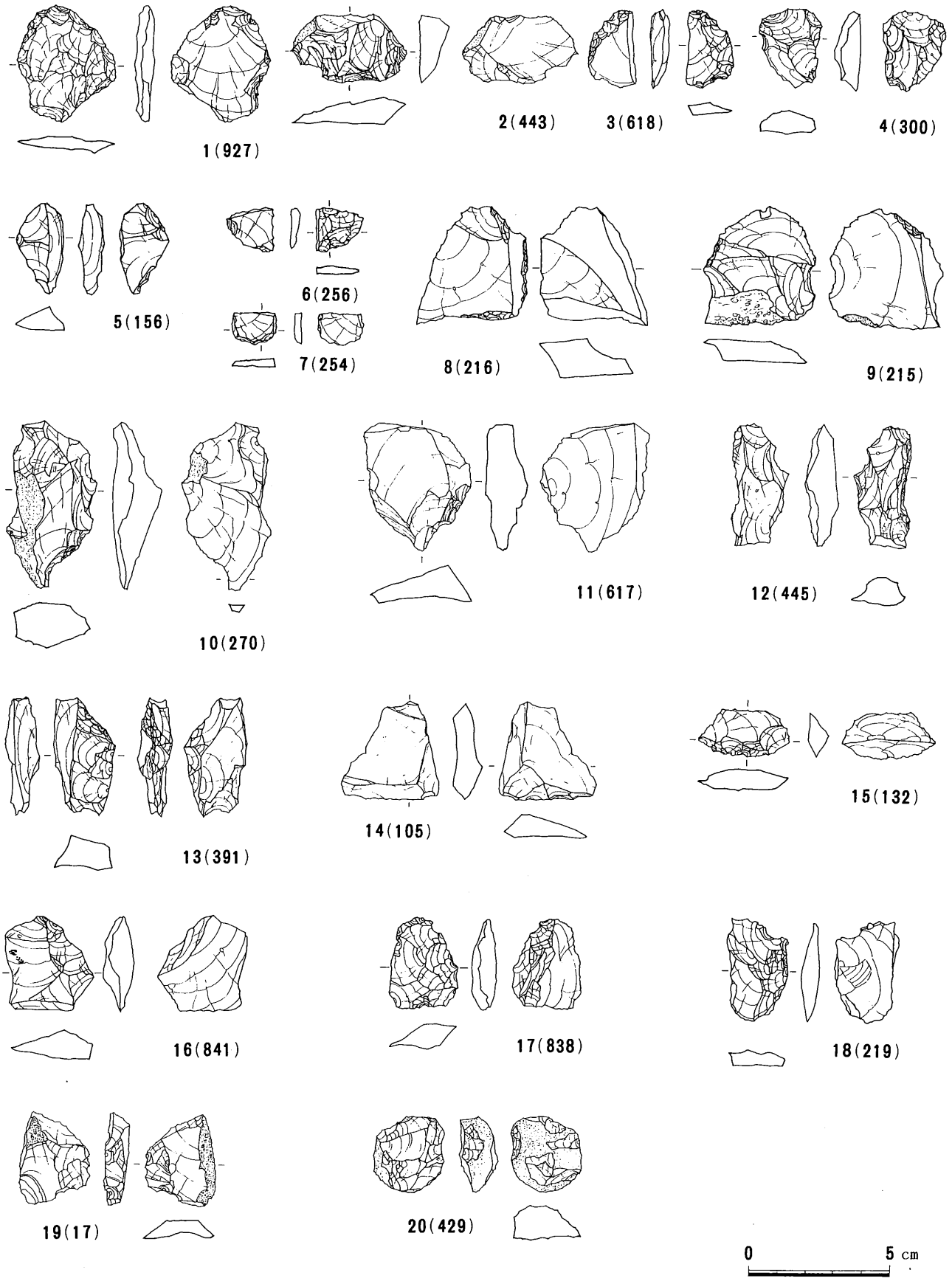
第125図　彫器としたものは4点ある。1・2は石理が明確であり，風化のそれほど進んでいないサヌカイトを石材に用いる。縦長剝片を素材とする。1の素材は両側面に石理面と平行する石核側面が残り，断面台形状を呈する。縦長剝片の末端部に，側面からの打撃で打面を形成し，縦長剝片の側面部を中心として彫刀面を作り出したものである。2の素材は片側面に石理面と平行する石核側面が残り，断面は概三角形を呈するものである。縦長剝片の末端の背面からの打撃による折面を打面として彫刀面が形成されたものである。3・4は白色風化サヌカイトを石材とする。いずれも側面に石理と平行する平坦面があり，隣接する両側縁に彫刀面を持つ。

縦長剝片の末端部を打面として彫刀面を作り出す手法は，縦長剝片石核のB型の一部と共通したものである。B型石核の第160図9は作業面転移後打面も下部へ転移し，素材となった縦長剝片の末端部を打面として目的剝片を剝取したものである。サヌカイトを素材とする縦長剝片石核は両設打面のものが多く，このB型の石核も例外的な存在ではない。こうした石核は彫器とするには，作業面の幅が広すぎる。技法の類似性からしても両者の同時性は高い。

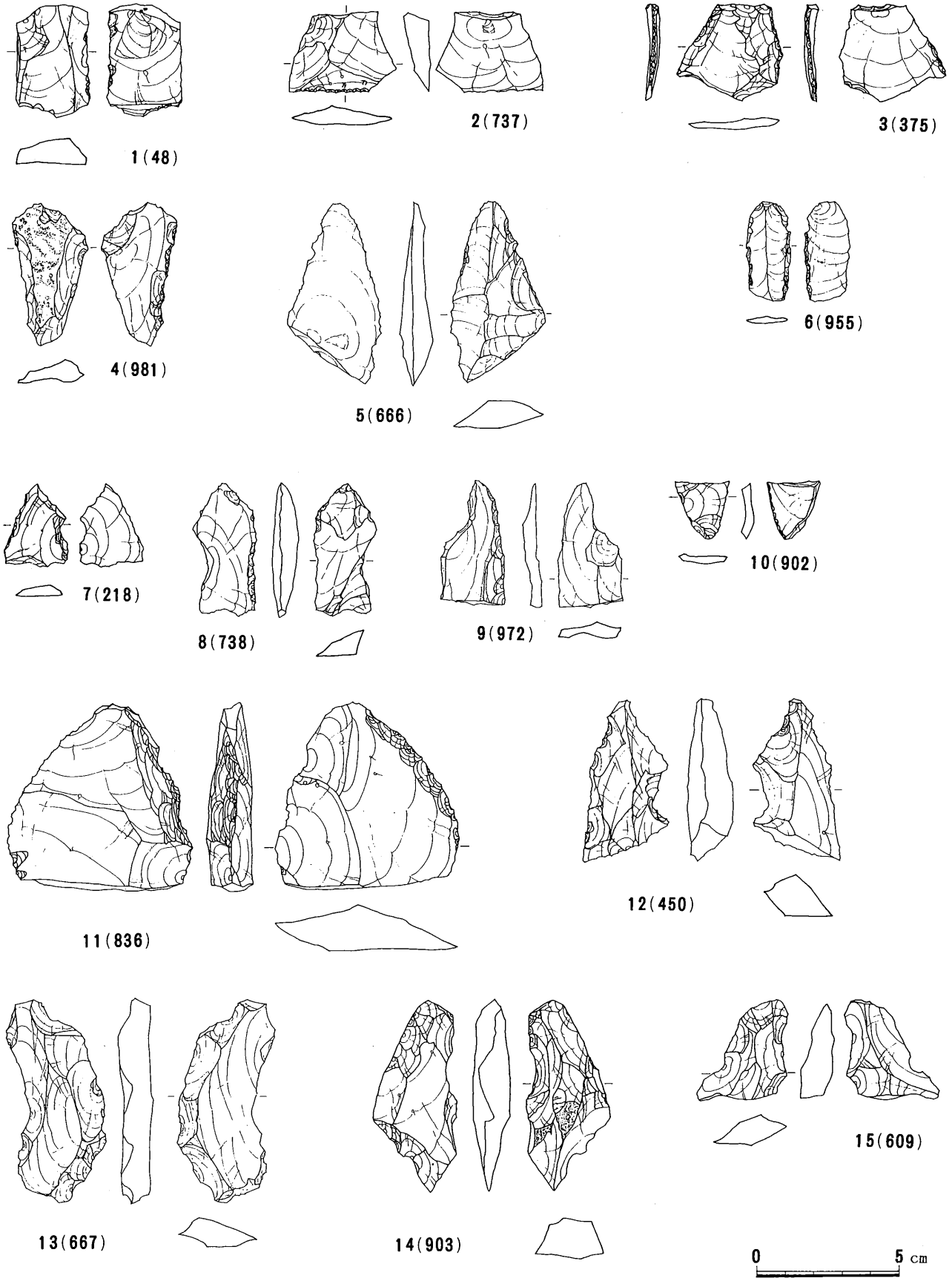
また3・4は截断面ある石器とすることもでき，截断面ある石器のB型のものは彫器の可能性が高い。この他大浦遺跡出土遺物の中で彫器の可能性があるものとして，舟底形石器に分類したものと，ハリ質安山岩を素材とした細石核で作業面の幅が狭いものがある。作業面の幅で他の細石核と一線を画するのは困難であり，分類上は細石核とした。羽佐島遺跡では両面加工石器を素材とした彫器が報告されているが，大浦遺跡の彫器もしくは彫器の可能性があるものは，いずれも非常に単純な作りをしており，両面加工石器を素材とした彫器が存在しないことと比較すると，対照的なもので



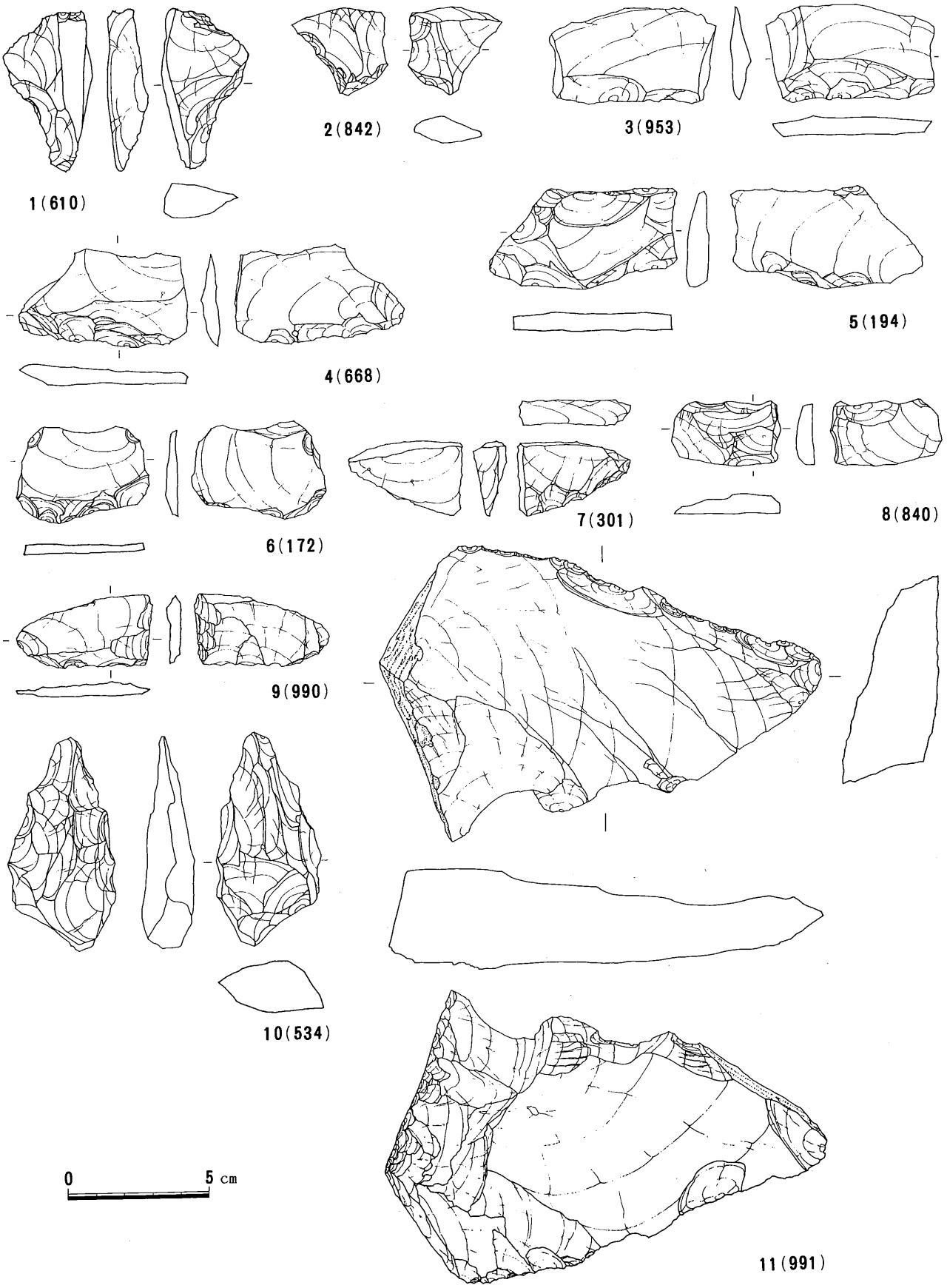
第120図　スクレイパー実測図(1)



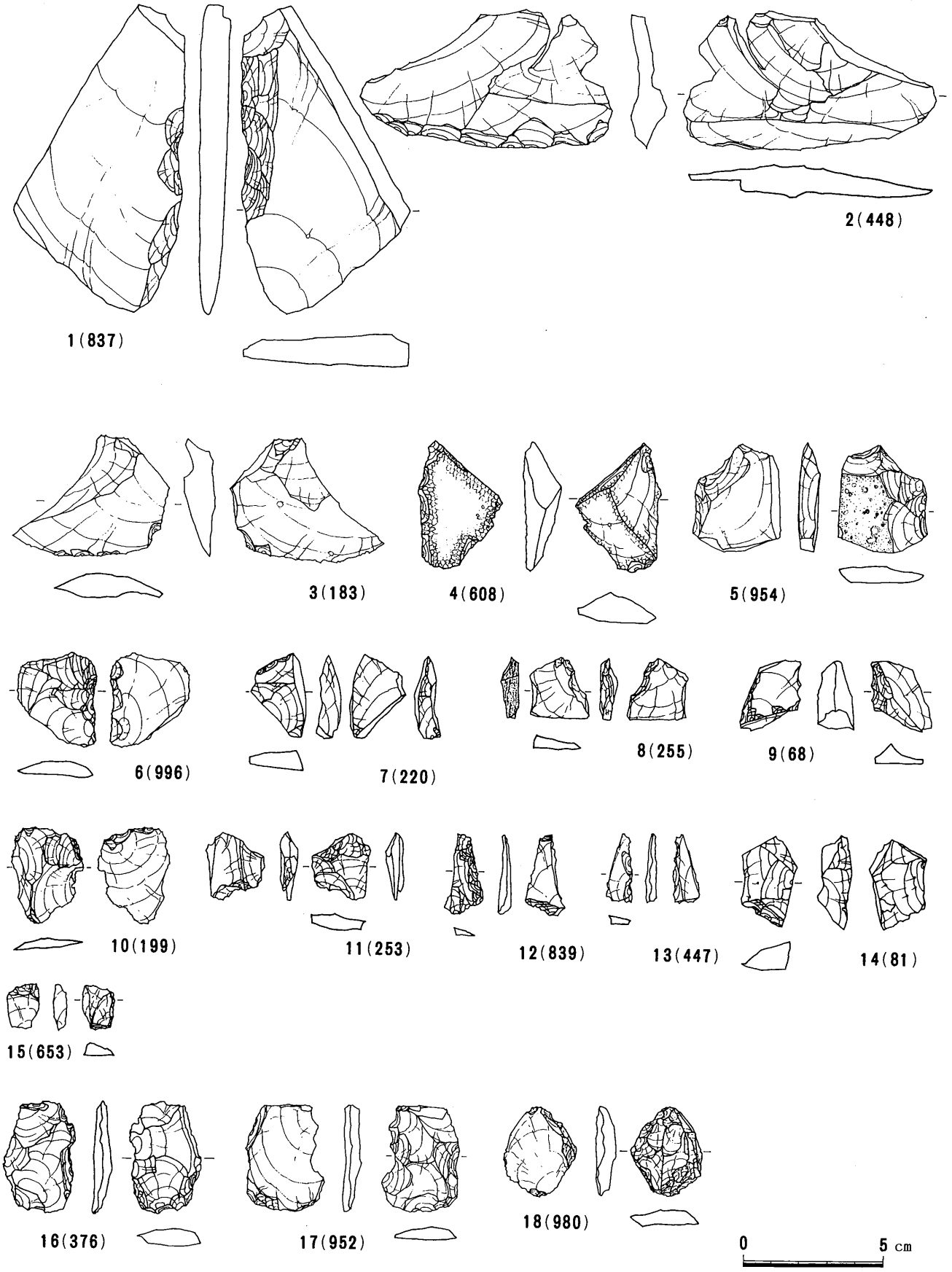
第121図　スクレイパー実測図(2)



第122図　スクレイパー実測図(3)



第123図　スクレイパー実測図(4)



第124図　スクレイパー実測図(5)

ある。羽佐島では彫器として5点報告されており，いずれもサヌカイトを石材とする。素材別にみると，白色風化サヌカイトの板状のものは縦長剥片石核Bか細石核の可能性が高い。他の両面加工石器を素材としたもの4点のうち2点は細石核，1点は尖頭器の折損品の可能性が否定できない。しかし，彫器以外とは考えにくいものが1点含まれている。両面加工石器を素材とする彫器は，点数的に少なく主要な形態とすることはできないであろう。また両面加工石器を素材とした細石核の可能性があるものは，細石核としても瀬戸内では一般的なものではなく，今後その系譜等で問題となろう。

8. 截断面ある石器

素材の縁辺部を打撃して，縦方向の樋状剥離面を作り出した石器である。截断面ある石器という名称は『ふたがみ』[註5]の中で使用されている。截断面の打面や底部に相当する縁辺が敲打によるつぶれ痕があり，截断面の側縁部に使用痕とも考えられる小剥離痕が認められるものの存在から彫器の可能性が指摘されている。羽佐島遺跡の報告で楔状石器とされたものも同様な形態を示す。

截断面が認められる石器には，截断面を形成することを意図したものの他に，剥片等を縦方向に分割した際生じた石器素材や縦長剥片石核の打面・作業面を再生したもの，また石器が使用等の際に偶然樋状剥離して截断面が形成されたものが含まれる。今回の截断面ある石器の設定は，彫器の可能性のある石器の抽出が目的であり，明確に他の器種に属する石器を除き，樋状剥離面を残すものを選出した。『ふたがみ』や羽佐島遺跡で報告されたものより，広い範囲の石器からなる。截断面の形成方法，主に打面の状況で分類した。

A型　截断面と隣接する側縁が，敲打によりつぶれたものである。A_1型は両側縁，A_2型は截断面の打面に相当する片側縁がつぶれたものである。いずれも截断面は明確な打面を持たず，稜上打撃によって形成されている。

B型　明確な打面を打撃することによって截断面が形成されているもの。打面形成の打撃方向によって細分した。B_1型は截断面，B_2型は背部からの打撃で，B_3型は截断面側からか背部側からか不明，B_4型は側面からの打撃で截断面の打面が形成されているものである。

C型　截断面の打点が欠落したもの。

第125図5～15　A_1型に属する。両側面には上下からの打撃により，階段状剥離が顕著なものが多い。

第126～127図1～7　A_2型に属する。

第127図8～第128図1～9　B_1型に属する。大形のもので，截断面が複数の面からなるものは縦長剥片石核とも考えられる（第127図9）。

第128図10・11　B_2型に属する。10は截断面の打面が稜上を打撃した截断面からなる。

第128図12～第129図1～10　B_3型に属する。

第129図11～第130図1～13　B_4型に属する。打面には若干の差が認められ，大きい一面の

剝離面，やや小さな複数の剝離面，折断面からなるものが認められる。

第130図14～第132図7　C型に属する。

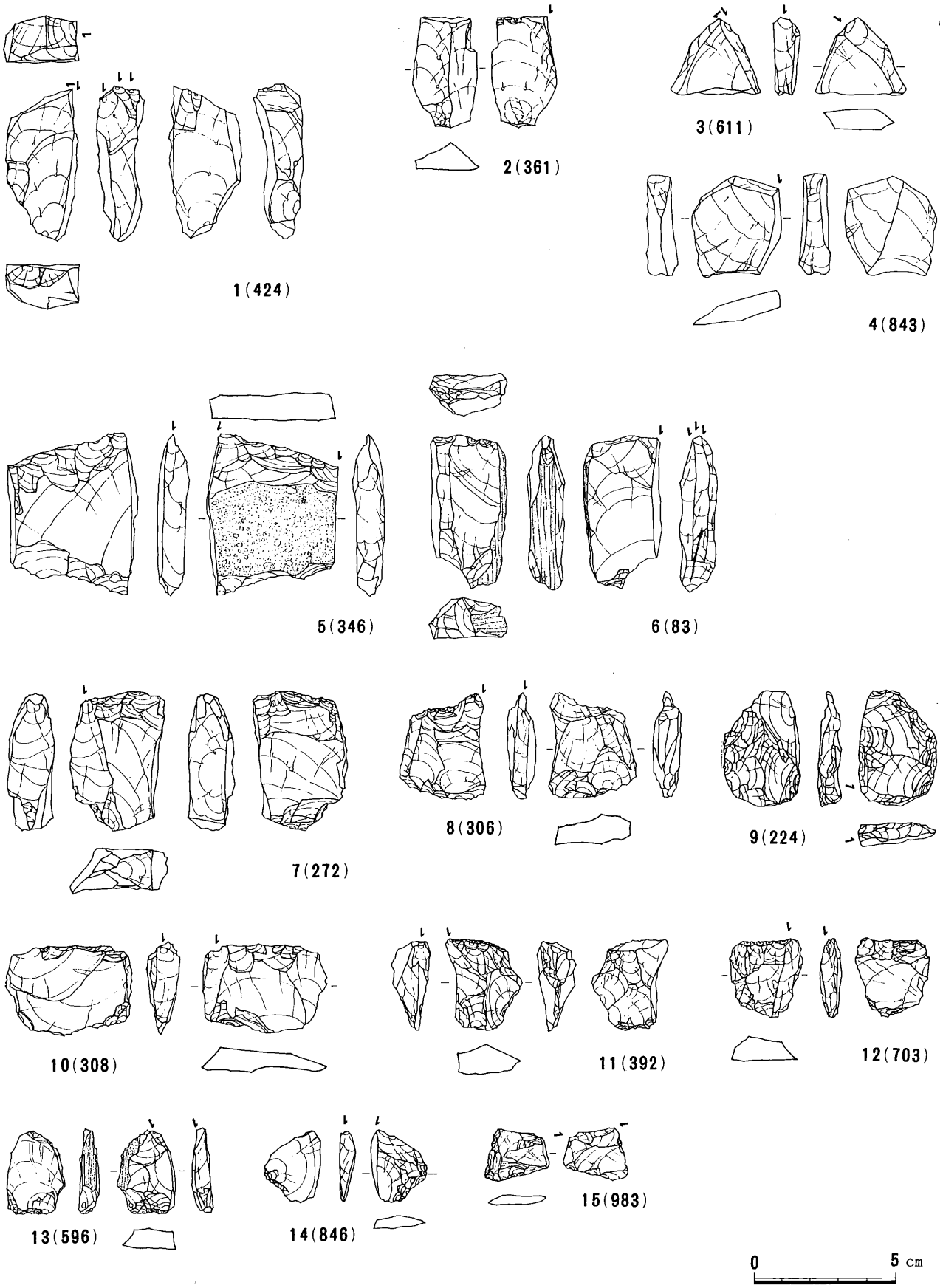
截断面ある石器に使用された石材は全てサヌカイトであり，石質は白色風化サヌカイト質のものが多く，他のものも石理が明確なサヌカイトである。また素材は石理面と平行した平坦な面を有する板状の剝片である。截断面は板状の剝片の小口面に位置する。この素材の使用方法はサヌカイト製縦長剝片石核と共通するものである。

A型のものは截断面の上下両側縁か打面相当縁がかなりつぶれており，截断面の打点部は不安定なものが多く，彫器の刃部には不向きである。また，石器の風化度が高く，使用痕等の観察には無理な点があるが，截断面の側縁には使用痕と考えられる小剝離痕は認められない。

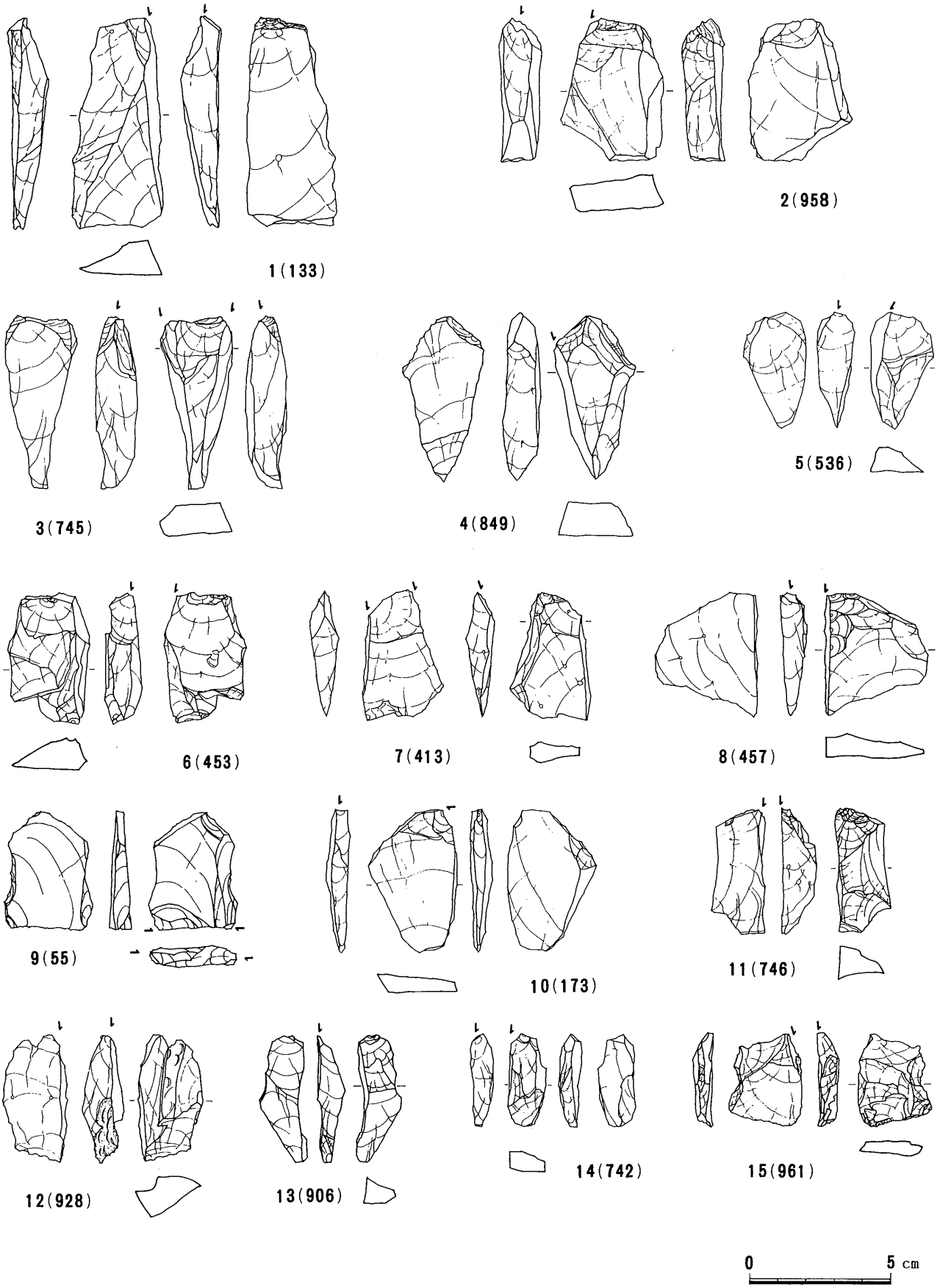
截断面の形成方法は，截断面の打面と底部に相当する縁辺がかなりつぶれていることもあり，台石上の直接打撃と思われる。

A型は上下両端がつぶれてはいるものの両面加工石器を分割したものとも考えられる。前述のように羽佐島遺跡では，両面加工石器を分割して彫器もしくは細石核の素材を作り出す技法が想定される。羽佐島遺跡出土の両面加工スポールや彫器もしくは細石核に認められる両面加工の側縁は，つぶれが認められない明確な成形痕である。これに対して大浦遺跡のA型截断面ある石器は上下両端が敲打によりつぶれ，その際に石器内部にかなりの亀裂が生じている。また大浦遺跡では羽佐島遺跡のように断面三角形の両面加工スポールや分割品を素材とした石器が出土していないことなどから，A_1型のものを石器素材とすることはできないであろう。こういった点からすれば，A型の截断面ある石器の最大の特徴は端部のつぶれにあり，截断面は結果的に生じたものであろう。A型は使用により端部がつぶれるパンチや楔などの工具的な性格が強い石器であろう。

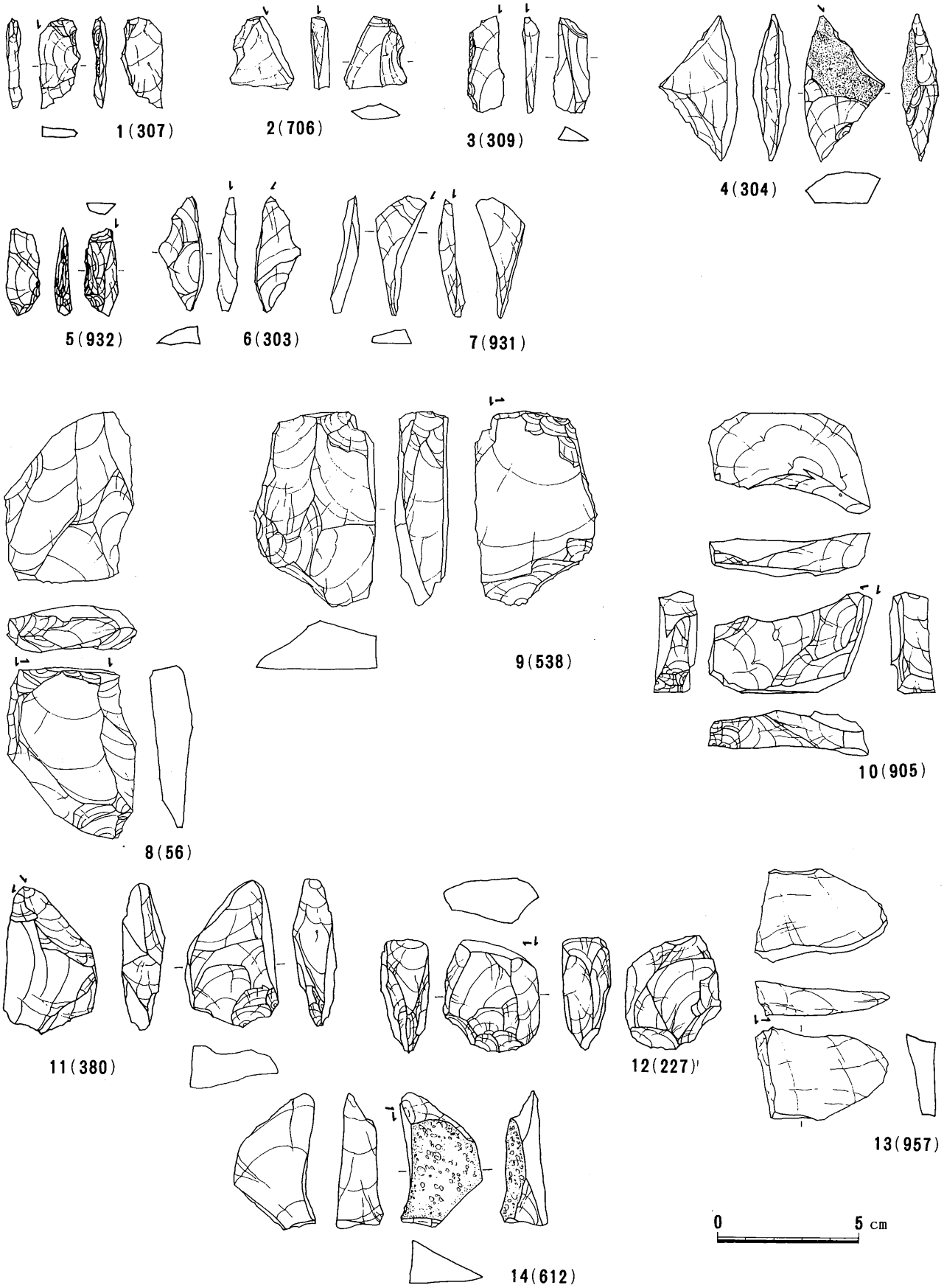
B型は明確な打面を打撃することにより截断面を形成したもので，A型と比較すると截断面の安定性も高い。石理面と平行する側面を有するなど縦長剝片石核と共通した石材の使用が認められ，B_1型の大形のものに縦長剝片石核の可能性があるものも一部含まれる。しかし，大半は素材や石器製作過程のものとは考えにくい。大浦遺跡出土の彫器の中で縦長剝片を素材としたものは彫刀面の幅が 1.4 cmを計り，B型の截断面幅とそれほど矛盾しない。B型截断面ある石器は彫器と考えてよいであろう。



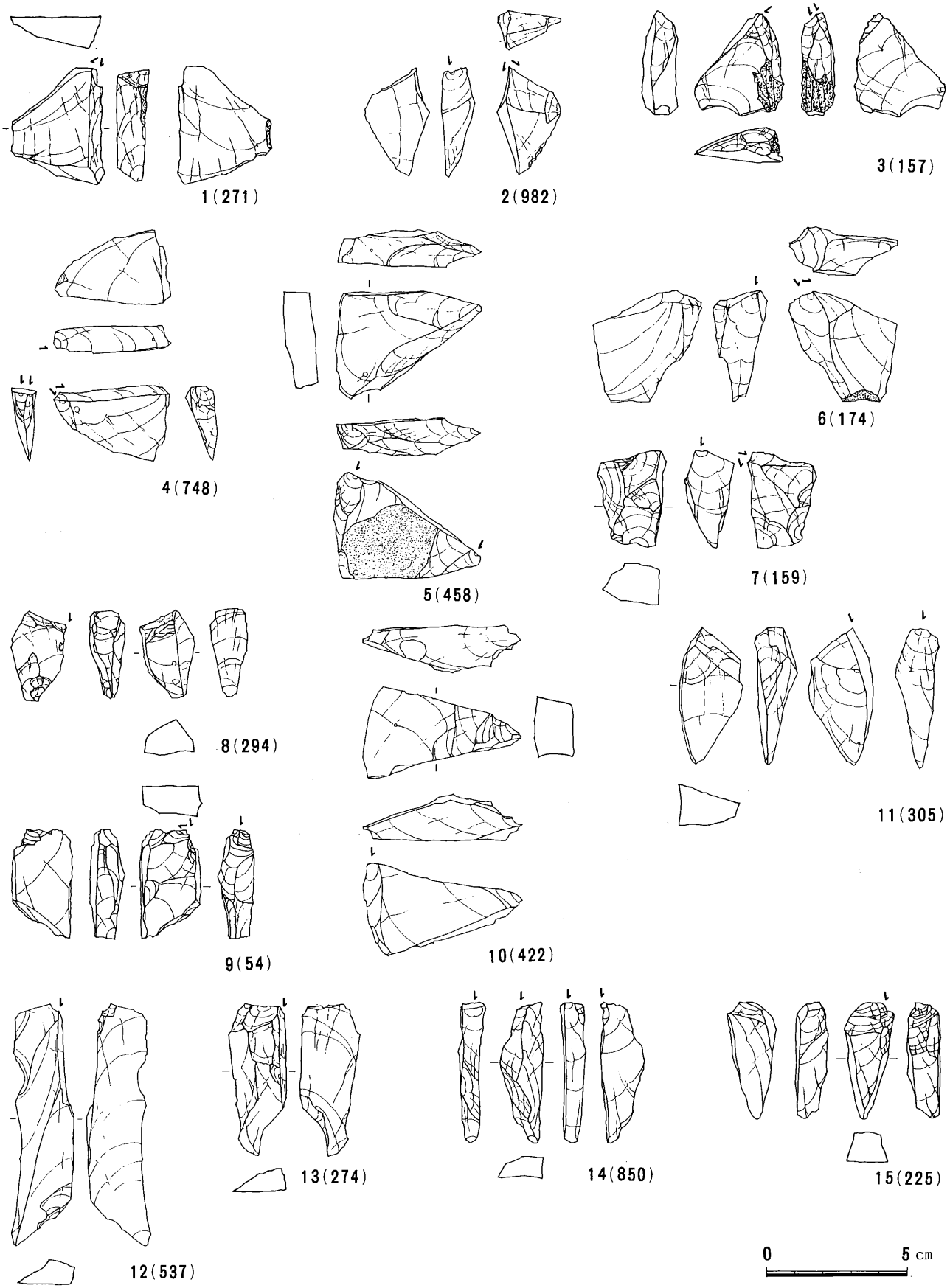
第125図　彫器・截断面ある石器実測図(1)



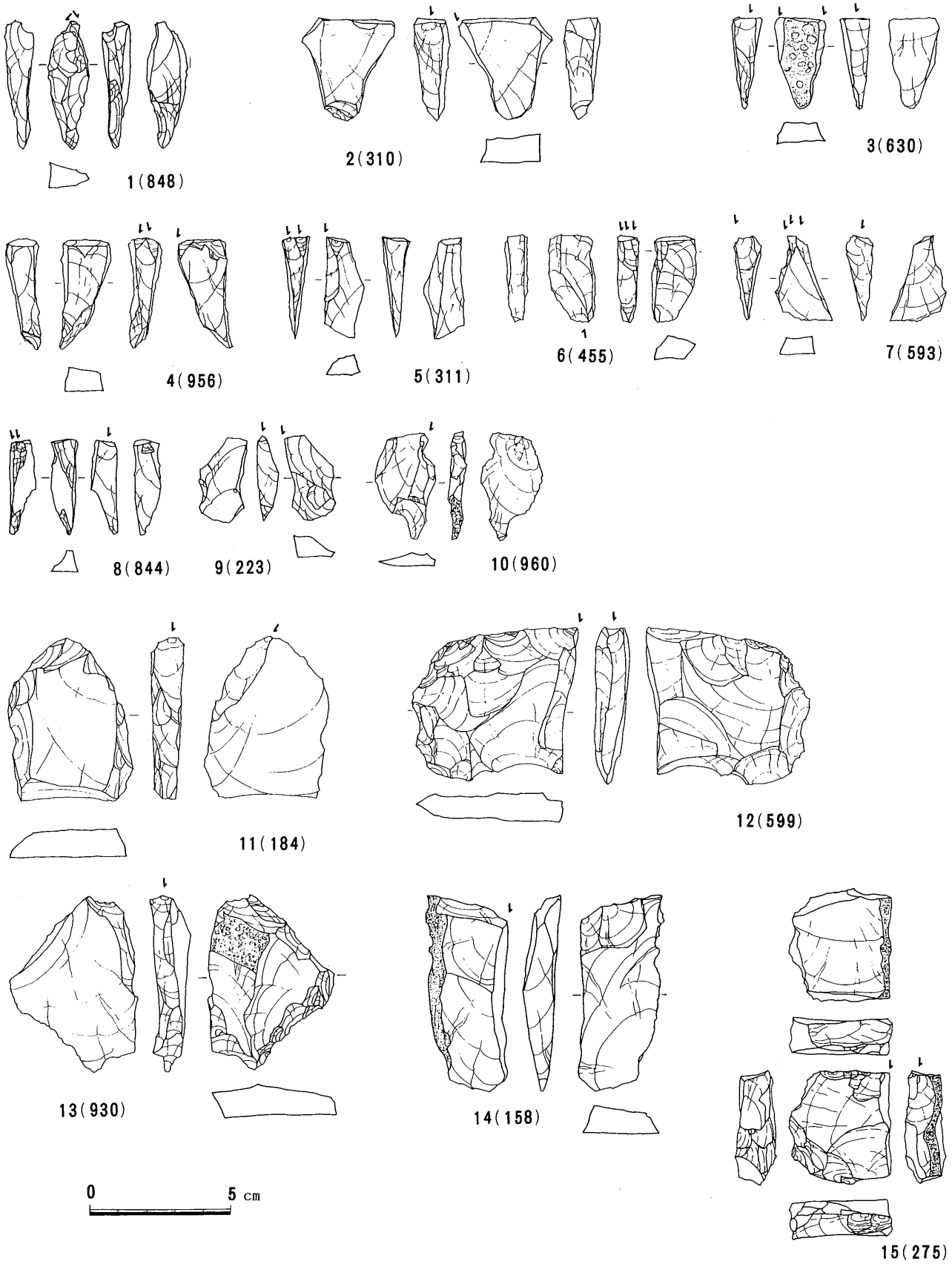
第126図　截断面ある石器実測図(2)



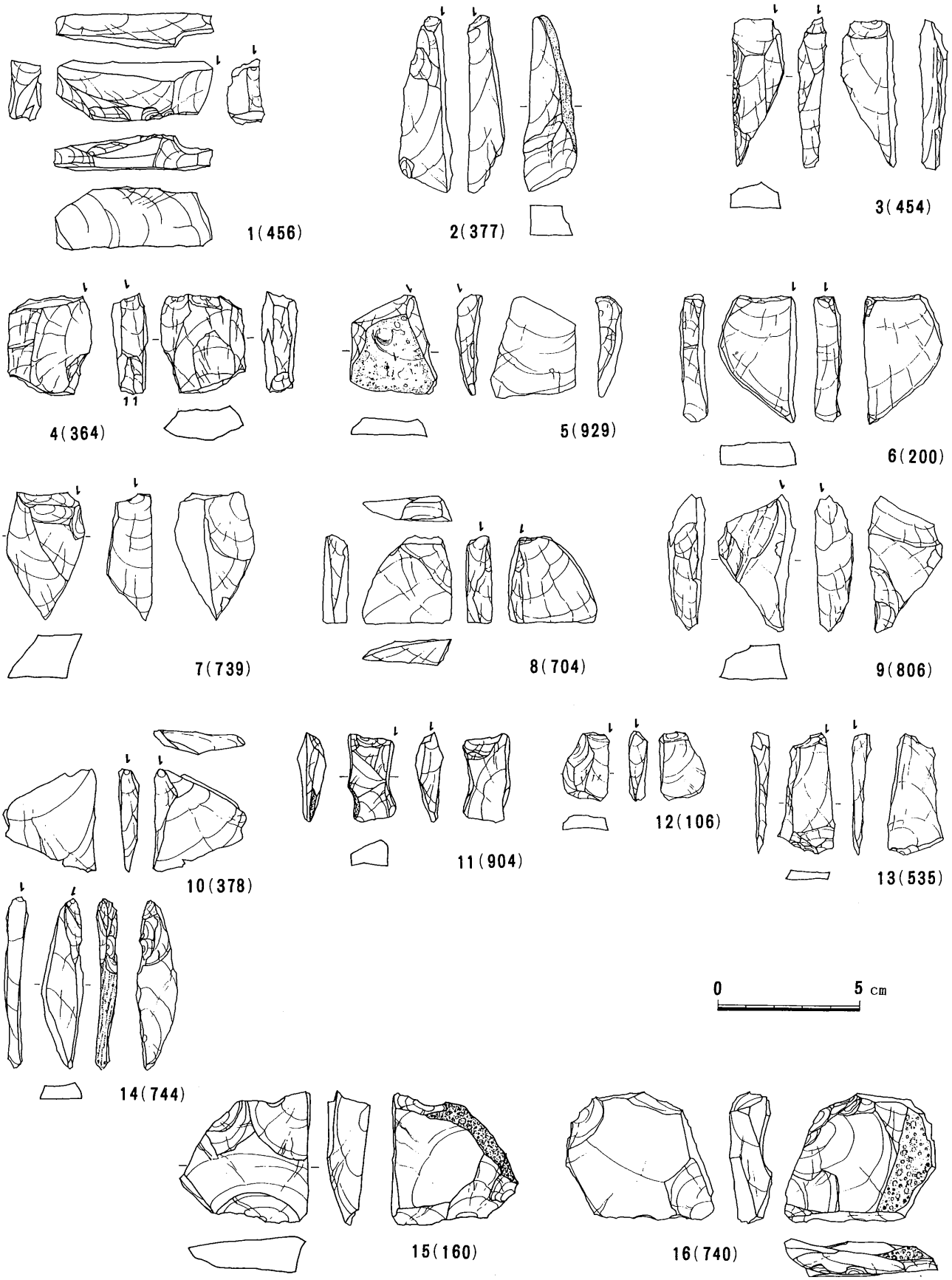
第127図　截断面ある石器実測図(3)



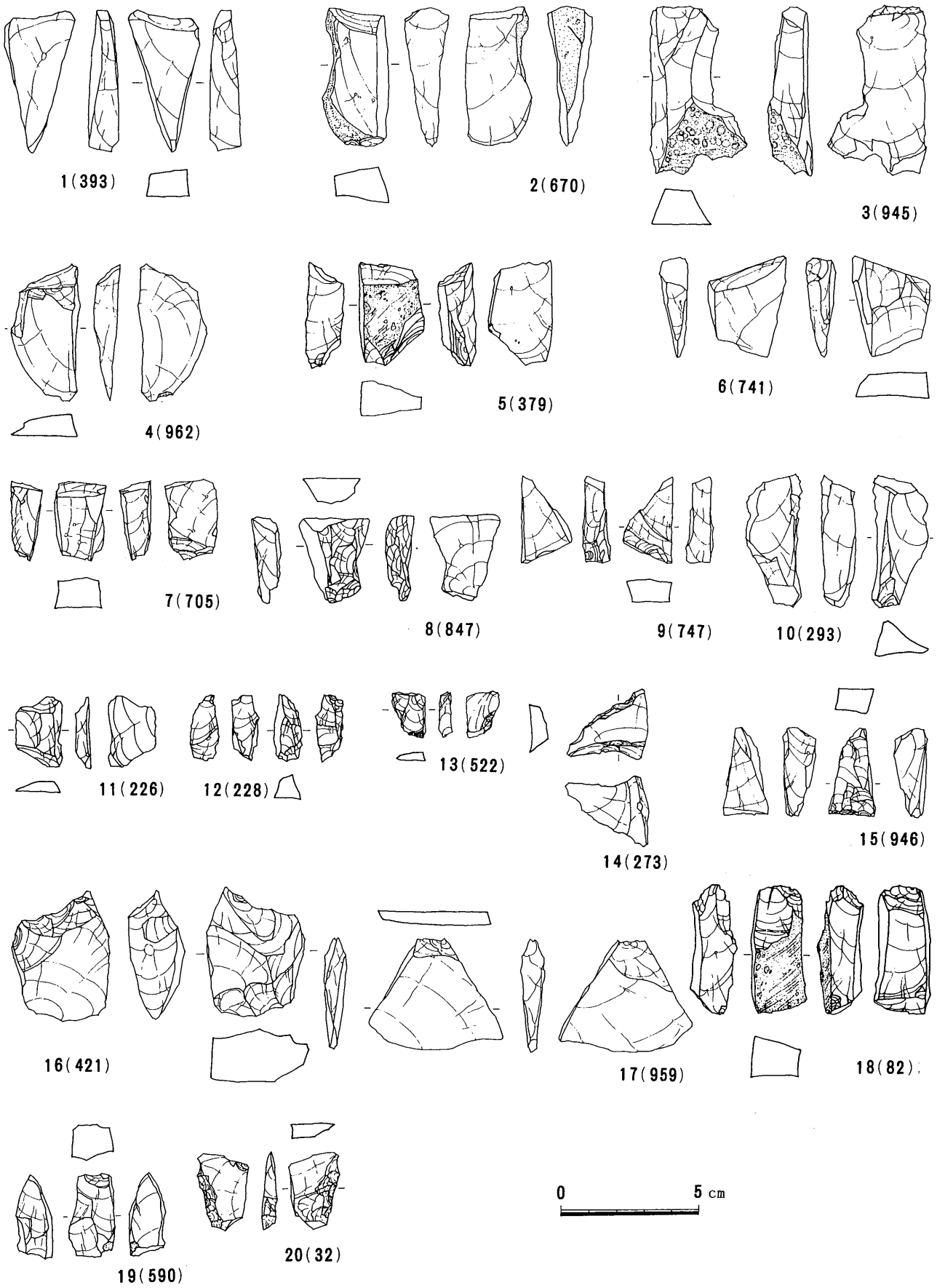
第128図　截断面ある石器実測図(4)



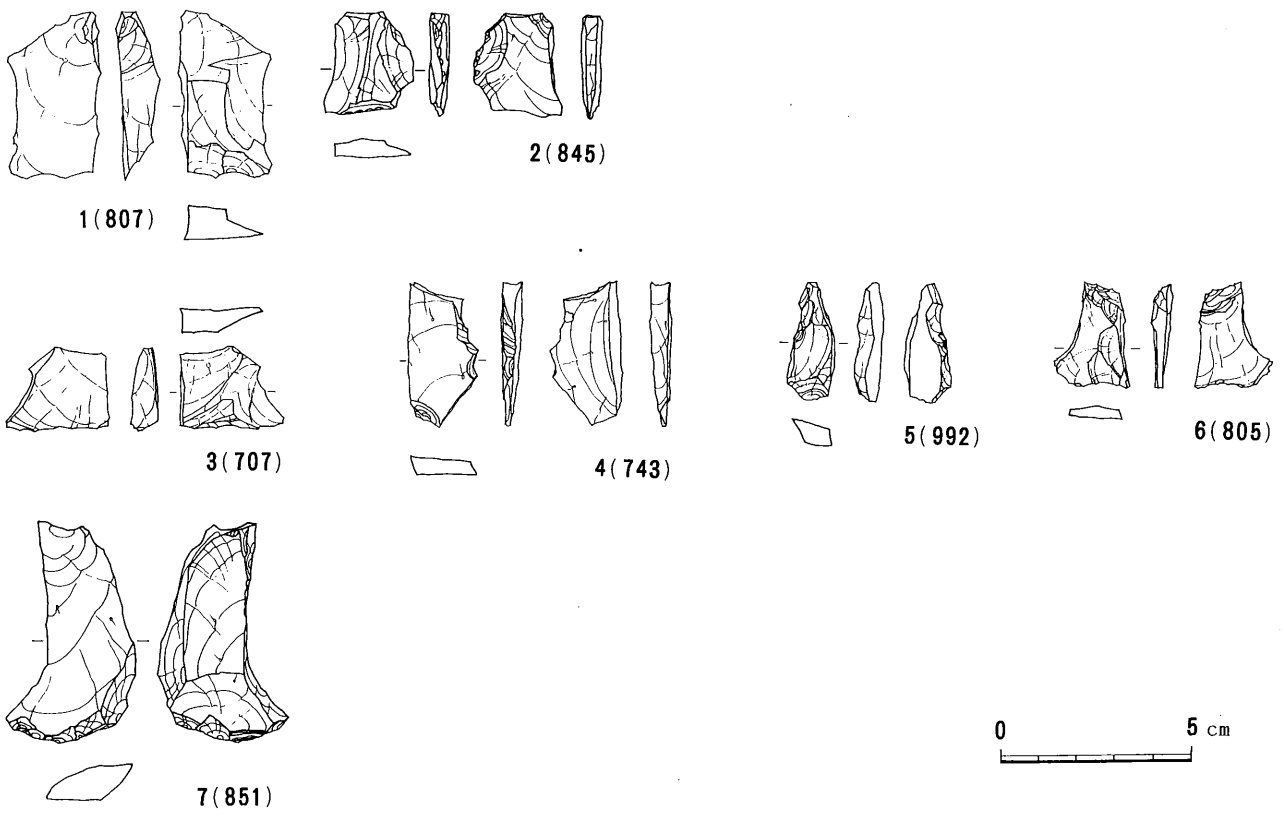
第129図　截断面ある石器実測図(5)



第130図　截断面ある石器実測図(6)



第131図　截断面ある石器実測図(7)



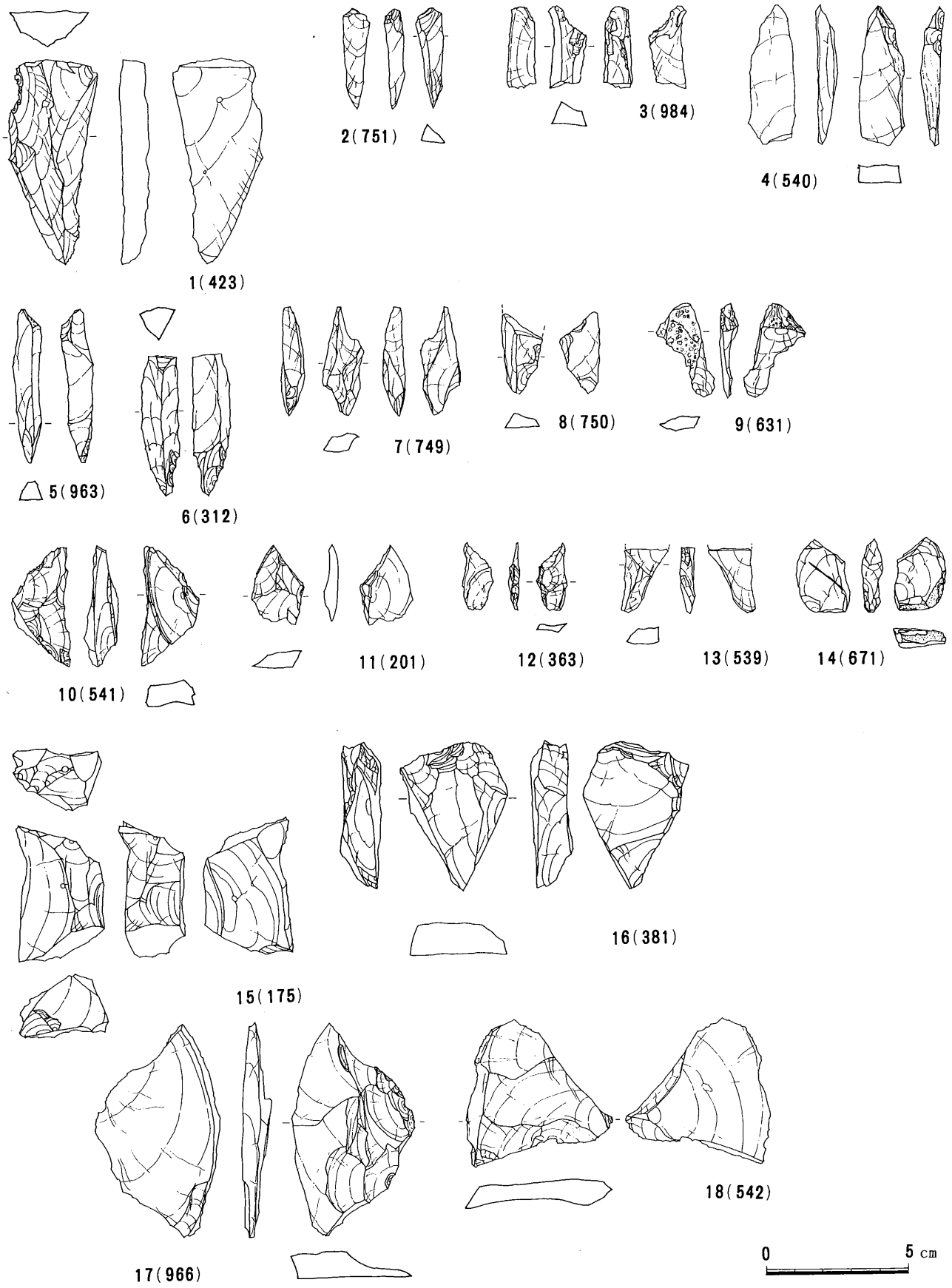
第132図　截断面ある石器実測図(8)

9. 二次調整ある剥片

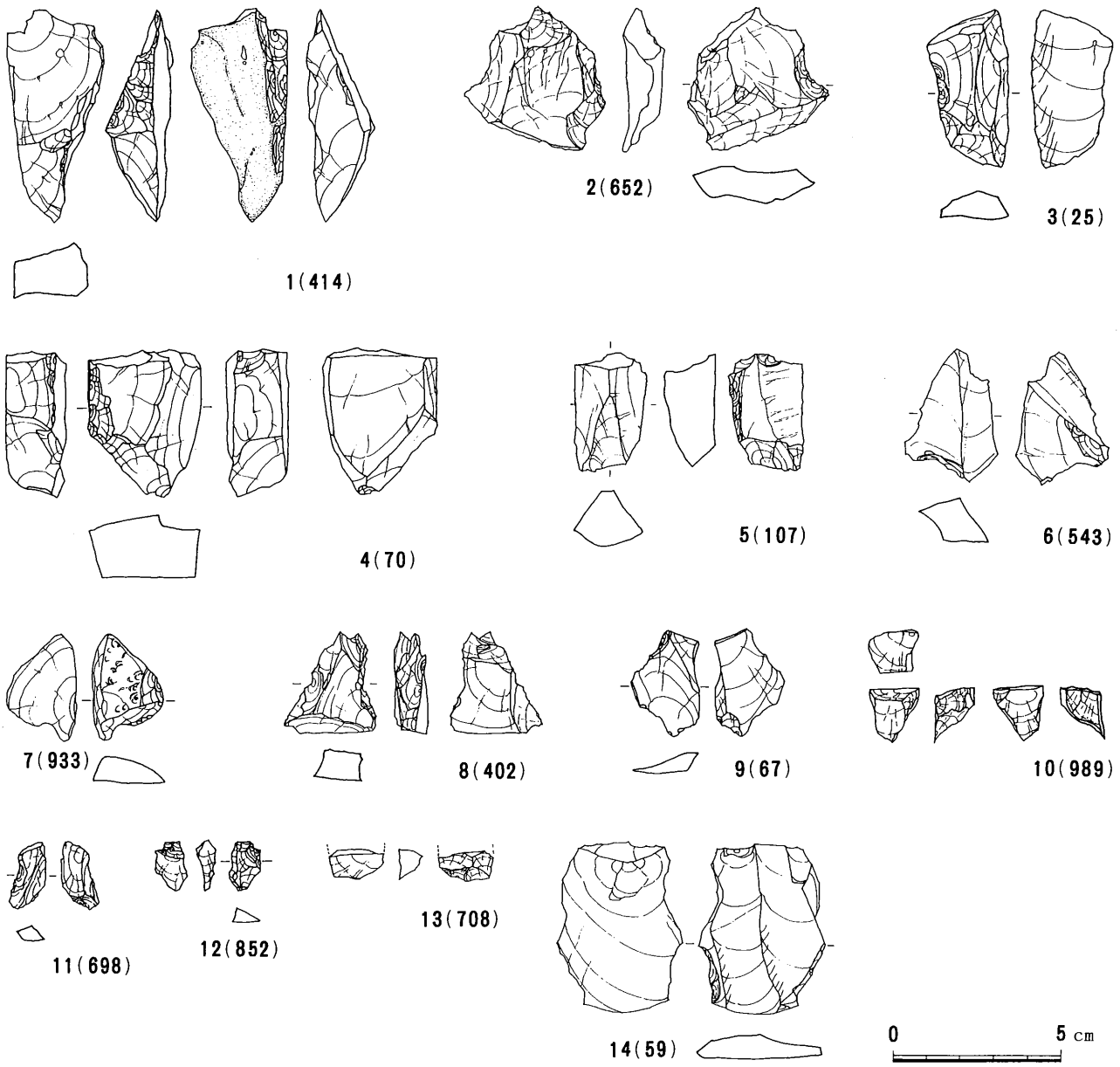
二次的な調整加工は施されるものの，加工程度が低いなど，明確に他の器種に分類・編入するには困難なものを集成した。22点あり，石材別にはサヌカイト20点・流紋岩1点・ハリ質安山岩1点からなる。

第133図　1は縦長剥片の基部に若干の調整が施され，両側縁は鋭く，使用痕と考えられる刃こぼれが認められる。2～6は縦長剥片を素材とし，2～4は基部に，5は両端部，6は先端部に調整痕が認められる。7～8は折損した剥片で調整痕を有する。10～14は小形の横長剥片を素材とする。14はハリ質安山岩を石材としエンドスクレイパーの可能性がある。15は素材を分割する際に生じたと考えられるもので，くちばし状に尖った部分に調整を加えており，彫器とも考えられる。16は基部がつぶれ，先端部にわずかに剥離痕が認められる。17・18は横長剥片を素材とし，18は截断面ある石器とも考えられる。

第134図　1は背面に自然面が残り，縦方向に分割した剥片の側縁部に調整痕が認められるもの。2は石錐とも考えられる。4は板状の剥片を分割もしくは折損させたもので，先端部に側面から加撃した小剥離痕がある。5は折損した剥片を素材としており，彫器とも考えられる。7は剥片先端部をめぐるように小剥離痕が認められる。13は縦長剥片の先端部に刃部加工したエンドスクレイパーの折損品か。14は流紋岩を石材とした縦長剥片の側縁部に調整痕が認められる。他記述しなかったものは意味不明の小剥離痕が部分的に観察されるものである。



第133図二次調整ある剝片実測図(1)



第134図　二次調整ある剥片実測図(2)

10. 横長剥片石核

大浦遺跡では横長剥片石核としての機能だけを有するものは少なく，スクレイパーやナイフ形石器に転用されていると考えられるものが大半を占める。石核として図示したものの中には両面加工のスクレイパーの刃部と考えられるものも存在する。しかし横長剥片を素材としたナイフ形石器が多く出土しており，その素材となった横長剥片のかなりのものが不安定な形状を呈する。こうした点から剥離痕の形状や大きさが矛盾していないもので連続的に剥片剥離が行われたものは横長剥片石核としての機能も有すると考えられる。

横長剥片石核と考えられるものは18点出土している。大浦遺跡では横長剥片素材のナイフ形石器が76点出土しており，石核とナイフ形石器の比率は 1 ： 4.2 ということになる。使用された石材はサヌカイトが17点，ハリ質安山岩が 1 点であり大半がサヌカイトを素材とする。

第138図1～3　交互剥離とは異なり，石核調整痕と目的剥片の剥離痕に差があり，石核幅と一致した1面の目的剥片剥離痕を有するものである。3はハリ質安山岩を石材とする。

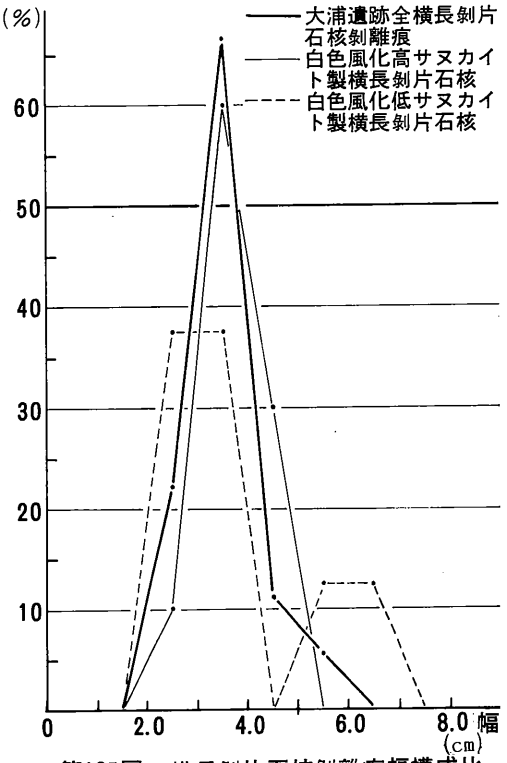
第138図4　石核調整痕と目的剥片の剥離痕とは差が認められるが，並列して目的剥片を剥離しており，石核幅と目的剥片の剥離痕の幅は一致しない。

第138図5～11・第139図1～6　交互剥離による目的剥片の剥取が行われており，石核調整と目的剥片の剥離に差がない。第138図11・第139図4には平坦面を打面とした剥離痕も認められる。

第139図7　平坦面を打面とした石核で，石核の幅と一致しない目的剥片剥離痕が認められる。

翼状剥片石核は目的剥片の剥取する際，石核調整を施して石核幅と一致した横長の剥片を連続的に剥取するという特徴を有する。また石核素材の活用という点では盤状剥片の打面を作業予定面とし，翼状剥片の底面は盤状剥片の主要剥離面であるポジティブな面を利用する例が多い。羽佐島遺跡や西方遺跡といった備讃瀬戸で国府期の石器群が多量に検出された遺跡では，翼状剥片石核の底面の打撃方向は作業面側からのものが多い。またファースト・フレイクの翼状剥片やそれを素材としたナイフ形石器では，背面の底面よりに打点が残存するものが多く出土している。翼状剥片石核の底面は作業面側に打点を持つポジティブな面からなるものが多いと考えられる。

大浦遺跡から出土した横長剥片石核には，瀬戸内技法による翼状剥片石核と類似した要素を有するものが認められる。第138図1～3が相当する。これらの横長剥片石核は石核の幅と目的剥片の剥離痕が一致しており，また石核調整部と目的剥片剥取部とに明確な差があることから，剥片剥取という点では翼状剥片石核の要素を充たすものと考えられる。しかし素材となった剥片の活用という面では，通例の翼状剥片石核とは異なるものが認められる。この3点の石核はいずれも底面がネガティブな面からなる。1ではその加撃方向も作業面側に向いていない。2は石核が半截されており，並列して剥片剥取を行った可能性もある。3は石核調整と考えられる剥離痕が2面からなり，1・2を比較して目的剥片の剥離痕と差がない。また作業面がかなり乱れており，安定した剥片は得られなかった可能性が高い。



第135図　横長剥片石核剥離痕幅構成比

翼状剥片石核の素材活用という点で注意すべき点として作業面の転移という問題がある。西方遺跡例では作業面の背部への転移に伴い，当初打面側の面が底面として利用されている。こうした例から翼状剥片石核

では底面が必ずしもポジティブな面ではない場合や底面の加撃方向が作業面側にないこともあるが，そのほとんどは作業面転移の結果生じる稀なケースである。1～3の石核には作業面の転移の痕跡が認められないことなどから，典型的な翼状剥片石核とすることはできない。またこれらの石核の目的剥片の剥離痕の幅は 3.8 ～ 4.0 cmであり，翼状剥片からナイフ形石器へのブランティングによる収縮が1cm前後と考えられることから，生じたナイフ形石器の長さは3cm前後と推定される。国府型ナイフ形石器としては小形すぎると考えられる。

大浦遺跡出土の横長剥片石核の中で最も多いのが交互剥離によるもので，全体の72％の13点出土している。いずれも目的剥片の剥離痕は石核幅と一致せず，並列して剥片を剥取している。剥離痕自体も形状にかなりの差異があるもので，階段状剥離をしているものもかなり認められる。得られた剥片数はかなりの数量になると考えられるが，安定した形状の剥片は少ない。

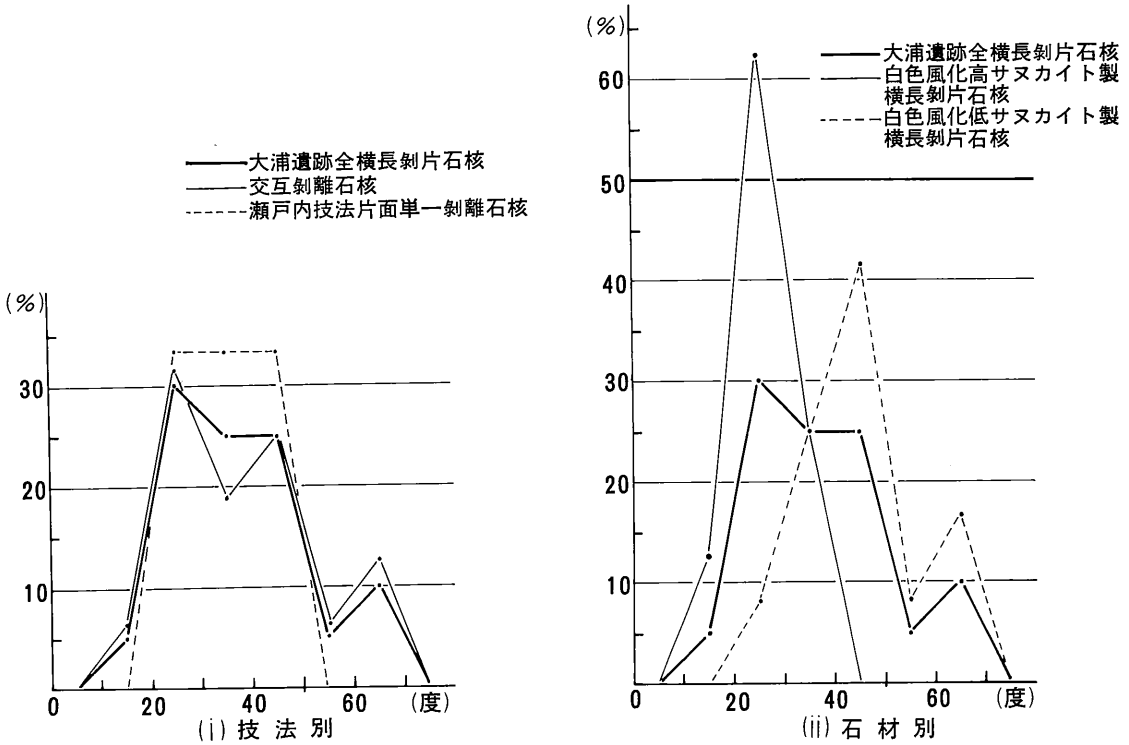
また大浦遺跡では平坦面を打面とした石核が出土している（第139図7）。剥離痕は石核の幅と一致せず，並列して剥片を剥取している。また交互剥離による石核で同時に平坦面を打面とした作業面を有するものがある（第138図9・11・第139図4）が，いずれも並列して剥片剥取が行われている。国府期の単純遺跡と考えられる大阪府高槻市に所在する郡家今城遺跡では，平坦面を打面とする石核が出土しているが，目的剥片の剥離痕は石核幅と一致している。大浦遺跡の平坦面を打面とする石核は並列して剥片剥取を行っていることに特色を有するようである。

大浦遺跡出土の横長剥片を素材としたナイフ形石器では，不安定な形状の剥片を素材とするものが多い。素材となった剥片の不定形さはナイフ形石器の刃部の位置によっても明確となる。国府型ナイフ形石器では例外なく素材となった翼状剥片の打撃方向の末端部が刃部となる。これに対して大浦遺跡出土の横長剥片素材のナイフ形石器では，打撃方向の末端部が刃部となるものが59％，打点と隣接する縁辺を刃部とするものが41％を占める。これが小形切り出し状ナイフ形石器となると実に55％が打点と隣接する縁辺に刃部が位置する。素材となった剥片がいかに不定形であったかが想定され，交互並列剥離による石核との正合性は高い。

【石材と技法からみた石核の剥離角について】

大浦遺跡出土の横長剥片石核には，薄い剥片を石核の素材とするものが多く認められ，非常に薄い剥片を剥取した石核が存在する。第136図(j)は出土した横長剥片石核の目的剥片の剥離痕の延長線と底面のなす角度を集計したものである。石核の剥離痕で残存状況の良好なものを選出して計測した。交互並列剥離石核の中には複数の剥離痕を計測したものもあり，石核数より多い集計数となっている。石核の剥離角は20°～70°までの分布を示し，平均値は38°で，分布のピークは21°～50°の間にある。大浦遺跡から出土した石核で交互並列剥離と片面単一剥離によるものと，第137図中の西方遺跡出土の翼状剥片石核の剥離角を集計したものを比較検討する。

西方遺跡出土の翼状剥片石核は31°～40°・51°～60°の2つの分布のピークが認められるものの，分布パターンにはまとまりがある。剥離角の平均値は47°となる。これに対して大浦遺



第136図　横長剝片石核剝離角構成比

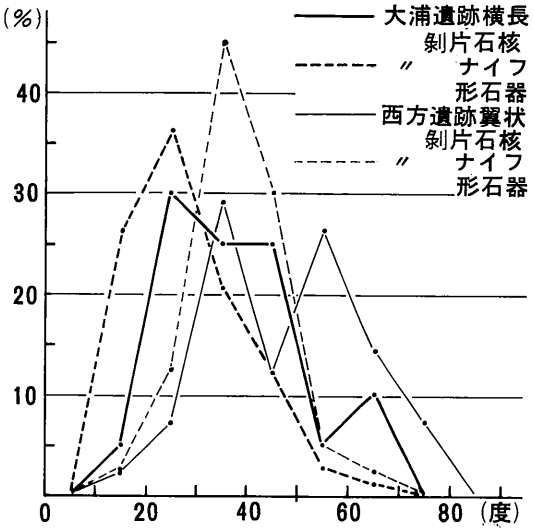
跡の交互並列剝離による石核は21°～30°・40°～50°・60°～70°の3つのピークがあり，散漫な分布とすることができよう。剝離角の平均値は39°となる。大浦遺跡出土の片面単一剝離による石核は出土点数が3点で資料不足であるが，一つの目安として図示した。平均値は38°となる。

大浦遺跡出土の石核に使用されているサヌカイトには，石理が明確で風化が進行し白色を呈するものと普通の灰色を呈するものの2種類が認められる。第136図(ii)はその2種類の石材別に横長剝片石核の剝離角を集計したものである。白色風化サヌカイトを石材とする石核は10点出土し，剝離痕が20°～40°の分布範囲を有する。分布のピークは21°～30°にあり，その間に全体の60％が含まれる。剝離角の平均値は31°となる。それほど風化せず灰色を呈するサヌカイトを石材とした石核は7点あり，25°～70°の分布範囲を示す。41°～50°に分布のピークがくる。平均値は52°となる。35°～45°の間で分布範囲が重複するものの，白色風化サヌカイトでは剝離角が小さいものに集中する傾向があり，風化度が低いサヌカイトでは剝離角が大きいものに偏る傾向が認められる。大浦遺跡出土の交互並列剝離石核に認められる剝離角の散漫な分布は，2種類のサヌカイトの石質の差によるとすることができよう。片面単一剝離による横長剝片石核にも風化度が異なるサヌカイトが使用されている。各1点出土しているが，白色風化サヌカイト質のものは剝離角が30°，灰色を呈する風化の程度が低いものでは50°を計り，石材の差を反映している。

白色風化サヌカイトは石理が明確であり，横長剝片石核に使用される際は，石理が石核の底面と平行している場合が多い。そのため剝片剝取は石理に影響され，目的剝片のポジティ

ブな面は底面と平行に近い角度で剥取されることとなり，剥離角が小さく薄い剥片が得られたと考えられる。

第 113 図(ii)と第 136 図(ii)はナイフ形石器と横長剥片石核で，白色風化サヌカイトを石材に用いたものの剥離角を集計したグラフである。ナイフ形石器では21°～30°にピークがあり，非常に薄い剥離角を呈するものが多い傾向を示す。横長剥片石核においてもそれと矛盾するものではない。風化が少ないサヌカイトを石材とするナイフ形石器は21°～50°までのピークを示し，剥離角が大きい方に偏る傾向を示す。ナイフ形石器においてもサヌカイトの材質の差は反映しているとすることができよう。



第137図 剥離角構成比

【交互並列剥離石核における石理について】

大浦遺跡出土の横長剥片石核では，白色風化サヌカイトを石材に用いるものを中心として，石理方向が底面と平行するものが多い。これに対して，典型的な翼状剥片石核では，石理は作業面と平行する比率が高い。この石材の使用法の差は，安定した剥片の剥取と量的な剥片剥取という目的の差の反映した結果と考えられる。翼状剥片石核では石核調整部と作業面が明確に分かれているのに対して，交互剥離石核ではその区別がないことから両作業面に共通した石理方向を有するように石材を使用したものであろう。

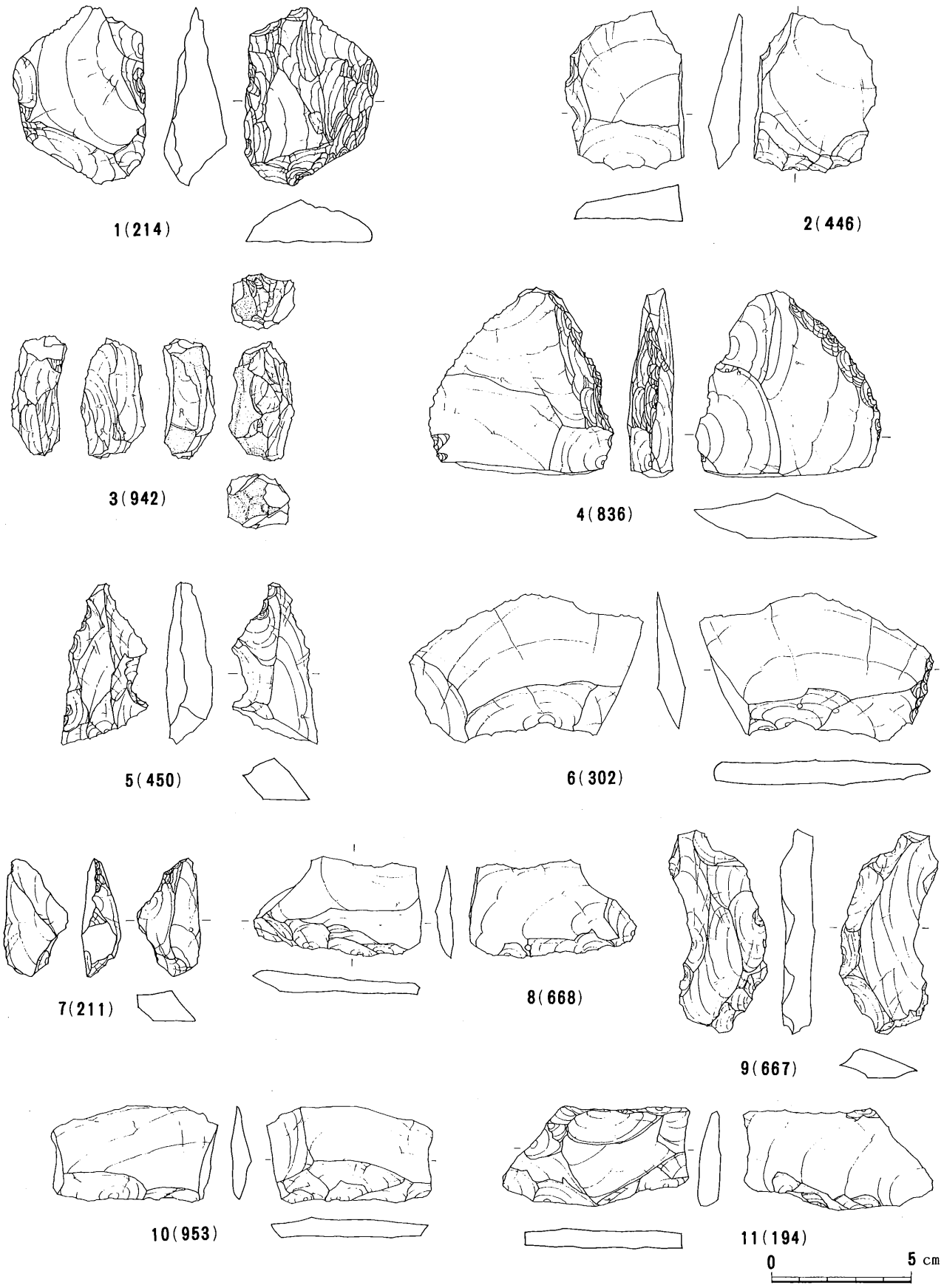
白色風化サヌカイトは石理が明確であり，大浦遺跡出土の横長剥片石核では，石理が石核底面と平行する場合が多い。石理の方向に影響され，目的剥片のポジティブな面は底面に対して浅い角度で剥取される。その結果剥離角が小さく薄い剥片が得られたと考えられる。ただこうした石理方向を有する石核では目的剥片の剥離痕の末端が階段状剥離を呈するものが多く，安定した刃部は得にくいと推定される。これに対して典型的な翼状剥片石核の底面は，平坦なものよりリング等による起伏がやや認められるものの方が多い傾向がある。翼状剥片石核では石理面が作業面の方向と一致するものが多く，結果として底面が石理面と平行するものは少ない。翼状剥片石核では石核素材の剥離よりも翼状剥片の剥取に重点が置かれ，石理方向も作業面と一致するように用いられたものと考えられる。交互剥離では，石理方向と上下 2 面の作業面を一致させるのは不可能である。石核底面と石理を一致させることにより，不安定ながらも石理方向が共通する横長剥片を剥取したものであろう。

大浦遺跡出土の横長剥片素材のナイフ形石器はかなり不安定な形状の剥片を素材とするが，特に切り出し状ナイフ形石器ではブランティング等の二次加工が施されることにより，素材の形状にはさほどの画一さは求められなかったと考えられる。また白色風化サヌカイトを石材とする横長剥片素材のナイフ形石器の底面は石理面と平行する平坦面をもつものが多い。

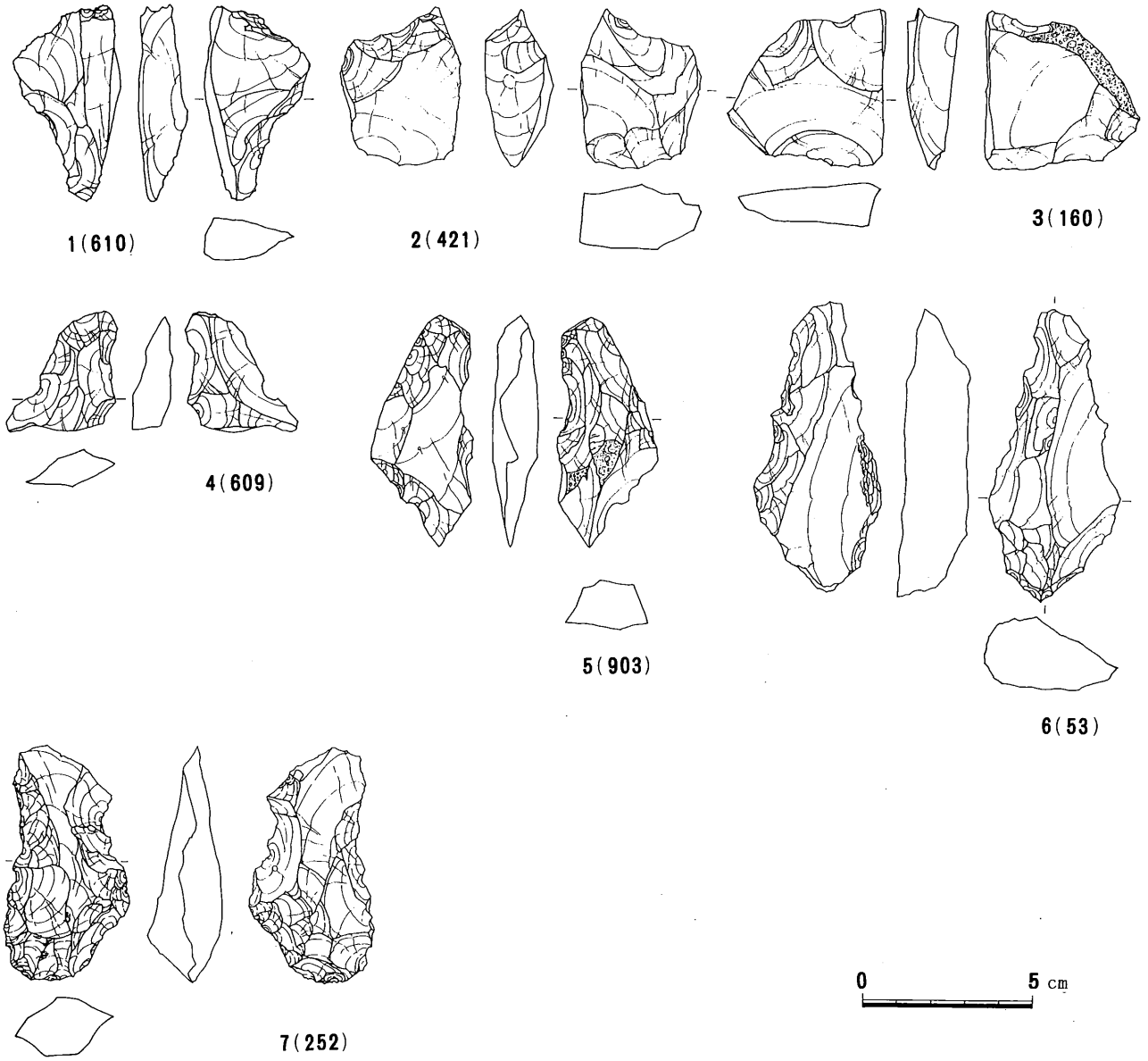
こうした点も横長剝片石核の石理の利用と一致するものである。

大浦遺跡出土の横長剝片石核には，翼状剝片石核と類似した剝片剝取法を示すものが3点含まれる。しかし大半の翼状剝片石核とは異なり，底面が全てネガティブな面を利用している。通例の翼状剝片石核にも底面がネガティブな面からなるものは認められるが，作業面の転移の結果上下が逆転したものであり，量的には少ない。大浦遺跡出土のものは作業面の転移が認められず，しかも全点底面がネガディブな面からなるなど典型的な翼状剝片石核とすることはできない。また石核調整を施しながらも作業面で並列して剝片剝取を行い，翼状剝片石核から交互並列剝離石核への過渡的な様相を呈するものも1点存在する。後者は片面並列剝取とでも呼ぶべきもので，大浦遺跡では最も安定した剝片剝取がなされたと考えられるものである。底面も作業面側に打点を有するポジティブな面からなっており，石理面も作業面と平行する。出土した横長剝片石核の72％にあたる13点は，交互並列剝離によるものであり，交互剝離が大浦遺跡の横長剝片剝取法の主流となっているとすることができよう。

こうした3種類の横長剝片石核が偶然大浦遺跡で分布が重複したものとする可能性も全く否定することはできないが，片面単一剝離や片面並列剝離による石核が大浦遺跡の遺物密集度が最も高い区域から出土したことや，厳密な意味で翼状剝片石核の要素を充たすものではないことなどからすれば，交互並列剝離技法と同時期の所産である可能性が高いと考えられる。交互並列剝離が瀬戸内の横長剝片剝取法の主流となった時期にも，翼状剝片石核の系譜を引く石核は，やや変質しながらも少量は存在すると考えられる。



第138図　横長剝片石核実測図(1)



第139図　横長剝片石核実測図(2)

11. 縦長剝片

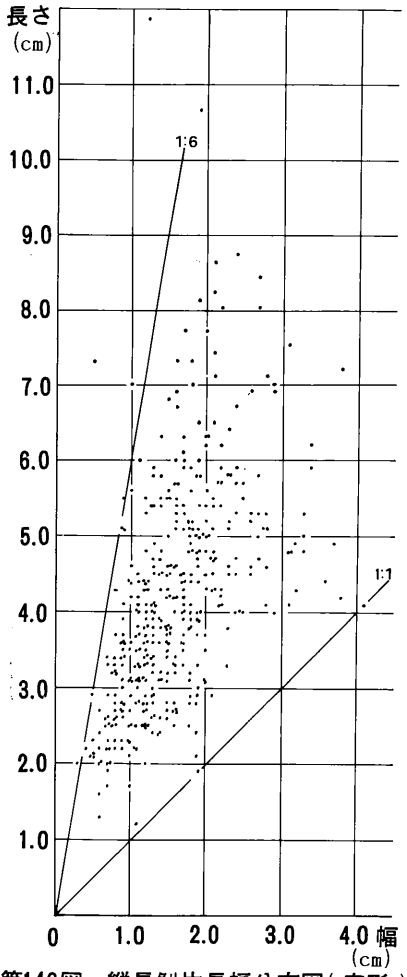
縦長剝片は 904 点出土した。使用された石材はサヌカイト・ハリ質安山岩・流紋岩・黒曜石である。サヌカイトを用いた縦長剝片が圧倒的に多く全体の94％を占め，他の石材は 6 ％にしかすぎない。

第 142 ～ 149 図28はサヌカイトを石材とする縦長剝片で，石理の明瞭な白色風化サヌカイト質のものが大半を占める。サヌカイト製の縦長剝片石核では側面に石理と平行する平坦面を有するものが多いが，縦長剝片も背面部に石核側面に相当する平坦面を残すものが多い。この傾向は白色風化サヌカイト質の縦長剝片に顕著に認められる。サヌカイト製の縦長剝片の 6 割前後は石核側面の平坦面を広く残す。縦長剝片の側縁部は，石核側面の平坦面と主要剝離面で形成されたものの方がより安定した刃部を形成しているようである。剝片剝取では石核側面をう

まく活かしていると考えられる。縦長剝片の断面形は概三角形のもの（第142～144図17）・台形状のもの（第144図18～147図）・長方形状のもの（第148～149図28）がある。この中で断面が長方形状のものは，石核の平坦な側面部を縦長剝片の両側縁に残すものである。サヌカイト製の縦長剝片の約1割が該当する。作業面再生剝片の可能性が高い。ただこうした縦長剝片の背面部は乱れているものが比較的少ない。また打点部は断面が長方形を呈していても，末端部付近には鋭い側縁を有しているものも多い。多くのサヌカイト製の縦長剝片には若干のねじれが認められ，縦長剝片剝取の際ある程度のねじれが生じることは予測されていたとすべきであろう。こうした点からすれば，必ずしも両側縁に石核の側面部を残す縦長剝片を作業面再生剝片とすることはできない。

またサヌカイト製の縦長剝片は量的に恵まれているにもかかわらず，明確な二次加工を施して他の石器に転用されたものの比率的な少なさは注目される。

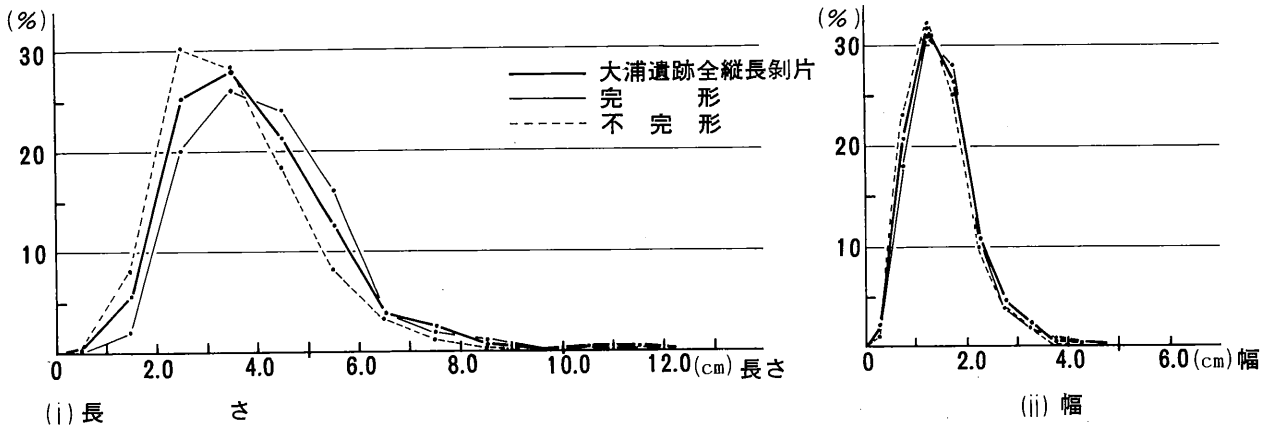
第149図29～150図33はハリ質安山岩製の縦長剝片である。38点出土している。ハリ質安山岩には通例の丸味のある自然面を有し，軟質な感じを与えるものと角ばった自然面を有して硬質なものとがある。いずれも縦長剝片に使用されている。硬質のハリ質安山岩を用いた縦長剝片は比較的安定した形状を示すが，軟質のものは原礫を分割した際に生じたと考えられるものが含まれており，サヌカイト製の縦長剝片と比較すると安定性に欠ける。



第140図　縦長剝片長幅分布図（完形）

第150図34～151図6は流紋岩を石材とするもので，10点出土している。かなり安定した形状を呈するものと長幅比からすれば横長剝片と差がないものも含まれている。大浦遺跡出土の流紋岩製縦長剝片石核には，C・D型の2種がある。いずれも剝片を素材とするが，C型では柱状の縦長剝片の主要剝離面を打面とするため比較的安定した形状の目的剝片が剝取されている。これに対してD型では扁平な剝片の背面部を作業面としていることから，剝取される目的剝片の形状は不安定なものになりがちである。ただ出土したC型の石核の主要な作業面は素材となった縦長剝片の側面部に位置し，短軸方向に剝片を剝取しており，長幅比にそれほど差のない縦長剝片も剝取されたと考えられる。また大浦遺跡からは流紋岩を石材とした横長剝片石核が検出されていないことからすれば，図示した流紋岩製の剝片は縦長剝片の範疇で考えるべきものであろう。

第151図7～9は黒曜石を石材とする縦長剝片である。8は漆黒色を呈する緻密な石質であるが，他は粗質なものである。8は厚さはあるものの，幅は細石刃と差はない。細石刃に分類すべきものかもしれない。ただ良質の黒曜石製のナイフ形石器



第141図　縦長剝片長さ・幅構成比

が存在することから，縦長剝片として分類した。粗質の黒曜石は細石核，細石刃ともに用いられていない。

大浦遺跡出土の縦長剝片は，ハリ質安山岩や流紋岩を石材とするものの一部を除いて，明確な石刃状の形態を呈するものが多い。第140・141図は出土した縦長剝片で完形のものの長さと幅を集計しグラフ化したものである。長幅比では2：1から4：1の範囲に大半の縦長剝片は分布する。長幅差は非常に明確なものである。出土した縦長剝片石核は素材の長小口を長軸方向に作業面を設定して剝片剝取を実施したA・B型のものがほとんどであることと対応している。出土したA・B型の石核は全てサヌカイトを石材とする。黒曜石製の縦長剝片石核は検出されていず，流紋岩製の石核にはC型とD型しか出土していない。しかし，黒曜石と流紋岩製の縦長剝片の一部のものに長幅差が著しく顕著なものが認められることから，両石材を用いて，長小口を作業面とし長軸方向に剝片剝取を行った石核が存在する可能性がある。また出土した縦長剝片は長さは3cm，幅は1cm代のものが最も多い。

サヌカイト製の縦長剝片は出土した数量の割には他の石器に転用された例が少ない。サヌカイト製の縦長剝片を素材とした石器にはナイフ形石器・彫器・舟底形石器などがある。彫器では2点が縦長剝片を素材とするが，転用数としては少なく，縦長剝片を素材とする石器の大半はナイフ形石器である。サヌカイト製ナイフ形石器の27％にあたる28点が縦長剝片を素材とする。このうち6点がC型の小形切り出し状ナイフ形石器で，A・B型に属するものは22点である。サヌカイト製の縦長剝片は石刃状の非常に明確な形状を呈するものが多い。小形切り出し状ナイフ形石器の素材となった縦長剝片は，それほど明確なものではなく，縦長剝片石核のA・B・C型の石核から剝取された縦長剝片を素材とする可能性は低い。またA・B型ナイフ形石器で，A・B・C型の石核から剝取された安定した形状の縦長剝片を素材とするものは4割程しかない。サヌカイト製の縦長剝片で石刃状のものは，他の石器の素材として用いられた例は少ない。これは翼状剝片のナイフ形石器への転用された度合の高さと比較すると非常に特徴的なものである。翼状剝片は本来的に国府型ナイフ形石器の素材として剝取されたと考えるが，縦長剝片は石器の素材としてよりも，それ自体が石器として使用されることを目的としたもの

であろう。

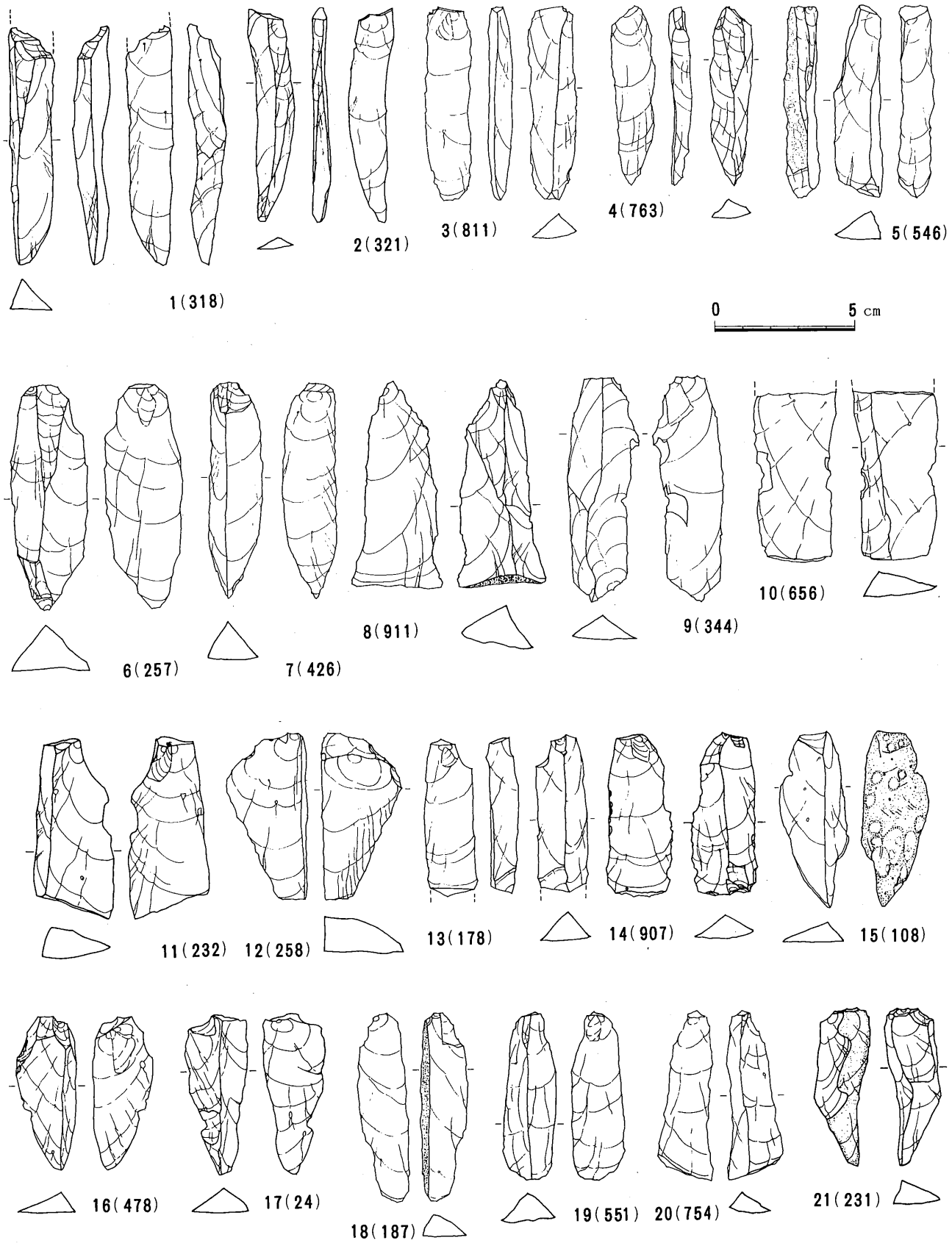
サヌカイトを石材とする縦長剥片は必ずしも両側縁全体に鋭いエッジを有するものではない。石核自体が側面に石理と平行する平坦面を有するために，先端部は鋭いエッヂを有するが，基部は断面が長方形を呈するものもかなりある。また背面に石理と平行する平坦面を広く残すものには，片方の側縁は鋭いエッジ状を呈するが，他の側縁はエッジ状にならないものがかなり認められる。ブランティングを施す必然性がないものも含まれる。出土した縦長剥片で白色風化サヌカイトを石材としたものは風化が著しく進んでおり，縁辺部に使用痕を確認するのは困難であるが，風化が進んでいないサヌカイト製の縦長剥片の側縁には使用痕と考えられる小剥痕が認められるものがある。こうした点からすれば，縦長剥片が刃器として使用されたことは誤りないであろう。

ナイフ形石器に施されるブランティングの意義を明確化せずに縦長剥片を理解するのは困難であると考える。翼状剥片のナイフ形石器化に関して，翼状剥片は安定した刃部を有することから，国府型ナイフ形石器が刃器としてだけの機能を有するのであれば，ブランティングを敢えて施す必要性はない。二次的な加工を施すことによって他の機能が付加されたと考えるべきであろう。国府型ナイフ形石器は，尖った先端部と鋭いエッジを有した木葉形の形態に石器の機能が反映していると考えるべきであろう。刃部に調整を施す場合も木葉形の形状にするためと考えられるものが多い。また大浦遺跡出土の流紋岩製の縦長剥片は幅の広いものが多い。これに対して流紋岩製の縦長剥片素材のナイフ形石器は細身のものである（第115図10）が，主要剥離面の状況は，素材がかなり幅広のものであったことを示している。ブランティングは先端部を除き側縁のほぼ全体に施されており，幅広の縦長剥片を細身の形状に修正するためのものと考えられ，当初から細い素材の先端部には素材面が残る。サヌカイト製の縦長剥片素材のナイフ形石器は基部と先端部にブランティングが認められるが，片側面は自然面からなり，しかも素材自体が細身であることから，ブランティングは側面全体には施されなかったと考えられる。先端部の調整は尖鋭にするためであろう。こうした点からすれば，ブランティングは目的のナイフ形石器の一定形状に素材を変形するために施されることを第一としており，不必要な部位には施さないと考えられる。サヌカイト製の縦長剥片は刃器としては，敢えてブランティングを施さなくても充分使用可能なものが多い。多量に剥取されていることを考慮に入れれば，サヌカイト製の縦長剥片はそのままの形状で刃器として使用されたものと考えるべきであろう。

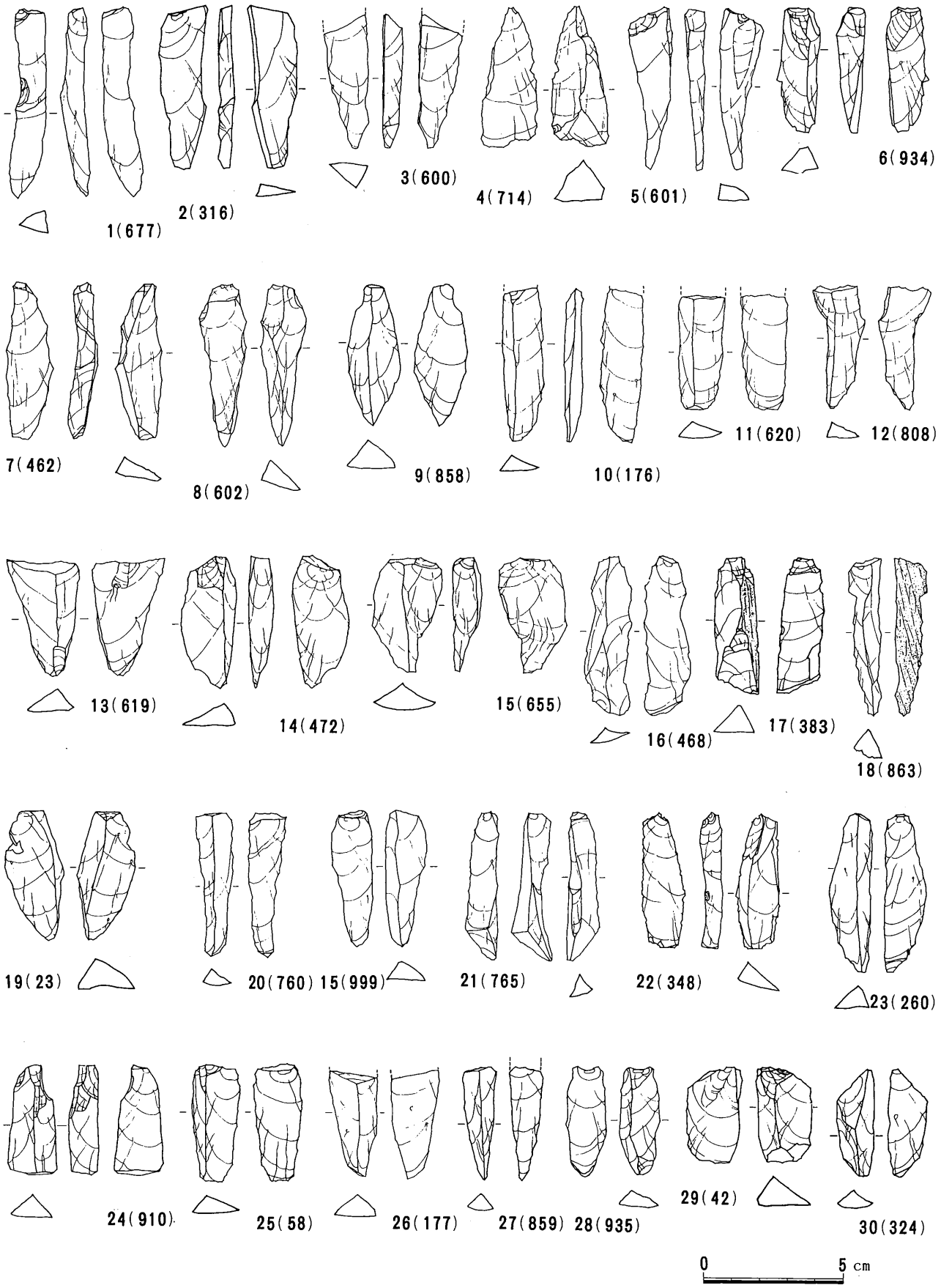
12. 縦長剥片石核

縦長剥片石核と考えられるものは84点出土している。石材別にはサヌカイト製が81点と多いが，ハリ質安山岩製1点，流紋岩製2点となる。黒曜石製のナイフ形石器や縦長剥片が出土しているものの，黒曜石を石材とする縦長剥片石核は出土していない。

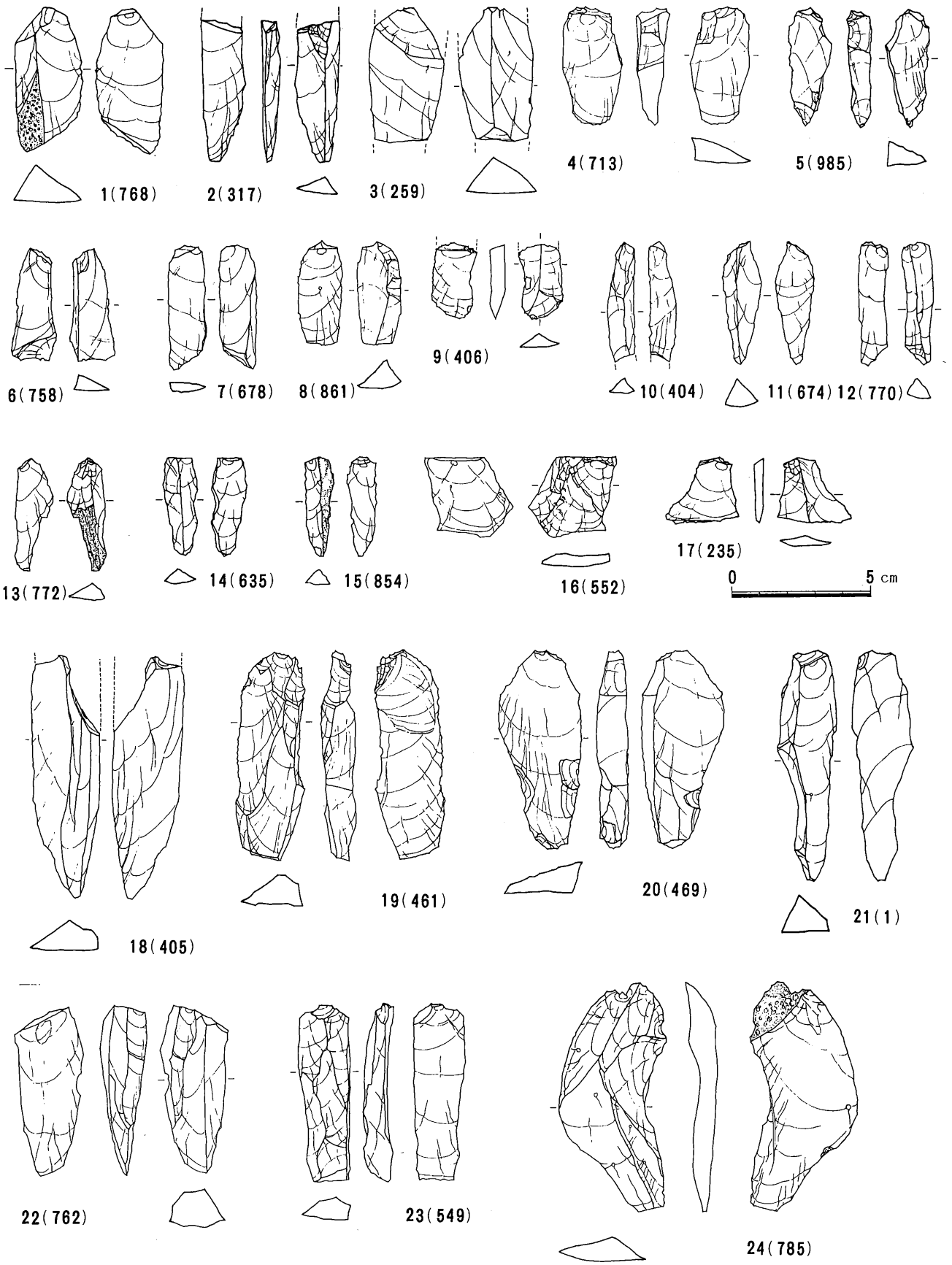
大浦遺跡から出土した縦長剥片石核には，4種類の剥片剥取法が認められる。



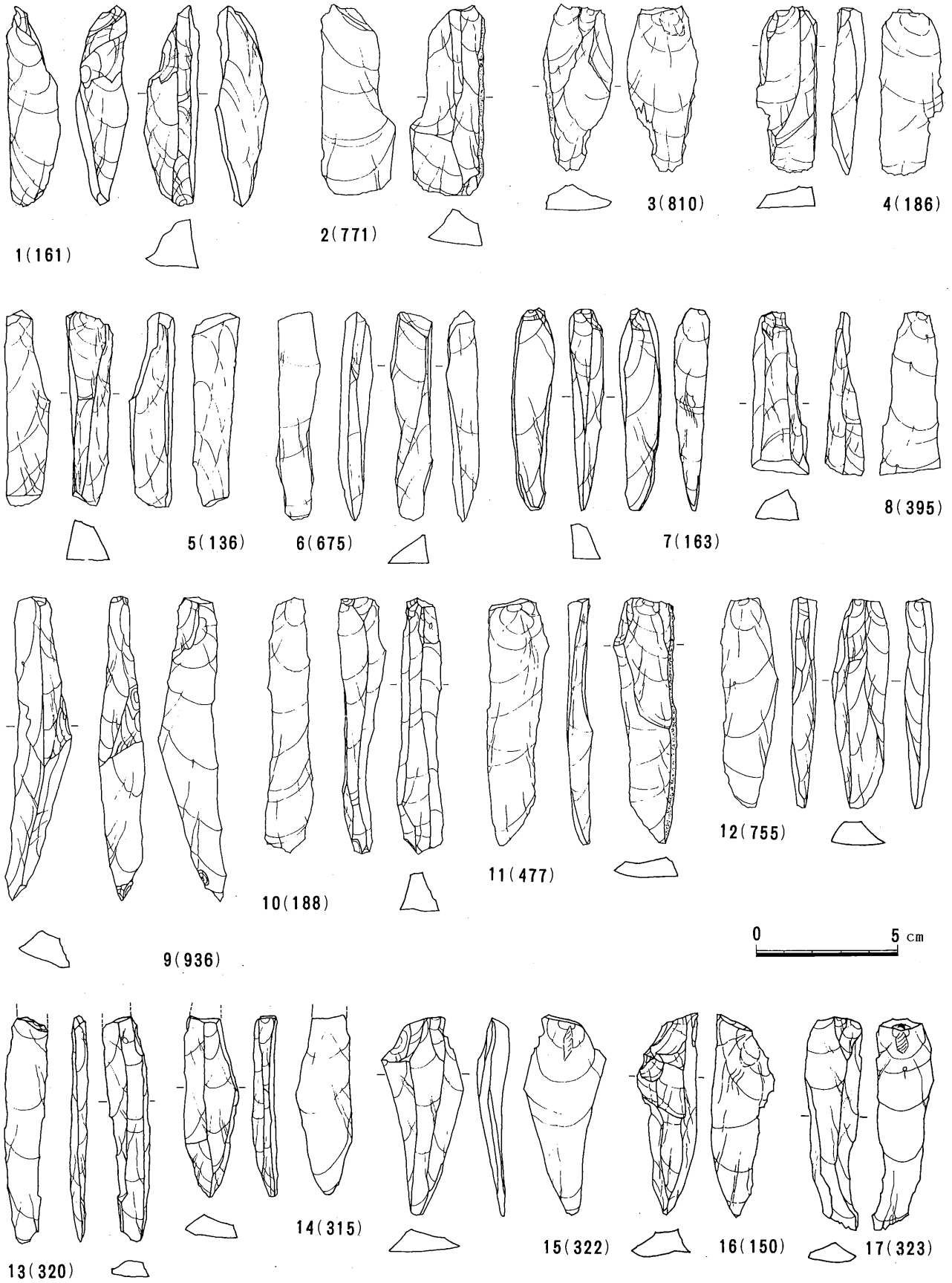
第142図　縦長剝片実測図(1)



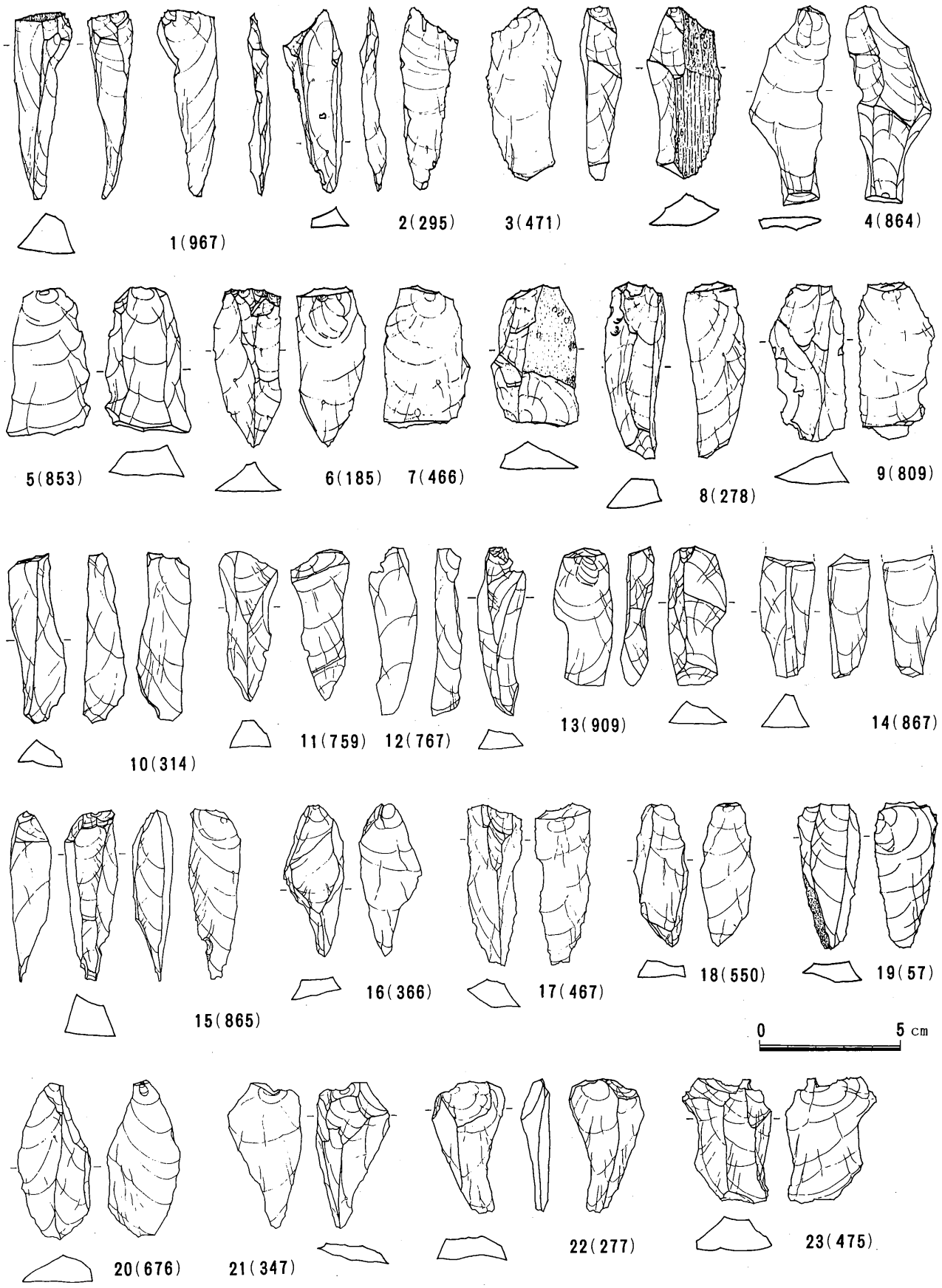
第143図 縦長剝片実測図(2)



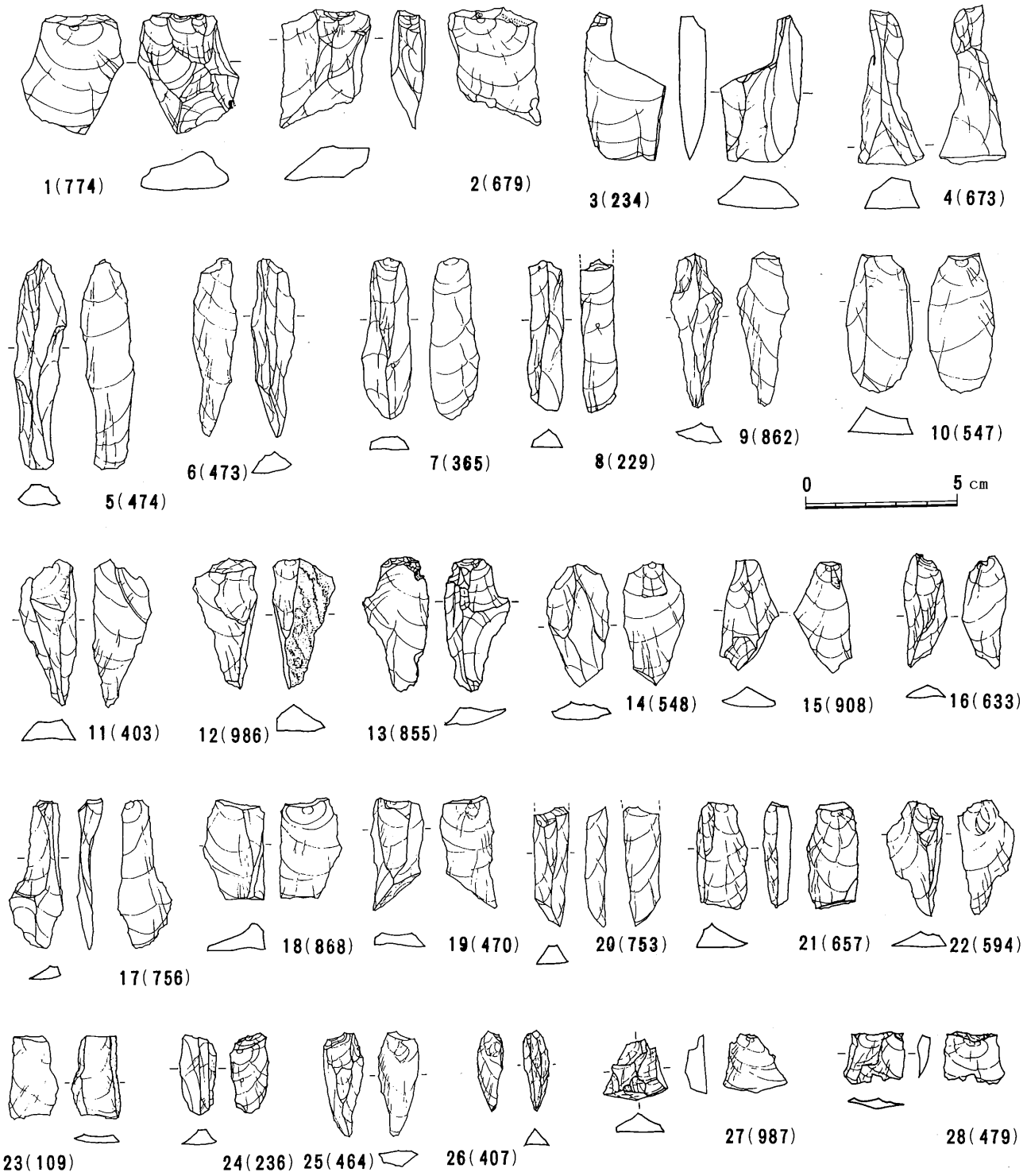
第144図 縦長剝片実測図(3)



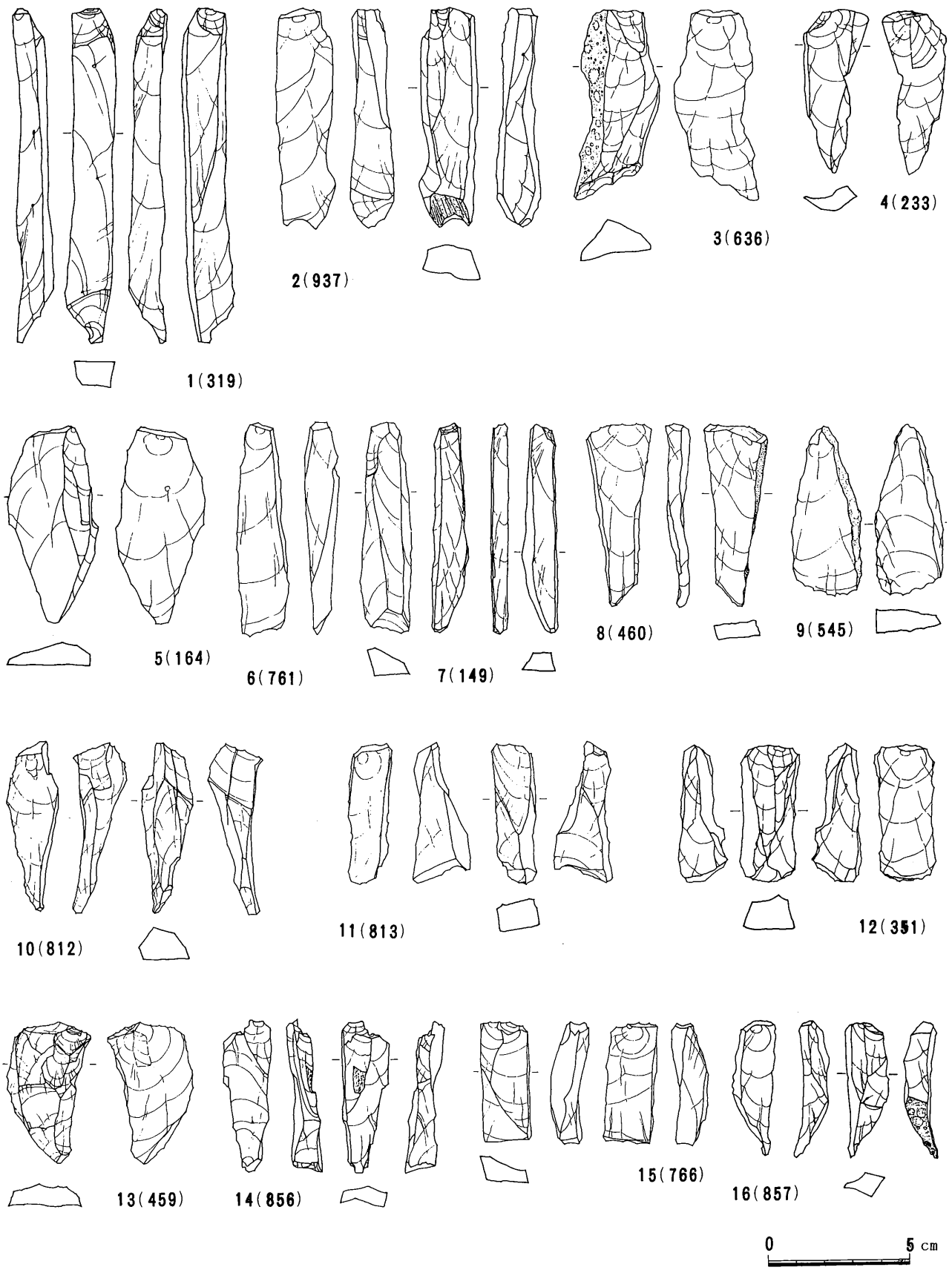
第145図 縦長剝片実測図(4)



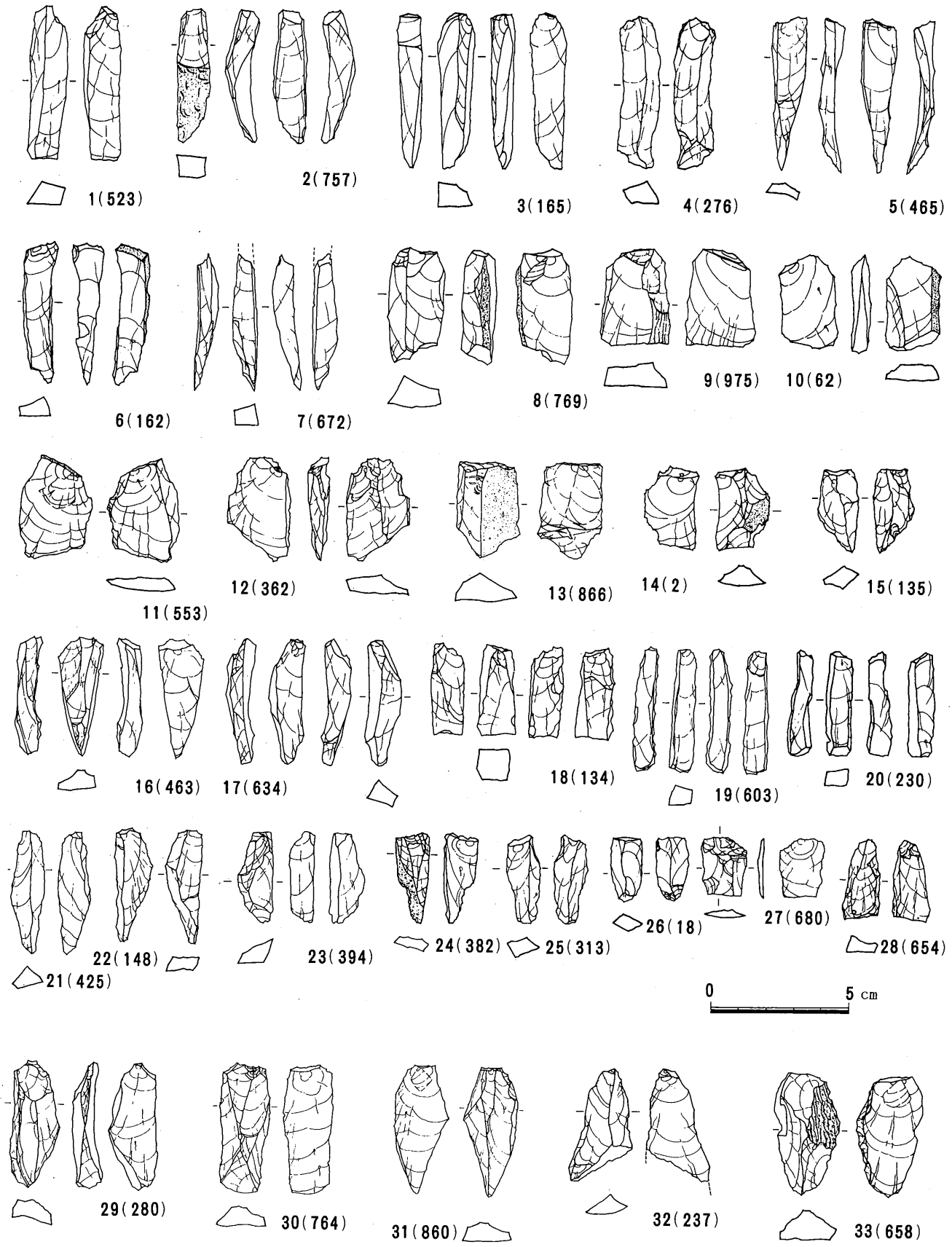
第146図　縦長剝片実測図(5)



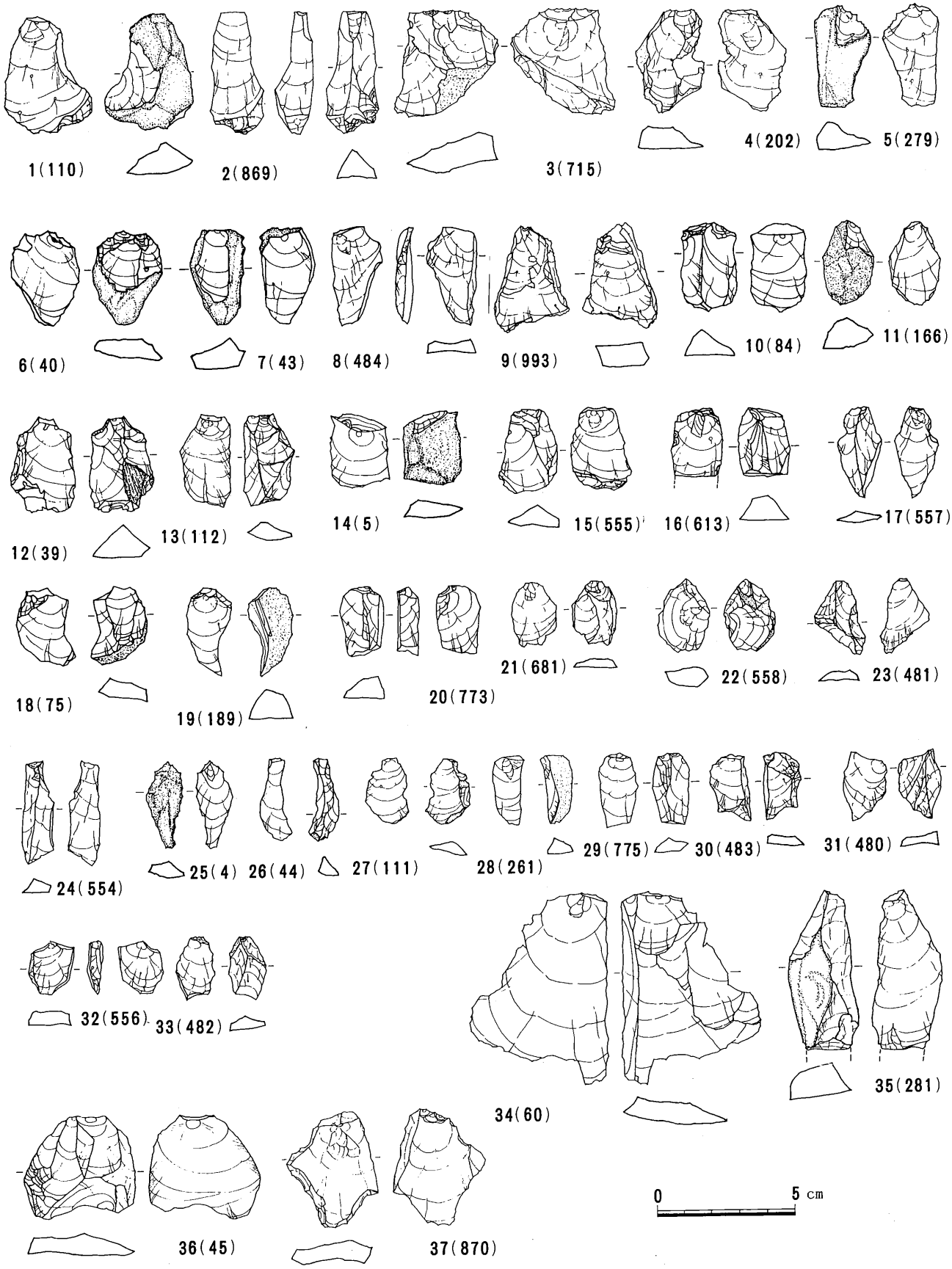
第147図 縦長剝片実測図(6)



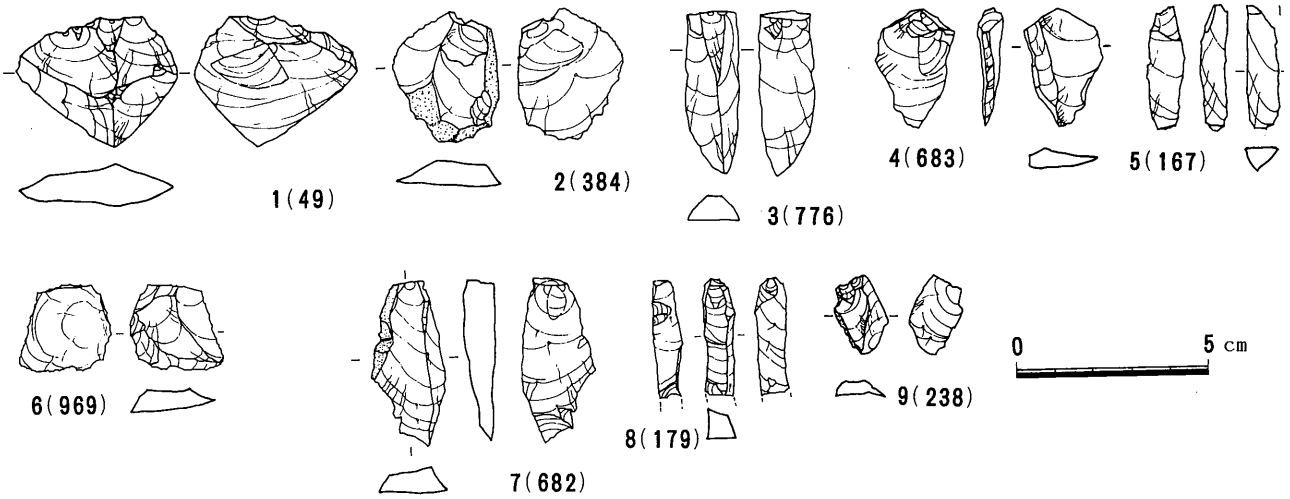
第148図　縦長剝片実測図(7)



第149図 縦長剝片実測図(8)



第150図 縦長剝片実測図(9)



第151図 縦長剥片実測図(10)

A型　大半は風化が進み白色を呈するサヌカイトを石材に用いる。石核は素材に板状の剥片を使用し，側面が石理面と平行する非常に平坦な面からなる。側面の調整はほとんど施さない。

B型　縦長剥片を素材とする。素材の主要剥離面と作業面の打撃方向が一致し，石核の長軸方向に作業面を持つものである。

C型　縦長剥片を素材とする。石核の短軸方向に作業面をもつ。

D型　やや不定形な剥片を素材とし，その周囲からの打撃で剥片剥取を行う。得られた剥片はやや不安定なものとなる。

B・C型はA型の石核から剥取された剥片を石核に転用したものと考えられ，サヌカイト製の石核では両側面に石理面と平行する平坦面を有するものが多い。B型でも素材のポジティブな主要剥離面が剥片剥取作業の結果欠落したものは，A型と識別できない。D型の石核から得られた剥片は必ずしも縦長なものではない。しかし，瀬戸内技法の系譜上で理解される横長剥片石核には，明確な底面が認められる。D型では底面に相当する面が認められないことから，縦長剥片石核の範疇で理解すべきものであろう。

第154～160図1～3　A型に属する縦長剥片石核である。60点出土している。石材は全てサヌカイトを用いる。60点中の55点は風化が進行し白色を呈するが，他のものにも程度の差はあるものの風化の進行が認められる。石材の石理面と平行な面が石核の側面に残るものがほとんどである。石理と平行する面が認められないもの（第159図15）も剥片剥取作業が著しく進行しており，結果的に残存しなかったものであろう。作業面が明確に転移する例は41点あり，68％を占める。そのうちの33点が背面に，また打面や底面へ作業面が転移したものが7点ある。石理面と平行する面へ作業面が転移したものは4点しかなく，第154図1と同様に，作業面の転移というより，作業面が側面に転回したと考えた方が良いもの（第157図1・8），また剥片剥取作業が進行し，石核の厚味がなくなり，角柱状を呈するもの（第157図3・5）である。当初から石理面と平行して目的剥片を剥取したものがないことなどからしても，A型の石核で

は石理面と直交した小口面から剥片剥取が行われることを原則とし，他は例外的なものとすることができよう。

また打面は作業面側からの打撃によって形成されるものが多い。側面から形成された打面は石理と直交するためか，階段状を呈する傾向を示す。作業面が打面を兼ねる例もあり，打面としたものの中にも作業面が再生されたものも含まれる可能性がある。こうした点からすれば，A型の石核では作業面がかなり自由に転移したことが考えられる。

第160図4～第161図　B型に属する縦長剥片石核である。18点出土しており，石材は全てサヌカイトである。このうち16点は風化が進んだ白色風化サヌカイトを用いる。他の2点も風化はある程度進行しており，石理がかなり明瞭に認められる。素材となった縦長剥片の主要剥離面よりも作業面が新しいもの16点，先後関係が不明なものが2点ある。

A型の石核で，石理と平行する側面に作業面が転移した例は少ないが，B型では18点中9点は側面に転移している。第160図9・10，第161図2・3・5～7・9・10が該当する。側面転移の比率の高さは素材となった縦長剥片の形状に起因すると考えられる。A型における側面への作業面転移例には，剥片剥取作業の進行により石核の厚さと作業面幅に差のないものが多い。B型では縦長剥片を作業面とすることから，角柱状を呈するものが多く，その結果，石理面と平行する側面へ作業面が転移したものと考えられる。素材となった剥片の主要剥離面に目的剥片を剥取した痕跡が残るものは3点出土している。第160図5・第161図4・8が該当する。また剥離面の切り合い関係から作業面が新しいと考えられるものに，第160図7・8がある。B型とした縦長剥片石核で最も大きいもの（第160図4）と角柱状を呈するもの（第161図1）には素材となった剥片の主要剥離面と作業面の先後関係が不明であり，作業面再生剥片とも考えられるものである。ただB型とした石核で，確実に石核と考えられる理由は，剥離面の切り合い関係で作業面が明確に新しいと考えられるからであり，切り合い関係がないB型の石核も当然存在すると考えられる。第161図1は作業面再生剥片とするには若干厚すぎると考えられ，B型の石核としておきたい。

B型の石核は縦長剥片を素材とすることから形状的には角柱状を呈するものが多い。また作業面が素材となった剥片の主要剥離面側に転移したものもある。こうした点からすれば，縦長剥片石核のA型としたものの中にも，実際はB型のものも含まれる可能性がある。

第162図1～3　C型の縦長剥片石核である。1は打面が自然面と調整面からなる。風化度は低いが，石理の明確なサヌカイトを石材とする。2・3は縦長剥片の主要剥離面を打面としたものである。2は白色風化サヌカイト，3は流紋岩を石材とする。C型も剥片剥取が進行して，作業面の転移が行われれば，A・B型と識別は困難であると考えられる。

第162図4～6　D型の縦長剥片石核とその素材である。4がハリ質安山岩，5・6は流紋岩を石材とする。いずれも長幅がほぼ同じ位の剥片を素材とする。残存する剥離痕の形状からすれば，それほど安定した剥片剥取は行われていないと推定される。

【石材の利用について】

大浦遺跡から出土した縦長剥片石核に使用されたサヌカイトの大半は，石理が明確な白色風化サヌカイトであり，他のサヌカイトも石理が明確な点では共通したものである。これらの縦長剥片石核は，極めて平坦な石理面を石核の側面に有し，原則的には石理と直交する石核の小口面を打面もしくは作業面として利用する。側面が石理面と平行するため，石核の側面の調整はほとんど施されない。石理を非常に有効に利用したものとすることができよう。石理の活用という点はA～C型に共通した特徴である。作業面の転移はかなり認められるが，原則的に石理面を常に有効に利用しており，石核を一定方向に回転するように作業面の転移が行われている。そのため，作業面が打面に転用されるような例が認められる。サヌカイト製の縦長剥片石核はA～C型に分類したが，B・C型でも作業面が素材となった剥片のポジティブな面に転移して剥片剥取が進行したものは，A型と実質的には識別することは不可能である。サヌカイト製のA～C型の石核は素材の差はあるものの，実質的には同じ技法によると考えられる。

またB型の素材となった剥片には，A型の石核から目的剥片や作業面再生剥片などとして剥取されたものが含まれるようである。しかし，C型の石核素材の剥片とともに，石核に厚みがあるものは単に作業面再生剥片などとは考えにくい。B型の石核とした第161図4は背面に自然面を残すが，自然面はさほど乱れていず，作業面形成のためにこれほど厚い剥片を剥取する必要はない。

A～C型の石核の形状からすれば，白色風化サヌカイトに代表される石理の明確なサヌカイトの板状の剥片を縦方向に分割したものが素材となると考えられる。分割する前の板状剥片と考えられるものが大浦遺跡からも出土している。スクレイパーとして図示した第123図11は，白色風化サヌカイトではないが，背腹両面が石理と平行するもので，長さ16cm・幅11cm・厚さ 3.5 cm程の大形の剥片である。打面と側面の一部に石理方向の明確な自然面が認められる。側縁に打面から縦方向に截断したネガティブな面が認められるが，階段状剥離をしており，乱れたものである。背腹両面の打撃方向は一致する。また図示しなかったが白色風化サヌカイト質では，長さ 9.5 cm，幅 18.5 cm，厚さ 1.7 cmの大形の横長剥片が出土している。打面は石理が明確な自然面で背腹両面は石理面と平行し，その打撃方向は一致する。いずれも，自然面を打面に石理面を有効に利用して，連続的に剥取された板状の剥片である。白色風化サヌカイト質のものは，出土した縦長剥片石核と比較すると薄いが，海峡部の他の遺跡から同質で大浦遺跡の縦長剥片石核と矛盾しない厚さの大形剥片が出土している。

A～C型の縦長剥片石核は，このような大形剥片を縦方向に分割して石核素材としたと考えられる。分割して生じた剥片で縦長剥片状を呈するものが，B型の一部とC型の石核素材として使用されたと考えられる。石核素材の縦長剥片を剥取した残核が出土していないことから，この残核状のものは，A型石核の素材として使用されたのであろう。A型と比較すると，B・C型は少ない。本来は縦長剥片を素材としたB・C型であっても，作業面等の転移

によって素材の主要剥離面が残存しないものもあり得る。B・C型は形状が角柱状を呈するものが多いが，A型にも36％前後角柱状を呈するものがあり，縦長剥片を石核素材とする可能性がある。原礫から剥取された大形の板状剥片は，残存する大形剥片の形状からしても，数個体に分割されて石核素材とされたものであろう。

石理と平行する平坦面を持つ剥片は，縦長剥片石核だけではなく，横長剥片石核や截断面ある石器の素材としても使用されており，石材利用の共通点が認められる点は注目されよう。

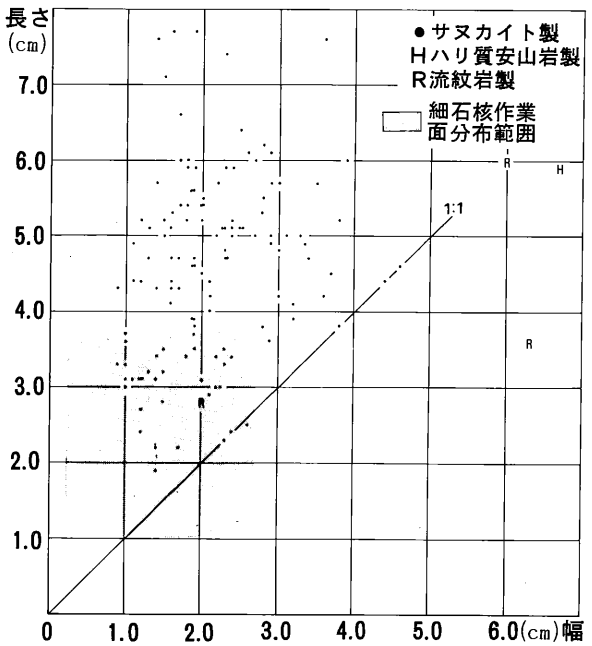
流紋岩とハリ質安山岩を石材とする縦長剥片石核はC型とD型に認められる。ハリ質安山岩の原礫は，拳大前後の不整球形を呈した礫であり，小形のものが大浦遺跡からも出土している。流紋岩の原礫はまだ海峡部の遺跡からは出土していない。B型石核の自然面からすれば，ハリ質安山岩と同様に丸味のある河原石状の自然礫と考えられる。また流紋岩製の石器では，縦長剥片を素材としたナイフ形石器（第115図10）などのように大形のものが多いことから，原礫もハリ質安山岩原礫よりは大形のものと考えられる。

石質からすればハリ質安山岩と流紋岩は，白色風化サヌカイトほど石理が明確ではない。そのため，剥片剥取にサヌカイト製のものほど明確に石理を活かしたものは認められない。流紋岩を石材としたC型の石核（第162図3）も，サヌカイト製のものとは異なり，側面部に主要な作業面が位置する。またD型石核にサヌカイト製のものがなく，流紋岩やハリ質安山岩が用いられるのも，石質の差が反映しているものと考えられる。流紋岩を石材とする縦長剥片素材のナイフ形石器で大形のもの（第115図10）と，同様な規模の作業面を有する流紋岩製の縦長剥片石核は検出されていないが，おそらくその安定した形状からすれば，C型の石核から剥取された剥片を用いたと考えられる。

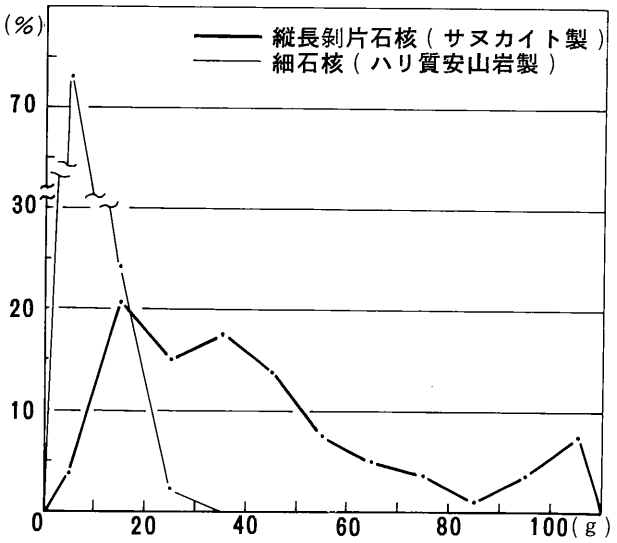
【細石核との関連について】

出土した縦長剥片石核でサヌカイトを石材とするものには，大形のものだけではなく小形のものも含まれる。作業面や石核規模からも細石核と大差ないものや，細石核の一部のものより小形のものがある。しかし，石材の利用法や技法に差は認められず，一線を画して二分することはできない。細石核として分類したものは，ハリ質安山岩と黒曜石を石材とするものに限定し，サヌカイト製のものは含まない。これは明確な根拠を持ってサヌカイト製縦長剥片石核から細石核を抽出することができないからである。

第152図は縦長剥片の作業面の長さと幅の分布に細石核の作業面の分布範囲を重複させたものである。細石核の作業面は長さ1～3㎝代，幅0.5～2㎝代の範囲に分布し，縦長剥片石核よりも幅広い傾向を示す。細石核の分布範囲に含まれる縦長剥片石核は35点である。また第153図は縦長剥片石核と細石核の重量分布の構成比をグラフ化したものである。サヌカイトとハリ質安山岩にはそれほどの比重差がなく，石核の大きさを反映したものとすることができよう。細石核は30ｇ以下の分布を示し，10ｇ以下のものが73％を占める。縦長剥片石核は10～20ｇと30～40ｇの二つの明瞭なピークがある。10～20ｇのものが最も多く全体の21％を占め，10ｇ以下も3％含まれる。縦長剥片石核の重量分布の20ｇ以下のピークの方は細



第152図　縦長剝片石核作業面長幅分布図

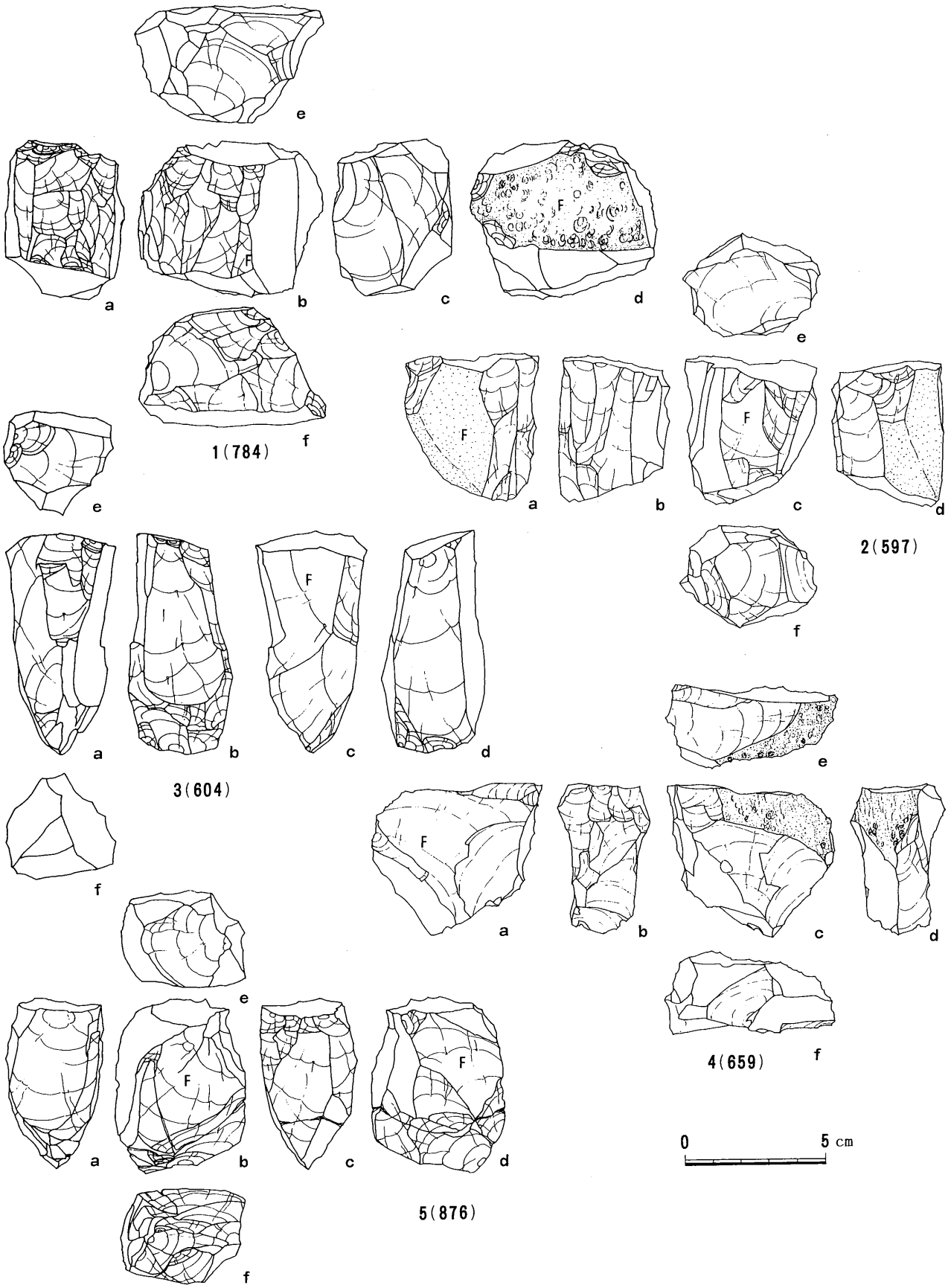


第153図　縦長剝片石核・細石核重量構成比

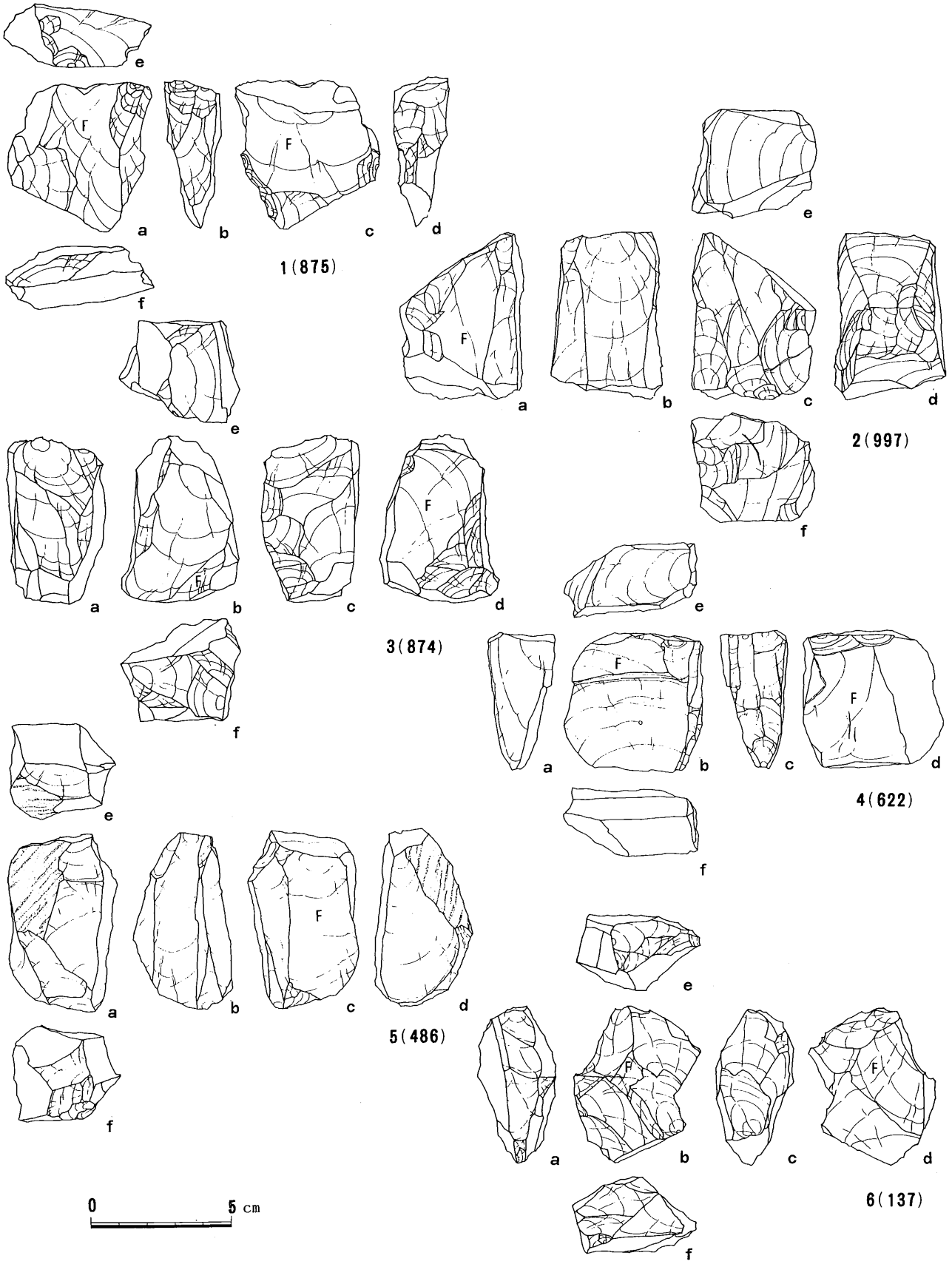
石核の重量分布と重複する。縦長剝片石核の重量が正規分布を示さず，複数のピークを有し，細石核の重量が正規分布を示さず，複数のピークを有し，細石核の重量分布と一致する点は注目される。石核の大きさと作業面の規模は必ずしも一致するものではないが，傾向としては小形の石核の作業面は小さいものが多く，作業面に残る目的剝片の剝離痕も細石刃の大形のものとそれほど差があるものではない。技法的にみると，ハリ質安山岩を用いた細石核では打面が横方向からの分割面で形成されたものがかなり含まれたり，細石核の側面にかなり調整が施され，作業面が側面に転移するものが存在するなど，サヌカイトを石材とする縦長剝片石核とは異なる様相が認められる。しかし，石材の分割や側面調整の有無や作業面転移位置などは，かなり使用された石材の石質に影響される。畦原型細石核[註6]は砂岩を用い，打面を形成しただけで側面調整はほとんど施さずに細石刃を剝取している。剝片剝取はその石材に最も適した技法の採用，もしくは手法の省略は当然のことである。こうした点からすれば，サヌカイトを素材とする縦長剝片石核の小形のものは細石核と考えることも可能であろう。

13. 細 石 刃

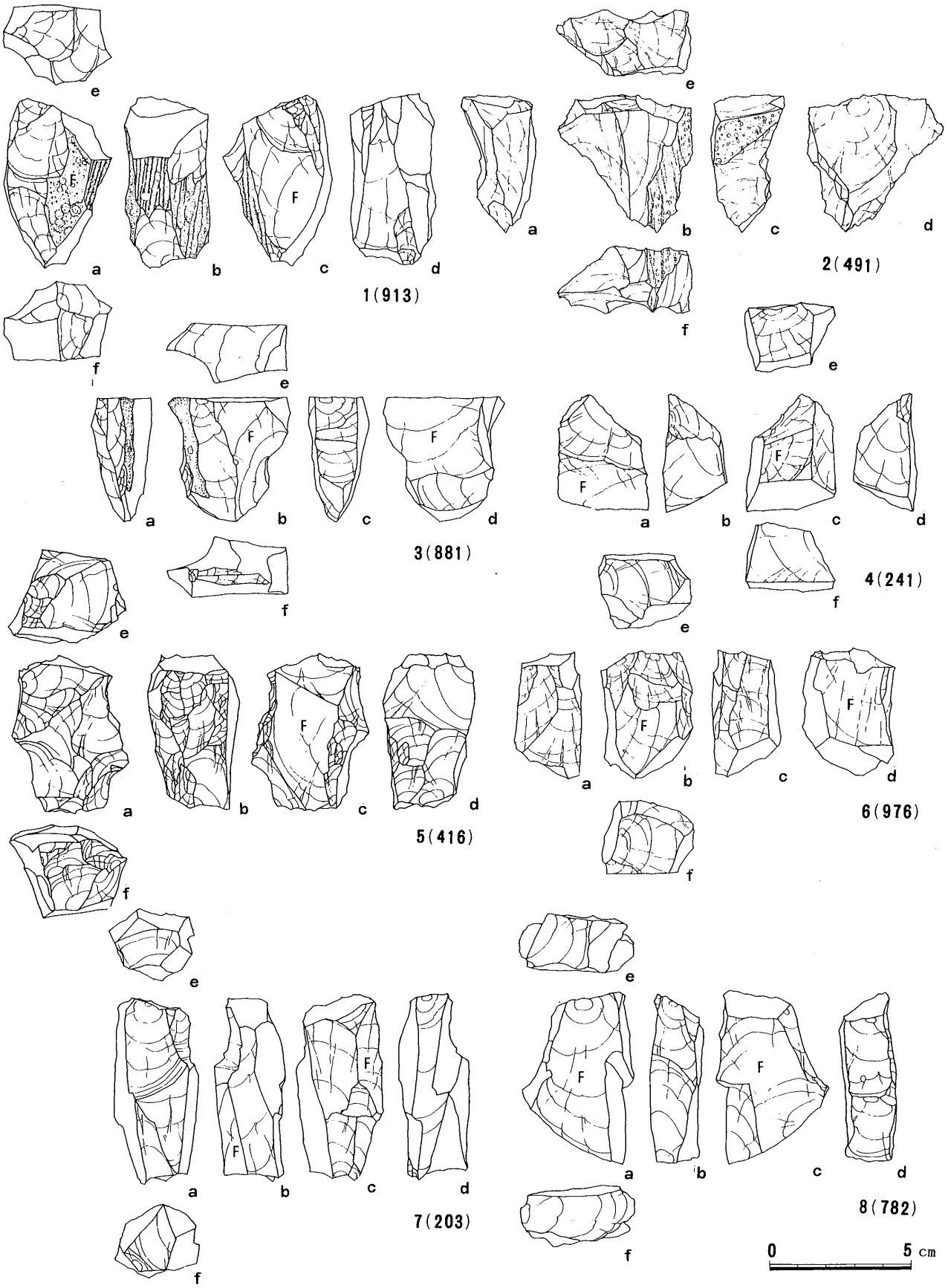
細石刃は 315 点出土しており， 114 点実測図を掲載した。石材にはハリ質安山岩・黒曜石・サヌカイト・チャートがある。大半はハリ質安山岩を使用している。ハリ質安山岩以外の石材を用いたものは全点図を掲載した。



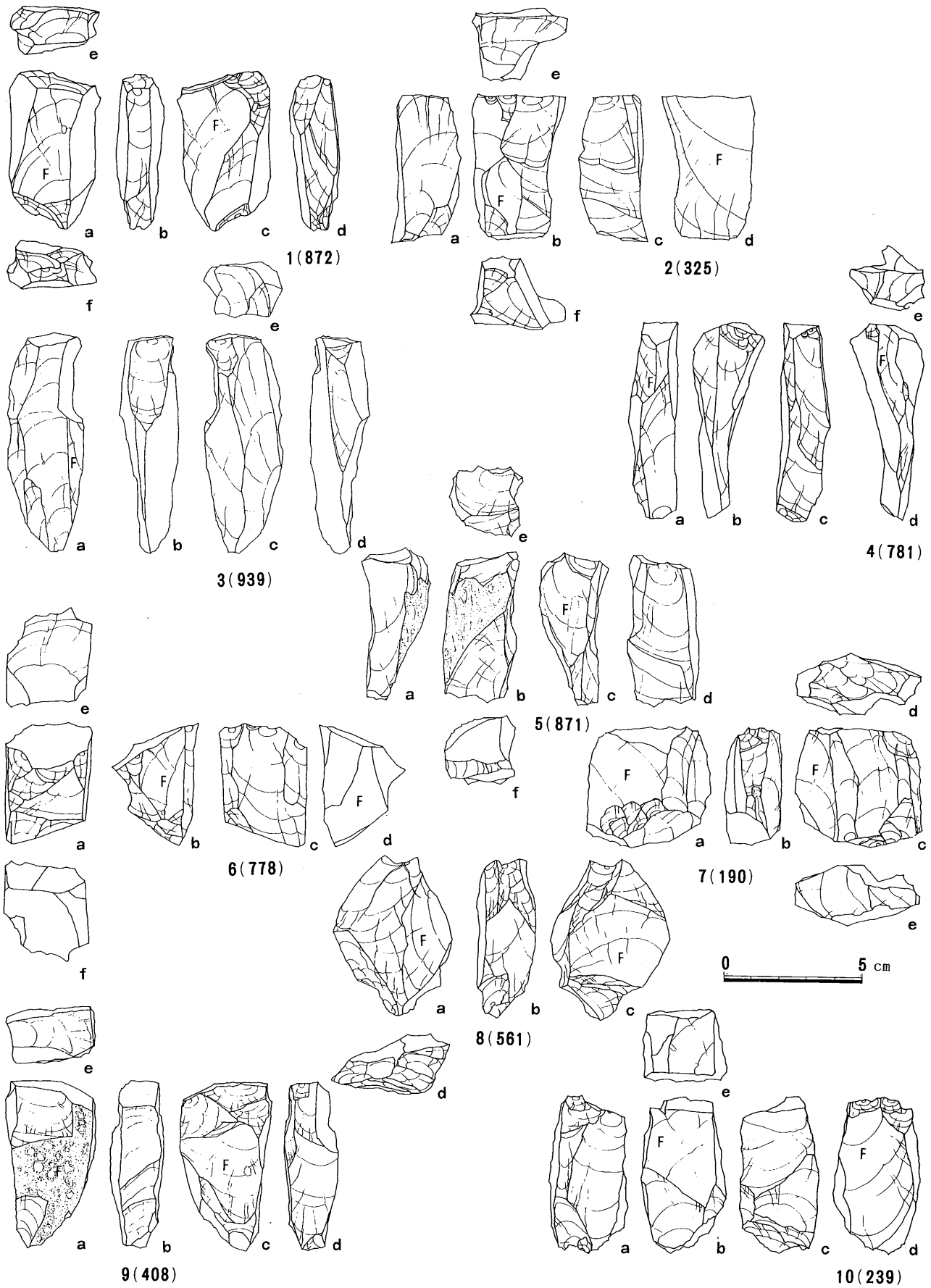
第154図　縦長剝片石核実測図(1)



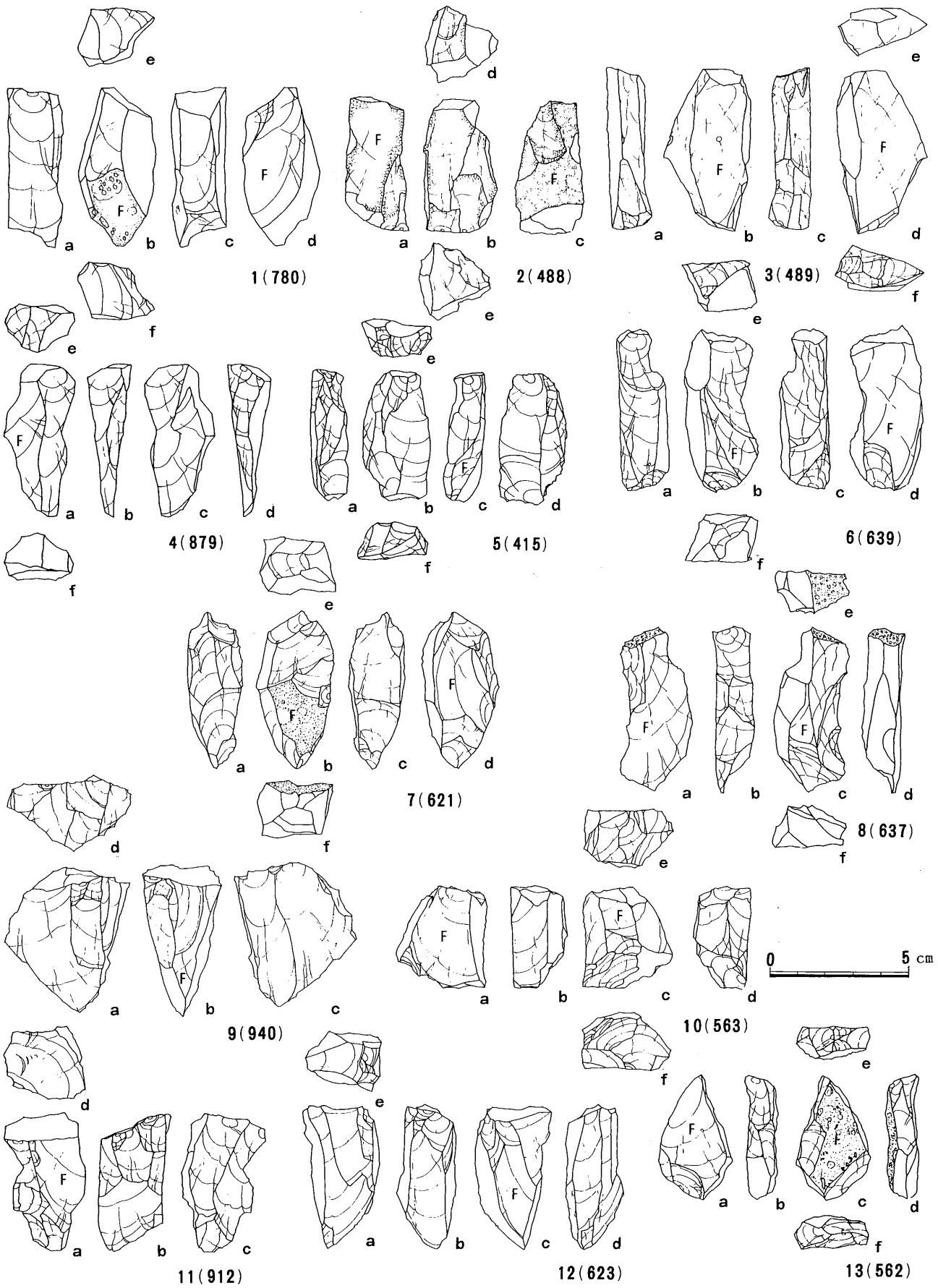
第155図　縦長剝片石核実測図(2)



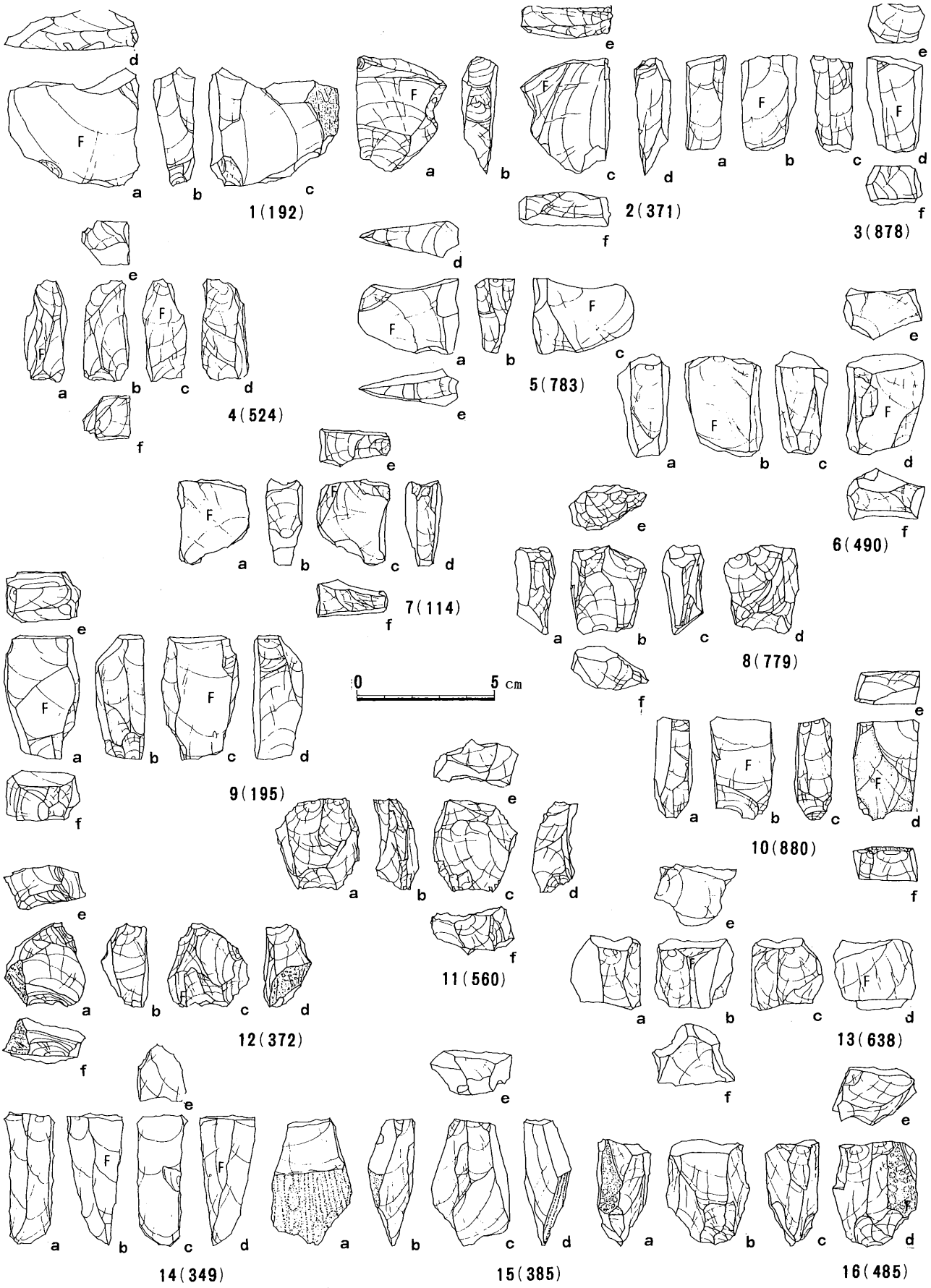
第156図　縦長剝片石核実測図(3)



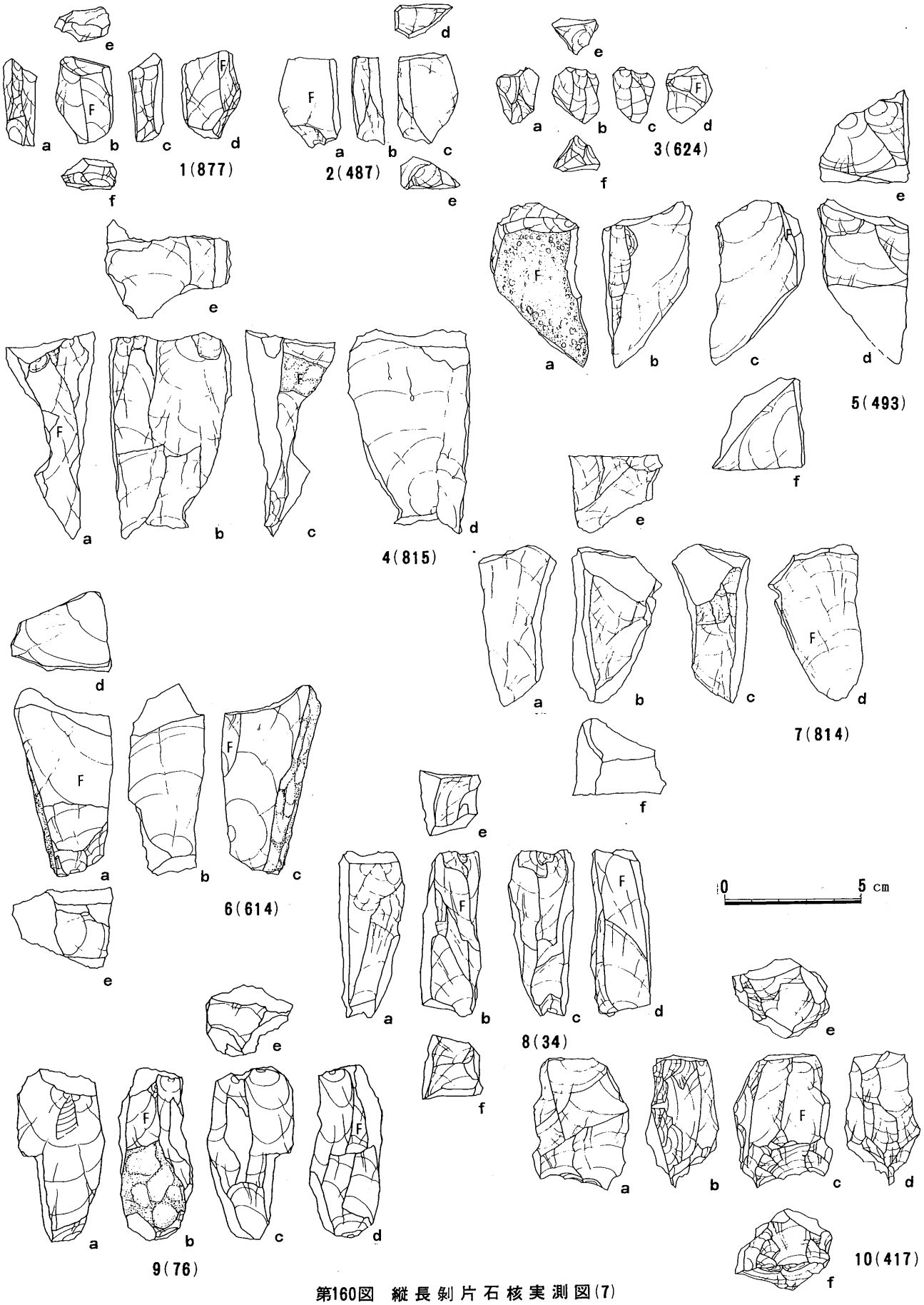
第157図　縦長剝片石核実測図(4)



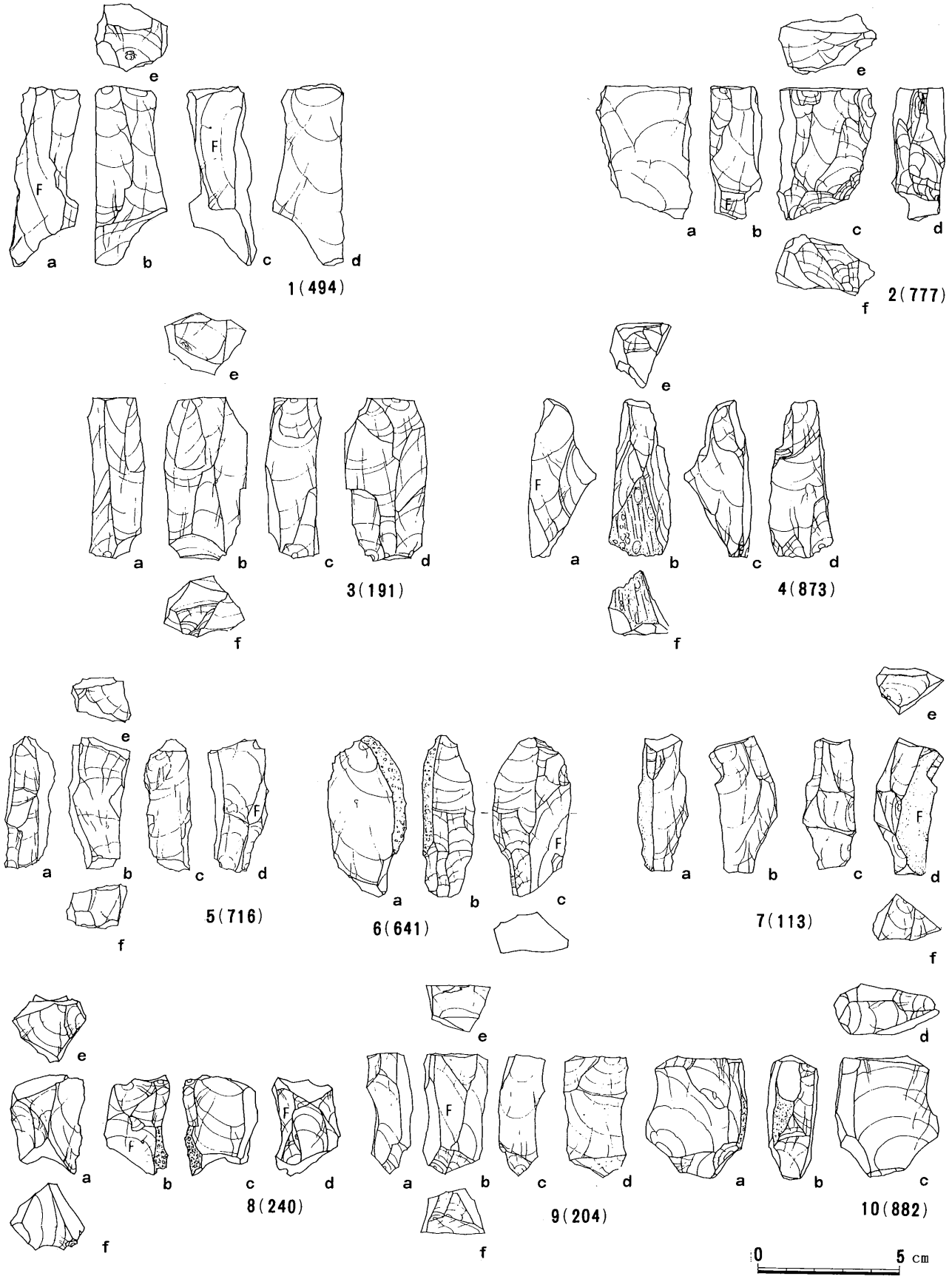
第158図　縦長剝片石核実測図(5)



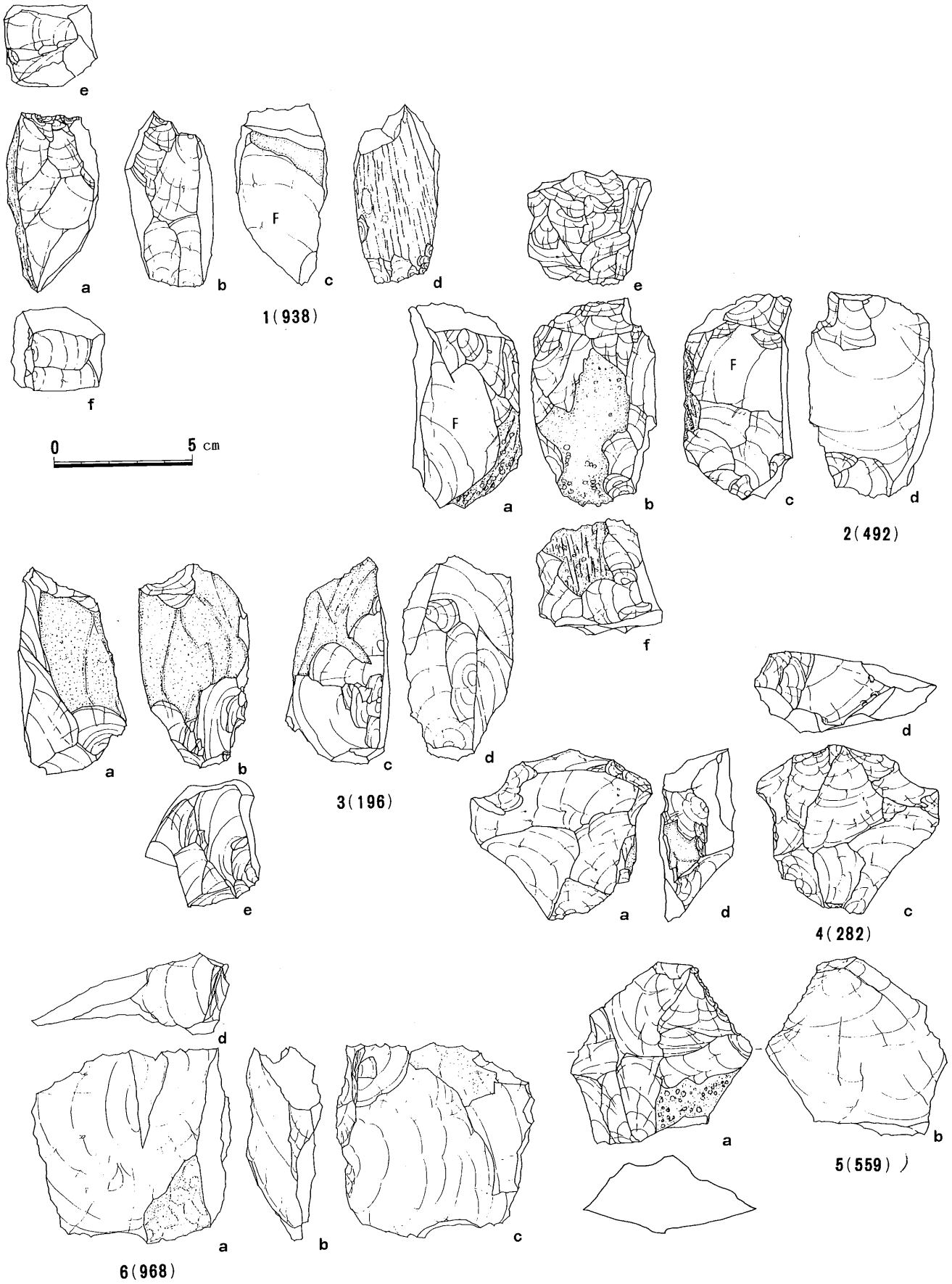
第159図　縦長剝片石核実測図(6)



第160図　縦長剝片石核実測図(7)



第161図　縦長剝片石核実測図(8)



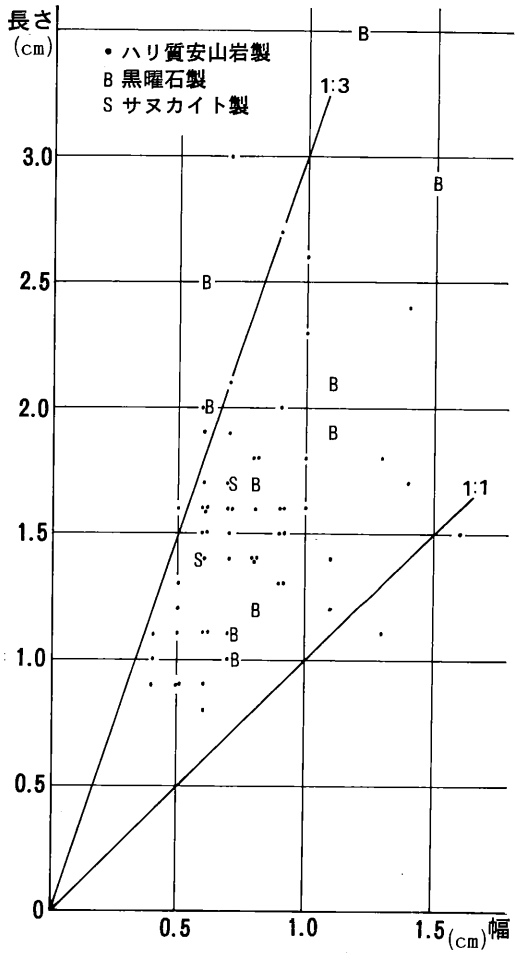
第162図　縦長剝片石核実測図(9)

第165図1～6　サヌカイトを石材とし，風化度はそれほど高くない。同質の細石核は大浦遺跡では検出されていず，縦長剝片石核から剝取された小形の縦長剝片である可能性も全くは否定できない。

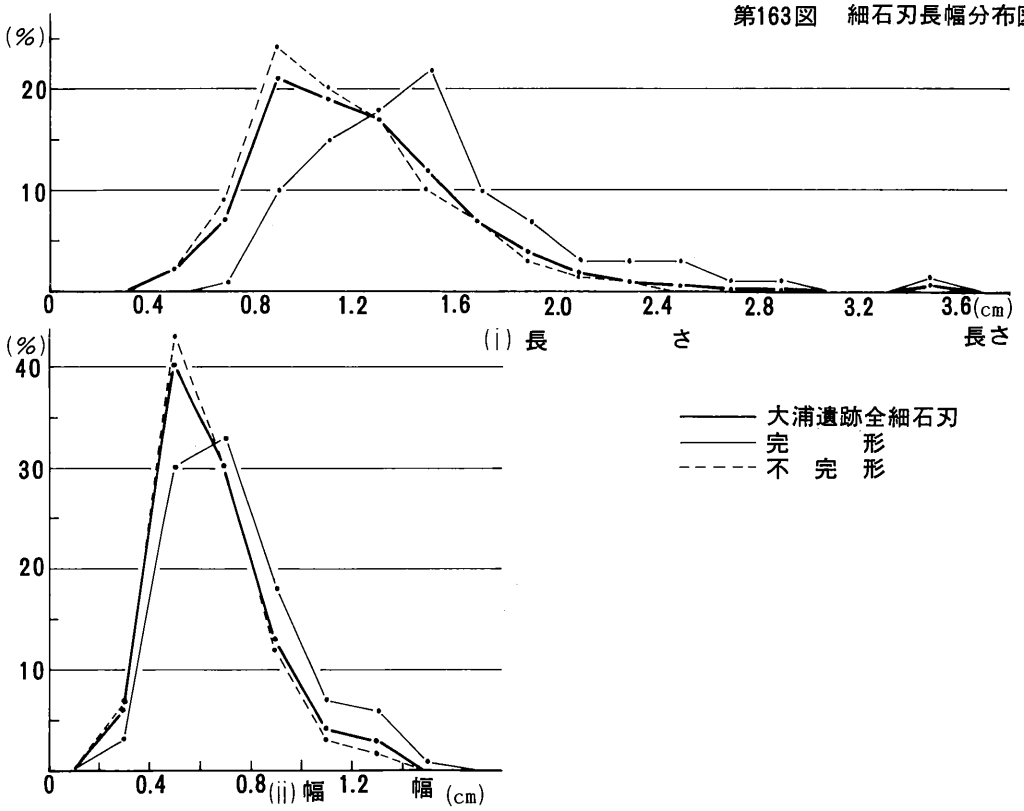
第165図7～第166図1～8　ハリ質安山岩を石材とする。大浦遺跡に限らず細石器の石材にはハリ質安山岩が最も多く用いられている。完形のものより折損したものの比率の方が高い。

第166図9～29　黒曜石を石材とする細石刃である。漆黒を呈する緻密なものとシマ状の流理が顕著なもの及び粗質の黒曜石の3種類が石材として使用されている。9・15には側縁部に使用痕と考えられる小剝離痕が認められる。

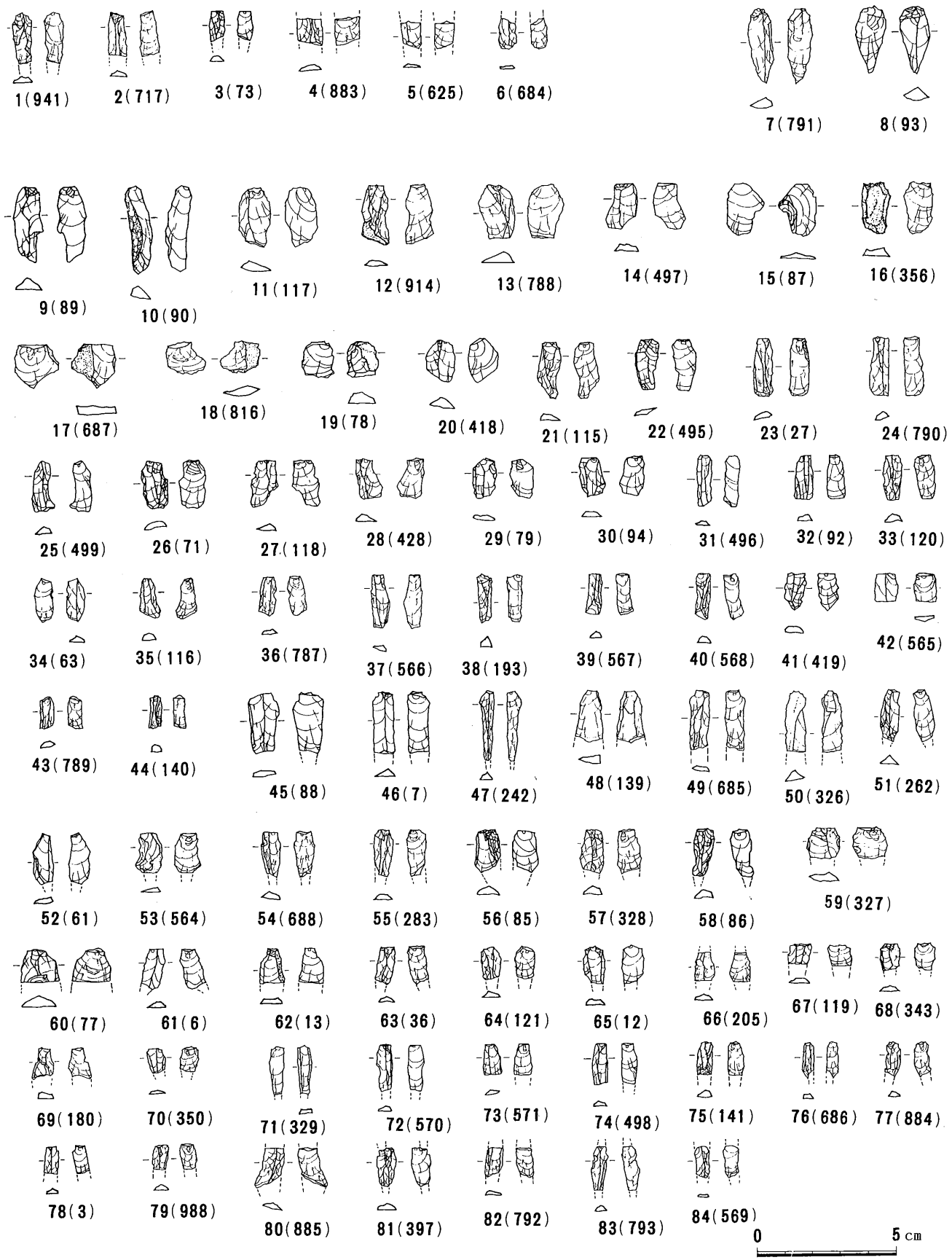
第166図30　暗褐色を呈するチャートを石材とする。断面は台形状で先端部が折損している。大浦遺跡で出土したチャートは色調から青緑色・灰白色・暗褐色を呈するものの3種類がある。量的には青緑色を呈するものが最も多いが，大半は敲打により表



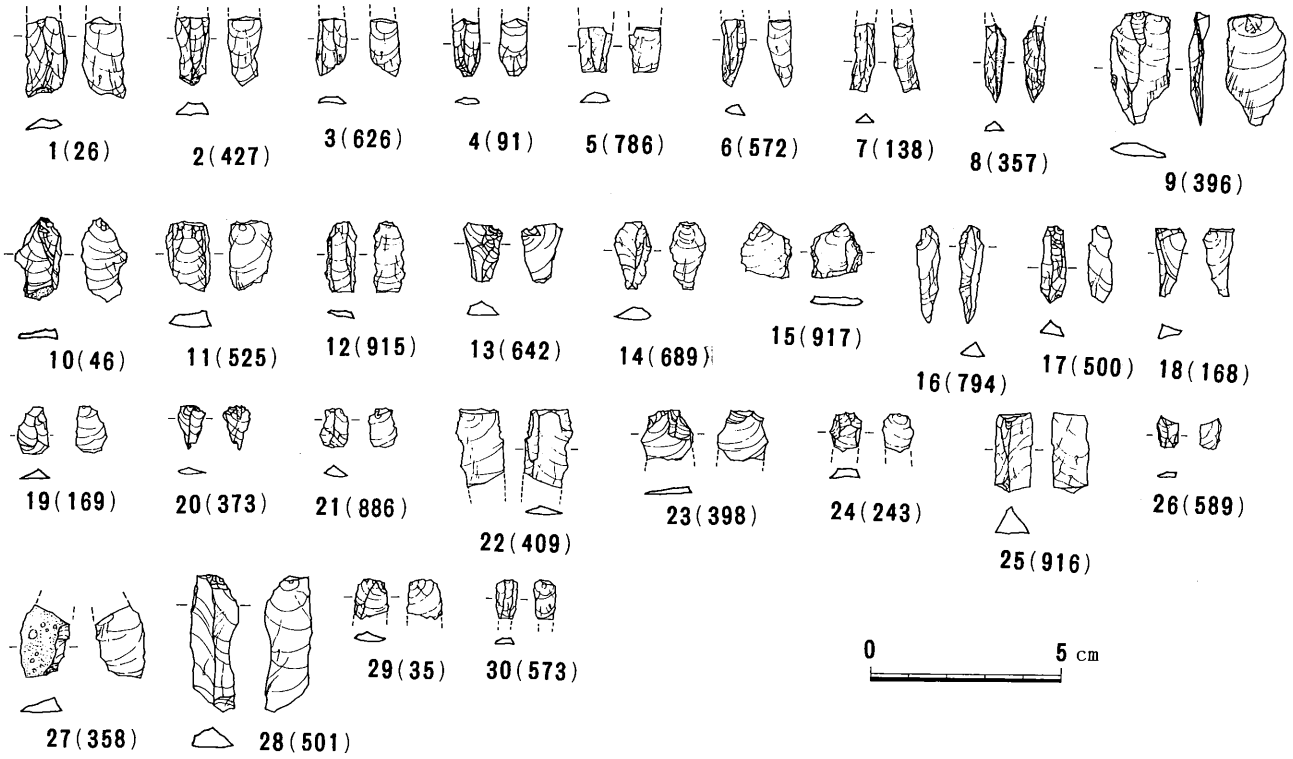
第163図　細石刃長幅分布図



第164図　細石刃長さ・幅構成比



第165図　細　石　刃　実　測　図（1）



第166図　細　石　刃　実　測　図 (2)

面がつぶれており，明確な石器の石材としては使用されていない。与島西方遺跡で同質のチャートは石鏃に石材として用いられており，時期的には下る可能性が高いと考えられる。灰白色のチャートは羽佐島遺跡の第2次調査で有舌尖頭器の石材として使用されているものの大浦遺跡では同質の石器は検出されていない。

第163・164図は大浦遺跡出土の細石刃の長さと幅をグラフ化したものである。長幅比をみると2：1を中心とした分布を示す。また長さは完形では1.4～1.6 cmのものが，折れたものでは0.8 cm～1.0 cmのものが最も多い。幅の面では0.4～1.0 cmのものが多い傾向を示している。出土した細石刃は小形のものが多い。また縦長剥片に分類したもので細石刃に属するものも含まれる可能性があるが，両者を明確に区分するにはかなり困難が伴う。

14. 細 石 核

細石核は，45点出土している。使用された石材は，黒曜石と水晶が各1点あるが，他は全てハリ質安山岩である。比較的大形のブレイドを剥取したものから石核自体が非常に小形のものまで，かなりバラエティーに富んでいる。打面の加撃方向で分類し，大形のものから配列した。

第168図1～9　全てハリ質安山岩を石材とする。打面が作業面方向からの加撃で形成されたものである。4・7以外はいずれも自然面を残す。石核の大きさにはかなりの差がある。1・2は大浦遺跡で出土した細石核では大きな細石刃剥離痕を有するものである。5・6は縦長剥片状の剥片を素材に用い，ポジティブな面を打面に，素材となった剥片の末端部を作業面とする。8は両側面に自然面を残す。3・9は作業面を背面に転移したものであり，9は打面再

成剝片と接合（10）する。

第168図11～16・第169図　第169図19は黒曜石，20は水晶を，他は全てハリ質安山岩を石材とする。打面が側面方向からの加撃で形成されたものである。石核の大きさにはかなりの差が認められ，第168図12・13，第169図1・4・8・9以外は一部自然面を残す。第168図13～16，第169図3・5・12・14には明確な作業面の転移が認められる。第168図13・15，第169図3・12・14は背面へ，第168図14・16，第169図5は側面に転移する。

第170図　作業面と考えられる面に残る細石刃剝離痕が1面からなるもので，全てハリ質安山岩を石材として用いる。4は作業面が再生された石核，8・10は彫器とも考えられる。

【原礫の分割について】

大浦遺跡出土の細石核は大半がハリ質安山岩を石材とする。ハリ質安山岩には粗い風化面を有し硬質な感じがするものと丸味を有した風化面を持つ軟質なものとに分かれるが，やや微妙な点もあり，明確に区分するには困難さが伴う。以下硬質と特別に記述していないハリ質安山岩は，後者つまり軟質のものを指す。硬質のものは板状を呈する自然礫が用いられる可能性が高い。これに対してハリ質安山岩の原石は球状を呈する。大浦遺跡でも1点出土している。長径3.5cmとやや小形のものである。羽佐島遺跡出土のものが残存する原石中では最大であり，拳大程の大きさを呈する。ハリ質安山岩を石材とする細石核はこうした原石を分割して石核素材を得たと考えられる。全く自然面を持たないものは8点しかなく，約80％にあたる34点は石核中に自然面を残す。

ハリ質安山岩の原礫には長径が3cm前後のものから6cm前後のものまで大きさに差がある。出土した細石核からすれば，大形の原礫を使用した場合には，原礫をいくつかに分割して使用された可能性が高い。細石核に残存する剝離面には石核素材を調整したネガティブな面と作業面以外に原礫を分割した際に生じた分割面が残存するものが多い。分割面としたのは，ポジティブな面・打点の位置が石核より大幅に離れるネガティブな面・打点が残存したり石核からそれほど離れていない場合でも他の分割面より古いネガティブな面である。分割面にはポジティブかネガティブな面かがはっきりしない場合や著しい起伏が認められるものが多い。出土したハリ質安山岩を石材とする細石核で分割面が残るものは38点あり，93％を占める。大浦遺跡出土の細石核のほとんどは原礫を数点に分割して石核素材を得たと考えられる。原礫から直接両面加工の石核素材を作り出す例は皆無に近いと考えられる。仮に分割面がない細石核中にそうしたものがあるにしても，原礫の大きさに規制されることも想定される。大浦遺跡のハリ質安山岩を石材とする細石核の大半は原礫を分割した剝片を素材に用いていると考えられる。

【作業面の位置】

細石核の形状を直方体と見たてて，作業面の占める部位を集計すると短小口に位置するものが25点，長小口では27点，側面では2点となる。細石刃剝取作業による石核の縮小もあり，長小口に作業面を有する石核が増加していると考えられる。短小口と長小口とを作業面とし

て用いるものは同率に近かったと推定される。さらに分割面の残存する比率の高さは素材の長軸・短軸が問題ではなく，角度や面の安定性を中心として作業面の位置が決定されたと考えられる。

作業面が転移したものは8点ある。背部に転移する例が7点と最も多く，側面に転移したものは1点にすぎない。転移した石核も打面は共通している。

【細石核の形状について】

出土した石核の大半が原礫を分割して得られた剥片を素材とすることから，多少の差はあるものの板状を呈するものが多い。ただ第168図15は円錐状の形状を示す。ただこの細石核は作業面の背部への転移があり，しかも両側面には自然面を残すことから，剥片剥離作業の進行した結果，円錐形状になったものと考えられる。他の細石核とそれほどの差はない。また縦長剥片を素材とし，その末端部を作業面とするものがある（第168図5・6）。羽佐島遺跡でも，縦長剥片の末端部を作業面とするものが出土しているが，大浦遺跡とは異なり縦長剥片の側面を横方向から整形して打面を形成したものである。いずれにしてもやや特徴的なものである。

【細石核の打面について】

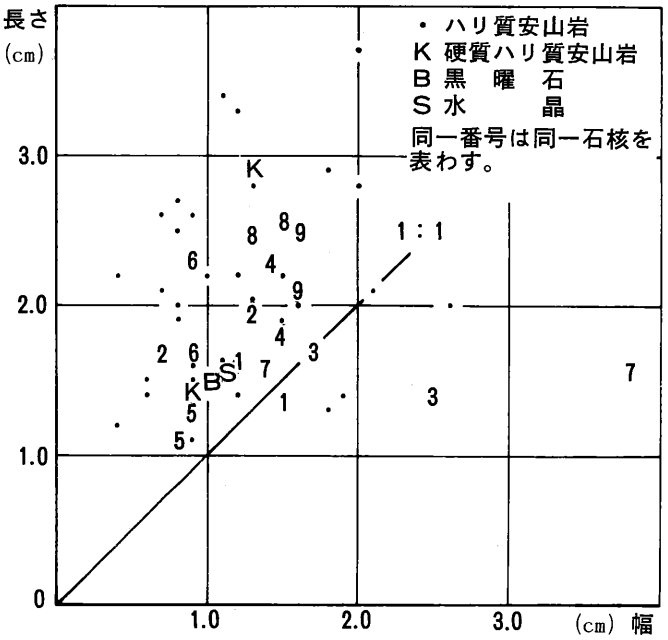
打面は自然面，分割面，整形面からなる。整形面はその打点が残存するか石核からそれほど離れないネガティブな面で，自然面や分割面が打面として不充分な際に施されたものと考えられる。一つの作業面に対して自然面が打面側にくるものが5点，分割面が28点，整形面が25点となる。その中には整形面と重複するものが，自然面で1点，分割面で4点含まれる。分割面の加撃方向は約7割が側面方向からなのに対して，整形面では側面からのものと作業面・背面からのものがほぼ同数となる。また整形面では作業面側からの打撃によって形成されたものが多く，背面からのものは非常に少ない。

また打面の作業面よりに細かな調整痕が残るものが14点ある。これは打面の乱れや傾きを整形面で修正できなかった場合，もしくはスリップ止めとして作業面側から施されるものであろう。水晶を石材として用いられた細石核（第169図20）は打面が乱れていないにもかかわらず細部調整が施されている。これに対してハリ質安山岩を用いた細石核で細部調整が施されたものは打面が乱れているものがほとんどである。水晶はハリ質安山岩と比較して硬質であることから，より厳密に細部調整が施されたものであろう。細部調整は分割面・整形面の打撃方向との関連性は認められない。

大浦遺跡出土の細石核は例外なく素材の小口を作業面としている。打面形成の際の打撃方向が作業面側からのものが，整形面では10点と全体の40％を占め最も多いのに対して分割面では17％しか占めないことからも，作業面の選定が打面の加撃方向よりも優先することが窺われる。結果的に決定された打面は整形や細部調整によって整えられるシステムであるとすることができよう。

【大きさについて】

出土した細石核の重量は1.4～23ｇの範囲に分布し，10ｇ以下のものが73％を占め，平均値は8ｇである。比較的大形から小形のものまでかなりの差があるが，小形のものが多い傾向を示す。第167図は細石核の作業面の長幅分布をドットで表示したものである。長軸方向で剥片剥取が行われているものが多いが，縦長剥片石核と比較すると作業面の長幅比では幅の広いものが多い傾向を示す。細石刃剥離痕は大形のもので，長さ3.4 cm（幅1.0 cm），幅1.3 cm（長さ1.4 cm）を計る。長さより幅の方に重点が置かれていると考えられる。また作業面の長さで最も小さいものは約1.1 cmである。



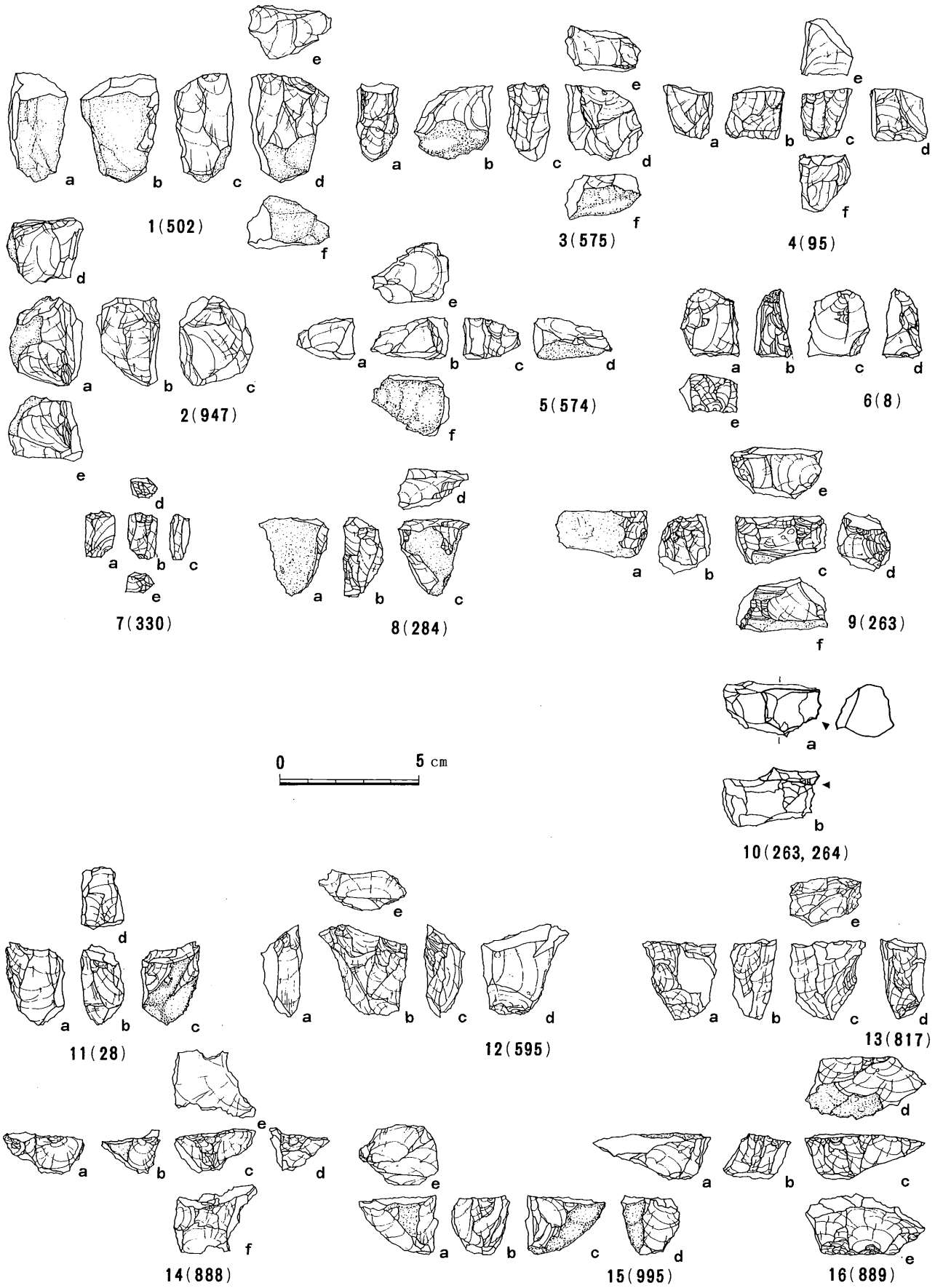
第167図　細石核作業面長幅分布図

15. 石核調整剥片

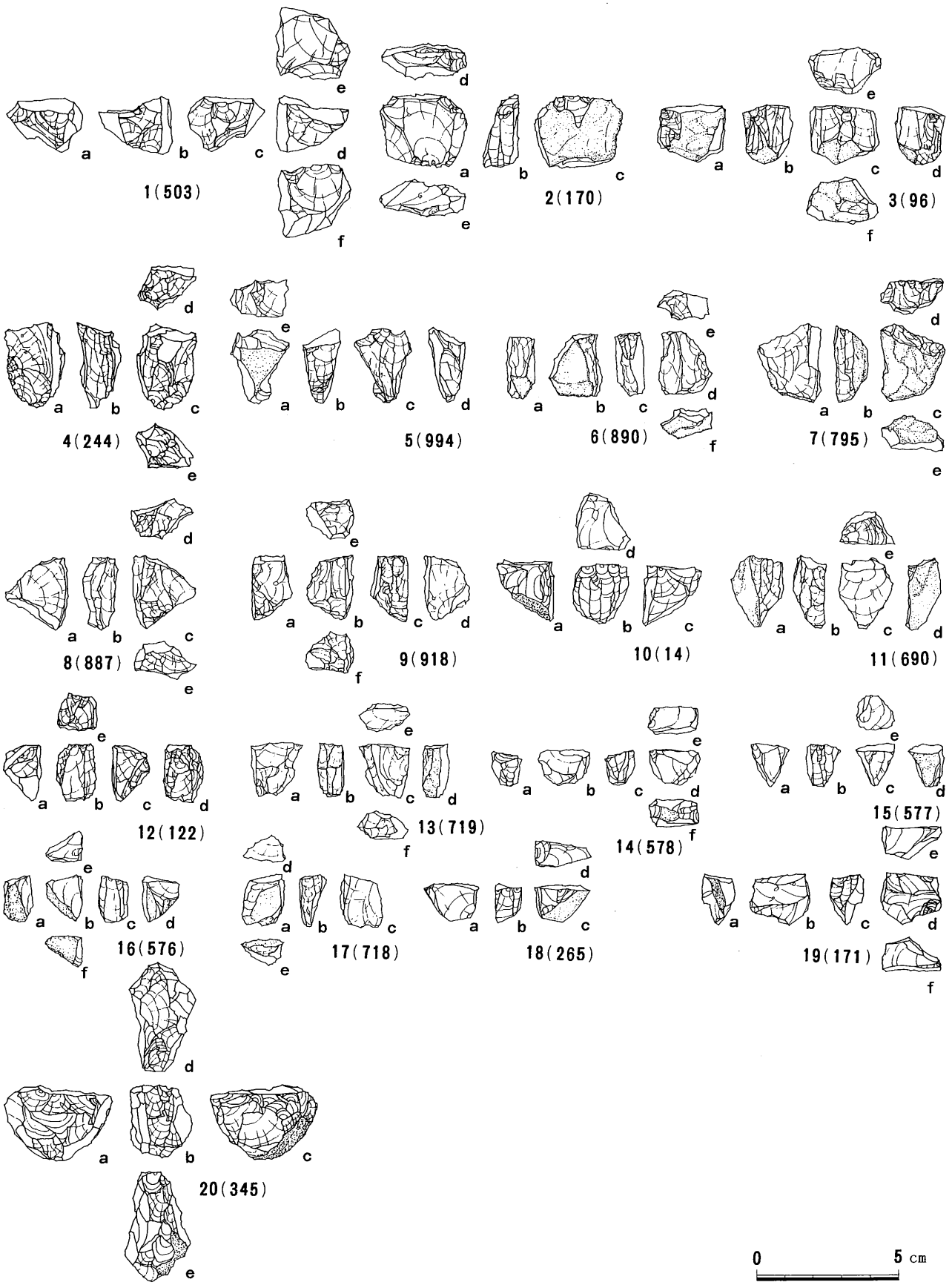
細石核・縦長剥片石核の打面再生剥片・作業面再生剥片・石核調整剥片のことを指す。打面再生剥片は全て細石核のもので，剥片の小口部に作業面を横方向に切断した面が残る。作業面再生剥片は剥片のネガティブな面に作業面が残るものである。縦長剥片石核の作業面再生剥片が1点含まれるが，他は全て細石核のものである。狭義の石核調整剥片は石核の作業面が剥片中に残らず，かなり不定形な剥片であり，連続して剥取された目的剥片とは考えられないものを選出した。

第172図1～12　打面再生剥片で全てハリ質安山岩を石材とする。1～5はやや大形の細石刃を剥取した細石核の打面再生剥片である。1は旧打面に自然面が残り，目的剥片の剥離痕の幅は2.0 cmで細石核を含めても最大のものである。6～12は小形の細石刃を剥取した痕跡があるもので，9・10は旧打面が自然面からなる。7は細石核（第168図9）と接合し，作業面転移後の打面再生剥片である。11は作業面の目的剥片剥離痕に打点が残存せず，連続して打面の再生が行われている。

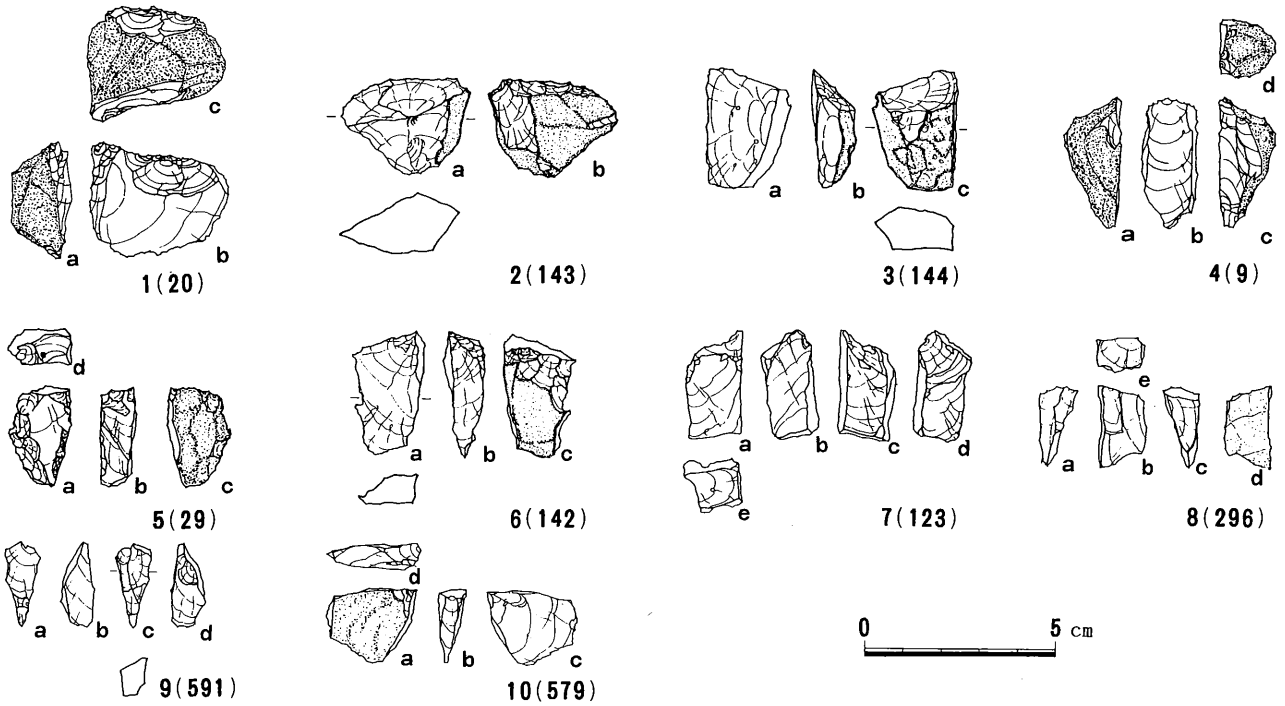
打面再生剥片の背面は旧打面である。旧打面は自然面が残存するもの3点，分割面が残存するもの2点，整形面があるもの9点からなる。自然面・分割面を残すものに各1点整形面が重複するものが含まれる。旧打面で作業面側に打点を有する剥離面からなるもの5点，側面側3点，背面2点，自然面だけからなるもの2点となる。新打面の打撃方向は，作業面から3点，側面から5点，背面から4点となる。残存する作業面と対応する打面は旧打面であり，新打面



第168図　細　石　核　実　測　図（1）



第169図　細　石　核　実　測　図（2）



第170図　細　石　核　実　測　図 (3)

は作業面の転移のための打面整形のものも含む。旧打面の加撃方向が作業面側からのものが多いことは細石核の様相と一致するものである。

第 172 図13～41・第 173 図 1 ～ 6　作業面再生剥片である。13～33は作業面が比較的明確に残存するもので，全て細石核のものである。14はサヌカイト，33は黒曜石，他はハリ質安山岩を石材とする。13・18は右側面，16は底部からの打撃で作業面を再生しているが他は打面から再生している。13の剥片で再生された細石核は作業面の幅が長さより著しく大きいものである。

34以下は細石核の作業面と考えられる面に残る剥離痕が大形であったり，やや不定形なものがあり，細石核の作業面再生剥片とするにはやや疑問があるものである。この中には狭義の石核調整剥片なども含まれている可能性がある。石材は第 173 図 6 がサヌカイトで他はハリ質安山岩を用いている。第 173 図 1 は縦長剥片が折損したものとも考えられる。3 は再生した剥片の打面に，背面側からの小剥離痕があり，細石核の打点部の細部調整が作業面かの区別がつかない。6 は縦長剥片石核の作業面再生剥片と考えられる。

作業面再生剥片の打撃方向は，圧倒的に石核の打面側からのものが多い。他からの打撃により作業面を再生しているものは35点中 3 点しかない。

第 173 図 7 ～35・第 174 図 1 ～28　細石核の石核調整剥片である。細石核のブランクを作成する際や側面の調整時に生じた剥片と考えられる。第 174 図16～28は黒曜石で他はハリ質安山岩を石材とする。第 173 図 7 ・ 8 には作業面が一部残存するが，細石核の側面を整形する際に生じた剥片に作業面が一部含まれたものであろう。同図10は石核の打面再生剥片の可能性もある。同図12・16は石核調整剥片に二次調整を施したものである。12は調整の意味が不明である

が，16は小形切り出し状のナイフ形石器に転用されていると考えられる。16の背面はかなり乱れており，横長剥片石核から剥取された可能性は低い。黒曜石の石核調整剥片（第174図28）は漆黒色を呈するが，他はシマ状の流理が認められる。

16. 細石核ブランク及びハリ質安山岩原石

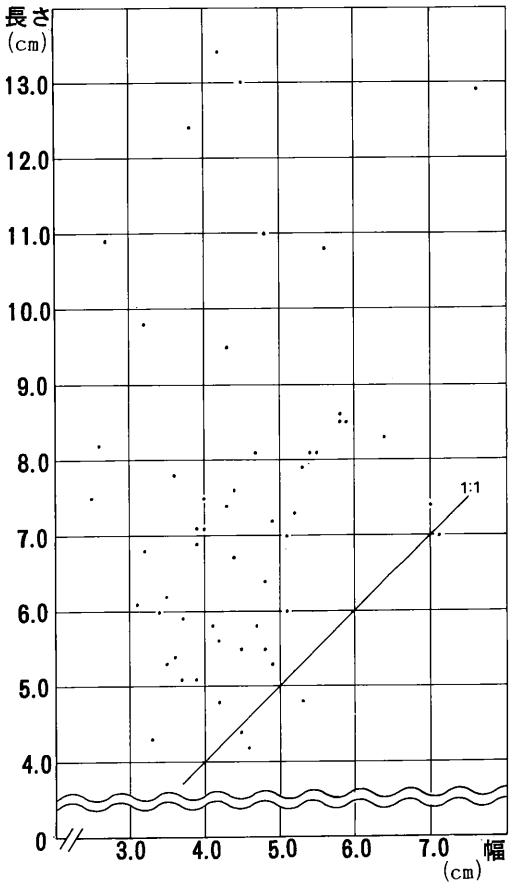
全てハリ質安山岩を石材とする。ブランクと考えたものは，自然面以外はネガティブな剥離面で構成されるか，ポジティブな面であっても大形で充分細石核の素材となるものである。

第174図29～34　細石核のブランクと考えられる。29はブランクか横長剥片石核かが不明である。結果的に横長剥片状の石核調整剥片を剥取して形成されたブランクとも考えられる。30・32はポジティブな面を残さないものである。30・31・33には細石刃剥取痕状のネガティブな面が残存するが，剥離痕は大形で安定していず，連続して剥片剥取を行った作業面とは考えられない。

第174図35　ハリ質安山岩の原石である。ほぼ全面に自然面を残すが，一部に打ち欠いた剥離痕が認められる。不整な球形状を呈し，長径3cm程を計る。大浦遺跡で出土した唯一の原石である。ハリ質安山岩の原石は羽佐島遺跡でも出土しているが，羽佐島遺跡出土のものは長径6cm前後あり，やや大形である。大浦遺跡で出土したハリ質安山岩で最大のものは縦長剥片石核（第162図4）で，最大長7cm程を計る。羽佐島出土の原石よりも大きい。遺跡から出土した原石は，搬入された原石の中でも小形のものが残存したと考えられる。また出土したハリ質安山岩の原石は全面自然面のものはなく，一部に剥離痕が残存する。[註7]

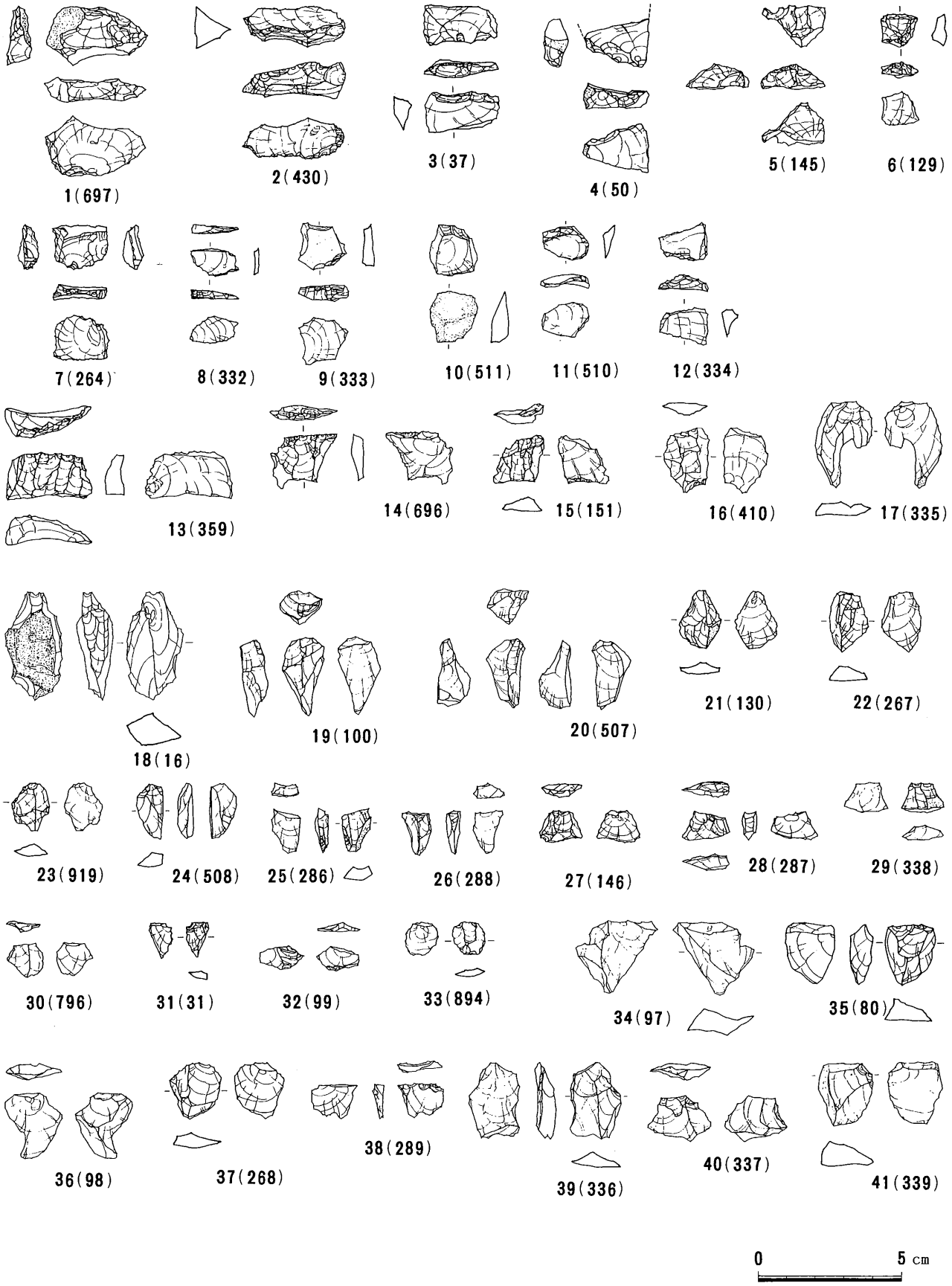
17. 敲き石

第176・177図　実際に使用されて小剥離痕が残るものと，使用痕は認められないが，形状から敲き石の可能性を有するものを選出した。54点出土しており，17点図化した。球形のものは少なく，大半が棒状を呈する。石材は砂岩が多く，片岩・石英玢岩なども含まれる。いずれも丸味を有した河原石である。1と3を除き使用痕と考えられる小剥離痕もしくはつぶれが認められる。大半は両端部に使用の痕跡が残るが，第177図8は縁辺部と側面の中央部に剥落が認められる。また第176図8は二次的に熱を受けたと考えられ色調が赤変している。

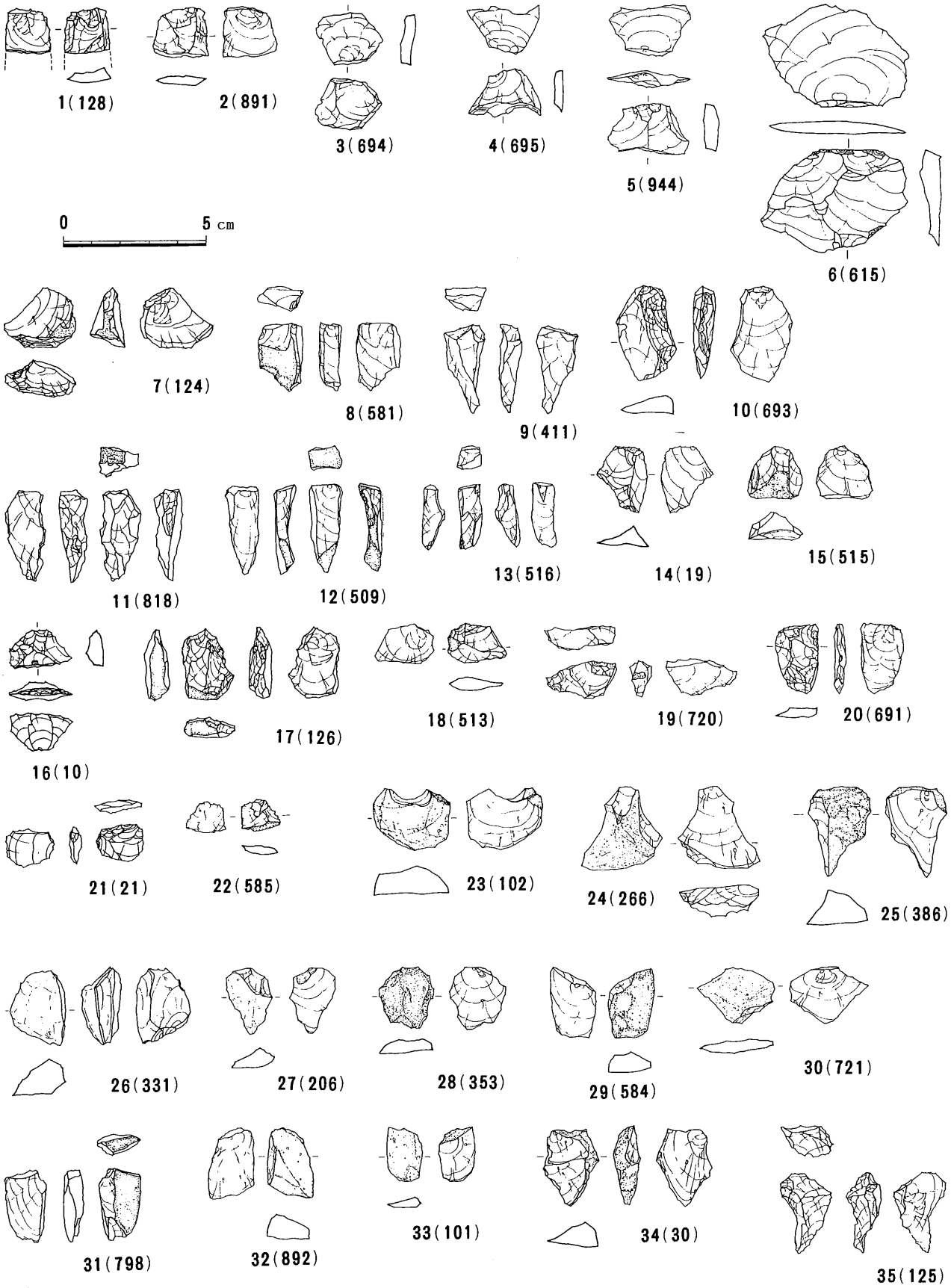


第171図　敲き石長幅分布図

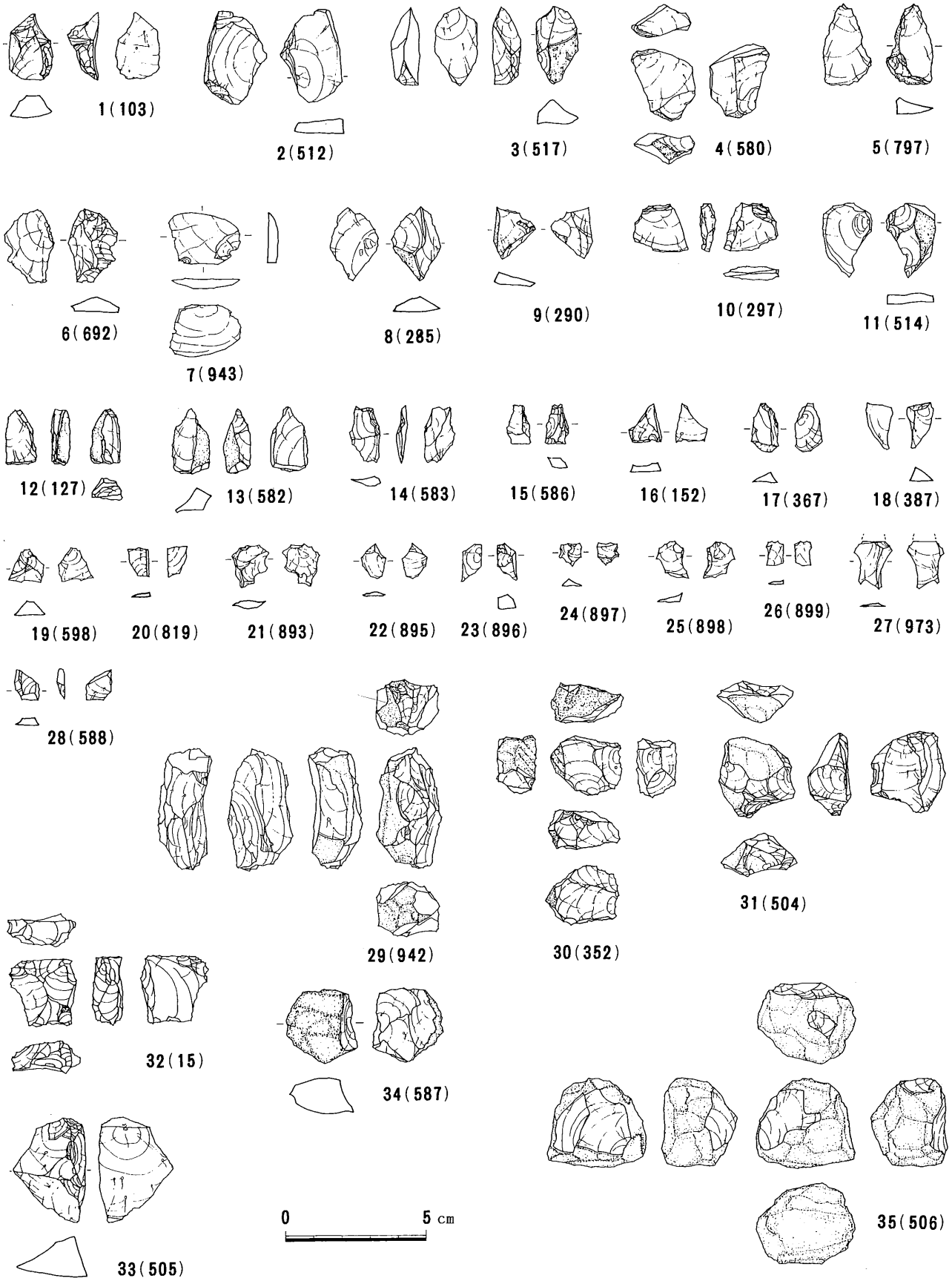
第171図は長幅比の分布をグラフ化したもので，



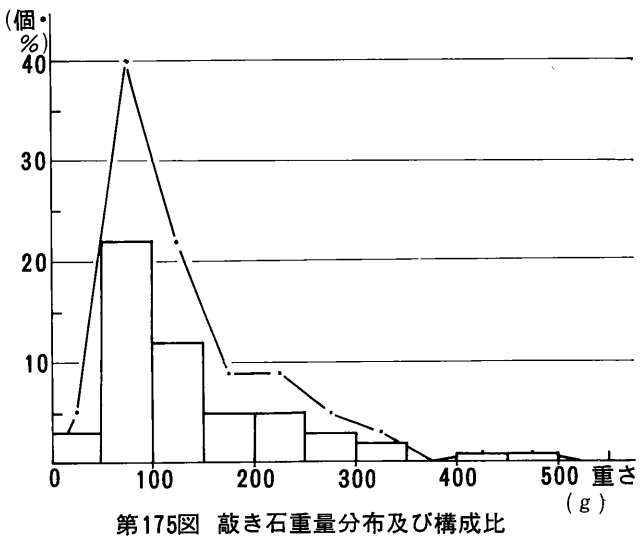
第172図　打面再生剝片・作業面再生剝片実測図(1)



第173図　作業面再生剝片・石核調整剝片実測図(2)



第174図　石核調整剥片・ブランク・原石実測図(3)

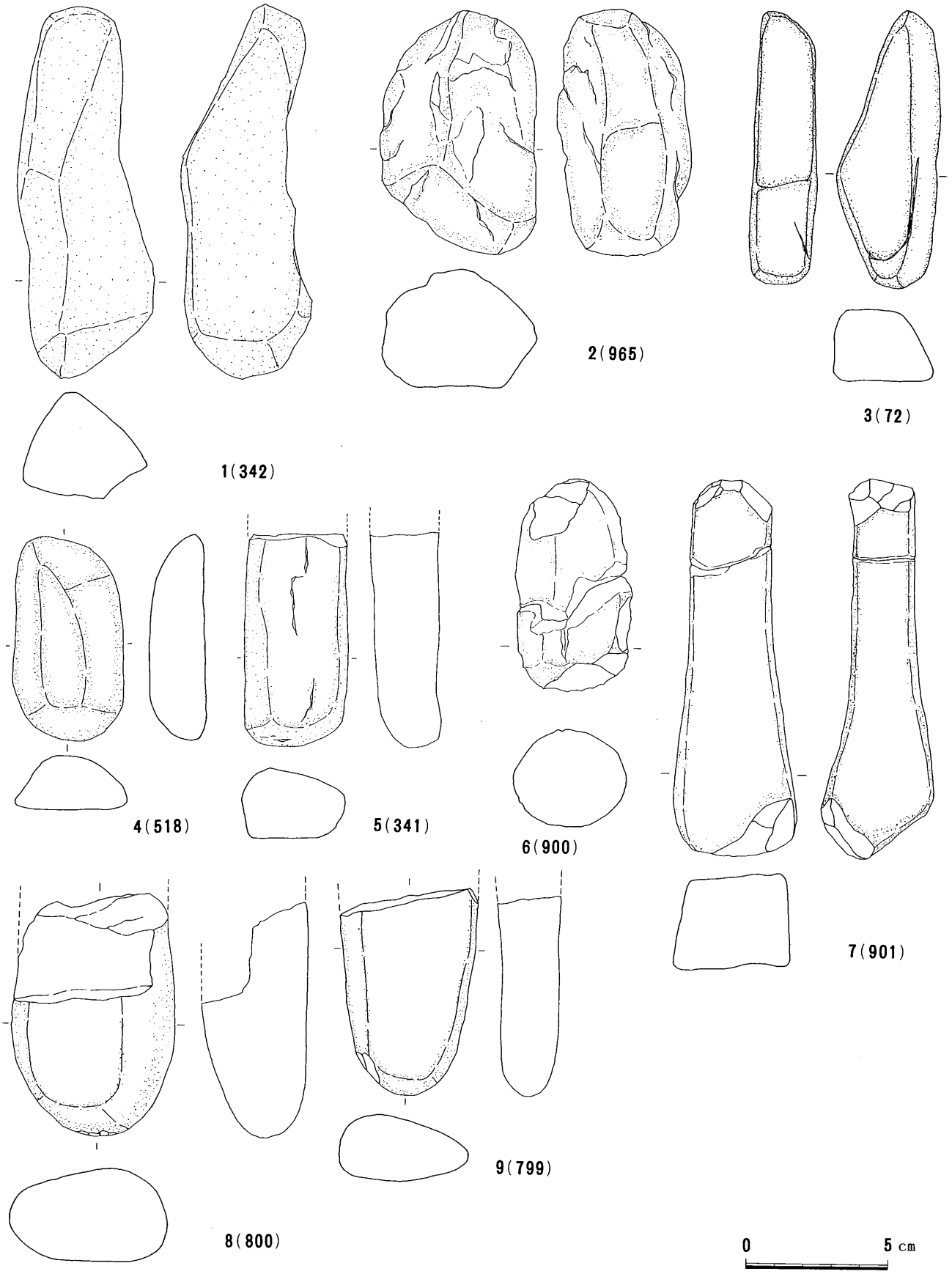


第175図 敲き石重量分布及び構成比

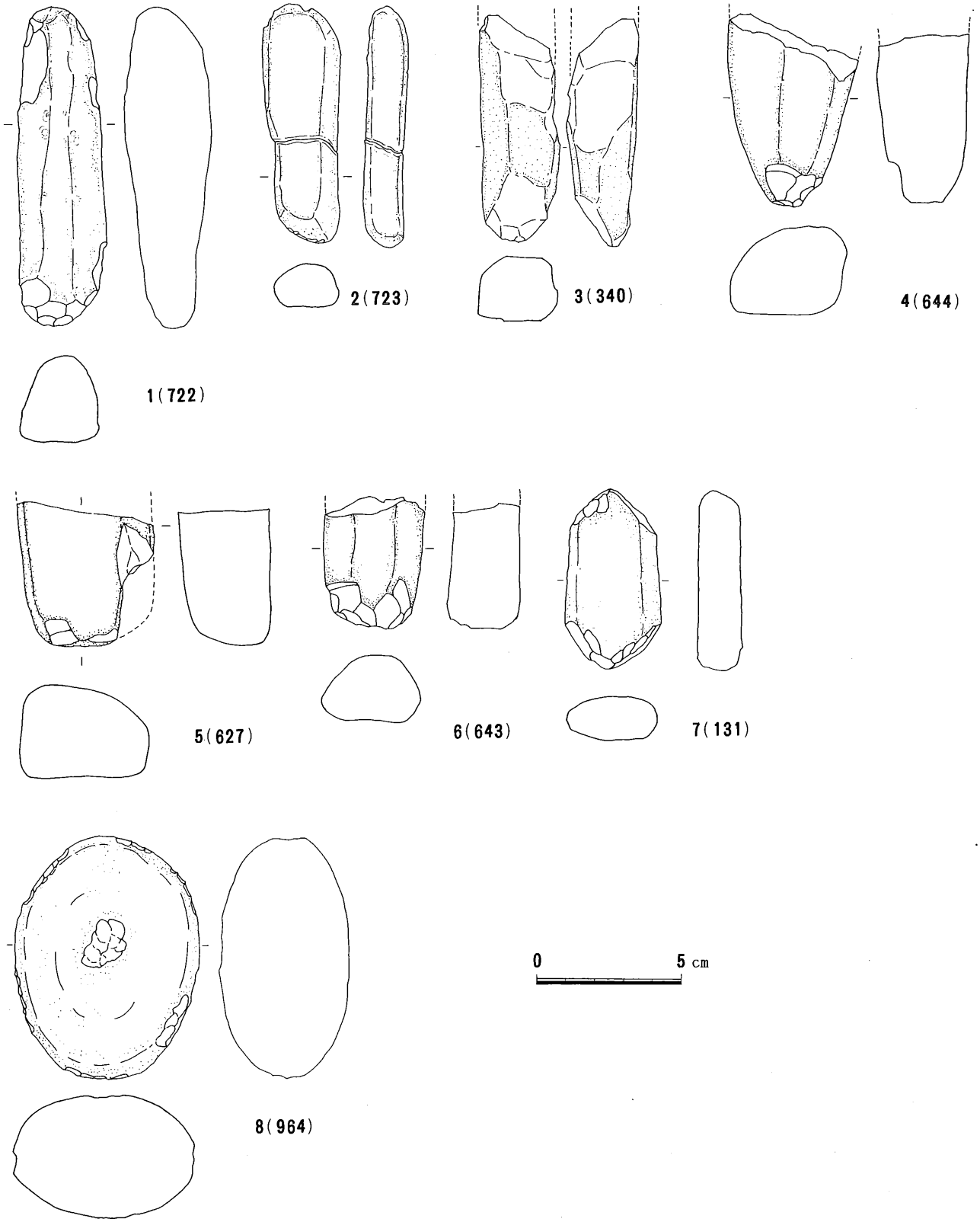
いずれも最大値による。長さと幅がそれほど差のないものもかなりあるが，出土した敲き石で折損品の多いことに原因があると考えられる。完形の敲き石や折損したもので旧状が推定されるものからすれば，第177図8のような楕円形状を呈するものは少なく，棒状のものが多い。第175図は大浦遺跡出土の敲き石の重量を集計したグラフである。500 g以下の範囲で分布する。300 g以下のものが93%を占め，50～100 gのものが最も多く22点出土している。折損しているものが含まれることを考慮に入れても，300 g以下のものが多いことに変わりはない。羽佐島遺跡の報告では27点の敲き石が集計されている。400 g以下の範囲で分布し，100 g以下のものが59%を占め，300 gまで範囲を拡げると全体の89%が含まれる。羽佐島遺跡は大浦遺跡とは異なり，長期間に渡って存続した遺跡で，遺物には瀬戸内技法によるものも多数認められる。こうした石器群の内容の差はあるものの両遺跡の敲き石には差がほとんど認められない点は注目される。

敲き石の重量は，島嶼部の遺跡での石器製作を考える上で重要なポイントになると考える。島嶼部の遺跡からはサヌカイトの原礫は検出されず，石核素材と考えられる大形の板状の剥片が認められるだけである。大浦遺跡出土の大形剥片は石理と平行して原礫から剥取されており，石理の利用方法からすれば，縦長剥片石核か交互並列剥離による横長剥片石核の素材の可能性が高い。また翼状剥片石核の素材である盤状剥片の可能性がある剥片も羽佐島遺跡で出土している。いずれにしても石核が検出されることから，石核素材が島嶼部の遺跡まで搬入されたことはまちがいない。検出した石器群からすれば，石核素材から石器製作までの工程が遺跡で行われたと考えられる。また松沢亜生氏より製作実験では，原礫から石核素材の剥片を剥取するためには500 g前後の円礫が適するとの御教示を得た。島嶼部の遺跡で出土する敲き石の重量は300 g以下のものが大半であり，100 g以下のものが中心となる傾向が認められる。製作実験の結果や石器群の状況からすれば，石材の産出地で石核素材の剥片剥取までの工程が実施され，島嶼部の遺跡へ搬入された可能性が高い。検出された敲き石は，大形剥片を分割し石核素材を作り出す過程や目的剥片を剥取する際に使用されるために，小形のものが中心となったと考えられる。

また敲き石の形状が棒状を呈することや，使用の際生じたと考える剥落が両端部を中心として認められることから，パンチとしての可能性も考えられる。しかし，翼状剥片等を剥取する製作実験で，100 g以下の棒状の砂岩を使用してスナップを利かせた直接打撃により，容易に目的剥片を剥取できることが判明した。スナップを利かせた打撃には円礫よりも棒状を呈する礫の方が適し，剥落は先端部に生じる。出土する敲き石と差はない。出土する翼状剥片や横長



第176図　敲　き　石　実　測　図（1）

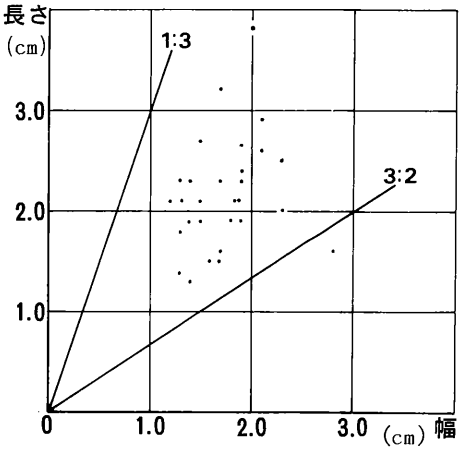


第177図　敲き石実測図(2)

剝片にはバルブやバルバースカーが明瞭なものが多く，打撃が強かったことが窺われる。こうした点からすれば，棒状の敲き石を利用した直接打撃で横長剝片は剝取された可能性が高いと推定される。また縦長剝片石核の打面部にも横長剝片石核同様に弧状の打撃痕が認められるものがあり，縦長剝片の打点部が残るものには弧状クラックやバルブ・バルバースカーが認められるものも多い。こうした点では横長剝片と共通した打点部の状況を示す。縦長剝片石核は横長剝片石核と剝片剝取方法が異なり，石理の利用にも差はあるものの，直接打撃による剝片剝取の可能性も否定できない。

18. 石　鏃

第 179 図　石鏃は38点出土しており，石材は全てサヌカイトを用いている。残存状況の良好な25点を図化した。基本的な外形は正三角形・細身の二等辺三角形・細身で五角形を呈するものの 3 種類に区分することができる。基部は平基式と凹基式のもので，突基式のものはない。凹基式のものは明確な抉りを持つものと，わずかに湾曲するものの 2 種類が認められる。外形が五角形のものは，基部が明確な凹基となる。これに対して外形が正三角形と細身の二等辺三角形状のものでは，平基・凹基がいずれも認められる。外形が細身の二等辺三角形状を呈し，明確な抉りが認められる凹基のものは基部の先端部が直線状になるのに対して，外形が正三角形を呈するものでは基部の先端は丸味があるものが多い。



第178図　石鏃長幅分布図

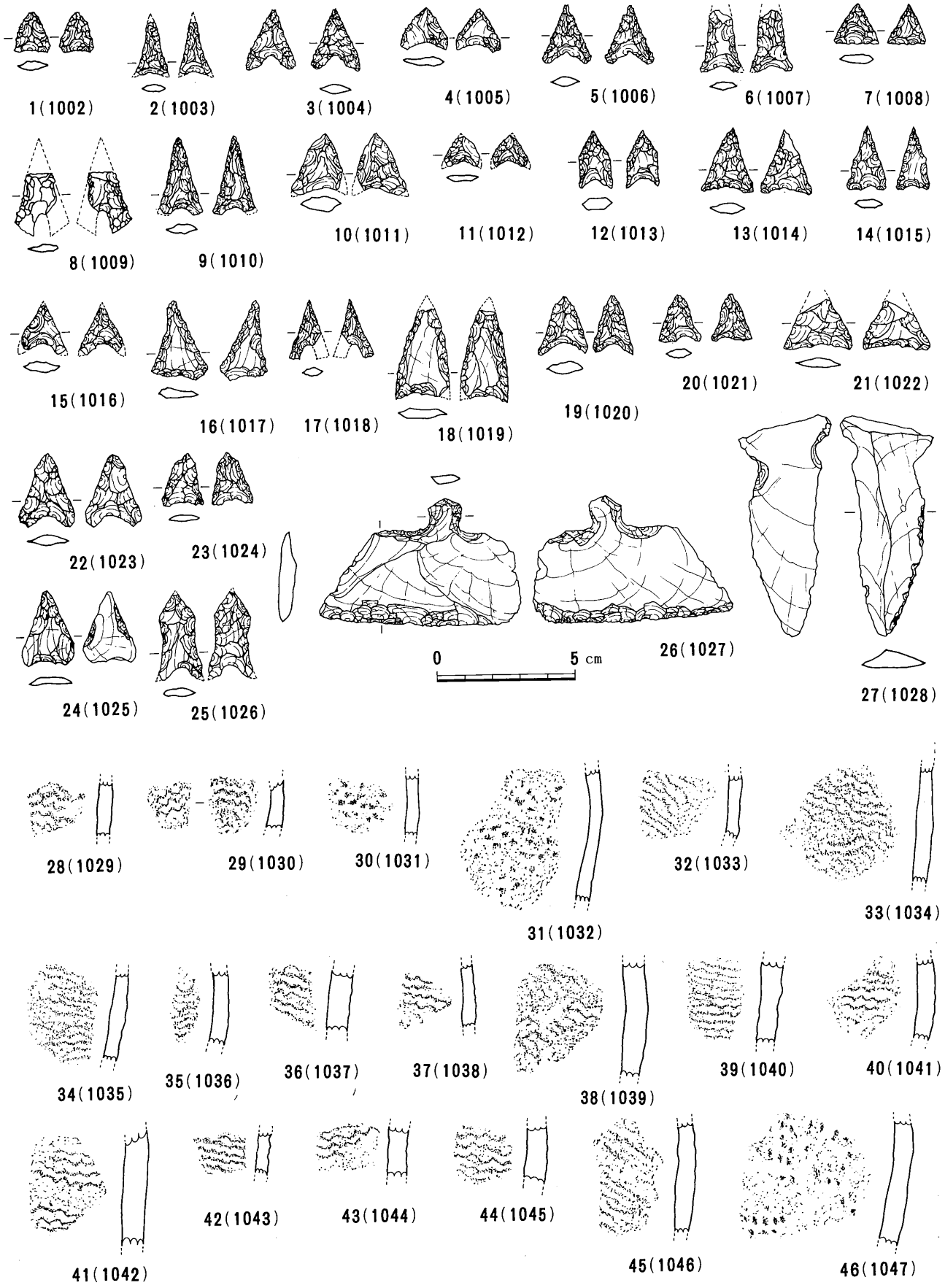
石鏃にもかなり風化したものが認められる。風化度は必ずしも石器の所属時期を反映したものではなく，使用されたサヌカイトの石質の差と考えられる。白色風化サヌカイトが石材に使用されているとすることができよう。

19. 石　匙

第 179 図26・27　2 点出土しており，いずれもサヌカイトを石材とする。26は横型の石匙でつまみが明確なもので横長剝片を素材とする。27は基部の両側縁に抉りを有するもので，縦長剝片を素材とする。

20. 縄文土器

第 179 図28～46　出土した土器はいずれも小片で器表の剝落が著しく，残存状況は悪い。概報中では縄文時代早期に属するものとして，撚糸文・押型文・無文の各土器を報告しているが，現在では施文の形態を確認することが困難なものもあり，概報での報告者の観察も参考にして報告する。時期的に把握できる土器は全て早期に属する。破片数で70点弱出土しており，押型



第179図　石鏃・石匙・押型文土器実測図

文系のものが多い。

28・29・32～38・41～45は山形文が器表に認められるものである。いずれも山形文の単位は小さい。29は内面にも山形文が認められる。色調は29が明褐色，他は暗褐色を呈する。30・31・46は楕円文を器表に持つものとして報告されたものであるが器表の剝落が著しく，山形文の可能性も否定できない。39は山形文として報告されているものであるが，山形の起伏は明確ではなく撚糸文系の可能性も考えられる。

大浦遺跡をはじめとした島嶼部の遺跡群からは押型文系もしくは撚糸文系以前の土器は確認されていない。島嶼部の遺跡は丘陵上に立地し，遺物が花崗岩風化バイラン土中に包含されることから石器類以外の遺物の残存状況は非常に悪い。押型文系の土器をやっと確認できた状況である。有舌尖頭器等が出土していることから，草早期に属する土器群の存在の可能性は否定できない。

小　　結

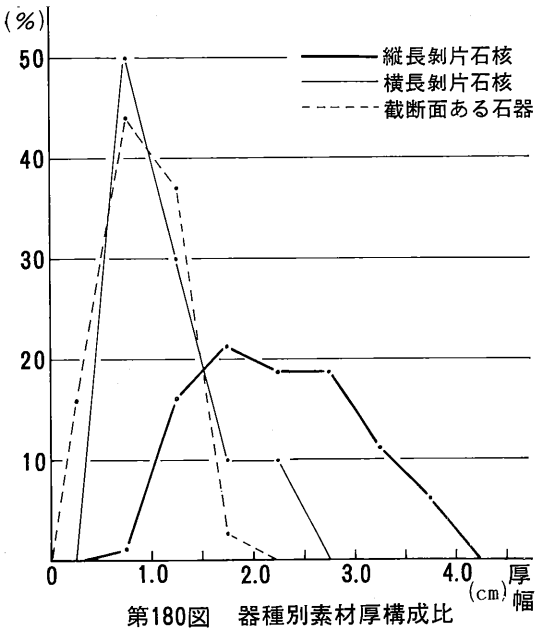
出土した遺物を器種別にその様相について述べたが，ここで主要に使用されているサヌカイトの石質の利用と横長剝片の剝取技法及びナイフ形石器の時期的な問題などについてまとめてみたい。

【サヌカイトの材質について】

大浦遺跡で石材として使用されているサヌカイトは，石理が明確で風化が進行したものと風化がそれほど進行していず石理も前者ほど明確には確認できないものとの2種類に区分することができる。白色風化サヌカイトを石材とする石器のほとんどは石理と平行する極めて平坦な面が認められるのに対して，風化度の低い普通のサヌカイトを石材とするものは同一の器種や同様な技法を用いているものにおいても剝離面はリング等による起伏がかなり顕著に認められる。また出土する石器類はいずれも花崗岩の風化バイラン土中に同一条件で包含されているにもかかわらず，時期的に確実に後出する石鏃にも風化が進行し白色を呈するものがかなり含まれる。島嶼部出土のサヌカイト製石器は蛍光X線による分析がなされている。その結果によれば，香川県下のサヌカイトの産出地である白峰・金山西・金山東の3箇所のサヌカイトが使用されているとのデータが出ている[註8]。また肉眼観察でも金山産のサヌカイトは石理が明確であり，石理方向に従って比較的容易に板状の剝片が剝取できる。こうした点からすると，サヌカイトの風化度の差は時期差や包含状況の差よりも石材の材質の差が強く反映していると考えられる。

本報告書では石理が明確で，風化が進行したサヌカイトを白色風化サヌカイトと仮称した。与島西方遺跡A地点や羽佐島遺跡では縦長剝片関係の石器を中心として，白色風化サヌカイトが多用されている。大浦遺跡では，白色風化サヌカイトの比率はさらに高く，縦長剝片関係の石器以外の器種にも使用される傾向が認められる。

白色風化サヌカイトを石材として用いる石器は石理と平行する平坦面を有するものが多い。こ



第180図　器種別素材厚構成比

れは素材となった剝片を非常に有効に利用していることに原因があると考えられる。大浦遺跡に限らず島嶼部の遺跡からは石器素材と考えられる白色風化サヌカイト質の大形の剝片が出土している。この種の剝片は，木の正目状の平行した石理の顕著な自然面を打面とするものが多い。原礫で石理を確認し，それを有効に活かして，連続的に石器素材の剝片を剝取したものであろう。その結果として，背・腹両面に石理と平行する平坦面が生じたと考えられる。盤状剝片石核のような交互剝離法は行われなかった可能性が高い。白色風化サヌカイトを素材とする石器に残る平坦面は素材となった剝片の剝離面であろう。

第180図は白色風化サヌカイトを石材とする縦長剝片石核・横長剝片石核・截断面ある石器の厚さ(幅)を集計したグラフである。これらの石核や石器は板状の素材となった剝片を有効に利用したもので，それぞれの厚さは素材の厚さとほぼ一致すると考えられる。横長剝片石核は底面に相当する面に，また他のものは両側面に石理と平行する素材面を残す。縦長剝片石核はやや厚手の素材を利用しており，2～3cm前後のものが最も多く，厚いものでは5cm弱のものがある。また1cm以下の薄手のものはB型の石核で縦長剝片を素材とし，その側面を作業面とするものである。これに対して横長剝片石核と截断面ある石器は薄いものが多く，前者では1～2cmのものが，後者では2cm以下のものが中心となる。横長剝片石核から剝取された剝片の多くがナイフ形石器の素材となっていると考えられ，白色風化サヌカイト質で横長剝片素材のナイフ形石器は小形の切り出し状ナイフ形石器が中心となっており，石核自体は薄い方が適している。白色風化サヌカイト質の素材剝片はその厚さで，使い分けられている可能性が高い。

【石理について】

サヌカイトを石材とする石器は有効に石理を利用していると考えられる。縦長剝片石核では石理と平行する面を両側面になるように素材を用いており，側面の調整は不必要である。剝取された縦長剝片は平坦面を背面に残し，安定したエッジを有するものがかなり含まれる。縦長剝片の剝取の際に，側面部をうまく利用したものである。大浦遺跡出土の横長剝片石核はその多くが交互並列剝離技法を用いている。石理と平行する平坦面を底面に利用している。この石理面の方向は，翼状剝片石核の場合とは異なる。島嶼部から出土する明確な打面調整を施された翼状剝片石核は底面にややリング等による起伏が認められる場合が多く，大浦遺跡出土の交互並列剝離石核の底面とは異なる。また国府型ナイフ形石器や翼状剝片では主要剝離面と石理が平行するものが多いのに対して，大浦遺跡の特に切り出し状ナイフ形石器では石理面が底面と平行する場合が多い。近畿地方のサヌカイトの産出地である二上山の北麓に展開する遺跡群でも翼状剝片石核の作

業面と平行してサヌカイトの石理面が走る例が多いとの指摘が松藤和人氏によってなされている。[註9] これは打面調整を明確に施す翼状剥片石核と交互並列剥離石核との技法の差によるところが大きい。翼状剥片石核では翼状剥片と石核調整によって生じる剥片には形態差があり，石核調整によって生じた剥片は本来の目的剥片ではない。翼状剥片は常に一定方向で剥取される。そのため石理は翼状剥片の主要剥離面と平行するように利用される傾向が生じる。与島西方遺跡出土の翼状剥片石核で作業面を転移したものに，打面と底面をわざわざ逆転した例があることからも，作業面と石理方向を一致させる意図が窺われる。これに対して交互並列剥離は，石核調整と目的剥片の区別がなく，目的剥片の剥離痕が同時に次に行われる剥片剥取の石核調整機能を有する。剥離方向が異なる目的剥片の剥取が行われることから，両剥離方向に等質的な石理が要求される。そのため交互並列剥離技法による石核では底面と平行する石理の利用が合理的と考えられる。大浦遺跡から出土した横長剥片石核で，打面調整を施しながら，並列して目的剥片を剥取したものがあるが，石理方向は底面と平行しないものである。

大浦遺跡の縦長剥片石核と横長剥片石核は剥片剥取法の差はあるものの背・腹両面に石理と平行する平坦面を有する板状の剥片という共通した素材を用いるものが大半を占める。特にその傾向は白色風化サヌカイト質のものに顕著である。板状の剥片の小口面を縦方向に利用したものが縦長剥片石核で，横方向に用いたものが交互並列剥離の横長剥片石核とすることができよう。また素材となった剥片の厚さは，両石核で異なることから，素材の使い分けも考えられる。いずれにしてもサヌカイトの石理や石質を共通した手法で活かしたものとすることができよう。

【横長剥片の剥取技法について】

大浦遺跡から出土した18点の横長剥片石核は，大半が交互剥離を用い，上下に位置する作業面内で並列して目的剥片を剥取したものである。この技法を用いた石核と出土した横長剥片素材の小形切り出し状ナイフ形石器とは，使用された石材・石理の活用法・剥離角・大きさなどの点で共通性が認められる。またこの交互並列剥離という技法は多量の目的剥片が剥取されるが，瀬戸内技法ほどには厳密な石核調整が施されないことから，作業面に残る目的剥片の剥離痕は画一性に欠けるものとなっている。出土した小形切り出し状ナイフ形石器では，刃部と素材になった剥片の剥取方向の位置関係に一定した状況は認められず，非常に不定形な横長剥片を素材としていることが窺われる。この種のナイフ形石器は素材を大きく変形することによって，一定した形状を呈するものであり，素材の形状にはそれほどの画一性を要求しない。交互並列剥離技法と横長剥片素材の小形切り出し状ナイフ形石器との正合性は高い。

大浦遺跡からは交互並列剥離技法による石核の他に，点数的に少ないが翼状剥片石核に類似した石核や両者の中間的な様相を呈した石核が出土している。大浦遺跡では小形切り出し状ナイフ形石器のほか細石刃・細石核が多量に出土しており，翼状剥片石核とも考えられそうな石核の存在は遺跡の時期的な広がりや横長剥片の剥片剥取法の変遷等を把握する上で問題となる。大浦遺跡が国府期にすでに存在したのか，それとも新しい時期まで瀬戸内技法に類似した剥片剥取法が存続するかという問題である。出土した翼状剥片石核に類似した石核は，瀬戸内技法の第2工程

はほぼ条件的に充たすものである。石核調整部と目的剝片剝取部には差があり，目的剝片の剝離痕は石核幅と一致する。しかし，いずれも石核自体は小形のものであり，作業面に残る剝離痕もそれほど大きくはない。白色風化サヌカイト質の石核は半截された可能性もある。石核自体の大きさが限定されているため，結果的に石核幅と一致した剝片剝取にならざるを得なかったとも考えられる。

またこの3点の石核は盤状剝片を素材としない点も問題となる。翼状剝片石核の全てが盤状剝片を素材とするものではなく，サヌカイトの産出地である城山遺跡では大形の翼状剝片石核で盤状剝片を素材としないものが採集されている。しかし，島嶼部の遺跡ではファースト・フレイクを素材としたナイフ形石器が多数出土しており，背面がポジティブな底面の打面となっている。自然面を打面とするファースト・フレイクはほとんど出土しないことから，島嶼部の遺跡では松藤和人氏が想定した瀬戸内技法の第1工程，つまり交互剝離により石核素材を剝取する方法によった盤状剝片が翼状剝片石核の素材として用いられていることはまちがいない。城山遺跡出土の翼状剝片石核からすれば，瀬戸内技法の第1工程での交互剝離は大形の石核素材を剝取するのに不向きなのではないだろうか。今後検討する必要があろう。また島嶼部出土のファースト・フレイク素材のナイフ形石器には，石核素材となった剝片の打点が，ナイフ形石器の背面の中央部ではなく基部よりに大きくずれて残存するものや背面に認められないものも含まれる。交互並列剝離石核の底面が素材となった剝片のポジティブな面で，作業面側に打点を有するものもかなり含まれる。こうした点からすると，島嶼部の翼状剝片石核は瀬戸内技法の第1工程で剝取された盤状剝片を素材とし，後出する横長剝片石核も瀬戸内技法の第1工程と類似した技法で得られた剝片を石核素材とするものがかなり含まれていると考えられる。また大浦遺跡では交互並列剝離石核を中心として白色風化サヌカイトが用いられており，同質の石材を用いた縦長剝片石核と共通した素材の活用法が認められる。出土した交互並列剝離石核で盤状剝片状の素材を用いるものは1点にしかすぎない。打面調整を施し，作業面で並列して石核幅と一致しない目的剝片を剝取した石核（片面並列剝離石核）が1点出土しているが，石核の底面はポジティブな素材面で打撃方向は作業面側からである。石理方向は作業面と平行する。素材は盤状剝片状のものと考えられる。島嶼部の石核素材も目的剝片の剝取技法の変化に伴ない変質していったことが窺われる。まとめると，島嶼部の遺跡では翼状剝片石核・片面並列剝離石核の段階では交互剝離によって盤状剝片を剝取し石核素材とするものが主流を占める。こうした傾向は交互並列剝離石核の段階でも一部継続するが，主流は白色風化サヌカイト質の縦長剝片石核と同様な板状の剝片を素材とするものに変化していったとすることができよう。盤状剝片もしくはそれと類似した剝片が石核素材として一部は交互並列剝離石核の段階まで使用されていることを述べたが，ここで石核素材を剝取する工程である第1工程と石核素材の剝取工程の第2工程との技法的正合性について考えてみたい。島嶼部の遺跡では盤状剝片は集計するほどの点数はなく，盤状剝片石核は出土していないため，瀬戸内技法の第1工程については，二上山北麓の遺跡群出土例によらざるを得ない。二上山北麓の遺跡群から採集された盤状剝片石核は石核幅と一致した盤状剝片を交互剝離により剝取したも

のが中心となり，松藤氏が想定した瀬戸内技法の第1工程とそれほど矛盾しないものである。瀬戸内技法の第2工程での翼状剥片石核は，明確な石核調整を施し，片面から石核幅と一致して一定形状の翼状剥片を剥取する。松藤氏により集計された大半の盤状剥片石核は石核幅と一致した目的剥片の剥取という点では翼状剥片石核と共通するものであるが，交互剥離を用いている点でやや技法的な正合性にかける。翼状剥片石核が厳密な石核調整を施すことから，石核素材剥片はある程度の大きさがあればよいということで盤状剥片石核では交互剥離が用いられる可能性が高い。しかし，それだけではなく石理もかなり影響していると考えられる。二上山北麓の遺跡群に残存する盤状剥片は石理が底面と平行する例が多いのに対して，翼状剥片石核では作業面と平行するものが多いことが読み取れるデータが示されている。瀬戸内技法は国府型ナイフ形石器の素材となる定形化した翼状剥片を剥取することを目的としたシステムであり，石理が翼状剥片石核の作業面と一致するのは当然のこととすることができよう。石理方向が主要剥離面と一致する盤状剥片は本来は目的剥片ではなく，より安定した石核素材を剥取するための打面形成の目的で剥取された可能性が高い。瀬戸内技法の第1工程は単なる交互剥離ではなく，第2工程の翼状剥片石核との正合性は高く，合理的なものと考えられる。

二上山北麓出土の第2工程の石核には，少量ではあるが目的剥片の剥離痕が石核幅と一致しないものも検出されている。また交互並列剥離により石核素材剥片を剥取した盤状剥片石核も1点ある。この第1工程の石核は技法的にみれば，第2工程の片面並列剥離石核や交互並列剥離石核との方が正合性は高いとすることができよう。数量的傾向においても第1工程と第2工程の石核は対応しているとすることができよう。

第1工程と第2工程の剥片剥取法には極めて密接な技法的な正合性を認めることができる。こうした中で大浦遺跡出土の翼状剥片石核と類似した3点の石核の全てが盤状剥片を素材としない事実は，この3点が国府期に属さない可能性が高いとしなければならないであろう。石核自体が小形であるため結果的に目的剥片の剥離痕が石核幅と一致したものの可能性が高い。この3点より盤状剥片と類似した素材による片面並列剥離石核の方が瀬戸内技法との類似性を強く感じさせるものである。

【時期的な問題について】

層位的な遺物の出土例を組み合わせた編年が瀬戸内地域ではなされていない。これは降下火山灰等の明確な層位が確認された遺跡が瀬戸内では皆無に近いことに原因がある。そのため瀬戸内の旧石器の編年観は瀬戸内技法の衰退という定向変化を想定し，その度合による大まかな先後関係によらざるを得ず，それを他地域と関連した資料で補正するというのが，瀬戸内の編年研究の現状での資料的な限界であろう。ナイフ形石器の形態による時期設定には，国府・宮田山・井島型といったナイフ形石器の形態が今一つ明確に設定されているとは考えにくく，その変化には素材の不定形化という理解が占める比重が大きい。素材の変化という点からすれば石核に認められる技法の変化ということで良いであろう。また国分台遺跡群を分析された竹岡俊樹氏はナイフ形石器の小形化に時期的な変化の方向性を見い出そうとされている[註10]。ただ国分台遺跡群からは小形

の切り出し状ナイフ形石器や木葉形の両面加工尖頭器も多数出土している[註11]。関東地方の武蔵野台地における両面加工尖頭器が出現する時期は，鈴木次郎・矢島国雄氏の5期区分[註12]の第Ⅳ期，武蔵野台地における第Ⅳ層の中・上部に相当する時期に位置付けられている。関東地方における国府型ナイフ形石器の出土層位が武蔵野台地の第Ⅳ層下部であることからすれば，木葉形の両面加工尖頭器は新しい時期の所産である可能性が高い。国分台遺跡群出土遺物中には，片面単一剥離技法による翼状剥片石核だけではなく，片面並列剥離技法による石核もかなり認められる。国分台遺跡群はかなり長期間にわたって形成されたと考えられる。大形のナイフ形石器が分布する点では城山遺跡がある。両遺跡ともサヌカイトの産出地である点においては共通する。ナイフ形石器の大形のものが国分台・城山両遺跡に分布する原因は石材の産出地という立地条件によるところが大きく，時期差と直接結びつけることは現状では無理であろう[註13]。こうした点からすれば，横長剥片石核・目的剥片・ナイフ形石器などに認められる剥片剥取法を編年基準の一つとしたい。

大浦遺跡のナイフ形石器は，使用された石材・素材・大きさ・施されたブランティングの状況などかなりバラエティに富むものである。このうち横長剥片を素材とするナイフ形石器はその多くが小形の切り出し状を呈するものであるが，一部国府型ナイフ形石器の系譜上で理解されるものが含まれる。しかしその形状からすれば，明確な翼状剥片を素材とするものは含まれない。このような状況は出土した横長剥片石核と対応したものである。ある程度の時期的な幅はあるかもしれないが，横長剥片を素材としたナイフ形石器は，少なくとも国府期よりも後出するもので，ナイフ形石器文化の終末期まで継続するものであろう。

縦長剥片を素材としたナイフ形石器は瀬戸内では量的に少なく，時期的にも明確な位置づけはなされていない。大浦遺跡出土のナイフ形石器で横長剥片素材と縦長剥片素材のものはそれぞれ大形のものから小形のものまであるが，大きさの面での分布の差はそれほど認められない。また縦長剥片を素材とするナイフ形石器はブランティングの施される部位によりA～C型に分類した。A型は片方の側縁のほぼ全体と一部は基部にブランティングを施したもので，B型は基部を中心として一部先端にブランティングを施したものである。縦長剥片素材のA型とB型には大きさの面での差異は認められない。ブランティングの施される部位の差がナイフ形石器の実質的な差として把握できるものか検討する必要があろう。

横長剥片を素材とするナイフ形石器に施されるブランティングについてまとめる。国府型ナイフ形石器の主流な形態は，尖鋭な先端部を持ち，ほぼ左右対称な側縁を有する。一方の側縁部は鋭利な刃部となり，他の縁部はブランティング部からなる。基部は明確なものが多い。素材となった翼状剥片と比較する。翼状剥片は安定した刃部と素材としての形状を保持するために石核調整により120°前後の角度を有して打点部から末端部へ広がり，扇形に近い形状を呈する。国府型ナイフ形石器の側縁部に施されるブランティングは翼状剥片の打点部を落とし，細身の形状を呈するために施されたものである。また国府型ナイフ形石器は，基部に特別ブランティングを施されていないものでも基部が明確なものが多い。基部や基部よりの刃部にブランティングを施すものは，素材に基部として活用できる部分がなかったためと考えられる。国府型ナイフ形石器の側縁部と基

部に施されるブランティングは成形加工とすることができよう。また刃部に細かくブランティングが認められるものも存在する。こうしたものの大半は素材の主要剝離面が乱れているものが多く，刃部を整えるための調整と考えられる。明確な翼状剝片素材の国府型ナイフ形石器とすることはできないが，同様な形態を呈するナイフ形石器で底面が複数の剝離面からなるものがあり，剝離面の接点を中心にブランティングを施すものが認められる。これは素材となった剝片の刃部は剝離面の接する部分を中心として，刃部の形状が乱れていたと推定される。横長剝片素材のナイフ形石器のブランティングは一定形状に保つために素材の余分な部位を除く成形加工と刃部に施される調整とに二分することができよう。

国府型ナイフ形石器に施されるブランティングを参考にして，縦長剝片素材のナイフ形石器のブランティングを検討する。大浦遺跡出土の縦長剝片素材のナイフ形石器で大形のものとして，サヌカイト製のもの（第115図11）と流紋岩製のもの（第115図10）がある。後者はA型で前者はB型にブランティング部位から分類される。流紋岩製のものは，同一石材の縦長剝片が幅広のものが多いことや，素材の主要剝離面のポジティブなバルブの状況からすれば素材となった剝片はかなり幅広であったと考えられる。これに対してサヌカイト製のB型のナイフ形石器は素材となった縦長剝片自体が細身のもので，片方の側縁部には自然面が残る。流紋岩製のA型のナイフ形石器は片方の側縁部のほぼ全体にブランティングを施すが，先端部には素材面が残存する。先端部はブランティングを施さなくとも充分に細身で尖るものである。またB型のナイフ形石器の基部調整は両側縁に施すものがほとんどである。流紋岩製のA型のナイフ形石器の刃部の基部よりの部位にもわずかに調整痕が認められる。こうした点からすると，大浦遺跡の縦長剝片素材のA・B型のナイフ形石器に本質的な形態面での差異は少ない。素材の形状により，幅広のものはA型，細身のものはB型に結果的になった可能性が高い。前述したA型とB型の大きさの面での類似した分布や尖鋭な先端部を有するなどの共通性も，両者の類似性を示すものであろう。

素材となった剝片の用い方にも共通性がある。大浦遺跡の縦長剝片素材のナイフ形石器には素材の折断という手法は用いられずナイフ形石器の基部は素材の打点部であるものがほとんどである。黒曜石製を石材としたA型のナイフ形石器で小形のものに1点だけ先端部が素材の基部側に位置するものがある（第116図21）が，これは素材が蝶番剝離しているためと考えられる。

また縦長剝片素材のナイフ形石器には，内湾するカーブを有した刃部を持つものがかなり認められる。この刃部の状況はかなり意図的に決定されている可能性が高い。A型のものは片側縁のほぼ全体にわたってブランティングが施されているため素材の形状に不明な点があるが，B型では比較的素材を確認しやすい。B型では両側縁に鋭いエッジを有するものでも，外湾する側縁の先端部にブランティングを施して内湾する側縁を刃部としたものが多い。また外湾する側縁の方が鋭いエッジ状を呈するにもかかわらず，内湾する側縁を刃部とするものが認められる。全てが内湾～直線的な刃部を有するものではないが，比率的にはかなり高い。こうした点からすると，素材のナイフ形石器化には一定した規則性があるのではないだろうか。ナイフ形石器の刃部の形態や素材に対する刃部位置の選択について検討していく必要があろう。この内湾傾向の刃部を有

するものは縦長剝片素材のナイフ形石器で大形から小形のものまでかなり認められる。

縦長剝片素材のA・B型のナイフ形石器と小形切り出し状ナイフ形石器とは，明確に区分できるものではない。小形切り出し状ナイフ形石器のC型には縦長剝片素材のものが6点含まれる。またE型のものは横長剝片を素材とするが先端部の両側縁に鋭い刃部を持ち，B型の小形のものとそれほど形態上の差は認められない。

以上まとめると，縦長剝片素材のナイフ形石器は，主に施されたブランティング部位により，A・B・C型に分類される。A・B型には素材を折断する手法が認められない点や刃部の形状及び長幅比に共通性が認められ，A・B型の小形のものと小形切り出し状ナイフ形石器には共通した形態を持つものがある。単一時期の所産かどうかは別にして，一連のものと考えられる。大浦遺跡の遺物の出土状況は，石器製作によって形成されたと考えられる石器群が数箇所認められ，遺跡の周辺からはほとんど石器の出土を見ず，遺物の出土量はフレイク・チップ類を含めて1万点程と少ない。大浦遺跡は備讃瀬戸の遺跡群の中では比較的遺跡の存続期間が短い遺跡である可能性が高い。ただ中央発掘区の東南部を中心として遺物の密集が認められるが必ずしも単一時期の所産の石器を明確に抽出できるところまでは至っていない。他の遺跡の状況等を参考にして，出土したナイフ形石器の時期的な位置付けについて考えてみたい。国府期の単純遺跡として代表的なものに大阪府高槻市所在の郡家今城遺跡C地点[註14]と二上山北麓に立地する遺跡群[註15]がある。前者は低位段丘上に立地し，サヌカイトの産出地からやや離れた遺跡で，8基のユニットが検出され，接合資料も多く出土石器群の同時性は非常に高い。後者はサヌカイトの産出地に立地する遺跡群で，代表的な遺跡としては鶴峯荘Loc.1や桜ケ丘Loc.1があり，石器群の様相からすれば国府期の単純遺跡の可能性が高い。郡家今城遺跡C地点・鶴峯荘Loc.1・桜ケ丘Loc.1の石器組成は，石核には翼状剝片石核と縦長剝片石核があり，剝片には翼状剝片と縦長剝片が，またナイフ形石器は翼状剝片を素材とする国府型ナイフ形石器が大半を占める。縦長剝片石核は両設打法によるもので，大浦遺跡出土のものとそれほどの差はないと考えられる。これらの遺跡では縦長剝片が剝取されているにもかかわらず，ナイフ形石器の素材としてはほとんど使用されていない。こうした点からすると，大浦遺跡で検出された縦長剝片素材のナイフ形石器は国府期の所産ではないと考えられる。大浦遺跡では明確な国府型ナイフ形石器・翼状剝片・翼状剝片石核が出土していないことと矛盾するものではない。

縦長剝片素材のナイフ形石器は備讃瀬戸の遺跡での検出例は多くなく，大浦遺跡で出土した45点は比較的まとまって出土した方である。縦長剝片素材のナイフ形石器はその形態からもかなり完成度が高く，黒曜石やハリ質安山岩など瀬戸内では産出しないと考えられる石材を用いているものが多い。他地域の影響下で出現したものであろう。備讃瀬戸における縦長剝片素材のナイフ形石器は，比較的新しい時期の石器群との関連性が高い。西方遺跡A地点・羽佐島遺跡・花見山遺跡[註16]・大浦遺跡などから出土している。西方遺跡A地点・羽佐島遺跡はフレイク・チップ類を含めて，十数万点以上の遺物を出土しており，遺物から見た遺跡の継続期間も長い遺跡で国府期以降の石器群も含む。また花見山遺跡・大浦遺跡はナイフ形石器中で国府型ナイフ形石器は

少ないか皆無であり，細石刃・細石核が多く出土した遺跡である。共通した時期としては国府期よりも新しい時期である。また縦長剝片素材のナイフ形石器に使用された石材である黒曜石やハリ質安山岩は，細石刃の石材としても多用される。大浦遺跡では水晶を用いた細石核が出土しているが，羽佐島遺跡では縦長剝片も出土している。また黒曜石は材質から原石が3種類ほどに分類することができるが，羽佐島・花見山・大浦遺跡を総合すれば，縦長剝片や同素材のナイフ形石器と細石刃・細石核に黒曜石の材質的な変化はない。また島嶼部の各遺跡の調査では，二次堆積層は検出されず，花崗岩の風化バイラン土層中に石器群は包含されていた。備讃瀬戸を含めた香川県は沖積作用が著しい地域とされており，瀬戸大橋建設に伴うボーリング調査では備讃瀬戸の海底から姶良火山灰が検出されている。こうした点からすれば，島嶼部の遺跡が立地する丘陵部はかなりのバイラン土が流出し，地形も変化したことが考えられる。花見山遺跡や大浦遺跡のようにかなり限定された範囲で検出された石器群に長期にわたる時期差を想定するには無理があろう。石材の類似性・立地からすれば縦長剝片素材のナイフ形石器を国府期よりも古い時期の所産とするのは困難であろう。

大浦遺跡出土の縦長剝片素材のナイフ形石器と共通した形状を示し，素材の剝片剝取法にも類似性を認めることができ，しかも瀬戸内地方の影響下の石器群が含まれるものとして，大分県の岩戸遺跡[註17]の第1文化層出土の石器群がある。報告書中で柳田俊雄氏は剝片剝取法を4区分され，第Ⅳ類を瀬戸内技法と類似するものとしている。またナイフ形石器中には1点国府型ナイフ形石器が含まれるとされた。剝片剝取法の第Ⅳ類と考えられる石核No.140を中心とする接合資料では，打面調整を施し，限定された作業面から石核幅と一致した目的の横長剝片を剝取するという点において瀬戸内技法と一致するが，素材の打面側からではなく側面側から作業が進行するという点でやや異なるものである。また石核No.1447を中心とする接合資料では石核幅と目的剝片の幅が一致しないものである。この第1文化層においては典型的な瀬戸内技法による石核は出土していず，大浦遺跡出土の瀬戸内技法の系譜上で理解できる石核と類似するものである。また剝片剝取法の第Ⅱ類とされた石核No.66・885は交互並列剝離による石核であり，技法的には大浦遺跡のものと類似する。また国府型ナイフ形石器とされたNo.1568も底面の加撃方向が異なっており，素材の剝片剝取法としては前述した接合資料と類似するものである。福岡県の西島遺跡では，盤状剝片の打点が残るファースト・フレイクを素材とした国府型ナイフ形石器が出土し[註18]，大分県の丹生台地の第9地区B地点出土の石核が素材となった盤状剝片の打面側に作業面を有するとされる[註19]など，より典型的な国府期に属する石器群が出土している。こうした点からすると岩戸遺跡の第1文化層の素材の打面側に作業面を有しない石核は，国府期の直接の影響と考えるよりも，瀬戸内技法衰退期の瀬戸内との関連によるものとする方が良いであろう。岩戸遺跡第1文化層は国府期よりも後出する時期と考える。

また縦長剝片関係の石器群についてみると，石核ではA型とされるNo.997は大浦遺跡の流紋岩製のC型の石核と類似する。またB型とされたNo.959やE型とされたNo.920も同じ系統のものの可能性がある。他に大浦遺跡でE型に分類したハリ質安山岩製の石核と類似するものとして，C_1

型とされた№1565がある。また縦長剥片素材のナイフ形石器の大半は基部側に素材の打点がくるもので，一側縁加工と基部加工のものが中心となっている。大浦遺跡のA・B型の縦長剥片素材のナイフ形石器と非常に良く類似する。またE型に分類された先端部加工のナイフ形石器に大浦遺跡でB型としたものに類似するものがある。また素材を断ち切るように加工を施した№1256は大浦遺跡出土の黒曜石の小形ナイフで先端部側に素材の打点方向がくるものと共通性が考えられる。

岩戸遺跡第1文化層を特徴づける石器の一つに三稜尖頭器がある。備讃瀬戸の遺跡群で舟底形石器と呼んでいるものと同一のものである。舟底形石器の大半は甲板面の加撃が横方向からのもので，横長剥片を素材としたものが中心となる。岩戸遺跡の三稜尖頭器で三面加工によらないものは，甲板面の加撃方向が横方向からであり，大浦遺跡出土のものと共通する。大浦遺跡では三面加工のものは出土していないが，西方遺跡C地点[註20]から断面三角形の三面加工の尖頭器が検出されている。この尖頭器は稜上加工を施してはいないが，第1文化層の№1480・№1736の三面加工三稜尖頭器と共通するものであると考える。

津留遺跡は岩戸遺跡と同様，大野川流域に位置し，岩戸遺跡第1文化層よりも国府型に類似したナイフ形石器が出土している。また剥片尖頭器を含むなど第1文化層とは若干内容が異なる。津留遺跡出土の縦長剥片素材のナイフ形石器には素材の打点方向に先端部が位置するナイフ形石器が出土している。これも第1文化層にはない様相である。こうした点からすれば，岩戸遺跡の第1文化層と津留遺跡には時期差があるのではないだろうか。

岩戸遺跡第1文化層の石器群の様相は大浦遺跡の石器群の一部と共通性を認めることができる。小形の切り出し状ナイフ形石器が岩戸遺跡の第1文化層で出土していないことを考慮に入れれば，大浦遺跡のナイフ形石器は連続する二つの時期に区分することができよう[註21]。岩戸遺跡の第1文化層と大浦遺跡の古相は併行する時期の所産である可能性が高い。

従来瀬戸内地方との石器群の関係が問題となっていた南関東地方の武蔵野第II_a期は，最近の埼玉県殿山遺跡や神奈川県柏ケ谷長ヲサ遺跡[註22]における典型的な国府型ナイフ形石器や大浦遺跡の縦長剥片素材のナイフ形石器の検出で，より実質的に両地方の関連解明の糸口を見い出したとすることができよう。

註

1. 渡部明夫・藤好史郎・白本清・中西昇・玉城一枝「羽佐島遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』II　1979　香川県教育委員会
   渡部明夫『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告I　羽佐島遺跡（I）』　1984　香川県教育委員会
2. 牟礼良典・唐木裕志・藤好史郎・真鍋昌宏『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告（I）与島西方遺跡』1984　香川県教育委員会
3. 備讃瀬戸の島嶼部の調査では黒曜石の原石は検出されていず，出土するナイフ形石器からの推定である．
4. ブランティングにより，背面のネガティブな剥離痕は消失し断面三角形を呈するものである．ナイフ形石器を転用した彫器で確認されているのはこの1点だけである．

5. 柳田俊雄「3. 截断面ある石器」『ふたがみ ― 二上山北麓石器時代遺跡群分布調査報告 ― 』 1974 同志社大学旧石器文化談話会
6. 橘昌信「九州地方の細石器文化」『駿台史学』47 1979 駿台史学会
7. 原礫の分割時に生じたような明確なものではなく，自然面を一部除去しただけのものが多い．
8. 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌「蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定（Ⅲ）」『考古学と自然科学』10 1977
9. 松藤和人「第2節 再び"瀬戸内技法"について」『二上山・桜ケ丘』 1979 橿原考古学研究所
10. 竹岡俊樹「瀬戸内海地方における石器群の変遷 ― 瀬戸内技法複合の遺物の大きさに関する分析 ―」『旧石器考古学』21 1980 旧石器文化談話会
11. 坂出市立郷土資料館・香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館で保管されている遺物
12. 鈴木次郎・矢島国雄「1. 先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』1 1978 有斐閣選書
13. 藤好史郎「備讃瀬戸の旧石器遺跡」『考古学ジャーナル』225 1983
14. 冨成哲也・大船孝弘『郡家今城遺跡発掘調査報告書 ― 旧石器時代遺構の調査 ― 』 1978 高槻市教育委員会
15. 同志社大学旧石器文化談話会『ふたがみ ― 二上山北麓石器時代遺跡群分布調査報告 ― 』 1974
堀田啓一・松藤和人・柳田俊雄・佐藤良二・古森政次・麻柄一志『二上山・桜ケ丘遺跡』 1979 橿原考古学研究所など
16. 竹下和男・廣瀬常雄・真鍋昌宏・西村尋文「Ⅲ 花見山遺跡ホウロク石地区第1次調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』Ⅲ 1980 香川県教育委員会
真鍋昌宏・林正弘・西村尋文「Ⅳ 花見山遺跡の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』Ⅳ 1981 香川県教育委員会 なお，花見山遺跡は本報告発行予定である．
17. 芹澤長介・柳田俊雄『岩戸』 1978 東北大学文学部考古学研究会
18. 松藤和人「筑後平野北部の国府型ナイフ形石器」『旧石器考古学』27 1983 旧石器文化談話会
19. 綿貫俊一「東九州における瀬戸内系の人類遺物」『旧石器考古学』25 1982 旧石器文化談話会
20. 竹下和男・森本義臣・坂口淳子「与島西方遺跡の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』Ⅴ 1982 香川県教育委員会
21. 清水宗昭氏の御教示によれば，第1文化層は岩戸遺跡の第3次調査で2時期に分かれることが判明したとのことであり，大浦遺跡の石器群がさらに細分される可能性もある．
22. 神奈川考古同人会「シンポジウム 南関東を中心としたナイフ形石器文化の諸問題」『神奈川考古』16 1983

第5章　おわりに

大浦遺跡は，昭和55年6月～12月にかけて発掘調査を実施した。現地での発掘調査時からナイフ形石器が非常に少なく，逆に細石刃・細石核が多く検出され，備讃瀬戸における旧石器文化の最終末の状況を示す遺跡であると考えられた。また遺物の出土量が少なく，フレイク・チップ類などを含めた総出土点数が11,395点である。備讃瀬戸の島嶼部に立地する旧石器時代の遺跡は，羽佐島や与島西方遺跡A地点など，限定された狭い丘陵の尾根筋を中心として数10万点にのぼる莫大な量の石器類が出土し，しかも時期差を反映した層位が形成されていず，出土状況で石器群を時期的に区分するには困難さが伴う。また羽佐島・西方遺跡A地点では，国府期[註1]の石器群から細石器文化期に至る時期の所産と考えられる石器群が出土しており，瀬戸内技法による石器群以外は明確な意義付けがなされていない瀬戸内では，遺跡の具体的な内容の把握も困難なのが現状だった。そうした中で大浦遺跡は面積比においても遺物量が少なく，石器類が集中する箇所がかなり限定されるなど，遺物の出土状況も比較的恵まれている遺跡であることから，本報告をまとめることとなった。

現地における発掘調査及び概要報告と本報告とでは担当が異なっている。今回の本報告においては基礎分類から見直しを実施し，縦長剝片素材や小形の切り出し状ナイフ形石器が出土石器中に多く含まれる事実や小形切り出し状ナイフ形石器と対応する横長剝片石核が存在することの確認など多くの事実が明らかになってきた。この章では瀬戸内の旧石器研究における大浦遺跡出土石器群の意義や時期的な位置付けなどについて述べてみたい。

瀬戸内地方における旧石器研究の歴史は古いにもかかわらず，降下火山灰層の残存状況の悪さによる明確な層位的石器群の検出例の欠如や，後氷期の海面上昇の結果による遺跡の海底への埋没などの資料的な限界や，瀬戸内技法という独特な石器製作法による石器群が主流を占めることによる他地域との比較検討の困難さがあり，瀬戸内地方の旧石器研究の低滞の要因となっている。また近畿地方の西部では，二上山北麓のサヌカイト産出地に立地する遺跡群や大阪府下の旧石器遺跡群の状況の解明はあるものの，大半の遺跡が国府期を中心とするもので，それに続く時期の遺跡に恵まれず他地域との比較検討にまでは至っていないのが実状であろう。

こうした中で瀬戸大橋建設に伴って実施してきた備讃瀬戸の島嶼部の遺跡群の発掘調査では，中でも大浦遺跡は国府期に属する石器群が含まれず，瀬戸内の伝統的な横長剝片素材のナイフ形石器とともに縦長剝片素材のナイフ形石器がまとまって検出された[註2]。この縦長剝片素材のナイフ形石器に使用されている石材には，サヌカイト以外に黒曜石・ハリ質安山岩・流紋岩といった瀬戸内では国府期の石器群にほとんど使用されていない石材が認められる。こうしたナイフ形石器が，瀬戸内地方の旧石器文化の一つの中心地とも言える備讃瀬戸の遺跡で検出された意義は大きい。また流紋岩やハリ質安出岩を石材とする縦長剝片石核で，これまで備讃瀬戸ではあまり認められていない剝片剝取法が確認できた。これまで具体的な石器で他地域との関連性を追求するこ

とが困難であった瀬戸内の旧石器研究の現状を打破する資料とすることができよう。

また大浦遺跡では瀬戸内技法の系譜上で理解できる横長剥片の剥取法や，それに基づいた横長剥片素材のナイフ形石器が検出され，加えてこれまで時期的には国府期もしくはそれ以前の所産とされてきた風化して白色を呈するサヌカイト質の縦長剥片・石核が多量に出土している。こうした石器群の時期的な位置付けや機能的な可能性についてある程度の目安を得ることができた。

大浦遺跡の石器群に認められる瀬戸内的な様相と非瀬戸内的な様相について，出土状況をふまえてまとめる。後世の攪乱部を除去後の石器の平面的な分布では，数箇所に石器の集中を認めることができる。そうした石器の集中には明確な分布の中心があり，包含層が移動して形成された二次堆積層とは考えられない。平面的には原位置を保っている可能性が高い。また巨視的にみれば多くの石器が中央部発掘区の南寄りのグリッドから出土しているが，石材や石器毎に分布をおさえると，若干の分布の差が認められる。特に細石刃・同石核を中心として形成された石器群の中には他と離れた分布を示すものがある。大浦遺跡の中央部発掘区の周辺から石器類が殆んど検出されないことなどからすれば，石器群は限定された占地を示すとすることができる。大浦遺跡の石器群は，出土状況からすれば単一時期の所産ではないが，それほど長期に渡って形成されたとは考えられない。

瀬戸内におけるナイフ形石器文化期は主にナイフ形石器の形状の差を時期差の反映したものとの認識にたち，国府・宮田山・井島の各期に分けられてきた。また一部にはナイフ形石器の小形化を編年対象とする考え方もある。この両者には若干の問題が残る。ナイフ形石器の形状の差異の面では，特に国府型と宮田山型との形態差はそれほど明確なものではない。ナイフ形石器の小形化に関しては，分析対象となった遺跡には立地条件に差があり，等質的な比較とはなっていない。[註3] 単一時期の所産である可能性が高い郡家今城遺跡C地点では大形から小形のナイフ形石器が共存しており，単純に大きさの差を時期差の反映と理解するには問題がある。こうした中で時期的な変遷を考える上で最も有効な手段は，石器群における主流な横長剥片剥取技法の変化であろう。[註4] 横長剥片の剥取技法は，石核素材剥片の剥取工程である第1工程と翼状剥片等の目的剥片を剥取する第2工程に区分される。第2工程では翼状剥片石核のような石核調整を明確に施して限定された一方の作業面から，作業面幅と一致させて剥取することで，一定形状の目的剥片を連続して剥取することを可能とする片面単一剥離技法と，石核調整と目的剥片の剥取の区別が行われず，作業面幅よりも小さい剥片を連続して剥取する技法である交互並列剥離技法，及び両者の中間的な様相で，石核調整部と目的剥片の剥取部の区別はなされるが，目的剥片は作業面よりも小さく，作業面で並列して目的剥片を剥取する片面並列剥離技法に区分される。[註5] 交互並列剥離技法では安定した一定形状の目的剥片は得にくい。[註6] こうした第2工程の目的剥片剥取法と第1工程及び石核素材の利用法を加えて，一連の目的剥片の剥取工程が把握される。こうした技法を最も確認しやすい遺物が石核であり，石核に残る剥離面の観察により，こうした技法差は識別することが可能である。この技法差は瀬戸内技法の変質で理解できるもので，時期的差を反映していると考えられ，石器群の時期を考える上で一つの基準となる。ただし石器製作においては製作者の意

図とは反した偶然性が伴うことから，[註7] 石器群における主要な横長剥片剥取法がどの技法によるものかといった数量的処理が必要となる。

大浦遺跡で出土した横長剥片石核には，片面単一剥離技法・片面並列剥離技法・交互並列剥離技法の3者がいずれも含まれる。ただ片面単一剥離技法による石核は少なく，素材に盤状剥片が用いられず，作業面も素材剥片の打面側に位置しないなど，典型的な翼状剥片石核とすることはできない。同じ備讃瀬戸の与島西方遺跡A地点・羽佐島遺跡では典型的な翼状剥片石核が多数出土している。翼状剥片の形状を充たす剥片がないことも，大浦遺跡の石器群が国府期に属するものではないとすることができよう。また他の横長剥片石核は片面並列剥離技法によるものが1点だけで，交互並列剥離技法による石核が最も多い。また出土状況などからも，大浦遺跡の石器群は国府期よりも後出するものとすることができよう。

出土した横長剥片石核と目的剥片を素材としたナイフ形石器の関係についてみてみる。片面単一剥離技法と片面並列剥離技法による石核に対応するものとして横長剥片素材のA型ナイフ形石器で国府型の系譜上で理解できるもの[註8]を考えている。こうした石核やナイフ形石器の分布がf・g列の15・16グリッドに偏る分布を示すことからも可能性は高い。また交互並列剥離技法による石核の中で特に白色風化サヌカイト質の板状の剥片を素材としたものと，同質の小形切り出し状ナイフ形石器が対応するものであることは前述した。交互並列剥離技法による石核の素材にはサヌカイトの石理面と平行する板状の剥片を素材としたものと，石理が平行せず盤状剥片と類似した素材の使用が考えられる二つの形態が認められる。前者はこれまで未確認だったもので，非常に薄い剥片を素材に用いており，連続して剥片剥取可能かどうかという問題もあった。ナイフ形石器との大きさの比較・剥離角の集計・石理の利用法の検討により，白色風化サヌカイト質の小形切り出し状ナイフ形石器と対応する石核と判定することができた。西方遺跡で大浦遺跡と同様な切り出し状のナイフ形石器が出土しており，同様な石核は備讃瀬戸の遺跡群ではかなり分布すると考えられ，決して大浦遺跡独特のものではないであろう。この石核は石材の材質に強い影響を受けて，もしくは利用して成立したものである。

備讃瀬戸に分布する縦長剥片石核は，その石材の利用法で特徴的なものである。サヌカイトの石理と平行する極めて平坦な面が石核の両側面に位置することを原則とする。石核の小口面を作業面として両設打法により，石刃状の縦長剥片を連続的に剥取するものである。二上山北麓の遺跡群や郡家今城遺跡C地点で検出されたサヌカイト製の縦長剥片や石核は，両設打法によるもので，備讃瀬戸の遺跡群で多量に出土する縦長剥片石核と同一の系譜のものであろう。縦長剥片が郡家今城遺跡C地点で出土することから国府期にナイフ形石器と共存することは確実である。また大浦遺跡出土の石器群に国府期の瀬戸内技法による石器が含まれないことからすれば，国府期以降，瀬戸内でナイフ形石器と共存するものである可能性が非常に高い。また石核素材の面からすれば，白色風化サヌカイト質の縦長剥片石核は，小形切り出し状ナイフ形石器に対応する白色風化サヌカイト質の交互並列剥離石核と共通した素材を用いる。石核素材となった剥片の厚さからすれば，両石核には素材の使い分けも充分考えられる。備讃瀬戸の遺跡群で国府期の石器群を

多く含む羽佐島遺跡や与島西方遺跡A地点でも同質の縦長剥片・縦長剥片石核が多量に検出されている。国府期から小形切り出し状ナイフ形石器の時期まで長期間継続した石器とすることができよう。この質の縦長剥片は二次加工されているものが非常に少ない。ほとんどのものが，縦長剥片の原形をそのまま残す。[註9] 大浦遺跡で4点，西方遺跡で数例，この白色風化サヌカイト質の縦長剥片が基部加工のあるナイフ形石器に転用されているだけである。こうしたあり方は，翼状剥片と国府型ナイフ形石器の比率と比較するとき，非常に特異なものとすることができよう。羽佐島遺跡では翼状剥片と同時に国府型ナイフ形石器が多数出土し，近畿地方西部の遺跡においても同様な傾向が認められる。素材だけが卓越して検出される遺跡はない。[註10] こうした点からすれば白色風化サヌカイト質の縦長剥片はナイフ形石器の素材であることが本来の剥取される目的ではなく，縦長剥片そのものが石器として機能すると考えざるを得ない。

国府期以降長期に渡って横長剥片素材のナイフ形石器と共存するこの縦長剥片は，その形状のままでナイフ形石器として使用可能なものか，もしくは横長剥片素材のナイフ形石器とは別の機能を有して石器群を構成していたと考えられる。国府型ナイフ形石器の素材である翼状剥片は刃器として充分使用可能なものであり，事実刃部に使用痕と考えられる小剥離痕を有するものもかなり認められる。国府型ナイフ形石器はブランティングを施すことで，翼状剥片を左右対称形に近い細身のものとし，尖鋭な先端部を有するように変形させたものである。翼状剥片にはない新しい機能を有する石器としなければならない。その形状からすれば尖頭器的な狩猟具であった可能性が高い。国府型ナイフ形石器が，サヌカイトの産出地で丘陵部に立地する二上山北麓の遺跡群よりも低平な低位段丘上の郡家今城遺跡C地点で比率が高く検出されているのは理解しやすい。

機能的な問題を考える上では国府型やその系譜上に位置付けられるナイフ形石器と縦長剥片との形態上の差が問題となる。ナイフ形石器の素材となる横長剥片は安定した底面を有する石核から剥取されるため，わずかに外湾気味ではあるが安定した刃部相当の縁辺を有する。これに対して縦長剥片は側縁に鋭利な縁辺を有するものでも，ねじれているものが多く，翼状剥片の刃部と比較すると安定性に欠ける。また縦長剥片の先端部は国府型ナイフ形石器ほど尖鋭で安定していないのはもちろんである。縦長剥片は特別にブランティングを施さなくとも，充分背部としての形状を充たす剥片が多い。こうした点からすれば白色風化サヌカイト質の縦長剥片は国府型ナイフ形石器やその系譜上に位置付けられるナイフ形石器と，同様な機能を果たしていたとは考えられず，刃器として用いられていた可能性が高い。備讃瀬戸の遺跡群からナイフ形石器と共に多量に出土するほとんど二次加工を施されない縦長剥片は，明確な機能分化なしには理解できないものであろう。

また白色風化サヌカイト質の縦長剥片の下限については，細石核との関連性が問題となろう。島嶼部出土の明確な細石核は，ハリ質安山岩を多用しており，一部黒曜石や水晶が石材として用いられている。石材の面での明確な差異があることから，細石核と認定しやすいものである。白色風化サヌカイト質の細石核の存在の可能性も考えられてきたが，[註11] 縦長剥片石核と一線を画するほど明確に区分できないままであった。大浦遺跡の縦長剥片石核の剥離痕の幅を集計すると，ハ

リ質安山岩製の細石核の分布と共通する範囲を中心として分布の偏りが認められ，正規分布を示さないということが明らかとなった。ハリ質安山岩製の細石核は，原礫を分割することで石核素材を得ているが，縦長剥片石核にも，板状の剥片を縦方向に分割して得られた剥片を素材とする石核が存在する。また素材の活用法においても細石核で縦長剥片状の剥片を素材とし，その主要剥離面を打面として細石刃を剥取するものが２点出土しているが，縦長剥片石核でＣ型としたものはこれと共通する素材の用い方を採用している。ただし白色風化サヌカイトとは異なり，石理が明確でないサヌカイトを石材として，両面加工品を素材とする細石核が羽佐島遺跡から出土している。スキースポールや断面三角形の両面加工のスポールも検出されていることからすれば，湧別技法による細石核と非常によく類似したものである。[註12] 剥片剥取法は石材の材質にかなり規制される。板状の剥片を素材とした縦長剥片石核は，石理の明確な白色風化サヌカイトの材質を非常に有効に利用したものであり，そのまま細石核の時期まで継続する可能性は否定できない。大浦遺跡よりも限定された時期の石器群等でその関係を追求していく必要があろう。

大浦遺跡の成果の一つとして，サヌカイト以外の石材を用いた縦長剥片素材のナイフ形石器に代表される非瀬戸内的な石器群の検出がある。[註13] ナイフ形石器の石材には黒曜石・流紋岩・ハリ質安山岩・サヌカイトなどが使用されている。このうちサヌカイト以外の石材は備讃瀬戸の遺跡群では，国府型ナイフ形石器に代表される瀬戸内技法系の石器に，流紋岩が極一部使用されているだけで他は全く使用されていない。また縄文時代以降もほとんど石材として用いられていないこれらの石材は他地域からの搬入品である可能性が高い。[註14] ハリ質安山岩・流紋岩を石材とする縦長剥片石核でＣ・Ｄ型に属するものが出土しているが，これも非瀬戸内的なものと考えられる。[註15]

大浦遺跡の石器群の一部と非常に共通した石器組成を示す石器群として，大分県の岩戸遺跡の第１文化層が[註16]ある。この第１文化層の石器群には瀬戸内系の石器も認められ，比較する上で絶好の遺跡とすることができよう。器種別に比較する。第１文化層のナイフ形石器には縦長剥片素材のものと横長剥片素材のものがある。縦長剥片素材のナイフ形石器では，一側縁加工のものと共部加工のあるものが多く，一部二側縁加工のものが含まれ，大形から小形のものまである。この様相は大浦遺跡の縦長剥片素材のナイフ形石器と共通する。また横長剥片素材のナイフ形石器では国府型ナイフ形石器の系譜で理解できるものが第１文化層で出土している。ただ底面の加撃方向が異なる。このナイフ形石器の接合資料では，典型的な翼状剥片石核に認められる石核素材の利用方法とは異なり，素材の打面側に作業面が位置しない。[註17] これも大浦遺跡と共通するものである。また縦長剥片石核では大浦遺跡でＣ・Ｄ型として分類したものが第１文化層に存在し，横長剥片石核では前述したものの他，片面並列剥離石核や交互並列剥離石核が認められる。また第１文化層で三稜尖頭器として分類されている石器は備讃瀬戸の遺跡群では舟底形石器と呼んでいるものと同一の石器である。[註18] ただ瀬戸内地方の舟底形石器には第１文化層の三面加工の三稜尖頭器が少なく，大浦遺跡にも三面加工のものは含まれない。ただし同じ備讃瀬戸の与島西方遺跡Ｃ地点[註19]からは三面加工のものが出土している。岩戸遺跡の第１文化層と大浦遺跡の石器群の一部は著しく類似しており，共通した時期を含む石器群であると考えられる。両遺跡の石器群のあり方

は両地域の交流を示す絶好の資料とすることができよう。

岩戸遺跡の第1文化層の石器群のほとんどは大浦遺跡の石器群に認められるが，大浦遺跡には第1文化層には認められない石器がある。これは遺跡の継続時期の差と考えられ，第1文化層よりも大浦遺跡の方が新しい時期まで存続している可能性が高い。大浦遺跡の石器群の出土状況には若干の分布の差異が認められることからも，時期的な継続は考えられる。

ナイフ形石器をみると岩戸遺跡第1文化層には小形の切り出し状ナイフ形石器が含まれない。また，両面加工の木葉形尖頭器も第1文化層には認められない。こうした点からすれば大浦遺跡の石器群は細石器文化期も含めると3期に区分することができよう。これまで石材の共通性から小形切り出し状ナイフ形石器や交互並列剥離石核と細石刃・細石核が併存する可能性を考えてきたが，大浦遺跡の資料でそれ以前の時期に黒曜石・ハリ質安山岩といったサヌカイト以外の石材が使用されていることが判明した。ただハリ質安山岩といっても縦長剥片素材のナイフ形石器と細石刃・細石核に使用されている石材には若干の差異[註20]があり，今後岩石的にも追求していく必要がある。ただ大浦遺跡の細石刃・細石核の分布と小形切り出し状ナイフ形石器の分布には差があることなど，積極的に両者の共存関係を指摘することは現状ではできないであろう。

岩戸遺跡第1文化層のナイフ形石器の様相からしても，縦長剥片素材のナイフ形石器は瀬戸内系の石器とは考えられず，大浦遺跡の白色風化サヌカイト質の縦長剥片素材のナイフ形石器は国府期以前のものではない。また第1文化層と非常によく類似した流紋岩製のC型の縦長剥片石核が大浦遺跡から出土しており，大浦遺跡には石理を有効に利用したサヌカイト製の板状の剥片を素材とするC型の縦長剥片石核も存在する。備讃瀬戸の遺跡から多量に出土する縦長剥片は，こうした岩戸遺跡第1文化層の状況からしても国府期以降継続する石器とすることができよう。

関東地方でも埼玉県の殿山遺跡や神奈川県の柏ケ谷長ヲサ遺跡で国府型ナイフ形石器の要素を充分充たすナイフ形石器が検出されている。[註21]柏ケ谷長ヲサ遺跡の国府型ナイフ形石器は相模野台地の第Ⅲ期に編年されており，武蔵野台地の第Ⅱa期と併行すると位置付けられている。殿山遺跡も同時期と考えられている。関東地方の第Ⅱa期は基部加工のナイフ形石器と角錐状石器などに特徴付けられる。大浦遺跡出土の縦長剥片素材のナイフ形石器で基部加工のナイフ形石器が存在し，他の縦長剥片素材のA型のナイフ形石器も基部に素材となった縦長剥片の打点を残すものであり，素材の主要剥離面の加撃方向側に先端部が位置するようなナイフ形石器は検出されていない。この特徴は岩戸遺跡の第1文化層にも共通したものである。関東地方では武蔵野台地の第Ⅱa期やそれと併行する時期をはさんで，折断手法が顕著ないわゆる茂呂型ナイフ形石器が盛行するとされる。九州地方においても大分県の津留遺跡[註22]や佐賀県下の遺跡で茂呂型と類似した二側縁加工の折断手法が顕著なナイフ形石器が出土している。[註23]こうした地域に狭まれた瀬戸内地方の大浦遺跡での縦長剥片を素材としたナイフ形石器に折断手法が認められない点からすれば，大浦遺跡の縦長剥片素材のナイフ形石器は比較的限定された時期の所産である可能性が高く，同時期と考えられる横長剥片を素材とするA型ナイフ形石器や舟底形石器などともに，武蔵野台地の第Ⅱa期の新しい段階に併行するものと考える。小形の切り出し状ナイフ形石器は武蔵野台地の第Ⅱa期には

存在するが，岩戸遺跡の第１文化層にないことから第Ⅱｂ期に伴うものである可能性が高い。

ここで問題となるのが姶良火山灰層との関係である。岩戸遺跡の第１文化層は姶良火山灰層の直上から出土していると考えられている点である。現在のところ国府型ナイフ形石器に代表される国府期の石器群が姶良火山灰層よりも下位での検出例がない。関東地方の殿山遺跡や柏ケ谷長ヲサ遺跡で検出された国府型ナイフ形石器は形状からすれば典型的なもので国府期の瀬戸内の旧石器文化の影響下の所産であると考えざるを得ない。ただ瀬戸内地方の旧石器遺跡の中心地である近畿地方西部や備讃瀬戸では降下火山灰層とかんだ石器群の検出例がなく積極的な先後関係についての資料的な不備があるが，中心地では他よりもより先行する可能性は否定できないであろう。また岩戸遺跡の姶良火山灰層との関係においても，第１文化層は姶良火山灰層堆積時以降とすることはできても，直後の時期と位置付けられるまでは至っていないと考える。関東地方の石器群の様相から大浦遺跡の石器群は姶良火山灰層形成期より，後出する第Ⅱａ期の新しい段階に比定しても何ら問題ではない点も，岩戸遺跡の第１文化層の時期は問題となる。岩戸遺跡の姶良火山灰層堆積後の層位形成期の実年代的な把握や層位残存度の検証等の伸展が期待される。

大浦遺跡の石器群は備讃瀬戸の島嶼部の遺跡においても決して特殊なあり方ではなく，羽佐島遺跡・西方遺跡・花見山遺跡においても共通した様相を呈する石器群が出土している。大浦遺跡の石器群のあり方は，それらがより限定された石器群として出土したことに資料的な価値があると考えられる。出土した石器群を分析してきたが，今後検証していくべき課題も多い。大浦遺跡の様相を一つの視点として，遺物量の多い島嶼部の西方・羽佐島両遺跡やサヌカイトの産出地に立地する城山・国分台遺跡の石器群を検討していきたいと考えている。

註

1. 後述する片面単一剥離技法による石核や目的剥片及びそれを素材とするナイフ形石器に代表される時期
2. 縦長剥片素材のナイフ形石器は，郡家今城遺跡Ｃ地点や鶴峯荘第１地点で出土しており，国府期にも存在することが知られている．ただし量的には非常に少ない．郡家今城遺跡Ｃ地点のものは基部加工のナイフ形石器ではあるが，素材の面では連続的に剥取された縦長剥片を用いているか疑問が残り，基部加工も背腹両面に及ぶなど独特のものである．鶴峯荘第１地点のものは，二側縁加工の幅広の大形のものであり，大浦遺跡の縦長剥片素材のナイフ形石器とは様相を異にする．国府期以降につながるものか疑問が残る．いずれにしても主要な形態ではない．冨成哲也・大船孝弘『郡家今城遺跡発掘調査報告書』　1976　高槻市教育委員会，松藤和人「近畿西部・瀬戸内地方におけるナイフ形石器文化の諸様相」『旧石器考古学』21　1980
3. 香川県下の国分台・城山遺跡では，大形のナイフ形石器が採集されているが，両遺跡ともサヌカイトの産出地に立地する遺跡である．小形のナイフ形石器が中心となる島嶼部の遺跡はサヌカイトの産出地ではない．島嶼部の遺跡からも量的には少ないが国分台・城山遺跡から出土するナイフ形石器と差のない大形のナイフ形石器が出土している．竹岡俊樹「瀬戸内海地方における石器群の変遷 ― 瀬戸内技法複合の遺物の大きさに関する分析」『旧石器考古学』21　1980
4. ナイフ形石器の形状の差を時期差の反映したものとする認識の背景には，剥片剥取技法の変化がかなりの比重を占める．剥片剥取技法の理解には素材変形度の高いナイフ形石器よりは，接合資料や石核の方が適している．備讃瀬戸の遺跡では遺物量も多く，個体識別が困難なサヌカイトを石材とすることから，接合資料を検出し得る可能性は低い．石核を中心として目的剥片やナイフ形石器で補い，剥片剥取法を明確化し，それを編年対象化した方が現状では有効と考える．
5. 第２工程の目的剥片の剥取法を類型化し，3区分した．典型的な翼状剥片石核は片面単一剥離技法によっている．
6. 目的剥片の剥取法は，主に目的剥片を素材とするナイフ形石器の製作法に規定されると考える．小形の切り出し状ナイフでは二次加工による素材の変形度が高く，素材の形状には国府型ナイフ形石器ほどの厳密さ

は要求されない．形状がそれほど整わない横長剝片を多量に剝取する交互並列剝離技法は，素材変形度が高い小形切り出し状ナイフ形石器の素材剝片を剝取する技法として合理的なものである．

7. 目的剝片を剝取する際のミスで，片面単一剝離技法による場合でも石核幅と一致しない剝片が生じる場合がある．作業面に残る剝片剝離痕の加撃方向で，判別し得る場合もあるが，いずれか不明のものも存在する．ただこれらは量的に処理することで，どの剝取技法に近いものかは判別することが可能と考える．

8. ナイフ形石器は素材の変形度が高く，それほど厳密に剝片剝取法を特定することはできない．瀬戸内技法の変質で技法の変遷を理解する上では，国府型ナイフ形石器に形態が近いものは，片面単一剝離技法や片面並列剝離技法による可能性が高い．

9. 郡家今城遺跡Ｃ地点でチャート製の縦長剝片は，一部がエンド・スクレイパーに転用されている以外は，他の石器に素材として利用されていないことや，桜ケ丘第１地点で「多量の石刃あるいは縦長剝片の存在にもかかわらず，ナイフ形石器の素材には全く供されていないという事実……」（点線筆者，松藤和人1980註２）なども備讃瀬戸の縦長剝片の様相と共通する．

10. ただし，石材の産出地では翼状剝片の比率が高く，逆に産出地から離れた郡家今城遺跡では国府型ナイフ形石器の比率が高い．産出地に立地する遺跡で代表的な遺跡に二上山麓の鶴峯荘第１地点（同志社大学旧石器文化談話会『ふたがみ』1974　学生社）においてもナイフ形石器と翼状剝片の比率は１：７である．郡家今城遺跡ではほぼ同数出土している．備讃瀬戸における白色風化サヌカイト質の縦長剝片とそれを素材とするナイフ形石器の比率と比較すると全く様相が異なる．島嶼部出土の白色風化サヌカイト質の縦長剝片素材のナイフ形石器は，異石材質の縦長剝片素材ナイフと共通した基部加工によるものであり，郡家今城遺跡Ｃ地点や鶴峯荘第１地点の縦長剝片素材のナイフ形石器とは異なる．異石材質の縦長剝片素材のナイフ形石器の影響で，白色風化サヌカイト質の縦長剝片素材のナイフ形石器が出現した可能性も充分ある．今後国府期に伴う縦長剝片素材のナイフ形石器の様相を追求していく必要がある．

11. 西村尋文「中部瀬戸内地域における細石刃生産技術の検討」『旧石器考古学』26　1983

12. 渡部明夫「彫器」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ　羽佐島遺跡(Ⅰ)』1984 香川県教育委員会

13. 註２・10参照

14. 黒曜石・ハリ質安山岩・流紋岩については香川県下では産出地が確認されていない．ハリ質安山岩は，類似した石材が坂出市の五色台の西麓や城山北麓で採集されるが，非常にもろい材質のもので，色調等も異なる．

15. 国府期に属する遺跡から検出された例がない．また大浦遺跡のサヌカイト製縦長剝片石核の大半がＡ・Ｂ型のものであり，Ｃ型のものが１点で，Ｄ型は出土していない．Ａ・Ｂ型の石核から派生して，Ｃ・Ｄ型が生じたとするよりは，流紋岩製のＣ型の影響でサヌカイト製のＣ型縦長剝片石核が出現したと考える方が現状では妥当であろう．

16. 芹澤長介・柳田俊雄『岩戸』1978　東北大学文学部考古学研究会

17. 郡家今城遺跡Ｃ地点出土の翼状剝片石核の中に１点，石核素材の盤状剝片の側面部を作業面とするものがあるが，連続して剝片剝取を行ったとは考えにくく例外的なものであろう．また備讃瀬戸の島嶼部から出土した翼状剝片石核には盤状剝片の末端部を作業面として利用しているものがあるが，これは作業面が転移したものであり，当初の作業面は素材の打面側に位置する．また背面に盤状剝片の打面を残すファースト・フレイク素材のナイフ形石器も数多く出土している．典型的な翼状剝片石核は，片面単一剝離技法に加えて，素材の打面側に作業面が位置するものとすることができよう．

18. 舟底形石器には断面が台形状のものと三角形状を呈するものの２種類がある．岩戸遺跡第１文化層中の三稜尖頭器は断面三角形の舟底形石器と共通する．

19. 竹下和男・森本義臣・坂口淳子「Ⅱ　与島西方遺跡の調査（C_2地区）」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』Ⅴ　1982　香川県教育委員会

20. 縦長剝片素材のナイフ形石器に使用されているハリ質安山岩は，細石刃・同石核に多用されるものと比較すると，やや粗質で光沢が少ない．

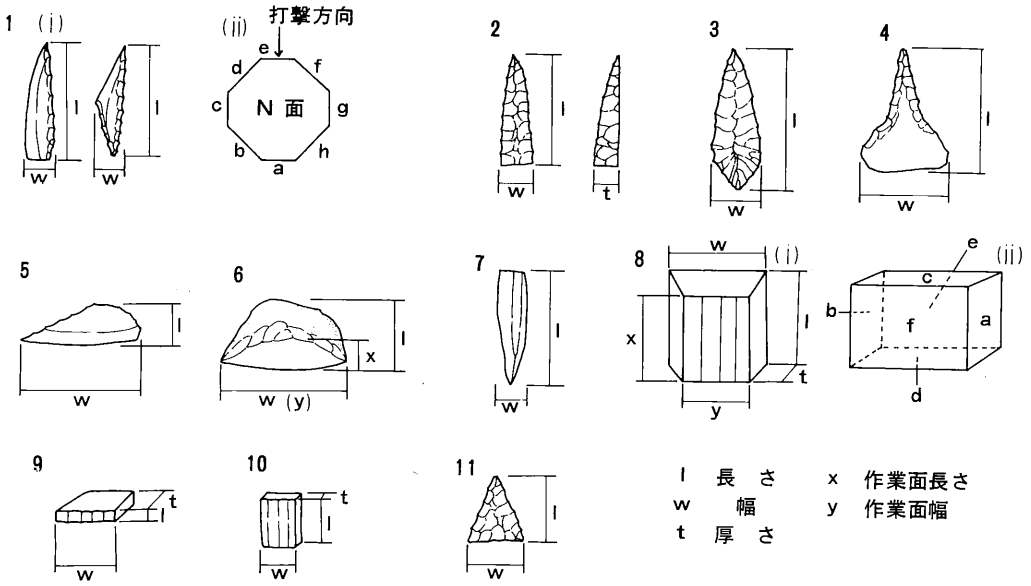
21. 荒井幹夫・中村喜代重他「第１部　南関東各地域における研究の現状と問題点」『神奈川考古』16　1983 神奈川考古同人会

22. 清水宗昭『津留遺跡発掘調査概報』1981　大分県教育委員会

23. 九州旧石器研究会編『第６回九州旧石器研究会　テーマ：ナイフ形石器文化期』　1982

遺物観察表の表記法

1. 器種毎に観察項目を設定し，略号により表記した。
2. 計測値位置及び部位の表記について
   (1) 計測値は第181図に掲載した以外の器種は，石器の長軸方向を長さ，短軸方向を幅として計測した。
   (2) ナイフ形石器の刃部・ブランティング部位については，第181図1(ii)による。
   (3) 縦長剝片石核・細石核は，石器を直方体と見なして，第181図8(ii)によってあらわす。



1 ナイフ形石器　2 舟底形石器　3 尖頭器　4 石　錐　5 横長剝片
6 横長剝片石核　7 縦長剝片・細石刃　8 縦長剝片石核・細石核　9 打面再生剝片
10 作業面再生剝片　11 石　鏃

第181図 石器計測基準図

3. 片材略号

サ：サヌカイト　ハ：ハリ質安山岩　硬ハ：硬質ハリ質安山岩　流：流紋岩　黒：黒曜石
チ：チャート　水：水　晶　砂：砂　岩　片岩：結晶片岩

4. 他の略号など
   (1) 本文中に略号を記述しているものは省略する。
   作：作業面，打：打面，截：截断面，折：折れ面，分：素材の分割時に生じた面，F：石理と平行する極めて平坦な面，N：ネガティブな面，P：ポヂティブな面，自：自然面，平：平坦な面，尖：尖った縁辺，調：調整
   (2) 各器種の観察表の部位の項目で，以下にあげる略号はその部位が形成される際の打撃方向をあらわす。
   作・打・右・左・底・背
   ただし，「截断面ある石器」の観察表では，“截”と記しているものも打撃方向をあらわしている。
   (3) 横長剝片石核の技法
   A：片面単一剝離技法　B：片面並列剝離技法　C：交互並列剝離技法　D：平坦打面
   (4) スクレイパーの刃部形成
   a・b：片面加工によるもので，aはほぼ平行する背腹面に，bは角度を有して交わる縁辺に刃部を形成したもの　c・d：両面加工によるもので，cは片方の加工が素材の一方の面に平行し，dは平行しないもの

第 4 表　ナイフ形石器観察表

No.	図番号	写真図版	出土グリッド遺物番号	石材	素材	残存		計測値				打点と刃部関係	ブランティング		形態	先端部	基部	断面形	使用痕	備考
						度	部	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)		部位	加撃方向						
1	41	15- 5	d14- 23	流	縦長剥片	完		8.65	1.77	0.98	13.6	f g h	c d	P	A	a 尖	e 方	三	有	
2	51	15- 2	d15- 79	サ	縦長剥片	完		2.72	0.97	0.40	1.0	b c g h	d f	P	B	a 尖	e 方	台	−	風化度高・F面有・打点・F面残存
3	52	15- 4	d15-124	黒	縦長剥片	完		3.28	1.08	0.76	3.0	f g h	b d	P	B	a 尖	e 方	台	−	良質黒曜石・打点残存
4	64	15- 3	d16-138	サ	横長剥片	少	先	2.28	0.90	0.58	0.9	b	d e f	P•N	C	c 尖	g 尖	三	−	折損部を利用した完形とも
5	65	15- 1	d16- 94	サ	横長剥片	完		7.51	3.47	1.50	36.0	a b h	c d e f	P	A	g 尖	c 方	台	有	腹面にも調整痕
6	74	25- 1	e 9- 2	サ	縦長剥片	半	基	3.34	1.23	0.65	3.4	c f g	d	P	B	欠	e 方	三	有	硬質ハリ質安山岩とも
7	104	25- 2	e10- 27	サ	横長剥片	完		1.51	0.86	0.31	0.3	a h	bcdefg	P	C	g 尖	c 尖	三	−	非常に小形
8	147	25- 3	e11-128	サ	横長剥片	完		4.26	2.30	0.87	7.5	a	c d f g	P•N	D	a 方	e 尖	台	−	風化度高
9	153	25- 4	e12- 68	サ	縦長剥片	完		9.89	2.28	1.09	24.9	bcdfg	d f h	P	B	a 尖	e 方	台	有	硬質ハリ質安山岩とも，打点・自然面残存
10	154	25- 5	e12-134	サ	縦長剥片	完		5.71	1.69	0.78	7.4	c f g h	b d e	N	B	a 尖	e 尖	三	−	風化度高，F面有，やや不安定
11	155	26-14	e12-101	黒	縦長剥片	完		2.58	1.24	0.72	1.7	g h	b c	P	A	a 尖	f 方	三	有	シマ状黒曜石，自然面残存
12	181	25- 6	e13-111	サ	縦長剥片	完		8.08	2.19	1.29	18.7	f g	h	P	B	a 尖	e 方	三	−	粗質のサヌカイト・折損した剥片素材
13	197	25- 7	e14- 63	サ	横長剥片	完		2.40	1.60	0.55	1.9	b d	e f g h	P	C	c 尖	g 尖	台	−	風化度高
14	207	25- 8	e14-175	サ	横長剥片	完		3.95	1.82	0.53	3.8	a b	defgh	P•N	A	欠	g 方	三	−	風化度高，F面有
15	208	25- 9	e14-215	サ	横長剥片	完		4.04	1.21	0.54	2.2	a	bdefh	P	A	c 尖	g 方	三	−	風化度高
16	209	26- 1	e14-302	サ	横長剥片	完		2.43	1.11	0.41	1.1	a h	b c d e	P•N	C	g 尖	c 方	三	−	風化度高，F面有
17	210	26- 2	e14-303	サ	横長剥片	少	基	2.00	0.97	0.58	1.1	a	c d e	P	A	欠	c 尖	三	−	風化度高，F面有
18	211	26- 3	e14-333	サ	横長剥片石核	完		4.22	2.39	1.25	9.9	−	−	−	A	尖	方	四	−	交互並列剥離石核転用，先端・基部にブランティング
19	212	26- 4	e14- 84	サ	−	完		4.15	1.19	0.72	2.5	−	−	−	−	尖	尖	台	−	風化度高F面有，折損した剥片素材
20	213	26- 5	e14- 81	サ	横長剥片	完		2.59	1.75	0.28	1.2	b d	h	P	E	c 尖	g 方	台	−	風化度高，打点残存
21	245	26- 6	e15- 67	サ	横長剥片	完		2.09	1.05	0.52	1.0	a g h	bcdef	P•N	C	g 尖	c 尖	三	−	風化度高，F面有
22	246	26- 7	e15- 91	サ	横長剥片	完		2.49	1.31	0.36	1.1	a b d	e h	P	E	c 尖	g 方	三	−	風化度高，F面有
23	247	26- 8	e15-133	サ	横長剥片	完		2.48	1.30	0.45	1.0	a h	e	N	C	尖	尖	三	−	折損した剥片素材
24	248	26- 9	e15-176	サ	−	完		2.54	1.56	0.34	1.6	−	−	N	D	平	尖	三	−	風化度高，F面有
25	249	26-10	e15-195	サ	横長剥片	完		2.43	1.23	0.46	1.2	b	e f h	P	C	c 尖	g 尖	三	−	風化度高，折損した剥片素材
26	291	26-11	e16- 62	サ	横長剥片	完		3.89	2.24	0.75	5.9	b d	e h	N	E	欠	g平鋭	台	−	風化度高，F面有
27	292	26-12	e16- 63	サ	縦長剥片	完		2.12	1.18	0.54	1.2	b c	d e f	P•N	C	a 尖	e 尖	三	−	風化度高，F面有・打点残存

No	図番号	写真図版	出土グリッド遺物番号	石材	素材	残存		計測値				打点と刃部関係	ブランティング		形態	先端部	基部	断面形	使用痕	備考
						度	部	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)		部位	加撃方向						
28	298	26-13	e16- 362	サ	横長剥片	完		3.84	2.74	0.69	5.4	b d	e h	P•N	E	c 尖	g 尖	台	−	石錐とも
29	354	62- 1	f11- 33	サ	横長剥片	完		3.17	2.40	0.71	4.4	b c d	e h	N	D	c 方	g 尖	三	−	
30	355	65- 1	f11- 45	黒	縦長剥片	完		2.37	1.28	0.61	1.2	b c g h	d e f	P•N	B	a 尖	e 方	三	有	シマ状黒曜石，打点残存
31	368	62- 3	f12- 112	サ	横長剥片	完		3.30	1.24	0.49	1.8	a b	d e f	N	A	c 尖	g 方	台	有	階段状剥離剥片素材
32	369	62- 2	f12- 100	サ	横長剥片	完		2.91	1.39	0.47	2.0	a	c d e f g	P•N	A	g 方	c 方	台	−	階段状剥離剥片素材
33	374	62- 4	f13- 175	サ	横長剥片	完		3.34	1.70	0.95	4.3	a b h	e	N	A	c 尖	g 方	台	−	ファーストフレイク素材
34	388	65- 2	f13- 445	黒	縦長剥片	完		2.49	1.18	0.45	1.2	b c d	f g h	P	A	a 尖	e 方	台	−	シマ状黒曜石，打点残存
35	389	65- 3	f13- 457	黒	縦長剥片	完		1.48	0.83	0.52	0.5	b c g h	d	P	B	−	e 方	三	−	シマ状黒曜石，打点残存
36	399	62- 5	f14- 132	サ	横長剥片	完		5.02	2.56	0.82	8.8	f g	a b c d e	P•N	C	g 尖	c 尖	三	−	風化度高，F面有
37	400	62- 6	f14- 159	サ	横長剥片	完		2.64	1.27	0.54	1.7	d	a e h	P	C	c 尖	g 尖	三	−	折損した剥片素材
38	401	62- 7	f14- 174	サ	横長剥片	完		2.23	1.16	0.45	1.2	a	b e f	P	C	g 尖	c 尖	台	−	風化度高，F面有
39	412	62- 8	f14- 312	サ	縦長剥片	完		2.56	1.16	0.43	1.1	b	d e f g h	P	C	a 尖	e 方	台	−	打点残存
40	420	62- 9	f15- 278	サ	横長剥片	完		2.95	1.49	0.57	2.3	d	e h	P•N	C	c 尖	g 方	−	有	ややいびつな剥片素材
41	431	62-10	f15- 410	サ	横長剥片	完		3.82	1.46	0.51	1.9	h	a b d e	N	E	g 尖	c 方	三	−	風化度高，F面残存
42	432	63- 1	f15- 553	サ	縦長剥片	完		2.92	1.53	0.49	1.4	b h	d e f	N	B	a 尖	e 尖	三	−	風化度高
43	433	63- 2	f15- 581	サ	横長剥片	半	中	2.34	1.30	0.89	2.5	a	e	P	A	−	−	−	−	風化度高，先端基部とも折損
44	434	63- 3	f15- 611	サ	横長剥片	完		2.79	1.18	0.44	1.3	a b h	d e f	N	A	g 尖	c 方	三	−	風化度高，F面残存
45	435	63- 4	f15- 664	サ	横長剥片	完		3.21	1.60	0.52	3.4	b	d e f	P	A	c 尖	−	台	−	折損した剥片素材
46	436	63- 5	f15- 792	サ	横長剥片	完		2.44	1.73	0.44	1.9	b d	e f g	P	E	c 尖	g 尖	台	−	石錐とも
47	437	63- 6	f15- 990	サ	横長剥片	少	先	2.85	1.65	0.96	3.3	a	e f	P	A	g 尖	−	台	−	
48	438	63- 7	f15-1099	サ	横長剥片	完		3.85	1.66	0.39	2.3	d	e f	P•N	C	c 尖	g 尖	台	−	風化度高，階段状剥離した剥片素材
49	439	63- 8	f15-1144	サ	横長剥片	完		3.15	1.57	0.40	1.7	h	d e	P	C	g 尖	c 尖	台	−	折損した剥片素材
50	440	63- 9	f15-1153	サ	横長剥片	完		2.96	1.56	0.43	1.6	b d	e f h	N	E	c 尖	g 方	台	−	打点残存
51	441	64- 1	f15-1239	サ	横長剥片	完		2.49	1.46	0.34	1.2	h	b c d e	P	C	c 方	g 尖	台	−	風化度高，F面残存
52	442	65- 4	f15- 622	黒	縦長剥片	完		3.94	1.13	0.58	1.7	b c g	d e f h	P•N	B	a 尖	e 方	三	−	シマ状黒曜石，打点残存
53	476	63-10	f15-1191	サ	縦長剥片	完		5.18	1.92	1.13	9.0	b c g h	d e f	P	B	−	e 尖	三	−	風化度高
54	519	64- 2	f16- 36	サ	横長剥片	完		2.50	1.53	0.43	1.6	a b	d e f g	P•N	C	a 尖	e 方	三	−	

No.	図番号	写真図版	出土グリッド遺物番号	石材	素材	残存		計測値				打点と刃部関係	ブランティング		形態	先端部	基部	断面形	使用痕	備考
						度	部	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)		部位	加撃方向						
55	526	64- 3	f 16- 985	サ	横長剝片	完		5.97	1.68	1.05	8.8	a	d e f	P	A	c 尖	g 方	台	−	背面に加撃方向が集中しないN面が3面認められる。基部自然面
56	527	64- 6	f 16- 404	サ	横長剝片	半	中	4.95	2.80	1.02	8.9	a	d e f	P	A	−	−	三	有	
57	528	64- 4	f 16- 216	サ	横長剝片	完		4.41	2.04	1.19	8.1	b	d e f a	P	A	c 尖	g 方	三	−	底面が2面からなる
58	529	64- 5	f 16- 356	サ	横長剝片	完		3.56	1.30	0.86	3.7	a	d e	P	A	c 尖	g 方	三	−	粗質のサヌカイト
59	530	64- 7	f 16- 385	サ	横長剝片	完		3.59	1.61	0.50	2.2	b	e h	N	C	c 尖	g 尖	三	−	風化度高
60	531	64- 8	f 16-1104	サ	横長剝片	完		2.89	1.78	0.51	2.1	h	b c d e	P•N	C	g 尖	c 尖	台	−	風化度高，F面残存
61	592	102- 1	g 9- 34	黒	縦長剝片	完		2.24	1.23	0.39	0.9	b c d	f g h	P•N	B	a 尖	e 方	三	有	良質黒曜石，打点残存
62	604	97- 2	g 12- 32	サ	横長剝片	完		2.37	1.40	0.69	2.3	h	e f h	P	C	g 尖	h 方	台	−	折損した剝片素材
63	605	97- 3	g 12- 142	サ	縦長剝片	完		3.43	1.17	0.30	2.3	g h	f	P	B	a 尖	e 方	台	有	風化度高，A型とも
64	616	97- 4	g 13- 1	サ	縦長剝片	完		4.40	1.63	0.44	3.2	b c g h	d e f	P	B	a 尖	e 方	台	−	打点残存
65	628	97- 5	g 13- 372	サ	縦長剝片	完		3.57	1.74	0.55	2.8	b c g h	f	P	B	a 尖	e 方	台	−	硬質ハリ質安山岩とも
66	645	97- 7	g 14- 94	サ	横長剝片	完		4.26	1.58	1.01	6.2	a	d e f	P	A	g −	c −	台	有	基部は折損部利用
67	646	97- 6	g 14- 39	サ	横長剝片	完		3.20	1.07	0.51	1.6	a b d	e f g h	P•N	A	c 尖	g 尖	三	−	両面加工ぎみの調整
68	647	101- 1	g 14- 119	ハ	縦長剝片	完		6.11	2.04	0.75	6.6	b c g	d e f h	P	B	a 尖	e 方	台	−	
69	648	97- 8	g 14- 122	サ	横長剝片	完		4.53	2.00	0.58	3.6	a	d e g	P•N	C	c 尖	g 尖	三	−	風化度高，F面有
70	649	97- 9	g 14- 151	サ	縦長剝片	完		3.78	2.07	0.61	3.9	b h	d e f	P•N	B	a 尖	e 方	三	−	打点残存，C型とも
71	650	101- 2	g 14- 136	ハ	縦長剝片	完		1.65	1.26	0.46	0.7	b c d	g h	P	A	a 尖	e 方	三	−	
72	651	102- 2	g 14- 78	黒	縦長剝片	完		1.95	0.94	0.51	0.7	c h	e f	P	B	a 方	e 尖	三	−	シマ状黒曜石
73	660	97-11	g 14- 352	サ	横長剝片	完		2.80	1.14	0.51	1.7	b h	d e f g	P	A	a 尖	e 方	三	−	風化度高，F面有 ややいびつな剝片素材
74	661	98- 1	g 14- 472	サ	横長剝片	完		3.61	1.45	0.70	3.0	b d	d e f g h	P•N	E	c 尖	g 方	三	−	
75	662	97-10	g 14- 188	サ	横長剝片	完		2.79	1.44	0.68	2.4	f h	a b d e	P	C	g −	c 方	三	−	打点残存
76	663	102- 3	g 14- 320	黒	縦長剝片	完		4.25	1.32	0.45	2.0	c d g	b e f	P	B	a 尖	e 方	台	−	良質黒曜石
77	664	102- 4	g 14- 457	黒	縦長剝片	完		3.37	1.41	0.58	2.5	c g	d e f h	P	B	a 尖	e 方	三	有	シマ状黒曜石，打点残存
78	699	98- 2	g 15- 85	サ	横長剝片	完		2.67	1.86	0.58	2.0	a b h	d e	P•N	A	c 尖	g 尖	台	−	
79	700	98- 3	g 15- 99	サ	横長剝片	半	基	2.73	1.76	0.44	2.7	−	a b d e	P•N	−	g −	c 尖	台	−	風化度高，F面有
80	701	98- 4	g 15- 253	サ	横長剝片	完		5.98	2.41	1.33	15.7	a h	e f	P•N	A	c 尖	g 方	三	−	風化度高，F面有
81	724	98- 5	g 15- 603	サ	横長剝片	半	先	2.96	1.57	0.86	3.2	a b	d e	P	A	c 尖	g −	三	−	風化度高，折損面にブランティング

No.	図番号	写真図版	出土グリッド遺物番号	石材	素材	残存度	残存部	計測値 長(cm)	計測値 幅(cm)	計測値 厚(cm)	計測値 重(g)	打点と刃部関係	ブランディング 部位	ブランディング 加撃方向	形態	先端部	基部	断面形	使用痕	備考
82	725	98- 6	g15- 624	サ	横長剝片	完		2.25	1.26	0.43	1.1	b h	d e f	P•N	C	c 尖	g 尖	台	−	風化度高，形状がいびつ
83	726	98- 7	g15- 657	サ	横長剝片	完		2.25	1.31	0.40	1.3	c	a h	P	D	c 方	g 尖	台	−	折損した剝片を利用
84	727	98- 8	g15- 664	サ	横長剝片	完		2.94	1.47	0.60	2.0	a c	e g h	P	E	c 尖	g 尖	三	−	打点残存
85	728	98- 9	g15- 716	サ	縦長剝片	完		4.33	1.72	0.79	5.4	h	d e f	P•N	B	a 尖	e 方	三	−	風化度高，C部にF面
86	729	98-10	g15- 807	サ	横長剝片	完		3.12	1.54	0.56	1.9	b c d	e f h	P•N	E	c 尖	g 方	三	−	風化度高
87	730	99- 1	g15- 972	サ	横長剝片	完		3.00	1.71	0.51	2.2	c d	a e f h	P•N	C	c 尖	g 尖	三	−	
88	731	99- 2	g15-1071	サ	横長剝片	完		3.13	1.34	0.51	2.0	a b c d	e f h	P•N	E	c 尖	g 尖	四	−	風化度高，素材は階段状剝離，F面有
89	732	99- 3	g15-1083	サ	縦長剝片	完		3.00	1.76	0.42	2.4	b c d	f g h	P•N	A	a 尖	e 方	三	−	風化度高，F面有
90	733	101- 4	g15- 891	ハ	縦長剝片	完		3.01	1.24	0.60	2.3	a h	f g	P	B	a 尖	e 方	三	−	F面有
91	734	101- 3	g15- 557	ハ	横長剝片	少	基	2.21	1.79	0.92	2.6	−	b c d	P	−	g −	c 尖	台	−	
92	801	99- 4	g16- 18	サ	縦長剝片	完		2.19	1.24	0.39	0.8	b h	c d e f	P	B	a −	e 尖	三	−	
93	802	99- 5	g16- 119	サ	縦長剝片	完		2.81	1.63	0.42	1.8	a b h	d f	P	B	a 尖	e 尖	三	−	風化度高，F面有
94	803	99- 6	g16- 129	サ	縦長剝片	完		3.60	1.49	0.44	2.1	a b c h	d f	P	C	a 尖	e 尖	三	−	風化度高，B型ともF面有
95	804	102- 5	g16- 79	黒	縦長剝片	完		3.30	1.32	0.51	1.9	b f g h	d	P	B	a 尖	e 方	三	−	シマ状黒曜石，打点残存
96	821	99-10	g16- 917	サ	横長剝片	完		6.29	2.05	0.70	7.8	a h	d e f	P	A	g 尖	c 方	三	有	薄い剝片を素材
97	822	100- 3	g16- 966	サ	横長剝片	半	先	5.04	1.78	0.93	7.0	a h	e f	P	A	g 尖	c −	三	有	風化度高
98	823	99- 7	g16- 388	サ	縦長剝片	半	基	3.43	2.01	0.59	4.5	g	a b c	P	B	e −	a 方	三	有	風化度高，F面有
99	824	99- 8	g16- 710	サ	縦長剝片	完		2.96	1.31	0.47	1.6	a h	g	P•N	C	a 尖	e 尖	三	−	折損した剝片を利用
100	825	100- 1	g16- 919	サ	縦長剝片	完		5.74	2.35	1.14	12.4	b c g h	d f	P•N	B	a 尖	e 方	三	−	風化度高
101	826	99- 9	g16- 711	サ	縦長剝片	完		3.35	1.55	0.69	3.0	b g h	c d	P•N	B	a 尖	e 方	三	−	風化度高，F面有
102	827	100- 7	g16-1350	サ	縦長剝片	完		4.44	1.71	0.66	5.3	a h	c d e f g	P•N	C	a 丸	e 尖	台	−	風化度高，F面有
103	828	100- 8	g16-1424	サ	横長剝片	完		4.17	1.76	0.71	5.2	b d	e f g h	P•N	C	− 尖	方	三	−	風化度高，F面有
104	829	100- 2	g16- 937	サ	横長剝片	完		4.06	2.06	0.53	3.7	h	a c d e	P•N	C	g 尖	c 尖	台	−	風化度高，F面有
105	830	100- 6	g16-1270	サ	縦長剝片	完		2.96	1.10	0.47	1.3	h	b c d f	P	C	a 尖	e 尖	台	−	
106	831	100- 4	g16-1101	サ	縦長剝片	完		3.21	1.20	0.43	1.7	b h	d f	P•N	C	a 尖	e 尖	台	−	風化度高，縦長剝片が折れたもの素材，F面有
107	832	100- 5	g16-1190	サ	横長剝片	完		7.40	2.23	0.87	13.0	d f	a g	P	A	c 尖	g 尖	台	−	風化度高，打面に隣接する両縁が刃部
108	833	101- 5	g16- 306	ハ	横長剝片	完		4.80	1.53	0.73	4.7	a b	d e f	P	A	c 尖	g 方	三	−	底面・刃部やや乱れる

No.	図番号	写真図版	出土グリッド遺物番号	石材	素材	残存		計測値				打点と刃部関係	ブランティング		形態	先端部	基部	断面形	使用痕	備考
						度	部	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)		部位	加撃方向						
109	834	102- 6	g 16- 429	黒	縦長剥片	完		3.69	1.33	0.71	5.7	h	b	P	B	a 尖	e 方	台	−	シマ状黒曜石
110	920	147- 1	h 15- 227	サ	横長剥片	完		2.62	1.45	0.50	1.9	f g	a b d e	P•N	D	c 方	g 尖	台	−	風化度高，F面有
111	921	147- 2	h 15- 249	サ	横長剥片	少	基	2.12	1.46	0.42	1.2	−	a b d e	P	−	g −	c 方	台	−	
112	922	147- 3	h 15- 327	サ	横長剥片	完		3.52	1.88	0.49	2.6	a b	d e f g h	P•N	A	c 尖	g 方	三	−	風化度高，F面有，E型とも
113	923	147- 4	h 15- 333	サ	縦長剥片	完		2.94	1.52	0.59	2.1	a b c	d f g h	P	A	a 尖	e 方	台	有	風化度高，F面有
114	924	147- 5	h 15- 348	サ	横長剥片	完		3.02	1.52	0.47	1.8	h	b d e	P•N	C	g 尖	c 方	台	−	風化度高，F面有
115	925	147- 6	h 15- 368	サ	横長剥片	完		2.77	1.70	0.38	1.4	b d	a e f h	P	E	c 尖	g 尖	三	−	風化度高，F面有
116	926	148- 1	h 15- 298	ハ	横長剥片	完		2.62	1.14	0.53	1.2	b	d e f g h	P	C	− 尖	− 尖	三	−	
117	948	147- 7	h 16- 146	サ	縦長剥片	半	基	3.34	1.81	0.50	3.1	c g	d f	P	B	a −	e 方	三	−	風化度高，F面有
118	949	147- 8	h 16- 175	サ	横長剥片	完		4.08	3.17	0.91	9.0	a g h	d	P	A	g 方	c 方	台	有	やや不定形
119	950	147- 9	h 16- 238	サ	横長剥片	完		3.64	2.00	0.63	3.4	a b d	f g h	P•N	E	c −	g 尖	三	−	打点残存
120	951	148- 2	h 16- 180	黒	縦長剥片	完		3.10	1.20	0.51	1.6	g h	b c d e	P•N	A	a 尖	e 方	台	有	良質黒曜石
121	971	159- 1	e 20- 35	サ	縦長剥片	完		2.26	1.63	0.52	2.5	g	b c d e	P	A	a 尖	e 尖	台	−	風化度高，C型とも，F面有
122	974	159- 2	f 19- 13	サ	横長剥片	完		3.16	1.42	0.49	2.1	a	d e f g h	P	C	c 尖	g 尖	三	−	風化度高，F面有
123	977	159- 4	g 19- 13	サ	横長剥片	完		4.21	1.21	0.84	3.8	h	b c d e	P	A	c 尖	g 尖	台	−	
124	978	159- 3	g 19- 7	サ	横長剥片	完		3.20	1.59	0.54	2.3	h	b c d e	P	C	g 方	c 尖	三	−	風化度高，F面有，石錐とも
125	979	159- 5	g 19- 35	サ	縦長剥片	半	基	2.51	1.27	0.94	2.8	c g	e f	P	B	a −	c 尖	三	−	断面正三角形状

第 5 表　舟底形石器観察表

No.	図番号	写真図版	出土グリッド遺物番号	石材	素材	計測値				断面形	稜上加工	残存度	備考
						長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(cm)				
1	269	27- 1	e 15- 259	サ	横長剥片	6.02	2.32	1.29	24	台	−	完	折損した剥片に，折損面を打面として基部調整，風化度高
2	735	103- 1	g 15- 560	サ	横長剥片	6.30	2.12	1.74	21	三	有	完	大半の調整は甲板面からの加撃であるが，一部稜上加撃がある。

第 6 表　横長剝片石核観察表

No.	図番号	写真図版	出土グリッド遺物番号	石材	計測値 長(cm)	計測値 幅(cm)	計測値 厚(cm)	計測値 重(g)	残存度	技法	作業面 転移	作業面 剝離痕幅	打面	底面	転用	風化度	備考
1	53	16- 5	d 15- 67	サ	8.39	3.93	2.11	63	完	DD	有	2.8	平・平	平	スクレイパー	高	石理は底面と平行
2	160	33- 1	e 12- 92	サ	4.52	4.58	1.31	33.3	半	C	有	3.0	作	P	截断面ある石器	高	石理は底面と平行
3	194	30- 2	e 13- 206	サ	6.64	3.69	0.61	21	半	DC	有	3.6	平		スクレイパー	高	薄い剝片素材，石理は底面と平行
4	211	26- 3	e 14- 333	サ	4.22	2.39	1.25	9.9	完	C	－	3.0	作	P作	ナイフ形石器	－	石理は斜め，底面にやや起状あり
5	214	28- 4	e 14- 130	サ	5.53	5.08	1.84	41	完	A	－	4.0	調	N右	スクレイパー	－	石理方向不明，雑な剝片剝取
6	252	29- 2	e 15- 69	サ	6.93	3.54	2.04	39	完	CC	有	3.2	作・作	N背	スクレイパー	－	石理方向不明
7	302	31- 1	e 16- 402	サ	7.91	4.90	1.00	39	半	C	－	5.1	作	P作	スクレイパー	高	薄い剝片を素材，石理は底面と平行
8	421	71- 5	f 15- 187	サ	4.76	3.48	1.84	34	半	C	－	3.0	作	P	截断面ある石器	高	石理は底面と平行
9	446	67- 3	f 15- 667	サ	5.60	4.14	1.16	27	完	A	－	3.8	調	平	スクレイパー	高	石理は作業面，上面と平行
10	450	68- 2	f 15-1080	サ	5.34	3.03	1.64	22	半	C	有	2.8	作	P作	スクレイパー	－	石理は斜め，底面起状あり
11	609	103- 9	g 12- 222	サ	4.48	2.72	0.89	6	半	CD	有	2.9	作・平		スクレイパー	高	薄い剝片素材，石理底面と平行
12	610	103- 7	g 12- 85	サ	5.68	3.04	1.44	18	半	C	－	3.5	作	平	スクレイパー	高	石理は底面と平行
13	667	104- 2	g 14- 256	サ	7.23	3.10	1.00	25	完	CD	有	2.8	作・平	N作	スクレイパー	－	石理方向不明，縦長剝片素材
14	668	104- 3	g 14- 330	サ	6.00	3.27	0.76	15	半	C	－	3.8	作	N右	スクレイパー	高	薄い剝片素材，石理底面と平行
15	836	106- 1	g 16- 560	サ	6.58	6.53	1.60	71	半	B	－	3.8	調	P作	スクレイパー	－	石理は作業面と平行
16	903	148- 4	h 15- 160	サ	6.64	2.90	1.34	21	完	CC	有	3.4	作・作		スクレイパー	－	石理は斜め
17	942	157- 6	h 15- 355	ハ	4.16	2.29	1.56	21	完	A	－	3.9	調	N作	ブランク	－	作業面乱れる
18	953	149- 1	h 16- 244	サ	5.80	3.38	0.76	21	半	C	－	4.1	作	P	スクレイパー	高	石理は底面と平行

第 7 表　縦長剝片石核観察表

No.	図番号	写真図版	出土グリッド遺物番号	石材	計測値 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	作業面 数	位置	打法	作業面 長	幅	剝離面数	打面加撃方向 上	下	側面 左	右	底部	背部	技法	形態	備考
1	34	19- 7	d 13- 10	サ	6.05	2.76	2.51	39	1	c	両	6.01	2.70	2	作	横	F	F	打	素材のP面	B	角柱	
2	76	42- 5	e 9- 21	サ	6.26	3.28	2.49	54	2	f c	両 単	6.13 3.43	2.91 2.21	2 2	作 横	作 —	F・自 P	F 作	打 打	素材のP面 F・自	B	角柱	作業面が右側へ，打点は底部へ風化度高
3	113	42- 6	e 10- 58	サ	4.86	1.74	2.02	15	1	c	単	4.78	1.72	2	作	—	—	F・自		素材のP面	B	角柱	目的剝片の剝離痕は底面まで達していない。風化度高
4	114	42- 7	e 10- 85	サ	2.50	2.28	3.09	14	1	a	単	2.40	1.23	2	作	—	F	F	截	截	A	板	小形化している。風化度高
5	137	42- 8	e 11- 65	サ	5.11	3.53	5.97	58	2	c d	単 単	5.10 4.76	2.50 2.33	2 1	作 作	— —	F F	F F	打 打	作	A	板	作業面は背部へ打点は底部へ風化度高
6	190	44- 1	e 13- 27	サ	4.31	4.45	2.32	52	1	c d	両 単	4.19 3.42	3.23 2.41	3 3	作 横	横 —	F F	F F	打 打	作 作	A	板	風化度高
7	191	44- 2	e 13- 49	サ	5.84	3.01	1.86	40	2	f c	両 単	5.76 5.60	3.00 1.92	2 2	作 横	作 横	作 素材のP面	打 作	打 打	素材のP面・作	B	角柱	作業面はf面～c面（f面の右）へ。転移打点も底部へ，縦長剝片転用。風化度高。
8	192	44- 3	e 13- 59	サ	4.40	1.44	4.69	30	1	a	単	4.39	1.72	2	作	—	F	—	自	自	A	板	左側面の底部側に小剝離痕。風化度高 右側面下の可能性もあり
9	195	45- 1	e 13- 195	サ	4.49	1.70	2.75	31	2	c d	両 単	4.49 4.14	1.69 1.69	2 1	横 横	作 —	F F	F F	打 打	作 作	A	板	打面部も作面としている可能性，風化度高
10	196	48- 2	e 13- 216	流	3.66	7.46	3.99	111	2	c b	単 単	3.63 2.89	6.33 2.03	3 1	横 背	— —	作 自	素材の打面 自・作	自 自	自 素材の打面	C	角柱	縦長剝片のP面を打面として側面・末端部から剝片を
11	203	45- 2	e 14- 20	サ	6.40	1.94	2.13	54	2	c d	単 単	6.16 5.74	2.66 2.22	2 2	横 背	— —	F・作 作	F・作 F	打 打	作 作	A	角柱	背部への転移打面も底部へ。Bの可能性も。風化度高
12	204	45- 3	e 14- 56	サ	4.25	1.25	1.43	17	1	c	単	3.98	1.97	1	横	—	素材のP面	F	打	—	B	角柱	右側面に剝離が認められ，彫器の可能性も。
13	239	45- 4	e 14- 105	サ	5.78	2.55	3.13	69	2	c d	両 単	5.23 5.24	2.08 2.43	2 1	背 作	作 —	F F	F F	打 打	作 作	A	角柱	背部へ転移。風化度高
14	240	47- 1	e 14- 223	サ	3.47	2.44	2.08	20	2	c d	単 単	2.27 2.91	1.49 2.15	1 2	作 作	— —	F F	F F	打 打	作 素材のP面・作	B	角柱	背部へ転移。風化度高
15	241	47- 2	e 14- 285	サ	3.00	2.21	3.96	32	—	—	—	—	—	—	—	—	F	F	—	—	A	板	石核が折れたもの。風化度高
16	282	48- 1	e 15- 249	ハ	6.29	6.73	2.32	78	1	e	単	5.91	6.73	5	背	—	自	尖	尖	素材のP面・作	D	板	背部にも作業面と考えられる剝離痕。
17	325	47- 3	e 16- 314	サ	5.28	2.99	2.61	47	2	c d	単 単	5.02 5.16	2.77 2.31	1 1	作 背	— —	F F	F F	打 打	作 作	A	板	背部へ転移。風化度高
18	349	81- 1	f 10- 57	サ	4.78	1.64	1.79	20	2	c d	単 単	4.90 4.73	1.19 1.31	1 1	作 背	— —	F F	F F	尖 尖	作 作	A	角柱	風化度高
19	371	81- 2	f 12- 101	サ	3.92	1.17	3.65	21	2	a c	単 単	3.37 3.78	1.08 1.07	3 1	作 背	— —	F F	F F	作 尖	尖 打	A	板	底部へ転移
20	372	81- 3	f 12- 222	サ	2.97	1.50	2.93	14	1	a	単	2.89	1.50	2	作	—	F	F	自	尖	A	板	小形のもの。
21	385	81- 4	f 13- 82	サ	4.73	2.77	1.49	40	1	c	単	4.70	1.96	3	作	—	—	—	尖	自	A	角柱	作業が進行し，やや薄くなったもの。風化度高。石理に平行ではないが側面にかなりフラットな面がみられる。
22	408	82- 1	f 14- 89	サ	6.11	1.90	2.90	50	2	c d	単 単	6.08 5.92	1.75 1.80	2 1	作 作	— —	F F	F・自 F・自	打 打	作 作	A	板	背部へ転移，風化度高
23	415	82- 2	f 14- 238	サ	4.78	2.38	1.39	18	2	c	単 両	4.56 4.74	2.06 1.66	2 2	作 背	— 作	作 F	F 作	打 打	作 作	A	角柱	背部へ転移。一部側面も作業面化。風化度高
24	416	82- 3	f 14- 297	サ	5.62	3.29	3.67	83	2	c d	単 単	5.05 5.10	3.10 2.55	2 3	作 背	— —	F・調 F・調	F F	打 打	作 作	A	板	底部も作業面とも　背部へ転移。風化度高
25	417	83- 1	f 14- 360	サ	5.14	2.68	3.71	53	1	c	単	3.98	1.90	2	横	—	F	調	尖	調	B	角柱	背部に一部P面と考えられる面残存。風化度高
26	485	83- 3	f 15- 493	サ	3.80	2.01	3.16	24	1	c	単	3.57	1.90	3	背	—	—	F・自	尖	—	A	角柱	背部も作業面とも。風化度高
27	486	83- 2	f 15- 303	サ	6.27	3.26	3.67	99	2	c d	単 単	5.74 6.25	2.92 2.80	1 2	横 横	— —	F・自 F	F F・自	— —	作 作	A	角柱	背部へ転移。底部も作業面化の意図。風化度高

No	図番号	写真図版	出土グリッド遺物番号	石材	計測値 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	作業面 数	位置	打法	作業面 長	幅	剝離面数	打面加撃方向 上	下	側面 左	右	底部	背部	技法	形態	備考
28	487	84- 1	f 15- 329	サ	3.20	1.05	2.26	9	1	c	両	3.09	1.01	3	作	作	F	—	打	尖	A	板	小形のもの。右側面下の可能性もある。風化度高。
29	488	84- 2	f 15- 547	サ	4.96	2.76	2.40	33	2	c d	単 単	4.73 4.40	2.33 1.20	2 1	作 横	— —	F・自 —	F・自	打 打	自・作 作	A	角柱	背部へ転移。火を受け表面に亀裂。風化度高。
30	489	84- 3	f 15- 644	サ	5.87	1.45	3.14	30	1	c	両	5.79	1.43	4	作	作	F	F	打	尖	A	板	風化度が低く，剝離痕小さい。Bとも。
31	490	84- 4	f 15- 760	サ	3.41	1.58	2.62	23	2	c d	単 両	3.17 3.13	1.19 1.44	1 3	背 作	— 作	F F	F F	打 打	作 作	A	板	背部へ転移。小形。風化度高
32	491	86- 1	f 15- 805	サ	5.14	4.76	2.09	47	1	c	単	4.41	4.45	2	作	—	F・自	尖	尖	—	—	—	石核再生剝片を転用したものか。風化度高
33	492	86- 2	f 15- 696	サ	7.50	4.05	3.96	170	1	a	単	3.80	3.86	3	素材のP面	—	F	F	自	自・作	C	角柱	作業面側に素材の打点。打面にもN面が存在。背部に転移予定か。
34	493	86- 3	f 15- 983	サ	6.20	2.94	3.12	61	—	—	—	—	—	—	—	—	F	自	—	—	A	角柱	再生剝片とも。Bとも。風化度高
35	494	87- 1	f 15-1145	サ	6.46	2.62	2.27	40	1	c	単	5.17	2.44	2	作	—	F	F	尖	素材のP面	B	角柱	P面には打点残らず。風化度高
36	524	89- 1	f 16- 129	サ	3.70	2.00	1.53	12	2	c d	単 単	3.70 3.13	1.93 1.28	2 1	作 作	— —	F F	F F	尖 打	作 作	A	角柱	小形。風化度高
37	559	90- 1	f 16- 280	流	6.92	6.03	2.92	107	1	e		6.06	6.00	5	—	—	F	尖	折	素材のP面	D	板	素材のP面が打面に。
38	560	87- 2	f 16- 372	サ	3.38	2.89	1.39	16	1	e	単	3.37	2.37	3	作	—	—	F	尖	P面とも	A	角柱	作業が進行し薄い。Bとも。
39	561	87- 3	f 16- 403	サ	5.62	2.26	4.45	49	1	c	単	5.08	2.40	2	作	—	F	F	折	折	A	板	側面にも一部剝離痕が　風化度高
40	562	87- 3	f 16-1271	サ	4.36	1.00	2.55	12	1	a	両	4.36	0.98	2	作	背	F	F	打	尖	A	板	幅狭い。風化度高
41	563	89- 2	f 16-1248	サ	3.55	2.04	3.10	30	2	c d	単 両	3.11 3.48	2.07 1.84	2 2	横 作	— 横	F F	F F	打 打	作 作	A	板	背部へ転移，風化度高
42	597	121- 1	g 10- 56	サ	5.56	3.33	4.45	113	2	c d	両 単	4.74 5.55	3.40 2.84	4 1	背 作	作 —	自・F F	F F	打 打	作 作	A	板	背部へ転移，風化度高
43	614	121- 2	g 12- 78	サ	6.94	2.65	3.36	75	—	—	—	—	—	—	—	—	F	F	—	—	B	—	Bの素材，側面に剝離痕，風化度高
44	621	121- 3	g 13- 23	サ	5.70	2.06	2.90	36	2	a b	単 単	3.87 3.51	1.97 1.55	2 1	作 作	— —	F F	F・自 F	— —	作 作	A	板	風化度高
45	622	122- 2	g 13- 59	サ	4.70	2.30	4.85	66	1	c	両	4.65	1.96	3	作	—	F	F	尖	尖	A	板	風化度高
46	623	122- 3	g 13- 61	サ	5.26	1.90	2.89	31	2	c d	単 単	5.22 5.17	1.88 1.37	2 2	背 背	— —	—	F	尖	作	A	板	背部に転移，作業面が打面，風化度高
47	624	122- 1	g 13- 35	サ	2.08	1.50	1.48	3.9	1	c	単	1.91	1.46	3	作	—	F	F	截	尖	A	角柱	非常に小形，風化度高
48	637	122- 4	g 13- 228	サ	5.97	1.50	2.24	21	1	c	単	5.96	1.49	3	自	—	F	F	尖	尖	A	板	風化度高
49	638	124- 1	g 13- 265	サ	2.50	2.60	2.74	19	2	c d	単 単	2.49 2.39	2.40 2.37	2 2	作 背	— —	F F	F F	截 截	作 作	A	角柱	背部へ転移，風化度高
50	639	124- 2	g 13- 371	サ	5.86	1.88	2.37	27	2	c d	単 単	5.44 2.25	1.70 1.74	2 1	作 作	— —	F F	F F	打 打	作 作	A	角柱	背部へ転移，風化度高
51	640	124- 3	g 13- 312	サ	8.00	3.70	3.58	123	2	c d	単 両	7.49 7.63	2.38 3.66	1 2	作 背	— —	F F	F F	尖 尖	作 作	A	板	背部へ転移，底部は調整とも風化度高
52	641	125- 1	g 13- 416	サ	5.70	1.98	2.86	26	1	c	両	5.63	1.81	3	横	つぶれ	F	自	打	素材のP面	B	角柱	風化度高
53	659	125- 2	g 14- 102	サ	6.48	2.60	5.24	97	1	c	両	6.48	2.53	3	作	背	F	自・F	打	自	A	板	底部も作業面とも，風化度高
54	716	125- 3	g 15- 56	サ	4.55	1.93	1.68	18	1	c	両	4.43	1.14	3	背	横	F	F	打	素材のP面	B	角柱	風化度高

No	図番号	写真図版	出土グリッド遺物番号	石材	計測値 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	作業面 数	位置	打法	作業面 長	幅	剥離面数	打撃方向 上	下	側面 左	右	底部	背部	技法	形態	備考
55	777	127-1	g15-350	サ	4.66	3.46	1.88	35	1	c	両	3.63	2.98	2	背	―	F	F	打	素材の面 P	B	角柱	風化度高
56	778	127-2	g15-355	サ	4.30	3.16	3.58	46	2	c d	単 両	4.27 3.80	3.07 2.88	2 3	背 作	― ―	F F	F F	尖 尖	作 作	A	角柱	打面も作業面とも，風化度高
57	779	128-1	g15-519	サ	3.16	2.69	1.50	15	2	c d	単 単	2.50 3.03	2.66 2.24	2 2	作 横	― ―	F F	F F	打 打	作 作	A	角柱	背部へ転移，打面も底部へ転移する作業が進行し薄い。風化度高
58	780	127-3	g15-498	サ	5.46	2.18	2.95	31	1	c	単	5.46	2.07	2	作	―	F	F・自	打	尖	A	板	風化度高
59	781	128-2	g15-584	サ	7.14	1.79	2.13	25	2	c d	単 両	6.64 7.10	1.71 1.52	2 1	作 作	― ―	F F	F F	打 打	作 作	A	角柱	背部へ転移，風化度高
60	782	128-3	g15-742	サ	6.08	1.88	3.87	50	3	c f a	両 単 単	6.06 5.26 4.39	1.81 1.54 1.64	2 1 1	背 横 背	背 ― ―	F F F	F F F	打 打 作	打 作 打	A	板	小口はすべて作業面とも考えられる。風化度高
61	783	128-4	g15-1015	サ	3.66	1.30	2.60	12	1	a	単	2.74	1.26	3	作	―	F	F	截	尖	A	板	底部は作業面側から。截断面ある石器のB_1とも。風化度高
62	784	130-1	g15-1041	サ	6.34	4.71	5.45	185	3	a b d	両 両 両	4.65 4.52 6.04	4.62 3.78 3.94	2 4 4	横 作 背	作 横 作	F F F	F・自 F F	作 作 作	作 作 打	A	板	Cの打面も作業面とも。作業面か打面を兼る。風化度高
63	814	130-2	g16-275	サ	5.57	3.00	3.26	45	1	c	単	5.04	1.56	2	作	―	F	F	尖	素材の面 P	B	角柱	風化度高
64	815	130-3	g16-277	サ	7.68	4.54	3.20	80	1	c	両	7.68	4.41	4	作	作	F	F・自	打	素材の面 P	B	板	作業面再生剥片とも。風化度高。
65	871	131-1	g16-307	サ	5.20	2.44	2.30	42	2	c e	単 単	5.12 5.09	2.30 2.27	2 1	作 横	― ―	作 自	F 作	―	自	A	角柱	左側面へ転移，風化度高
66	872	131-2	g16-352	サ	5.30	1.63	3.24	36	2	c d	単 単	5.28 5.13	1.28 1.60	2 2	作 背	― ―	F F	F F	尖 尖	作 作	A	板	背部へ転移，風化度高
67	873	131-3	g16-594	サ	5.54	2.30	2.32	23	1	c	両	5.54	2.00	3	作	自	F	F	自・打	素材の面 P	B	角柱	風化度高。わずかながら右側面にF面残る。
68	874	133-1	g16-624	サ	5.43	3.36	3.86	100	2	c d	単 単	5.39 5.06	2.88 3.36	2 4	作 背	― ―	F F	F F	打 打	作 作	A	板	背部へ転移。打面も作業面とも。風化度高。
69	875	133-2	g16-631	サ	5.60	2.14	4.75	56	2	c d	単 両	4.66 4.26	1.99 2.14	2 2	背 作	― ―	F 作・背	F 作	折 折	作 作	A	板	背部へ転移，風化度高
70	876	133-3	g16-823	サ	5.97	3.10	4.18	122	1	c	単	4.85	3.05	2	作	―	F	F	尖	―	A	板	背部はややいびつな面,風化度高
71	877	134-4	g16-1341	サ	3.26	1.20	2.07	10	1	c	両	3.18	1.07	3	背	作	F	F	打	自	A	板	小形のもの，風化度高
72	878	134-2	g16-1096	サ	3.46	1.46	1.80	16	2	c d	単 単	3.42 3.29	1.45 1.30	3 1	横 横	― ―	F F	F F	―	―	A	角柱	背部へ転移，風化度高
73	879	134-1	g16-1084	サ	5.42	1.40	2.15	15	2	c d	単 単	5.36 5.40	1.60 1.80	2 1	横 横	― ―	F ―	― F	尖 尖	作 作	A	角柱	背部へ転移，側面にもN面が。風化度高
74	880	136-2	g16-1362	サ	3.60	1.15	2.43	16	2	c d	両 単	3.60 3.33	1.09 0.97	3 2	横 横	横	F F	F F	打 打	作 作	A	板	背部へ転移
75	881	134-3	g16-1102	サ	4.30	1.84	4.34	40	2	c d	単 単	3.26 3.11	1.58 1.28	1 2	作 背	―	F F	F F	尖 尖	作 作	A	板	背部へ転移，風化度高
76	882	136-1	g16-1409	サ	4.33	1.74	3.60	30	1	c	単	4.33	1.44	2	作	―	素材の面 N	素材の面 P	素材の面 打	尖	B	板	縦長剥片の側面が作業面。風化度高
77	912	154-1	h15-115	サ	4.94	2.45	2.74	37	2	c d	単 単	4.86 4.42	2.38 2.13	3 2	背 作	―	― ―	― F	打 打	作 作	A	角柱	背部へ転移，風化度高
78	913	154-2	h15-131	サ	6.00	3.76	2.92	70	2	c f	両 単	5.98 5.97	2.32 2.45	2 1	作 横	背 ―	F・自 ―	F・自 F	打 打	自・作 作	A	板	背部へ転移，風化度高
79	938	154-3	h15-204	サ	6.22	3.19	3.30	78	1	a d	単 単	3.53 3.99	2.39 3.24	2 3	自 作	―	F F	― ―	作 作	打 自	C	角柱	打面も作業面とも。剥片素材ではないかも。風化度高

No.	図番号	写真図版	出土グリッド遺物番号	石材	計測値 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	作業面 数	位置	打法	作業面 長	幅	剥離面数	打面加撃方向 上	下	側面 左	右	底部	背部	技法	形態	備考
80	939	155- 2	h 15- 345	サ	7.82	2.26	2.86	47	2	c d	単 単	7.77 7.78	1.96 1.63	2 1	作 側	— —	F —	— F	尖 打	作 作	A	角柱	Bとも
81	940	155- 1	h 15- 220	サ	5.30	3.96	2.66	47	2	c f	単 単	5.28 5.07	3.82 2.94	2 2	作 横	— —	F —	— F	尖 尖	F	A	板	左側面へ転移。Bとも。風化度高
82	968	163- 5	c 19- 1	流	7.16	7.24	2.65	110	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	素材
83	976	163- 4	f 19- 45	サ	4.26	2.30	3.10	42	2	c a	単 単	4.06 3.08	2.14 2.29	2 2	作 背	— —	F F	F F	作 —	— —	A	板	a，c以外も作業面とも。
84	997	165- 1	b14- 13	サ	5.80	3.64	4.30	127	3	a b c	単 両 両	4.96 4.28 5.74	2.98 3.64 3.56	1 3 2	作 背 背	— — 背	— F F	F — —	作 — 打	作 作 —	A	板	作業面転移。風化度高

第 8 表　細石核観察表

No.	図番号	写真図版	出土グリッド遺物番号	石材	計測値 長(cm)	計測値 幅(cm)	計測値 厚(cm)	計測値 重(g)	作業面 数	作業面 位置	打法	作業面 長	作業面 幅	作業面 剥離面数	打面 形成	打面 打点部の調整	側面 左	側面 右	底部 形状	底部 調整	背部 形状	背部 調整	自然面	備考
1	8	20-15	d10-	ハ	1.54	2.03	2.45	7	1	a	単	1.37	1.82	3	分割面・背	―	調整・打	分割面・作	分割面	―	自	―	有	縦長剥片の末端部が作業面，P面が打面
2	9	20-14	d10- 25	ハ	3.43	1.42	1.50	7	1	c	単	3.39	1.26	1	自然面	有	自然面	分割面・底	尖	有	自	―	有	作業面再生後のもの，もしくはブランク
3	14	20-16	d11- 4	ハ	2.11	1.82	1.73	8	1	c	単	2.04	1.63	6	分割面・右	―	分割面	分割面・打 調整・打	自	―	分割面	―	有	
4	20	20-17	d11- 43	ハ	3.09	1.56	3.68	18	1	a	単	2.09	0.85	2	自然面 整形・右	―	自然面	分割面・打 調整・打	尖	有	自	―	有	ブレイド剥離少ない。P面残存
5	28	20-19	d12- 6	ハ	2.89	2.14	1.42	9	1	c	単	2.83	2.01	3	分割面・右 整形・右	―	調整・打	分割面 調整・打	尖	―	自	―	有	
6	29	20-18	d12- 23	ハ	2.56	0.90	1.64	4	1	c	単	2.53	0.85	2	分割面・左	―	分割面・打 調整・作	自然面	自	―	尖	有	有	作業面の幅狭い。
7	95	52- 1	e 9- 35	ハ	1.95	1.58	1.94	8	1	a	単	1.94	1.58	4	分割面・作	―	調整・背・作	分割面	―	有	分割面	―	―	打面の形成は右からの可能性もあり。
8	96	52- 2	e 9-112	ハ	2.17	1.59	2.41	10	2	a b	単 単	1.67 1.41	1.22 1.58	2 5	分割面・作 分割面・背	― 有	調整・打	自然面	自	―	作	―	有	背部へ作業面転移
9	122	52- 4	e10- 68	ハ	2.10	1.34	1.22	3	2	c d	単 単	2.05 1.77	1.34 0.74	3 2	分割面・左 分割面・右	― 有	自然面 分割面	分割面	尖	―	作	―	有	底部は残存せず，結果的に尖る。打面乱れる。
10	123	52- 3	e10- 43	ハ	1.47	1.27	2.69	6	1	a	単	1.42	1.20	1	分割面・左	―	分割面	分割面	分割面	―	自	―	有	ブレイド剥離少ない。コアではない可能性も。
11	142	52- 5	e11- 10	硬ハ	3.10	1.15	1.61	5	1	c	単	1.48	0.99	2	分割面・背	―	分割面・打	自然面	尖	―	尖	―	有	ブレイド剥離少ない。作業面の幅狭い。P面残存
12	143	52- 6	e11- 45	ハ	2.75	1.48	3.21	11	1	a	単	2.01	1.33	1	分割面・左	―	自然面 分割面・底	自然面	自	―	自	―	有	ブレイド剥離少ない。P面残存
13	144	54- 1	e11- 92	ハ	3.11	1.11	2.07	8	1	c	単	2.78	0.84	1	分割面・左	―	自然面	分割面・打	自	―	尖	―	有	ブレイド剥離少ない。P面残存
14	170	54- 2	e12- 46	ハ	2.70	1.08	2.74	10	1	a	単	2.26	1.07	2	分割面・右	有	調整・底	自然面	分割面	―	尖	―	有	側面調整の際，安定した縦長剥片が剥離
15	171	56- 3	e12- 90	黒	1.77	1.22	2.08	3	1	a	単	1.50	1.02	3	整形・作	―	分割面・打	分割面・背 調整・打	尖	有	自	―	有	良質の黒曜石を石材
16	244	54- 3	e14-367	ハ	2.87	1.36	2.07	8	1	c	単	2.84	1.35	4	整形・左	有	分割面・背	自然面	尖	有	尖	有	有	
17	263	54- 5	e15-198	ハ	1.85	1.95	3.20	14	2	a b	単 単	1.70 1.47	1.75 2.56	4	整形・作 整形・作	有 ―	自然面 調整・作	分割面・打	分割面 ―	― ―	作 作	― ―	有	作業面転移，打面共通。打面再生剥片 e 15-172 と接合
18	265	54- 4	e15-166	ハ	1.36	0.96	1.90	2.3	1	a	単	1.17	0.93	3	分割面・右	―	分割面	自然面	尖	―	尖	―	有	非常に小形
19	284	54- 6	e15-294	硬ハ	2.90	1.38	2.65	9	1	c	単	2.90	1.32	2	分割面・右 整形・作	―	自然面	自然面	尖	有	自	―	有	
20	296	56- 1	e16- 85	ハ	2.17	1.17	0.59	2.4	1	c	単	1.50	0.65	2	自然面	―	分割面	分割面	尖	―	自	―	有	ブレイド剥離面が少なく，作業面の左部に限られており，ブランクとした方が良いかも
21	330	56- 2	e16- 414	ハ	1.61	0.96	0.70	1.4	1	a	単	0.62	0.90	3	分割面不明 整形・作	有	分割面・打	分割面	尖	―	分割面	―	―	非常に小形　P面残存
22	345	92- 5	f 9- 35	水	3.82	2.49	2.39	23	1	a	単	1.69	1.19	2	分割面・左	有	調整・打	調整・打	自	―	自	―	有	
23	502	91-20	f15- 326	ハ	4.09	2.02	2.90	22	1	c	単	3.74	2.03	2	分割面・左 整形・作	―	自然面	調整・打作	自	―	自	―	有	比較的大形のブレイドを剥取しているややいびつなコアである。底部は調整するが尖らず打面は調整面とした方が良いかも
24	503	91-21	f15-1150	ハ	2.14	2.26	2.95	12	1	a	単	2.13	2.16	3	整形・左	―	分割面・打 底	調整・打	―	有	分割面	―	―	
25	574	91-22	f16- 230	ハ	1.46	2.38	2.74	8	1	a	単	1.42	1.96	4	分割面・背	―	分割面・打	分割面・打	自	―	分割面	―	有	縦長剥片の末端部が作業面，P面が打面
26	575	92- 1	f16- 343	ハ	2.59	1.48	2.75	14	2	a b	単 単	2.34 1.89	1 48 1.56	4 2	整形・作 整形・背	有 有	自然面 調整・作	調整・作	自	―	作	―	有	作業面転移，打面共通

No.	図番号	写真図版	出土グリッド遺物番号	石材	計測値 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	作業面 数	位置	打法	作業面 長	幅	剥離面数	打面 形成	打点部の調整	側面 左	右	底部 形状	調整	背部 形状	調整	自然面	備考
27	576	91-23	f16- 303	ハ	1.56	0.98	1.39	2.2	1	c	単	1.56	0.97	3	分割面・右	有	分割面・底	分割面・打	尖	ー	自	ー	有	非常に小形
28	577	92- 2	f16- 731	ハ	1.52	1.12	1.36	2	1	c	単	1.46	0.69	3	分割面・左	有	分割面・背	自然面 分割面・作	尖	ー	自	ー	有	非常に小形
29	578	92- 4	f16-1226	ハ	1.48	0.93	1.80	2.8	2	a b	単 単	1.17 1.40	0.80 0.92	2 2	分割面・左 分割面・右	ー ー	分割面・打	自然面 分割面・背	自	ー	作・予	ー	有	非常に小形，背面に作業面が転移予定かブレイドを剥取しようとした痕跡
30	579	92- 3	f16- 754	ハ	2.05	0.72	2.20	3	1	a	単	1.20	0.49	1	整形・作	ー	分割面・打	自然面	自	ー	尖	ー	有	幅の狭く，彫器とも，P面残存
31	591	137-25	g 9-第1面	ハ	2.25	1.06	0.86	1.4	1	c	単	2.25	0.45	1	分割面・作	ー	分割面・打	分割面・打	尖	ー	尖	ー	ー	ブレイド剥離少ない。
32	595	137-26	g 9- 13	ハ	3.67	1.43	2.68	12	1	c	単	3.47	1.15	1	分割面・右	ー	分割面。背	調整・打	尖	有	分割面	ー	ー	
33	690	137-27	g14- 252	ハ	2.60	1.81	1.10	6	1	c	単	2.27	1.50	3	整形・右	ー	自然面	調整面	尖	ー	分割面	ー	有	P面残存
34	718	137-28	g15- 3	ハ	1.96	0.94	1.41	2.1	1	c	単	1.62	0.68	2	整形・右	ー	自然面	分割面・背	尖	ー	尖	ー	有	非常に小形
35	719	137-29	g15- 161	ハ	2.10	0.90	1.69	2.5	1	c	単	1.98	0.86	3	整形・背	ー	調整・打	調整・背	ー	有	自	ー	有	
36	795	138- 1	g15- 817	ハ	2.70	1.03	2.16	6	1	c	単	2.65	0.73	2	整形・左	有	分割面・背	自然面	自	ー	自	ー	有	打面の調整は，打面を水平にするため
37	817	138- 2	g16- 38	ハ	3.05	1.50	2.65	13	2	c d	単 単	2.32 1.77	0.95 0.95	1 2	整形・右 整形・左	ー ー	分割面・背 調整・背	分割面・打	尖	有	尖	有	ー	背面に作業面転移予定か,ブレイドを剥取しようとした痕跡
38	887	138- 4	g16-.466	ハ	2.61	1.19	2.22	6	1	c	単	2.60	0.92	3	分割面・右	有	分割面・背	調整・背	尖	ー	ー	有	ー	
39	888	139- 1	g16- 849	ハ	3.58	2.63	1.34	7	1	a	単	2.02	2.65	3	整形・左	ー	調整・打	調整・打	ー	ー	自・尖	ー	有	ややいびつな形状のもの
40	889	139- 2	g16-1426	ハ	2.48	4.35	1.71	13	2	a e	単 単	1.62 1.63	1.42 3.84	3 5	自然面 自然面	ー ー	分割面・底 作業面	作業面 ー	分割面	有	尖	ー	有	作業面が右側面部に転回
41	890	138- 3	g16- 331	ハ	2.24	0.90	1.92	5	1	c	単	2.18	0.77	3	分割面。右	有	分割面・打	分割面	自	ー	分割面	ー	有	
42	918	157- 1	h15- 19	ハ	2.25	1.55	1.60	5	1	c	単	2.25	1.21	3	分割面・左	ー	分割面・作	分割面・底	尖	有	尖	有	ー	
43	947	157- 2	h16- 4	ハ	3.21	2.23	2.44	20	1	c	単	2.96	1.80	2	整形・作	ー	分割面・打	分割面・作	尖	ー	自	ー	有	作業面の打点部が折損している。
44	994	166- 4	b13- 11	ハ	2.63	1.87	0.88	4	2	e c	単 単	2.62 2.50	1.55 1.32	3 2	整形・左 整形・右	有 ー	作業面	分割面 作業面	尖	ー	自	ー	有	転移後の作業面は階段状剥離が著しい。
45	995	166- 5	b13- 14	ハ	2.36	2.19	2.89	12	2	a b	単 単	2.08 2.56	1.64 1.62	3 1	整形・左 整形・作	有	自然面	調整・作	尖	ー	自・作	ー	有	形状は結果的に円錐形を呈する。背面に作業面転移予定

第 9 表　打面再生剝片観察表

No.	図番号	写真図版	出土グリッド遺物番号	石材	計測値 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石核器種	主要剝離面の加撃方向	自然面	備考
1	37	22-3	d13- 59	ハ	1.49	2.60	0.58	2.3	細石核	作業面	－	旧打面も作業面からの加撃
2	50	22-4	d15- 21	ハ	0.85	2.36	1.73	2.8	細石核	左側面	有	旧打面は作業面からの加撃
3	129	57-1	e10- 93	ハ	0.54	1.53	1.26	0.7	細石核	左側面	－	旧打面は右側面からの加撃
4	145	57-2	e11- 6	ハ	0.82	2.02	1.60	2.1	細石核	背部	有	旧打面は自然面
5	264	57-3	e15- 172	ハ	0.50	1.92	1.59	1.5	細石核	右側面	有	旧打面は作業面から加撃，細石核 e 15-198 と接合，作業面転移後
6	332	57-5	e16- 118	ハ	0.32	1.78	1.24	0.5	細石核	作業面	－	旧打面も作業面からの加撃
7	333	57-6	e16- 130	ハ	0.52	1.79	1.74	1.5	細石核	背部	有	旧打面は自然面
8	334	57-4	e16- 114	ハ	0.58	1.67	1.27	0.8	細石核	左側面	有	旧打面は作業面側からの分割面
9	430	93-1	f 15- 235	ハ	1.34	3.66	1.42	4.4	細石核	右側面	有	旧打面も右側面からの加撃，断面三角形
10	510	93-2	f 15-1029	ハ	0.34	1.28	1.70	0.7	細石核	背部	－	作業面に打点なし，旧打面も背部からの加撃
11	511	93-3	f 15-1149	ハ	0.62	1.62	1.94	1.9	細石核	左側面	有	旧打面は自然面
12	697	140-1	g 14- 189	ハ	0.84	3.59	2.07	5.3	細石核	背部	有	旧打面は作業面からの加撃，かなり大形の細石刃を剝取

第 10 表　作業面再生剝片観察表

No.	図番号	写真図版	出土グリッド遺物番号	石材	計測値 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石核器種	主要剝離面の加撃方向	自然面
1	16	22- 1	d11- 23	ハ	3.85	1.19	2.04	6.9	細石核	右側面	有
2	31	22- 2	d12- 10	ハ	1.18	0.85	0.29	0.2	細石核	打面	－
3	80	57- 7	e 9-排土中	ハ	2.14	1.74	0.87	2.4	細石核	打面	有
4	97	57- 8	e 9-136	ハ	2.46	3.11	0.85	3.8	細石核	打面	－
5	98	57- 9	e 9-143	ハ	2.38	2.01	0.47	2.4	細石核	打面	－
6	99	57-10	e 9-151	ハ	0.86	1.53	0.29	0.2	細石核	打面	－
7	100	57-11	e 9-210	ハ	2.80	1.43	0.86	2.3	細石核	打面	－
8	128	57-12	e10- 89	ハ	1.54	1.62	0.61	0.2	細石核	打面	有
9	130	57-13	e10-115	ハ	2.03	1.55	0.48	1.1	細石核	打面	有
10	146	57-15	e11- 66	ハ	1.09	1.56	0.43	0.7	細石核	打面	有
11	151	57-14	e11- 32	ハ	1.68	1.49	0.51	1.1	細石核	打面	－
12	267	58- 1	e15-161	ハ	2.15	1.37	0.47	1.2	細石核	打面	有
13	268	58- 2	e15-202	ハ	1.79	1.76	0.48	1.2	細石核	打面	－
14	286	58- 3	e15-232	ハ	1.40	1.06	0.45	0.6	細石核	打面	有
15	287	58- 4	e15-247	ハ	0.93	1.66	0.48	0.7	細石核	打面	－
16	288	58- 5	e15-262	ハ	1.48	0.97	0.51	0.6	細石核	打面	－
17	289	58- 6	e15-323	ハ	1.16	1.57	0.28	0.4	細石核	打面	－
18	335	58- 8	e16-221	ハ	3.10	1.89	0.48	2.0	細石核	打面	有
19	23-336	58- 7	e 16-109	ハ	2.10	2.69	0.59	2.3	細石核	打面	－
20	23-337	58- 9	e 16-334	ハ	1.60	2.09	0.47	1.3	細石核	打面	－
21	23-338	58-10	e 16-364	ハ	1.01	1.49	0.43	0.6	細石核	打面	有
22	23-339	58-11	e 16-421	ハ	2.27	2.23	0.84	3.3	細石核	打面	有
23	25-359	93- 4	f 11- 23	ハ	1.48	3.05	1.05	5.0	細石核	右側面	－
24	28-410	93- 5	f 14-115	ハ	2.31	1.57	0.43	1.5	細石核	底面	－
25	37-507	93- 7	f 15-396	ハ	2.42	1.34	2.41	2.7	細石核	打面	－
26	37-508	93- 6	f 15-362	ハ	1.88	1.02	0.52	0.8	細石核	打面	－
27	50-694	140- 4	g14-257	ハ	1.77	2.08	0.45	1.7	細石核	打面	有
28	50-695	140- 5	g14-346	ハ	1.80	2.54	0.37	1.0	細石核	打面	有
29	50-696	140- 2	g14-442	ハ	1.87	2.24	0.51	1.9	細石核	打面	有
30	50-796	140- 3	g15-645	ハ	1.22	1.29	0.29	0.3	細石核	打面	－
31	66-891	140- 6	g16-686	ハ	1.74	1.91	0.30	1.2	細石核	打面	有
32	66-894	140- 7	g 16-901	ハ	1.17	1.18	0.30	0.4	細石核	打面	有
33	68-919	157- 3	h 15-172	ハ	1.29	1.68	0.47	0.7	細石核	打面	－
34	70-944	157- 4	h 15-187	サ	1.84	2.87	0.56	2.5	細石核	打面	－
35	43-615	146- 1	g 12-221	サ	3.59	5.06	0.71	9.2	縦長剝片石核	打面	－

第 11 表　石核調整剥片観察表

No.	図番号	写真図版	出土グリッド遺物番号	石材	計測値 長(cm)	計測値 幅(cm)	計測値 厚(cm)	計測値 重(g)	石核器種	自然面
1	10	22- 5	d 10- 41	ハ	1.32	2.19	0.63	2.4	細石核	－
2	19	23- 7	d 11- 45	ハ	2.33	1.79	0.77	2.1	細石核	有
3	21	22- 6	d 11- 35	ハ	1.68	1.29	0.40	0.8	細石核	－
4	30	22- 7	d 12- 8	ハ	1.97	2.74	0.89	3.1	細石核	有
5	101	59- 4	e 9- 42	ハ	1.86	1.33	0.41	1.0	細石核	有
6	102	59- 5	e 9-195	ハ	2.14	2.72	1.02	5.5	細石核	有
7	103	59- 6	e 9-215	ハ	2.34	1.62	1.07	2.6	細石核	－
8	124	59- 1	e 10- 16	ハ	2.31	1.94	1.06	4.4	細石核	－
9	125	59- 3	e 10- 64	ハ	1.91	2.79	1.03	3.0	細石核	－
10	126	59- 2	e 10- 21	ハ	2.52	1.75	0.78	3.6	細石核	有
11	127	59- 7	e 10- 65	ハ	1.96	1.10	0.71	1.6	細石核	有
12	152	60- 4	e 11-105	黒	1.34	1.09	0.32	0.4	細石核	有
13	206	59- 8	e 14- 10	ハ	2.27	1.53	0.57	1.6	細石核	有
14	266	59- 9	e 15- 46	ハ	2.82	2.90	0.96	6.5	細石核	有
15	285	59-10	e 15-208	ハ	1.74	2.57	0.53	1.6	細石核	－
16	290	60- 1	e 15-382	ハ	1.42	1.80	0.54	1.2	細石核	有
17	297	60- 2	e 16- 90	ハ	1.93	1.73	0.51	1.7	細石核	有
18	331	60- 3	e 16-302	ハ	2.58	2.19	1.22	6.8	細石核	有
19	353	94- 1	f 10- 95	ハ	2.21	1.89	0.50	1.8	細石核	有
20	367	95- 8	f 12-予備調	黒	0.99	1.68	0.36	0.5	細石核	－
21	386	94- 2	f 13- 1	ハ	3.21	2.15	1.12	5.3	細石核	有
22	387	95- 9	f 13-179	黒	1.46	0.93	0.51	0.4	細石核	有
23	411	94- 3	f 14-165	ハ	3.08	1.42	0.72	2.3	細石核	－
24	509	94- 6	f 15-531	ハ	3.14	1.15	0.70	2.5	細石核	有
25	512	94- 4	f 15-526	ハ	2.10	3.24	0.72	4.9	細石核	有
26	513	94- 7	f 15-724	ハ	1.38	2.08	0.51	1.2	細石核	－
27	514	94- 9	f 15-921	ハ	1.78	2.65	0.41	1.6	細石核	有
28	515	94- 8	f 15-912	ハ	1.89	1.94	0.83	2.8	細石核	－
29	516	94- 5	f 15-522	ハ	2.21	1.00	0.78	1.4	細石核	－
30	37-517	94-10	f 15-1004	ハ	2.80	1.50	1.05	3.6	細石核	有
31	41-580	95- 1	f 16- 530	ハ	2.76	1.99	1.01	4.7	細石核	有
32	41-581	95- 7	f 16-1209	ハ	2.30	1.60	0.76	3.0	細石核	有
33	41-582	95- 5	f 16- 942	ハ	2.31	1.40	0.86	2.3	細石核	有
34	41-583	95- 3	f 16- 911	ハ	2.14	1.12	0.31	0.5	細石核	－
35	41-584	95- 6	f 16-1124	ハ	2.29	1.60	0.74	2.8	細石核	有
36	41-585	95- 4	f 16- 927	ハ	1.11	1.40	0.29	0.4	細石核	有
37	41-586	95- 2	f 16- 725	ハ	1.45	0.96	0.42	0.5	細石核	－
38	41-588	95-10	f 16- 339	黒	1.34	0.83	0.32	0.4	細石核	－
39	42-598	141- 1	g 11- 2	黒	1.29	1.30	0.52	0.5	細石核	－
40	50-691	140- 8	g 14- 351	ハ	2.38	1.57	0.39	1.6	細石核	－
41	50-692	140- 9	g 14- 479	ハ	1.74	2.60	0.58	1.9	細石核	－
42	50-693	140-10	g 14- 287	ハ	3.36	1.91	0.68	4.5	細石核	－
43	50-720	140-11	g 15- 276	ハ	2.51	1.24	0.79	1.9	細石核	－
44	51-721	140-12	g 15- 279	ハ	1.93	2.74	0.60	2.4	細石核	有
45	57-797	140-13	g 15- 575	ハ	2.86	1.68	0.56	1.8	細石核	有
46	57-798	140-14	g 15-1062	ハ	2.49	1.48	0.71	2.5	細石核	有
47	59-818	140-15	g 16- 125	ハ	3.16	1.38	1.02	4.0	細石核	有
48	59-819	141- 2	g 16- 87	黒	1.05	0.72	0.16	0.1	細石核	－
49	66-892	140-16	g 16-1428	ハ	2.61	1.66	0.73	3.7	細石核	有
50	66-893	141- 7	g 16-1435	黒	1.36	1.33	0.39	0.5	細石核	－
51	66-895	141- 3	g 16- 831	黒	1.21	0.86	0.34	0.1	細石核	有
52	66-896	141- 4	g 16- 886	黒	0.72	1.41	0.50	0.3	細石核	－
53	66-897	141- 5	g 16- 960	黒	0.78	0.81	0.28	0.1	細石核	－
54	66-898	141- 6	g 16-1186	黒	1.05	1.40	0.27	0.3	細石核	－
55	66-899	141- 8	g 16-1436	黒	0.62	0.89	0.12	0.1	細石核	－
56	70-943	157- 5	h 15- 364	サ	1.86	2.56	0.40	1.8	細石核	有
57	73-973	166- 3	e 20- 30	黒	1.67	1.33	0.20	0.3	細石核	－